静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第197集

上志戸呂古窯

第二東名No.92地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－3

2009

中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第197集

上志戸呂古窯

第二東名No.92地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－３

２００９

中日本高速道路株式会社東京支社

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

第二東名高速道路は、約170kmにわたって静岡県内を東西につらぬく形で建設が予定されている。本書は、その建設に伴い実施された島田市志戸呂に所在する上志戸呂古窯の発掘調査報告書である。

島田市域の大井川西岸地域においては、丘陵上の大規模遺跡である駿河山遺跡、東岸地域では谷あいの上伊太遺跡などにおいても第二東名高速道路建設に伴う発掘調査が行われ、別に報告がなされる予定である。

本書で報告される上志戸呂古窯は、安土桃山時代の窯跡として従前から注目されていた遺跡である。今回の調査によって、多量の遺物が出土したことはもちろんのこと、これまで知られていなかった窯構造等重要な事柄が明らかになるなど、多大な資料を提供することが可能となった。また、調査の成果を基に、関係諸機関の多大なるご理解とご尽力によって、平成18年に本調査範囲が県指定史跡に指定され遺構が現地保存されるに至ったことは、開発によって消滅する遺跡が数多くある昨今においては極めて有意義なことである。

さて、遺跡の所在する志太平野一円は、古墳時代以来、幾度かの断絶はあるものの現在の志戸呂焼に至るまで静岡県中部地域の窯業生産の中心地であることはよく知られている。これ以外においても、遺跡近くを流れる大井川によって造られた河岸段丘上は主に縄文時代以降、人々の安定した生活域として活用され、平野部では、大津御厨・賀呂荘・初倉荘など現在に史料を伝える荘園が多くみられることが特徴である。このような歴史豊かな地域に考古資料が彩りを与えることによって、郷土の歴史を立体的に紐解いていくことがより一層容易になっていくものと思われる。

発掘調査ならびに本書の作成にあたって、中日本高速道路株式会社東京支社、島田市教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただいた。さらに、多くの方から御指導・御助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げる。また、現地調査、資料整理に携わった調査研究員、作業員諸氏にも感謝の意を表する次第である。

平成21年３月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　清水　哲

例　言

1　本書は、静岡県島田市志戸呂に所在する上志戸呂古窯の発掘調査報告書である。

2　第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区(市町)単位で実施している。島田市域では本書が第3冊目であるため「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　島田市－3とした。

3　調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社(旧日本道路公団静岡建設局)の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、島田市(旧金谷町)の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

4　現地調査・資料整理の期間と担当者は以下のとおりである。なお、調査体制は第2章に明記した。

確認調査：平成11年2月～3月　川上　努、大林　元
本 調 査：平成12年1月～3月　川上　努、
平成12年7月～8月　河合　修
資料整理・報告書作成：平成16年4月～平成17年3月　川上　努
平成17年4月～平成18年3月　河合　修、鈴木淑子(7月～)
平成18年4月～平成21年3月　河合　修、松川(旧姓鈴木)淑子

5　本書の基礎データの作成は、製品については松川と河合、匣鉢と匣鉢蓋については田村隆太郎(当研究所職員)で分担して行った。原稿執筆は河合が行った。

6　調査における協力者等は、文末に記載した。また、本文中の人名は敬称を省略した。

7　現地調査については、原　秀三郎氏(元金谷町史編さん委員)、柴垣勇夫氏(静岡県文化財保護審議委員)に、遺物については、井上喜久男氏(愛知県陶磁資料館)、藤澤良祐氏(愛知学院大学)に指導いただいた。製陶法については、丸山茂己氏(志戸呂焼陶工)からご意見・ご見解をいただいた。

8　本文中で比較に用いた瀬戸・美濃大窯の編年と年代観は、藤澤良祐氏の見解に従っている。

9　現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。

10　陶器に関する科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

11　本書で使用した遺物写真図版は、すべて当研究所写真室の杉山すず代が撮影した。

12　調査の概要は、当研究所等の出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

13　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

14　発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

1　座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系(改正前)を使用している。

2　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図に明記した。

3　遺物番号は、通し番号とした。

4　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1992)を使用した。

5　本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。

目　次

序／例言／凡例／目次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 11
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 11
　第２節　歴史的環境と調査歴 …… 12

第２章　調査の方法と経過 …… 17
　第１節　調査の体制 …… 17
　第２節　発掘調査の方法と経過 …… 18
　第３節　資料整理の方法と経過 …… 20

第３章　調査の成果 …… 21
　第１節　概要 …… 21
　第２節　検出遺構 …… 24
　第３節　出土遺物 …… 28
　第４節　神座古窯の遺物 …… 133

第４章　まとめ …… 145
附　載　上志戸呂古窯等出土陶器の自然科学分析 …… 159

図版
報告書抄録

挿図目次

島田市金谷地区の位置
第 1 図　静岡県中部の窯業遺跡
第 2 図　遺跡周辺の窯業遺跡
第 3 図　確認調査の対象範囲
第 4 図　確認調査の実施位置
第 5 図　T-14検出遺構平面図
第 6 図　本調査の対象範囲
第 7 図　本調査範囲と検出遺構
第 8 図　1号窯平面・断面図
第 9 図　2号窯平面・断面図
第 10 図　出土遺物 1（天目茶碗）
第 11 図　出土遺物 2（天目茶碗・小天目）
第 12 図　出土遺物 3（平碗・丸碗）
第 13 図　出土遺物 4（筒形碗）
第 14 図　出土遺物 5（丸皿 1）
第 15 図　出土遺物 6（丸皿 2）
第 16 図　出土遺物 7（丸皿 3）
第 17 図　出土遺物 8（丸皿 4）
第 18 図　出土遺物 9（丸皿 5）
第 19 図　出土遺物10（丸皿 6）
第 20 図　出土遺物11（丸皿 7）
第 21 図　出土遺物12（丸皿 8・襞皿）
第 22 図　出土遺物13（丸皿 9・稜皿・稜花皿）
第 23 図　出土遺物14（中皿）
第 24 図　出土遺物15（小杯・向付・鉢）
第 25 図　出土遺物16（大皿 1）
第 26 図　出土遺物17（大皿 2）
第 27 図　出土遺物18（筒形香炉・小壺）
第 28 図　出土遺物19（短頸壺蓋・短頸壺）
第 29 図　出土遺物20（水滴・耳付水注・徳利 1）
第 30 図　出土遺物21（徳利 2）
第 31 図　出土遺物22（徳利 3・小瓶）
第 32 図　出土遺物23（片口・鉢・花瓶・広口壺 1）
第 33 図　出土遺物24（広口壺 2）
第 34 図　出土遺物25（広口壺 3・建水・その他の小型壺甕類）
第 35 図　出土遺物26（甕 1）
第 36 図　出土遺物27（甕 2）
第 37 図　出土遺物28（甕 3）
第 38 図　出土遺物29（桶 1）
第 39 図　出土遺物30（桶 2・甕・茶壺 1）
第 40 図　出土遺物31（茶壺 2）
第 41 図　出土遺物32（擂鉢 1）
第 42 図　出土遺物33（擂鉢 2）
第 43 図　出土遺物34（擂鉢 3）
第 44 図　出土遺物35（擂鉢 4）
第 45 図　出土遺物36（擂鉢 5）
第 46 図　出土遺物37（擂鉢 6）
第 47 図　出土遺物38（擂鉢 7）
第 48 図　出土遺物39（擂鉢 8）
第 49 図　出土遺物40（擂鉢 9）
第 50 図　出土遺物41（擂鉢10）
第 51 図　出土遺物42（擂鉢11）
第 52 図　出土遺物43（擂鉢12）
第 53 図　出土遺物44（擂鉢13）
第 54 図　出土遺物45（擂鉢14）
第 55 図　出土遺物46（擂鉢15）
第 56 図　出土遺物47（擂鉢16）
第 57 図　出土遺物48（擂鉢17）
第 58 図　出土遺物49（擂鉢18）
第 59 図　出土遺物50（擂鉢19）
第 60 図　出土遺物51（擂鉢20）
第 61 図　出土遺物52（匣鉢 1）
第 62 図　出土遺物53（匣鉢 2）
第 63 図　出土遺物54（匣鉢 3）
第 64 図　出土遺物55（匣鉢蓋 1）
第 65 図　出土遺物56（匣鉢蓋 2・輪ドチ）
第 66 図　出土遺物57（輪ドチ・粘土紐・焼台・支柱・分炎柱）
第 67 図　出土遺物58（須恵器・灰釉陶器等）
第 68 図　法量計測位置図
第 69 図　神座窯の遺物 1
第 70 図　神座窯の遺物 2
第 71 図　神座窯の遺物 3
第 72 図　神座窯の遺物 4
第 73 図　神座窯の遺物 5
第 74 図　神座窯の遺物 6
第 75 図　瀬戸・美濃大窯と上志戸呂窯の比較
第 76 図　大窯期志戸呂焼変遷図

挿表目次

第 1 表　調査体制と実施内容（平成20年まで）
第 2 表　大窯期志戸呂焼遺物分類表
第 3 表　出土陶器破片数数量表
第 4 表　出土匣鉢・匣鉢蓋破片数数量表
第 5 表　出土窯道具重量表
第 6 表　陶器一覧表

第 7 表　匣鉢一覧表
第 8 表　匣鉢蓋一覧表
第 9 表　輪ドチ一覧表
第 10 表　粘土紐・焼台・支柱・分炎柱一覧表
第 11 表　その他の遺物一覧表
第 12 表　神座窯の遺物一覧表
第 13 表　釉薬と窯詰位置

写真目次

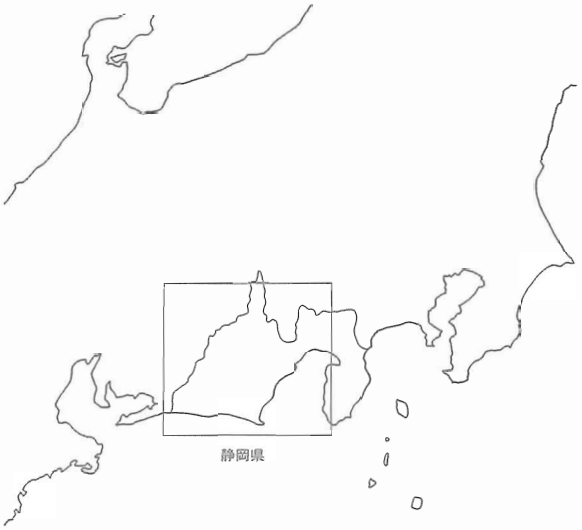
写真 1　粘土トチンを挟む筒形碗
写真 2　潰れた輪ドチを挟む丸皿 I 類
写真 3　259に付着する 3 箇所の粘土トチン
写真 4　輪ドチを挟んで焼かれる天目茶碗
写真 5　614内面の溶着痕
写真 6　桶底部の溶着痕
写真 7　476外面の溶着痕
写真 8　583底部外面の溶着痕
写真 9　589底面にあるヘラ書き
写真10　723体部末端に付く指頭痕
写真11　焼台に溶着する擂鉢
写真12　焼台に溶着する擂鉢（部分）
写真13　733の輪ドチに転写された糸切り痕
写真14　瓦
写真15　846付着輪ドチに残された高台痕
写真16　体部末端の指頭痕
写真17　入れ子にされる小型の匣鉢

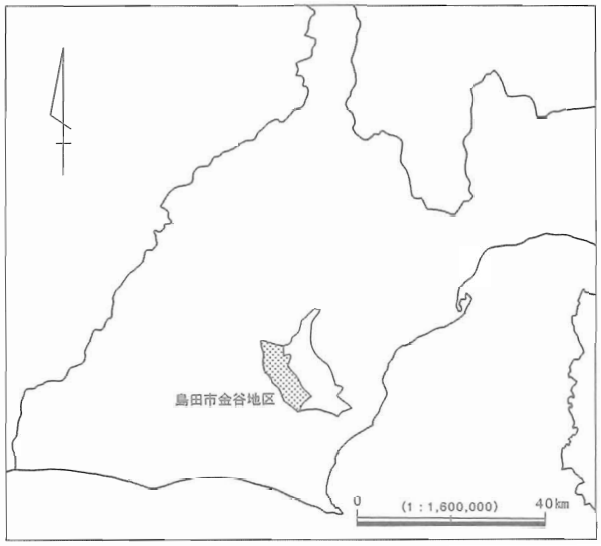
図版目次

口絵　1　上志戸呂古窯　遠景（南から）
　　2　上志戸呂古窯　全景（南東から）
図版 1　1　1号窯　窯体半裁状況（南から）
　　2　1号窯　西側窯壁　前面壁部（南から）
図版 2　1　1号窯　床面の重なり状況　断面（東から）
　　2　1号窯　西壁面外　匣鉢出土状況（南から）
図版 3　1　2号窯　床面の状況（南から）
　　2　2号窯　床面の状況（東北東から）
図版 4　1　2号窯　床面の重なり状況（北東から）
　　2　2号窯　床面の重なり状況　断面（西から）
図版 5　上志戸呂古窯出土遺物（製品）
図版 6　1　上志戸呂古窯出土遺物（窯道具 1）
　　2　上志戸呂古窯出土遺物（窯道具 2）
図版 7　天目茶碗
図版 8　天目茶碗・小天目・丸碗・筒形碗
図版 9　丸碗・筒形碗・小杯
図版10　小杯・向付
図版11　鍔皿・丸皿 1
図版12　丸皿 2
図版13　1　丸皿 3
　　2　丸皿 4
　　3　丸皿 5
図版14　1　丸皿 6
　　2　丸皿 7
　　3　丸皿 8
図版15　1　丸皿 9
　　2　丸皿10
　　3　丸皿11
図版16　1　丸皿12
　　2　丸皿13
　　3　丸皿14
図版17　1　丸皿15
　　2　丸皿16
　　3　丸皿17
図版18　1　丸皿18
　　2　丸皿19
　　3　丸皿20
図版19　1　丸皿21
　　2　丸皿22
　　3　丸皿23
図版20　1　丸皿24
　　2　丸皿25
　　3　丸皿26
図版21　1　丸皿27
　　2　丸皿28
　　3　丸皿29
図版22　1　丸皿30
　　2　丸皿31
　　3　丸皿32　鉄釉丸皿と灰釉製品の重ね焼き
図版23　丸皿33・稜皿
図版24　中皿・向付
図版25　大皿・香炉・蓋物
図版26　短頸壺蓋・短頸壺
図版27　小壺・耳付水注・水滴
図版28　徳利
図版29　徳利
図版30　徳利・鉢・花瓶・茶壺

図版31　広口壺・甕・桶
図版32　擂鉢Ⅰ類
図版33　擂鉢Ⅰ類
図版34　擂鉢Ⅰ類
図版35　擂鉢Ⅰ類
図版36　擂鉢Ⅰ類
図版37　擂鉢Ⅰ類
図版38　擂鉢Ⅰ類・擂鉢Ⅱ類
図版39　擂鉢Ⅰ類
図版40　擂鉢Ⅰ類・擂鉢底部～体部
図版41　擂鉢底部～体部
図版42　擂鉢底部～体部
図版43　1　天目茶碗1（外面）
　　2　天目茶碗1（内面）
　　3　天目茶碗2（外面）
図版44　1　天目茶碗2（内面）
　　2　天目茶碗3（外面）
　　3　天目茶碗3（内面）
図版45　1　小天目（外面）
　　2　小天目（内面）
　　3　丸碗・平碗（外面）
図版46　1　丸碗・平碗（内面）
　　2　筒形碗1（外面）
　　3　筒形碗1（内面）
図版47　1　筒形碗2（外面）
　　2　筒形碗2（内面）
　　3　筒形碗3（外面）
図版48　1　筒形碗3（内面）
　　2　筒形碗4（外面）
　　3　筒形碗4（内面）
図版49　1　筒形碗5（外面）
　　2　筒形碗5（内面）
　　3　小杯（外面）
図版50　1　向付（外面）
　　2　丸皿33（外面）
　　3　丸皿33（内面）
図版51　1　丸皿34（外面）
　　2　丸皿34（内面）
　　3　丸皿35（外面）
図版52　1　丸皿35（内面）
　　2　丸皿36（外面）
　　3　丸皿36（内面）
図版53　1　丸皿37（外面）
　　2　丸皿37（内面）
　　3　丸皿38（外面）
図版54　1　丸皿38（内面）
　　2　丸皿39（外面）
　　3　丸皿39（内面）
図版55　1　丸皿40（外面）
　　2　丸皿40（内面）
　　3　丸皿41（外面）
図版56　1　丸皿41（内面）
　　2　丸皿42（外面）
　　3　丸皿42（内面）
図版57　1　丸皿43（外面）
　　2　丸皿43（内面）
　　3　丸皿44（外面）
図版58　1　丸皿44（内面）
　　2　丸皿45（外面）
　　3　丸皿45（内面）
図版59　1　丸皿46（外面）
　　2　丸皿46（内面）
　　3　丸皿47　鬚皿・ソギ皿・菊花文（外面）
図版60　1　丸皿47　鬚皿・ソギ皿・菊花文（内面）
　　2　丸皿48（外面）
　　3　丸皿48（内面）
図版61　1　稜皿・稜花皿（外面）
　　2　稜皿・稜花皿（内面）
　　3　中皿1（外面）
図版62　1　中皿1（内面）
　　2　中皿2（外面）
　　3　中皿2（内面）
図版63　1　中皿3　菊花紋（外面）
　　2　中皿3　菊花紋（内面）
　　3　大皿1（外面）
図版64　1　大皿2（外面）
　　2　大皿2（内面）
　　3　大皿3（外面）
図版65　1　大皿3（内面）
　　2　香炉（外面）
　　3　香炉（内面）
図版66　1　小壺（外面）
　　2　小壺（内面）
　　3　蓋・短頸壺1（外面）
図版67　1　蓋・短頸壺1（内面）
　　2　短頸壺2（外面）
　　3　短頸壺2（内面）
図版68　1　水滴・耳付水注（外面）
　　2　水滴・耳付水注（内面）
　　3　徳利1（外面）
図版69　1　徳利1（内面）
　　2　徳利2（外面）
　　3　徳利2（内面）
図版70　1　徳利3（外面）
　　2　片口・鉢（外面）
　　3　広口壺1（内面）

図版71　1　甕1（外面）
2　広口壺2（外面）
3　広口壺2（内面）
図版72　1　広口壺3（外面）
2　広口壺4（外面）
3　広口壺4（内面）
図版73　1　広口壺5（外面）
2　広口壺6・風炉（外面）
3　建水・水指（外面）
図版74　1　甕2（外面）
2　桶（外面）
3　甕3・茶壺1（外面）
図版75　1　茶壺2（外面）
2　擂鉢Ⅱ類1（外面）
3　擂鉢Ⅱ類1（内面）
図版76　1　擂鉢Ⅱ類2（外面）
2　擂鉢Ⅱ類2（内面）
3　擂鉢Ⅱ類3（外面）
図版77　1　擂鉢Ⅱ類3（内面）
2　擂鉢Ⅱ類4（外面）
3　擂鉢Ⅱ類4（内面）
図版78　1　擂鉢Ⅰ類1（外面）
2　擂鉢Ⅰ類1（内面）
3　擂鉢Ⅰ類2（外面）
図版79　1　擂鉢Ⅰ類2（内面）
2　擂鉢Ⅰ類3（外面）
3　擂鉢Ⅰ類3（内面）
図版80　匣鉢（BⅡ、CⅡ～Ⅳ、DⅡ～Ⅳ）
図版81　匣（A、BⅠ～Ⅳ、CⅠ～Ⅲ）
図版82　匣鉢蓋
図版83　匣鉢蓋（表）
匣鉢蓋（裏）
粘土紐（表）
図版84　粘土紐（裏）
支柱・粘土詰め匣鉢
輪ドチ・転用匣鉢蓋
図版85　匣鉢蓋・焼台，小分炎柱
図版86　山茶椀・小皿
小椀・山茶椀（外面）
かわらけ・須恵器・灰釉陶器（外面）
図版87　1　神座A古窯出土遺物1（外面）
2　神座A古窯出土遺物1（内面）
図版88　1　神座A古窯出土遺物2（外面）
2　神座A古窯出土遺物2（内面）
図版89　1　神座A古窯出土遺物3
2　神座A古窯出土遺物4　擂鉢（外面）
3　神座A古窯出土遺物4　擂鉢（内面）
図版90　1　神座古窯表採遺物1（外面）
2　神座古窯表採遺物1（内面）
3　神座古窯表採遺物2（外面）
図版91　1　神座古窯表採遺物2（内面）
2　神座古窯表採遺物3
3　神座古窯表採遺物4　擂鉢（外面）
図版92　1　神座古窯表採遺物4　擂鉢（内面）
2　神座古窯表採遺物5　擂鉢・鉢（外面）
3　神座古窯表採遺物5　擂鉢・鉢（内面）





島田市金谷地区の位置

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

島田市西部(以下、「金谷地区」という。)は、北緯34度50分、東経138度６分付近の静岡県中部に位置する。金谷地区は島田市のうちでも大井川の西岸地域北側に当たり、平成17年５月の島田市との合併以前は、金谷町であった。面積は64.35㎢を測り、市域のおよそ２割を占める。

金谷地区は、南アルプスの南端に当たる丘陵と、大井川が主体となって形成した沖積平野から構成されている。丘陵は地域の北側～西側に広く分布し、平野部は横岡・相賀付近から急激に幅を広げ、地域の南東側を占める。この丘陵は、区域の北部では中生界白亜系の四万十層群、半ばでは古第三系の瀬戸川層群、南部の新第三系の倉間層群に属する。これらのうち四万十層群、瀬戸川層群には頁岩や砂岩、泥岩を含む層位が発達している。大井川の河床にも流出した転石が多く含まれており、流域の縄文時代遺跡から頁岩や砂岩製の石器が多く出土することにも反映している。これら丘陵部は白亜期末以降の造山運動によって隆起したものといわれるが、現在では大井川や白光川、大代川等丘陵部一帯の雨水を集める河川によって開析された急峻な谷地形により、大きく３つの山塊に分けられる。

最も北側が八高山(標高832.1m)と裾部に広がる尾根で、この山塊は、北は島田市家山から切山にかけての大きな谷によって、南は島田市福用から西へ入る谷に区切られる。西側は掛川市域の大尾山(標高661m)との間にある掛川市黒俣付近から北に入る谷が鞍部となる。中ほどは経塚山(標高669.9m)と裾部に広がる尾根である。北は金谷町福用から西へ入る谷に区切られ、南と西は大代川とその源流部が開析した谷部で区切られる。この部分の、特に南西部の尾根上は台地状の平坦面が発達する。もっとも南側が粟ヶ岳(標高532.1m)と裾部に広がる尾根である。これらの丘陵のほかに、島田市牛尾には頂上が台地状になる牛尾山がある。この山は現在では独立丘となっているが、かつては島田市相賀の丘陵部と牛尾山の先端部(山鼻という。)が低い尾根によってつながっていたといわれる。

大井川の堆積物による沖積平野は、島田市横岡付近から金谷河原付近にかけて発達する。この平野部は、中村一氏が天正18年(1590)に牛尾山と横岡の間に堤を築き、相賀・牛尾山間を掘割って大井川の本流を西側に導いたため、耕作域として安定したといわれる。それ以前は、「島」地名に見えるような中州が点在する大井川の氾濫原であったという。平野部の堆積作用には、大井川のみならず経塚山から流出する大代川も大きく影響している。大代川はいまなお大量の土砂を運びながら平野部を南下し、牧の原台地の北縁で東へ流れを変えて大井川に合流する。ちなみに、旧来の金谷の集落は、粟ヶ岳南東麓と牧の原台地の裾に挟まれた大井川の影響を比較的受けにくい高地に営まれているのである。

上志戸呂古窯は、標高92～93m程度の南向き丘陵緩斜面上に位置する。窯の築かれる部分は、西側を沢で区切られた小さな舌状の張り出しとなっている。本調査地点は西から南向きに斜面が変換し切った部分にあたり、やや急な斜面を構成している。この一帯は主に茶畑として利用されており、河原石による石積みを伴って段々に造成されていた。本調査対象地東側に接して昭和39年に築かれた小笠用水幹線水路第四隧道が、遺跡を大きく分断している。この東側には平成元年に金谷町(現島田市)がトレンチ調査を実施した物原がある。さらに北東側には大井八幡神社が鎮座する。神社の敷地は西側で丘陵裾部をカットして平坦に整えられているので、この造作の際に、物原は若干削り込まれているようである。また、丘陵南側裾部には大代川が形成した谷底平野が広がる。遺跡の最も低い地点と平野面との比高差は８mほどである。

第2節　歴史的環境と調査歴

1　大井川の河岸段丘と遺跡

大井川は、赤石山脈の間ノ岳南斜面を源流とする1級河川である。その延長はおよそ160㎞で、比高差は3千mとなる急流である。この流域には河岸段丘が発達し、旧石器時代(大鳥遺跡等)～縄文時代草創期(旗指古窯跡郡第1地点)あたりから人々の暮らしが把握され始める。古代に至るまでの遺跡のあらましはすでに記してあるので、地理的環境と併せて参照願いたい(静岡県埋蔵文化財調査研究所2006)。

2　大井川流域の窯業生産

上志戸呂古窯が含まれる島田市上志戸呂～横岡一帯の丘陵は、南アルプスから派生した尾根の南端部分にあたる。大井川流域のこの地域には、平安時代後期から現代に至るまで連綿と窯が営まれている。これは丘陵部に堆積する洪積層に含まれる粘土を用いたもので、窯の分布は、現在分かっているだけでも北は島田市家山付近から同市神座・伊太、旗指、横岡等を通って南は同市湯日付近まで至る。この粘土は、平安時代後期～鎌倉時代の旗指古窯跡群や横岡古窯跡群など灰釉陶器生産から東遠型山茶椀を焼成した諸窯、戦国時代の川根沢古窯・三ッ沢古窯などの古瀬戸系施釉陶器窯、新しくは近世以降の志戸呂焼窯跡群など、諸々の窯業生産が成立する基礎となっていることは言うまでもない。成分についても、かなり耐火性の高いものと指摘されていることから、原材料として充分であることが知られる。現に旗指古窯跡の調査では、陶土としてより優れている層位を掘り抜くかたちで採土坑が確認されている(島田市ほか1976)。

大井川西岸地域の窯　大井川西岸地域では、近世までの窯は現在までに23地点、50基前後が把握されており、各時代で分布が異なっている。11～13世紀末には、地域北側の沢に面した斜面地に横岡古窯跡群が展開し、灰釉陶器・山茶椀を生産している。14～15世紀前半に窯業生産は一旦中断するが、15世紀後半に至って標高280m前後にある平坦地(長者平)東側斜面に川根沢古窯が、北側斜面に三ッ沢古窯が営まれる。この2基は単独窯であり、直線距離でおよそ800m離れている。16世紀後半には地域の南端に上志戸呂古窯が築かれる。これに同時期あるいは後続する窯は大井川の対岸の島田市神座にある。島田市相賀にも所在が指摘されているが(小山　1957)現在のところ明らかでない。17世紀代以降は、横岡古窯跡群が営まれた南側の台地(釜谷地区)を中心に窯が集中する。

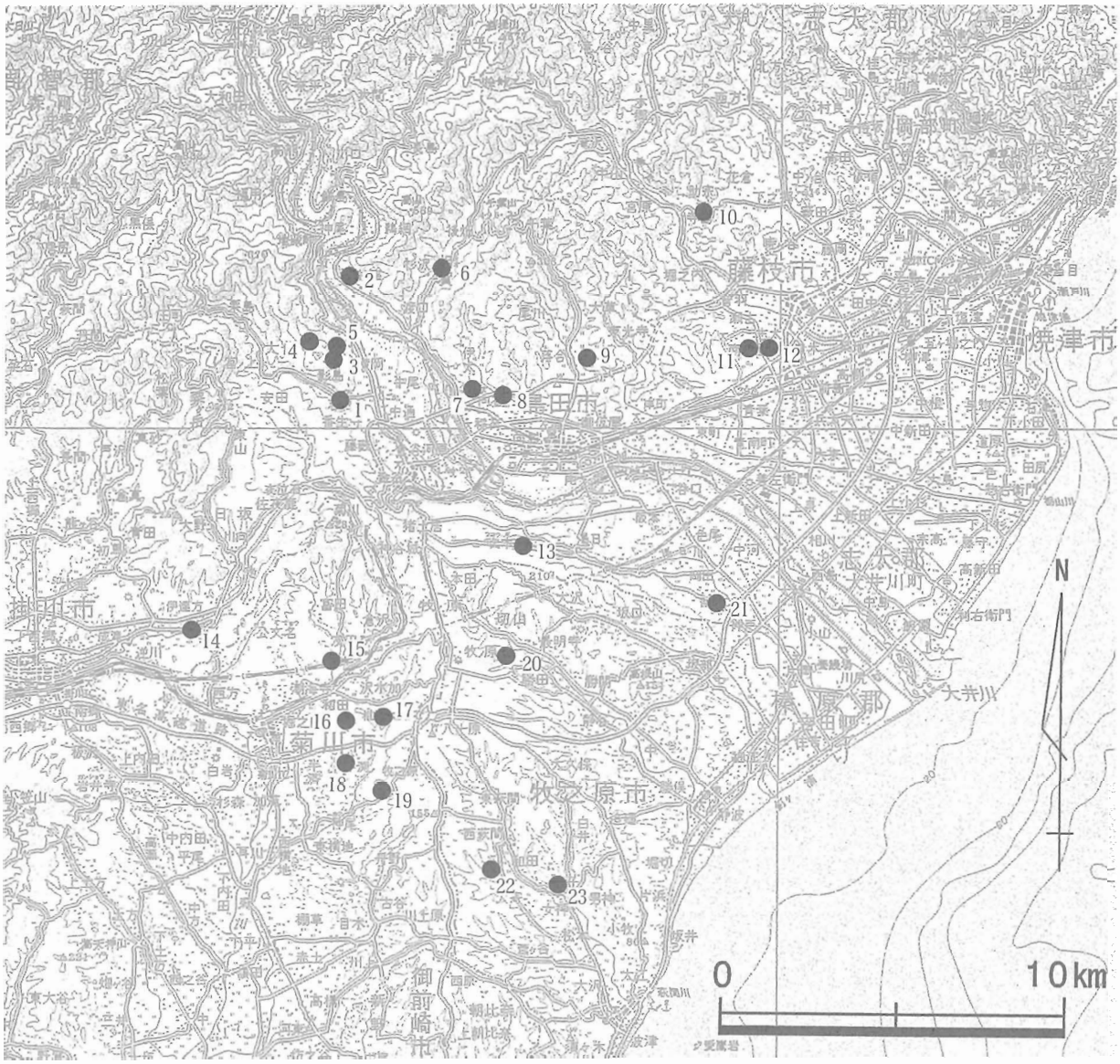
このように、この地域の窯業生産は灰釉陶器以来大きく三つの盛期を見ることができる。しかし、それらは連続したものではなく、各々の発生する当初段階に将来された技術・技法によって生産が開始されたものであるといえる。

志戸呂焼への注目　明治以降、この地域の窯業生産や志戸呂焼に関する記述は、徐々に全国的な出版物にみられるようになる。『観古図説』(明治10年　1877)では、著者所有の茶入れなどをカラー図版で示すとともに、「土ハ梨子色ニ薬ノ色ハ黄色梨子色ノ如シ又飴色等ニテ此竈一種ノ風ヲナセリ」と胎土・釉薬の特徴を記述している。志戸呂焼が正確に描写された図として掲載された最初期の例であるが、西洋技術の応用によって始めて実物を実感できる出版物が現われたのである。明治11年に編まれた『工芸志料』では、各地の窯の来歴と特徴を取り上げる中で、志戸呂焼が「其の質素にして、土色は淡赤、釉色は濁黄にして黒色を帯び、甚だ瀬戸の破風窯に似て、而して陶質堅実なり」と評されている。

また、当時現存する名物を集めた『大正名器鑑』には、1点のみであるが志戸呂焼が収められている。それは、「口廣」の銘を持つ茶入れであり、寸法・付属物・来歴がモノクロ写真とともに示されている。

これら明治～昭和初期に掲載された志戸呂焼はいずれも伝世品が主体でる上、世間の誰しもが見られる出版物ではなかったにしても、志戸呂焼の窯業活動を全国に発信する一部を担ったのである。

この時期には、地理学・考古学の視点からもいくつかの報告がなされている(細木1887、堀田1928、



1　上志戸呂古窯
2　神座古窯跡群
3　川根沢古窯
4　三ッ沢古窯
5　横岡古窯跡群・志戸呂焼窯跡群
6　大賀古窯
7　中村地蔵尊前古窯
8　旗指古窯跡群
9　菅ヶ谷古窯跡群
10　助宗古窯跡群
11　滝ヶ谷古窯
12　南新屋瓦窯跡
13　丸山古窯跡群
14　諏訪瓦窯跡
15　薬師堂瓦窯跡
16　皿山古窯跡群
17　御兎谷古窯跡群
18　坊ノ谷古窯
19　行田ヶ谷古窯跡群
20　土器谷古窯
21　舟木古窯跡群
22　釜谷古窯
23　姪ヶ谷古窯・西側古窯

第１図　静岡県中部の窯業遺跡

鷲山1930、足立1930)。これらはいずれも山茶椀窯やその焼成品に関してであり、施釉陶器の指摘はいまだなされない。

生産地としてのこの地域が意識され広く知られるきっかけになったのは、昭和30年代以降の陶磁器を扱う全集や雑誌の刊行に負うところが大きい。小山富士夫は、志戸呂焼を窯の分布とともに紹介している(小山1957)。この中で、当地域の窯業が鎌倉時代に開始され江戸時代以降に至っていることが指摘されるが、多くの頁が山茶椀と古瀬戸並行期の三ッ沢古窯等の紹介に割かれる。ここでは安土桃山時代(上志戸呂古窯)以降についてはあまり触れられていなかったが、後に焼成器種を含め改めて紹介している(小山1967)。浜田　斉は、窯跡の様子と採集品を写真で示すとともに、三ッ沢古窯を第1類、上志戸呂・神座窯を第2類、江戸時代以降の窯を第3類として、その概要を記している(浜田1971)。上志戸呂古窯の資料を考古学的な手法で紹介したのは足立順司で、焼成器種を紹介するとともに茶壺や天目茶碗の実測図を示している(足立1982)。また、足立は消費遺跡から出土する遺物にも着目し、原川遺跡(掛川市)の出土遺物を基礎に、その変遷を考察している(足立1990・1994)。

焼成器種や窯構造についてより詳細に把握されるようになったのは、三ッ沢古窯、川根沢古窯、上志戸呂古窯などで行われた発掘調査による。特に今回調査が実施された上志戸呂古窯では、茶畑の改植等に伴って平成元年に物原がトレンチ調査され、多量の資料が得られたとともに、その焼成器種のあらましが把握されるようになった。この作業に並行して柴垣勇夫は、天目茶碗の口縁部の形態でⅠ類・Ⅱ類とした上で器形の特徴で第1～6類に分類し、これらが1570～1610年にあたるものと位置付けている(柴垣1991・1992)。また柴垣は、上志戸呂古窯から近世末に至る陶器の変遷を記している(柴垣2003b)。

一方、大井川東岸にある神座古窯でも表採資料により上志戸呂古窯に近似した製品が生産されていたことが指摘されている(藤澤1993)。この後、江戸時代初頭以降の窯跡では発掘調査が進展していないので未だ不明な部分が多いが、窯の火は現代まで志戸呂焼として脈々と受け継がれている。

遠隔地にある消費遺跡でも志戸呂焼の出土傾向は注目されている。静岡県内では、発掘調査が行われた中世遺跡における大窯第4段階までの出土破片数がまとめられ、消費の動向が明確になりつつある(菊川シンポ2005)。近世遺物については、すでに東大構内遺跡の成果をもとにその編年的位置付けがなされている(堀内1997・堀内ほか1999)。一方で、徐々にではあるが、静岡県内でも近世遺物の報告例が増加しており、今後の研究の進展に寄与するものと期待される(山本2000、松下2005等)。

次に、大井川流域の古代以降、安土桃山時代以前の窯跡に関する考古学的調査の概要を概観する。

古代～中世前期の窯業生産　大井川下流域に広がる志太平野とその一帯は、灰釉陶器生産が行われた最東端の地域としても知られている。大井川東岸の丘陵部に営まれた旗指古窯跡群は、島田市伊太から旗指一帯の丘陵斜面に約50基を以って構成されている。1972年以降4回にわたり窯18基、灰原、工房、採土坑などの発掘調査が行われて、平安時代後期(10世紀末頃か)から鎌倉時代にいたる灰釉陶器と山茶椀類を焼成した一大産地であることが明らかになった。旗指古窯跡群は平野部に突出した山塊を中心に分布しており、旗指・東川根の二つの地区として把握されている。

旗指古窯跡群で生産された陶器の位置づけは松澤　修(松澤1976)、澁谷昌彦(澁谷1983、1989a)らによってなされている。年代的な指摘については、前者では発生期をⅠ類、器種の限定化が発生するⅢb類、無釉化するⅤ類など画期を設定したうえ、最古としたⅠ類を折戸53号窯式並行期(10世紀中頃)、最新としたⅥ類を大アラコ古窯並行期(12世紀第2四半期)と考え、間のⅡ～Ⅴ類を半世紀単位ほどに割り振っている。後者では各窯焼成陶器の時期は14・17号窯を東山72窯期、22号窯を百大寺窯期、20・21号窯を東山79窯期としている。なお、これら旗指古窯跡群に先行する窯は、助宗古窯跡群(藤枝市助宗)の一部や向山古窯(島田市初倉)にみられる。

旗指古窯跡群における山茶椀生産は、灰釉陶器生産に比べ規模を著しく縮小させる。そのころには、

1　上志戸呂古窯
2　神座古窯Ａ地点
3　神座古窯Ｂ地点
4　川根沢古窯
5　三ッ沢古窯
6　すやん沢古窯跡群(横岡古窯跡群)
7　椿沢古窯跡群(横岡古窯跡群)
8　きつね沢古窯跡群(横岡古窯跡群)
9　ほろん沢古窯跡群(横岡古窯跡群)
10　北古窯(志戸呂焼窯跡群)
11　新兵衛古窯(志戸呂焼窯跡群)
12　中古窯(志戸呂焼窯跡群)
13　土山原古窯(志戸呂焼窯跡群)
14　内藤古窯(志戸呂焼窯跡群)
15　南古窯(志戸呂焼窯跡群)
16　釜谷西古窯
17　相賀古窯
18　中村地蔵尊前古窯
19　旗指古窯跡群　東川根地区Ⅰ地点
20　旗指古窯跡群　東川根地区Ⅱ地点
21　旗指古窯跡群　東川根地区Ⅲ地点
22　旗指古窯跡群　旗指地区伊太口地点
23　旗指古窯跡群　旗指地区旗指１地点
24　旗指古窯跡群　旗指地区旗指２地点
25　旗指古窯跡群　旗指地区旗指４地点
26　旗指古窯跡群　旗指地区旗指６地点
27　旗指古窯跡群　旗指地区旗指７地点
28　旗指古窯跡群　旗指地区旗指８地点
29　旗指古窯跡群　旗指地区静居寺前Ａ地点
30　旗指古窯跡群　旗指地区静居寺前Ｃ地点
31　旗指古窯跡群　旗指地区静居寺前Ｄ地点
32　旗指古窯跡群　旗指地区静居寺裏地点
33　旗指古窯跡群　旗指地区菰ヶ谷地点
34　菅ヶ谷古窯跡群　Ａ地点
35　菅ヶ谷古窯跡群　Ｂ地点
36　丸山古窯跡群　丸山Ⅰ地点
37　丸山古窯跡群　丸山Ⅱ地点

第２図　遺跡周辺の窯業遺跡

大井川西岸域に横岡古窯跡群が築かれる。横岡古窯跡群は河岸段丘を小河川が開析した小さな谷ごとに、すやん沢、きつね沢、ほろん沢、椿沢などの支群により構成され、各々には10～20基の窯が構築される。

横岡古窯跡群での発掘調査は、開発に伴う緊急調査や金谷町の町史編さん事業等で実施されている。昭和43年(1968)に県道金谷中川根線の拡幅工事に伴って実施された例が最も古く、Ⅲ期－1を中心とした5基の立地が明らかとなった(平野・河合2003)。同じくすやん沢では、平成14年に9・10号窯の調査が実施され、同一の中軸線上に前後して築かれる窯が明らかとなった(溝口2003)。また、平成4年に町史編さんに伴って行われたきつね沢3号窯の調査では、焼成室が急激に立ち上るⅢ期－3にあたる窯体が確認されている(羽二生2003)。これらに先行するⅠ～Ⅱ期の窯は平成15～16年にきつね沢でも調査が行われている。

横岡古窯跡群の山茶椀生産は、13世紀末ごろまで継続されたようである。最終形態の窯はほろん沢の一部を中心に築かれており、各支群にわたっていた生産が次第に縮小し、集約されていったことを示唆している。

戦国期の窯業生産　大井川西岸地域に再び窯が築かれるのは、戦国時代にあたる15世紀後半である。古瀬戸後期様式Ⅳ期に併行する窯であり、これまで2基(川根沢古窯、三ッ沢古窯)の所在が把握されている。焼成された製品は古瀬戸系施釉陶器で瀬戸・美濃製品に器種や器形が酷似しており、川根沢古窯の方が古手の様相を呈する。これらは、すでに昭和30年代に「三ツ澤の奥に二箇處と、五和村の長者原の東斜面に1箇處」の3箇所として所在が報告されている(小山　前出)。度重なる踏査の結果、「三ツ澤の奥に二箇處」が特定できないため、現在ではこの2箇所は窯体と物原を別個に捉えたものであると解釈されている(柴垣2003a)。

発掘調査は、川根沢古窯では金谷町史編さん事業に伴って平成10年(1998)に行われている(金谷町教委2002)。その結果、窖窯1基と灰原が確認され100箱を越える遺物が出土した。窯は標高192m付近の南東向き斜面の等高線と直交する方向に築かれていた。燃焼室から焼成室の半ばまでが残存しており、燃焼室と焼成室の境には、直径40cm程度の分焔柱が築かれている。窯の規模は、この分焔柱まで徐々に幅を広げ、分焔柱のすぐ奥側で最大幅2.41mとなる。床面は分焔柱に至る間が12°からほぼ水平であるのに対し、焼成室ではおよそ30°の角度で均等に煙道側へ登る。残存していた焼成室のほぼ中央には、分焔柱とほぼ同規模な支柱が一基築かれている。把握された焼成器種は、天目(天目茶碗、小天目)、碗類(平碗)、皿類(縁釉小皿、卸皿)、盤類(直縁大皿、折縁深皿、卸目付大皿)、神仏具(花瓶、仏餉具、燭台、香炉)、茶道具(茶入)、壺甕類(瓶子、茶壺、耳付小壺、口広有耳壺、甕)、擂鉢、その他(蓋、耳付水注、小壺、鉢)である。

一方、三ッ沢古窯では県内窯業遺跡分布調査事業に伴って昭和63年に調査が行われている(鈴木1989)。こちらからも窖窯1基と灰原が確認され、30箱ほどの遺物が出土している。窯は標高213m付近の北東向き斜面の等高線と直交する方向に築かれており、燃焼室から焼成室の前半までが残存していた。燃焼室と焼成室の境には、直径50～70cm程度の分焔柱が二基、一部を重複して築かれている。窯の平面形態は、燃焼室の壁はほぼ平行、焼成室は若干奥側に広がる矩形であり、曲面をもって広がる川根沢古窯とはやや異なっている。床面は分焔柱に至るまでが約12°で、分焔柱後の0.8mまでは6.5°、これより煙道側にかけて36.5°の急角度に立ちあがる。これまでに把握された焼成器種は、天目(天目茶碗)、碗類(平碗)、皿(縁釉小皿、卸皿)、盤類(卸目付大皿)、壺甕類(瓶子、四耳壺、耳付小壺、甕)、擂鉢、その他(蓋、耳付水注、水滴)である。これら川根沢古窯・三ッ沢古窯の生産は後続する窯が発見できないので、短期間で終了したものとみられる。

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の体制

本書で報告する上志戸呂古窯の調査は第１表に示した体制で実施している。実際には、第二東名建設事業に伴う掛川工区〈金谷町(現島田市)・掛川市・森町・豊岡地区〉の埋蔵文化財発掘調査として体制を組んでおり、同表は島田市金谷地区に関わる一部である。なお、金谷地区の体制については、すでに記したものがある(静岡県埋蔵文化財調査研究所2006)。

第１表　調査体制と実施内容(平成20年まで)

		平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
所長		齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	清水　哲
副所長			山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫				
常務理事兼事務局長											清水　哲	
事務局次長											大場正夫 佐野五十三 及川　司 稲葉保幸	大場正夫 及川　司 稲葉保幸
総務部	常務理事兼総務部長	伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	糸田徳幸	糸田徳幸	糸田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫		
総務部	次長						鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎		
総務部	総務課長	杉木敏雄	杉木敏雄	杉本敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫
総務部	担当　経理担当員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸			
総務部	担当　総務係長	田中雅代						芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	山内小百合
総務部	担当　会計係長	杉田　智								杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝
総務部	担当　副主任			鈴木秀幸	鈴木秀幸			中鉢京子	中鉢京子			
総務部	担当　主事		鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博					
調査研究部	部長	石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久	石川素久		
調査研究部	次長		佐野五十三	及川　司	栗野克巳 及川　司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	佐野五十三 及川　司 稲葉保幸		
調査研究部	次長心得	佐野五十三										
調査研究部	担当課長	遠藤喜和	及川　司	及川　司	及川　司	篠原修二	足立順司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司	及川　司	及川　司
調査研究部	会計担当									稲葉保幸	稲葉保幸 中鉢京子	稲葉保幸 中鉢京子
調査研究部	担当係長									河合　修	河合　修	河合　修
調査研究部	工区主任		飯塚晴夫	飯塚晴夫	加藤理文							
調査研究部	主任調査研究員	飯塚晴夫							河合　修			
調査研究部	調査研究員	石田　勉 諸星雅一 河合　修 川上　努	石田　勉 諸星雅一 木崎道昭 河合　修 川上　努 大林　元	大畑　要 諸星雅一 川上　努 中田　出 河合　修	中田　出 河合　修	川上　努	川上　努	川上　努	鈴木淑子	鈴木淑子	鈴木淑子	松川淑子
調査研究部	保存処理室長				西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
実施内容	現地調査	確認調査	本調査	本調査	本調査							
実施内容	資料整理					金谷地区全体を対象として実施						

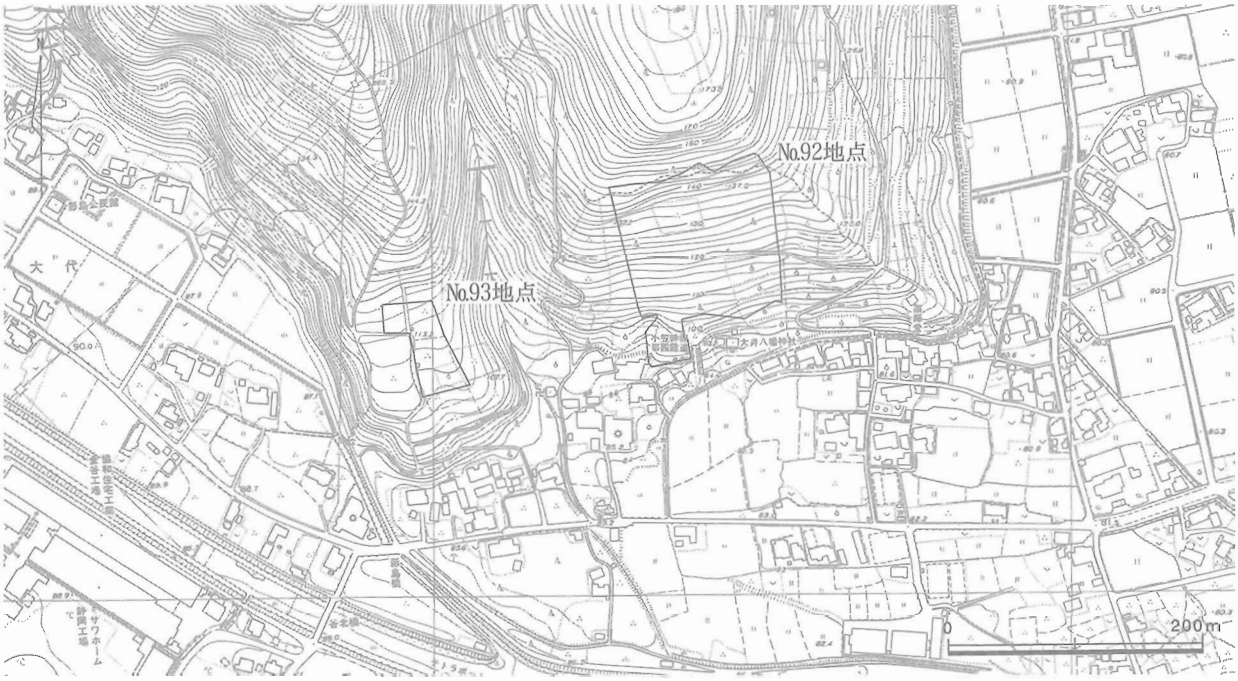
第２節　発掘調査の方法と経過

１　確認調査

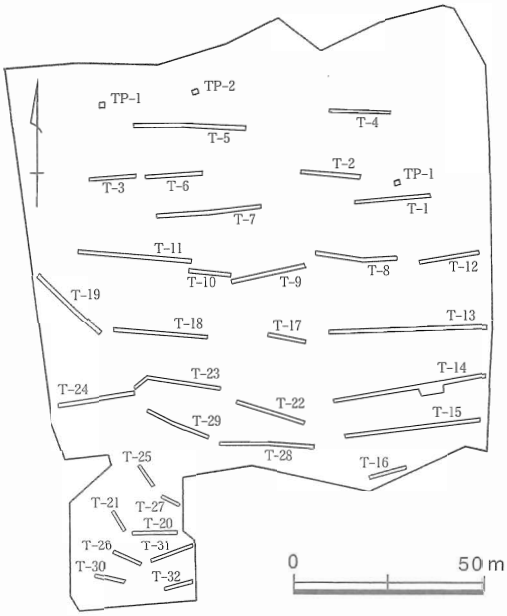
1999年２月４日から、周知の包蔵地である上志戸呂古窯を含む92地点全域(13,030㎡)を対象とし、試掘･確認調査を開始した。試掘・確認調査では、1.5m四方のテストピット３ヶ所、幅１m、任意の長さのトレンチ32ヶ所を掘削した。掘削はすべて人力で、同８日より斜面の上位から随時開始した。

斜面の大半は、主に杉の植林となっていた。斜面のより上位にあたるＴ－11～12付近には厚さ0.5～1.5mの表土下に地山となる黄色粘土が堆積しており、部分的に褐色土あるいは礫混じりの黒色土が堆積していた。この部分的な堆積物は、地山と表土の再堆積を成因とし、微細な谷地形を埋めているものと考えられる。Ｔ17とその東～南東側に位置するＴ－13～16では、表土と地山の間の一部に黒ボクが堆積している。この付近はやや斜面の緩やかになる一帯である。したがって、ここは土壌の流出・流入の少ないより安定した場所であったといえる。このように斜面部では、表土の直下に地山となる黄色粘土が堆積するのが標準的であり、細かな谷部には両者からなる再堆積土、緩斜面では黒ボクが、相互の間に挟まるという微地形に応じた堆積状況を示していた。またこの部分では、Ｔ－14東側で溝状遺構が検出され、山茶椀(904・907)が出土している。溝状遺構は、幅0.5m、深さ0.25mほどの直線状で、覆土からの出土遺物はない。トレンチを拡幅して全容の把握に努めたが、周囲に別の遺構が存在しなかったこともあり、記録をとった後、調査を終了した。

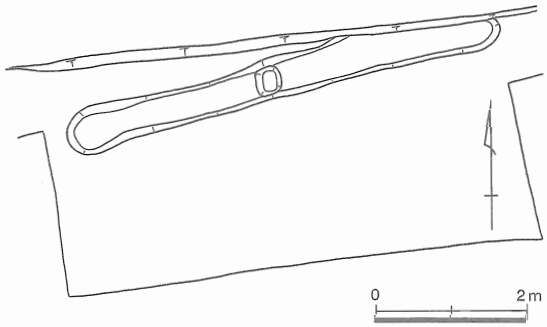
斜面の下位部分には、Ｔ－20・21・25～32を掘削している。Ｔ－21・25・31は、尾根末端が若干張り出す部分で、斜面上位と同様に表土直下に地山の堆積が確認された。この東側にあたるＴ－20・27付近は、地山上に小笠用水の掘削排土と思われる礫が2.5m近く積み上げられていた。丘陵末端に位置するＴ－26・31付近は茶畑として利用されてきた部分で、地表面に陶片が散布していた。ここは、窯が築かれ物原が発達している部分よりも高位にあり、茶畑の造成のために物原付近の土をすきとって上位に掻き揚げたものと理解した。窯の直下に掘削したＴ－32からは、焼土や陶片が多量に混じる黒色土の堆積が確認され、さらに、祠の置かれた前面の法面には、窯体の露出が観察された。このような状況により、№92地点での本調査範囲は、遺物が分布し窯が存在するＴ－26・31以南の地域に限定された。



第３図　確認調査の対象範囲



第４図　確認調査の実施位置



第５図　Ｔ－14検出遺構平面図

2　本調査

確認調査の結果、本調査範囲は丘陵末端の206㎡に絞り込まれた。当初はグリッド杭を打設する予定だったが、調査区が狭小なので、調査区南西隅に移設した三級水準点であるＫ３（ＫＢＭ２－３　標高91.634m）に国土座標（Ｘ＝－128316.143m、Ｙ＝－35308.904m）を割り当て、ここから２級トータルステーションを用いて計測することとした。掘削は、地物の除去に0.15㎥積のバックフォーと0.5ｔ積の手押し式クローラーダンプを使用した。表土以下の掘削は、すべて人力で慎重に行った。

本調査は2000年１月17日から開始した。まず、調査対象地内に残存する茶畑の石積を撤去した。その後、人力で確認面までの耕作土等を除去し検出を行った結果、２基の窯が平行して築かれていることが明らかになった。２月より、Ｔ－32で把握された物原の掘削を実施したところ、全面的に攪乱であることが判明した。窯体周辺で出土する遺物はすべて何らかの要因で二次的な移動をこうむっていることが明らかとなったため、散布している陶片すべてを表土扱いとして取上げることとした。

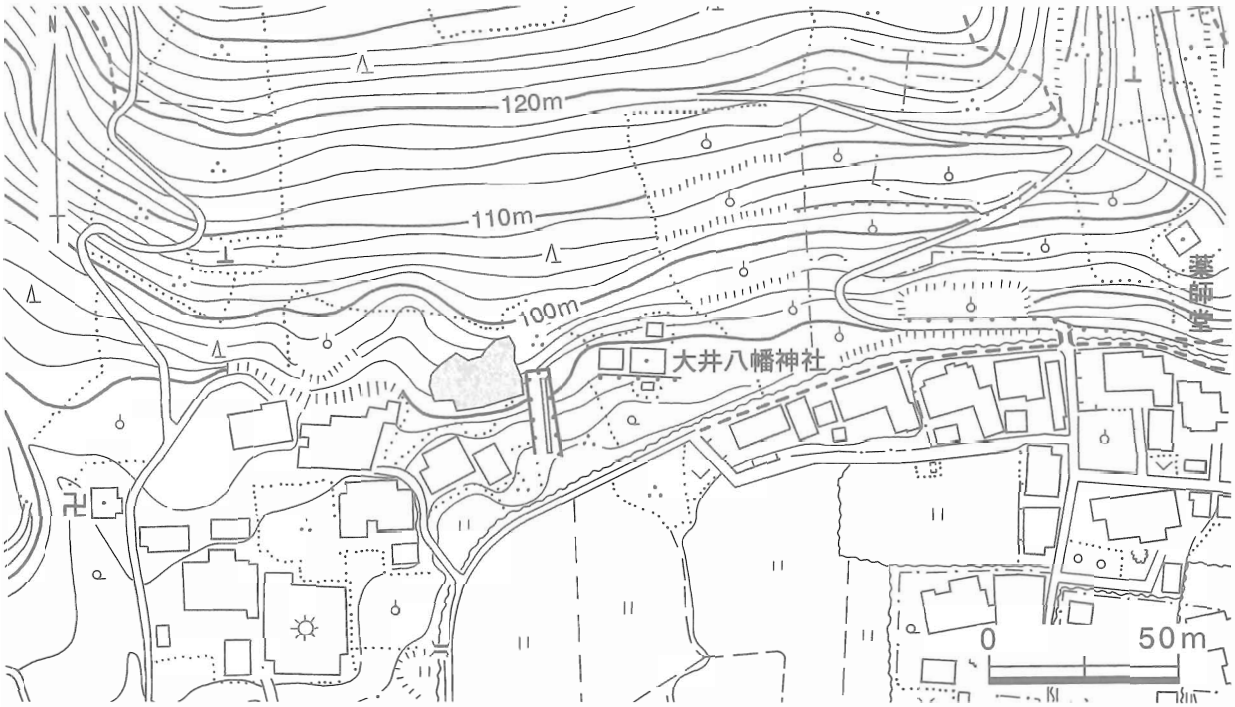
窯体は、東側を１号窯、西側を２号窯と名づけ２月10日から掘削を開始した。いずれも焚口と煙道、窯壁のほとんどは失われているものの、焼成室の多くが残存していることが明らかになった。この段階で、金谷町教育委員会から保存の意向が伝えられたため、一旦調査を中断し、取り扱いが定まった時点で再開することとした。

窯体調査の再開は2000年７月24日であった。安全確保のため調査再開前に草刈等の準備工を行った後、各窯で掘削作業を開始した。

東側にある１号窯は、主軸から東側を解体して、構築当初の床面が東側壁に取り付く様子を把握する予定であった。しかし、当初の床面と考えていた床面下に更に２枚の床が存在していることが判明した。そのため、窯体中軸線に沿う断面でも床の累積状況が把握できるように、当初の床面までの断ち割りを行うのみで、床面全体の解体は行わなかった。よって、構築当初の床面から３面目までが、東側窯壁に取り付く様子が窺える段階で調査を終了としている状況である。

西側の２号窯は、主軸に直交するトレンチにより床の傾きを把握する予定であった。しかし、構築当初の床面と思われていた床面下に更に３～４枚床が存在していることが判明したので、トレンチの一部を掘り抜き、床が連続していることの把握に努めた。よって、トレンチ底面は、部分的に掘り抜いた箇所で構築当初の床面が見える状況で調査を終了としている。

調査に係る記録は、図面と写真である。図面は断面図を手取りで作成し、平面図を先述した基準点をもとにトータルステーションで計測し作成した。写真は随時35㎜判カラーネガ・カラースライド・モノクロ、６×７判カラースライドを用いて記録した。



第６図　本調査の対象範囲

第３節　資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業(出土遺物の洗浄・注記・接合・復元・実測、写真整理、図面整理・修正、各種台帳作成等)は、上志戸呂古窯の現地調査終了後、他の現地調査と並行して実施した。

平成13年度末の時点で掛川工区(金谷地区)の現地調査がほぼ終了したことから、平成14年度から掛川工区(金谷地区)の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要していた複数の遺跡の中で、上ノ山遺跡(№93地点)は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。なお、上ノ山遺跡については平成17年度に報告書を刊行し、整理作業のすべてを終了している。上志戸呂古窯の資料整理については、平成17年度半ばから本格的に開始した。資料整理は、遺構図、遺物実測図の作成・修正・トレース、遺物の写真撮影、原稿執筆等の順で行い、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は６×７判のモノクロ及びカラーポジを用いた。

第３章　調査の成果

第１節　概要

１　立地と基本層序

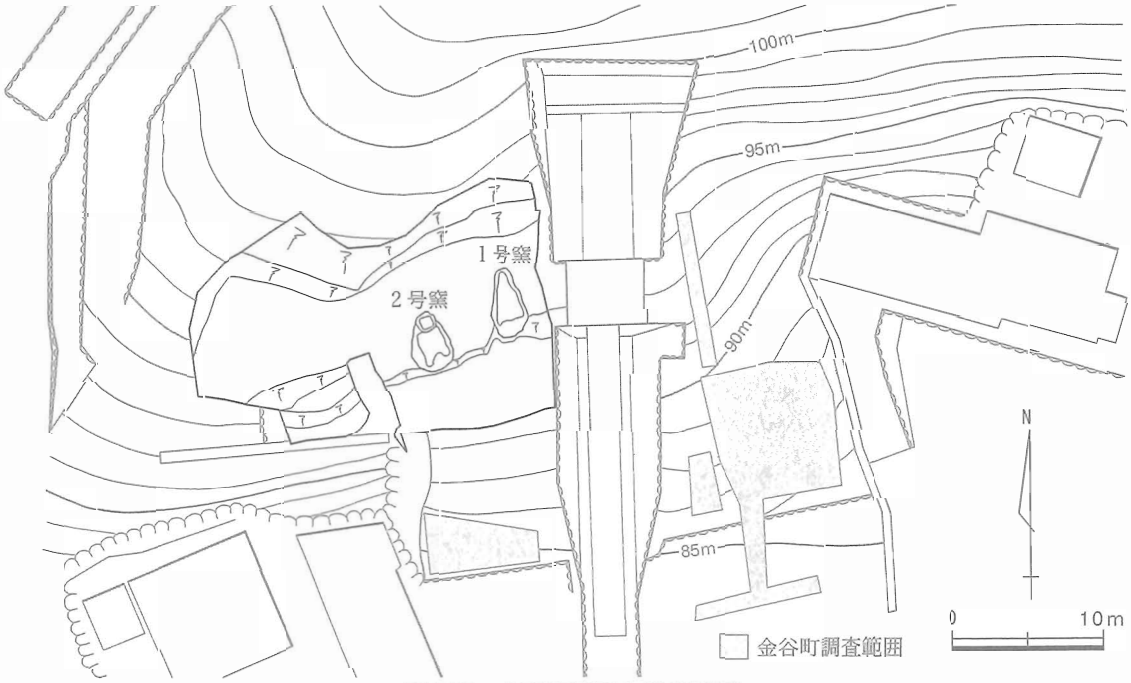
窯は丘陵末端の南向き斜面に築かれている。この斜面は22～23°で、床面の傾斜を切盛りによって適宜調整できる、窯を築くのに適した場所であったといえる。また、南側に広がる平野との比高差もわずかで、整形品の搬入・製品の搬出にも簡便な場所と考えられる。

本調査範囲の層序は、上位から耕作土、黄色粘土、破砕礫を多く含む黄色粘土～シルト層となる。耕作土は黒ボクに起因するもので20～50cmの厚さがある。粒子は細かく茶畑に利用されていたこともあり有機質を多く含んでいる。黄色粘土は無遺物層で、70cm前後の厚さがある。層位の上面が斜面に沿う傾きで礫が混じることから、この付近一帯にみられる更新世の堆積物が再堆積して形成されたものと考えられる。破砕礫を多く含む黄色粘土～シルト層は、基本的には上位の黄色粘土と同様な成因であろう。破砕礫は細かく割れた泥岩を主体としたもので、山塊を構成する岩盤が風化・崩壊して混入しているのだろう。

２　遺構と遺物

本調査により検出された遺構は、窯２基である。名称は東側から１号窯、２号窯とする。窯が築かれた土地は段々に造成されて近年まで茶畑や墓地に利用されていたので、地上の構造物は１号窯の窯壁の一部を除いて破壊された状況であった。各窯とも床面が当時の表土とさほど隔たらない位置にあり、地上に壁を設けた大窯の形態を取るものと考えられる。規模はかなり小型であるが、２号窯に残された障壁や、支柱(896)、分炎柱(897)の存在からも、「瀬戸・美濃型」大窯の系統上にあることが窺える。

今回の調査で把握された上志戸呂古窯の焼成器種は、第２～５表のように多岐にわたっている。いずれも耕作土、東側に隣接する小笠用水管敷設に際して上げられた土、茶畑や墓地に供するために段々に切った撹乱土等から出土しており、現地調査段階に廃棄された当初の位置を保っていないものと理解された。したがって、以降には特殊な場合を除いて出土位置の記述は省略する。



第７図　本調査範囲と検出遺構

第２表　大窯期志戸呂焼遺物分類表

- 1　天目
  - (1)天目茶碗
    - Ⅰ類　輪高台
      - a　口縁が外反、断面形状は「S」字
      - b　口縁直立
    - Ⅱ類　内反り高台
      - a　口縁が外反、断面形状は「S」字
      - b　口縁直立
  - (2)小天目
- 2　碗類
  - (1)小碗
  - (2)平碗
  - (3)丸碗
    - Ⅰ類　付け高台
    - Ⅱ類　削出し高台
  - (4)筒形碗
    - Ⅰ類　付け高台
    - Ⅱ類　削出し高台
  - (5)その他の碗
  - (6)小杯
    - Ⅰ類　体部が直立
      - a　平底
      - b　削り込み高台
    - Ⅱ類　体部が丸
- 3　皿類
  - (1)丸皿
    - Ⅰ類　輪高台
      - a　見込み外縁に段あり
      - b　見込み外縁に段なし
    - Ⅱ類　削り込み高台
      - a　見込み外縁に段あり
      - b　見込み外縁に段なし
    - Ⅲ類　平底
  - (2)襞皿
  - (3)稜皿
  - (4)折縁皿(ソギ)
  - (5)稜花皿
  - (6)中皿
    - Ⅰ類　口縁直口
      - a　見込み外縁に段あり
      - b　見込み外縁に段なし
    - Ⅱ類　口縁外反
      - a　見込み外縁に段あり
      - b　見込み外縁に段なし
- 4　盤類
  - (1)向付
    - Ⅰ類　口縁を直立させる皿型のもの、底部の削り込みは丸皿Ⅱ類と同様
    - Ⅱ類　鉢形のもの
  - (2)鉢
  - (3)大皿
    - Ⅰ類　平底
      - a　口縁内湾
      - b　口縁内湾で口禿
      - c　口縁端反
      - d　口縁端反で口禿
    - Ⅱ類　付け高台
    - Ⅲ類　削り込み高台
- 5　神仏具
  - (1)筒形香炉
    - Ⅰ類　三足
      - a　口縁肥厚
      - b　口縁内湾
    - Ⅱ類　輪高台
  - (2)花瓶
- 6　壺甕類
  - (1)小壺
    - Ⅰ類　小型で肩部に張りを持ち、口縁部の挽き出しが上方に弱くなされる
    - Ⅱ類　やや大型で、口縁部を緩く外側に挽き出す
  - (2)短頸壺蓋
  - (3)短頸壺
  - (4)耳付水注
  - (5)徳利
    - Ⅰ類　広い底部から直立するもの
    - Ⅱ類　ラッキョウ形の体部をもつもの
    - Ⅲ類　寸胴の体部に耳をもつもの
  - (6)小瓶
  - (7)広口壺
    - Ⅰ類　素縁で、体部が丸くなるもの
    - Ⅱ類　折り返しの短い口縁を持ち、長胴のもの
  - (8)建水
  - (9)甕
    - Ⅰ類　折り返し口縁をもつ体部の丸いもの
    - Ⅱ類　円筒形状もの
  - (10)桶
  - (11)茶壺
    - A　横耳
    - B　縦耳
  - (12)その他の壺甕類
- 7　擂鉢
  - (1)擂鉢
    - Ⅰ類　縁帯をもつもの
    - Ⅱ類　口唇部内部に水平の突起をもつもの
- 8　その他
  - (1)水滴
    - Ⅰ類　小壺Ⅱ類に注口を付けるもの
    - Ⅱ類　瓜形を呈するもの
    - Ⅲ類　水鳥型など形象するもの
  - (2)片口
  - (3)風炉？
  - (4)瓦

第３表　出土陶器破片数数量表（全破片）

		灰釉	鉄釉	錆釉	灰釉鉄釉掛け分け	錆地灰釉流し掛け	焼締（無釉）	不明	計	合計	百分率	備考
天目	天目茶碗Ⅰ類	5	37					16	58	143	1.3%	
	Ⅱ類		4					2	6			
	体部		64	10	1			4	79			
	小天目	1	13	1				2	17	17	0.2%	
碗類	小碗	1	1						2	2	0.0%	
	平碗	11	3						14	14	0.1%	
	丸碗Ⅰ類	10							10	125	1.2%	
	Ⅱ類	1							1			
	体部	101	6		7				114			
	筒形碗Ⅰ類	20	43						63	244	2.3%	
	Ⅱ類		5						5			
	体部		144	13	18			1	176			
	小杯Ⅰ類	67	9	9	2		3	9	99	117	1.1%	
	Ⅱ類	14	4						18			
皿類	丸皿Ⅰ類	22	15	1		1			39	5165	48.0%	
	Ⅱ類	4134	600	1	1			390	5126			
	裳皿	15	1						16	16	0.1%	
	稜皿			15					15	15	0.1%	
	折縁皿	1	1						2	2	0.0%	
	稜花皿	1							1	1	0.0%	
	中皿Ⅰ類	22		12		3	2		39	108	1.0%	
	Ⅱ類	8		12				3	23			
	体部	23		22			1		46			
盤類	向付Ⅰ類	7	9	38			2		56	76	0.7%	
	Ⅱ類	9	1	9			1		20			
	鉢	2		2			11		15	15	0.1%	
	大皿Ⅰ類a			54			26		80	306	2.8%	
	Ⅰ類b			31				6	37			
	Ⅰ類c			14			1		15			
	Ⅰ類d			3				1	4			
	Ⅰ類底部～体部			120			48		168			
	Ⅱ類			2					2			
神仏具	筒形香炉Ⅰ類	15	10	6				2	33	80	0.7%	
	Ⅱ類		1						1			
	体部	31	8	1			2	4	46			
	花瓶			5					5	5	0.0%	
壺甕類	小壺	59	62	6			4	8	139	139	1.3%	
	短頸壺蓋	6					2		8	8	0.1%	
	短頸壺	112	2						114	114	1.1%	
	耳付水注	3	68	1				1	73	73	0.7%	
	徳利Ⅰ類	2	95	6		1			104	311	2.9%	
	Ⅱ類	101	12					2	115			
	Ⅱ類(千段巻)	79	4						83			
	Ⅲ類		8						8			
	体部					1			1			
	小瓶	1	18						19	19	0.2%	
	広口壺Ⅰ類			21					21	64	0.6%	
	Ⅱ類			21					21			
	体部			20			2		22			
	建水	1	4				2		7	7	0.1%	
	甕			25			3		28	28	0.3%	
	桶			28			1		29	29	0.3%	
	茶壺Ⅰ類		1	1					2	62	0.6%	
	Ⅱ類			1					1			
	体部		11	42			6		59			
	壺甕類		12	77			2		91	91	0.8%	広口壺片含む
擂鉢	擂鉢Ⅰ類			1968			203		2171	3202	29.7%	
	Ⅱ類			67			11		78			
	体部			882			71		953			
その他	水滴	4							4	4	0.0%	
	片口			19			5		24	24	0.2%	
	風炉？		1						1	1	0.0%	
	瓦						5		5	5	0.0%	
不明		36	39	10			34	19	138	138	1.3%	
合計		4925	1314	3578	29	6	448	470	—	10770	100.0%	
百分率		45.7%	12.2%	33.2%	0.3%	0.1%	4.2%	4.4%			100.0%	

第４表　出土匣鉢・匣鉢蓋破片数数量表（形態の判別分のみ）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	不明	合計	百分率	蓋	百分率
A	0	2	18	0	40	60	0.3%	3	0.2%
B	1	14	152	14	462	643	3.6%	35	2.3%
C	14	1175	4698	189	11035	17111	94.8%	1345	89.8%
D	0	1	78	7	150	236	1.3%	115	7.7%
合計	15	1192	4946	210	11687	18050	100.0%	1498	100.0%

第５表　出土窯道具重量表（全破片）

種類		重量（kg）	合計（kg）
匣鉢	A	17.5	4813.8
	B	113.0	
	C	2996.2	
	D	44.1	
	体部片	1643.0	
匣鉢蓋		241.0	241.0
焼台		199.0	199.0
トチン		199.0	199.0
合計			5452.8

第２節　検出遺構

１　１号窯

１号窯は二等辺三角形状の平面形態で、奥行き2.8m、最大幅1.95mの規模に施設が残存していた。床は焚口から焼成室手前側までが近世以降に畑の段を切り出した際、破壊され失われていた。焼成室奥側には、支柱の基礎と思われる埋め込まれた匣鉢から奥側へ1.25mまでは残存しているが、これより煙道側は同じく畑の開墾によって失われている。壁内面から外側へ20～35cmの範囲は、窯焚きに伴う猛烈な熱により赤褐色に変色している。燃焼室側でより広く、煙道側にいくにしたがって幅を狭める変色域は窯内部の温度変化を反映しているのだろう。煙道側の変色域は、先の匣鉢から奥側へ2.35m程度まで認められるので、概ねこの付近に煙道が造られていたとみられる。最大幅は、残存部南端から0.4m程度の位置にある。ここから煙道に向かう直線上に壁が設けられ、中軸線に対し線対称に絞られていく。

窯の焚口～燃焼室は後世の攪乱のためにほぼ失われているが、西側壁面南端の屈曲面が下位に垂れ込んだ部分に若干の自然釉の付着を認めることができる。これは、攪乱で失われた部分に燃焼室が存在していたことと、燃焼室と焼成室の境に急角度で立ち上がる障壁が存在していたことを示唆している。この障壁は、後述する床面の嵩上げに伴って徐々に高くなっていったものと推測される。

床面は、亀甲状のヒビが無数に入っていた。このヒビは貼りつけた粘土が焼成時の高熱で収縮することにより生じたもので、床面上にはこれを修繕するために幾度となく粘土が貼り込まれている。粘土には、薄いものや範囲の狭いものなど部分的な補修のためと思われるものも含まれるが、比較的広く貼られるものは、下位に厚さ１～２cm程の粘土混じりの砂利を敷いて平滑に整えたうえ、上位に厚さ１cm程の粘土を敷いて新たな床面を形成している。粘土混じりの砂利には、繊維痕が若干みられるため、スサを混ぜて練り上げているものと考えられる。床面上には、厚さ３～５mm程度の濃緑色の発泡した自然釉が付着する。この広い範囲にわたる床は、焚口側では11面程に及ぶが、煙道側では４枚程と少なくなる。焚口側は焼成時により高温になる上、匣鉢の多くが置かれる部分なので、損傷がより多発したことを示すものだろう。

一方で、部分的な補修による比較的狭い範囲の床には、粘土混じりの砂利を敷かない箇所がみられるが、この場合は下位の床に付着した自然釉上に直接粘土を敷き込むことになる。

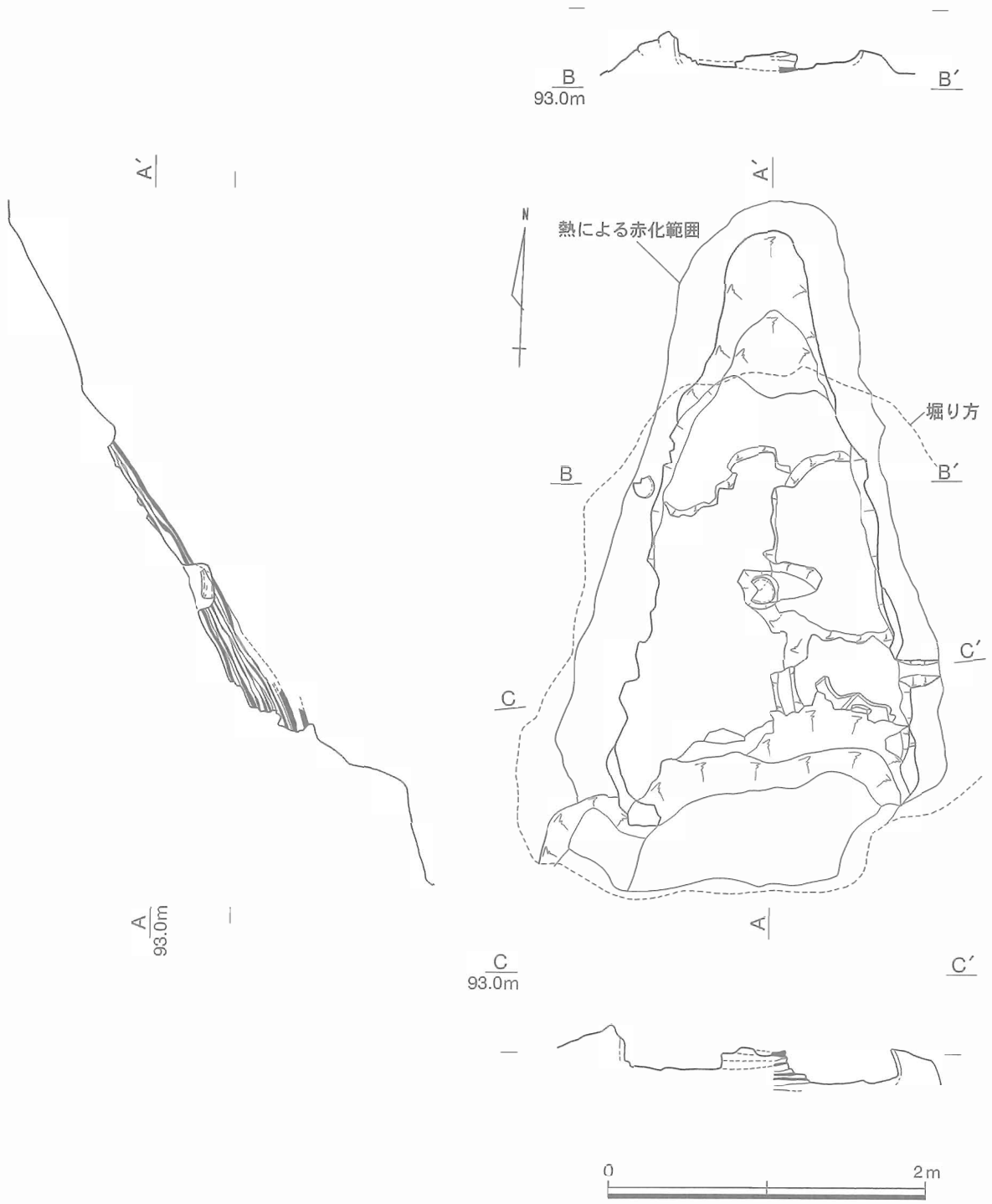
このようなたび重なる補修の結果、焚口側の床面は構築当初の床面から最大で40cm程度嵩上げされ、傾斜も36°から24°へとかなり緩くなっている。また、焚口側には床面とは別の粘土が斜めに貼りこまれる部分がある。ここは障壁の内側にあたるものと考えられる。

窯体のほぼ中央部には、匣鉢が底部をほぼ水平にした逆位で埋め込まれている。この上には床が貼りこまれていないことから、天井を支持する支柱の基礎になる可能性がある。

窯壁は下位末端の部分が両側に残っている。今回構造を確認した東側の壁は、床面からほぼ垂直に立ち上がる。３回程度の補修が施されており床ほど頻繁ではなかったともみられるが、剥がれ落ちた窯壁の付着する遺物が散見されることからも、定期的な補修は欠かせなかったであろう。それぞれの壁は床に擦りついているので、床の嵩上げにしたがって基部が床下へ次第に埋まっていったものと考えられる。西壁は手前側で内側に回りこんでいるので、この付近が燃焼室と焼成室の境であると認められる。

窯体内に遺棄された遺物はない。前述したように、頻繁に改修していることからみれば、その都度窯体内をきれいに清掃しているものと考えられる。また、このことは窯の放棄が窯体の崩落など事故に伴うものでなかったことを示唆している。

西側壁の外側から、匣鉢の底部片が出土している。この位置は、地上に積み上げられた窯壁の内部あるいは直下にあたる部分である。周辺の地山土は破砕礫を多量に含む粘土～シルト層であるのに比べ、窯が築かれる周囲のみ破砕礫の混入が極端に少なくなっている。窯を構築する際に、脆弱な地山層を窯よりも一回り大きな規模で掘り抜いて、改めて耐久性のよい土に入れ替えているものと考えられる。この過程か、窯壁を積み上げる過程で匣鉢が混入したのであろう。このことは、1号窯が築かれる以前に操業していた窯が近在することを示している。



第8図　1号窯平面・断面図

2　2号窯

2号窯は矩形状の平面形態で、奥行き2.4m、最大幅1.85mの規模に施設が残存していた。床は焼成室の後半部を近代以降に掘削された墓穴(調査着手以前、この上に祠があった。)によって破壊され失われていた。焚口から燃焼室にかけては近世以降に茶畑の段を切り出した際、破壊されている。焼成室の前面左手には障壁がおよそ三分の一残存している。残存する床面から外側へ25～75cmの範囲は、窯焚きに伴う猛烈な熱により赤褐色に変色している。1号窯と同様に、焚き口側の幅が広く、焼成室奥側にいくに従って幅が狭くなる。この変色域は、墓穴の半ばまで認められるので、概ねこの付近に煙道が造られていたとみられる。最大幅は、残存する床面のほぼ中央にある。1号窯のような最大幅の部分から煙道へ結束する緩やかな絞込みがみられないので、焼成室末端まである程度の幅を保った上、急激に減じて煙道に至っていたとみられる。

焚口は後世の攪乱のため失われている。焚口に面する位置の燃焼室と焼成室間に急角度で立ち上がる障壁には、自然釉が厚く積もっている。この障壁は、下位で68°、上位で50°と中ほどで角度を変える。障壁の裏側には窯壁のガラが埋め込まれていることから、恐らく同位置で障壁が継続的に高くなっていったのではなく、窯の終盤期に焚口側を一旦取り払って、新たに障壁を作り直しているものと考えられる。障壁の東端はやや上側に反り返っている。ここに分炎柱が設けられていたことも否定できない。

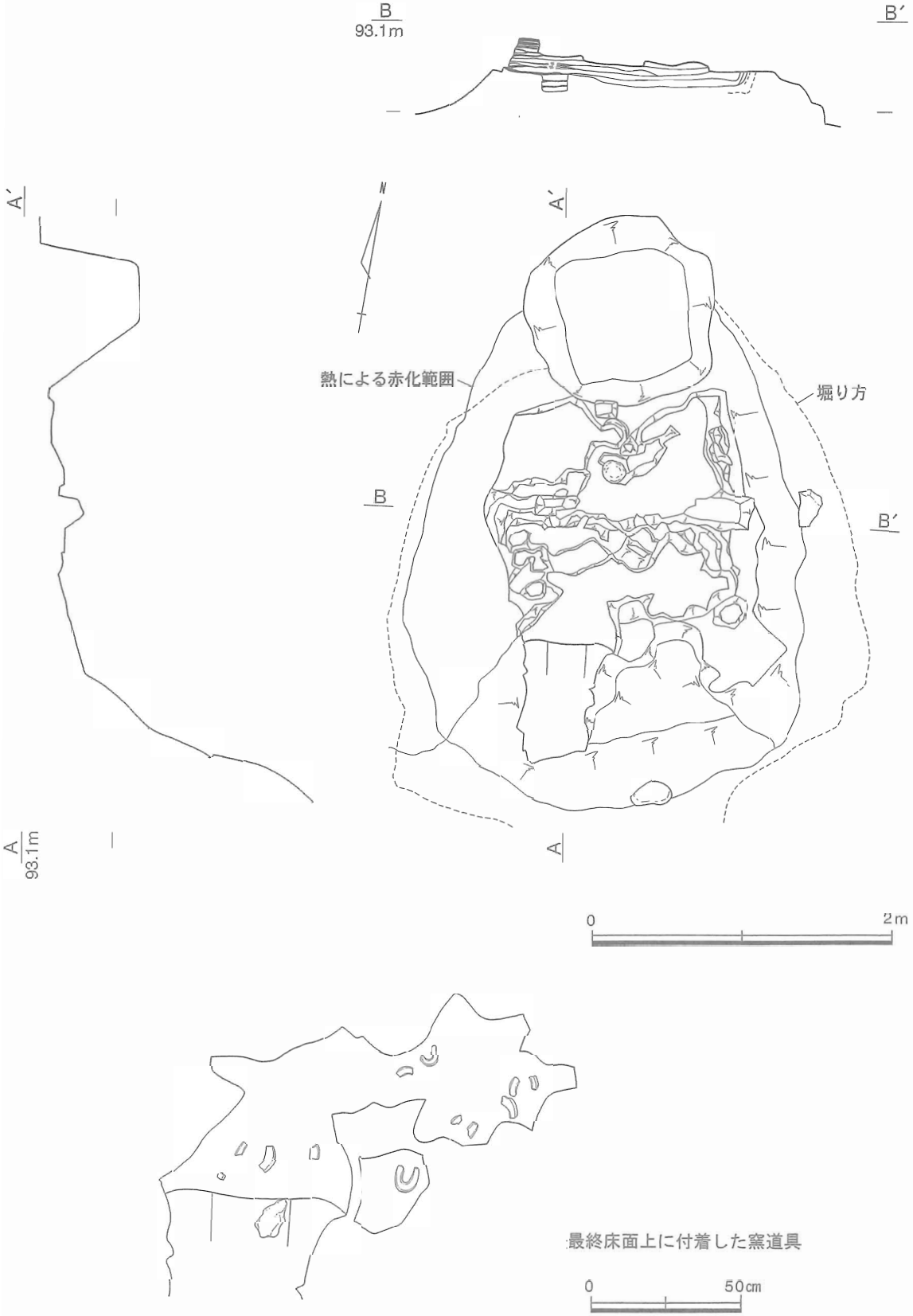
床面は、1号窯と同様に貼りつけた粘土が焼成時の高熱で収縮することにより、亀甲状にヒビが入っていた。このヒビを修繕するために幾度となく粘土が貼り込まれており、およそ10面の床面があることを確認した。1号窯と同様に、構築当初の床面・2面・最終面では、下位に厚さ1～2cm程度のスサと粘土が混じる砂礫を敷いて平滑にした上に、厚さ1cm程の粘土を貼りつけて床面としている。その他の床は粘土混じりの砂礫を挟まずに、古い床面上に直接粘土を貼っているので、この中には一部の補修のために貼られた小規模なものが含まれるのかもしれない。それぞれの床面上には、厚さ2～5mmの発泡した濃緑色の自然釉が付着しているので、新しい床が直接貼られる部分は、床面と自然釉のセットが重層的に繰返して観察される。墓穴で断ち切られた部分には、およそ4枚の床面が残存していた。この最上位は、最終面が残る焼成室前半部分の傾きの延長線上からおよそ25cm下にあたるので、焼成室前半と近似する補修が加えられていたとすれば、この上位に失われた床面が存在していた可能性がある。あるいは、焼成室奥側がより平らになるのかもしれない。床面の傾斜角度は当初で25°、最終面ではおよそ15°と、1号窯に比べるとかなり緩やかになる。

窯体のなかばには1号窯と同様に支柱の基礎と思われる部分が2箇所ある。いずれも中軸線上にあって匣鉢を用いている。ひとつは障壁上端からおよそ1.5m奥側にあり、内部に粘土を充填した匣鉢が正位で置かれる。この匣鉢は、構築後ほどなく床面で覆われる。もうひとつはこれより0.25mほど焚口よりの第4床面上にちょうど匣鉢の直径の窪みとして残されるので、支柱の底面として使用した匣鉢が据えられた痕跡と理解される。これら支柱は、窯の改修に伴って前者から後者へ場所を移して挿げ替えられたものと考えられる。

壁はほとんど残存していない。西側の床面末端が内側にやや盛り上がっていることや、熱による変色域の範囲からも、現在みられる床の末端付近から壁が立ち上がっていたものと考えてよいだろう。

窯体内に遺棄されている遺物はない。前述したように改修を頻繁に行っていることから、その都度床面上をきれいに清掃しているのだろう。また、1号窯と同様に窯体が崩落することで放棄されたのではないことを物語っている。障壁から連続する最終面の床面上には、輪ドチが複数個溶着する。

2号窯でも、壁の外側から輪ドチなどの窯道具が出土している。1号窯と同様に、窯より一回り大きな掘り方によって土の入れ替えを行った際に混入したものと観察されるので、この窯の以前に操業していた窯が近在することを示している。



第９図　２号窯平面・断面図

第３節　出土遺物

１　上志戸呂古窯に伴う製品・窯道具と志戸呂焼

今回把握された上志戸呂古窯の焼成器種(1)は、天目(天目茶碗、小天目)、碗類(小碗、平碗、丸碗、筒形碗、小杯)、皿類(丸皿、灯明皿、襞皿、稜皿、稜花皿、中皿)、盤類(向付、鉢、大皿)、神仏具(筒形香炉、花瓶)、壺甕類(小壺、短頸壺・蓋、耳付水注、徳利、小瓶、広口壺、建水、甕、桶、茶壺、甕)、擂鉢、その他(水滴、片口、瓦)である。この他、窯道具(匣鉢、匣鉢蓋、焼台、小分炎柱、支柱)である。

焼成器種の出土破片数は第３・４表のとおりで、もっとも多量に出土したのは窯道具の匣鉢である。匣鉢は、製品のように搬出される性格のものではない。事前の焼成や焼成中の破損品の差し替えに伴って作成された匣鉢は、窯の終焉とともに破棄されるため、膨大な数が物原に残されることになる。製品では丸皿と擂鉢が著しく多い。碗類では丸碗・平碗・筒形碗が生産されるが、出土量が多いのは筒形碗で、次いで丸碗、平碗となる。ただし、平碗は出土量が微量であるため、碗類の生産は筒形碗と丸碗にほぼ限定されていたといってよいだろう。盤類には大皿と向付、鉢があるが鉢は比較的少ない。この組成は生活雑器の生産を主体としながら少量の茶器等を焼いていたことを物語る。

釉薬は、丸碗、丸皿、稜花皿、筒形香炉、短頸壺、小杯、小壺、耳付水注、水滴、徳利に灰釉・鉄釉が使用される。特に丸碗、丸皿では灰釉の比率が圧倒的に高く、小壺は鉄釉が多い。短頸壺は、もっぱら灰釉が用いられている。また、天目茶碗、丸碗、筒形碗には内面に鉄釉、外面に灰釉を掛け分ける例が少量みられる。錆釉が用いられる端反の大皿と向付は、恒常的に口禿となる。他の器種は鉄釉・錆釉が用いられる。

なお、調整はいずれでも右回転のロクロ上で行われるので、以降のロクロ回転方向は特殊な場合を除いて記述を省略する。

調査区から出土した近世志戸呂焼は、天目茶碗・丸碗・短頸壺・徳利・蓋物などである。調査区内には前述のように近世墓が営まれていたので、これに供されたものが混入したのであろう。

(１)天目　天目には、天目茶碗、小天目がある。

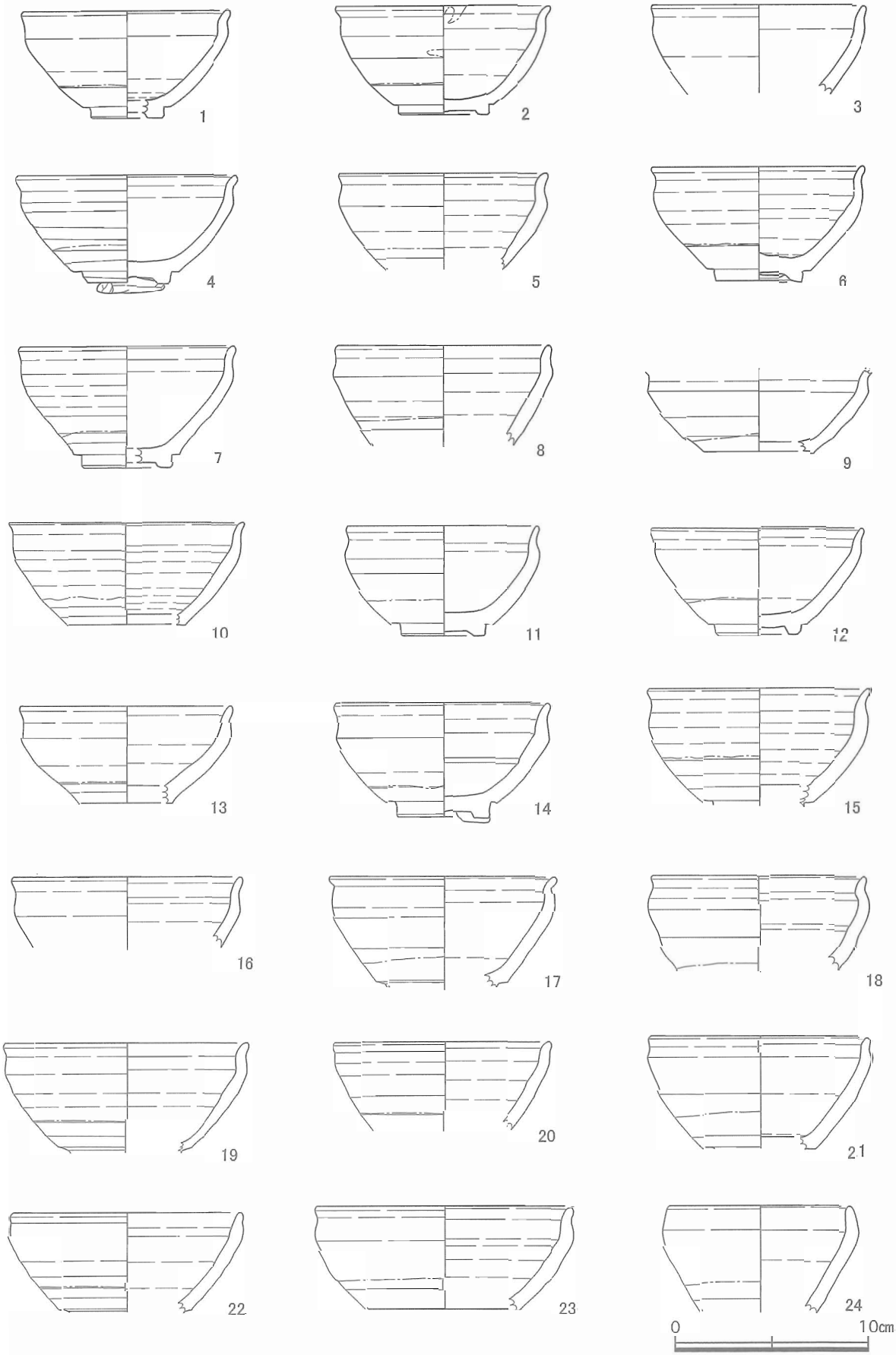
天目茶碗(１～30)　天目茶碗は削り出しの輪高台(Ⅰ類)と内反り高台(Ⅱ類)の２種があるが、Ⅱ類は少量にとどまる。

調整はいずれもロクロ上で行われる。全体をナデで整えた上、切り離して逆転し、高台の削り出しと体部下半を回転ヘラケズリで整える。体部のケズリは、砂粒の動きが鈍いもの(４・12・13・19・23)がある。高台は、外縁部を２㎜前後の幅で面取りするもの(１・２・11・12)としないものがあり、その後、木製あるいは粗朶の敷かれた台上で乾燥されたようで、４・７・11・27・29の端部には圧痕が残される。

口縁部は、外側へなだらかに挽き出す、断面形状でいえば伸びた「Ｓ」字状を呈するもの(a：１～23)と、屈曲を持たずにまっすぐ上方に挽き出すもの(b：24～26)があるが、出土量が安定しているのは前者である。本来、Ⅰ類・Ⅱ類ともにa・bの体部を備えるものと考えられるが、今回の資料中ではⅡ類の底部が著しく少ないため、底部と接合しない体部～口縁部片についてもほぼすべてがⅠ類となろう。

Ⅰ類aの体部の挽き出し具合は、若干内湾するもの(１～４・15・19～23)、直線状に挽き出すもの(６～14・17・18)がある。後者には小さく屈曲する口唇部が付く場合(17・19～22)、体部と口縁部の境に明瞭な稜が付くもの(８・９・14)や、体部内面と底部の境をはっきりするもの(６・７・11・14)が含まれる。

Ⅰ類aの法量は口径12.5㎝・器高6.6㎝から口径10㎝・器高5.8㎝程度までの差が含まれ、法量が減退し徐々に小型化していったものと考えられるが、口径11㎝台・器高６㎝程度が最も出土例が多いため、



第10図　出土遺物１（天目茶碗）

窯の盛期に生産されたものと察せられる。口径10cm台になるものは比較的少ないが、この中には体部を肥厚させ、直線状に立ち上がるもの(11～14)が含まれる。これらは小ぶりな割に見込みが広くとられる。比例して高台径もやや広くなり、重量感に富むので、すこぶる座りの良い印象を受ける。

Ⅰ類bはⅠ類aと同様に、口径が12cm台のものが最も大ぶりであり器高も高く整えられる(26)。

27～29は底部片である。いずれも底部内面を広く取るもので、体部も直線状に立ち上がるものと思われる。

釉は、鉄釉と灰釉、錆釉が用いられる。鉄釉が一般的で、ついで灰釉が多く、錆釉は鉄釉の1／6程度とごくわずかとなる。鉄釉(1・3～5・8～10・12・14・15・18・23・25～27・29)は、全体的には光沢のある黒褐色～赤褐色に発色し、釉の薄い部分、特に口唇部や体部過半は胎土表面の色調が透けることで次第に褐色味を帯びた色調に変化する場合が多い。中には、浅黄色の細かな点が霧のように全体を覆うもの(1・12・18)、一面ににぶい黄橙色に発色する釉が芒目状にあらわれているもの(19)など、いくつかに焼成に起因する釉調の変化が観察できる。また、3と25には褐色味の強い鉄釉が用いられる。

錆釉(17・20)は褐色～赤褐色に発色する。20は焼成がやや不良で、カセた雰囲気となる。

発泡し黄色～浅黄色になるもの(2・6・7・13・19・21・22・28)もあるが、これは発色しない鉄釉の可能性がある(2)。

灰釉(11・16)は、本来丸皿と同様にオリーブ色系に発色する釉が用いられたのだろうが、部分的にカセて、発泡寸前に見えるもの(11)など、過剰な温度により釉が適正に発色しない状態のものがある。オリーブ黒色に発色する16は鉄分がやや混入されているようで、丸皿に用いられる鮮やかな釉ではない。

施釉範囲は、内面から外面の体部過半までとなり、これより高台にかけては通常露胎となる。露胎の部分は言うなればキャラメル色を呈する。

焼成は、いずれも匣鉢の中で行われる。底部の下に挟み込まれる窯道具は輪ドチと小さな粘土トチン(丸められた粘土塊)がある。4・29には輪ドチが付着するが、一部が高台の内側に入り込んでしまっている。溶着した資料には下位に丸皿を1枚挟み、輪ドチを高台にあてがっている例が確認されている(写真4)。14・27には粘土トチンが付着するが、平らに潰れている。この様子から、窯道具はまだ柔らかなうちに挟み込まれ、上から押され密着されたものとみられる。なお、高台端部に輪ドチを叩き落した際の欠けや剥落痕があるもの(2・6)、粘土トチンを落とした欠けのあるもの(1・14)がみられる。

Ⅱ群は今回の出土遺物の中では29のみで、内面底部中央にややへこみをもつ。釉は黒褐色で、薄い所はややオリーブ色味をもつがよく発色している。外面の体部過半から高台にかけては無釉の露胎であり、にぶい黄橙色に発色する。

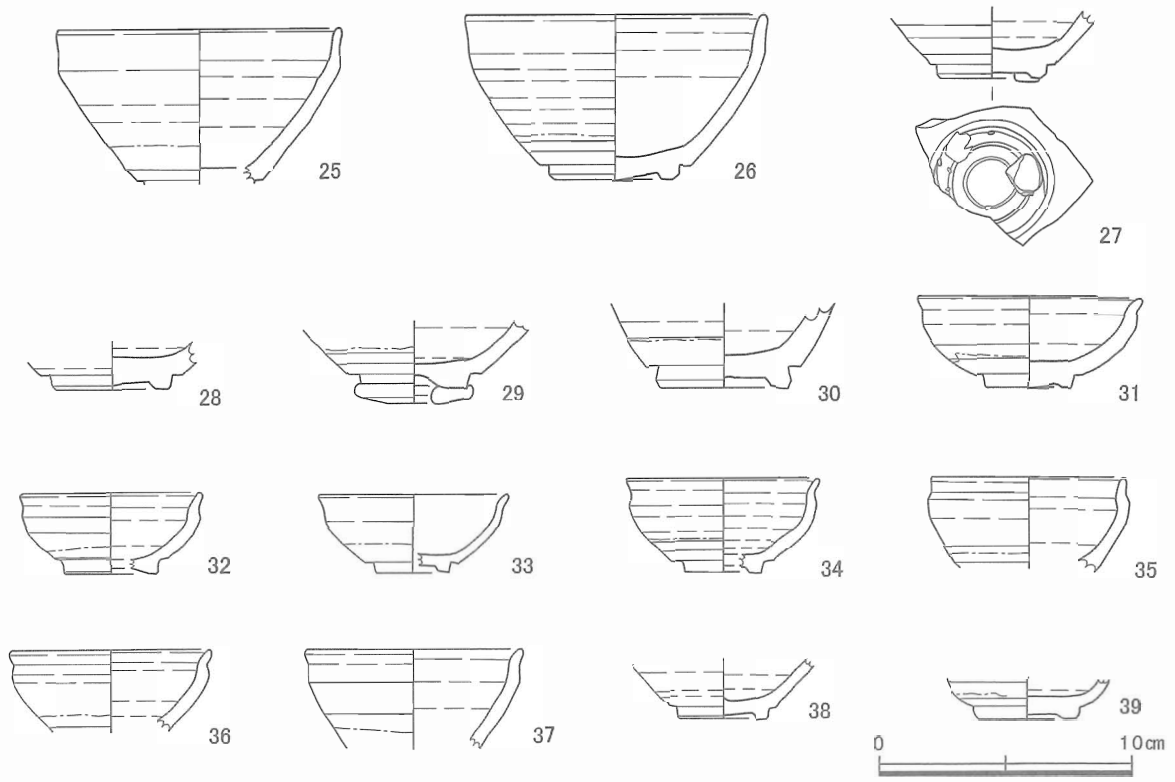
なお、30は高台が広くかつ高く作られ体部も急激に立ち上がる、上志戸呂古窯の時期から後出する要素をもつ近世のものである。また、24もすこぶる艶のある鉄釉を掛ける。近世のものであろうか。

小天目(31～38)　小天目は輪高台のもの(Ⅰ類：31・33・34・38)が多く、内反り高台(Ⅱ類：32)は少ない。口縁は外側へなだらかに挽き出す、断面形状でいえば伸びた「S」字状を呈するものが主体となる。

法量は口径8cm前後・器高4cm超のものが最も大きい。これらの中にも31のように柔らかく立ち上がるものと、37のように直線状に立ち上がるものがある。口径7～8cm・器高3.6cm程度のもの(34)から口径7cm・器高3cm程度のもの(33)などが最も小さい部類である。天目茶碗と同様に、法量が減退し徐々に矮小化していったものと考えられる。

調整はいずれもロクロ上で行われる。全体をナデで整えた上、切り離して逆転し、高台の削り出しと体部下半を回転ヘラケズリで整える。

釉は鉄釉や錆釉を主体とする。よく発色しているのは37と褐色味の強い32だけで、31は発泡して表面がカセている。34は外面の褐色味の強い鉄釉は発色しているが、内面は灰オリーブ色である。よく発色



第11図　出土遺物２（天目茶碗・小天目）

しない33・35・36を含めて、いずれも天目茶碗の場合と同様に鉄釉である可能性がある。38は無釉であり、褐色に焼締られた素地はあたかも錆釉を掛けたような効果を生じている。

Ⅱ類はこれまでに把握しているのは32の１点のみである。法量はⅠ類の最も小さなものに近似するが、これより大きなものが存在するかは現在のところ把握できない。

焼成は、内面に窯が起因の付着物がみられないので匣鉢に込められて行われたのだろうが、今回は溶着する資料を把握していない。32の高台端部には粘土トチンが付着しており、31の高台端部にも粘土トチンがはがれたと思われる痕跡が３箇所認められる。小天目か小碗の高台痕が残る丸皿(261)があるので、匣鉢の中で丸皿上に重ねられて焼成されたと考えられる。

（２）碗類　碗類には、小碗、平碗、丸碗、筒形碗、小杯がある。

小碗(39)　小碗は数が少ない。図化できたものの他に１点鉄釉を施す破片が認められる。39は灰釉を用い、内面から外面体部までに施釉する。整形は、ロクロで整えた後に高台を削り出し、体部まで回転ヘラケズリを施す。鉄釉を施す破片資料の高台は付け高台であるので、削り出し高台と付け高台の両者が存在したことが窺える。小天目か小碗の高台痕が残る丸皿(261)があるので、匣鉢の中で丸皿上に重ねられて焼成されたと考えられる。

平碗(40・41・44・45)　平碗は灰釉と鉄釉のものが少量出土している。40は底部で、外面は回転ヘラ削りで調整されている。全体に明赤褐色を呈し、内面には釉が掛けられるが灰白色となるので、焼成温度の不良により充分発色していないものと思われる。41は口縁部～体部片である。口唇部までなだらかに立ち上がっている。体部外面は回転ヘラ削りにより調整され、釉は全体に錆釉を下掛けした後、体部の内面全体と外面の過半部まで鉄釉を上掛けする。上掛けされた鉄釉は、全体的にやや緑色がかったオリーブ黒色～暗灰黄色を呈するが、釉の薄い部分は暗褐色に発色する。

44・45は大振りなもので、オリーブ色に発色する灰釉を掛ける。高台は付け高台で、貼り付けはやや

粗雑で高台内部に段を残している。高台の造りや釉調は筒形碗75に近似する。高台端部～内側には輪ドチが付着している。柔らかいうちに挟み込まれて上から押されたとみえ、しっかりと食い込んでいる。

丸碗(42・43、46～51)　丸碗は、小ぶりなもので体部を全体的に丸く仕上げるもの、体部過半に張りを持ち、体部半ばから口縁部にかけて直立気味に立ち上げるものなどの形態差がある。高台は付け高台のⅠ類と削り出し高台のⅡ類がある。

Ⅰ類は、体部を全体的に丸く仕上げるもの(42)、体部過半に張りを持ち、体部半ばから口縁部にかけて直立気味に立ち上げるもの(48・49)がある。付け高台は先端がとがる三角形状を呈する42と矩形となる47・48がある。見込みのより広い47・48の高台径はより広いものとなっており、両者が比例していることがわかる。

調整は、ロクロ上で成形した後に切り離し、底部から口縁部直下までを回転ヘラ削りで整えて高台を貼り付ける手順で行われる。高台基部から1㎝内外の範囲のみがナデられヘラ削りの痕跡が失われる。

釉は灰釉のもの(43・46)、鉄釉のもの(42)、外面を灰釉、内面を鉄釉に掛分けるもの(47・48)があるが、破片資料を含めると灰釉が多く使用される。掛け分けられるものは、見込みが広く取られ体部が直線状に立ち上げられるものだけであり、この形態から開始された技法とわかる。口唇部は内外面ともに鉄釉であり、外面の灰釉がかぶる例(49)からも、内面ののち外面に施釉したことがわかる。

焼成は、丸碗か筒形碗の高台痕を輪ドチに残す丸皿(90・279)があるので、匣鉢内に込めた丸皿1枚の上に重ねて行われたと考えられる。44・45の高台端部には、乾燥台によるものと思われる平行する小さな圧痕がついている。また、匣鉢846の事例からも一個焼きされた可能性も考えられる。

Ⅱ類は46のみである。高台端部はケズリ後にナデによりなめらかに整形されており、その際に押された粘土が内側にわずかにはみ出している。体部下端の形態から見ても直立気味に立ち上げる48・49のような体部を伴うものとみられる。焼成方法はⅠ類と同等であろう。

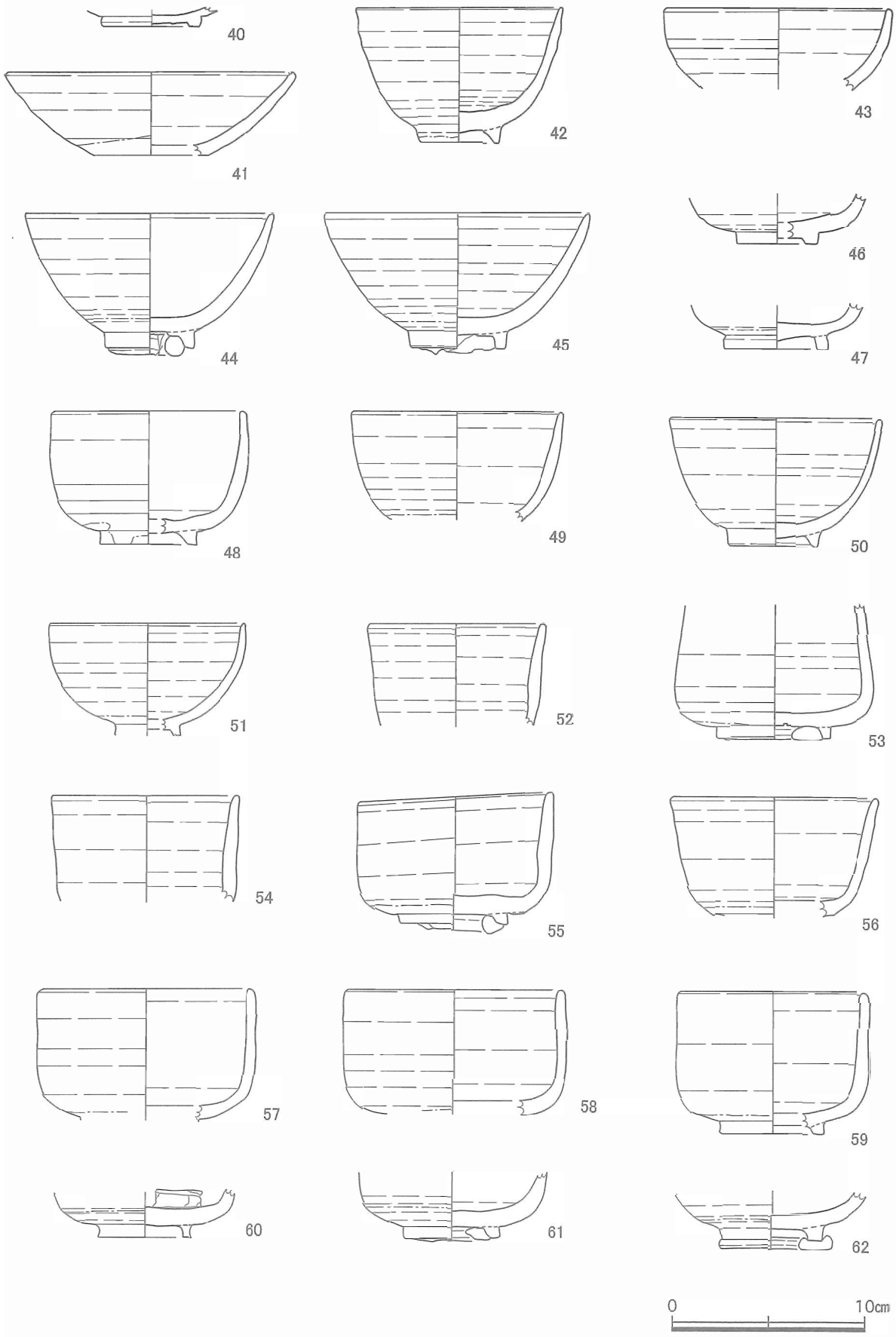
50・51は、図では42と近似するように見えるが、体部の中ほどを削り込んで薄く華奢につくり素地を灰白色に焼き上げる19世紀代の志戸呂焼である。釉も黄色味を帯びて薄い。高台は薄い矩形を呈する。

筒形碗(52～79)　筒形碗はいずれも見込みを平坦にし、茶溜りを作らないものである。釉は鉄釉と灰釉が用いられるが、灰釉・鉄釉を掛け分けるものも少量ある。高台は付け高台のⅠ類と、削り出し高台のⅡ類があるが、口径10㎝台のⅠ類が多くⅡ類はごく少量である。

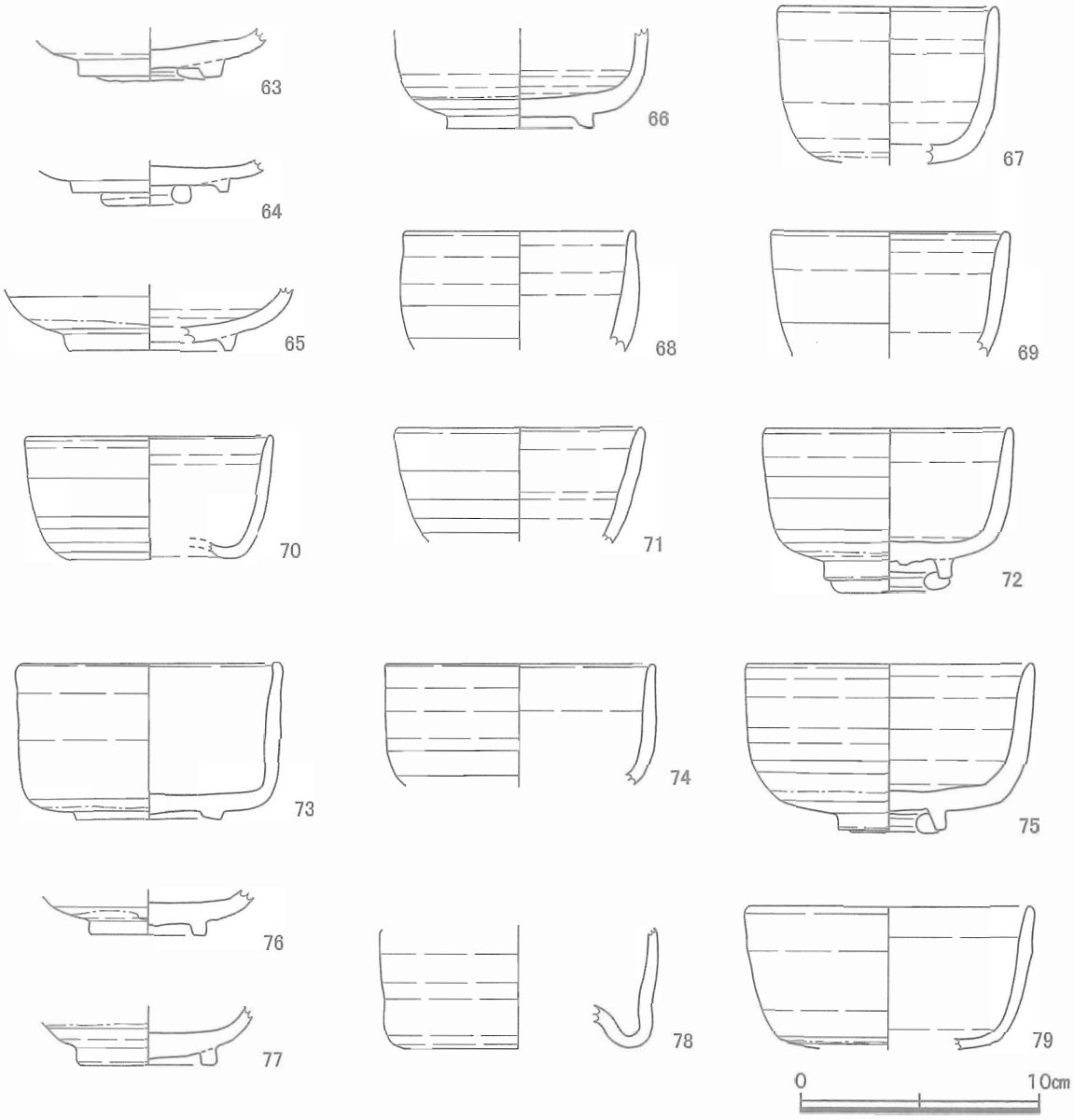
Ⅰ類の中では口径12㎝・器高7㎝程の大ぶりなもの(75)が特徴的である。高台は高い割にきわめて狭く、その作りや釉調、金属分の噴出し具合までも平碗44・45と近似する。普遍的にみられるのは口径10㎝・器高6㎝台のもので手の収まりも程よく、75よりも高台径が増して据わりがよくなっている。この中で、高台径が比較的狭い60～62・72は、高台も比較的高く、72に見るように底部から体部にいたる屈曲がなだらかであることが特徴である。一方、高台径が広い53・55・59・64・66は、高台も低く55や59にみるように底部と体部の接点がほぼ直角に接する上に、体部の立ち上がりも垂直となる。

調整は、ロクロ上で成形した後に切り離し、底部から口縁部直下までを回転ヘラ削りで整えて高台を貼り付ける手順で行われる。高台の造りは75以外では丸碗Ⅰ類と近似するので、底部付近の破片の場合は丸碗との峻別に迷うものがある。高台接合部の外面を、ナデの後に細い工具をあてがって調整する例もある(53・60・63・64・66)。この過程は、高台径の大きなものに比較的みられ、高台と体部の境が明瞭になる。なお、高台端部には目立った圧痕は観察できない。53と56は歪が著しい。

釉は鉄釉(52～66・73)と灰釉(67～72・74～77)が用いられるが、全破片を見ると鉄釉が圧倒的に多い。灰釉は素地に直接たっぷりと掛けられており、透明感のあるオリーブ色に発色するものが目立つ。鉄釉は黒色～黒褐色に発色するものと、褐色のもの(66)があるが、後者は少ない。施釉の範囲は内面から外面腰部下位までである。体部の下端で終わっているのは66と75の2点のみである。



第12図　出土遺物３（平碗・丸碗）



第13図　出土遺物４（筒型碗）

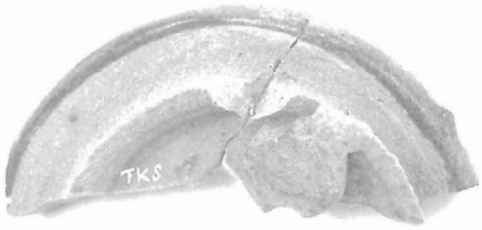


写真１　粘土トチンを挟む筒型碗

釉を掛け分けする78・79は高台が失われているが、体部の形状からⅠ類になるものと思われる。体部は薄く挽き出されており、他と比べても華奢な印象を受ける。釉は内側に鉄釉を、外側に灰釉を掛ける。鉄釉は口唇部外側にまで至り、灰釉が上にかぶっているので掛け分けの丸碗と同様に、鉄釉を掛けた後に灰釉を掛けているものと理解できる。また、全破片中の４片に施釉が逆になるものがある。

焼成は、丸碗か筒形碗の高台痕を輪ドチに残す丸皿(90・279)があるので、匣鉢内に込めた丸皿１枚の上に重ねられて行われたと考えられるが、窯壁に起因する付着物が見込みに付く破片資料もあるので、

裸焼きの場合も考慮される。また、匣鉢846の事例からも一個焼きされた可能性もある。

通常下位に輪ドチを挟む。高台径の狭いものでは端部から内側にかけて付着するが、高台径の広いものでは高台の内側にすっかり入ってしまう場合がある(53・63・64)。この場合は高台と匣鉢との溶着を厳密には防げないので、さらにもう一枚輪ドチを重ねる必要を感じるが、そのような例は今回確認されていない。粘土トチンを使う例は極めて少ない(写真1)。

Ⅱ類は73で腰部の折れが急になり、体部も垂直に立ち上がる。体部から底部にかけて回転ヘラ削りで調整され、高台は直径が大きく丈が低い。釉は鉄釉と思われるが、焼成が不良であるため充分に発色していない。焼成の方法は、Ⅰ類と同様であろう。

小杯(443～457)　小杯は、半筒状の体部をもち、口縁部をやや外反ぎみに直立させるもの(Ⅰ類)と、やわらかく内湾しながら立ち上がるもの(Ⅱ類)がある。出土量はⅠ類が各段に多い。

Ⅰ類は、443～451・453～455が該当する。調整は、ロクロ上で成形した後、回転糸切りで切り離して逆転し、底部から体部上半にかけて回転ヘラケズリを加える手順で行われる。底部は平底が多く、446のように削り込み高台の場合や445のようにつぶれた小さな三足を付けるものが若干量含まれる。平底の場合は、底部と体部の間に5㎜前後の幅でケズリを施して角を取るが、削り込み高台の場合は体部へ連続するケズリにより丸く仕上げられる。450は体部片であるが、体部下端を丸く削るので446と同様に削り込み高台をもつ可能性がある。釉は灰釉が多用され、体部過半から内面にかけて施される。454・455が鉄釉、他は灰釉である。

Ⅱ類は452・456・457が該当する。整形方法はⅠ類と同様であるが、底部からナデにより丸く立ち上がるので、面取りのためのケズリは施されない。底部は平底であるが、回転ヘラ削りを施す場合がある。釉は、内面のみに施される。図化されたものでは452が灰釉、他は鉄釉であり、小破片まで含めると灰釉は鉄釉の3倍ほどとなる。452はつぶれた粘土トチンを底部と体部の境に残している。

焼成は、446のように輪ドチを挟んで丸皿と重ねて匣鉢の中で行われるが、底部に輪ドチの溶着痕を残すものはごく少ないので、粘土トチンの場合が多いのだろう。三足のものは、接地面が欠ける場合があるので、輪ドチを挟まず匣鉢内で丸皿と重ね焼き、あるいは単独で焼成されたものとみられる。

(3)皿類　皿類は、丸皿、襞皿、稜皿、稜花皿、中皿が出土している。旧金谷町(現島田市)が実施した調査の際に出土している折縁皿は、今回は出土しなかった。量的には削り込み高台の丸皿(Ⅱ類)が圧倒的に多く、稜皿・折縁皿は少ない。釉は丸皿には普遍的に灰釉が用いられるが、丸皿の一部と稜皿は鉄釉が用いられる。また、丸皿の口縁部の一部を幅5㎜程度の工具を挟んで複数個所折り曲げる襞皿や口唇部内面に波状の文様をつける稜花皿が微量作られる。

丸皿(80～384・394～408)　丸皿$_{(3)}$は多量の出土をみるため、擂鉢と同様にこの窯の主要な製品であったことが分かる。丸皿は高台をもつⅠ類と、削り込み高台のⅡ類があるが、Ⅱ類が大多数を占める。いずれにも、見込み外縁に高さ0.5～1㎜程度の段をコテを用いて作り出す(a)と、平坦なもの(b)がある。

Ⅰ類(400下・403～408)　Ⅰ類の丸皿は、出土が少量であるため、Ⅱ類に比べればかなり限定的な製産であったと考えられる。図化したうち、aは400下・404・406・407で、他はbである。

調整は、ロクロ上で成形した後、回転糸切りで切り離して回転台上に逆転させ、体部半ばから底部までを回転ヘラケズリで整えた後に細く華奢な高台を貼り付ける手順で行われる。404・408のように、高台の接合面外側を細いヘラ状工具で軽くナデて整えている個体も見受けられる。

成形後の乾燥は、乾燥台などに乗せられて行われてとみられる。405の高台端部には木目と思われる平行する細かな筋を伴う圧痕が、408には粗朶痕が観察される。

釉は、400下・403～406に灰釉、407・408に鉄釉が用いられる。把握された限りでは、灰釉が鉄釉の

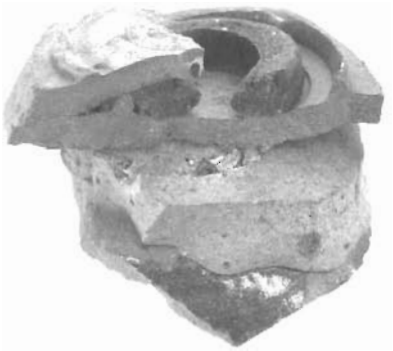


写真２　潰れた輪ドチを挟む丸皿Ⅰ類

1.5倍程度用いられている。施釉の流儀はⅡ類と同様である。

焼成は、匣鉢の中で２～３枚を重ねて行う。見込みに施釉しないものを重ねた上、最上に内面全体に施釉したものを置く。通常それぞれの間には輪ドチを１～２枚挟み込み、さらに匣鉢との間にも輪ドチを挟む例がある。しかし、輪ドチがやわらかなうちに重ねて上から押さえつけたようで、潰れて高台高より低くなり溶着してしまう例もある(写真２)。一方で、407にみられるように輪ドチを挟まずにそのまま重ね焼きする場合もある。この場合は、見込みの外周に上位の皿の高台痕が残される。溶着した資料にⅠ類a・bが混在している例は、今のところ把握できていない。なお400下は、上位に菊花文を付ける丸皿Ⅱ類を丈の高い輪ドチを挟んで重ね焼きする。

406のように見込みに16弁の菊花文をつけるものがある。施文は型押しによる。

Ⅱ類(80～384・394～400上・401・402)　見込みの内側に菊花の文様を施すもの(131上・394～400)、体部内面にソギを施すもの(401・402)が少量含まれるが、基本的な製作技法は共通している。aは80～146・205・319～345であるが、138～146・205は段が弱い。bは147～204・206～318・346～384である。破片資料を含めてもbがaよりも多く生産されている。

調整は、ロクロ上で成形した後に回転糸切りで切り離し、ロクロ上に逆転させて体部半ばから高台までを回転ヘラケズリで整えながら高台を削り込む手順で行われる。法量は口径7.5～８cm程度の小さなものと、10cm前後のものの２種がある。前者の小さなものは、ごく少量の生産であったのか出土量が極めて少ない。後者は口径がほぼ一定に保たれているが、器高は３～２cmの間で差を見せる。整形後にヘラ書き「×」と刻むものがある(382)。焼成前のヘラ書きは他に桶底部(689)にみられるが極めて少ない。

成形後の乾燥は、他の器種と同様にスノコ状の乾燥台や粗朶上に乗せて行われたと考えられる。174・311・349・350・362・365・370・372・397の高台端部には木目と思われる平行する細かな筋が、91・133・325・348・393・403には粗朶と思われる繊維痕が観察される。

釉は、灰釉(80～318・391下・394・396・398～400上・401・402)と鉄釉(319～348・350～384・397)が用いられ、前者が圧倒的に多い。灰釉では、釉の薄い部分が素地よりも一段と褐色を帯びる傾向がある(4)。外面の施釉部分は、体部最下段のケズリ痕から口縁までであるが、むらになる部分がかなり見受けられる上、高台端部まで垂れる例も多く、粗雑な感をうける。内面は、全面に渡る場合と見込み部分に掛けない内禿の場合がある。内面すべてに釉がかかるものは、重ね焼きの最上に積まれる。

内禿となる場合、内面に垂れ込んだ釉は溶着を避けるためにきれいに拭い去られている。拭い方には少なくとも二つのやり方がある。ひとつは皿と布状の用具をつかむ手をそれぞれ逆に回しながら、あるいは皿をもつ手を固定して用具だけを見込みの外周ラインに沿って動かす方法である。いずれも内面に掛かる釉の末端が見込み外周に沿って丸く処理されるので、見た目にもきれいな仕上がりが得られる(拭き方１)。輪ドチを据える部分を主に拭うので、見込み中央に直径５～15mmの釉が円形に残る場合がある(89・90・109・110・113・131・137・139・150・157～159・161・162・168・176・181・182・188・215・219・226・233・247・257・265・270・279・295・308・319・344・364・404)。この方法は段をもつaに用いられることが多いので、拭う範囲を厳格に意識した工人がbにも応用したものだろう。もう一方は、皿をもつ手を固定して見込み部分を奥から手前側に拭き取る方法で、多くは釉の末端が不

定形となる(拭き方２)。輪ドチを据える位置を適宜拭うので、体部の釉まで余計に拭うことがあり仕上がりは一定ではない。

焼成は、通常匣鉢の中で２～３枚を重ねて行う。基本的には釉の種類ごとに重ねられるが、269のように鉄釉上に灰釉を重ねる例が少量把握される。重ねる順番は、内禿のものを重ねた最上に、内面に施釉したものを置くのが通例だが、内禿のものの内面に窯壁に起因する付着物がある場合(185・191・226)や、外れた匣鉢の目地が溶着する場合(265・364)は、内禿ばかりで焼成されたことを示唆する。匣鉢と皿の間及び皿各々の間には輪ドチを挟み込む。輪ドチは、断面が長楕円となる丈の高いものを用いる場合(84・107・110・114・123・131・159・168・181・188・219・229・261・287)と、断面が円形～矩形となる丈の低いものをⅠ～３枚挟み込む場合がある(95・100・107・228・265等)。前者は皿の間に挟みこまれるもので、ほぼ中央に据えられる。後者は溶着例からも主に匣鉢と皿の間に挟まれるが、ずれて交差する場合(95・107・228・254・316等)があるので、一概に丁寧とは言えない。また、低く潰れる例が頻繁にあるので、皿を置いた上から強く押さえているとみられる。なお、溶着した資料にⅡ類a・bが混在している例は把握できていない。

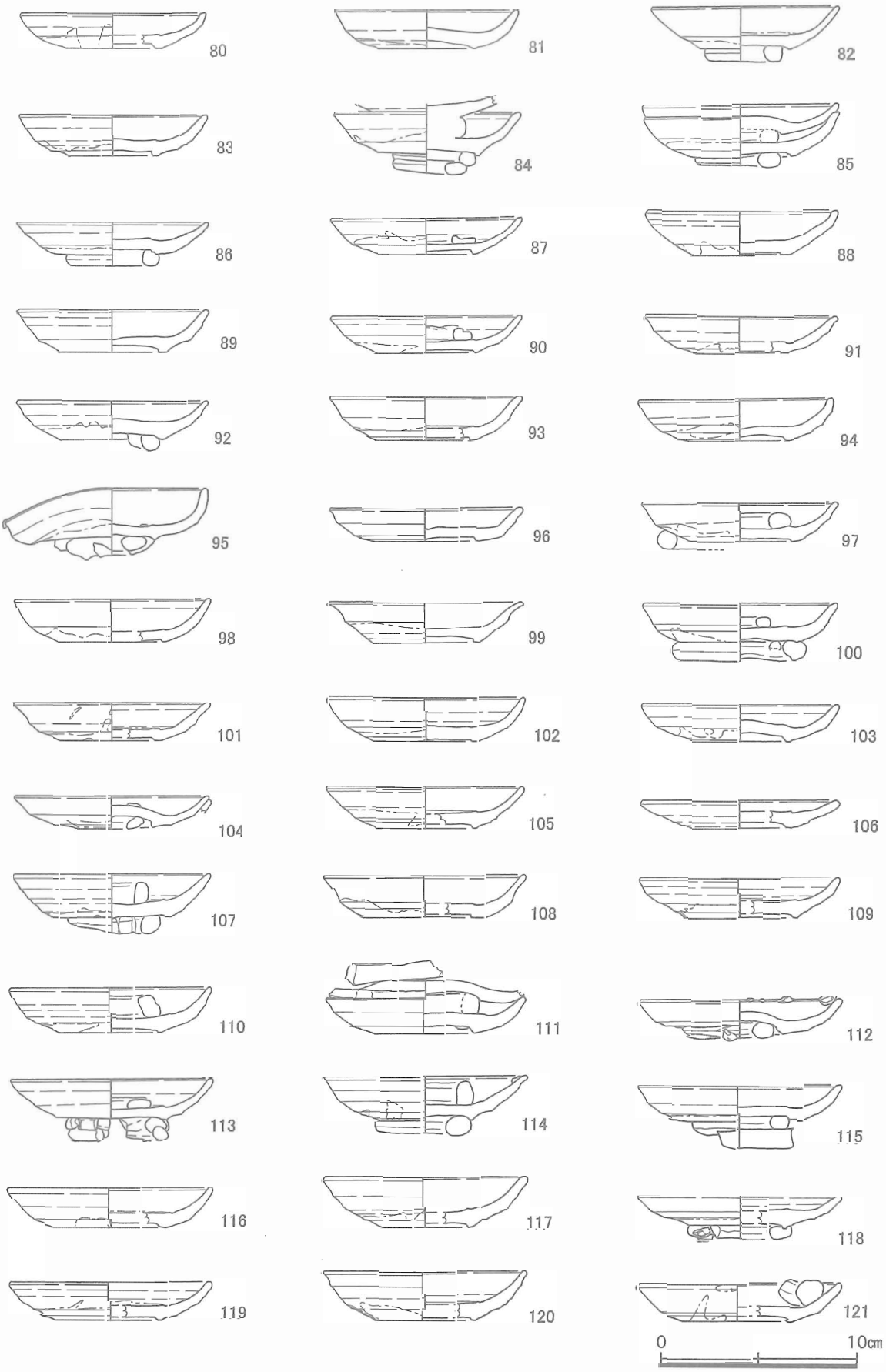
同器種ばかりでなく、他器種が重ね焼きされる場合がある。天目茶碗の場合は、主に直径１cm程度の扁平な粘土トチンを三箇所置いた上に据えられる(87・187・215・252・279・323)。潰れた輪ドチ上に三箇所の粘土トチンを置くものも、天目茶碗の併焼だろう(259　写真３)。輪ドチを挟む溶着資料(写真４)も、あるいは同様なのかもしれない。筒形碗か丸碗の場合は、輪ドチが挟まれて重ねられる。頃合いの直径で高台圧痕の断面形が丸くなるものがこれにあたる(90・279)。小杯は、小さな輪ドチを挟んで乗せられる(383・384)。小天目か小碗の場合も同様である(261)。挟まれる粘土トチンや輪ドチはいずれも低く潰れるので、丸皿と同様に上から圧着しているのだろう。下に敷かれる丸皿は、天目茶碗・筒形碗か丸碗・小杯などある程度器高のあるものは内禿１枚のみ、器高の低い小天目か小椀は２枚重ねの上に置かれる。

131上・394～400上のように、見込みに菊花文を施文するものがある。Ⅰ類の場合と同様型押しによるもので、131上は釉が厚く判然としないが398・400上は16弁であり、他も残存部から割り付けると同様の16弁になると推測される。394は形状が異なるように見えるが、花弁の先端がうまくつけられていないためであり、本来は他と同様な形状とみられる。また、131上は丸皿Ⅱ類a上に、400上は丸皿Ⅰ類上に断面が長楕円になる輪ドチを挟んで焼かれているので、菊花文を伴うものだけを選んで匣鉢詰めしているわけではないことがわかる。見込みの形状は131上・394～396がaで、他はbである。釉はいずれも灰釉であるが、395のみが錆地で体部の内外面にのみ灰釉を掛け、口縁の釉をぬぐって口禿にする。399は温度不足で発色しない。

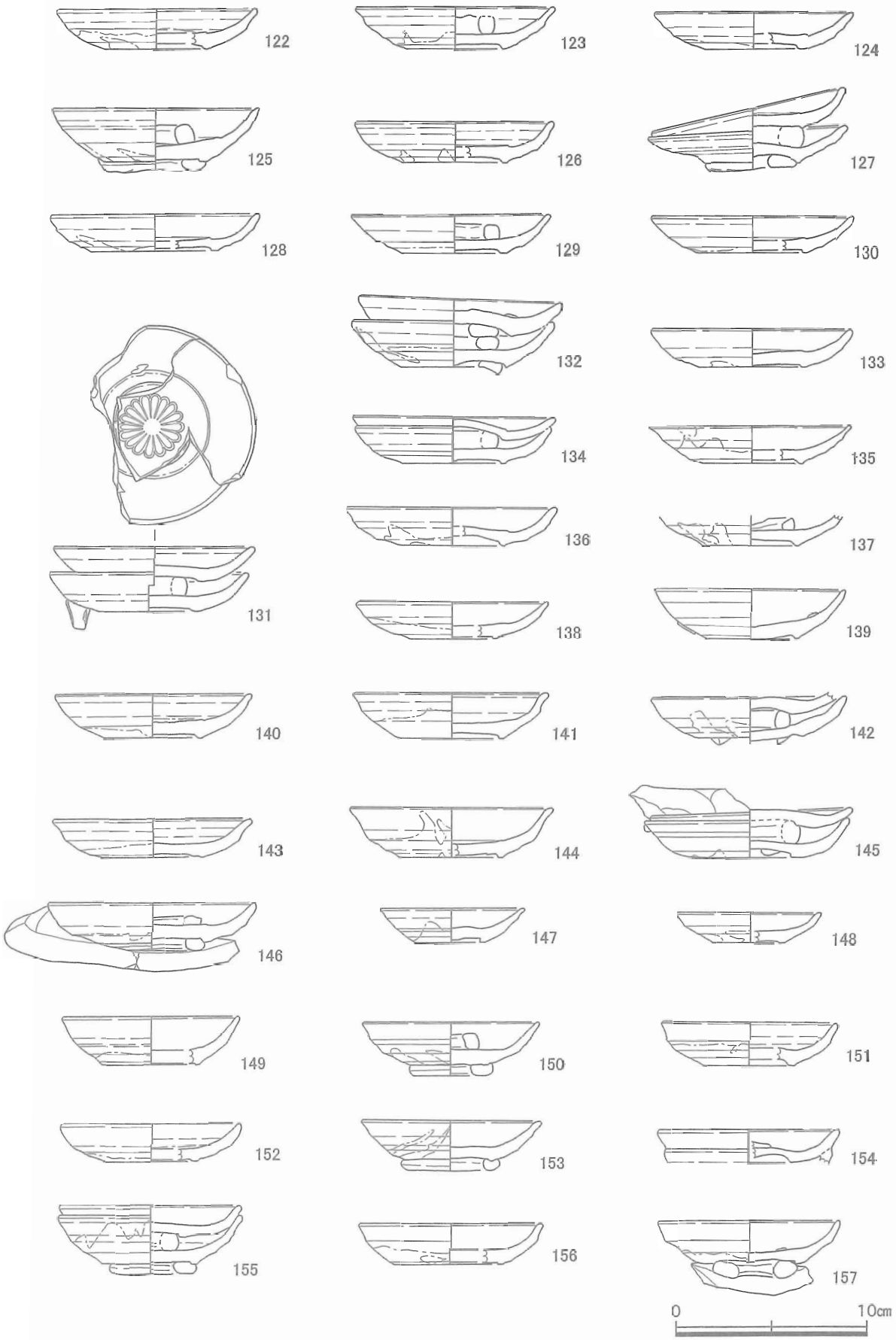
体部内面にソギを施す401・402も、基本的な部分は丸皿Ⅱ類と同様の手法で作られる。体部内面に丸

写真３　259に付着する３箇所の粘土トチン

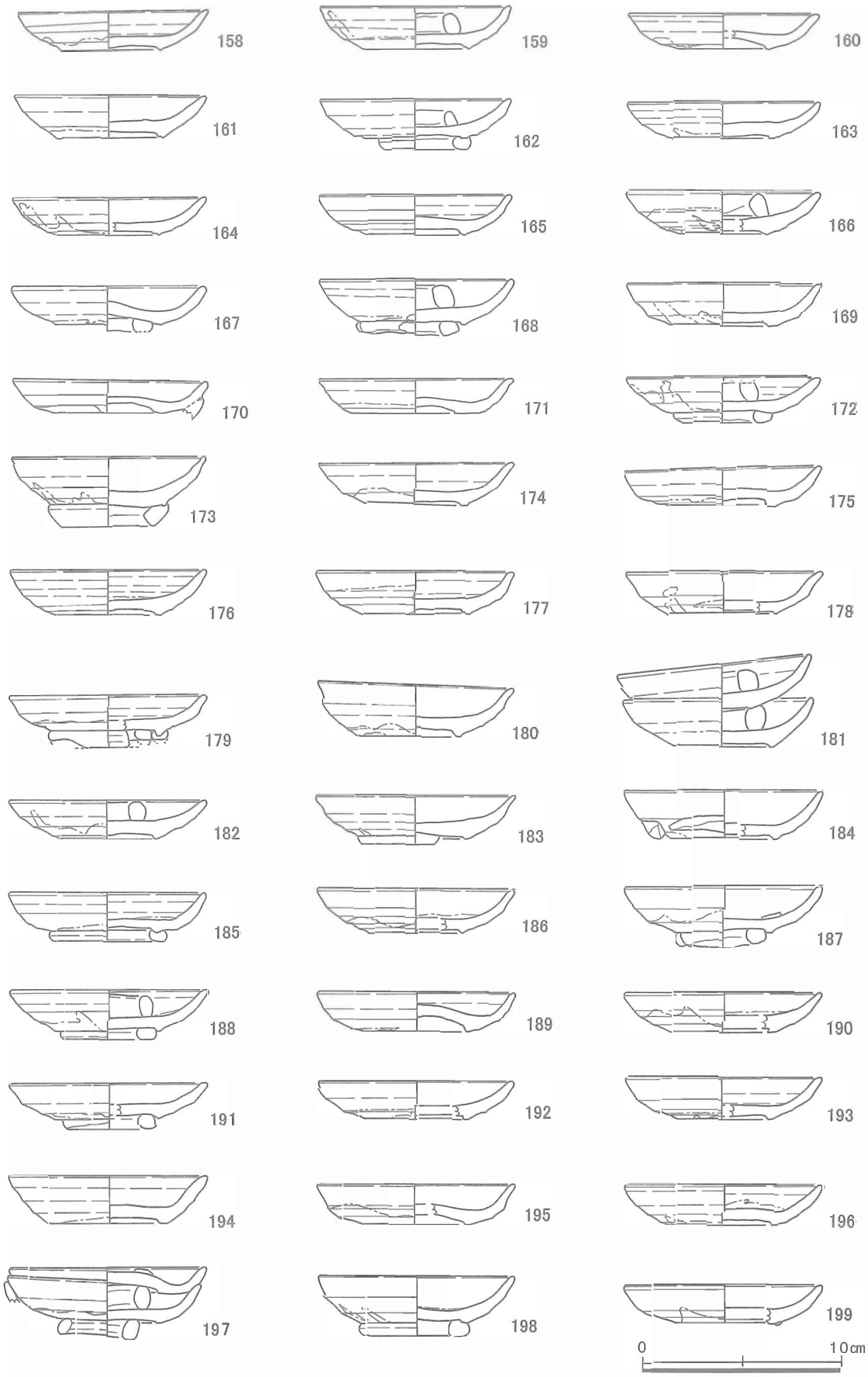
写真４　輪ドチを挟んで焼かれる天目茶碗



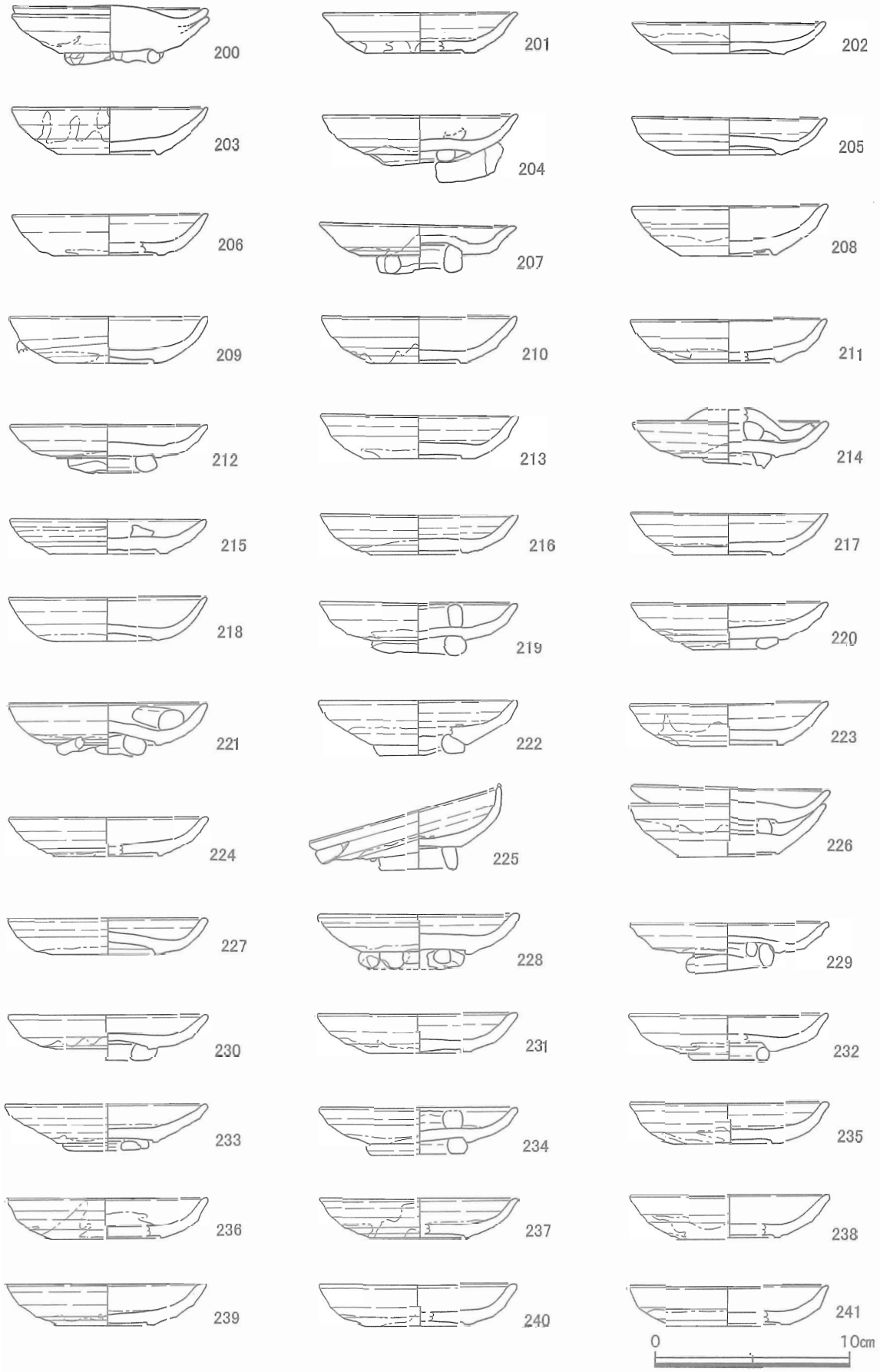
第14図　出土遺物５（丸皿１）



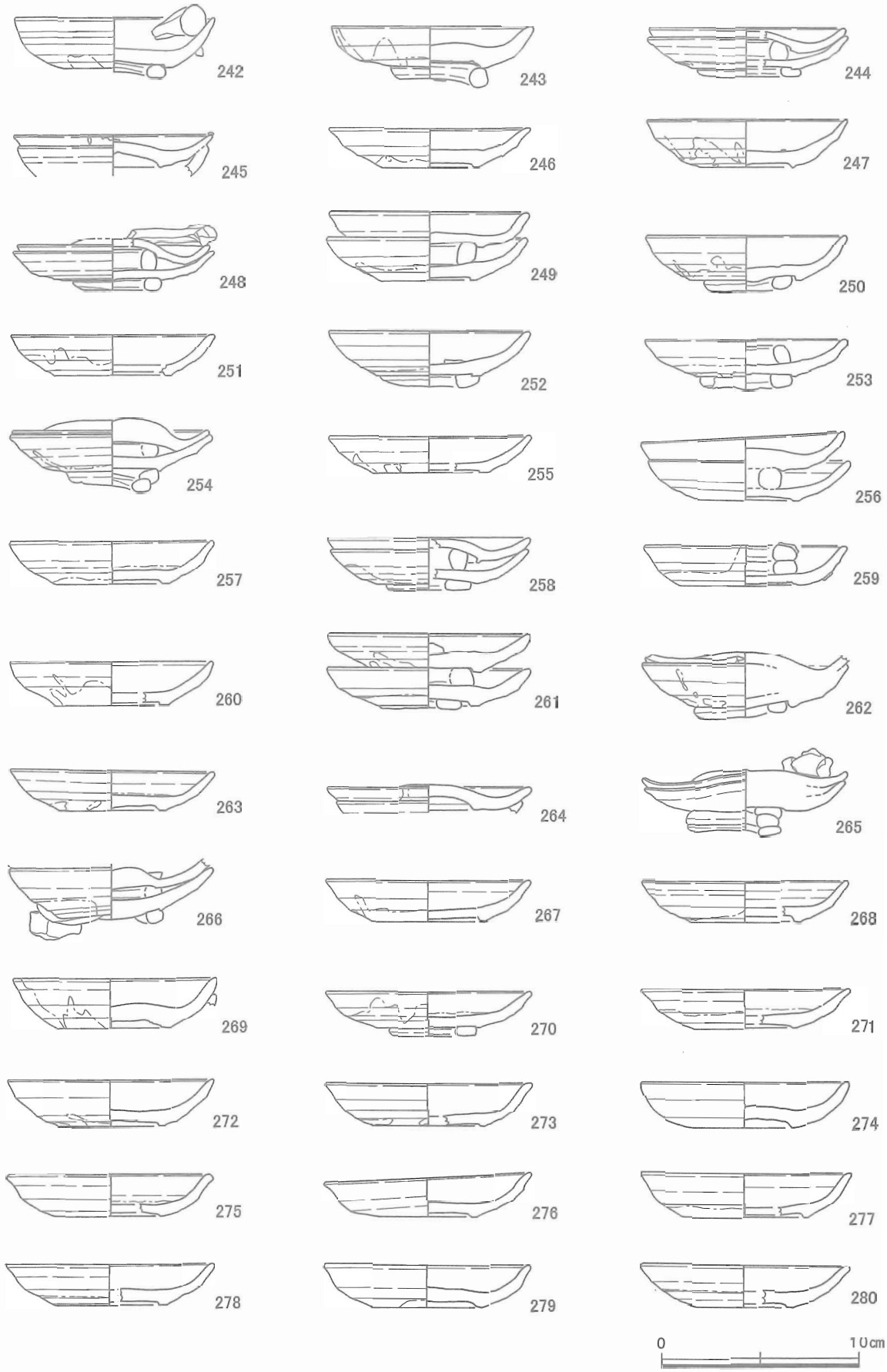
第15図　出土遺物６（丸皿２）



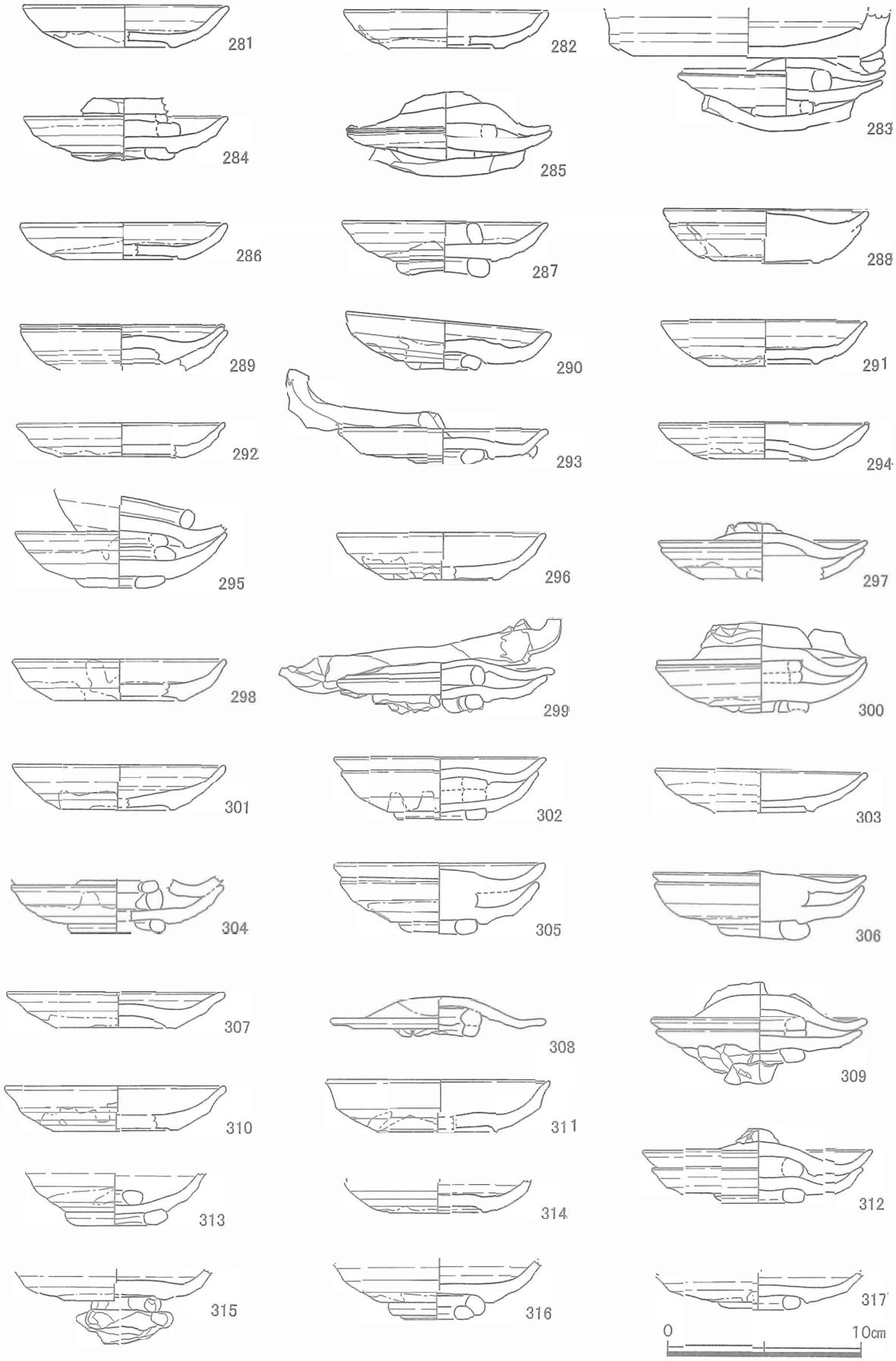
第16図　出土遺物７（丸皿３）



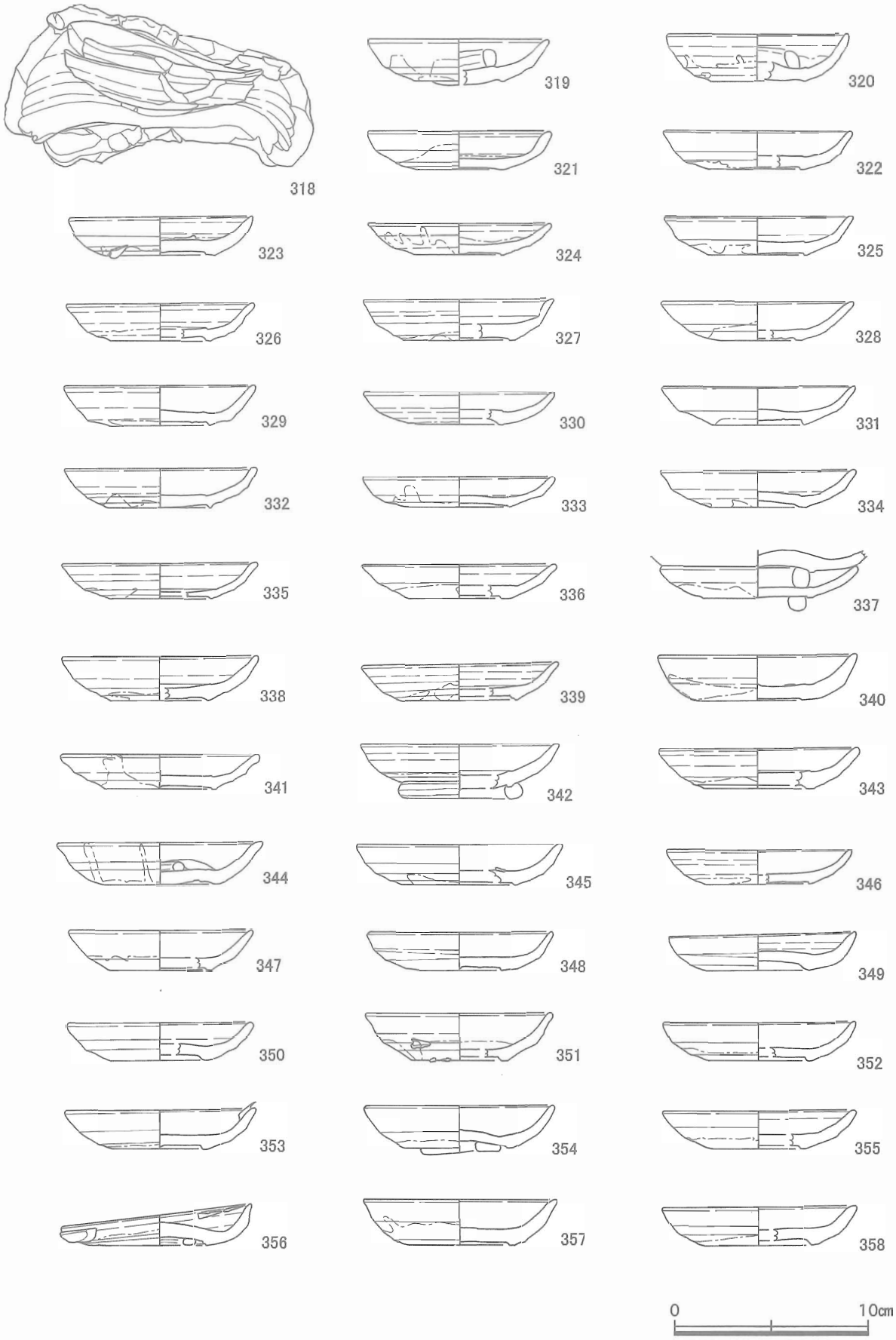
第17図　出土遺物８（丸皿４）



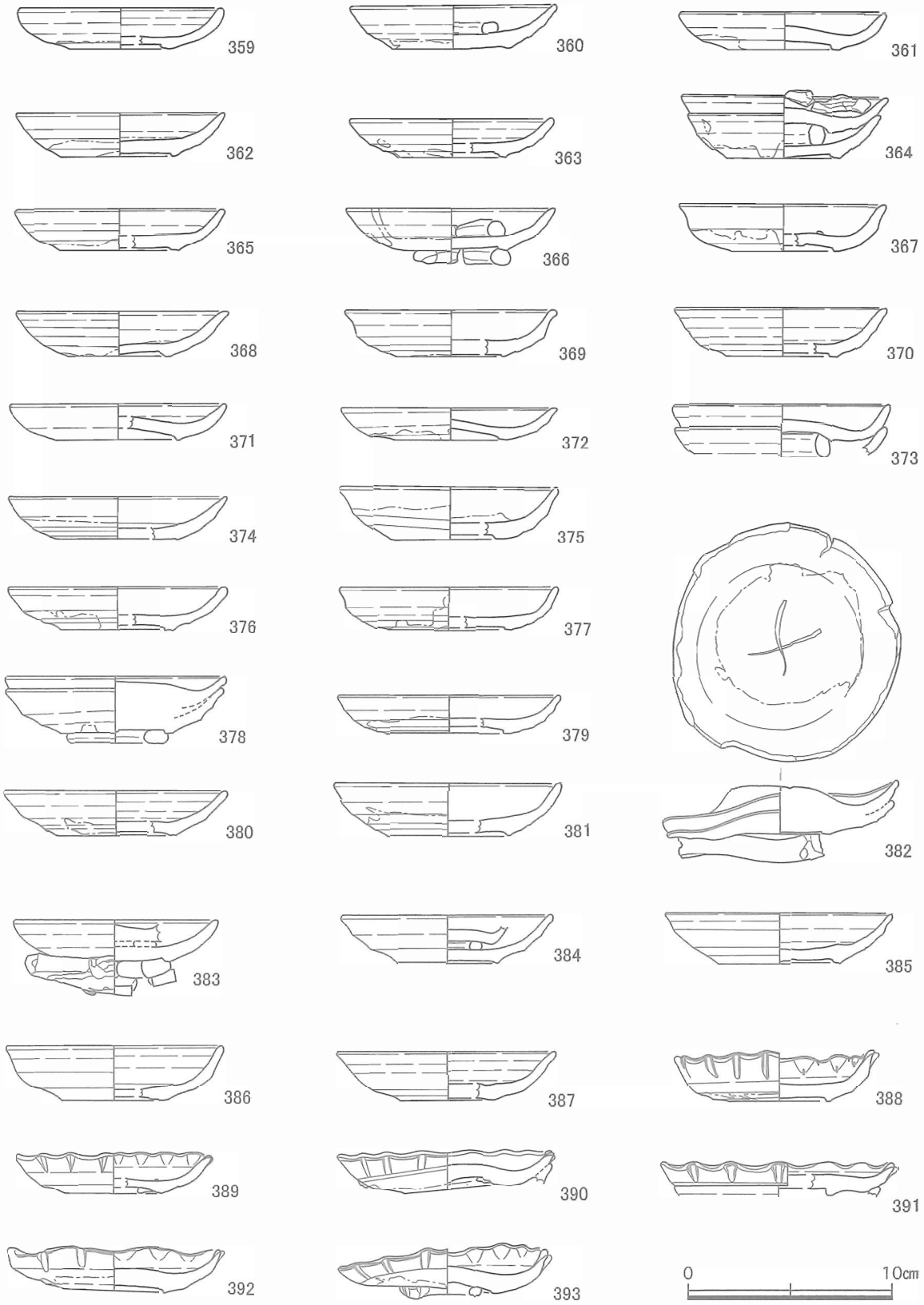
第18図　出土遺物９（丸皿５）



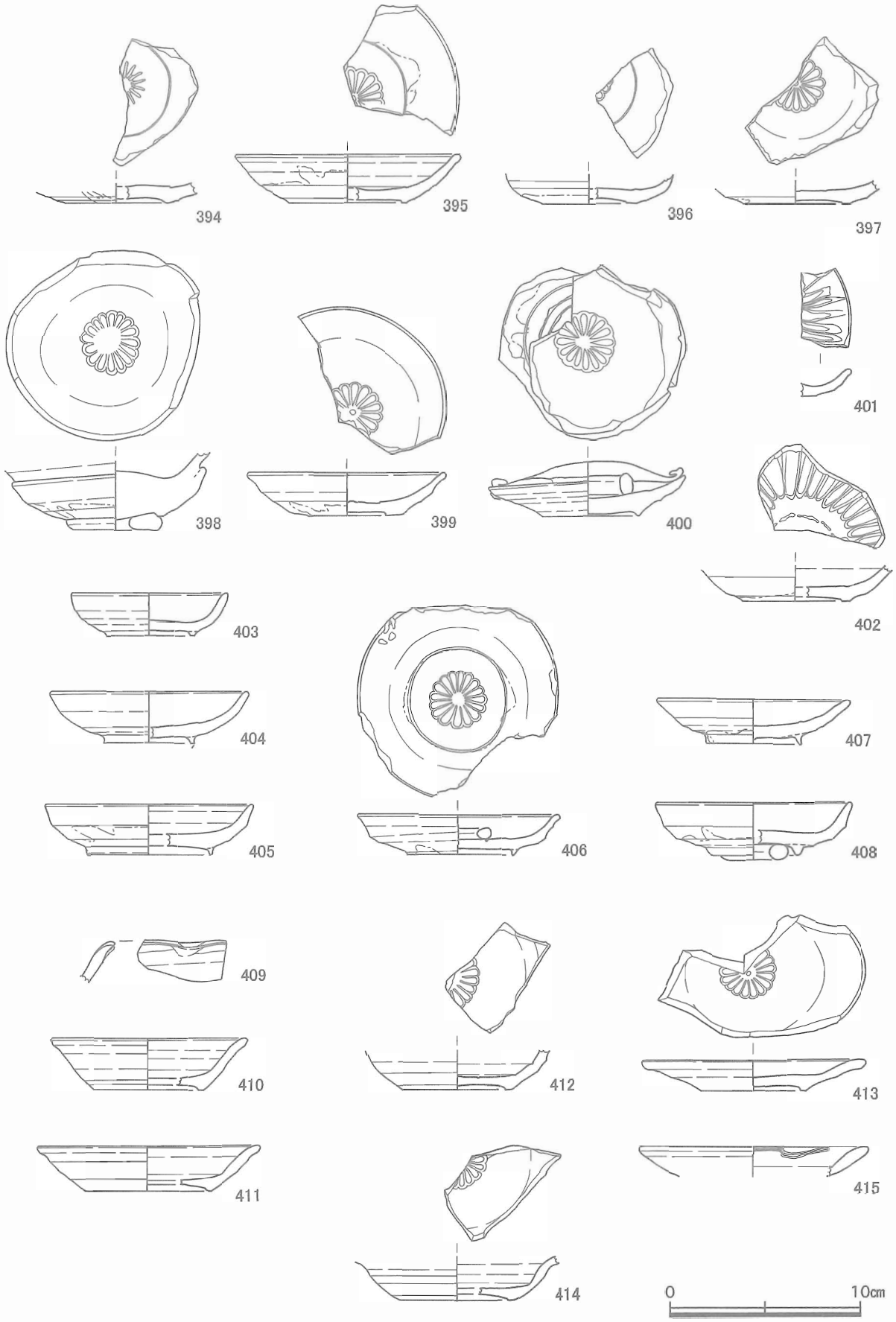
第19図　出土遺物10(丸皿６)



第20図　出土遺物11(丸皿７)



第21図　出土遺物12(丸皿８・襞皿)



第22図　出土遺物13(丸皿９・稜皿・稜花皿)

ノミ状の工具を用いて幅5～7㎜程度の樋状の凹みを連続して刻んでいる。

灯明皿(385～387)　灯明皿は無釉(385・387)あるいはごく薄い錆釉を掛ける(386)。385・386は丸皿Ⅱ類の形態をもつ。386の見込みにはコテの押圧による細い突線が巡る。385は丸皿に比べヘラケズリが大胆かつ粗雑である。387は糸切り未調整の皿である。385・387の見込みには底部と同径の変色部があるので、同種を直接重ねて焼成したとみられる。

襞皿(388～393)　襞皿は、丸皿Ⅱ類の口縁部を襞状に作り出すもので、生産は少量である。施釉の流儀は丸皿Ⅱ類と同様で、ほぼ全てに灰釉が用いられる。内面すべてに釉を掛けるものが多く(388・390～393)、内禿にするものは少ない(389)。

襞の成形は、口縁部内側に2本の指をあてがい、その間の外側を幅5㎜前後の面をもつ角張った棒状工具で強く押さえることにより内側へ折り曲げる。この方法を繰り返すことにより、口縁部に連続する襞を作り出している。

焼成は、内面すべてに釉がかかるものは、390・391に丸皿Ⅱ類の口縁部が溶着することから、底部に輪ドチを挟んで丸皿Ⅱ類の重ね焼きの最上部に置かれたとみられる。内禿とする389は、重ねられたものが溶着しないので判然としないが、襞皿同士が重ねられる例が見えないことからも、同様に丸皿と混ぜて匣鉢詰された可能性がある。

稜皿(409～414)　稜皿も、襞皿などと同様に出土量が少ないため、生産は少量であったと考えられる。

調整は、丸皿Ⅱ類と同様に体部以上を成形した後、回転糸切りで切り離し、反転させて体部の半ばから底部にかけて回転ヘラケズリを施す手順で行われる。高台は、この際に削り込まれる。釉は全面に薄い錆釉が施される。溶着防止か、414の見込み部分は他の部分に比べて薄く掛けられている。乾燥は、乾燥台や粗朶上で行われたとみられ、413の高台端部には小さな粗朶の圧痕が残されている。見込み中央には、型による菊花文が付けられる。欠損して全体の状況は判然としないが、16弁と考えられる。

焼成は、412の体部外面と413の見込み部分に輪ドチ痕が観察されるので、複数枚が匣鉢の中に重ねられて行われていたとみられる。

なお、409は体部のケズリが判然とせず、釉も錆釉を用いるものの、外面の一部が掛けられていない。口縁部の一部は、片口状に外側へなだらかに折り曲げられている。稜皿でない可能性があるが、便宜的にここに含めた。

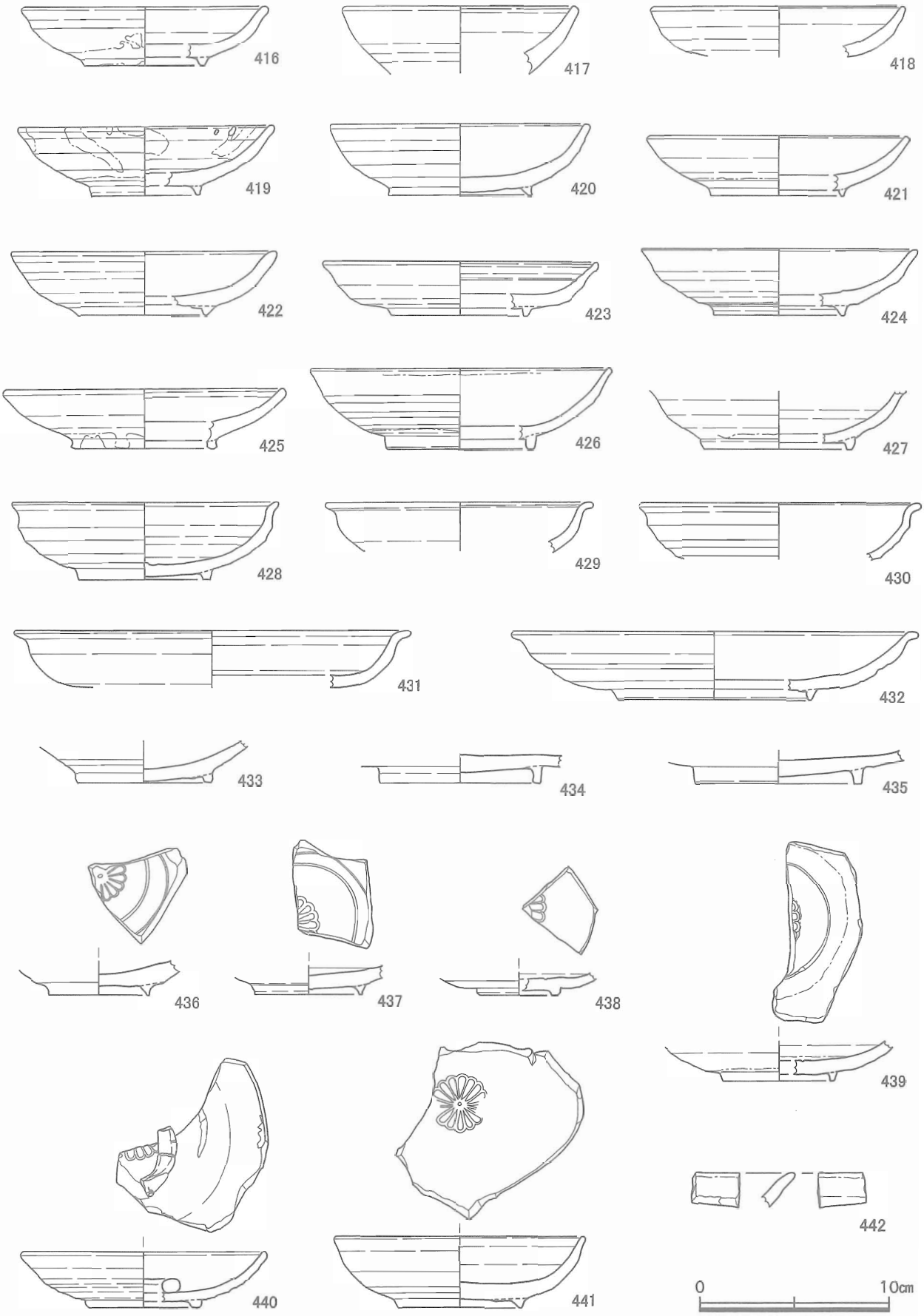
稜花皿(415)　稜花皿は1点のみ出土している。口縁部内側に、先端の細い工具を用いて2条の細い沈線を波状に巡らせている。釉は灰釉を用いるが、外面体部過半以下は露胎のようである。

中皿(416～442)　出土量はあまり多くはない。口縁部が内湾するもの(Ⅰ類)と、外反するもの(Ⅱ類)があり、Ⅰ類がやや多い。Ⅱ類は口縁部直下から急激に外反させるので、上から見ると口縁部が平坦なつばのようにみえる。口径は12～14cm台が一般的であるが、16cm以上となるもの(426・431・432)も少量ある。釉はⅠ類では灰釉が多く、Ⅱ類では錆釉が灰釉の倍程度使われる。

成形はロクロ上で行い、回転糸切りで切り離し、逆転させて体部の上半から底部にかけて回転ヘラケズリを施して整え、高台を貼り付ける手順で行われる。高台の形態は、大きく分けて次の3種類がある。

端部がやや丸みをもつ矩形～ゆるい直角三角形状の断面形を呈するもの(a：416・420・422・427・342・433・440・441)は、高台を貼り付ける際に高台内部へ粘土を寄せ付けるので、ケズリによって整形された面との間に蛇の目状の段差を生じることがある。

焼成は、匣鉢860の底面に口縁が溶着することから、基本的には直径20cm程度のやや大きめな匣鉢に込められて焼かれたものと考えられる。441の底部外面には輪ドチ痕が残り高台端部に溶着痕がなく、灰釉を掛けるもの(416・422・427・433・441)も錆釉のもの(420・440)も内面すべてに施釉するので、下位に輪ドチを挟んだ1枚焼きであったろう。しかしなぜか440の見込みには輪ドチと中皿の高台が溶



第23図　出土遺物14(中皿)

写真５　614内面の溶着痕

写真６　桶底部の溶着痕

着している。匣鉢に収められる以外では、溶着痕から鉢の中に入れ子にされる例(614　写真５)、伏せ焼きされる桶の底部に置かれる例(写真６)、匣鉢蓋上に置かれたとみられる例(863・864・874)が窺える。なお、418は高台が残存していないが、見込み部分まで釉がかかるのでこの類と考えられる。

細長い二等辺三角形状の断面形を呈するもの(b：419・421・423～425・436・437・439)では、aにみられる段差は著しくない。この類の高台をもつものは、基本的には見込み部分に釉を掛けない。

419・424・436・347・439では見込み部分に高台の溶着痕があるので、この高台は重ね焼きの際の接地面を少なくし溶着する可能性を低減して生産効率を増加させる目的で作られているといえる。これらの中には大ぶりなものは含まれず、いずれも複数枚が匣鉢内あるいは裸焼きされたものとみられる。見込み中央に型による菊花文を施すもの(436・437・439)は、重ね焼きの高台が当たる部分だけ釉を拭き取る。また、419・436・437・439は見込みの外縁に、丸皿と同様なわずかな段を設けている。

長方形ないし台形状の断面形状をもつもの(C：426・428・434・435)は、高台接合部の調整を意識しているようで、434・435などは高台内部中央まで丁寧にナデられる。錆釉のもの(428・434・435)は、高台内側まで含めて釉を総がけする。

434・435は高台端部に溶着痕があり、428には目立った溶着痕はない。錆釉を施す428・435の内面には窯壁に起因すると思われる微細な付着物が認められるので、匣鉢蓋の上に乗せられて焼成されたとみられる。一方灰釉のもの(426)は、高台周辺と口唇部を除いて施釉する。高台端部に溶着痕はないが口唇部に認められるため、伏せ焼きされたものとみられる。同様に口禿にする口縁部片442は、色調と調整の類似点から426と同一個体の可能性が高い。

Ⅱ類の口縁～体部片である429～431は鋭く口縁を折り曲げている。431は内禿ではないので、高台aが取り付くものと考えたい。429・430は体部途中までだが、高台aあるいは高台bが付くのであろう。また、431の口唇部には溶着痕が残されており、伏せ焼きされたとみられる。

このように、Ⅰ類・Ⅱ類ともに高台a～cの各々を備える可能性がある。

433の高台端部には粗染痕が、441には板による圧痕がわずかについている。これらは他と同様に乾燥台の痕跡とみられる。

438は内面すべてに灰釉を掛ける皿である。見込み中央には、菊花文が型押しされる。他に比べれば薄手で、高台も削り出しによる矩形の断面形状をもつので、最も新しい段階の丸皿Ⅰ類の可能性がある。

(４)盤類　盤類には向付と鉢、大皿がある。いずれの器種も鉄釉系の釉を普遍的に掛けている。量が比較的多いのは向付と大皿で、特に向付は法量や形態にいくつかのバリエーションがあり興味深い。

向付(458～478)　向付は、口縁部を直立させる皿状のもの(Ⅰ類：458～473・478)と、碗形あるいは鉢形を呈するもの(Ⅱ類：474～477)に大別される。定形化されたⅠ類が多く、Ⅱ類は少量である。

Ⅰ類の向付には、口径が10cm以下の極小なもの、10cm程度の小ぶりなもの、13cm以上となる大振りなものとおよそ三つの法量がある。462は極小なもので、錆釉を全面に施している。底部は回転糸切痕が残り、ヘラケズリは一切施さない。中心部には断面形がおよそ4㎜四方の串を用いて、深さ8㎜ほどの穴があけられている。やや乾燥した状態であけられたようで、角からひびが生じる。見込み部分には螺旋状のノタメが著しい。破片資料には付け高台のものや削り込み高台のものもみられるが、いずれも出土量が極めて少なく、極小なものは限定的な生産であったと窺える。

463～473は小ぶりなもので、Ⅰ類の主体をなす。調整は、ロクロ上で成形した後に回転糸切りで切り離して逆転させ、体部から高台までを回転ヘラケズリで整えながら高台を削り込む手順でなされる。ヘラケズリは腰部のくびれ以上には施さない。底部の整形は丸皿Ⅱ類に近似するので、この部分だけの破片であるとどちらであるのか判別が難しい。

釉は主に錆釉であるが、471・472のように総量の1割程度に灰釉が用いられおり、多くは口唇部を除いて口縁部外側から内面に施される口禿となる。この施釉範囲は、ずれて溶着してしまっている例(472)からも、重ね焼きの溶着防止が目的と考えられる。472下位の口縁部直下にも、下に重ねられた同形の口縁部による溶着痕が残されるため、3枚程度が重ねられて、匣鉢の中で焼成されたのだろう。464のように、最下位の底面には匣鉢との溶着防止の輪ドチを挟んでいる。

大ぶりなものは、削り込み高台の場合と付け高台を備える場合がある。口径16cm以上のものに削り込み高台が、それ以下に付け高台がみられる。

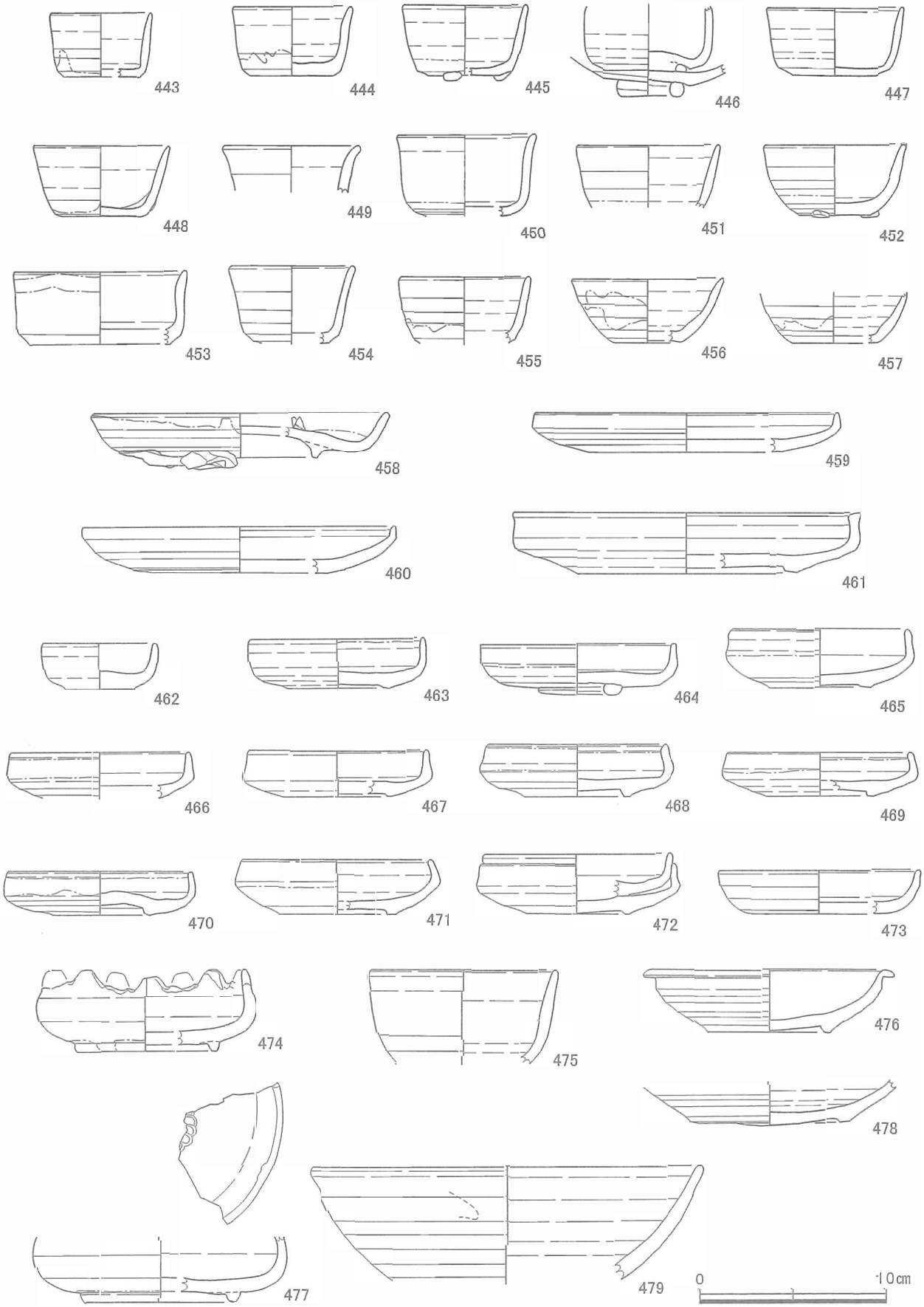
削りこみ高台をもつもののうち、461は小ぶりなものをスケールアップしたような形状を呈する。整形は同様な方法でなされているが、口唇部は肥厚して上位に平坦面を設けている。施釉される範囲も同様であるが、見込みを中心に荒く拭き取られる。478は底部片であるが、同様な形態と思われる。錆釉を総がけしており、内面は拭き取られない。459・460も同様な方法で整形されるが、口縁部の折り返しが短く端部も小さくまとめられる上、錆釉を内面すべてにかけるので、461とは異なった印象を与える。

焼成は、478の内面に窯壁に起因する細かな付着物が多くみられるので、一部は匣鉢蓋の上に置かれて焼かれたものと考えられる。ただし、口径20cm前後の匣鉢が確認されているので、匣鉢詰されて行われた可能性も排除できない。

付け高台はⅠ類・Ⅱ類にある(458・475・477)。体部から底部までをヘラケズリした後に、高台を貼り付ける。高台の形状は端部がやや丸みをもつ矩形～ゆるい直角三角形状の断面形を呈するものであり、内面に蛇の目状の段差を生じている点など、中皿のものと類似する。実測個体以外には、重ね焼きを指向したとみられる細長い二等辺三角形状の断面形を呈するものも若干量見受けられる。釉は灰釉が主体であり、内側全面と外面は高台際まで掛けられる。477の見込み中央には、型による菊花文が施される。

写真7　476外面の溶着痕

Ⅱ類の向付は出土量が少ない。474の口縁は、一部を切り取って連続する鋸歯状に細工されている。さらに垂直に立ち上がる体部半ばから口唇部を平らに延ばして、隅丸方形の箱状にしつらえている。このような細工の向付はこのⅠ点しか確認できなかった。475は口のすぼまる碗形を呈するものである。体部の半ば以下に回転ヘラケズリを段状に施す。焼成不良であり肌色味を帯びているが、無釉であることからも本来はつややかな褐色の地肌をねらった焼締であることがわかる。476は錆釉を全面に施釉する鉢形を呈するものである。高台は削り込み高台で、



第24図　出土遺物15(小杯・向付・鉢)

Ⅰ類のそれよりも深くなされる。体部のケズリは口縁部直下まで施され、口唇部は水平に外側へ挽き出される。体部外面に下位に重ねられたものの口縁部と思われる溶着痕が認められる(写真7)。高台内部には窯道具の痕が認められない上、溶着痕が向付Ⅰ類の口径に合致することから、向付Ⅰ類に重ねられて焼かれたものと考えられる。

鉢(479・613～615)　鉢には碗形のもの、大型で端反のもの、大型で丸い体部をもつもの、皿状のものなどいくつかの形態がある。収まる匣鉢が見当たらないことから、いずれも裸焼きされているのだろう。

479は碗状のものである。ロクロ上でナデ整形した後に、口唇部から1.5cm程度下までの体部を回転ヘラ削りで整えている。釉は錆釉を用い、残存部分全体に掛けている。

613は大型で端反のものである。釉はやや光沢のある錆釉を用い、残存部分全体に掛けている。

614は皿状のものである。器面が厚いので、上方に挽き上げられた後に、口縁部は端反になると想定される。ロクロ上で整形された後に底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリを施す。釉は、錆釉を総がけする。底部外縁に溶着痕が残されるので、匣鉢上に置かれて焼成されたものとみられる。内面中央部には円形の溶着痕と、この内側に溶着痕が同心円状に平行して付着する。外側の溶着痕は中皿の高台形と一致しているので、高台内に輪ドチを挟んだ中皿が、入れ子状にされて焼かれているものと考えられる。

615は大型で丸い体部をもつものである。接合しない同一個体の破片から、あと1cm程度で口唇部にいたると考えられる。調整は、円板状の底部に高さ5cm程度ごとに輪積みで体部を接合して成形し、外面の底部から体部上端までと内面の見込み付近を回転ヘラ削りで整える手順で行われる。釉は施されず、焼締となる。

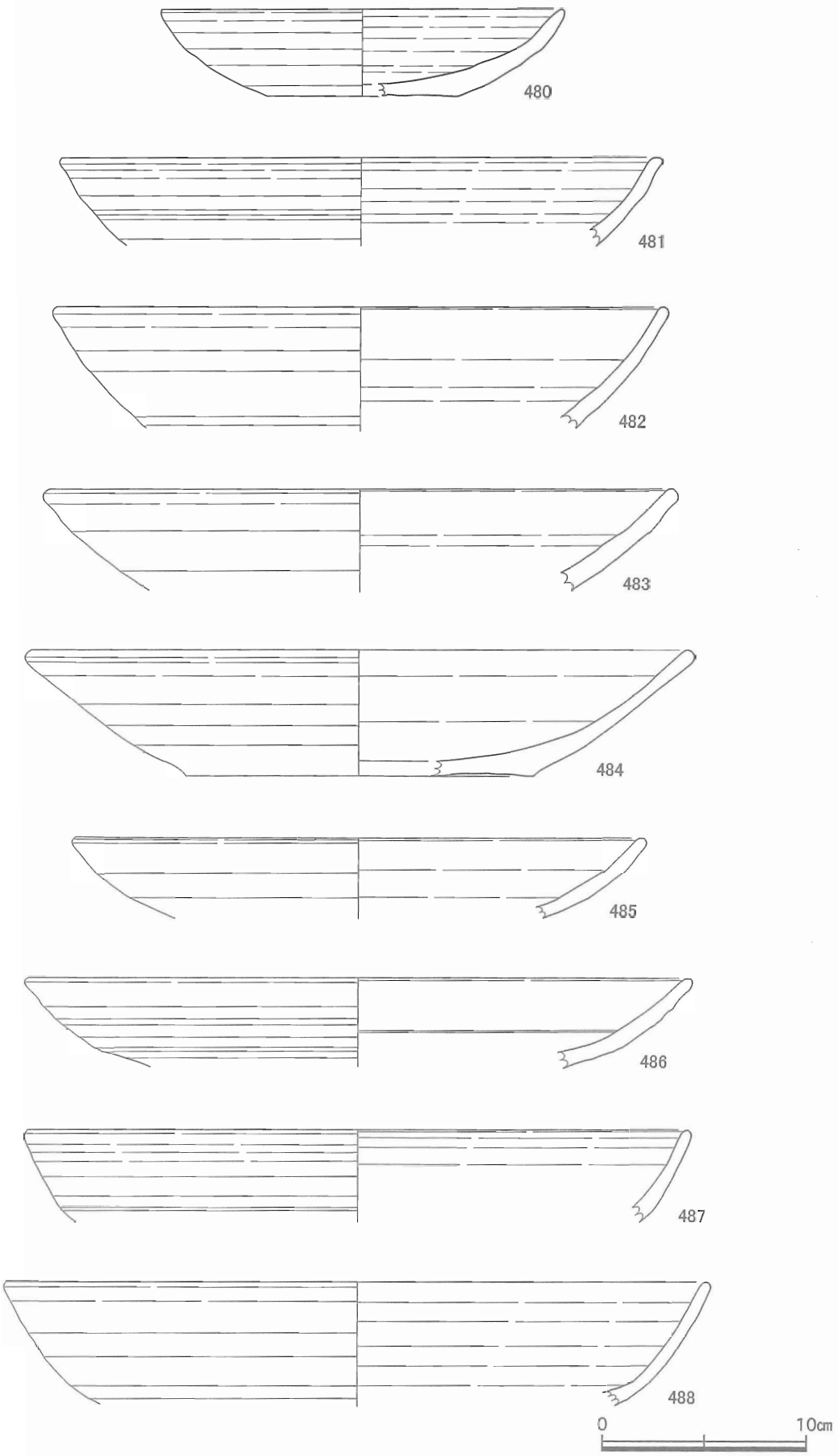
大皿(480～498)　平底のもの(Ⅰ類)と付け高台をもつもの(Ⅱ類)がある。Ⅱ類は底部片すべてのうち図化された498のⅠ点のみと極少量であるので、底部と接合しなかった口縁部片についても多くはⅠ類のものと推測される。口縁部の形態には内湾するもの(480～489)と端反のもの(490～492)があり、それぞれに口唇部の釉を拭き取る口禿のもの(485～489・492)が認められる。底部から口縁部までの形状が把握できる資料は少ないが、およそ同時期の瀬戸・美濃大窯出土遺物の事例からも、口縁部のつくりと底部のつくりは固定的な関係にはなかったと考えたい。

調整は、底部となる円板上に体部を輪積みしてロクロ上で整えた後切り離し、底部から口縁部直下までを回転ヘラケズリする手順でなされる。口唇部は内湾・端反のいずれでも、丁寧に丸く収めている。

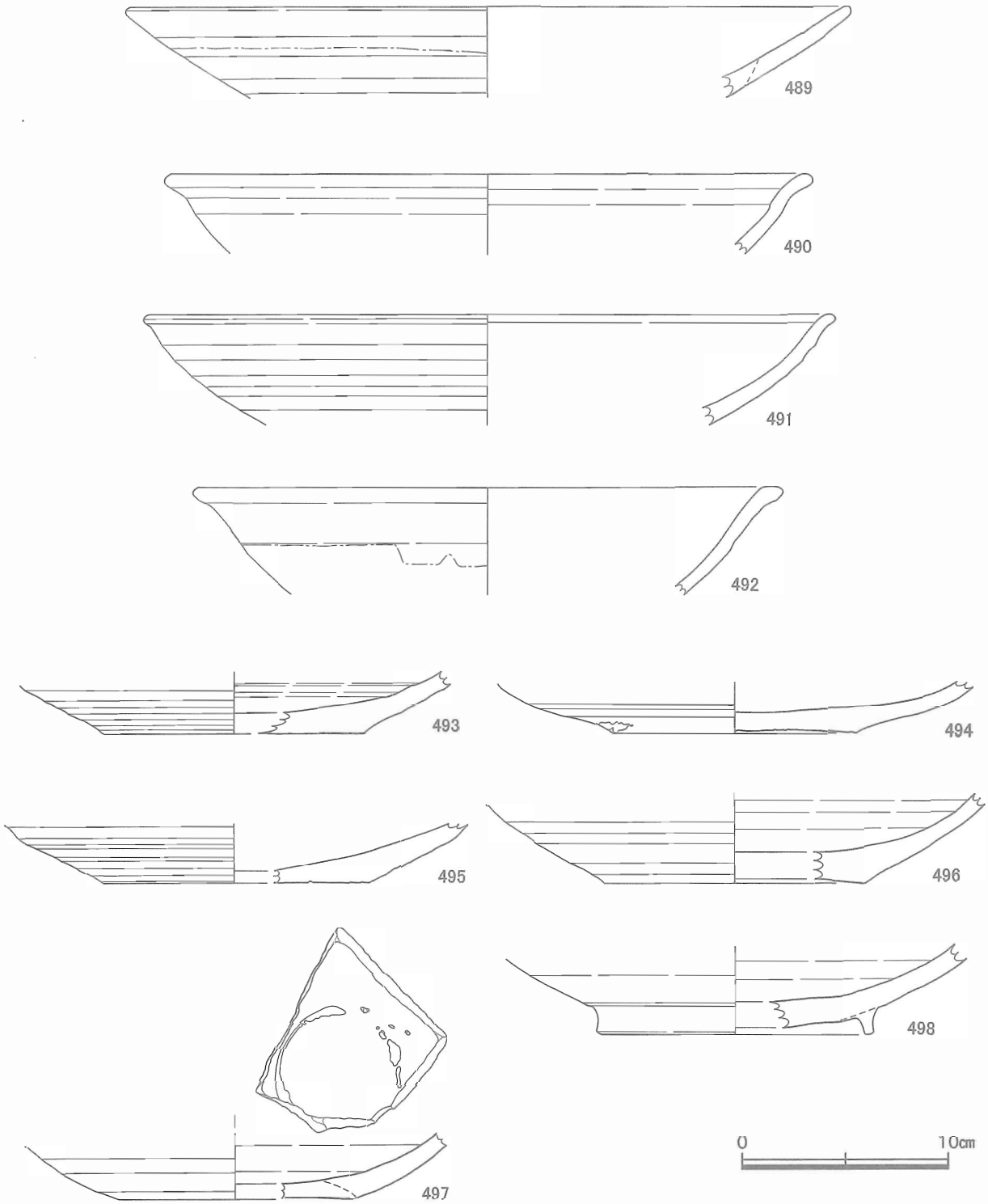
釉は錆釉を施すものが主体となる。錆釉は擂鉢と同種のもので、かすれたものを用いる例(481・483～485・488・490・491・494・495)が多いが、光沢をもつ例(482・493・498)も認められる。489・492の釉は厚く掛かるが、発泡して浅黄色～淡黄色を呈する。光沢のある錆釉であったのだろうか。釉は、全面に施されるもの(489・493)や、内面のみで外面には施さないもの(495)、口禿で体部上半の内外面にのみ施すもの(485・488・489・492)などがある。498の施釉範囲からすれば、体部上半の内外面にのみ施すものの一部はⅡ類である可能性も考えられる。

釉を施さない焼締のもの(480・496)もあるが、釉を施すものに比べやや軟質に焼き上げられている。器面が褐色になることを狙っているのであろうか。

焼成は、Ⅰ類・Ⅱ類ともに入る大きさの匣鉢が見当たらないので、裸焼きされたものとみられる。口唇端部に連続する溶着痕を伴うもの(484・492)は、伏せて焼かれた可能性がある。この方法は、釉を総がけするものや口禿のものに用いられている。一方、Ⅰ類でも見込みの一部(3箇所程度か)に釉を掛けない例(494・495)がある。破片資料には、この部分に直径2cm程度の粘土トチンを置く事例や、底部にこれらを叩き落した痕跡を残すものがあるので、粘土トチンを挟んで同規格のものを重ね焼きしているのだろう。この方法は、外面に釉を施さないものや焼締のもので多くみられる。口縁部外面に溶着痕を



第25図　出土遺物16(大皿１)



第26図　出土遺物17(大皿２)

もつ場合(482)も、重ね焼きがずれて下位のものと接したことを示しているのだろう。また、497の内部には高台の溶着痕が残される。この高台痕は、中皿の一部(419・436・437・439・440)と同じ直径をもつので、比較的小ぶりな中皿を重ねたものとみられる。痕跡は中心から外れているが、同規格の中皿を複数枚置くには無理のある位置なので、耳付水注や水滴などより小ぶりな器種を並べ置いたと察せられる。また、493の見込みには直径１cm前後の小さな粘土トチンが置かれている。ここにも小型製品が置かれて焼成されたのだろう。

Ⅱ類は498で、Ⅰ類と同様な整形がなされた後に高台を貼り付ける。高台の貼り付けは丁寧で、内面

は貼り付けに伴う部分のみが1㎝程度の幅でナデられる。体部との接合部は、細い串状の工具でナデられ、両者の境を明瞭にしている。釉は極薄い錆釉を体部内外面に掛けているようである。内面底部と高台内部は露胎で、内面底部には同規格の大皿の高台痕が残されるので、重ね焼きの溶着を防止するために釉を施さないものと判断される。

(5)神仏具　神仏具には筒形香炉と花瓶がある。筒形香炉は三足の高台を付けるものが主体で、大小さまざまな大きさがある。使用される釉薬は灰釉・鉄釉・錆釉であるが、錆釉は限定的である。花瓶は尊式花瓶である。

筒形香炉(499～516・518)　筒形香炉は、三足の高台を付けるもの(Ⅰ類：499・500・503・505～507・509・510・514・515)と、輪高台のもの(Ⅱ類：516)がある。量はⅠ類が圧倒的に多く、口縁部には、肥厚するものと滑らかに内湾する2種があるが、前者の量が多く主体的な形であったと考えられる。

調整は、Ⅰ類ではロクロ上で筒状に体部を成形して口縁部を整え、糸切り後逆転させ底面を回転ヘラケズリで整える手順で行われる。底面の中心部は、回転ヘラ削りの過程でさらに深く削りこまれて、深さ3～4㎜程度の円錐台状となる場合(505・506・515)や、深さ2㎜前後の滑らかな円錐状になる場合(499・500・514)がある。また腰部には、やや体部の傾きに近づけたケズリを施して面取りする場合(500・503・505～507・512)がある。この面取りを施さない499・509・510・514などは、腰部はやわらかな曲線を描く場合が多い。一方三足は、断面を矩形に整えた長さ1.5㎝程度の粘土紐を置いて、その両端を強く押さえることにより形作られている。

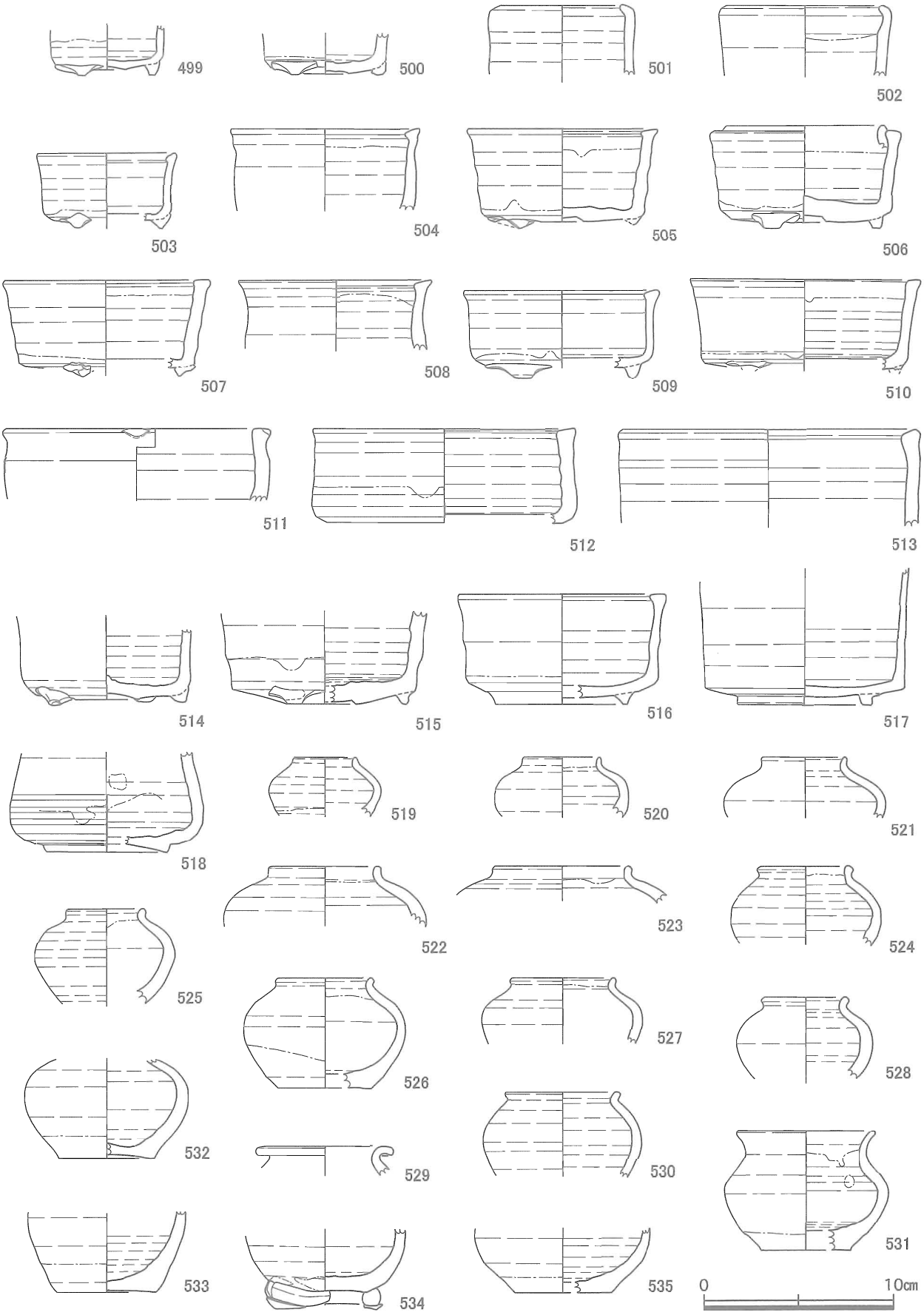
口縁部の処理にはいくつかの方法がある。内湾するもの(501・502)は少量である。肥厚するものはいずれも口唇端部に平坦面をつくるが、さらに内外面に突起状の縁を張り出させるもの(503～509)、外面に張り出すだけのもの(510～512)、いずれの張り出しも弱いもの(513)などがある。また、511の口唇部外側には軽く押さえられたくぼみが付く。

Ⅱ類の調整は、基本的にはⅠ類と同様な過程を経ているが、516の底部外側は次第に反り返るように削られて、三足を取り付けても足よりも底部中心が突出することになる。したがって、Ⅰ類・Ⅱ類の作り分けは製作途上での製作者の選択によるものではなく、各々を製作することを目的に当初から調整することがわかる。高台は底部の削りの後に貼り付けられる。高台の断面形態は先端のややとがる矩形を呈する。516では底部の中心は高台の内側に隠れることになり、Ⅰ類に施される穴は見当たらない。口唇端部には平坦面を設けるが、内面にのみ突起状の縁を張り出させる。

釉は、鉄釉と灰釉が主に用いられるが、頻度は灰釉が多い。特に小型品に灰釉が頻繁に用いられる傾向がある。多くは外面の体部末端以上から内面の口縁部直下に施されるが、511～513は口禿となる。499・502・504・506・508にみる灰釉は、丸皿に用いられるものと同等で、鮮やかに発色している。一方で、鉄釉は厚く掛けられよく発色するもの(511・512・515)もあるが、錆釉を薄くかけるもの(509・514)もある。特に釉の薄い509は、焼締風の焼き上がりを見せる。浅黄色を呈するもの(505・507・510・513)などは、鉄釉が発泡したために発色し得なかったものだろう。

焼成は、香炉の入る大きさの匣鉢が存在するので、多くは匣鉢に込められたと考えられるが、窯壁に起因すると思われる付着物がつく503の例からも、匣鉢蓋の上に乗せられるものもあったようである。底部外面中央付近に溶着痕のある514は、輪ドチが挟まれていたのであろうが、多くは三足の高台端部を欠損するので、そのまま据えられていたのだろう。また、506は口唇部内側に異なる器種(小杯か)の口縁部が溶着する。間口に入るより小さな器種を、入れ子にして焼成している。一方、口禿にするより大型のものには、いずれも口唇端部に溶着痕がある。匣鉢蓋上に伏せられて焼かれたとみられる。

518はこれまでの香炉とはいささか作りの異なるものである。ロクロ上で整形した後糸切りで切り離



第27図　出土遺物18(筒形香炉・小壺)

し、底部の縁を回転ヘラ削りであたって高台を削り出している。高台内部には糸切り痕が残存するので、糸切りによって自然と窪んだ部分を残しながら内反り高台風に仕上げているのだろう。また、体部の半ばから下端にかけてもヘラ削りによって整えている。灰釉のかかる範囲は他の香炉と同等であるので今回はこれも香炉と考えた。

花瓶(616・617)　花瓶は、小型のもの(616)と大型のもの(617)が把握された。いずれも尊式花瓶の形態と思われる。

616は頸部から口唇部の破片である。外面は平滑であるが、内面はノタメが激しく、強く搾り込まれた様を呈する。ちょうど体部との境で割れているので、ここで体部と接合されているとみられる。全体に錆釉を掛けるが、外面の一部はまだらとなり、釉のかからない部分がある。焼成は裸焼きで行われており、内面には窯壁に起因する付着物が多く見られる。また、口縁部の割れ口にも付着物があるので、焼成中に何らかの要因で割れてしまったのだろう。

617は脚部の破片である。体部との境となる割れ口には、ヘラ状の工具で刻む幅1㎜程度の筋がいくつか付くので、別に作成した体部に接合したものと考えられる。整形はロクロ上で行われた後、端部を除く外面のみを回転ヘラ削りで整えている。釉は錆釉が外面全体と内面の末端より一部に掛けられている。外側に引き出されて平らな面をもつ接地面は、溶着防止のため釉が掛けられない。この個体は高さ40㎝前後の大型品であり、仏式の飾りつけの際に対で使用される特注品なのだろう。

(6)壺甕類　壺甕類には小壺、短頸壺蓋、短頸壺、耳付水注、徳利、小瓶、広口壺、建水、甕、桶、茶壺がある。

小壺(519～535)　小壺には、口縁部を小さく上に引き上げ端部を丸く仕上げるもの(Ⅰ類：519～528・530)と、大きく挽き出すもの(Ⅱ類：529・531)の2種がある。

調整はロクロ上でなされ、口唇部まで成形した後に回転糸切りで切り離される。外面にヘラケズリは施されず、糸切り痕もそのまま残される。

Ⅰ類は最大径が体部上半にある丸いもので、口縁は垂直方向からやや外側に小さく挽き出される。おそらく大海茶入れをモデルにしているのだろう。

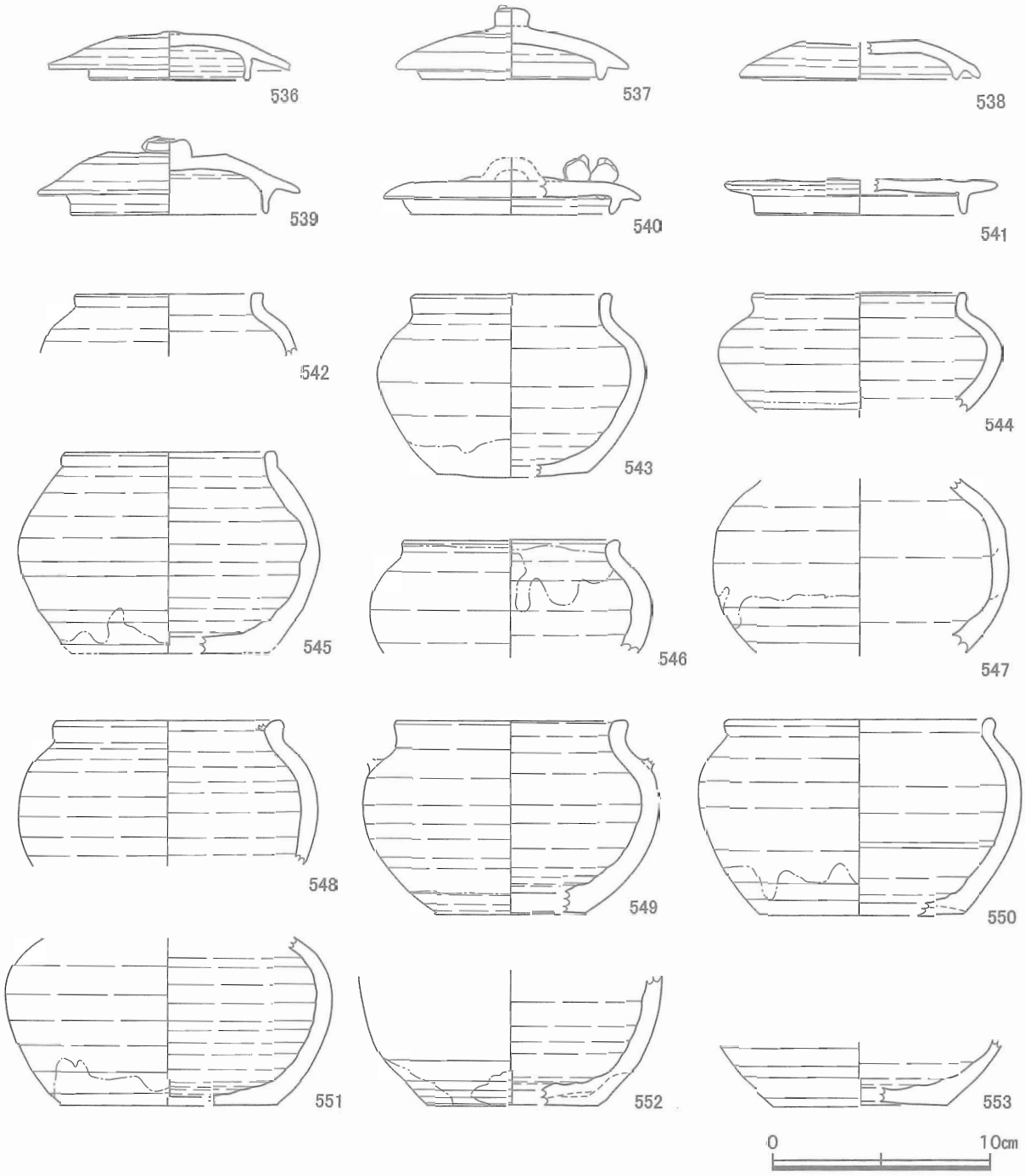
Ⅱ類の口縁は体部から外側へ大きく、滑らかかつ奔放に挽き出される。529は水平方向に大きく広がるが、口縁部に溶着痕がある上、口縁に平行する小さなひびが観察されるので、531と同様な口縁が焼成中に下方に垂れたのだろう。Ⅰ類とⅡ類では口縁部にいたる体部上半のカーブが異なっているので、それぞれは最初から造り分けられているといえる。

釉は主に灰釉と鉄釉を用いており、やや鉄釉の頻度が多いように感じられる。灰釉は丸皿に用いられるものと同質で、透明感のある鮮やかなオリーブ色に発色する。鉄釉は深みのある漆黒に発色するものが多いが、中には526のように褐色味の強いものもある。また、529のみが錆釉となる。施釉範囲は、外面では底部から1～1.5㎝程度上がった位置から口縁部までとなり、内面は口縁部の内側で止まる。

焼成は、534のように底部に輪ドチを挟んで行われている例がある一方で、溶着痕が見られない532や匣鉢蓋に溶着する例(870)から、そのまま置かれる場合もあったようである。また内面底部のいずれにも自然釉が頻繁に付着したり、519・520・526・532・534のように外面に窯壁に起因する付着物が付いているので、870のように匣鉢蓋上に置かれて裸焼きされるのが常であったと考えられる。

短頸壺蓋(536～541)　蓋は短頸壺の口縁内側にはまるもので、頂部につまみをもつ。537・540の2点のみが上志戸呂古窯に伴うものとみられる。

整形は、ロクロ上で皿状に作った身に返りをつけて逆転させ、頂部を回転ヘラケズリした後につまみを貼り付ける。逆転した際にはロクロ上に置かれた円柱状の粘土に据えられたとみえ、ナデ痕が荒れる



第28図　出土遺物19(短頸壺蓋・短頸壺)

部分が直径5.5cm前後の環状に、返りに平行して観察される。つまみは、頭のつぶれた宝珠状のもの(537)、粘土紐の中心を浮かせて耳状に作るもの(540)がある。

釉は灰釉を施している。いずれも透明感のある鮮やかなオリーブ色に発色する。施釉は頂部のみになされ、内面には基本的に施されない。18世紀の蓋には一部鉄釉が利用される。

焼成は、短頸壺に記すように、短頸壺の口縁に掛けられた状態でなされている。540は返しの外側に短頸壺の口縁による溶着痕がみられる。いずれにも裸焼きされた際に窯壁からもたらされた付着物が付いている。

なお、537・540以外の4点は、539・541は形状、536・538は釉調や露胎部分の色調などから18世紀代の蓋物に付随するものだろう。ここでは641など広口壺の蓋として利用されていたものと考えられる。

短頸壺(542～553)　短頸壺は、短く挽き出された口縁部をもつずんぐりとした広口の壺である。

調整は、底部となる円板上に体部を輪積みした後切り離し、逆さにして底部から体部半ばまでを回転ヘラ削りで整える手順で行われる。体部から口縁部まではなだらかな曲線で構成される。口縁部は垂直気味に立ち上げられ、口唇部は端部がやや平坦気味ではあるものの、総じて丸みを帯びる。内面には、ロクロ上でのナデの際に付いたノタメが強く残る。549は体部上半に小さな縦耳を付けるものである。ごく限定的な生産であったようで、このような例は他に見られない。

釉は、主に灰釉を用いている。鉄釉は極少量に用いられていたことが報告されており(柴垣1991)、今回も2破片が見出された。施釉範囲は、外面では底部から1～2㎝程度上がった位置から口縁部外面までとなる。内面は基本的には無釉であるが、口縁下位から体部上半に施釉される場合もある。したがって、口唇端部は露胎であり口禿となる。灰釉は丸皿に用いられるものと同質で、透明感のある鮮やかなオリーブ色に発色する。

焼成は、短頸壺自体が匣鉢詰される大きさでなく、裸焼きによってなされる。545・547などに窯壁に起因する付着物が付いている。口唇端部の多くには溶着痕があり、548の口縁内部には蓋の返りが付いているので、蓋をかぶせて焼かれているものとみられる。また、545・553の内面底部には4～5㎝程度の底部の痕跡と思われる溶着痕が残される。小杯などの小型製品を入れ子にして焼いているのだろう。545・550～552の内面底部には、微量の灰釉が細かな粒状に付着している。蓋を掛けて焼いていることや、545では入れ子のされた小型製品の底部で隠れる位置にまで付着することから、自然釉ではないのだろう。何らかの要因で施釉途中に飛び散ったものと考えておきたい。

耳付水注(557～566)　耳付水注は小壺に似た大きさであり、出土量も同様に少ない。

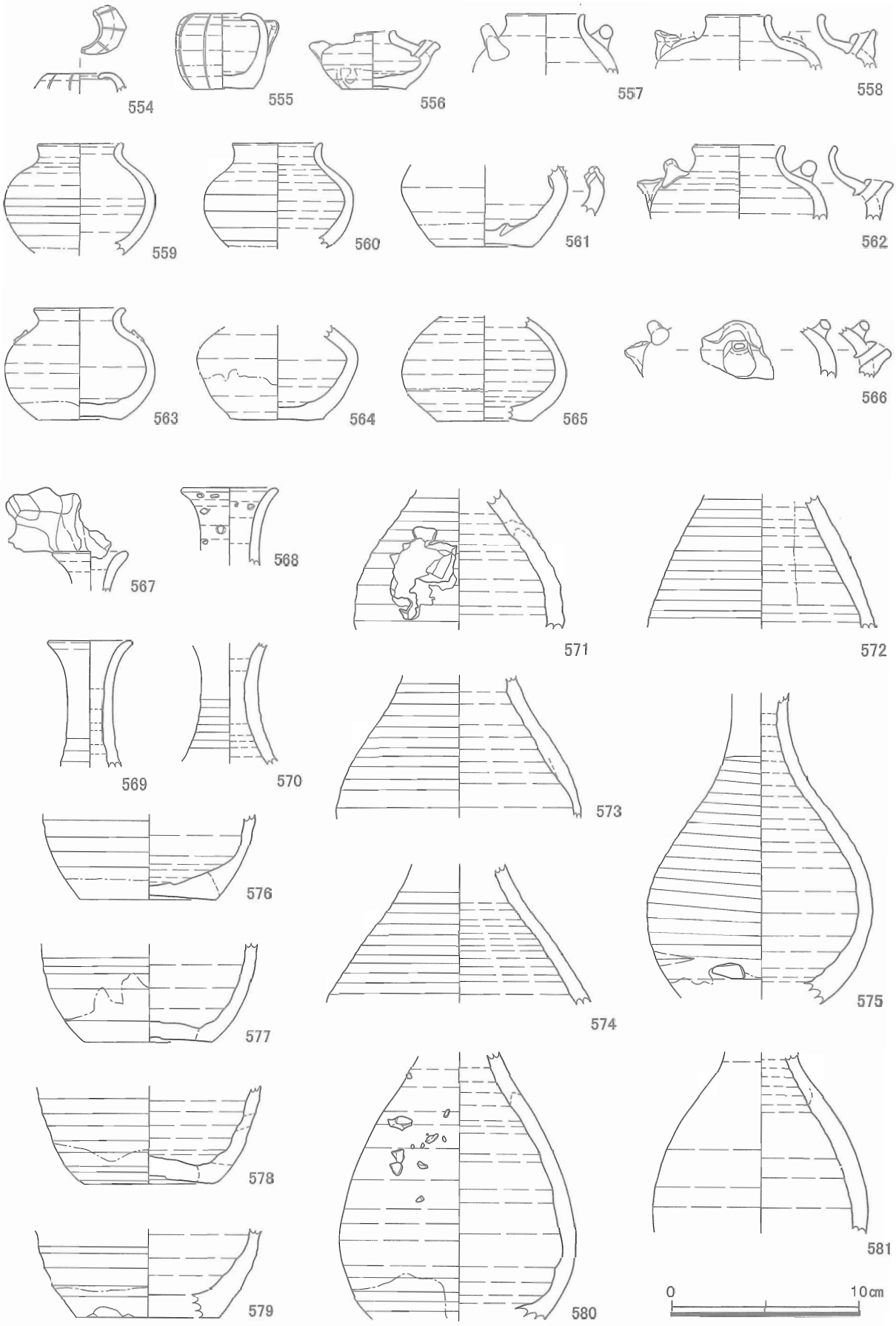
調整はロクロ上でなされ、口唇部まで挽き出した後に回転糸切りで切り離される。ヘラケズリは施されず、糸切り痕もそのまま残される。体部上半には、幅1㎜程度のヘラによる平行する筋が何条か付く例がある(560・563・565)。この部分には余計に釉が溜まるので、黒い筋が巡るように見える効果を生む。

体部の調整後、注口部と対になる横耳を取り付けて、注口部に穴をあける。注口部は、横を強くつまんだ後に前面と穴のあけられる端部を挟んで手前に摘み上げるように整えられる。したがって、注口はやや不明瞭な面をもつ角柱状となる。注口部の穴は、串状の工具を突き通して開けられているが、力余って工具の先端が底部にまでいたっている例があり興味深い(561)。口縁部から口唇部にかけての形状は、体部と口縁下部の接合面に明瞭な境をつけ、口縁部を垂直気味に立ち上げて口唇端部を玉縁状に丸く整えるもの(558)、やや外反する口縁部に、短めの口唇部が取り付くもの(559)、体部と口縁部の境を設けず、なだらかに立ち上げて口唇端部を丸く収めるもの(557・560・562・563)など、いくつかの差が認められる。

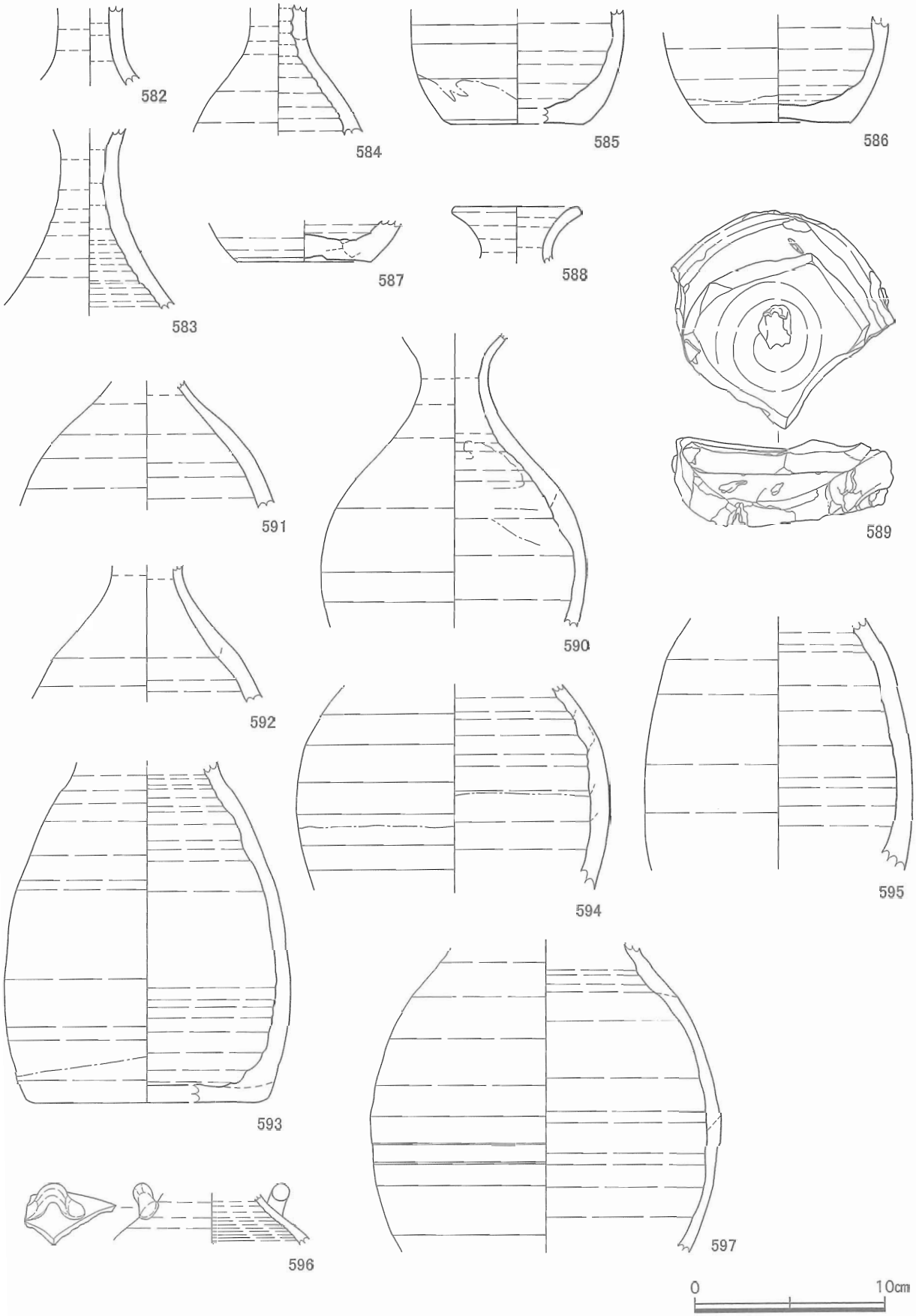
釉は、鉄釉を常に用いるが、灰釉もごく少量使われる(566)。鉄釉は褐色身を帯びる場合が多いが、黒色味の強いもの(561・564・565)、黒色味が強く透明感と光沢のあるもの(563)などが使われる。灰釉の場合は、丸皿と同様にオリーブ色味を帯びた鮮やかな発色をする。施釉範囲は、外面では底部から1.5～2.5㎝程度上がった位置から口縁部まで、内面は全面となる。

焼成は、563～565で底部の一部に溶着痕があるので、輪ドチか粘土トチンを挟んで行われたようである。また、外面に溶着痕のあるもの(561)や、内面底部に窯壁に起因する付着物のつく破片資料も認められるので、匣鉢詰めされず匣鉢蓋上などで裸焼されたと考えられる。

徳利(567～602)　徳利は、広い底部径からほぼ垂直に立ち上がり、体部半ばから次第に細くなるきわめて据わりのよいもの(Ⅰ類：588・590～595)、体部過半に最大径をもつラッキョウ形の体部をもち、口縁をラッパ形に広げるもの(Ⅱ類：567～587・589)、寸胴の体部で垂直に挽き上げられる口縁をもち、



第29図　出土遺物20(水滴・耳付水注・徳利１)



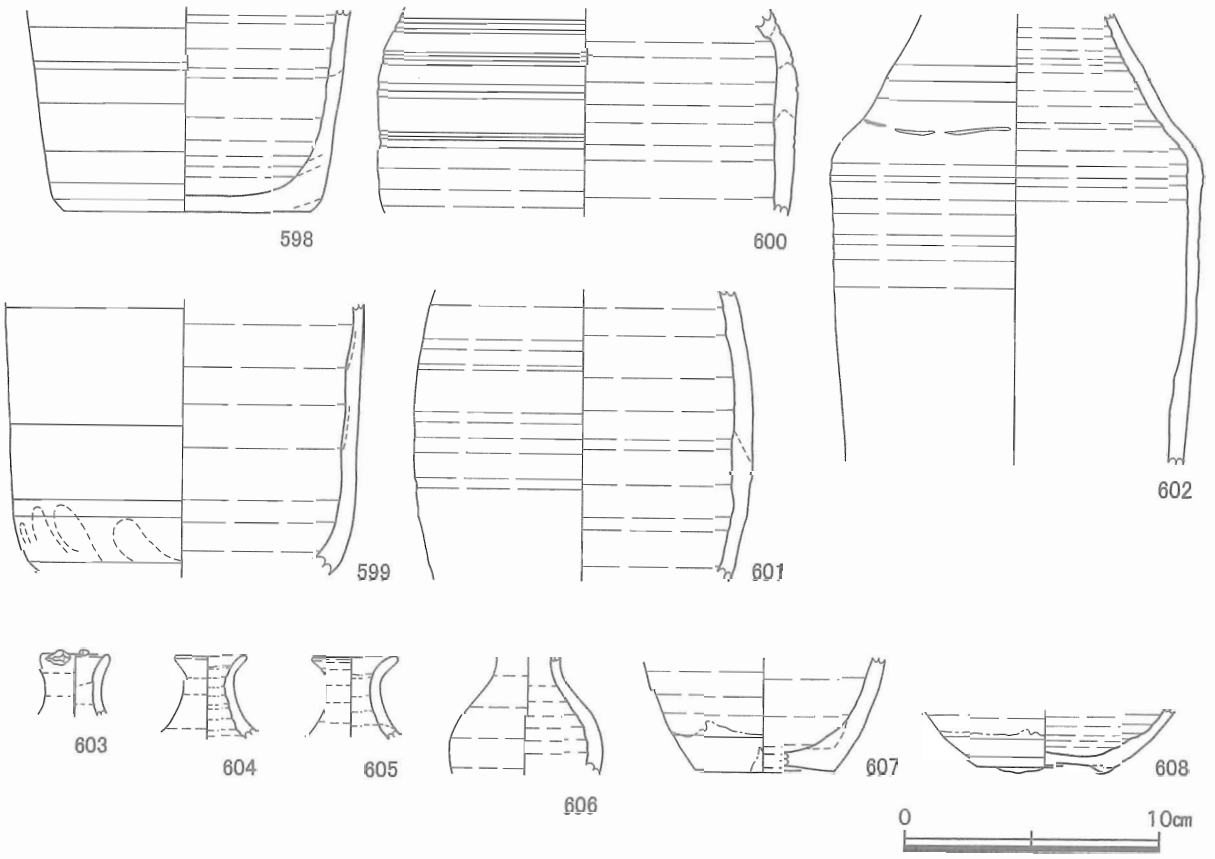
第30図　出土遺物21（徳利２）

体部上端に横耳がつくもの(Ⅲ類：596)がある。このうち、Ⅰ・Ⅱ類が安定的に生産されている。

調整方法は、全体の形状が明らかなⅠ類とⅡ類で観察できる。ロクロ上に据えた円板(短い円柱か)に粘土を輪積みし、ナデながら上方に立ち上げる。この円板は底部の直径である場合(576・593)と、底径の7割程度の場合(577～579・587)がある。前者はⅠ類・Ⅱ類ともに、後者はⅡ類にのみに用いられる手法である。底径より小さな円板を用いている底部には、中心に2cm内外、深さ1mm程度の円錐台形の窪みが削り込まれる。輪積みは、5cm程度の間隔で複数回繰り返される。体部上半からは次第に細くするために強く絞り込む。この過程で、内面にはコテを当てて整形したとみられる螺旋状の調整痕が著しく残される。頸部は強く上方に挽き出され、内面にはロクロの回転方向に粘土がよじれてシワやヒビが頻繁に生じている(569・570・575・582・583)。このシワやヒビは、体部の調整時点ではコテを入れて作業するに充分な間口であったものを、無理に細首に絞りながら口唇部方向に挽き上げたことで生じる。口縁部はナデによって滑らかに外反し、端部は丸く収められる。底部から体部にかけては、切り離し後に回転ヘラケズリが施される。底部と体部の境には幅3mm前後の面取りを施す場合がある(578・587・593)。Ⅱ類の体部から頸部過半にかけては、ノミ状の工具で螺旋状の回転ヘラケズリを施していわゆる千段巻きとするものがある(569～579)。575の場合は、上から下へと削られる。

釉は、Ⅰ類とⅡ類には灰釉と鉄釉が頻繁に用いられ、ごく少量錆釉の場合がある。灰釉は丸皿と同様、鮮やかなオリーブ色に発色するものを主に用いる。Ⅱ類の千段巻きには、ごくまれに鉄釉の場合があるが、ケズリの効果が引き立つ灰釉が頻繁に用いられる。鉄釉は光沢のあるやや褐色味を帯びるものであるが、592の外面には錆釉を施した後、灰釉を流しているようである。

施釉範囲は、外面では底部から2cm内外を露胎にするほか全面に及ぶ。内面は、頸部内側まで掛け、以下を露胎とする場合と、内面全体に流し込んで掛ける場合とがある。前者の場合は、底部でみると底



第31図　出土遺物22(徳利3・小瓶)

径より小さな円板を用いるものに該当する個体がある(577・578・587)。内面に釉の掛からない体部片(571・573・583)は、この手の底部を備えるものかもしれない。後者では、外面が鉄釉のものには、①：同質の鉄釉を掛ける場合(590)、②：より褐色味の強い鉄釉を掛ける場合(591・593・595)、③：錆釉を掛ける場合(592)がある。灰釉を用いる例は見当たらない。外面が灰釉のものには、④：同質あるいは近似した灰釉(5)を掛ける場合(572・581・585)、⑤：②の鉄釉を掛ける場合(569・570・574～577・580・582)がある。⑤の場合は、必ず内面を掛けた後、外面を掛ける。Ⅲ類(596)は内外面ともに同質の鉄釉を掛ける。

焼成は、裸焼きで行われる。体部に窯壁に由来する付着物が付く例(567・568・571・574・579・580・595)がある。また、底部の下には輪ドチを挟む例が報告されている(柴垣1991)が、今回の資料には見当たらない。底部外周に溶着痕が残る例(576・577・585・586・587)からも、匣鉢蓋上に載せられて焼成されたものと考えられる。

595はⅠ類の体部片である。調整がやや粗雑で、釉は錆釉と思われるが、発泡して明瞭でない。施釉範囲は外面では体部半ばまでしか掛からない。内面では体部の下位にのみ掛かっている。

597～602は近世の徳利である。597が17世紀代、他は18世紀代のものである。

小瓶(603～608)　小瓶は、徳利Ⅰ類を縮小したような形状を呈する。

調整はロクロ上でなされる。円板状の底部に体部を継ぐ例(607)もあるので、輪積みされている可能性が高い。内面はノタメ痕が著しいので、鏝を当てて挽き上げているものと考えられる。頸部～口縁部は絞りながら上方に挽き上げるので、徳利と同様に挽かれる方向へシワがよっている。切り離し後、体部は回転ヘラケズリで整えられる。608の底部は回転ヘラケズリで整えられるが、607は静止状態で細かなケズリを複数方向に施している。

釉は、灰釉と鉄釉を用いる。灰釉の608は体部末端から底部に掛けては露胎であるが、それ意外には施釉する。他は鉄釉であり、底部から2㎝程度を露胎とし、それ以上は口唇内部までに釉を施す。

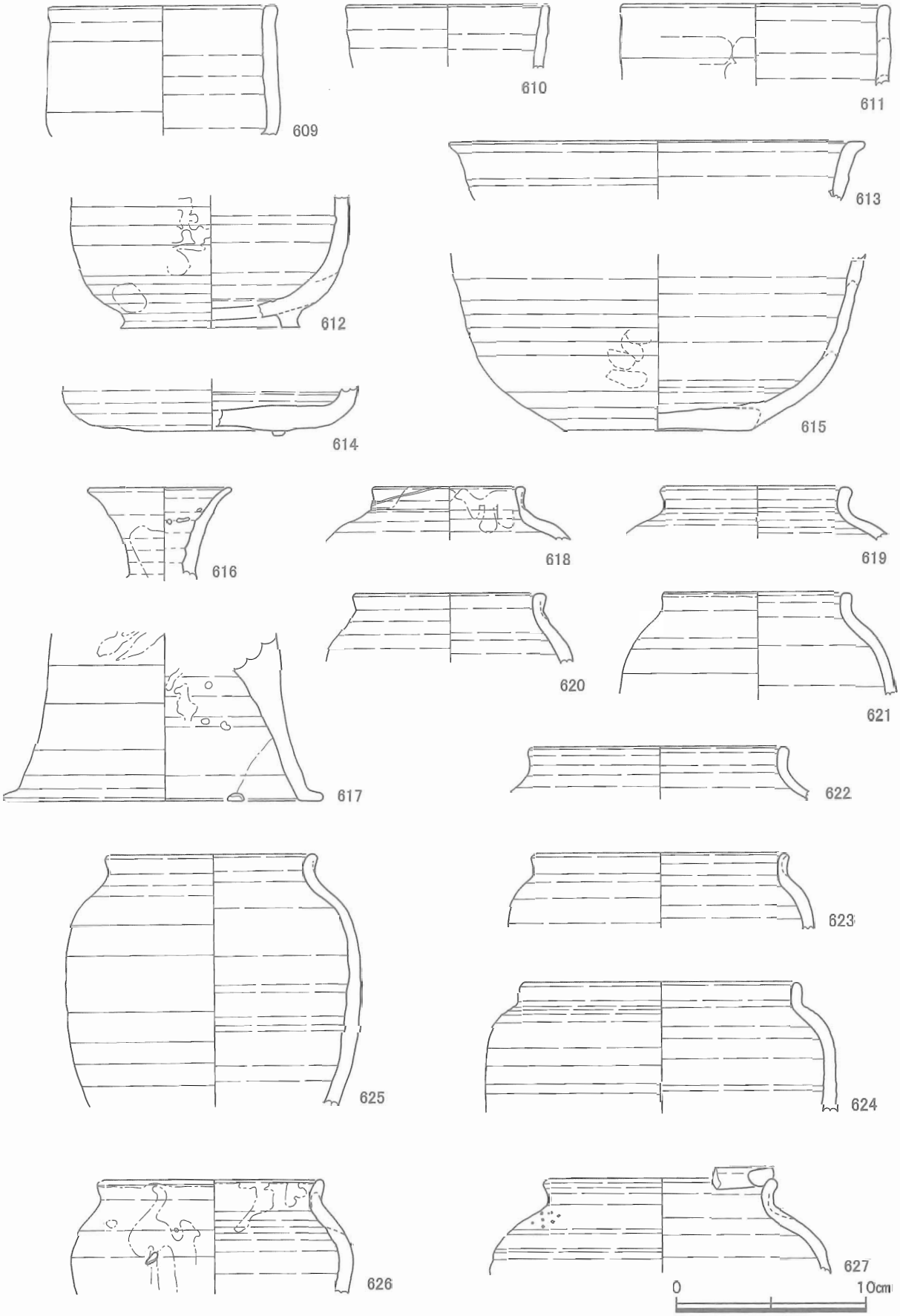
焼成は、603の口唇部に窯壁に起因する付着物がつくので、いずれも匣鉢蓋上などで裸焼きされたのだろう。607・608の底部外縁には溶着痕が残されるので、輪ドチを挟まずそのまま置かれていたことがわかる。

広口壺(618～656)　広口壺は円筒形の体部をもち、胴径よりもややすぼまる短い口縁部を備える高さ20㎝程度の壺であり、口縁が素縁のもの(Ⅰ類)と、肥厚して口唇端部に平坦面をもつもの(Ⅱ類)がある。

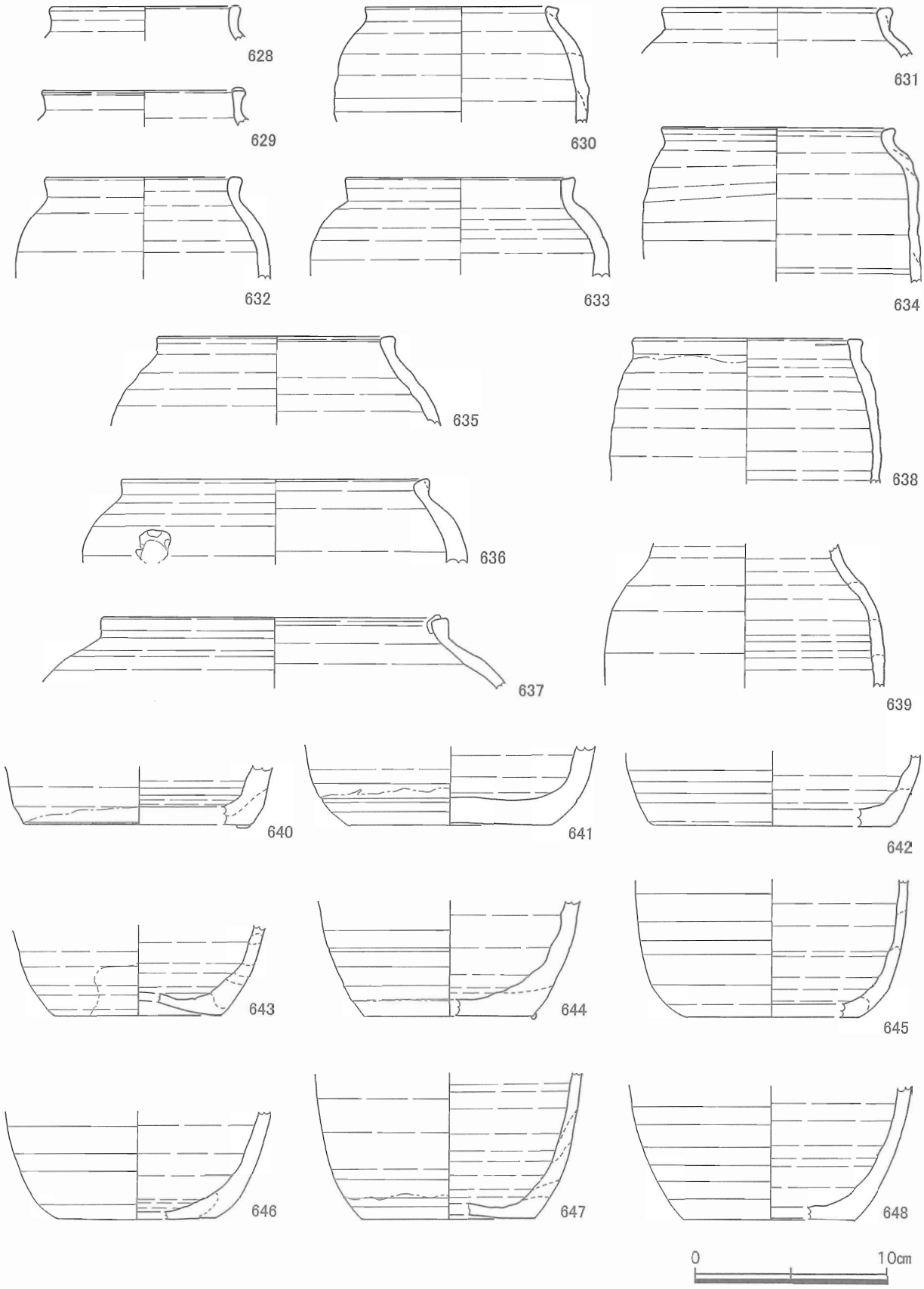
調整はロクロ上で行われ、底部となる円板の縁から幅2～3㎝の粘土紐を継いで上方へ積み上げ、口縁部までの調整が終わった後、ロクロ上に逆転させ底部から体部上半までの器面を回転ヘラケズリで整える手順で行われる。625の体部中央やや上側には長さ5.5㎝、最大幅1㎝、深さ最大6㎜の焼成前に付けられた傷がある。635の体部上端には、粘土の不整合ともみられる長さ3㎝以上、幅6㎜、深さ2㎜程度の凹みが残される。これらはきれいに均されるわけでもなく、そのまま残されている。

Ⅰ類(618～628)の口縁部は、体部からなだらかに挽き出されるものが多いが、618・621・622・625のように体部と口縁部の境にヘラ状工具の先端を用いて細い沈線を巡らせている例もある。Ⅱ類(629～637)は外側へ小さく折り返して肥厚させ、口唇端部に平坦面をもつものとなる。体部と口縁部の境にはⅠ類と同様に沈線を巡らせるもの(631・635)がある。また、Ⅱ類の口縁部には、丈の高いもの(629・631～633・635～637)と、短いもの(630・634)がある。後述する近世の広口壺の口縁はⅡ類であり、丈も短くなっている。630・634はより後出する要素となろう。

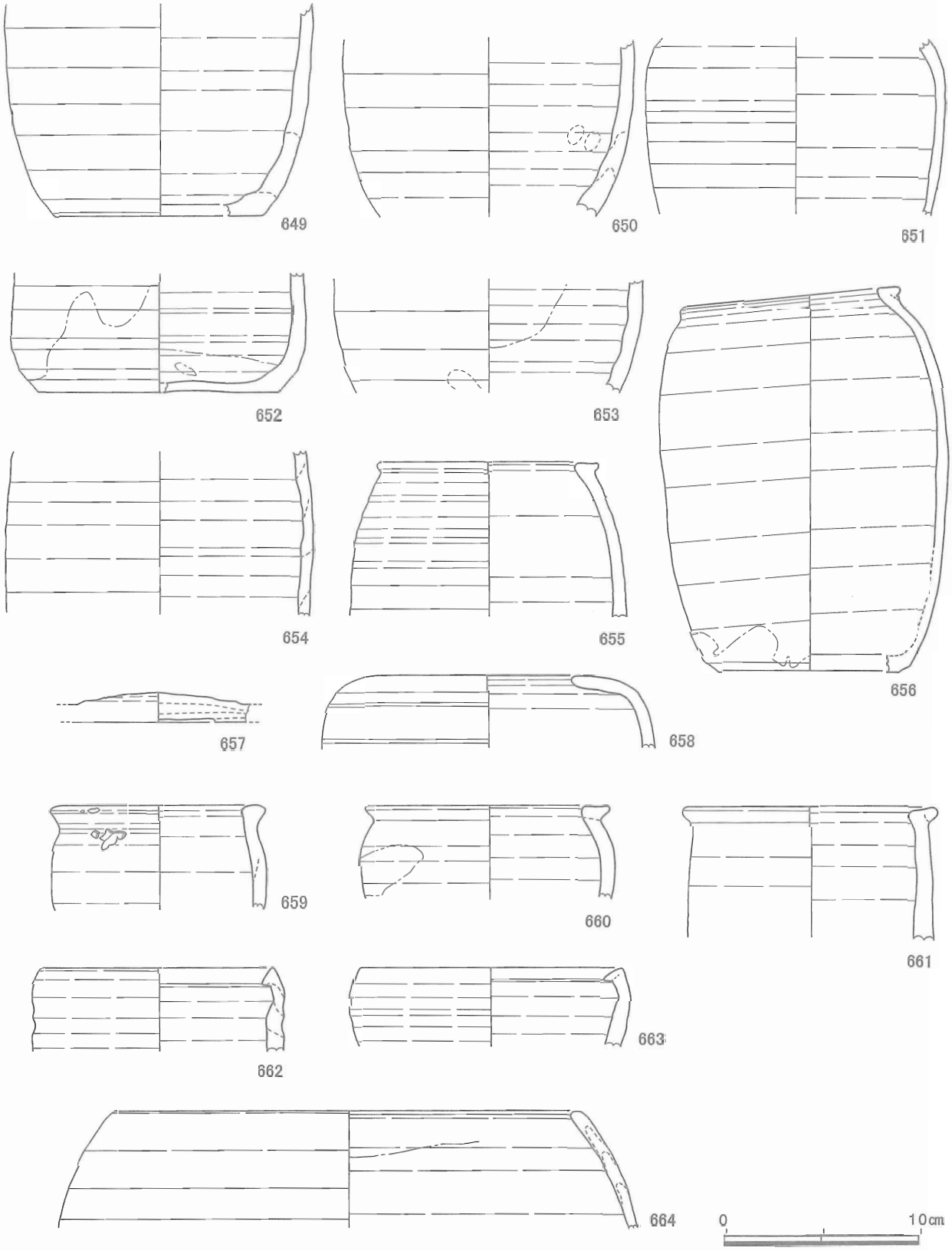
釉は、錆釉が用いられる。錆釉は比較的厚く光沢をもつもの(622・624・625・627・629・632・633・637)と、薄くカセた風合いをもつものがあるが、比較的後者が多用される。底部外面を除く内外面に施釉されるものが多いが、Ⅱ類で口縁部が短いもの(630・634)では、内面の施釉がごく薄く、まだらなも



第32図　出土遺物23(片口・鉢・花瓶・広口壺１)



第33図　出土遺物24(広口壺２)



第34図　出土遺物25(広口壺３・建水・その他の小型壺甕類)

のとなる。一方で、釉を施さない焼締のものもごく少量ある(621・648)。

焼成は、裸焼きで行われる。外縁部に溶着痕のある底部(644・646・649)や、肩部に細かな自然釉が付着するもの(632・636)、肩部に窯壁に起因する付着物のあるもの(627・636)などから、主に正位で焼かれたものとみられる。口縁部に撚土をつけるもの(627)がある。撚土は全周せず部分的なものであり、上面は平坦である。この平坦面に、幅0.7㎜程の同心円状の線が複数条転写されるが、これは864～872のような匣鉢蓋に付いている回転糸切り痕と考えられる。口唇部に溶着痕のある619・623・624・637なども、同様な方法で匣鉢蓋を掛けていた可能性がある。

また、641は底径もやや大きく、厚手に作られる壺である。外面では底部から2㎝程度は露胎であるが、それ以上に鉄釉が掛けられる。内面には外面と同質の鉄釉が一面に掛けられている。内面底部には窯壁に起因する付着物が認められるので、正位で裸焼きされているものとみられる。また、底部の一部と体部に溶着痕がある。体部のものは斜めに付いている。焼成中に崩れた何かがもたれかかったのだろうか。この壺は、前述の広口壺とは差異があり形態も異なるとみられるが、筒状の体部になりそうなのでここに一括した。

近世の広口壺は、638・639・651～656である。調整は上志戸呂古窯段階とほぼ同様な手順であるが、総じて薄手で、より硬質に焼成される。釉は錆釉が用いられる場合が多く、651はごく薄い。654のみがやや緑色味を帯び透明感がある。内面は無釉が多く、掛けられても一部にとどまる場合(652・653)、すべてに掛ける場合(654)がある。655の口唇部は使用によるものであろう磨かれたように平滑になっている。2号窯の窯体部分には近世墓が築かれていたので、全体形を知り得た656とともに、これに伴う蔵骨器であった可能性が高い。また、639は口縁部に向かう屈曲の具合から徳利の可能性もある。

その他の小型壺甕類(657・658)　その他としたものは、いずれも出土点数が少ないものの特徴的な器形をもつものである。

657は、削り出し高台をもち、高台部分と内面底部の外縁に薄い鉄釉を掛ける。器形は判然としない。

658は、釉調と焼成から近世初頭のものと思われる。茶色味のかかる鉄釉を掛けるが、口縁のみ口禿とする。風炉の一部であろうか。

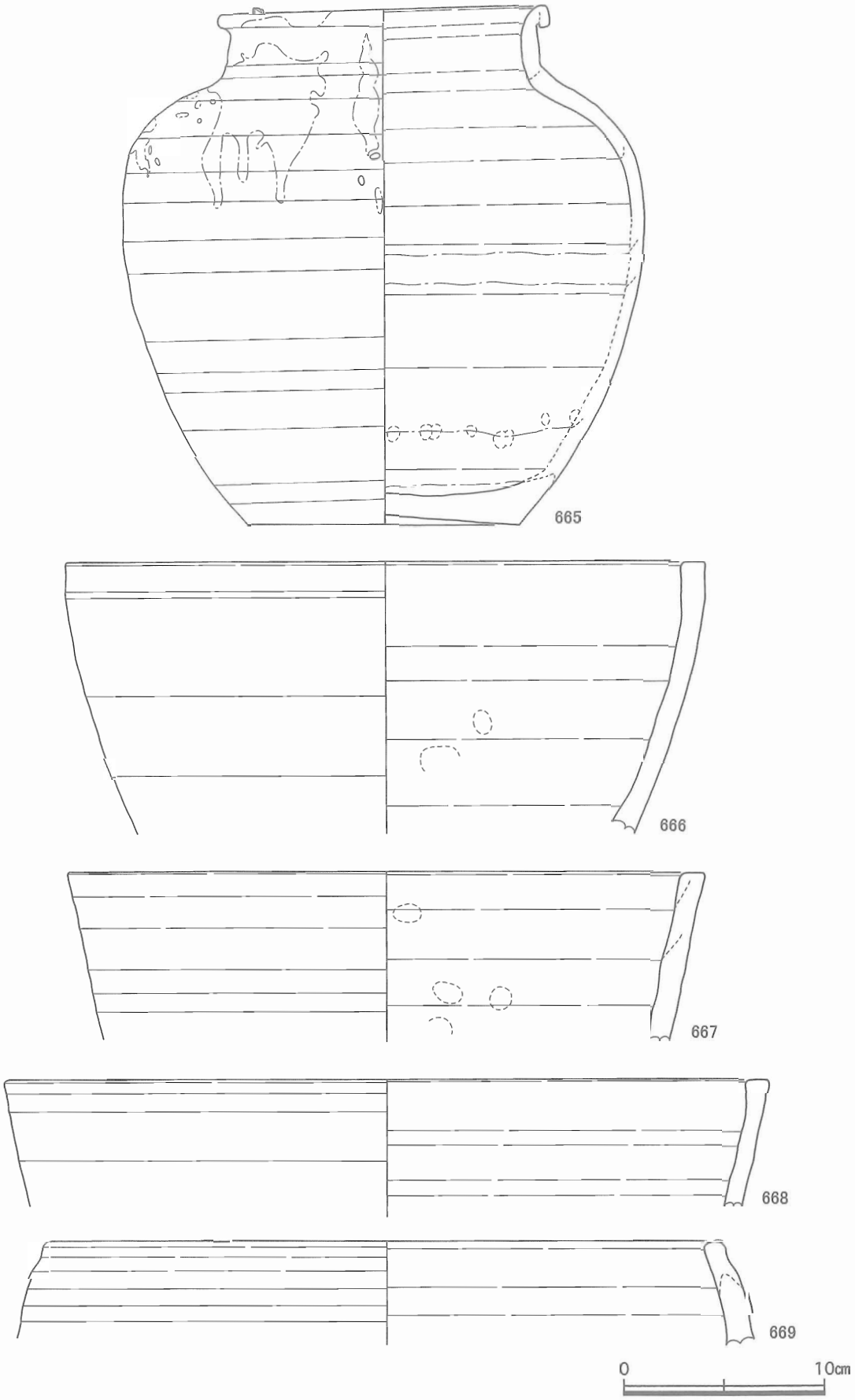
建水(659～663)　建水としたこれらは、平坦な口唇部をもつ広口の筒形容器である。

659～661は、口唇部に水平な平坦面をもつ。659・661は鉄釉を、660は灰釉を用い、口唇部を含め、内外面に施釉する。661の口縁部には幅8㎜程度の溶着痕が残存するすべての範囲に観察され、659の体部上端には窯に起因する付着物があるので、裸焼きで伏せられるか、広口壺の如く蓋をされて焼かれたものとみられる。662・663は、平坦面をもつ口縁部が内傾する。釉は施されず焼締となる。

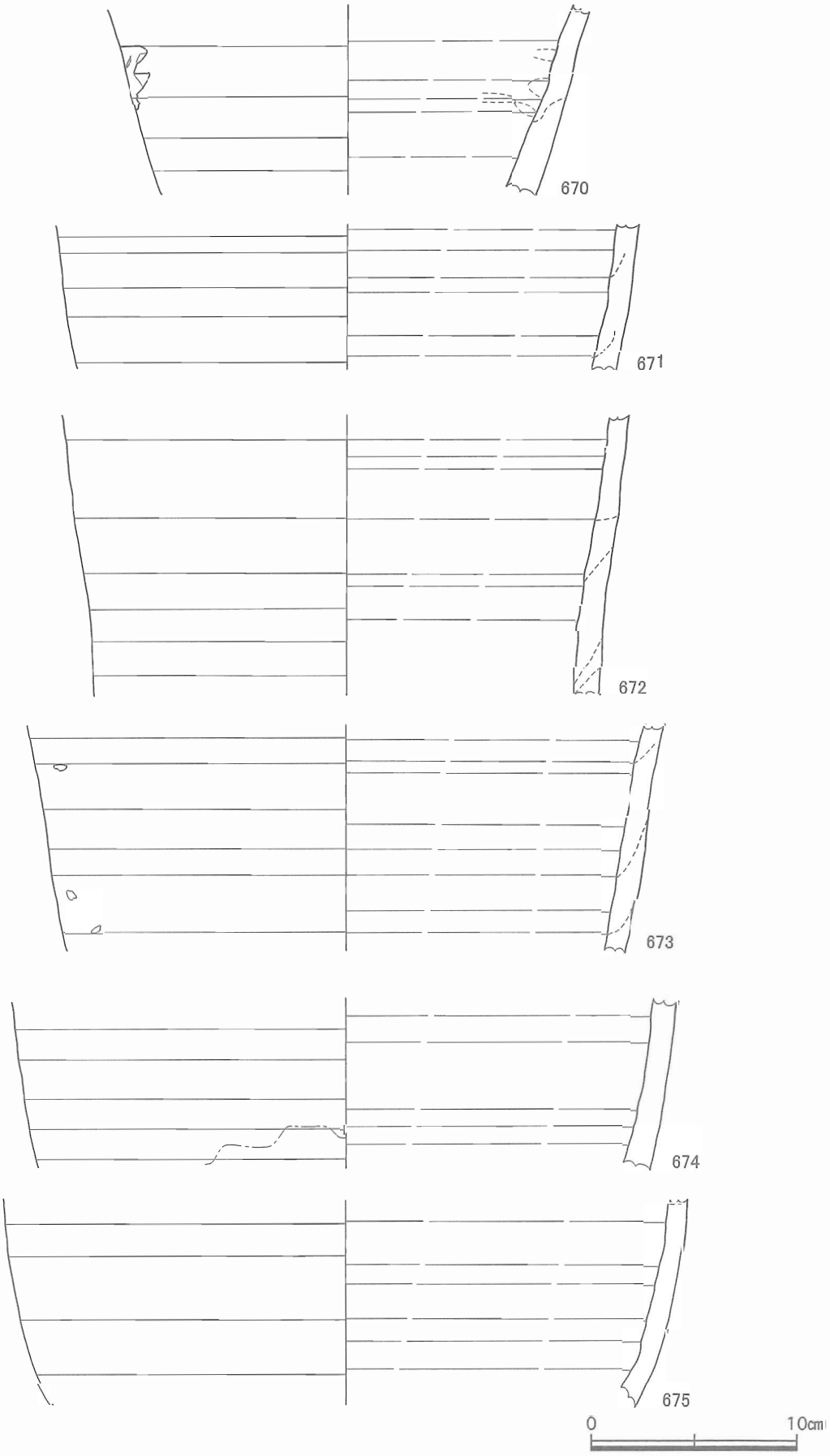
甕(664～683・691・692)　甕は大型容器で、まっすぐ立ち上がる円筒形のもの(Ⅰ類：666～668)と、口縁部が緩やかに内湾するもの(Ⅱ類：664・669)、口縁部を内側に折って口唇部を丸く収める短頸のもの(Ⅲ類：665・691・692)がある。

成形はロクロ上で行われ、底部となる円板の縁から高さ5㎝内外の粘土紐を上方へ積み上げながら形作った後、ロクロ上に反転させて、底部から口縁部直下までを回転ヘラ削りで平滑に整える手順で行われる。体部のケズリはすべての範囲で行われるのではなく、多くは底部との境から5～7㎝程度までをナデのまま残している。Ⅰ類の口唇部は上端に面をもつ矩形となるが、Ⅱ類では丸く収められる。一方、Ⅲ類は外側に小さな縁帯を作り出す。口縁部外側を折り返す場合、口唇端部を丸く収めるもの(691)、面をもつ矩形となるもの(692)がある。体部外面に装飾をもつものは678で、ヘラ状工具の先端による長さ5㎜程度の刻みが1～2㎝間隔で付けられている。

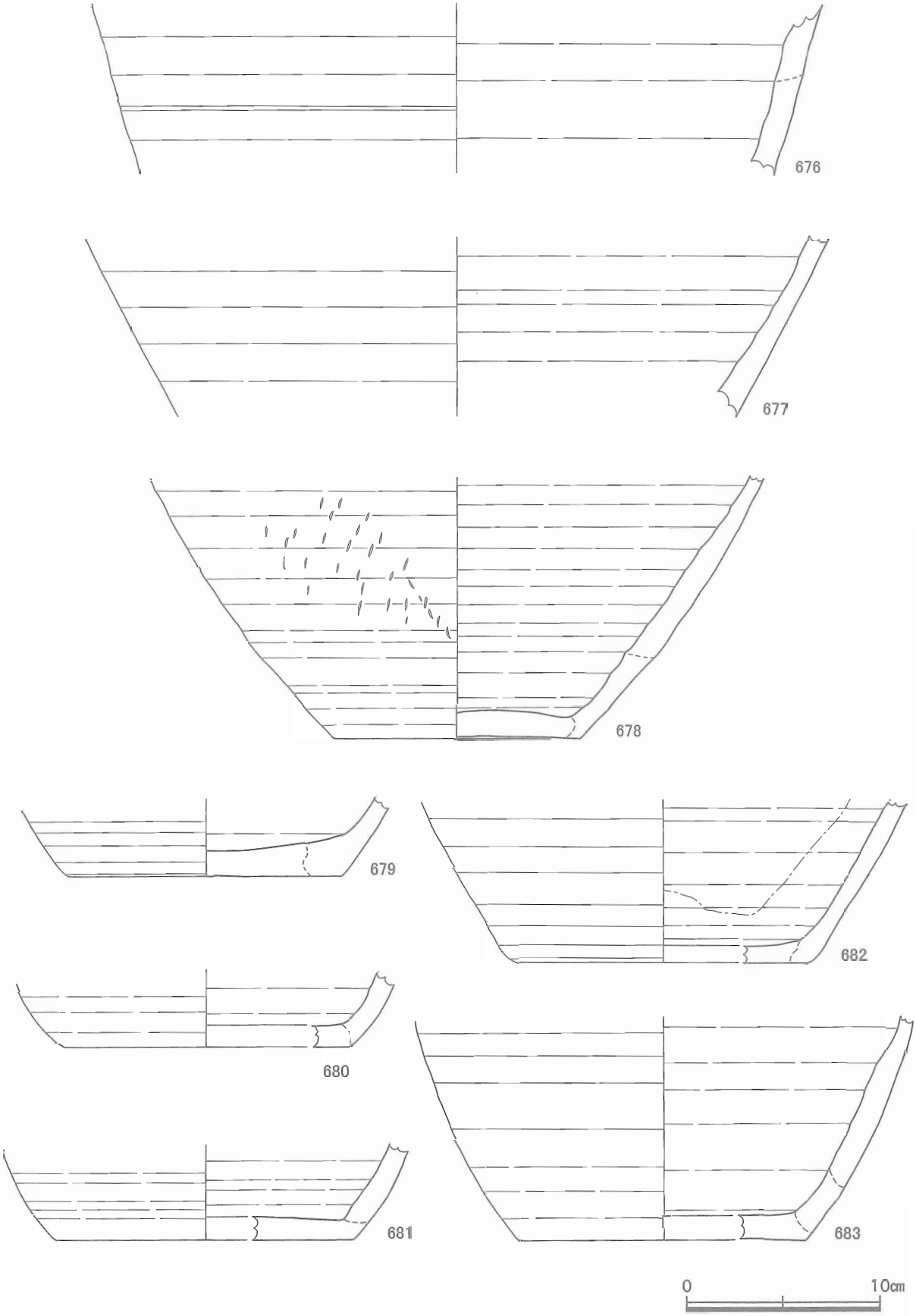
釉は、錆釉を用いる。厚く掛かり光沢をもつ場合(668・671～673・691)と、ささくれてカセた風合いをもつものがある。全体的には後者の釉が用いられる場合が多い。外面は底部から体部末端にかけて露



第35図　出土遺物26(甕１)



第36図　出土遺物27(甕２)



第37図　出土遺物28(甕３)

胎とする場合(679・680・683)と、全面に掛ける場合(678・681)、釉を施さない焼締様のもの(666)がある。内面の多くは外面と同質の釉を掛けるが、内面だけに錆釉を掛けるもの(666)、釉を掛けない露胎のもの(678)もある。口唇部ではⅠ類と、Ⅲ類でも端部に面をもつ692が無釉あるいは釉をはいで口禿としている。一方で、682は内面の一部と体部の半ばに薄い錆釉が掛かるだけの焼締様となり、Ⅱ類とした664・669は施釉の痕跡がなく、焼締となる。なお、内面が無釉の678は茶壺の可能性がある。

焼成は、667・668. 691・692の口唇部には口縁の方向に平行する溶着痕が付き、底部(678～683)の外縁部には溶着痕がみられないので、基本的には伏せて裸焼きされたものとみられる。683の底部外面には、一辺が7㎝程度の隅丸方形状の溶着痕が付いている(写真8)。今回の調査では四角形の底部を有するものは認められていないが、あるいは箱型の向付などが置かれて焼かれたのかもしれない。

665はⅢ類の口縁をもつ。前述と同様の整形をし、釉は底部外面と内面の一部を除いて錆釉を掛けた後、体部上半の複数の場所に灰釉を荒く上掛けする。口唇部と底部外面の外縁に、焼成後の加工や使用によるとみられる平滑になった部分があるので、生活に使用されていたものが混入したものとみられる。口縁部の造りや釉調から、17世紀代のものと考えられる。

桶(684～690)　口縁部にかけてやや開く筒状の大型容器で、口縁近くと胴部下端の二箇所に木製桶の箍を模した突帯が貼り付けられる。

調整はロクロ上で行われる。底部となる円板上に2～7㎝幅で上方に粘土紐を積み上げながら成形し、逆転させて底部から口唇部直下まで回転ヘラケズリで整える。ヘラケズリ後に、口唇部から5㎝程度下に1条、底部直上に1.5㎝程度の間隔をあけて2条1対の突帯を貼り付ける。貼り付けは上下の裾部を強くナデて行われるが、686のみが上側の裾だけを強くナデる。幅は0.8～1㎝ほどで3～7㎜程度の高さを持ち、690は三角形状の、他は半円形の断面形状をもつ。突帯の頂部には平行する筋がヘラ状の工具によって刻まれ、竹で編まれたような雰囲気を出している。口唇部は肥厚して外側に引き出されるが、686だけは引出しがなく、断面形は矩形となる。いずれも口唇端部は平滑に整えられる。

釉は、錆釉を用いている。686・690がにぶい光沢を発するが、他は光沢のないカセた雰囲気となる。施釉は、底部外面と口唇部を除く全面になされる。

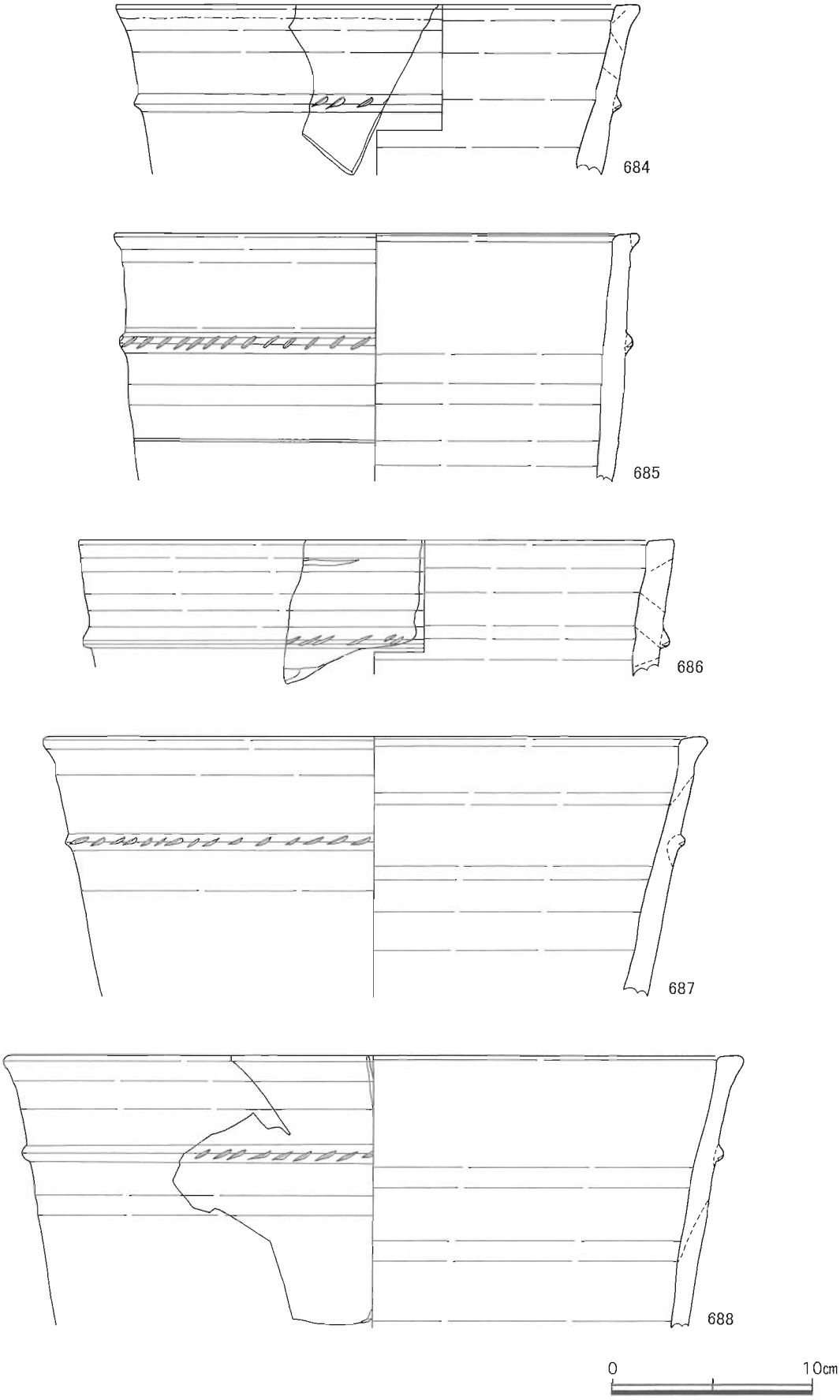
焼成は、裸焼きで行われている。底部外面に据え付けた際の溶着痕は観察されず、口唇部のすべてに溶着痕があることからも、伏せて焼かれているものと考えられる。689の同一個体とみられる破片には、中皿(437と同規格)の高台痕が残されている(写真6)。水平になるよう据え付けられた底部上に他の器種を置いて焼成していることが窺える。

また、689の底部外面に「天」と読める文字がヘラ書される(写真9)。年号「天正」の一部と考えられる。

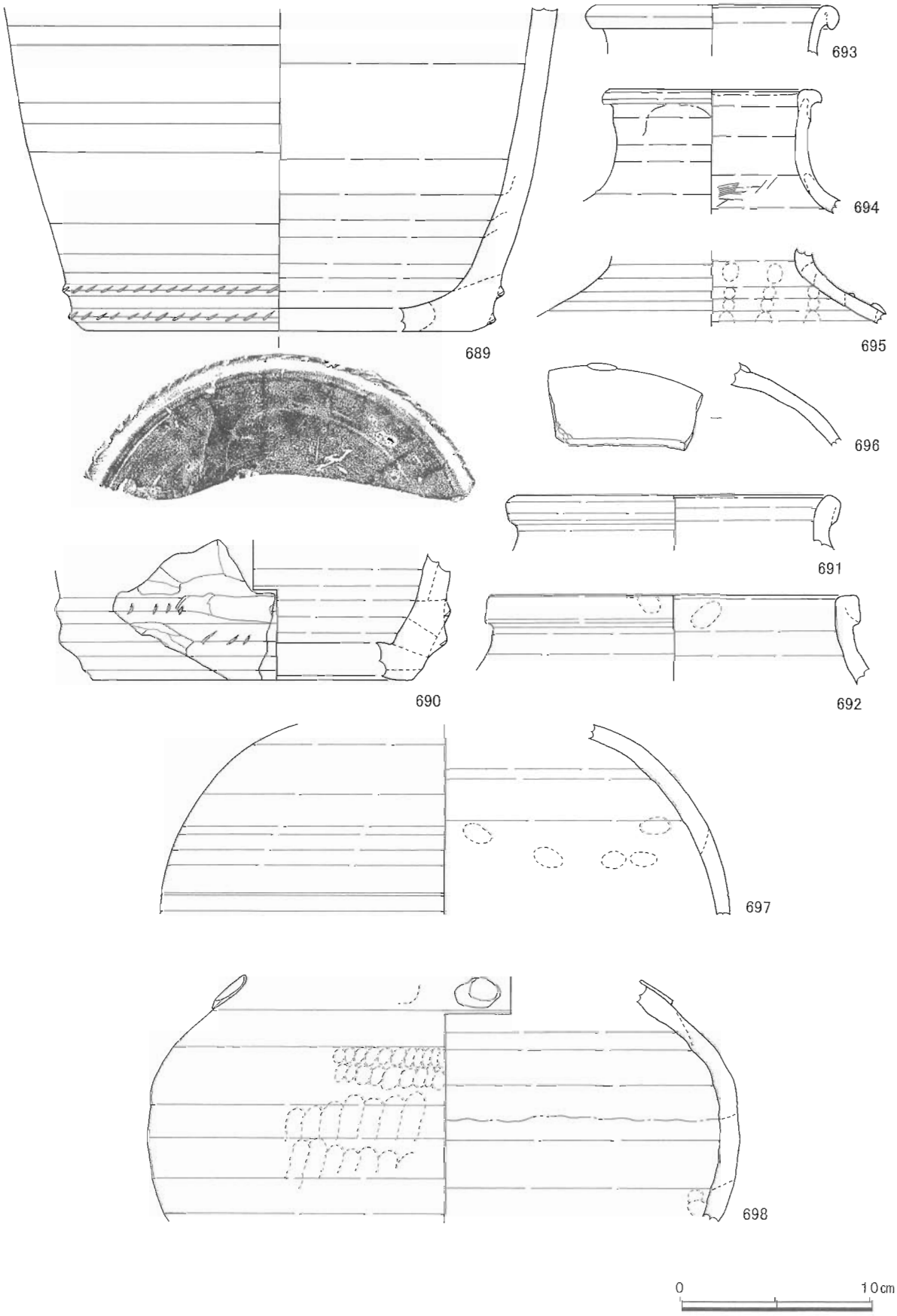
茶壺(693～701)　茶壺は複数個体出土しており、横耳を付けるもの(Ⅰ類)と縦耳(Ⅱ類)の双方がある。調整はロクロ上で行われる。据え付けた底部となる円板上に、4～6㎝程度の幅で粘土紐を輪積みしな

写真8　683底部外面の溶着痕

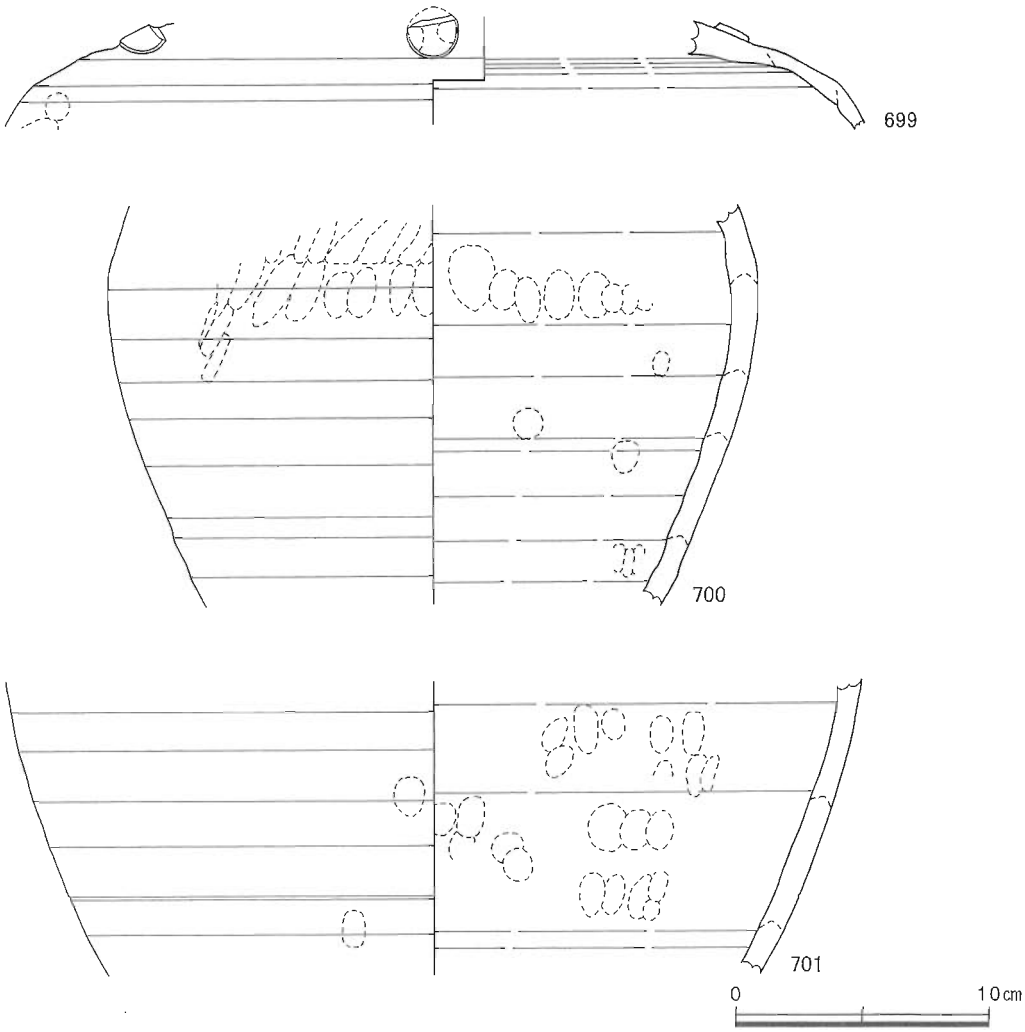
写真9　689底面にあるヘラ書き



第38図　出土遺物29(桶１)



第39図　出土遺物30(桶２・甕・茶壺１)



第40図　出土遺物31(茶壺２)

がら上方に立ち上げ、口唇部までをナデて整える。その後、基本的には体部の上位に回転ヘラケズリを加えて器面を整え、逆転して体部の下位にも回転ヘラケズリを施す。この境は、肩のカーブ直下付近にあり、下位のケズリが上位のそれを切っている。697については、上位のケズリが不鮮明で、あるいはナデのみの可能性がある。底部は今回の資料では明らかでないが、この工程の際に回転ヘラケズリによって平滑に整えられているのだろう。全体の調整が終わった後に耳が貼り付けられる。耳の全体が把握できる資料は得られなかったが、粘土帯の端部は強く押さえられて円板状に薄くつぶれている。口縁部は外側へ折り返されて、やや垂下する。口唇部は丸く収められるが、694は内側に沈線状の凹みを巡らせて、口縁内側がやや角張るように調整する。

釉は、錆釉が多用される他、鉄釉、ごく薄い錆釉を掛けて焼締状に見せるものがある。錆釉(695・697～699・701)は肩部付近から荒く流し掛けされるようで、体部以下の釉は部分的に薄く、あるいは全く掛からない部分も生じている。ごく薄い錆釉(694・700)の場合も同様で、700などの施釉部分はほとんど目立たない。鉄釉を用いるものは696のみである。肩部の破片であり所々の灰釉が付着するが、施釉されたものか自然釉か見分けがつかない。一方、口縁内側から内面にかけては露胎である。このような釉の掛け方は、外見の微妙な風合いを発揮したものとなっている。

焼成は、裸焼きで行われている。他の大型品と比べ口径が小さいので逆位に置くことは困難であり、696の外面には窯に起因する付着物がみられることからも、正位に置かれていたものと考えられる。

(7)擂鉢(702～828)　擂鉢は丸皿と並んでとりわけ生産量の多い、主要焼成器種のひとつである。口唇部外面に縁帯をもつもの(Ⅰ類)と、内側に折り返されて内面に突帯が作られるもの(Ⅱ類)の2種に大別される。量的にはⅠ類が圧倒的に多い。また、Ⅱ類の突帯が失われて素縁に近い形状のものもある。法量は口径28cm前後と18cm程度の大小2種が作られているが、小型はきわめて少ない。

調整はロクロ上で行われる。底部となる円板を据え付け、幅4cm前後の粘土紐を継ぎながら立ち上げる。下方へ垂下するⅠ類の口縁部は、体部との境に鏝状の工具をあてがって境を明確にする。

Ⅰ類の縁帯は大きく分けて、上方へ跳ね上げ下方には垂下しないもの(縁帯A：702～708・773～775)、下方へ小さく垂下し、体部へ「T」字状に取りつくもの(縁帯B：709～742・776～808)の二種があり、大多数を占めるのは縁帯Bである。さらに縁帯Bの中には、体部と直角気味に近く取りつき縁帯外面が内傾するもの(a)、体部と鈍角に取りつき縁帯外面が鉛直方向を向くもの(b)がある。縁帯Baには後述する擂り目Aが、縁帯Bbに擂り目BあるいはCが伴う傾向がある。

Ⅱ類では、やや内傾する広く取られた折り返し上面を凹ませるもの(突起A：743～746)、上面を凹ませるものの幅が著しく狭く上端を水平にするもの(突起B：747～751)、上面が水平で平らになるもの(突起C：752～760)、丸く膨らめるもの(突起D：761～769)がある。

口縁部には注口が付けられる。口縁部の下側に人差し指と中指を当て、口唇部を押さえながら親指で内側から外側へ引くことにより形作られる。

口唇部までの調整が終了した後、擂り目がつけられる。体部内面の擂り目は、1単位が9～23本で幅2～3cm程度の櫛状工具を体部下端に強く押し付けた後、上方(口縁部方向)へ引き上げることによって14条程度を放射状に割り付ける。この結果、体部下端と見込みの境には多角形状に連続する工具痕が残される。擂り目の上端の間隔は、工具のあてがい具合や器面の凹凸によって2～4cm程と幅が異なっている。擂り目は反時計回りに付けられ、多くの先端はロクロ回転と逆方向へ緩やかに屈曲する。右利きの工人がロクロをその都度回しながら、手元にきた部分へ随時擂り目を付けていったのだろう。逆にロクロ回転方法へ屈曲するものが稀にあるが、左利きの工人によるものだろうか。

見込みの擂り目は、工具を複数回交差させることによって「△」あるいは「＊」状に付けるもの(擂り目A：703～706・708～716・718～723・761・809～818)と、擂り目Aの外縁に沿って「◎」状の擂り目を付加するもの(擂り目B：725・741・821・825・828)、「◎」状だけのもの(擂り目C：726・730・731・733～736・738～740・742・819・820・823・824)がある。擂り目Aは1単位9～16本の櫛状工具を用いる。これは体部と同等あるいはやや幅の狭い工具で、見込みの一部に擂り目が付かない上、体部の擂り目の端部による多角形状の痕跡が残る。一方、擂り目Bは1単位8～13本の体部より幅の狭い工具が用いられ、底部外面の多角形状の痕跡はこの上に擂り目が付けられるので消される。さらにCでは1単位9～12本が、一方の角を丸く整えた工具を使って付けられる。その結果、見込み外縁の角が取れて底部から体部へ緩やかに屈曲するようになる。実測できなかった底部片90片の内、擂り目A：B：Cは52：12：16(この他BかC10片)となり、擂り目Aが多い。体部の擂り目と底部の擂り目Aは、施される順番がまちまちである。一方、擂り目B・Cの多くは体部の擂り目を付けた後に施される傾向がある。

一方、体部の擂り目上端あたりに6条程度が1単位となる、横方向の擂り目を施すものがある(770～772・825～827)。この擂り目は、ロクロの回転によって付けられるもので、多くは体部の擂り目の後に施される。この手の擂り目をもつ個体の口縁部は、Ⅱ類の折り返しがごく浅くなったように見えるもの(770・771)、素縁に見えるもの(772)がある。いずれも出土量が少なく、限定的なものと考えられる。

切り離しは回転糸切りで行われる。多くの場合、体部末端に利き手の親指と人差し指の対になる指頭痕が強く付く(写真10)。糸切り後、上から手を差し入れてつかみ上げる際に付いたものだろう。Ⅱ類ではロクロ上に逆転させ底部から体部上半までを回転ヘラケズリで整えるが、Ⅰ類には通常ケズリは施さ

写真10　723体部末端に付く指頭痕

写真11　焼台に溶着する擂鉢

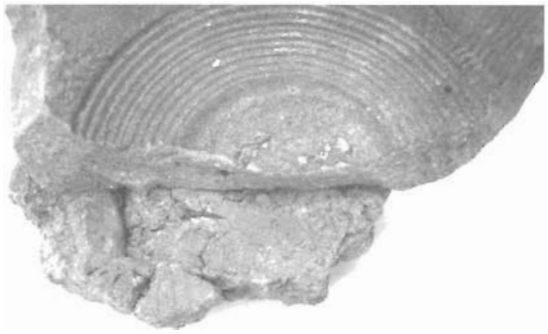


写真12　焼台に溶着する擂鉢(部分)

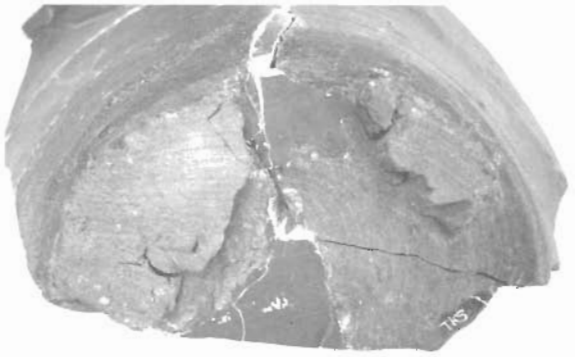


写真13　733の輪ドチに転写された糸切痕

れず、糸切り痕は未調整のまま残される。

釉は錆釉を用いるが、中には無釉で焼締のものが少量ある。擂り目Aの個体には黒褐色～赤褐色のつや消し、擂り目B・Cではより光沢のある赤褐色のものが多い。下方に垂れる場合が多く見受けられるので、回しながら流し掛けされたものとみられる。内面の体部過半には概ね90度おきに4箇所、幅2cm、長さ5cm程度の釉を掛けない部分がある。焼締の場合は、硬質に焼きあがるもの(713・717・744・745・755・765・781・784・811・819・824)と、軟質のもの(710・716・721～723・743)がある。

焼成は、粘土トチンを挟んで通常3個体以上を積み重ねて焼き台上あるいは匣鉢蓋上で裸焼きされる。重ねる際は、内面の釉をかけない4箇所に直径2cm程の粘土トチンを貼り付けて、相互の接点を減少させる。この粘土トチンは、上位の個体の底部と体部の境あたりに接する。積み重ねは、粘土トチンがやわらかなうちに行われるので、いずれも重量で変形する。一方で、粘土トチンを挟まずに重ね焼きする例も稀にみられる。725の体部内面には、そのまま重ねた場合、ちょうど底部外縁があたる位置に溶着痕が残されている。

最下位の底部外面には、底径とほぼ同じ直径となる太さ2.5cm前後の巨大な輪ドチがあてがわれる例がある。焼台の底には溶着を軽減させるために敷かれた直径2～10mmの砂粒を多く付けている。今回の破片資料では、焼き台と器の底面間に溶着防止の工夫が何ら認識できない。焼き台も柔らかな粘土で構成されるので底面にはがっちりと食い込んで溶着し、結果として擂鉢自体の溶着防止にはさほど寄与しないものとなってしまっている(写真11・12)。なおこの焼き台は、床面への接地面と擂鉢底面がほぼ水平になるので、水平に近い床面をもつ2号窯で用いられたものと考えられる。

同様に、輪ドチもやわらかなうちに挟み込まれているので、外側にはみ出すほど低く潰れている。733の輪ドチには、外面に糸切り痕が残されている(写真13)。輪ドチは粘土紐を丸めているのでこれ自体が糸切りされることはなく、他の糸切り痕が転写されたものと考えざるを得ない。伏せ焼きされる壺甕類はいずれも底部をヘラ削りで整えているので、

窯の中で上向きに糸切り痕が露出するのは両面に糸切り痕をもつ匣鉢蓋以外にない。したがって、733は蓋をかぶせた匣鉢上に置かれて焼かれたことになる。しかも内面に粘土トチン痕があるので、複数個体が重ねられているのである。

806は体部外面に、匣鉢の目地に用いるような撚土が複数状溶着している。内面にも窯に起因する溶着物や自然釉が多く付着する。破損した個体の一部を匣鉢蓋や焼き台として転用したものと思われる。

小型の擂鉢(742・809)は、少数にとどまる。整形は大型と同様な方法で行われるが、注口部は親指と人差し指とでつまみ出すように作られる。体部のケズリは行われず、底部外面に回転糸切り痕が残される。見込みの擂り目の形状はいずれもCである。内面には釉を掛けない部分がなく、粘土トチンを置いた痕跡が複数箇所にあるので、生産量は少ないものの複数個体が重ね焼きされていたことが窺える。809は口唇部が内湾して受け口状になる。擂り目の形状はAで底部外面と内面、特に体部半ばから底部にかけて滑らかに磨耗しているので、工人が生産したひとつを作業用などに用いていたとも考えられる。

(8)その他

その他としたものには水滴、片口、瓦がある。

水滴(554～556)　水滴は出土量が極めて少ない。小壺Ⅱ類を縮小した形態に注口を付けるもの(Ⅰ類)と、瓜形を呈するもの(Ⅱ類)がある。

Ⅰ類の水滴は556のみである。ロクロ上で口縁部まで成形した後に回転糸切りで切り離し、注口を貼り付け串状工具で穿孔する。注口は、耳付水注のものより小さいが、いくつかの面をもつているので同様な方法で貼り付けられたと考えられる。注口の穴は慎重にあけられたはずだが、勢いあまって底部にまで穴をあけている。釉は灰釉を用いている。外面の底部から1cm程度までは露胎であるが、それ以上は内面にいたるまで施釉されている。

Ⅱ類の水滴は554・555である。ロクロ上で口縁部まで挽き出した後に糸切りで切り離し、縦方向の筋をヘラ状工具で付けた後に把手等を貼り付ける。釉は灰釉を用いている。丸皿と同質で、オリーブ色に発色する。外面の底部から1cm程度までは露胎であるが、それ以上は口唇部内側にいたるまで施釉されている。内面は施釉せず、露胎のままである。

焼成は、底面に輪ドチを挟んで匣鉢内で行われている例が知られる(柴垣1991)。555・556の底部には輪ドチの溶着痕はなく、555の口縁部には窯壁に起因する小さな付着物が付く。これは匣鉢蓋上にそのまま置かれて裸焼きされたのだろう。

片口(609～612)　少量が出土しているが、今回の資料中には全体の形状が把握できるものはない

609～611は錆釉を掛けるもので、いずれも口縁部～体部片である。609・611は口唇部から2cm程度下の位置まで、ナデ後に回転ヘラケズリを施して器面を整えている。612は体部～底部片で、薄い錆釉が部分的に散らされているのみなので、焼締といってよい。ロクロ上で整形した後に底部から体部上端を回転ヘラケズリで整えて、高台を貼り付ける。

瓦(写真14)　瓦は5破片出土している。いずれも本瓦で、平瓦の一部である。厚さは2.2～2.5cmと堂々としているが、焼き上がりは軟質で脆い。調整は、多くの表面が剥落しているため明らかでなく、施釉された痕跡も見当たらない。出土点数が極めて少ないので、限定的な生産であったとみられる。

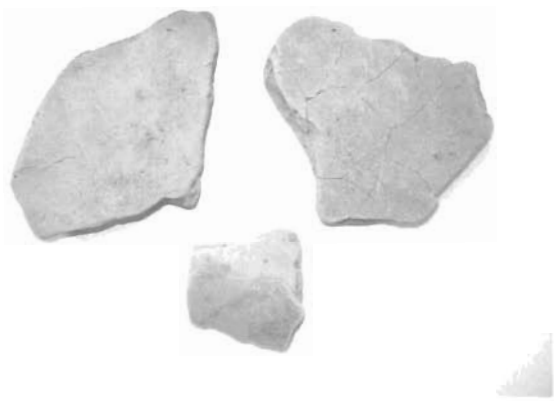
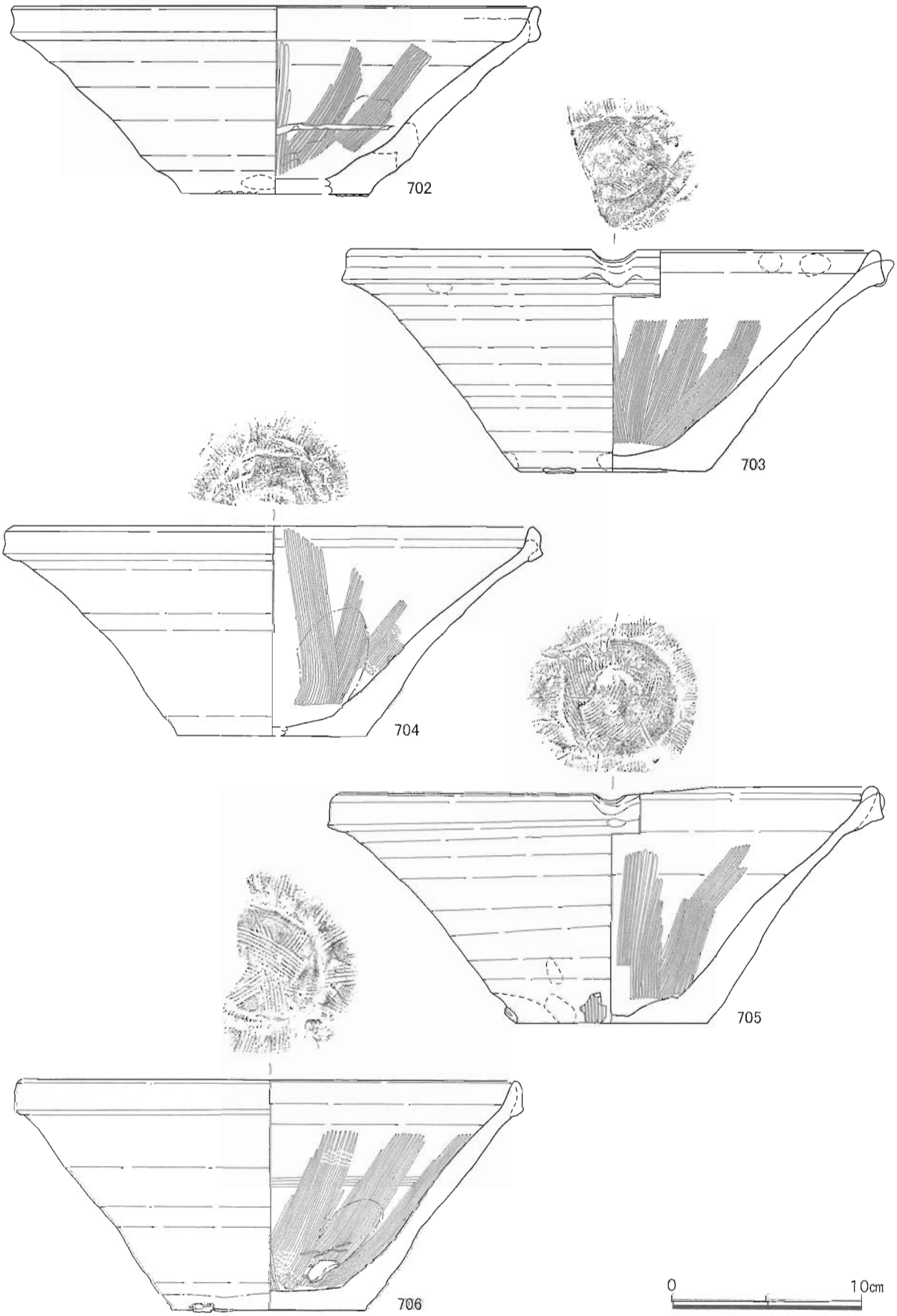
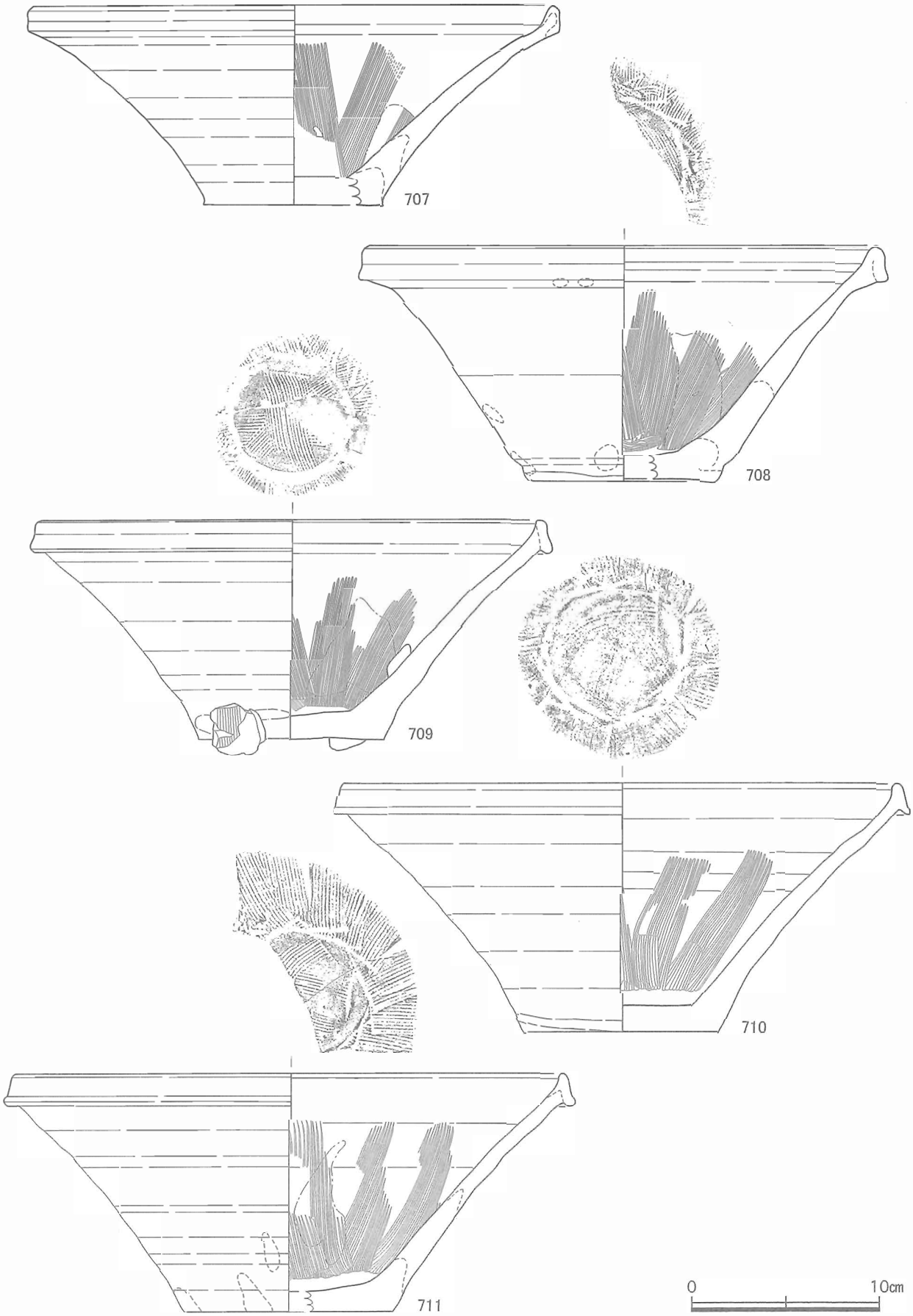


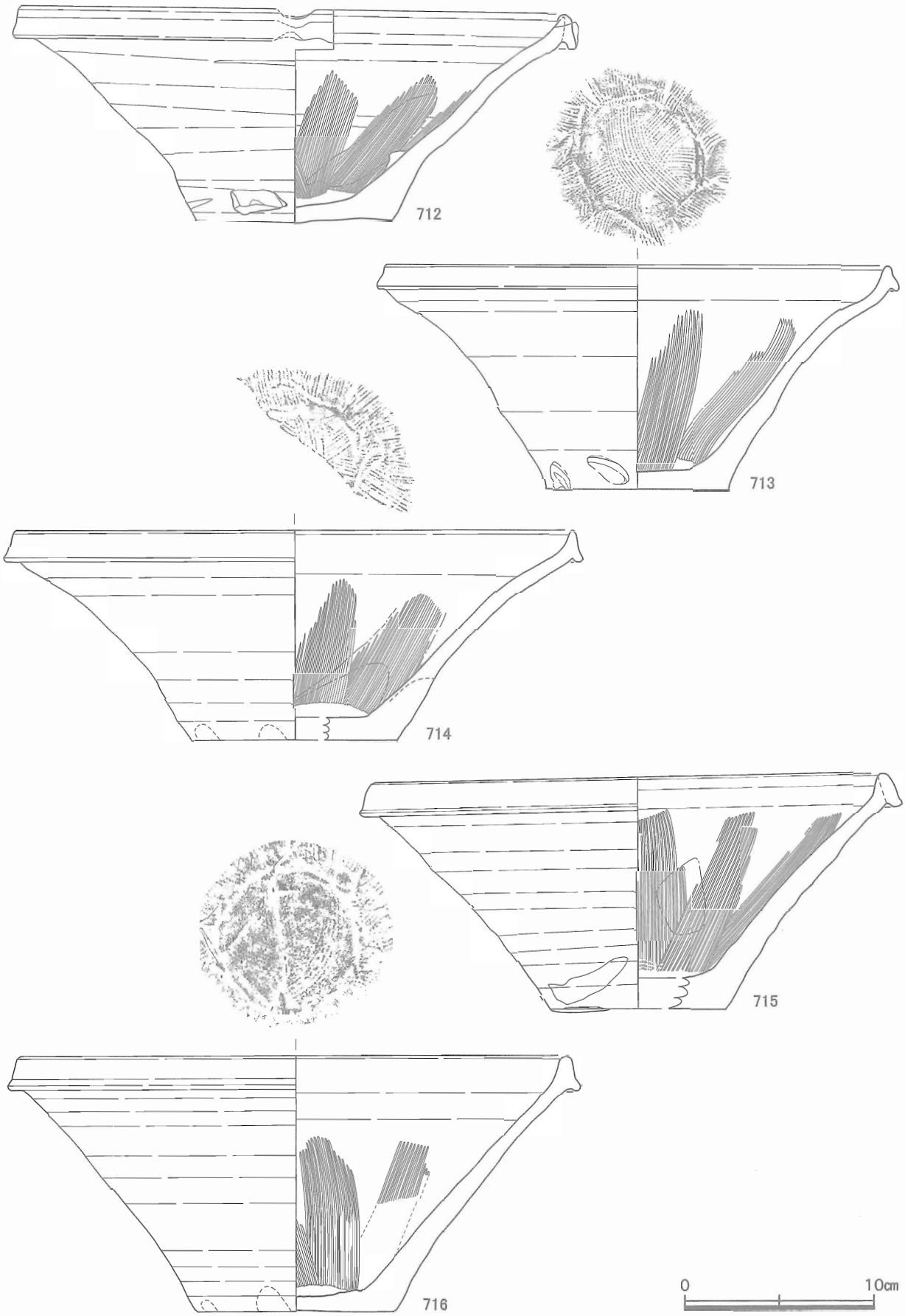
写真14　瓦



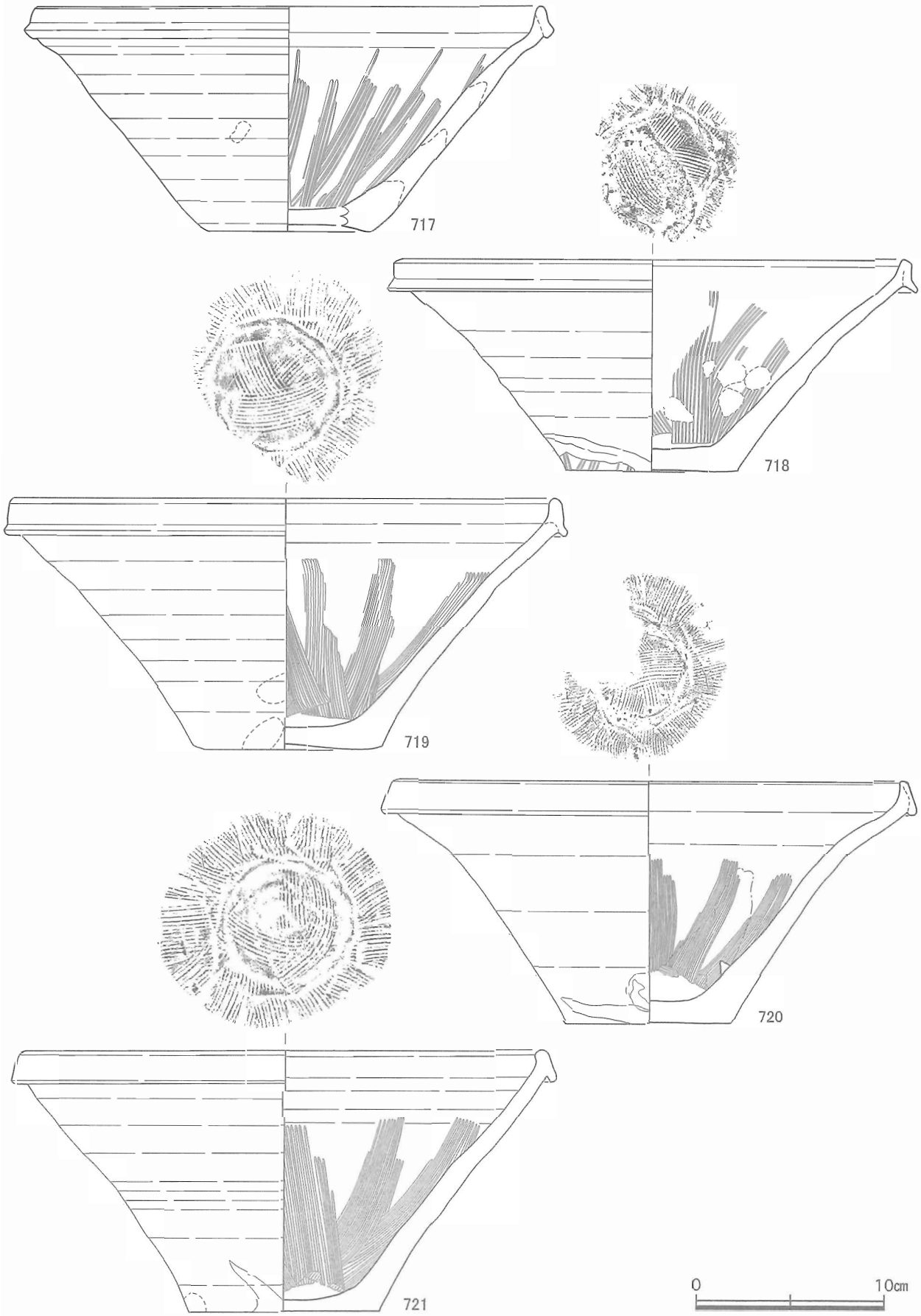
第41図　出土遺物32(擂鉢１)



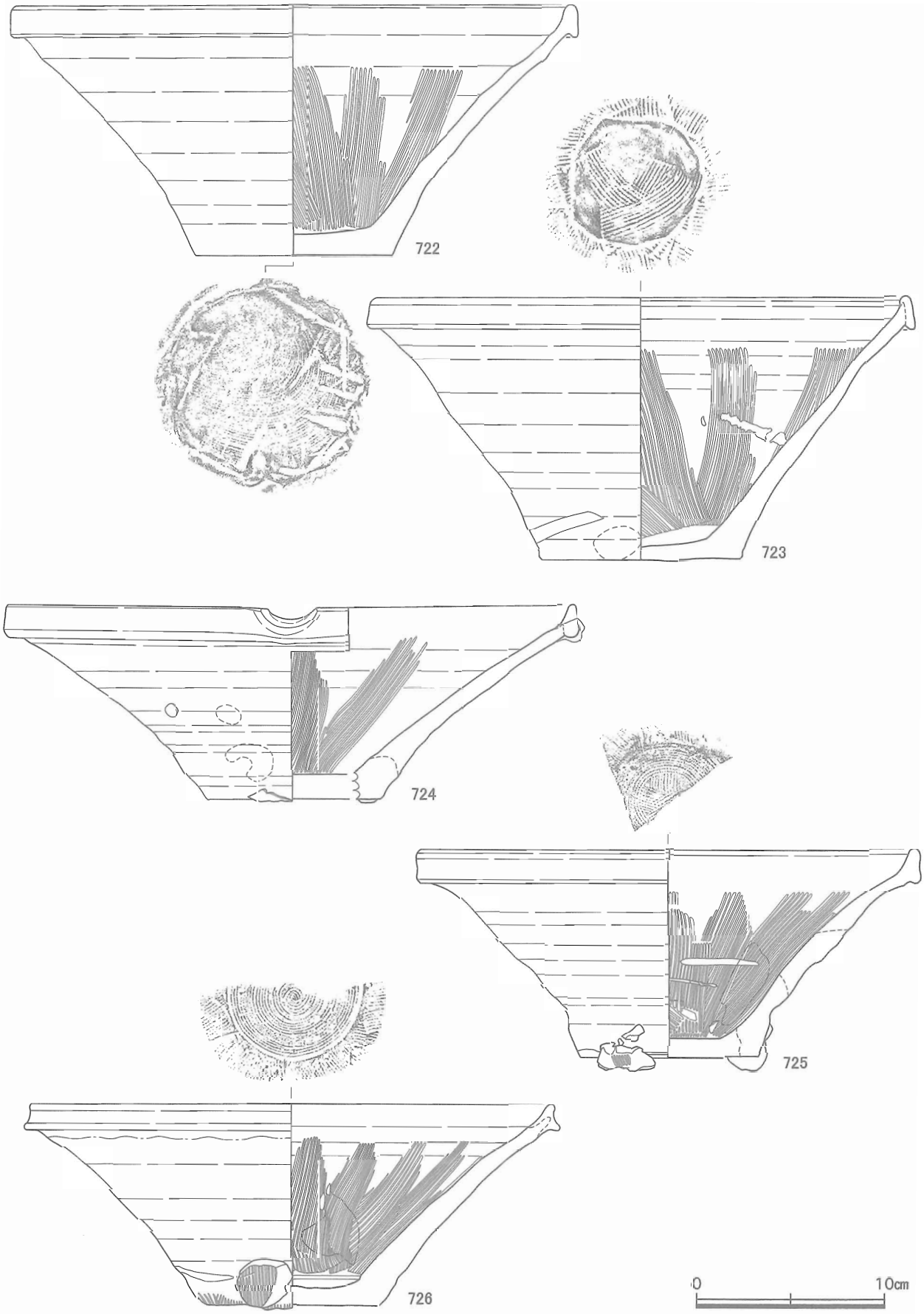
第42図　出土遺物33（擂鉢２）



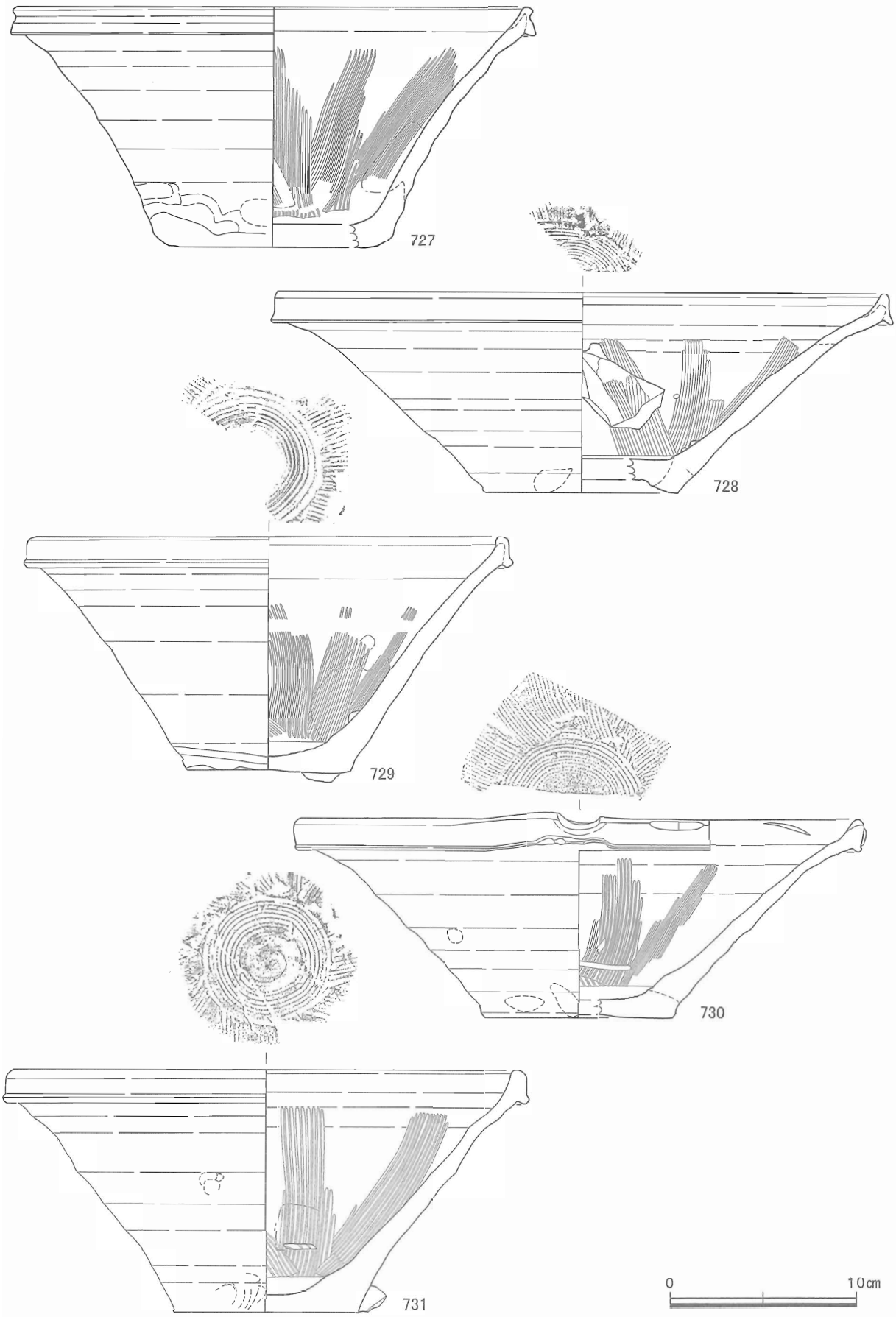
第43図　出土遺物34(擂鉢３)



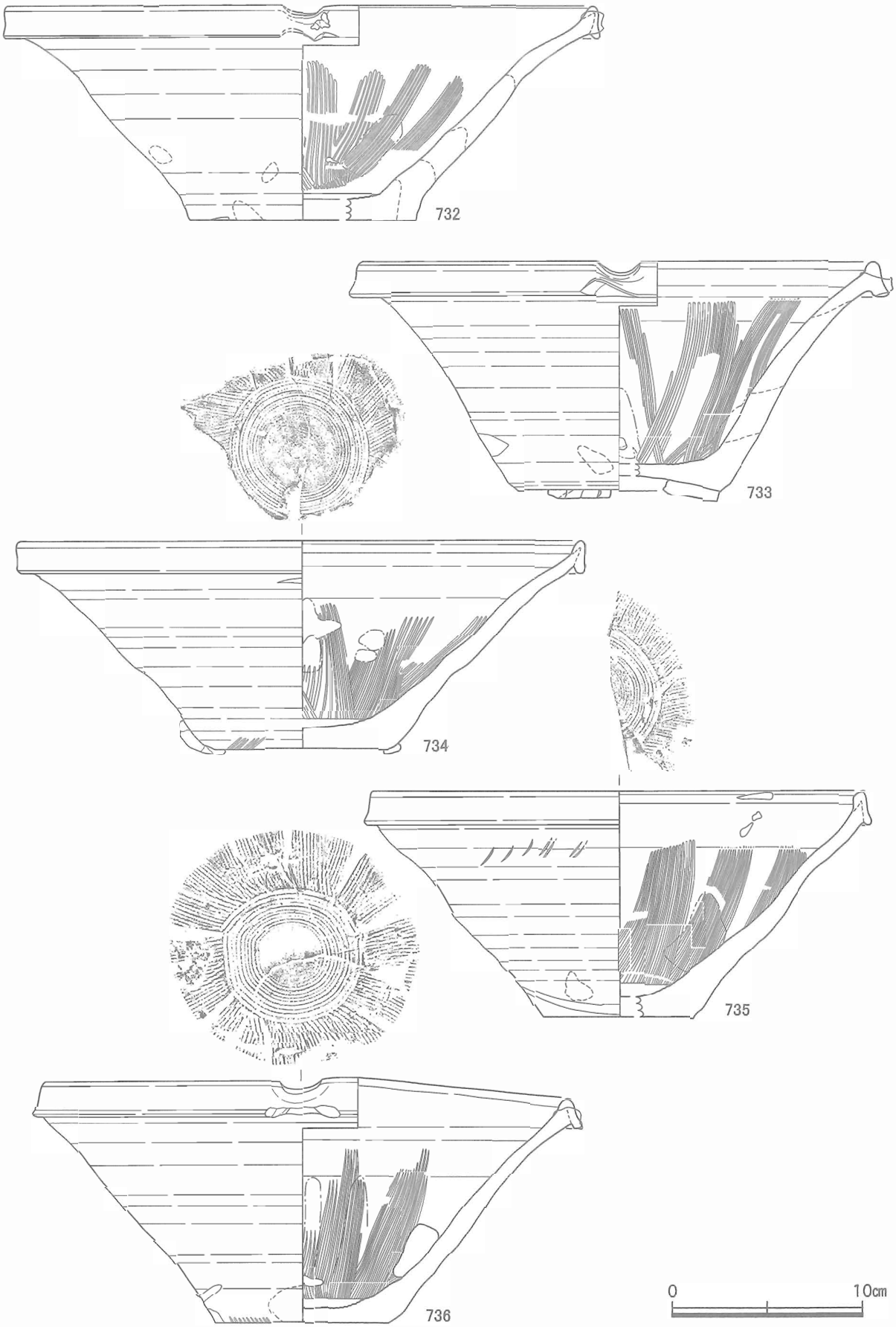
第44図　出土遺物35(擂鉢４)



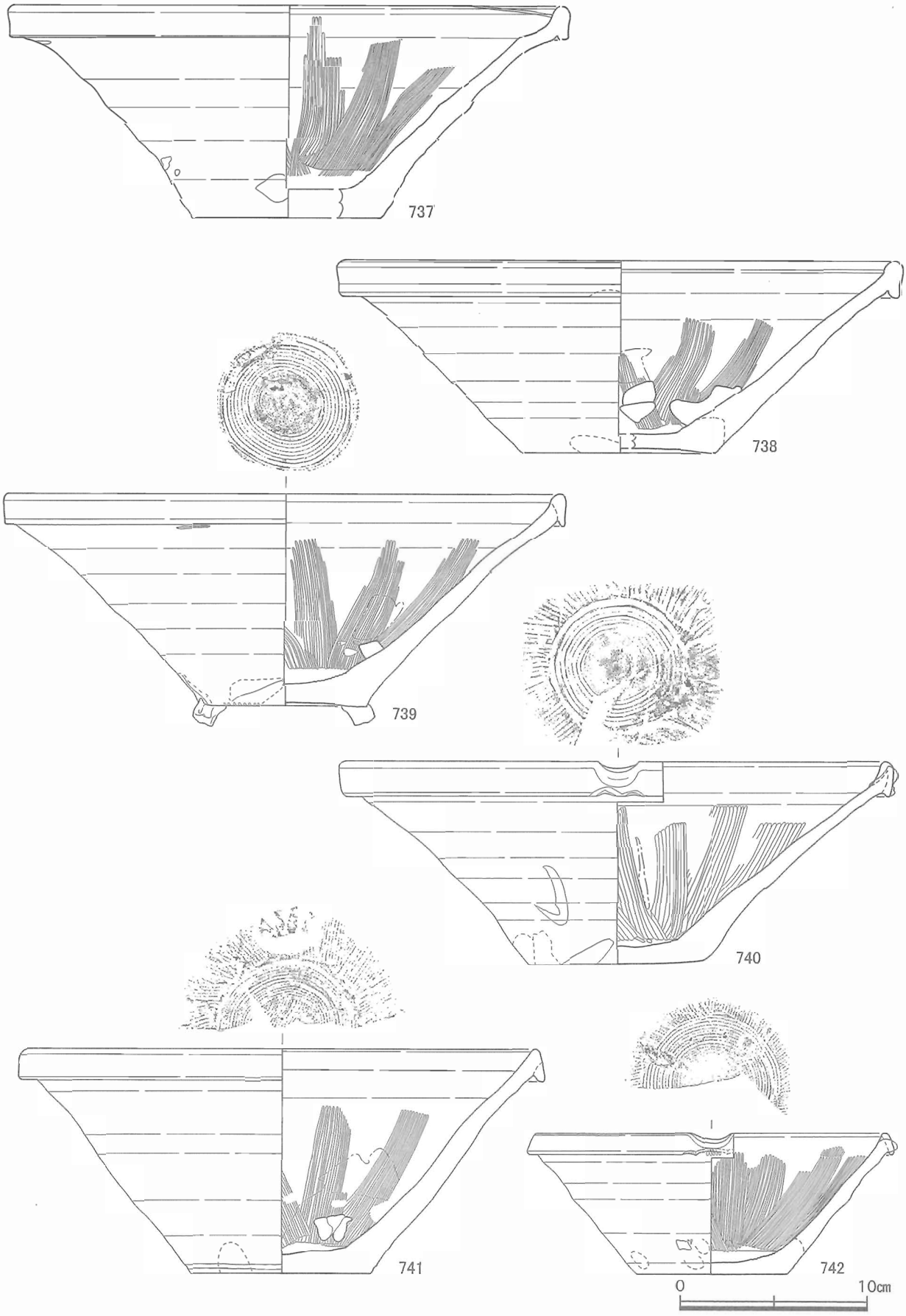
第45図　出土遺物36(擂鉢５)



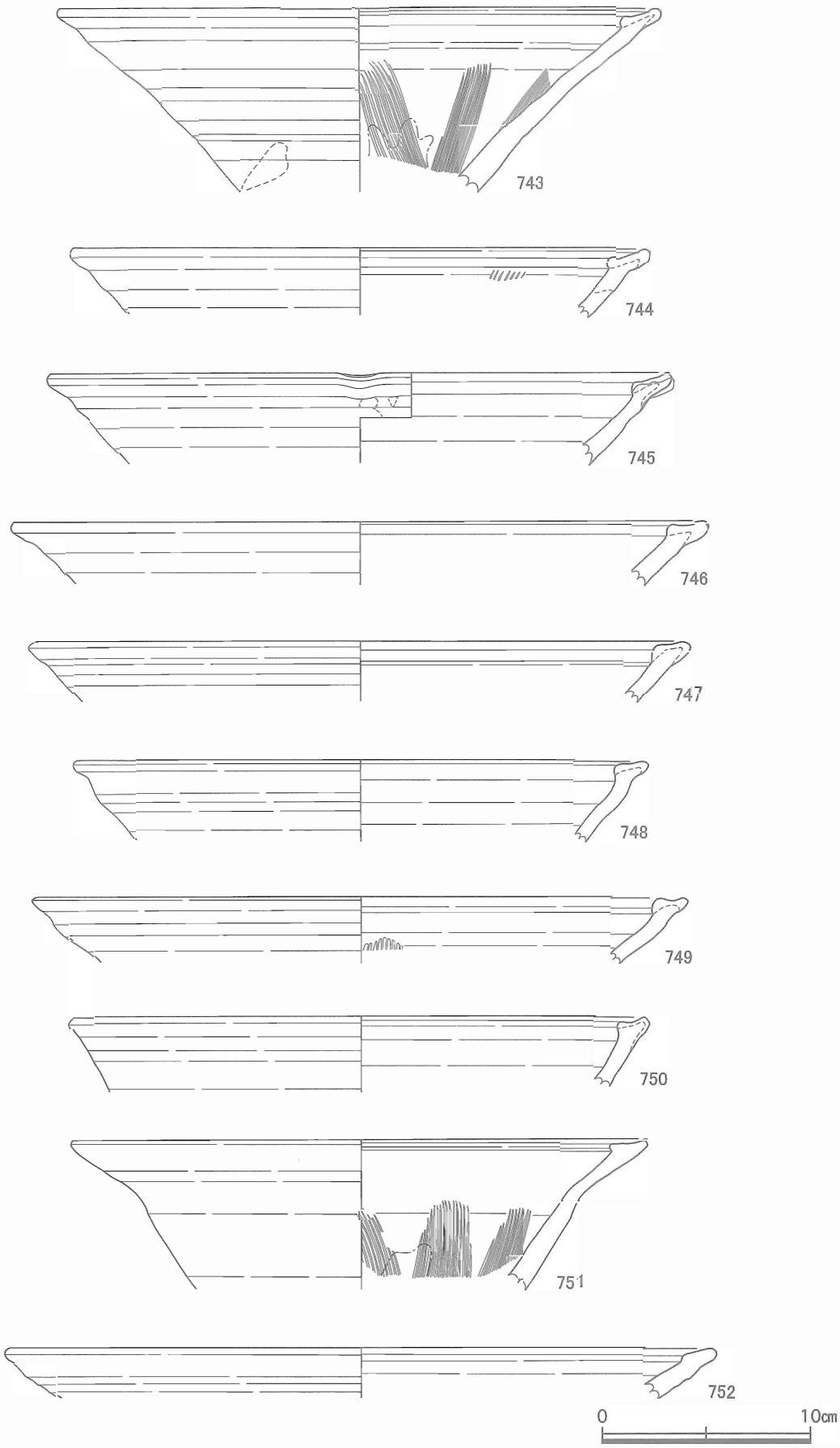
第46図　出土遺物37(擂鉢６)



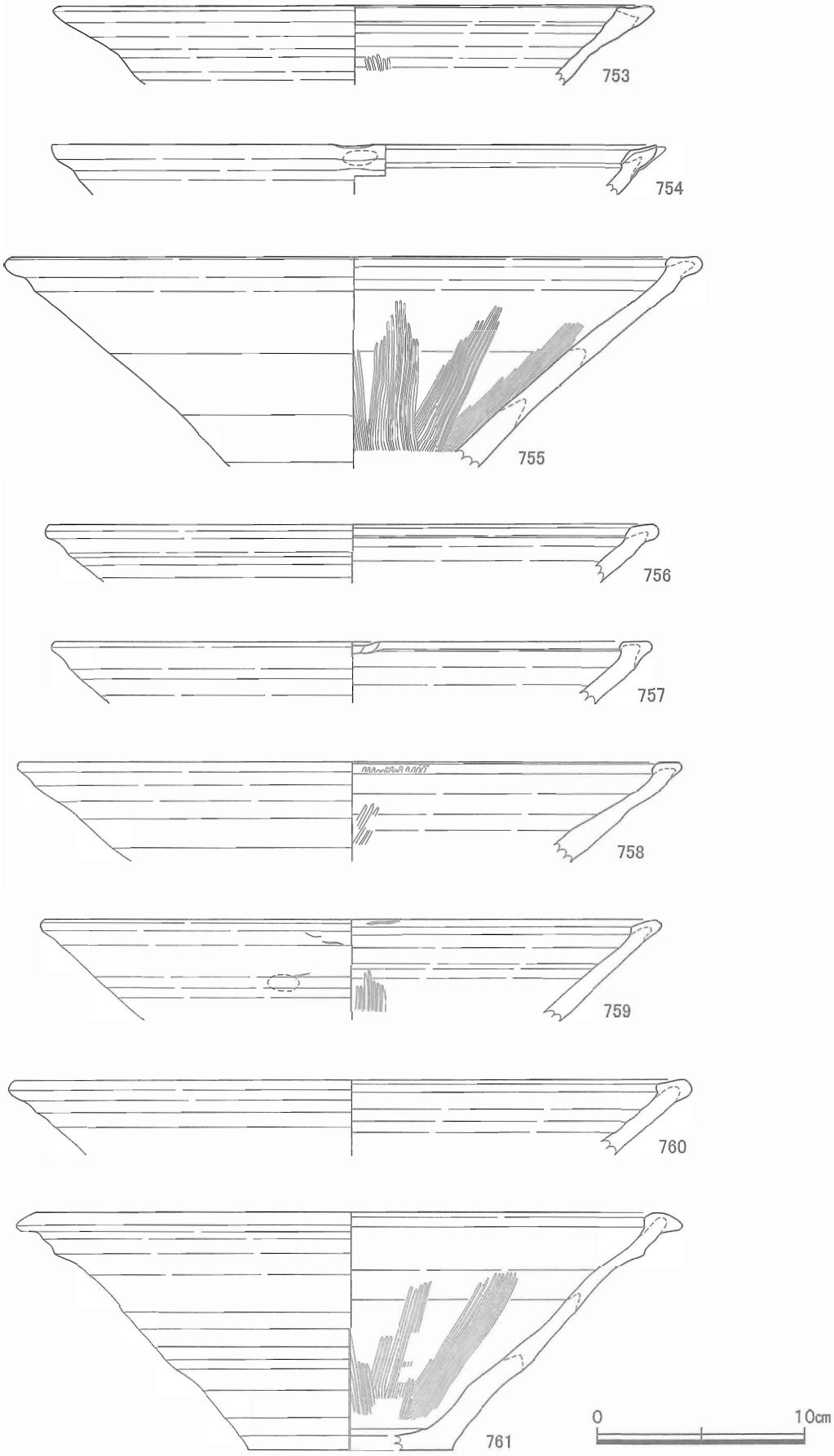
第47図　出土遺物38(擂鉢７)



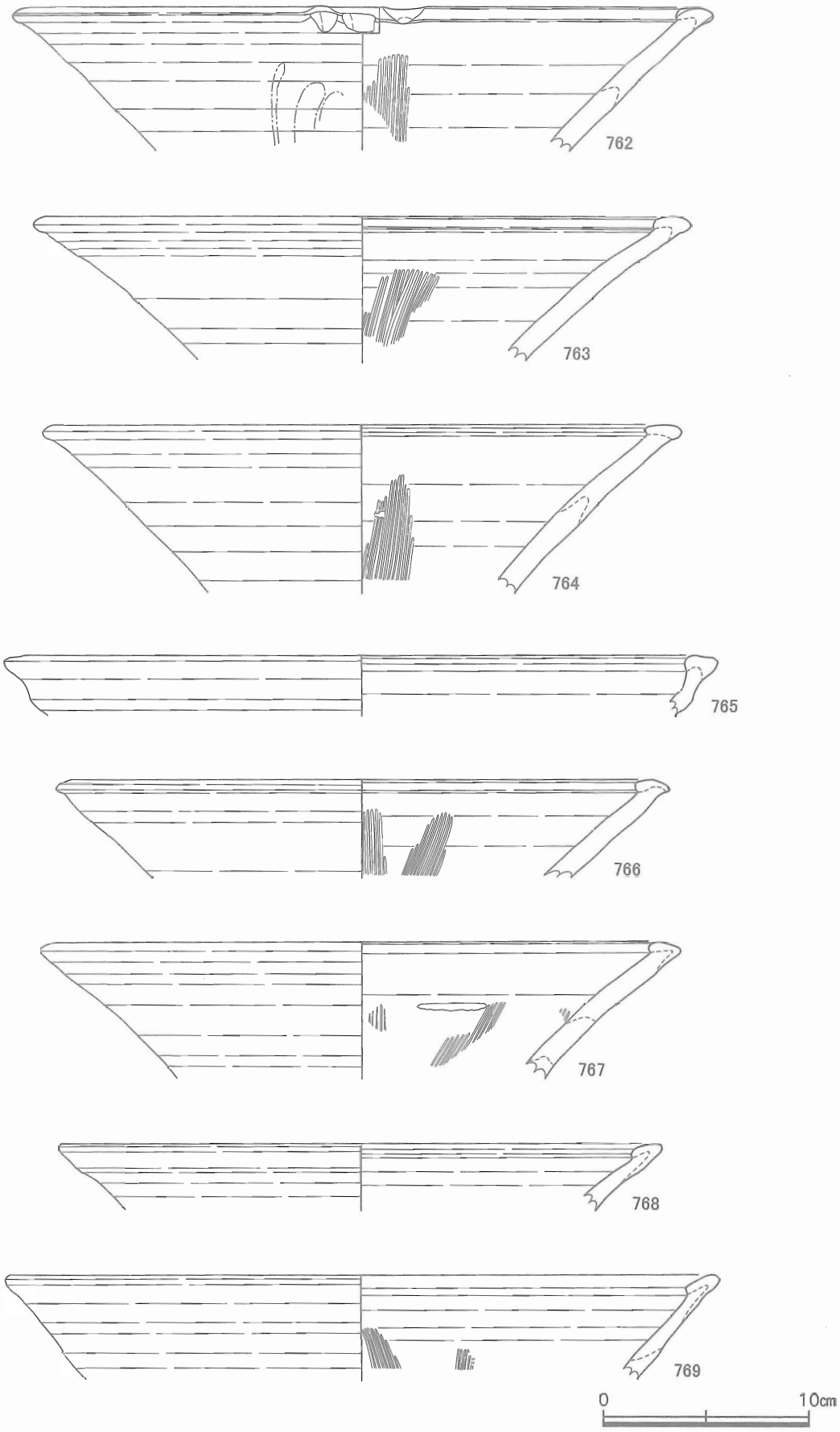
第48図　出土遺物39(擂鉢８)



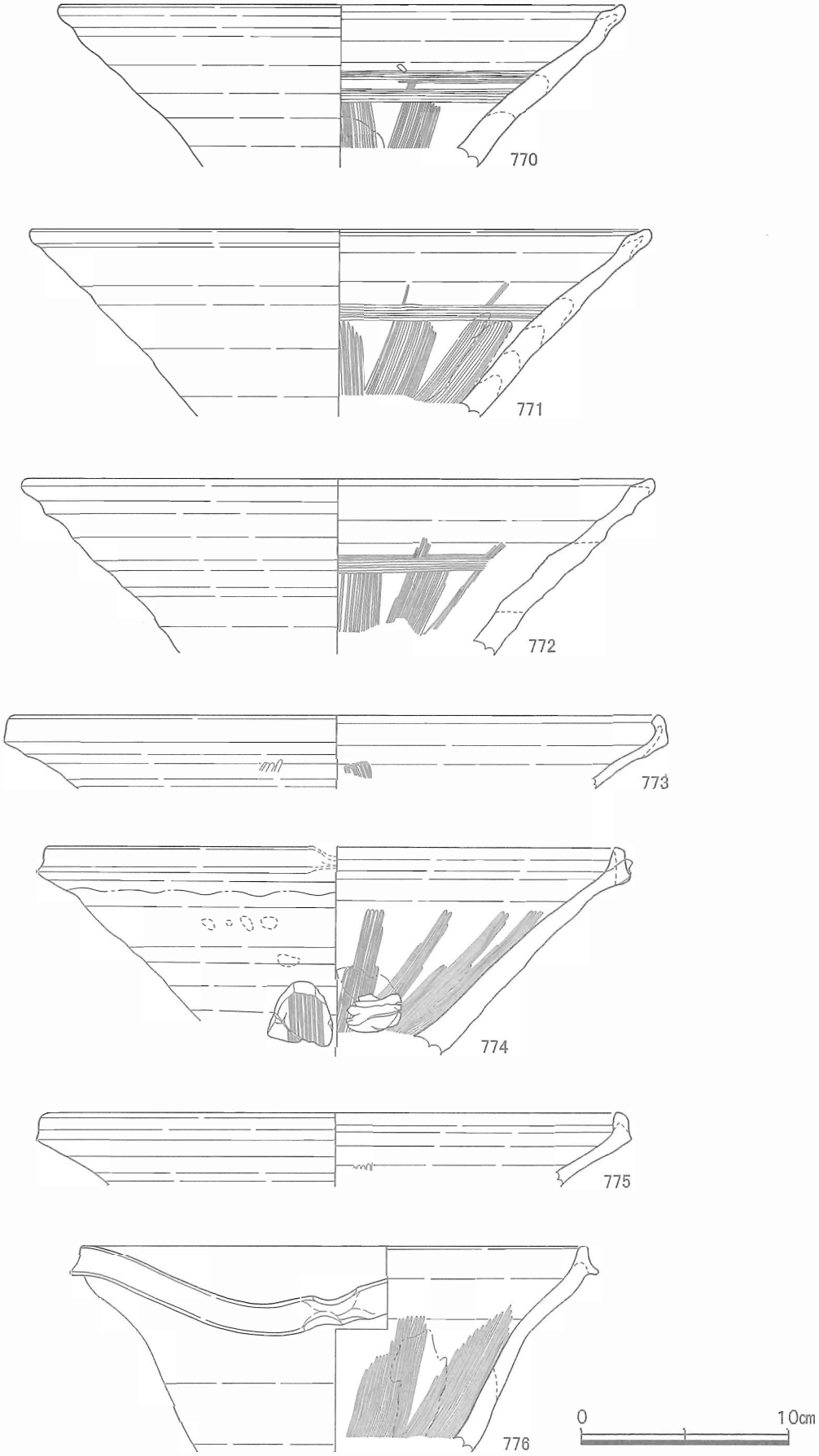
第49図　出土遺物40(擂鉢９)



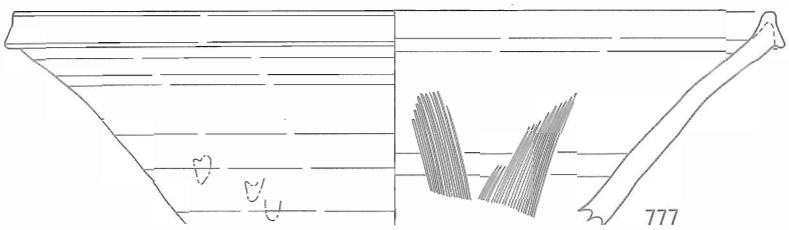
第50図　出土遺物41(擂鉢10)

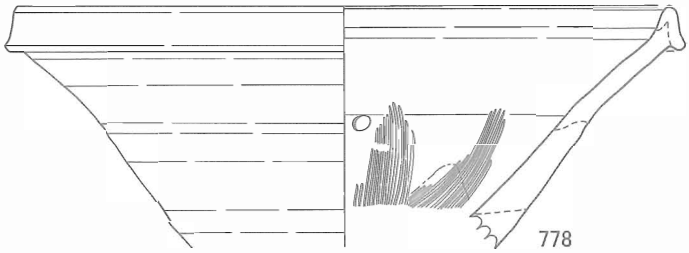


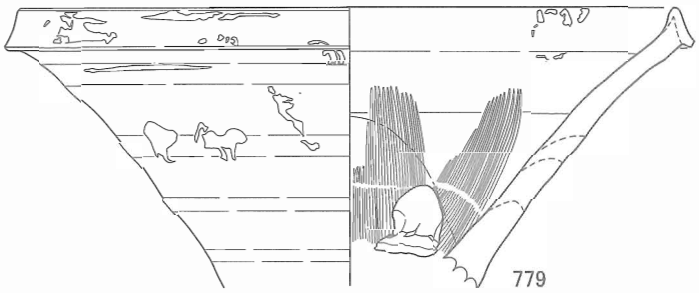
第51図　出土遺物42(擂鉢11)

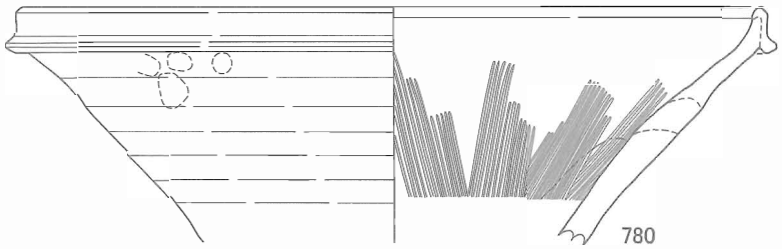


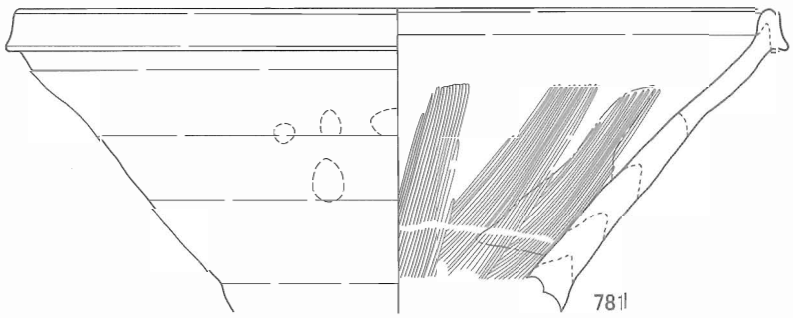
第52図　出土遺物43(擂鉢12)



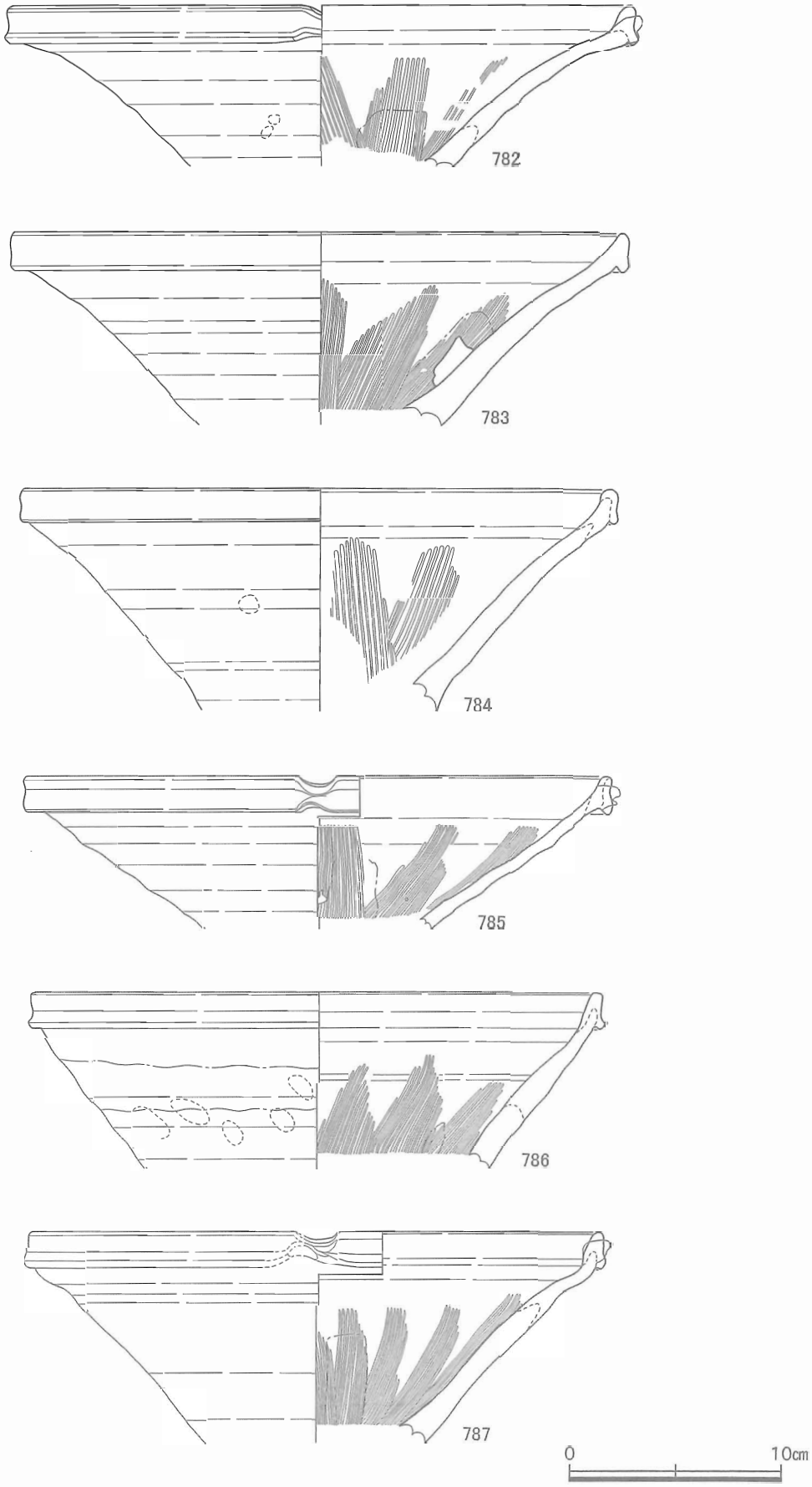




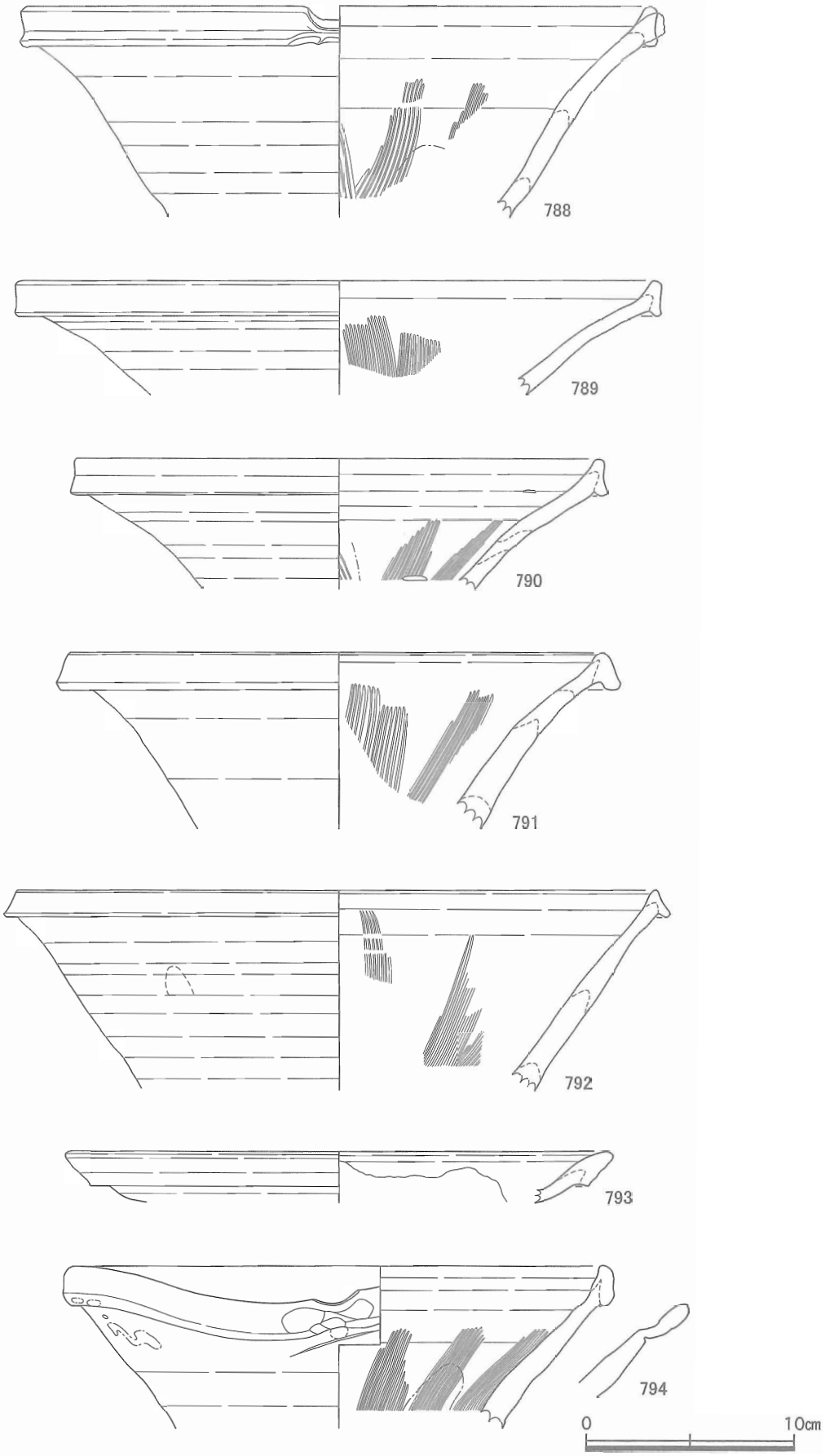




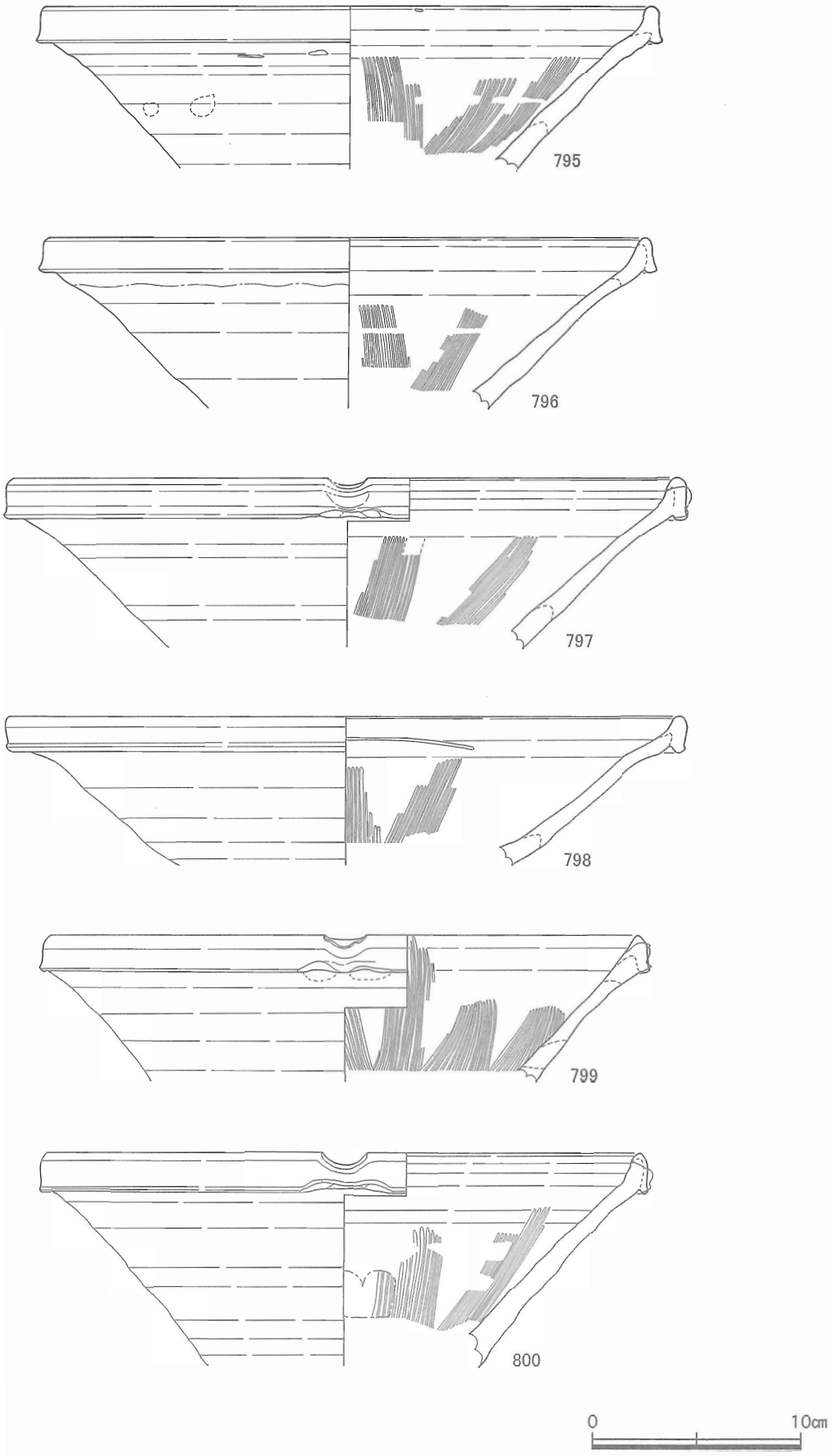
第53図　出土遺物44(擂鉢13)



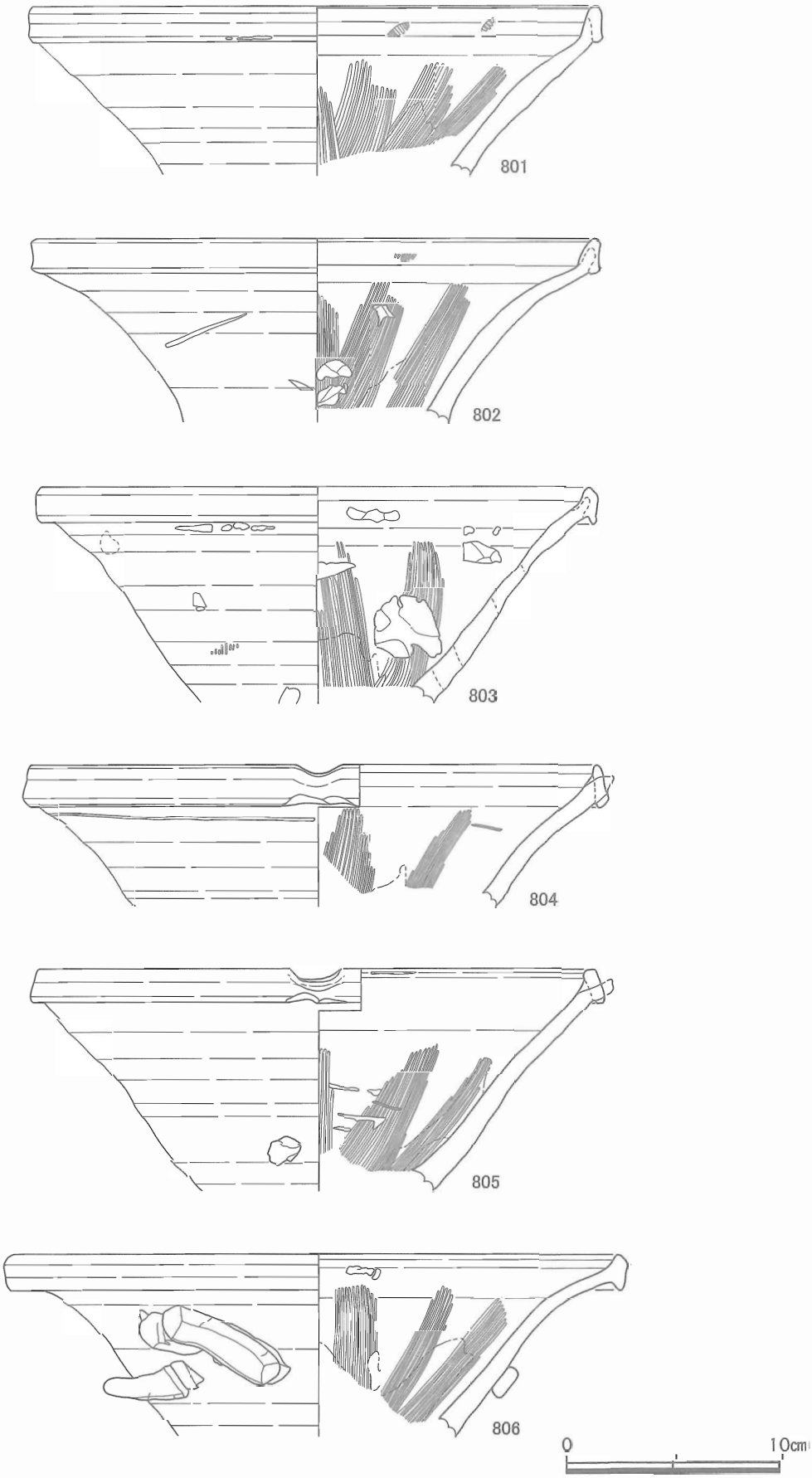
第54図　出土遺物45（擂鉢14）



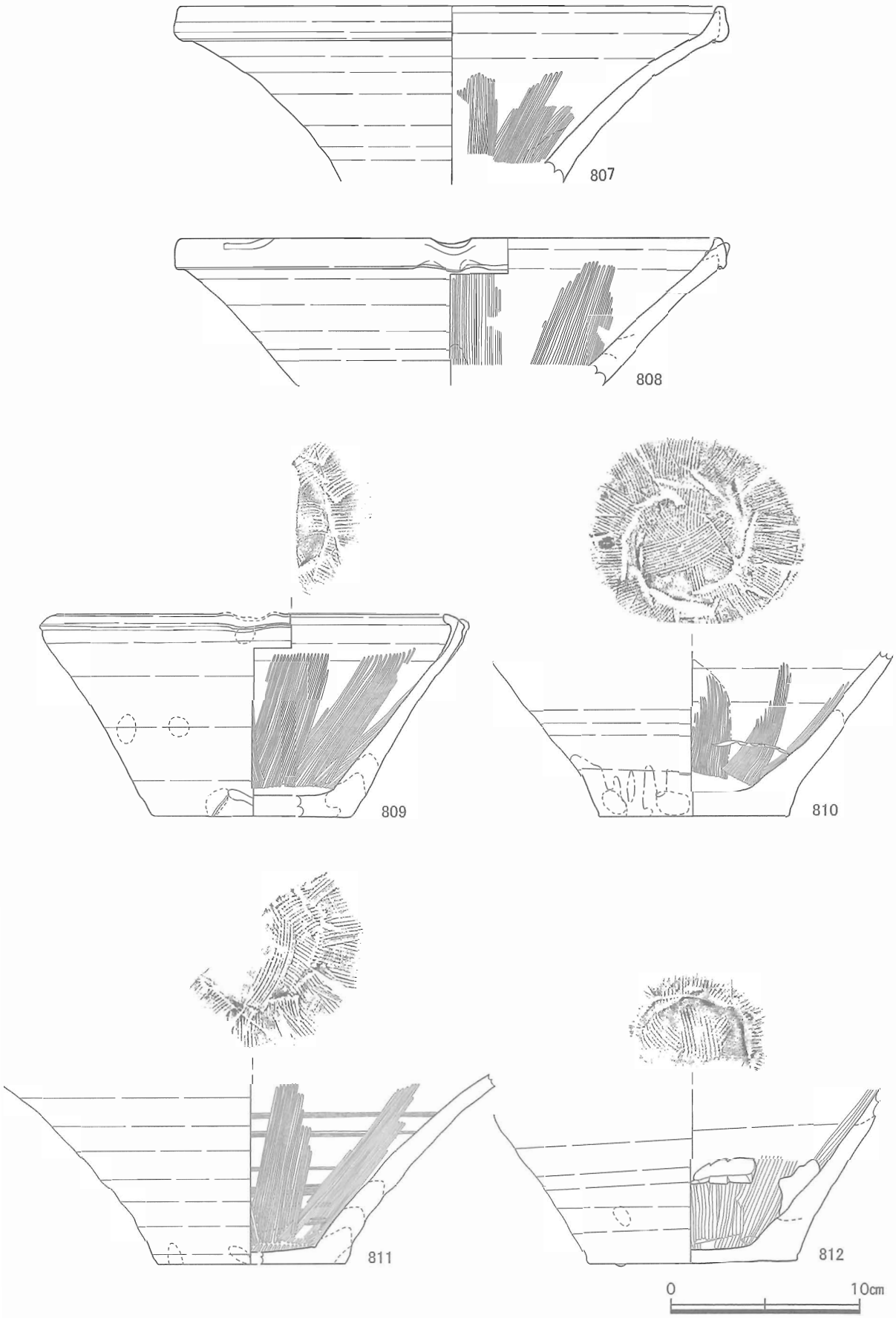
第55図　出土遺物46(擂鉢15)



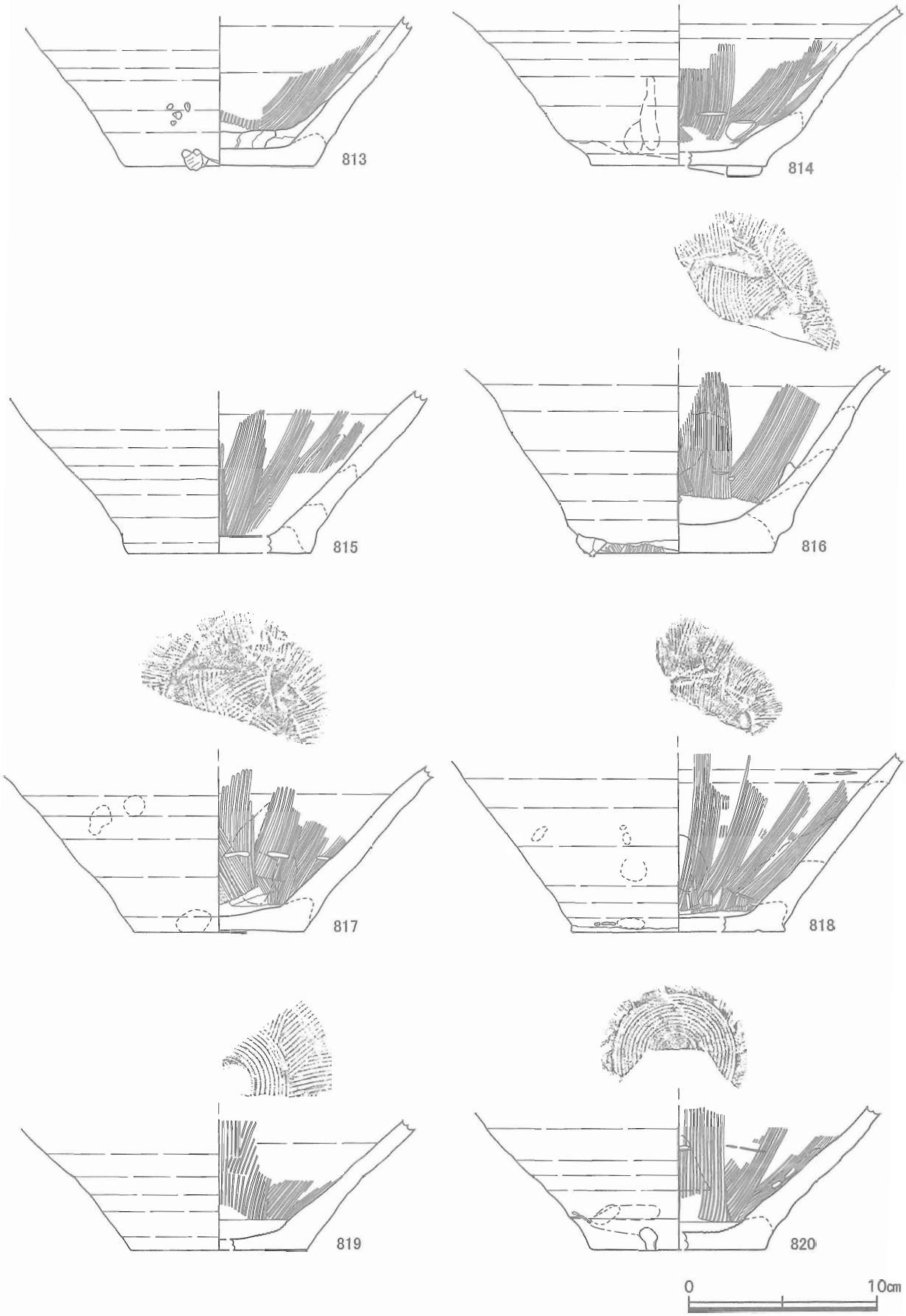
第56図　出土遺物47(擂鉢16)



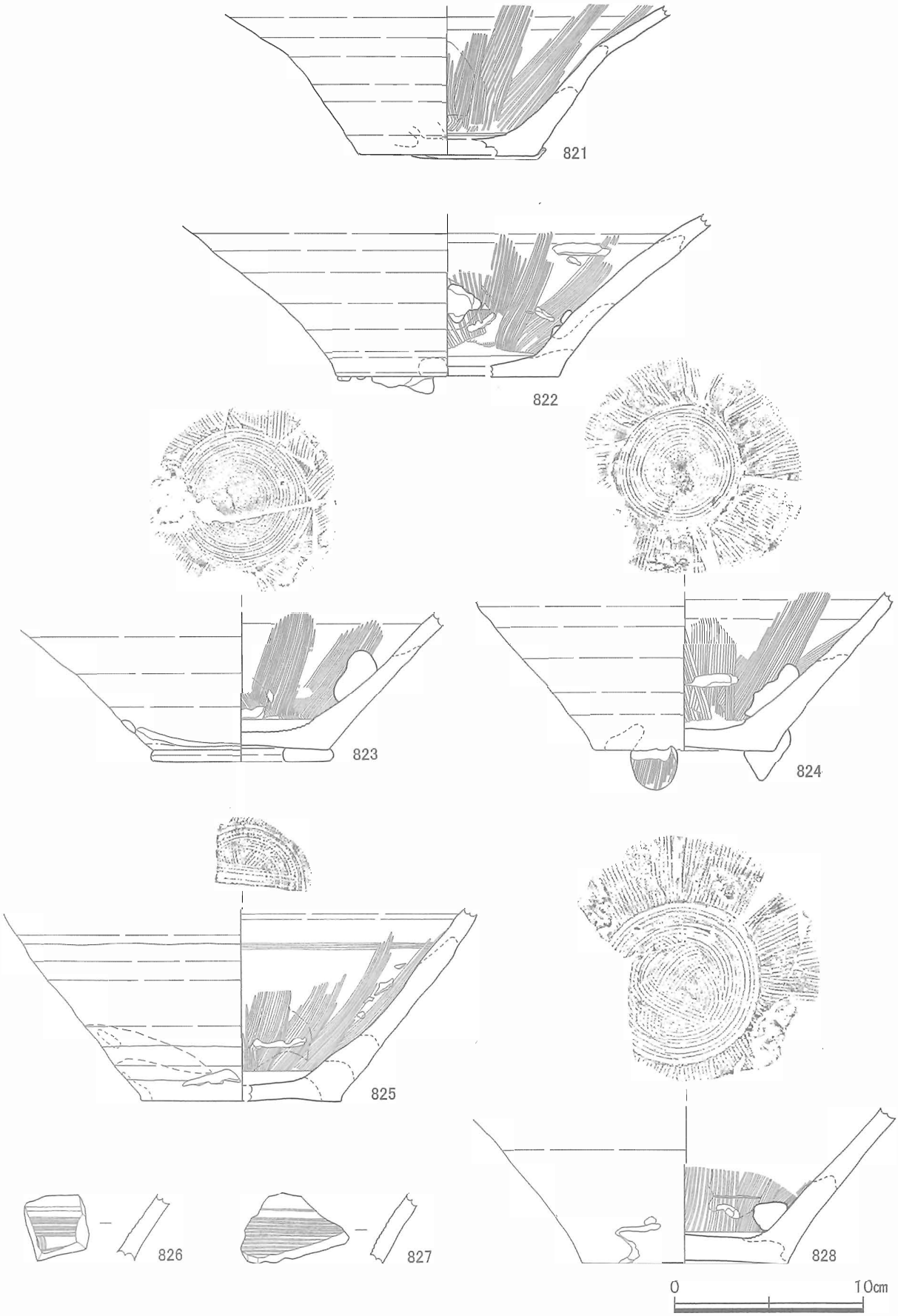
第57図　出土遺物48(擂鉢17)



第58図　出土遺物49(擂鉢18)



第59図　出土遺物50(擂鉢19)



第60図　出土遺物51（擂鉢20）

蓋物(517)　517は鉄釉を用いるが透明感のある褐色に発色し、内面と底部は露胎のまま残される。薄手に挽き出され、体部と底部の接点も鋭利となり丈も高い。高台はヘラケズリ後に付けられる。18世紀代のもので、蓋536などがセットになると思われる。

(9)窯道具(829～897)　窯道具は、匣鉢、匣鉢蓋、輪ドチが確認されている。

匣鉢(829～862)　匣鉢は、この窯で焼かれたものとしては最も多く、総重量でおよそ4,814kgを測る。すべて平底で、丸底はみとめられない。口径は10cm前後、13cm前後、15cm前後、18～20cm程度と少なくとも4つのピークがあるようにみえるが、それぞれの大きさは漸移的に移行する。いずれの場合も複数の器高が備えられており、その組み合わせは都合10～12種類程度になると思われる。すべての底部片について、最大径を4区分して集計した場合、口径を12～16cm台前半の個体(匣鉢C)だけで全体量のおよそ95パーセントを占める(第4表)。口径15cm前後、高さ7～10cmのものには、2～3枚を重ね焼する丸皿Ⅱ類が溶着する例が頻繁にある。旧金谷町の調査事例では水滴を複数個入れる例も知られる。高さ10cm程度以上のものは、丸皿と天目茶碗各1個が重ねて入れられるサイズだろう。また、846には高台痕のある輪ドチが溶着している。恐らく丸碗か筒形碗のものであろう(写真15)。これより小さな匣鉢(匣鉢D)に入る器種はごく限られる。今回の出土品では、水滴など小型でかつ丈の低いものとなろう。一方、大型の匣鉢(匣鉢A・B)では、858・860・894のように中皿が焼かれている。

匣鉢は、熱によってひしゃげたものや潰れたもの、底がダレるものが散見される。これらは中に製品が込められており、温度の過剰な上昇によって重みに耐えられなくなって変形したものとみられる。上げ底状にみえるもの(835・836・840・841・847・848・850・851・853・859・861)は、底部外面に太い輪ドチや焼き台を溶着するもので、最も下位にあったものとみられる。これらに付く輪ドチや焼き台は、底径よりもいずれも小さい。焼成中に、輪ドチなどのあたる中央部が元位置にとどまり、外縁が安定する位置まで変形して落ちた結果がこのような形を生んでいる。859についても、より小さな匣鉢の上に重ねられたため体部が歪んで垂れている。一方、丸底にみえるもの(833・834・856・858・860)は、逆に底部外縁が元位置にとどまって中心付近が内容物の重量に負けて下位に垂れたものである。858・860は底が垂れた結果、下位の匣鉢に込められていた中皿の口縁が溶着する。体部が丸いものや著しく内傾するもの(839～841・853～855・861)は、上位に重ねられた匣鉢の重量を支えきれなくなって焼け歪んだものである。

整形は、ロクロ上で行われる。底径とほぼ同一な円板を据えて、その外縁に3～5回程度に分けて体部を輪積みする。体部の整形は粗雑でノタメが著しく、場合によっては輪積み痕が消されずに残る例がある。口唇部の断面形状は矩形であるが、いずれも内傾している。蓋をかぶせた場合、接点が少なくなるよう計らわれているのだろう。

写真15　846付着輪ドチに残された高台痕

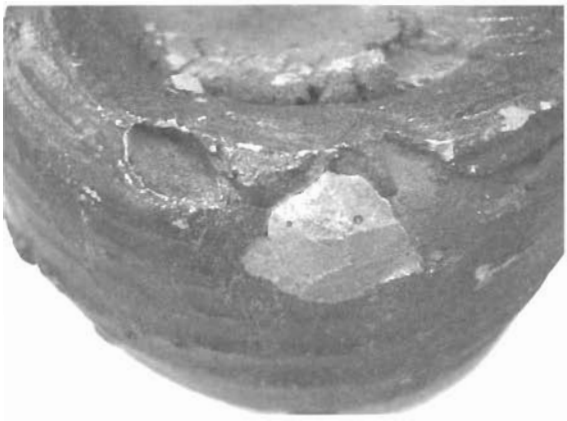
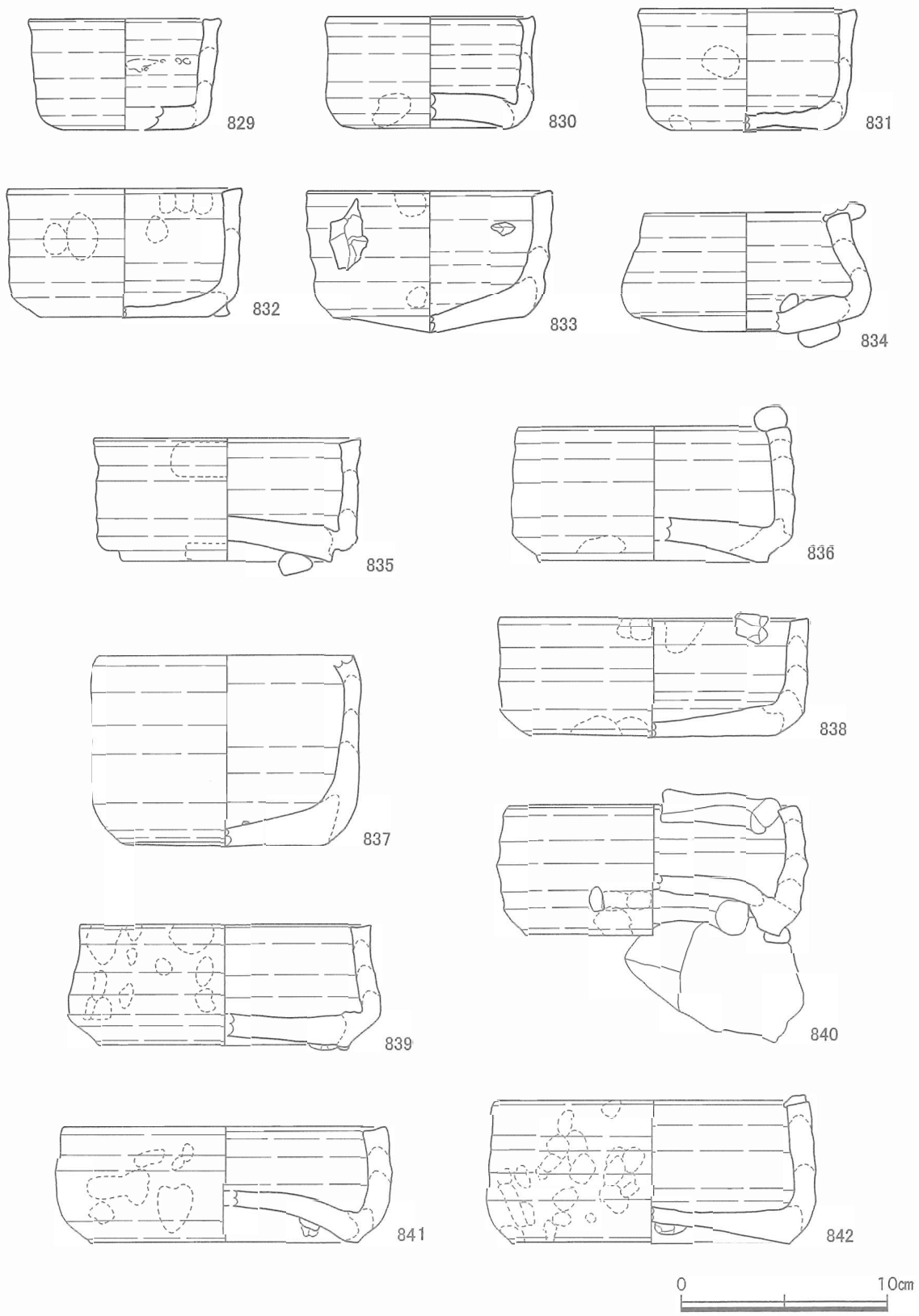
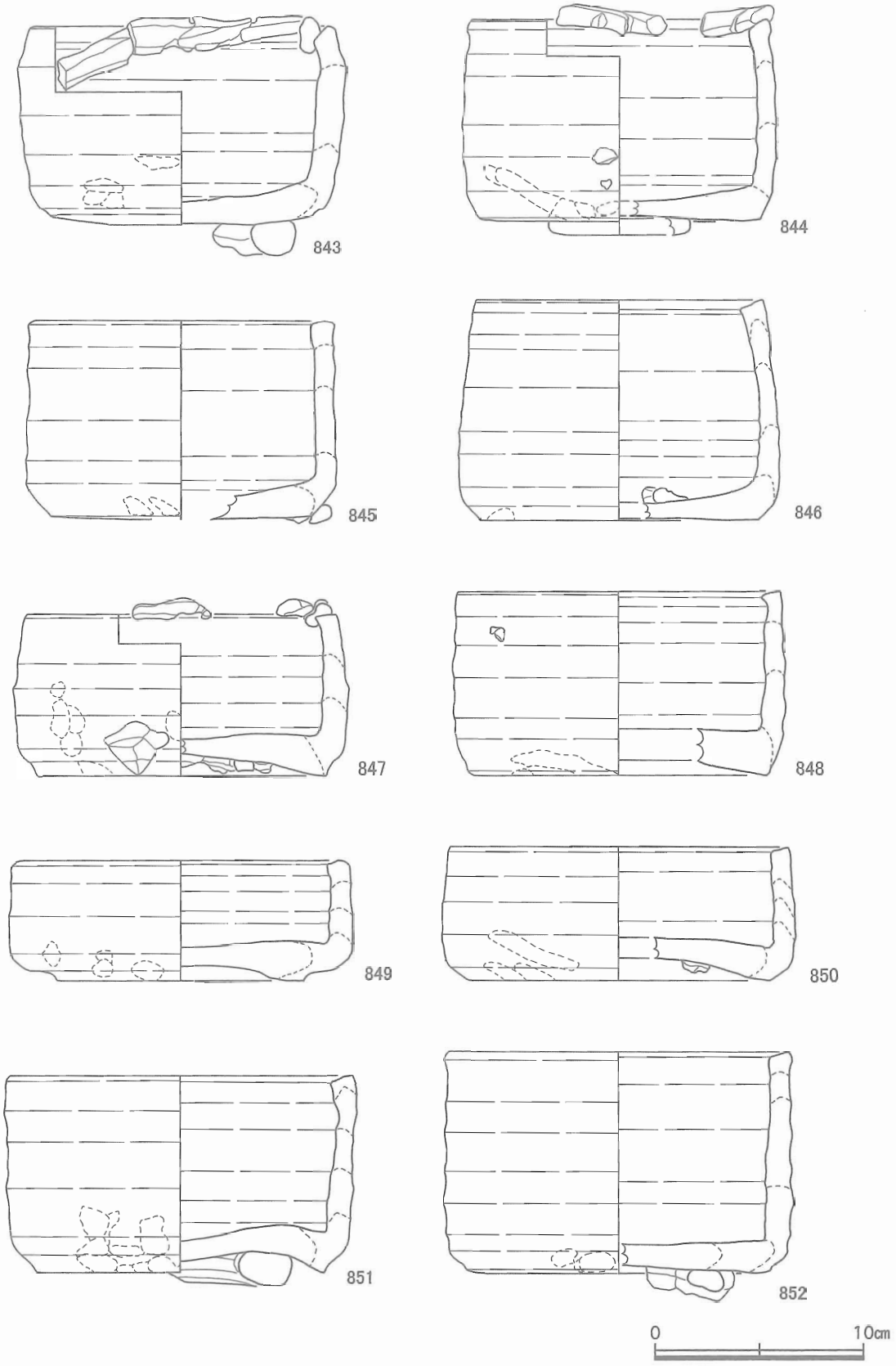


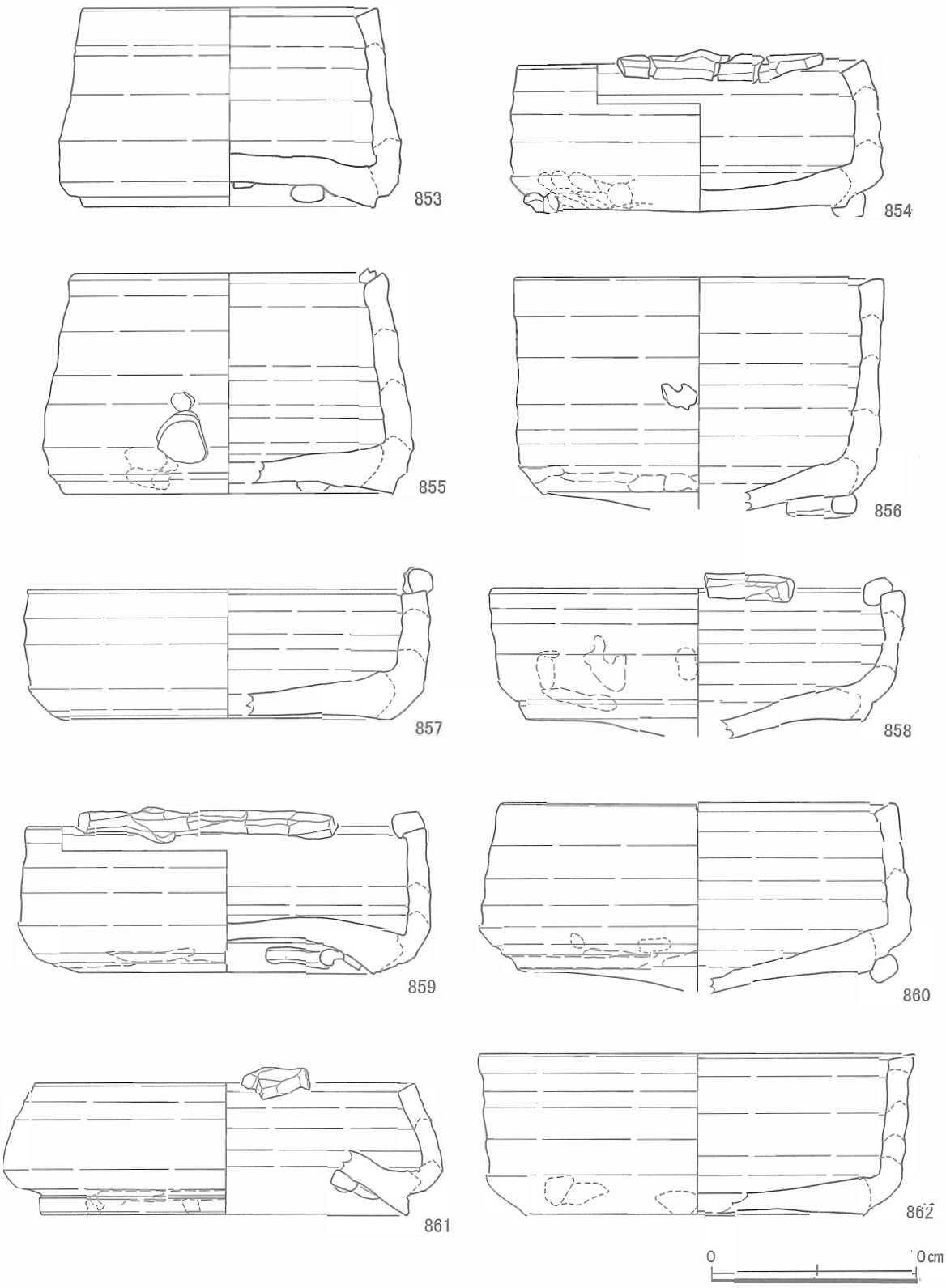
写真16　体部末端の指頭痕



第61図　出土遺物52(匣鉢１)



第62図　出土遺物53(匣鉢２)



第63図　出土遺物54(匣鉢３)

ロクロからの切り離しは糸切りで行われる。糸切り痕は未調整のまま残される。体部下端には、擂鉢の場合と同様な、持ち上げる際に強くつかんだことによる指頭痕が観察される。中には、指先を突き立てている例もある(写真16)。

匣鉢の積み重ね面は直径1㎝程度の撚土を用いて目止めされる(834・836・840・842～845・847・854～861)。

匣鉢蓋(863～874)　匣鉢蓋は粘土柱から糸切りした円板状のもの(Ⅰ類)と、皿状のもの(Ⅱ類)がある。

Ⅰ類は匣鉢Cに掛けられる直径13～14㎝、厚さ1.5㎝前後が一般的で、これより大きなもの・小さなものはごく少ない。輪ドチや撚土が両面に溶着した例が多くみられることは、ひっくり返しながら上位になる面にものを置いて、複数回にわたり繰り返し使用したことを示している。

図化した内、最も多い使用が観察できるのは871で、輪ドチを挟んで2回、その後平らな粘土塊を敷いて1回、さらにその上に輪ドチを置いて1回と表面で4回使用される。裏面は自然釉のかからない場所が中央付近に1箇所あるので、両面で都合5回は使用されている。864の表面の輪ドチには高台痕が残される。中皿を置いていた可能性がある。867の裏面の輪ドチには糸切り痕が転写される。糸切り未調整の底部をもつ小壺・耳付き水注・水滴などが置かれたのだろう。870は表面に小壺か水滴の底部が溶着する。裏面に丸皿の口縁部が溶着していることからも、丸皿を入れた匣鉢に被せられていたことがわかる。872の表面に付着する輪ドチはいずれも自然釉に覆われるので、ものを乗せない状態でも使用されている。869の裏面端には窯壁とみられる粘土塊が付着する。これに対して「ハ」字状に2本の粘土紐が渡される。粘土塊部分で1本の端が潰れているのでこれらは目地であると認められるが、匣鉢蓋としては隙間がすべてふさがれる位置ではない。866の裏面に溶着する大きな輪ドチには糸切り痕が転写されるので、擂鉢が乗せられていたと考えられる。輪ドチの端部には自然釉が掛からないので、次回の焼成時は内側であったろう。表面にはどういうわけか撚土を挟んで匣鉢が置かれる。この匣鉢の割れ口には自然釉が厚く付着するので、割れた匣鉢が溶着したまま幾度も蓋として用いられたのだろう。剥落した握り拳大の窯壁がさらに上位に溶着したことで、使い勝手が悪くなり放棄されたとみられる。

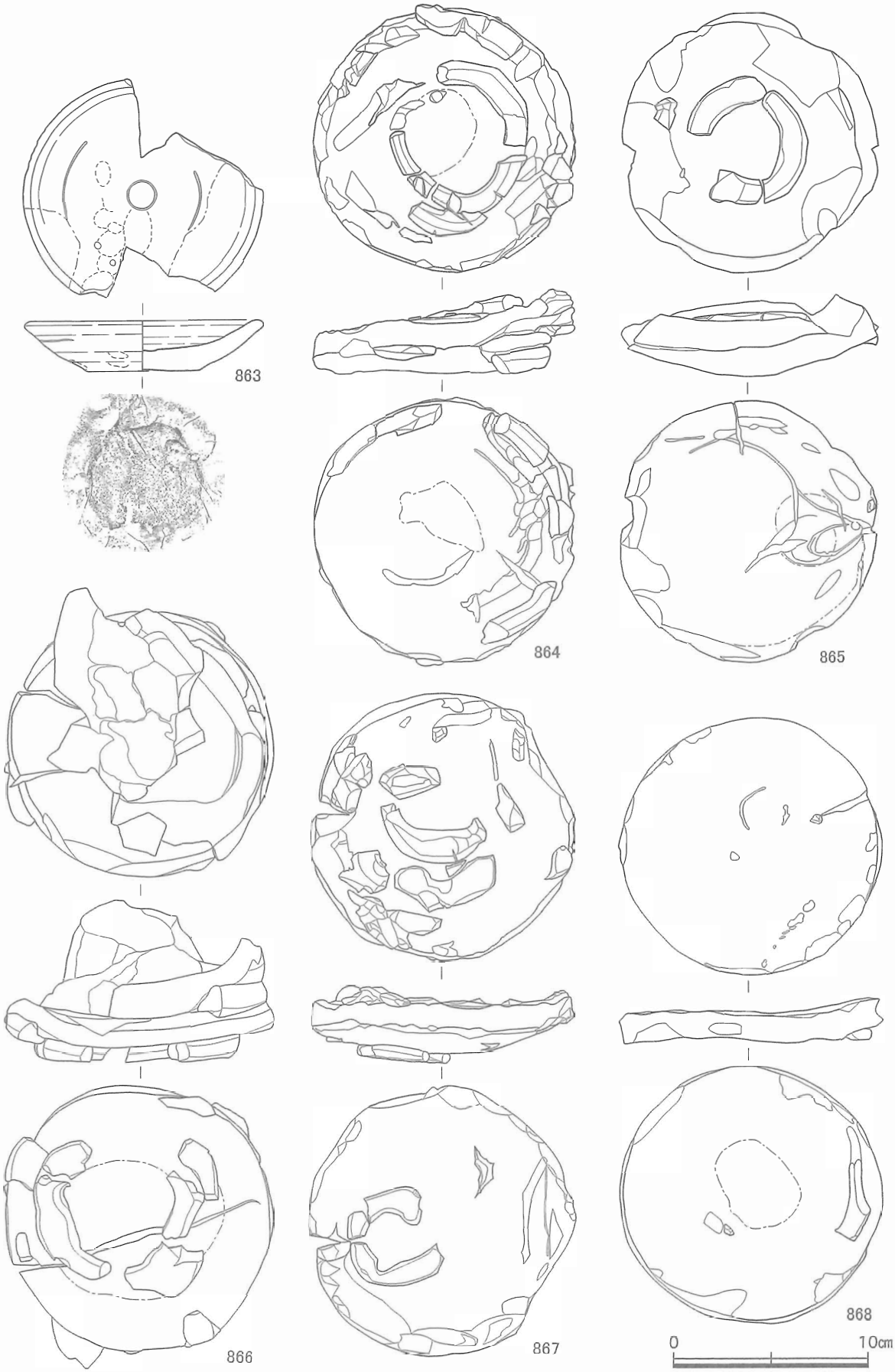
Ⅱ類は、Ⅰ類に比べ各段に少ない。863、874のように大小があり、大きな874は底部となる円板に体部を輪積みして造られる。いずれも厚手で、底部外面に糸切り痕を残す。

863の外面の口縁部直下には溶着痕がある。その範囲は直径10㎝程なので、832・833など小さな匣鉢(匣鉢D)に被せられたものだろう。また、内面にも直径7㎝程の溶着痕がある。この規模は中皿の高台径とほぼ同一である。内面中央には直径1.4㎝、深さ1㎜程度の小さなえぐりこみがある。

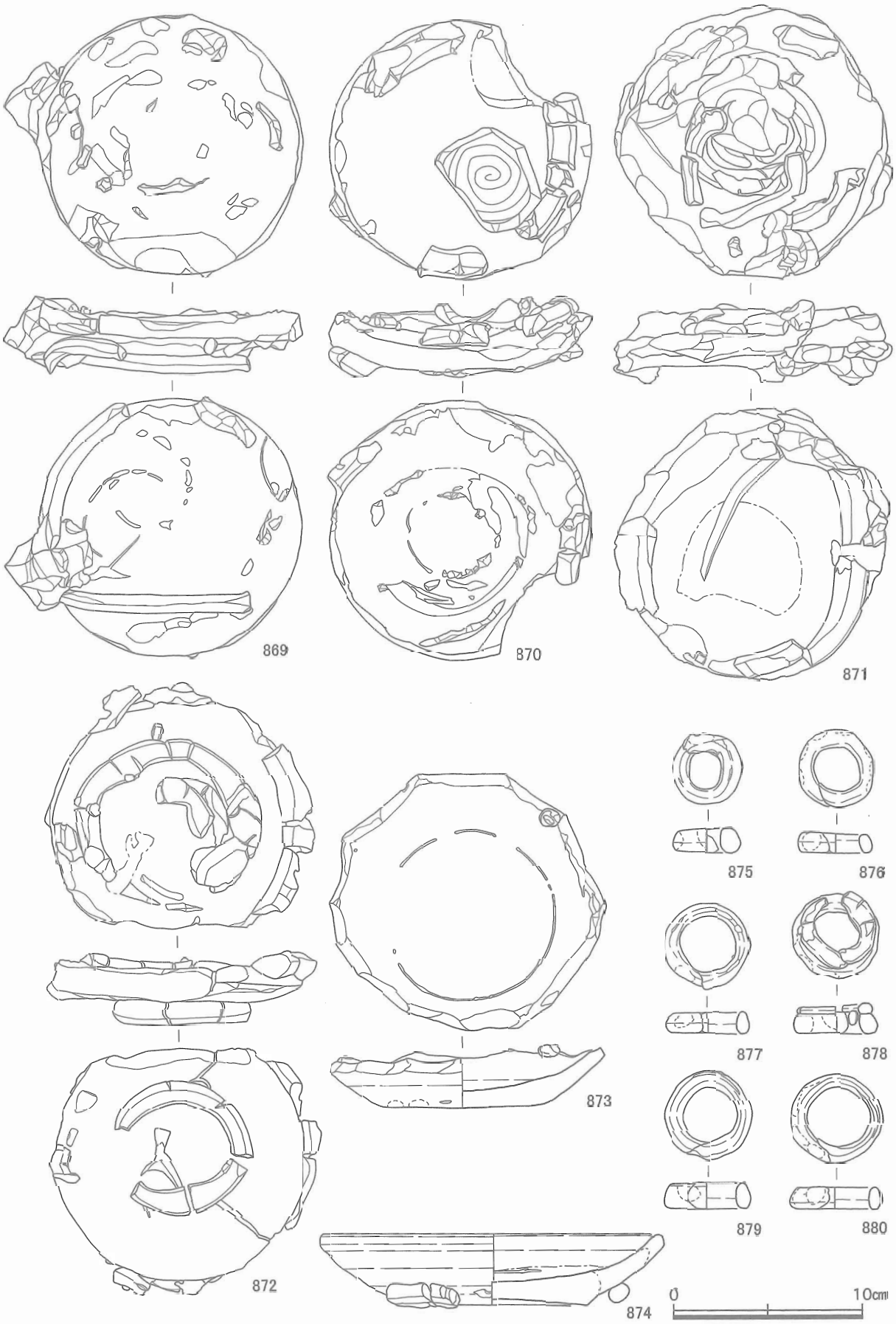
873は、本来直径20㎝近いものであったろうが、口縁部を打ち欠いて小さく調整する。内面に直径9㎝程度の溶着痕がある一方で、外面にはない。この直径は匣鉢831の口径とほぼ同一であるので、やはり匣鉢Dに覆い被せていたのだろう。874は体部外面に目地の撚土が溶着しているので、匣鉢Cに用いられたとみられる。内面には自然釉のかからない部分が広く認められるので、中皿等が恒常的に置かれていた可能性があろう。

輪ドチ(875～889)　輪ドチは碗類や皿類を焼成する際に用いられた直径4㎝程度のものが多い。877・879・880などのように断面が長楕円の粘土紐を丸めて造る場合と、円形になる場合(881・884～888)がある。重ねられた上下のうつわが溶着する場合、ほとんどがつぶれている。匣鉢内で製品がずれないように、輪ドチの柔らかいうちに重ねて上から押さえているのだろう。また、皿類には潰れることを考慮したのであろう878・882・885・888・889のように2枚を重ねて用いる例が確認されている。これは断面が円形になる場合が多く、複数枚を重ねることを前提としているようにみえる。3枚以上は今のところ認められない。

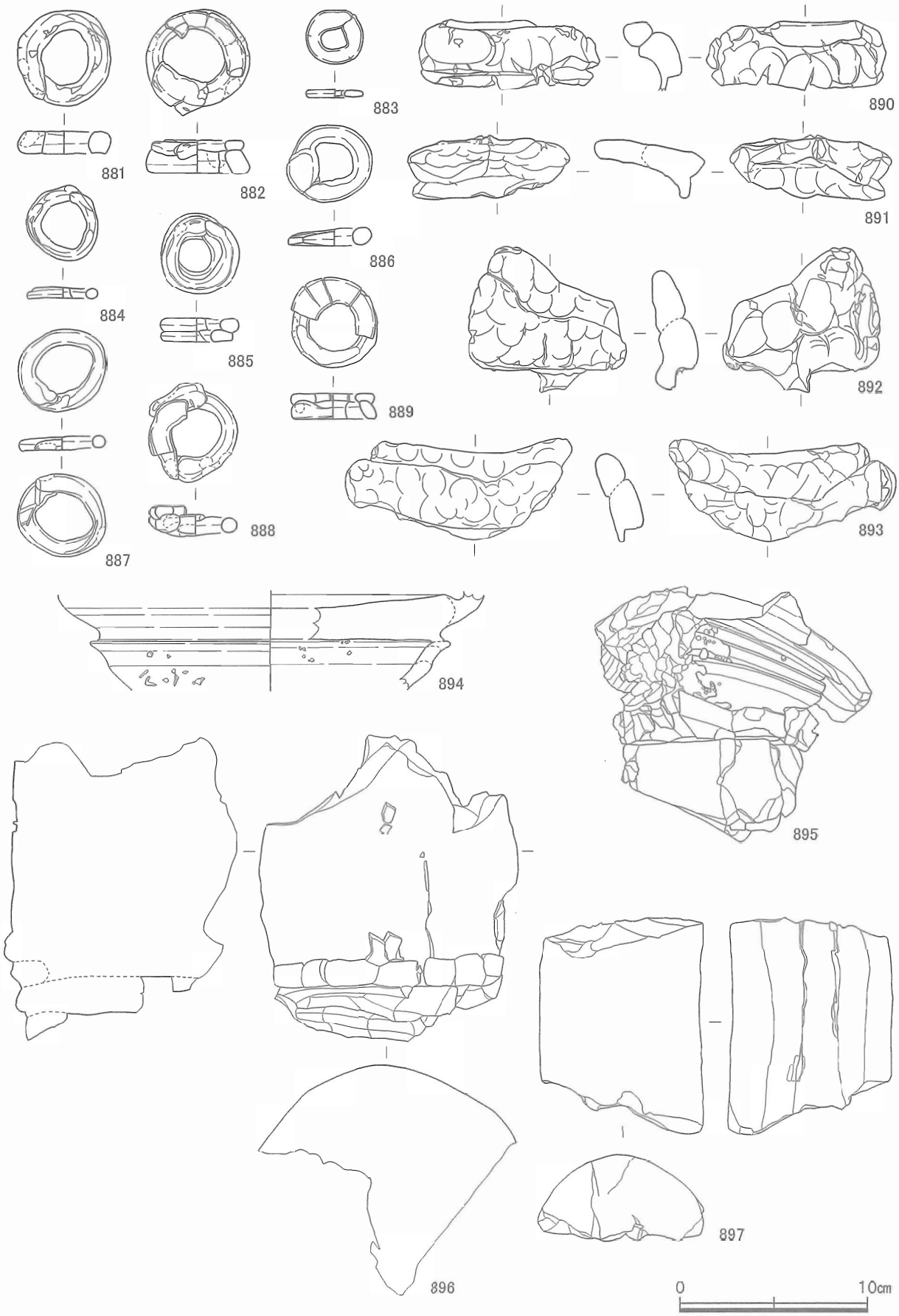
粘土紐(890～893)　指頭痕を多くもつもので、いずれも積み重ねられる。割れた匣鉢の補強材や、著し



第64図　出土遺物55(匣鉢蓋１)



第65図　出土遺物56(匣鉢蓋２・輪ドチ)



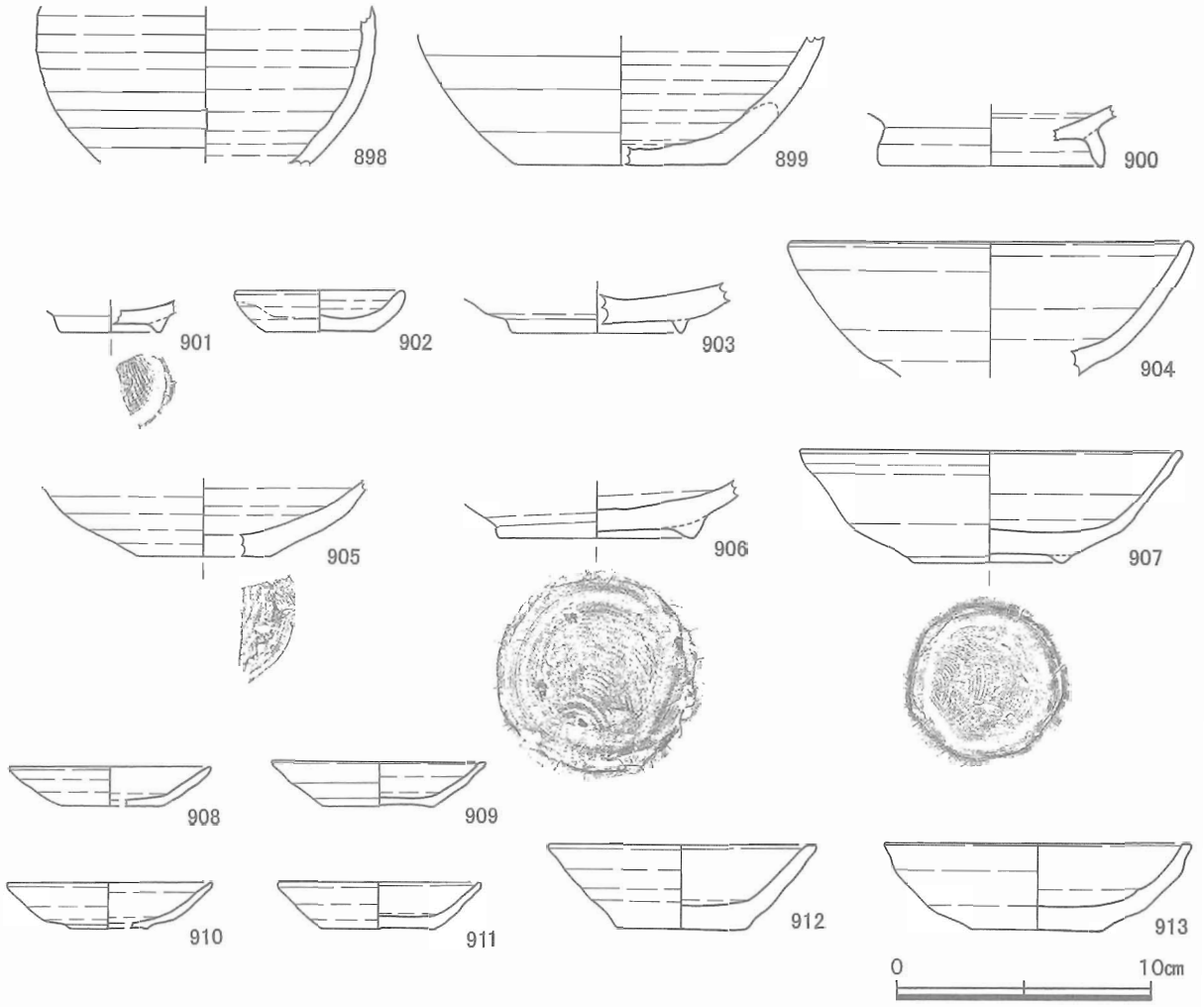
第66図　出土遺物57(輪ドチ・粘土紐・焼台・支柱・分炎柱)

い匣鉢や匣鉢蓋の隙間を埋める目地であろう。

焼台(895)　床上に水平面を作るために置かれる粘土塊である。895の場合、直径9㎝程の円柱状で、床面との接地面と匣鉢を置いた水平面との角度は24°である。同様の床面の角度は1号窯にあるので、これは1号窯で用いられたものと考えられる。なお、焼台上に置かれているのは3枚の丸皿を込めた匣鉢である。匣鉢の割れて失われた部分に自然釉と窯壁が付着する。焼成中の事故に遭ったものだろうか。

支柱・分炎柱(896・897)　896は直径15㎝程度の粘土柱である。直径5～6㎝の粘土棒に厚手の粘土板を幾重にも巻き付けることで整形されている。胎土は直径5㎜前後の砂粒を含むやや荒いものだが、表面はきれいにナデられている。底面に匣鉢蓋Ⅰ類が挟まれ、その隙間は匣鉢の場合と同様な目地が詰められる。匣鉢蓋の下位にも撚土の目地が挟まれるが底面は傾斜しているので接地面(あるいは天井に接する面)と思われる。いずれの窯の中軸線上にも内面に粘土を込めた同径の匣鉢が設置されているので、この上位に据えられた支柱のひとつなのだろう。

897は小分炎柱で、直径2㎝程度の粘土紐に厚さ1～2㎝の粘土板を二重に巻きつけて作られた直径9㎝程の粘土柱である。胎土は896とほぼ同質である。表面と割れ面の一部に自然釉が付着するので、焼成中に破損した可能性が高い。なお、内部に粘土を込めた匣鉢がいくつか出土している(図版85中段中・右)。底面には直径9㎝前後の剥落痕があり、小分炎柱の上端に据えられたものである。また、この上の水平面にも更に匣鉢を置いて製品を焼成していることが分かる。



第67図　出土遺物58(須恵器・灰釉陶器等)

2　その他の遺物

その他の遺物としたものは、確認調査トレンチで出土したもの等である。

須恵器(898・899)　須恵器は、7世紀代の長頸瓶の底部～体部片が出土している。2点のいずれも右回りの回転台上で調整され、底部～体部過半に回転ヘラケズリを施す。898が確認調査トレンチ7出土、899が本調査地点表採である。

灰釉陶器(900)　灰釉陶器は椀底部1点が本調査地点から表採された。焼成はやや軟質であるが、全体的に薄手で華奢な作りをしている。釜谷古窯(島田市横岡)の出土遺物に近似する10世紀前半代にあたる。

灰釉系陶器(901～907)　いずれも横岡古窯跡群の製品と考えられるものである。Ⅰ期－2にあたるものは小椀(901)のみである。高台も丈が低く直径も小さく、より形骸化した雰囲気がある。Ⅱ期－2にあたるものは椀(904・906)である。904は器高も高く厚手に造る。906は高台の断面形状が二等辺三角形状に近くなっているが、直径が比較的大きいのでこの時期と考えた。Ⅲ期－2にあたるものは椀(907)、無高台椀(905)、小皿(902)で、特に小皿は扁平・矮小化が進んでいるので、この時期でも新しい要素を示すものだろう。無高台椀は橙色に焼きあがるが硬質である。このような色調を指向したものだろう。

かわらけ(908～913)　908～911はいずれもロクロ整形で薄手に調整される。底部外面には回転糸切り痕を残す。橙色に焼き上がるが硬質である。近世墓に伴うものが混入したのだろう。912は小ぶりではあるが、直線状に立ち上がる深手の無高台椀形態を呈するものである。近世初頭頃のものだろうか。底部外面に回転糸切り痕を残す。913は、黄色を呈しやや軟質に焼きあがる。体部の立ち上がりや調整の雰囲気はⅢ期－3の無高台椀に近似するが、さらに小ぶりで口唇部を水平に調整する点などに違和感がある。14世紀代のものと考えたい。

註

(1)ソギを施す折縁皿は、金谷町の調査(金谷町町史編さん室1991)で出土している。第2表には、この際に出土した遺物を含んでいる。

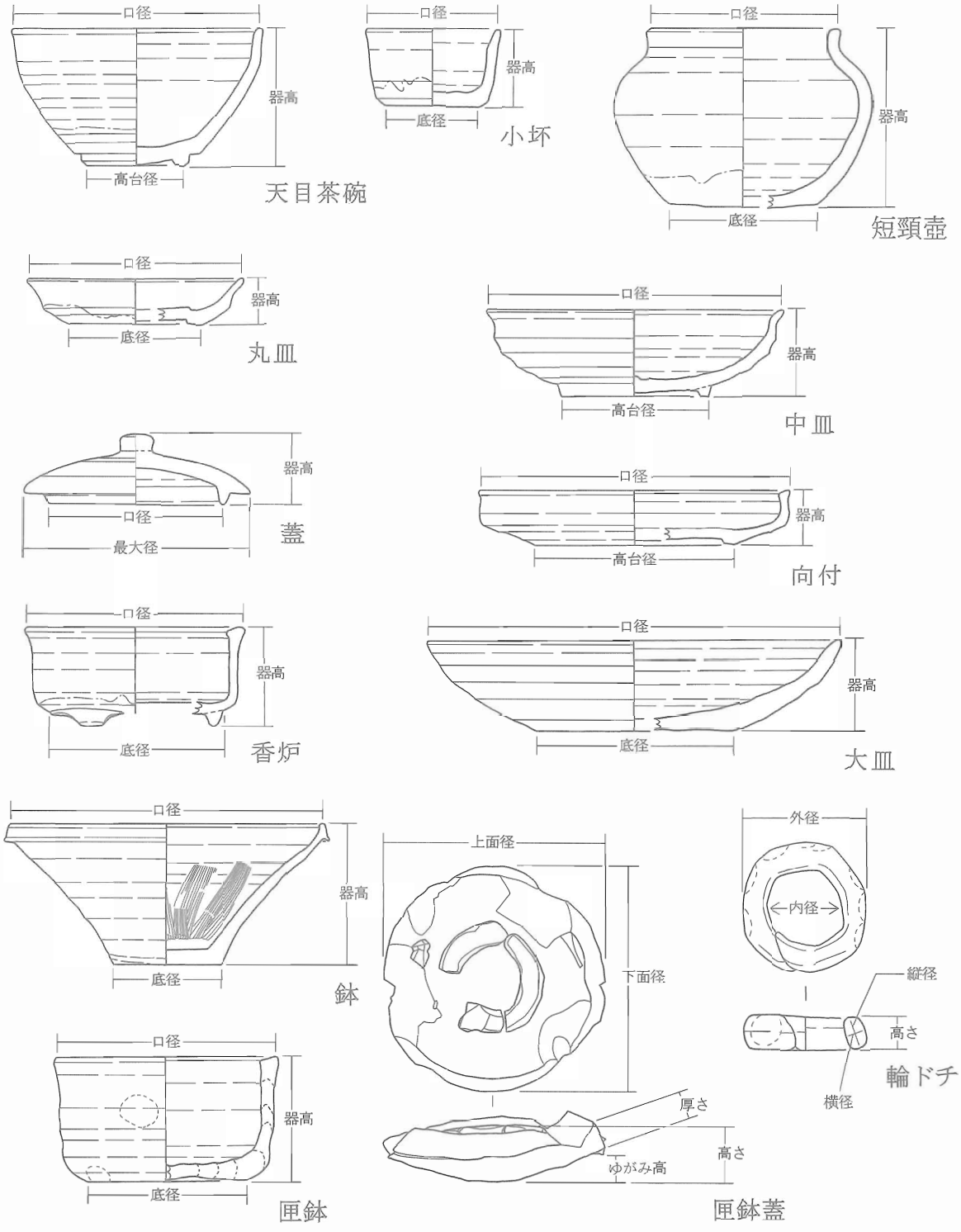
(2)当初は灰釉と考えたもので、肉眼観察との差異が蛍光X線分析の結果明らかになったものである。本文中では極力これらを反映させたが、過程を明らかにするためにも分析結果(附載)の内容は当初の認識のままとした。

(3)本文中の丸皿の分類は、藤澤の分類(藤澤2002)と次のように相関する。

Ⅰ類a→内禿皿A、Ⅰ類b→丸皿A、Ⅱ類a→内禿皿B、Ⅱ類b→丸皿B、Ⅲ類→丸皿C

(4)当初は、錆釉を薄くかけたのちに灰釉を上掛けしているものと考えた。蛍光X線分析の結果、錆釉と認識した部分は酸化第二鉄の含有量が灰釉の場合と同等であった。断面を拡大して観察したところ錆釉の層が把握できない状況であり、褐色に発色する素地の外面がごく薄い灰釉を透過して、あたかも褐色の釉が掛かるように見えるものと理解される。

(5)当初、薄い鉄釉と認識したもの。註4と同様に灰釉と考えられる。



第68図　法量計測位置図

第6表　陶器一覧表(1)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
1	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(10.7)	(3.6)	5.65		釉:浅黄色(5Y7/3)～オリーブ黒色(5Y3/2)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰白色(5Y7/2)	25	
2	鉄?	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.0)	4.4	5.65		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	50	
3	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a?	不明	(11.0)				釉:黒褐色(10YR3/2)　断面:灰白色(5Y7/1)	20	
4	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.2)	4.1	5.6		釉:黒褐色(2.5Y3/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰白色(10YR8/2)	70	
5	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a?	不明	(10.8)				釉:黒褐色(7.5YR3/1)～灰褐色(7.5YR4/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰白色(2.5Y8/2)	10	
6	鉄?	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(10.8)	4.4	5.9		内面釉:オリーブ色(5Y6/6)　外面釉:淡黄色(2.5Y8/4)　底部:にぶい黄褐色(10YR5/4)	65	
7	鉄?	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	11.0	4.4	6.3		釉:にぶい黄色(2.5Y6/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	30	
8	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a?	不明	(11.0)				釉:黒褐色(10YR2/3)～黒色(10YR1.7/1)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(10YR8/2)	10	
9	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し					釉:黒褐色(7.5YR3/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	
10	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(12.0)				釉:黒色(N1.5/0)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	20	
11	灰	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(9.9)	(4.3)	5.7		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	70	
12	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(10.8)	(4.0)	5.55		釉:黒褐色(10YR2/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	60	
13	鉄?	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.0)				釉:褐色(7.5YR4/3)～淺黄色(5Y7/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	25	
14	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.0)	4.8	5.9		釉:暗褐色(7.5YR3/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰白色(2.5YR7/1)	50	
15	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.4)				内面釉:黒色(10YR1.7/1)　外面釉:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	50	
16	灰	天目茶碗	Ⅰ類a?	不明	(11.8)				釉:オリーブ黒色(5Y2/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	10	
17	錆	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.5)				釉:褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)	25	
18	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a?	不明	(11.0)				釉:黒褐色(10YR2/2)～黒褐色(10YR2/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	
19	鉄?	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(12.4)				外面:暗オリーブ色(2.5Y3/3)～オリーブ黒色(5Y2/2)～にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	
20	錆	天目茶碗	Ⅰ類a?	不明	(11.1)				釉:明赤褐色(7.5YR5/6)～明黄褐色(2.5Y7/6)　断面:橙色(7.5YR7/6)	20	
21	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.3)				釉:にぶい黄橙色(10YR7/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	55	
22	鉄?	天目茶碗	Ⅰ類a	削り出し	(11.8)				釉:灰オリーブ色(5Y5/2)～褐色(7.5YR4/3)　断面:灰色(5Y6/1)～にぶい黄橙色(10YR6/3)	20	
23	鉄	天目茶碗	Ⅰ類a?	不明	(13.2)				釉:黒褐色(7.5YR3/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	
24	鉄	天目茶碗		不明	(9.4)				釉:黒褐色(5YR2/1)　外面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	近世
25	鉄	天目茶碗	Ⅰ類b	削り出し	11.0				釉:灰褐色(5YR4/2)～黒褐色(5YR2/1)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	40	
26	鉄	天目茶碗	Ⅰ類b	削り出し	11.6	4.6	6.5		釉:暗赤褐色(2.5YR3/2)～赤黒色(2.5YR2/1)　外面:灰褐色(7.5YR6/2)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	
27	鉄	天目茶碗		削り出し		4.0			釉:黒褐色(5YR3/1)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(10YR7/1)	20	
28	鉄?	天目茶碗		削り出し		4.4			釉:灰黄色(2.5Y7/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	15	
29	鉄	天目茶碗	Ⅱ類	削り出し		(4.2)			釉:黒褐色(10YR2/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	15	
30	鉄	天目茶碗		削り出し		(5.0)			釉:黒褐色(2.5Y3/1)　外面:灰黄色(2.5Y6/2)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	20	近世
31	鉄	小天目	Ⅰ類	削り出し	(8.8)	(3.4)	3.6		釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:橙色(2.5YR6/6)	25	
32	鉄	小天目	Ⅱ類	削り出し	(6.9)	(3.5)	3.2		釉:暗褐色(7.5YR3/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	15	
33	鉄?	小天目	Ⅰ類	削り出し	(7.4)	(2.8)	3.1		釉:にぶい黄色(2.5Y6/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	45	
34	鉄	小天目	Ⅰ類	削り出し	(7.6)	(3.0)	3.7		内面釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面釉:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)	30	
35	鉄?	小天目		不明	(7.6)				釉:オリーブ黒色(7.5Y2/2)　外面:灰色(7.5Y5/1)　断面:灰色(7.5Y5/1)	15	
36	鉄	小天目		不明	(7.8)				釉:オリーブ褐色(2.5Y4/3)　外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	25	
37	鉄	小天目		不明	(8.4)				釉:オリーブ黒色(5Y2/2)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰色(5Y7/1)	25	
38	鉄	小天目	Ⅰ類	削り出し		(3.5)			釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)	15	
39	灰	小碗		削り出し		(3.9)			釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	15	
40	鉄	平碗		削り出し		5.0			内面:灰白色(10YR7/1)　外面:明赤褐色(5YR5/6)　断面:明赤褐色(5YR5/6)	15	
41	鉄	平碗		削り出し	(14.8)				内面釉:暗灰黄色(2.5Y4/2)　外面釉:オリーブ黒色(5Y3/2)～暗褐色(2.5YR3/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	20	
42	鉄	丸碗	Ⅰ類	貼り付け	(10.7)	4.2	7.0		釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:灰黄色(2.5Y6/2)	30	
43	灰	丸碗		不明	(11.6)				釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　断面:灰色(5Y5/1)	10	
44	灰	平碗		貼り付け	(13.0)	4.7	7.0		釉:オリーブ黄色(5Y6/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	45	

第6表　陶器一覧表(2)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
45	灰	平碗		貼り付け	13.7	5.0	7.1		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	55	
46	灰	丸碗	II類	削り出し		(4.2)			釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	15	
47	灰・鉄	丸碗	I類	貼り付け		5.4			鉄釉:黒褐色(10YR3/2)　灰釉:オリーブ色(7.5Y5/3) 外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰白色(5Y8/1)	30	掛け分け(内面鉄釉、外面灰釉)
48	灰・鉄	丸碗	I類	貼り付け	(9.7)	(5.1)	6.95		鉄釉:黒色(7.5Y2/1)　灰釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	45	掛け分け(内面鉄釉、外面灰釉)
49	灰・鉄	丸碗		不明	(10.8)				鉄釉:黒褐色(10YR3/2)　灰釉:灰オリーブ色(5Y5/3) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	掛け分け(内面鉄釉、外面灰釉)
50	灰	丸碗	I類	貼り付け	(11.0)	(4.7)	6.7		釉:浅黄色(2.5Y7/4)　断面:灰白色(2.5Y8/1)	90	近世
51	灰	丸碗	I類	貼り付け	(10.0)	(3.6)	5.8		釉:にぶい黄色(2.5Y6/3)～黄褐色(2.5Y5/4)　外面:灰白色(2.5Y7/1)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	20	近世
52	鉄	筒形碗		不明	(9.0)				釉:暗褐色(7.5YR3/4)～黒褐色(7.5YR2/2)　断面:灰黄色(10YR6/2)	15	
53	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		6.0			釉:黒褐色(10YR2/2)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	25	
54	鉄	筒形碗		不明	(9.7)				釉:黒褐色(10YR2/2)～浅黄色(5Y7/4)　断面:灰色(5Y6/1)	15	
55	鉄	筒形碗	I類	貼り付け	10.0	5.6	6.6		釉:暗灰黄色(2.5Y4/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい黄褐色(10YR7/2)	90	
56	鉄	筒形碗		不明	(10.6)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい橙色(5YR6/3) 断面:明褐灰色(7.5YR7/1)	20	
57	鉄	筒形碗	I類	貼り付け	(10.7)				釉:黒色(5Y2/1)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	20	
58	鉄	筒形碗		不明	(11.0)				釉:黒色(N2/0)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	10	
59	鉄	筒形碗	I類	貼り付け	(10.0)	(5.5)	7.45		釉:黒色(10YR1.7/1)　底部:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:明褐色(7.5YR7/1)	20	
60	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		(5.0)			釉:黒色(N5/0)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	15	
61	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		(5.1)			釉:にぶい黄褐色(10YR5/3)～黒色(N1.5/0)　外面:にぶい黄褐色(10YR7/3)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	25	
62	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		(5.2)			釉:オリーブ黒色(7.5Y2/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:浅黄色(2.5Y7/4)	20	
63	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		5.9			釉:黒色(5Y2/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(5Y7/1)	20	
64	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		(6.5)			釉:黒色(2.5Y2/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	15	
65	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		(6.8)			釉:黒褐色(2.5Y3/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	10	
66	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		6.2			釉:にぶい褐色(5YR4/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 底部:にぶい橙色(7.5YR6/4)	40	
67	灰	筒形碗?	I類	貼り付け	(9.1)				釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:灰黄色(2.5Y6/2)	20	丸碗の可能性あり
68	灰	筒形碗?	I類	不明	(9.6)				釉:オリーブ色(5Y4/4)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	15	丸碗の可能性あり
69	灰	筒形碗	I類	不明	(9.8)				灰オリーブ色(7.5Y5/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	15	
70	灰	筒形碗		不明	10.2	6.6	5.2		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	20	
71	灰	筒形碗?		不明	(10.2)				釉:オリーブ色(5Y5/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	丸碗の可能性あり
72	灰	筒形碗	I類	貼り付け	(10.5)	(5.3)	6.35		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい橙色(5YR6/4) 断面:灰色(5Y6/1)	70	
73	鉄	筒形碗	II類	削り出し	(10.6)	(6.0)	6.6		釉:にぶい黄色(2.5Y6/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3) 断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	40	
74	灰	筒形碗	I類	不明	11.2				釉:オリーブ色(5Y5/4)　断面:黄灰色(2.5Y7/2)	20	
75	灰	筒形碗	I類	貼り付け	(12.0)	4.4	7.2		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:灰褐色(7.5YR6/2)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	45	
76	灰	筒形碗	I類	貼り付け		(4.7)			釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	10	
77	灰	筒形碗?	I類	貼り付け		5.6			釉:浅黄色(5Y7/3)　外面:褐色(7.5YR4/3)　断面:灰黄褐色(10YR5/2)	30	丸碗の可能性あり
78	灰・鉄	筒形碗	I類	不明		9.0			鉄釉:暗褐色(10YR3/3)　灰釉:暗オリーブ色(5Y4/3) 外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	25	掛け分け(内面鉄釉、外面灰釉)
79	灰・鉄	筒形碗	I類	貼り付け	(11.8)				鉄釉:黒褐色(10YR2/2)　灰釉:暗オリーブ色(5Y4/3)～にぶい黄橙色(10YR7/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	30	掛け分け(内面鉄釉、外面灰釉)
80	灰	丸皿	II類a	削り込み	(9.3)	(4.9)	1.8		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/3) 断面:灰白色(5Y7/1)	40	
81	灰	丸皿	II類a	削り込み	(9.4)	(5.0)	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	50	
82	灰	丸皿	II類a	削り込み	(9.4)	4.7	2.15		外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)～暗オリーブ色(7.5Y4/3) 断面:灰白色(7.5Y7/1)	80	
83	灰	丸皿	II類a	削り込み	(9.4)	4.5	2.1		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(10YR7/1)	35	
84上	灰	丸皿	II類a	削り込み					外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)～灰オリーブ色(7.5Y5/3) 断面:灰白色(N8/0)	20	
84下	灰	丸皿	II類a	削り込み	9.5	5.25	2.3		外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)～灰オリーブ色(7.5Y5/3) 断面:灰白色(N8/0)	90	

第6表　陶器一覧表(3)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
85上	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.8				釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)～灰白色(5Y8/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	85	
85下	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.8	5.0	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)～灰白色(5Y8/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	85	
86	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.7)	(4.4)	1.7		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5Y6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	50	
87	灰?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.6	5.3	1.9		釉:灰白色(5Y7/2)　内面:赤褐色(5YR4/6)　外面:灰黄褐色(10YR4/2)	95	
88	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.5)	(5.0)	2.25		釉:オリーブ黒色(2.5Y3/2)　外面:にぶい黄橙色(10Y7/2)	40	
89	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.6)	(5.5)	2.2		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰黄色(2.5YR7/2)	30	
90	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.5)	(5.2)	1.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	50	
91	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.6)	(4.9)	1.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:褐色(10YR4/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	25	
92	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.6)	(5.3)	2.0		内面釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	20	
93	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.6)	(5.0)	2.2		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	35	
94	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.8	5.1	2.15		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面褐灰色(10YR6/1)	90	
95	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	10.2	4.4	2.7		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:灰褐色(7.5YR5/2)　断面:灰色(7.5Y6/1)	85	
96	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.65	5.0	1.7		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい橙色(7.5Y6/4)　断面:灰白色(10YR8/1)	90	
97	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.8	5.2	2.0		外面:暗オリーブ色(7.5Y4/3)～にぶい赤褐色(5YR5/4)～明褐灰色(7.5Y7/2)	80	
98	灰?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.5)	2.2		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　内外面:褐色(10YR4/4)　断面:灰色(5Y6/1)	25	
99	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.7)	5.4	2.05		釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)～暗オリーブ色(5Y4/4)　断面:灰白色(5Y7/1)	50	
100	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	5.8	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	65	
101	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.0)	1.95		釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰色(10Y6/1)	30	
102	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.4)	2.25		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:2.5Y7/1灰白色(2.5Y7/1)	30	
103	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.0)	1.9		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	40	
104	灰?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	4.2	1.6		釉:淡黄色(2.5Y8/4)　外面:にぶい橙色(5YR6/4)　断面:褐灰色(10YR6/1)	60	
105	灰?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.9)	(5.0)	2.1		釉:灰白色(2.5Y7/1)　内面:褐色(7.5Y4/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	25	
106	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.2)	1.4		釉:オリーブ黄色(5Y6/4)～にぶい褐色(7.5YR5/3)	30	
107	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.0)	6.0	2.2		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	65	
108	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.0)	(4.8)	2.15		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	50	
109	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.0)	(5.8)	2.05		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)～褐色(10YR4/4)　内外断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	25	
110	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.0)	(5.0)	2.3		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　内面:褐色(10YR4/4)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	75	
111上	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み		(5.6)			釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	40	
111下	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(5.0)	1.8		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	30	
112	灰?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.1)	4.4	1.8		釉:浅黄色(5Y7/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	55	
113	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(5.4)	1.95～2.15		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内外面:浅黄色(2.5Y7/3)	60	
114	灰?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	10.25	4.8	2.25		釉:灰白色(5Y8/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰褐色(5YR6/2)	100	
115	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	5.1	1.8		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:褐色(7.5YR4/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	40	
116	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.0)	(5.6)	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	25	
117	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.1)	(4.4)	2.6		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	60	
118	灰?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(4.8)	1.65		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　外面:灰褐色(7.5YR5/2)　断面:灰白色(10YR7/1)	65	
119	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(5.4)	1.95		にぶい赤褐色(5YR5/3)～灰オリーブ色(5Y5/3)	35	
120	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(5.2)	2.5		釉:7.5Y5/3灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:灰色(5Y6/1)	35	
121	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(5.5)	1.9		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:黄褐色(2.5Y5/4)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	25	
122	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(5.2)	2.1		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	25	
123	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.3)	(5.2)	2.2		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	80	
124	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.3)	(5.0)	1.95		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面:灰白色(10YR8/2)	40	

第6表　陶器一覧表(4)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
125	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.6)	5.3	2.8		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面:灰白色(10YR8/2)	70	
126	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.3)	(5.4)	2.15		釉:黒褐色(10YR3/2)　外面：にぶい赤褐色(5YR5/3)	40	
127上	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.2)	(5.2)	1.6		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面：にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	75	
127下	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.4)	(5.0)	1.7		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面：にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	65	
128	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.7)	(6.6)	1.95		釉:灰オリーブ色(5Y6/2)　内面:褐色(7.5Y4/4)　外面:にぶい褐色(7.5Y5/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	30	
129	灰	丸皿	II類a	削り込み	10.4	5.4	2.05		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	75	
130	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.5)	(5.6)	1.9		釉:暗オリーブ(5Y4/4)　内外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	35	
131上	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.3)	(5.2)	1.85		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:明黄褐色(10YR6/6)　断面:灰色(7.5Y6/1)	30	菊花文
131下	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.2)	(5.2)	2.05		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:明黄褐色(10YR6/6)　断面:灰色(7.5Y6/1)	70	
132上	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.5)	(6.2)	1.9		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　外面：にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面：にぶい黄橙色(10YR7/2)	45	
132下	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.4)	(5.6)	2.4		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　外面：にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面：にぶい黄橙色(10YR7/2)	50	
133	灰?	丸皿	II類a	削り込み	(10.5)	(5.6)	2.0		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　内面:褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR4/3)　断面:灰色(N6/0)	35	
134上	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.6)	(5.0)	1.2		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)～オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)	70	
134下	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.2)	(5.4)	2.0		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)～オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)	90	
135	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.6)	(5.25)	1.9		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	50	
136	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.8)	(5.4)	2.0		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:褐色(7.5YR4/6)　断面:灰白色(5Y7/1)	45	
137	灰?	丸皿	II類a	削り込み		(5.0)			内面釉:灰白色(5Y8/1)　外面釉:淡黄色(5Y8/3)　内面:灰白色(7.5Y7/1)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/3)	40	
138	灰	丸皿	II類a	削り込み	(9.8)	(4.5)	2.0		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　内面:褐色(10YR4/4)　外面:黄褐色(2.5Y5/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	25	
139	灰	丸皿	II類a	削り込み	10.0	4.7	2.6		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/2)　断面:灰白色(N7/0)	80	
140	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.0)	(5.1)	2.3		内面：にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面：暗オリーブ色(7.5Y4/3)　断面:灰色(10YR7/1)	40	
141	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.0)	(5.4)	2.4		釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面：にぶい黄橙色(10YR7/3)	55	
142上	灰	丸皿	II類a	削り込み		4.6			釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面：にぶい黄橙色(10YR7/3)	40	
142下	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.7)	(5.4)	2.2		釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面：にぶい黄橙色(10YR7/3)	35	
143	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.2)	(5.2)	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	95	
144	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.4)	(5.4)	2.6		釉:オリーブ黄色(5Y6/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	
145上	灰	丸皿	II類a	削り込み	10.5	(4.8)	1.0		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	65	
145下	灰	丸皿	II類a	削り込み	10.6	4.3	2.1		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	60	
146	灰	丸皿	II類a	削り込み	(10.8)	(5.8)	2.1		釉:灰オリーブ色(7.5Y4/2)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰色(7.5Y6/1)	40	
147	灰	丸皿	II類b	削り込み	(7.4)	(3.65)	1.75		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	80	
148	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(7.5)	(3.8)	1.6		釉:浅黄色(5Y7/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	45	
149	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(9.1)	(5.0)	2.5		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	25	
150	灰	丸皿	II類b	削り込み	9.1	3.6	2.8		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:灰色(7.5Y6/1)	65	
151	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.1)	(4.8)	2.3		釉: 灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	30	
152	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.2)	(4.8)	2.0		釉：暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内外面：にぶい黄褐色(10YR6/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	25	
153	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.3)	(4.6)	2.15		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)～浅黄色(5Y7/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(10YR8/1)	30	
154	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.4)	(4.4)	1.7		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:にぶい黄色(2.5Y6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	
155上	灰	丸皿	II類b	削り込み	9.3	(3.6)	1.7		釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面：にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	60	
155下	灰	丸皿	II類b	削り込み	9.4	4.9	2.6		釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面：にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	50	
156	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.4)	(5.6)	2.2		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:灰黄色(2.5Y7.2)	25	
157	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.5)	(4.9)	2.25		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/2)　外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	45	
158	灰?	丸皿	II類b	削り込み	9.5	5.0	2.0		釉:灰白色(5Y3/1)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:暗褐色(7.5YR3/4)	70	

第６表　陶器一覧表（５）

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
159	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.5)	5.2	2.2		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰色(5Y8/1)	75	
160	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	(4.6)	1.8		釉:浅黄橙色(10YR8/3)　内外面:褐色(7.5YR7/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	30	
161	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.6	5.4	2.15		釉:灰オリーブ(7.5Y5/3)～灰白色(5Y7/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	80	
162	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	(5.1)	1.95		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(10YR7/1)	20	
163	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	5.1	1.8		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　外面:褐色(7.5Y4/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	45	
164	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	(4.9)	1.9		釉:黄褐色(2.5Y5/4)　内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　外面:褐色(7.5YR4/4)　断面:灰色(N6/0)	45	
165	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	5.0	2.0		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)	45	
166	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	(4.4)	2.1		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	
167	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	(5.4)	1.9		釉:灰オリーブ色(5Y6/2)～浅黄色(2.5Y7/3)　断面:灰色(5Y6/1)	70	
168	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.6	5.1	2.25		釉:浅黄色(5Y7/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	85	
169	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	(4.7)	2.1		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(10YR8/2)	25	
170	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.7	5.2	1.65		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	90	
171	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.6)	(3.9)	1.75		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/2)　断面:灰白色(5Y8/2)	30	
172	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	5.0	1.8		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	40	
173	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.7)	5.6	2.5		内外面:浅黄色(2.5Y7/4)～灰オリーブ色(7.5Y5/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	70	
174	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.8	5.2	2.1		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　外面・断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	50	
175	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.8	5.2	1.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰色(5Y5/1)	90	
176	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	5.3	2.25		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　内外面:灰褐色(5YR5/2)	55	
177	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.7)	(5.4)	2.15		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	30	
178	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.7)	(5.4)	2.1		釉:灰白色(2.5Y8/2)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	50	
179	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.0)	2.5		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	40	
180	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.8	5.2	2.6		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	60	
181上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.8	(3.2)	2.4		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:にぶい黄褐色(10YR4/3)　断面:灰色(5Y6/1)	40	
181下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.4	5.0	2.4		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:にぶい黄褐色(10YR4/3)　断面:にぶい黄色(2.5Y6/4)	70	
182	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	4.9	1.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	50	
183	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	5.0	2.2		外面:褐色(7.5YR4/4)～暗オリーブ色(7.5Y4/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	65	
184	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	5.1	2.0		釉:にぶい黄橙色(10YR6/4)～灰オリーブ色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(5Y8.2)	40	
185	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.0)	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	30	
186	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(4.8)	2.2		内外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)～灰オリーブ色(7.5Y5/3)　断面:灰白色(N7/0)	45	
187	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	5.0	2.3		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰色(N6/0)	60	
188	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.3)	2.1		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	60	
189	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.4)	2.0		釉:浅黄色(5Y7/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	35	
190	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.2)	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	25	
191	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.2)	1.8		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:褐色(7.5YR4/6)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰白色(10YR7/1)	30	
192	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.3)	1.9		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	40	
193	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.3)	2.15		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	50	
194	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(6.0)	2.45		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	55	
195	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.4)	2.0		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	15	
196	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(5.4)	2.0		釉:灰黄色(2.5Y7/2)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	30	
197上	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.8		1.4		釉:灰白色(5Y7/2)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	50	
197下	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.7	5.1	2.1		釉:灰白色(5Y7/2)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	50	
198	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	5.3	2.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	50	

第6表　陶器一覧表(6)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
199	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.0)	1.95		釉:オリーブ色(5Y5/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(5Y7/1)	25	
200上	灰?	丸皿	II類b	削り込み	9.7		2.0		釉:淡黄色(5Y8/3)　外面:灰褐色(7.5YR6/2)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	80	
200下	灰?	丸皿	II類b	削り込み	9.9	5.0	2.0		釉:淡黄色(5Y8/3)　外面:灰褐色(7.5YR6/2)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	90	
201	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.5)	2.05		釉:灰黄色(2.5Y7/2)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	40	
202	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.8)	1.55		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR5/3) 外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)　断面:暗灰黄色(2.5Y5/2)	60	
203	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.2)	(2.4)		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3) 断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	50	
204	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.2)	3.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:灰色(5Y6/1)	65	
205	灰?	丸皿	II類a	削り込み	(10.0)	5.3	1.9		釉:浅黄色(2.5Y7/4)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	95	
206	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.7)	2.1		釉:黄灰色(2.5Y5/1)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	30	
207	灰?	丸皿	II類b	削り込み	10.0	4.2	1.6		釉:灰白色(2.5Y8/1)～灰黄色(2.5Y6/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	55	
208	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(4.9)	2.55		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:灰白色(10YR7/1)	60	
209	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	4.8	2.35		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	60	
210	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.0)	2.4		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:灰褐色(7.5YR6/2)　断面:灰白色(N7/0)	40	
211	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	5.4	2.2		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	50	
212	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	5.2	1.7		釉:オリーブ色(5Y5/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	40	
213	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.8)	2.2		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	70	
214上	灰?	丸皿	II類b	削り込み		(5.3)			釉:淡黄色(2.5Y8/3)　底部:にぶい黄褐色(10YR5/3)	20	
214下	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(4.9)	1.9		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　底部:にぶい黄褐色(10YR5/3)	20	
215	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	6.0	1.8		釉:浅黄橙色(10YR8/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	45	
216	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	5.0	2.0		釉:にぶい黄橙色(10YR7/2)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	30	
217	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.5)	2.1		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	45	
218	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	5.1	2.2		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:明褐灰色(7.5YR7/2) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	60	
219	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	4.9	1.9		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	70	
220	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(6.0)	1.9		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	50	
221	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	5.3	2.1		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3) 断面:灰白色(N7/0)	70	
222	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.0)	2.85		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　内面:褐色(7.5YR4/6)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	30	
223	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.0	5.5	2.15		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　内外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	70	
224	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.4)	2.0		釉:灰オリーブ(7.5Y5/2)～浅黄色(2.5Y7/4)　内面:褐色(10YR4/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	
225	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.0	4.9	1.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:灰褐色(7.5YR5/2)	90	
226上	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)				釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:灰白色(10YR8/2) 断面:淡黄色(2.5Y8/3)	80	
226下	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	5.4	2.65		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:灰白色(10YR8/2) 断面:淡黄色(2.5Y8/3)	75	
227	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.4)	1.85		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	80	
228	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.4)	2.1		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	70	
229	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.2)	1.6		釉:浅黄色(2.5Y7/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:灰黄褐色(10YR6/2)	40	
230	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.1)	1.75		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:灰色(5Y6/1)	50	
231	灰?	丸皿	II類b	削り込み	10.1	5.4	2.0		釉:淡黄色(2.5Y6/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR4/3) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	55	
232	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(4.2)	1.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:明黄褐色(10YR6/6) 断面:灰色(5Y6/1)	30	
233	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.1)	2.0		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内外面:褐色(7.5YR4/6)　断面:灰白色(10YR7/2)	35	
234	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.2)	1.8		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面灰白色(5Y7/1)	45	
235	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.4)	2.05		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:灰色(7.5Y6/1)	40	
236	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.5)	2.1		釉:灰白色(7.5Y7/2)　内外面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:灰白色(5Y6/1)	25	
237	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.1)	(5.0)	2.05		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　内面:2.5YR6/2赤色(2.5YR6/2) 外面:灰褐色(7.5YR6/2)	50	
238	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.1)	(5.1)	2.2		釉:オリーブ色(5Y5/4)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	20	

第6表　陶器一覧表(7)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
239	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.1)	(5.0)	2.1		釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	35	
240	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(5.2)	2.1		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	25	
241	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(6.2)	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰白色(N7/0)	40	
242	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.1	5.4	2.6		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい橙色(5YR6/4)　断面:灰白色(5Y8/1)	70	
243	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	4.5	2.1		釉:灰白色(5Y7/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:明褐灰色(7.5YR7/2)	80	
244上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)		1.3		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰黄色(2.5YR7/2)	60	
244下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.1)	(5.5)	1.6		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰黄色(2.5YR7/2)	55	
245上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(4.8)	1.65		内面釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	70	
245下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.7)				内面釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	5	
246	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.1)	(4.8)	2.0		釉:灰白色(7.5Y8/1)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:褐灰色(5YR6/1)	35	
247	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(4.8)	(2.4)		釉:灰白色(5Y8/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	45	
248上	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.8)	(4.5)	1.35		釉:浅黄色(2.5Y7/4)　内面:灰色(5Y6/1)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	
248下	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(4.8)	1.5		釉:浅黄色(2.5Y7/4)　内面:灰色(5Y6/1)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	
249上	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.0)	(5.4)	1.8		釉:灰黄色(2.5Y7/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(N7/0)	50	
249下	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.05	4.9	2.2		釉:灰黄色(2.5Y7/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(N7/0)	100	
250	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	5.6	2.3		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	55	
251	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(5.9)	2.1		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	45	
252	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	5.2	2.3		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　内面:暗褐色(7.5Y3/4)　外面:にぶい褐色(7.5Y5/3)　断面:灰白色(10YR8/2)	50	
253	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	5.0	1.9		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:灰色(7.5Y6/1)	75	
254上	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.9)		1.5		釉:灰白色(7.5Y7/2)　外面:にぶい褐色(2.5Y5/3)　断面:灰色(5Y6/1)	75	
254下	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.0	4.9	1.9		釉:灰白色(7.5Y7/2)　外面:にぶい褐色(2.5Y5/3)　断面:灰色(5Y6/1)	90	
255	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.0)	(5.9)	1.9		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(10YR7/2)	30	
256上	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(4.8)	2.0		外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)～淡黄色(7.5Y8/3)　断面:灰白色(N7/0)	75	
256下	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.1	5.25	1.8		外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)～淡黄色(7.5Y8/3)　断面:灰白色(N7/0)	80	
257	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(5.8)	2.2		釉:浅黄色(5Y7/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	35	
258上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(4.8)	1.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:にぶい黄色(2.5Y7/4)	50	
258下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.0)	(5.0)	1.8		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:にぶい黄色(2.5Y7/4)	45	
259	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.1)	(5.4)	2.0		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰色(7.5Y6/1)	40	
260	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(5.8)	2.25		釉:オリーブ色(5Y5/4)　内外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:浅黄橙色(10YR8/3)	30	
261上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(5.2)	1.95		釉:灰オリーブ色(7.5Y4/2)　内面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	70	
261下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	5.0	1.95		釉:灰オリーブ色(7.5Y4/2)　内面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	70	
262上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み					釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	80	
262下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.2	5.5	2.25		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	95	
263	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.2	5.4	2.1		釉:灰白色(2.5Y8/2)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	85	
264上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(5.1)	1.3		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	70	
264下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(9.4)				釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	10	
265上	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)				釉:淡黄色(2.5Y8/4)　内面:褐色(7.5YR4/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	90	
265下	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.0	4.4	1.5		釉:淡黄色(2.5Y8/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)	100	
266上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み					釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	70	
266下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.5	5.1	2.6		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	80	

第6表　陶器一覧表(8)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
267	灰?	丸皿	II類b	削り込み	10.3	5.7	2.1		釉:灰黄色(2.5Y6/2)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4) 断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	60	
268	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(5.6)	2.1		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	40	
269	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	5.9	2.5		釉:灰白色(7.5Y7/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	70	鉄釉丸皿口縁溶着
270	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(5.2)	1.9		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:褐色(10YR4/6)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	35	
271	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(5.1)	2.05		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	40	
272	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	5.4	2.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	65	
273	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(5.7)	2.2		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　内面:褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	55	
274	灰?	丸皿	II類b	削り込み	10.5	4.8	2.3		釉:灰白色(5Y7/2)　外面:灰褐色(5Y4/2)　断面:明褐灰色(7.5YR7/1)	80	
275	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.1)	(5.7)	2.15		内面釉:浅黄色(5Y7/3)　外面釉:浅黄色(7.5Y7/3)　内面:暗褐色(7.5YR5/6)　外面:浅黄橙色(10YR8/3)　断面:灰白色(10YR8/2)	50	
276	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.5	5.0	2.0		釉:にぶい黄橙色(10YR7/4)～灰オリーブ色(7.5Y5/3) 断面:灰白色(N7/0)～灰白色(5Y8/2)	80	
277	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(6.4)	2.3		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	45	
278	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(5.6)	2.1		釉:浅黄色(2.5Y8/3)　内外面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	50	
279	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(5.6)	2.15		釉:灰オリーブ(7.5Y5/3)　内外面:浅黄色(2.5Y7/4) 断面:浅黄色(2.5Y7/4)	30	
280	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(4.8)	2.2		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	40	
281	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(5.3)	2.2		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/2)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:灰褐色(7.5YR6/2)	50	
282	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.5)	(5.7)	2.0		釉:灰白色(5Y7/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	40	
283上	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)				釉:にぶい黄褐色(10YR5/4)～淡黄色(2.5YR8/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	60	
283下	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.6)				釉:にぶい黄褐色(10YR5/4)～淡黄色(2.5YR8/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	60	
284上	灰	丸皿	II類b	削り込み					釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:にぶい褐色(7.5Y5/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰色(5Y6/1)	10	
284下	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.5)	5.4	1.9		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:にぶい褐色(7.5Y5/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰色(5Y6/1)	40	
285上	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.6				釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:褐色(7.5YR4/3)　断面:灰色(7.5Y6/1)	65	
285下	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.7				釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　断面:灰色(7.5Y6/1)	65	
286	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.6)	(5.4)	1.9		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　内面:褐色(10YR4/6)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	65	
287	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.6)	5.2	2.0		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(N8/0)	70	
288上	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)				釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	85	
288下	灰	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.6)	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	90	
289上	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.5)	(4.8)	1.9		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)～淡黄色(5Y8/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	50	
289下	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.5)				釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)～淡黄色(5Y8/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰白色(7.5Y7/1)	30	
290	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.7	4.6	2.2		釉:オリーブ色(5Y5/4)　内外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	90	
291	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.55	5.5	2.3		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR5/4)	95	
292	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.7)	(6.6)	1.8		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/3) 断面:灰白色(7.5Y7/1)	25	
293	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.6	5.0	1.55		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(5Y7/1)	70	
294	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.8)	5.0	1.9		釉:淡黄色(5Y8/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	50	
295上	灰	丸皿	II類b	削り込み					釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:灰白色(5Y7/2)	40	
295下	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.7	5.2	2.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:灰白色(5Y7/2)	75	
296	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.8)	(5.8)	2.35		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	35	
297上	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.8)	4.6	1.3		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	60	
297下	灰?	丸皿	II類b	削り込み	(10.5)				釉:浅黄色(2.5Y7/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	30	
298	灰	丸皿	II類b	削り込み	(10.7)	(6.8)	2.15		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰白色(10YR7/1)	30	
299上	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.9	3.7	1.1		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:灰白色(10YR7/1)	85	
299下	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.7	4.9	1.3		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:灰白色(10YR7/1)	85	
300上	灰	丸皿	II類b	削り込み	10.8		1.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	80	

第6表　陶器一覧表(9)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
300下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.9	5.0	1.9		釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面：にぶい黄橙色(10YR7/3)	80	
301	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.8)	(5.8)	2.3		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	30	
302上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.8)	(5.0)	1.4		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:灰白色(2.5Y7/1) 断面:にぶい黄色(2.5Y6/3)	50	
302下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.1)	(5.0)	2.1		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:にぶい黄色(2.5Y6/3)	60	
303	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.8	5.15	2.2		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:浅黄橙色(10YR8/3)～灰黄褐色(10YR5/2)	80	
304	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	下皿(10.8)	下皿(5.4)	下皿2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄色(10Y7/4)	35	
305上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.85				釉：にぶい黄橙色(10YR7/4)～暗オリーブ色(5Y4/3) 断面:灰白色(N7/0)～浅黄色(2.5Y7/3)	80	
305下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.2	5.0	2.25		釉：にぶい黄橙色(10YR7/4)～暗オリーブ色(5Y4/3) 断面:灰白色(N7/0)～浅黄色(2.5Y7/3)	80	
306上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.9				釉：浅黄色(2.5Y7/4)～暗オリーブ色(7.5Y4/3)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)～灰白色(2.5Y7/1)	70	
306下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.6	4.4	2.15		釉：浅黄色(2.5Y7/4)～暗オリーブ色(7.5Y4/3)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)～灰白色(2.5Y7/1)	55	
307	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(11.0)	(6.2)	1.85		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	55	
308	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(11.1)		1.65		釉:2.5Y8/3淡黄色(2.5Y8/3)　内面:褐色(7.5YR4/3) 外面:にぶい黄褐色(10YR4/3)　断面:灰色(N6/0)	45	
309上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(11.2)	(4.8)	1.9		釉:灰オリーブ色(5Y5/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/2) 断面:灰白色(N8/0)	80	
309下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.6)	5.2	1.1		釉:灰オリーブ色(5Y5/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/2) 断面:灰白色(N8/0)	80	
310	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(11.2)	(6.4)	2.3		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:灰白色(N7/0)	30	
311	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(11.6)	(6.2)	2.7		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:灰黄褐色(10YR6/2) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	30	
312上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(11.9)	(5.8)	1.8		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:淡黄色(2.5Y8/3)	30	
312下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.8)	(5.0)	1.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:淡黄色(2.5Y8/3)	30	
313	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み		(5.1)			釉:オリーブ灰色(10Y5/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/2) 断面:灰白色(5Y7/1)	40	
314	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み		5.0			釉：暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面：にぶい黄橙色(10YR6/4)	45	
315	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み		(5.4)			釉:暗オリーブ色(7.5Y7/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	40	
316	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み		(5.8)			釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) ～にぶい黄橙色(10YR7/2)	35	
317	灰?	丸皿	Ⅱ類b	削り込み		(5.1)			釉:浅黄色(2.5Y7/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3)	50	
318上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.5		1.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)　外面:断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	90	
318下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.2	4.8	2.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)　外面:断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	90	
319	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.4)	(4.6)	2.4		釉:褐灰色(7.5YR4/1)～淡黄色(5Y8/3)　外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面：にぶい黄橙色(10YR6/3)～灰白色(10YR7/1)	45	
320	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.4)	(4.9)	2.5		釉:灰色(5Y5/1)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	30	
321	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.4)	(4.6)	2.0		内面釉:暗褐色(10YR3/3)　外面釉:暗赤褐色(7.5YR3/3) 内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	25	
322	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.4)	(5.2)	2.0		釉:黒褐色(10YR3/2)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	40	
323	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.6	5.7	2.0		釉:黒褐色(7.5YR3/1)　内面:灰黄色(2.5Y7/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	35	
324	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.6	4.8	1.62		釉:黒褐色(7.5YR3/1)　内面:にぶい黄褐色(5YR4/3) 外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	70	
325	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	9.6	5.2	2.0		釉:にぶい橙色(7.5YR6/4)　内外面:(5YR6/4)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	95	
326	鉄?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.3)	1.95		釉:浅黄色(2.5Y7/3)　内外面:にぶい橙色(5YR6/4)	30	
327	鉄?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.7)	2.1		釉:灰黄色(2.5Y7/2)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3) 断面:灰色(N6/0)	25	
328	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(4.0)	2.0		釉:オリーブ黒色(7.5Y2/2)～灰白色(7.5Y2/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	30	
329	鉄?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(5.2)	2.1		釉：明黄褐色(2.5Y7/6)　外面：にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面:にぶい橙色(5YR7/4)	65	
330	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.8)	(4.5)	1.7		釉:黒褐色(2.5Y3/1)　内面:暗褐色(10YR3/3)　外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:灰色(5Y6/1)	40	
331	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(9.9)	(4.8)	2.0		釉:灰白色(5Y7/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	45	
332	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	10.0	5.35	2.1		釉:灰黄褐色(7.5YR4/2)　外面:灰黄色(2.5Y6/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	70	
333	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	10.0	(5.1)	1.6		釉：暗褐色(7.5YR3/4)～にぶい褐色(7.5YR5/4)	40	
334	鉄?	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.0)	(5.1)	2.0		釉：オリーブ灰色(10Y4/2)　外面：暗褐色(7.5YR3/4)～にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	50	
335	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.0)	(5.3)	1.8		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	50	

第6表　陶器一覧表(10)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
336	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.0)	(5.3)	1.8		釉:灰黄褐色(10YR4/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	20	
337上	鉄	丸皿	II類a	削り込み		(5.9)			釉:黒褐色(10YR3/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	50	
337下	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.1)	(5.8)	1.7		釉:黒褐色(10YR3/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	85	
338	鉄?	丸皿	II類a	削り込み	(10.1)	(5.2)	2.3		釉:にぶい黄色(2.5Y6/4)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	50	
339	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.1)	6.0	1.9		釉:黒褐色(10YR3/1)　内外面:灰黄色(2.5Y6/2)	45	
340	鉄?	丸皿	II類a	削り込み	10.2	4.7	2.4		釉:淡黄色(2.5Y8/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面: 灰褐色(7.5YR6/2)	90	
341	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.1)	(5.5)	1.8		釉:黒褐色(7.5YR3/2)　内面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	45	
342	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.2)	(5.4)	2.3		釉:黒色(5YR1.7/1)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面: にぶい黄橙色(10YR6/3)	30	
343	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.3)	(5.7)	2.05		釉:褐灰色(5YR4/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面: 黄灰色(2.5Y6/1)	25	
344	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.6)	(5.6)	2.2		釉:黒褐色(10YR2/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面: 灰白色(10YR7/1)	30	
345	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.7)	(5.9)	2.1		釉:暗褐色(5YR3/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面: 灰白色(2.5Y7/1)	30	
346	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.5)	5.6	1.8		釉:黒色(2.5Y2/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面: 灰白色(2.5Y7/1)	35	
347	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.6)	(5.4)	2.1		釉:オリーブ黒色(5Y2/2)　内面:褐色(10YR4/4)　外面:黄 褐色(2.5Y5/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	25	
348	鉄	丸皿	II類b	削り込み	9.5	(4.3)	2.0		釉:にぶい赤褐色(5YR4/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3) 断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	70	
349	鉄	丸皿	II類b	削り込み	9.6	5.3	1.9		外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)	95	
350	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.6)	(5.1)	2.0		内面釉:灰白色(10YR7/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:灰白色(10YR7/1)	45	
351	鉄	丸皿	II類b	削り込み	9.8	(5.0)	2.5		釉:黒褐色(7.5YR3/2)　内面:にぶい橙色(7.5YR7/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	60	
352	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.8)	(5.5)	2.0		釉:暗赤褐色(10R3/2)　内面:にぶい赤褐色(5YR4/3) 断面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	45	
353	鉄	丸皿	II類b	削り込み	9.85	5.0	2.05		釉:黒褐色(10YR2/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面: 褐灰色(10YR6/1)	85	
354	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.8)	(5.6)	2.25		釉:暗褐色(7.5YR3/3)　内外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)～ 灰白色(2.5Y7/1)	70	
355	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.8)	(4.8)	2.0		内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面釉:褐色(7.5YR4/3) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	30	
356	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.8)	4.6	1.6		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	40	
357	鉄	丸皿	II類b	削り込み	10.0	5.2	2.4		釉:黒色(10YR2/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面: 灰黄色(2.5Y6/2)	50	
358	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.5)	2.0		釉:黒褐色(7.5YR3/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面:にぶい黄褐色(10YR6/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	45	
359	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.9)	(5.0)	2.0		釉:オリーブ色(5Y5/4)　内外面:にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面底部:にぶい橙色(5YR6/4)	25	
360	鉄	丸皿	II類b	削り込み	10.0	5.9	2.15		釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面:にぶい橙色(5YR7/4)	100	
361	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.0)	(5.5)	1.8		釉:オリーブ黄色(5Y6/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	30	
362	鉄	丸皿	II類b	削り込み	10.1	5.6	2.2		釉:暗赤灰色(2.5YR3/1)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	90	
363	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.1)	(5.4)	1.9		釉:浅黄色(2.5Y9/4)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面: にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	25	
364上	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.15)	(4.8)	1.9		釉:黒褐色(7.5YR2/2)　内外面:にぶい黄橙色(10YR7/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	55	
364下	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.45)	(5.6)	2.25		釉:黒褐色(7.5YR2/2)　内外面:にぶい黄橙色(10YR7/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	55	
365	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(9.8)	(5.8)	2.05		釉:灰褐色(7.5YR4/2)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	
366	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.2)	(5.4)	2.1		釉:黒色(7.5YR1.7/1)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:浅黄色(2.5Y7/3)	55	
367	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.2)	(5.4)	(2.3)		釉:黒オリーブ褐色(2.5Y3/3)　外面:にぶい橙色 (7.5YR7/3)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	35	
368	鉄	丸皿	II類b	削り込み	10.4	5.0	2.2		釉:にぶい黄橙色(10YR7/4)～灰色(5Y6/1)　内外面:にぶい 橙色(2.5YR6/4)	90	
369	鉄	丸皿	II類b	削り込み	10.3	5.2	2.3		釉:黒褐色(10YR2/2)　内外面:暗灰黄色(2.5Y5/2)　断面: 灰色(7.5Y6/1)	55	
370	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	5.4	2.4		釉:灰オリーブ色(5Y5/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	
371	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)	(6.0)	1.8		釉:黒褐色(7.5YR2/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(5Y8/1)	30	
372	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.6)	(5.5)	1.6		釉:にぶい黄色(2.5Y6/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	100	
373上	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.5)	(4.9)	(1.8)		釉:暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)　内面:にぶい褐色 (7.5YR5/3)	70	
373下	鉄	丸皿	II類b	削り込み	(10.4)				釉:暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)　内面:にぶい褐色 (7.5YR5/3)	10	
374	鉄?	丸皿	II類b	削り込み	(10.6)	(5.9)	2.1		釉:浅黄色(2.5Y7/4)　内外面:にぶい褐色(7.5Y5/3) 断面:にぶい黄褐色(10YR6/3)	25	
375	鉄	丸皿	II類b	削り込み	10.6	(5.2)	2.6		釉:暗褐色(10YR3/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/4) 断面:灰白色(10YR7/1)	60	

第6表　陶器一覧表(11)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
376	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.7)	(5.6)	2.1		釉:黒色(2.5Y2/1)　外面:灰黄色(2.5Y6/2)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	40	
377	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.7)	(6.0)	2.1		釉:灰黄褐色(10YR5/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	50	
378上	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.7				釉:黒色(7.5YR2/1)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	85	
378下	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.5	5.6	2.2		釉:黒色(7.5YR2/1)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	90	
379	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.8)	6.1	1.85		釉:にぶい黄褐色(10YR4/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	30	
380	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.8)	(5.8)	2.2		内面釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面釉:オリーブ灰色(10Y5/2)　内面:褐色(10YR4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR6/4)	20	
381	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(11.2)	(6.0)	2.55		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	35	
382上	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	11.8				釉:黒褐色(10YR2/2)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(10YR7/2)	85	
382下	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	11.3		1.2		釉:黒褐色(10YR2/2)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(10YR7/2)	100	
383上	灰	小杯	Ⅰ類	削り込み					釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	30	
383下	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	9.8	5.4	2.05		釉:黒褐色(7.5YR3/1)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	70	
384上	鉄	小杯	Ⅰ類	削り込み		(4.4)			釉:黒色(7.5YR1.7/1)　内面:にぶい黄橙色(10YR7/3)　外面:浅黄色(2.5Y7/3)　断面:黄灰色(2.5Y7/2)	25	
384下	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(5.0)	2.35		釉:黒色(7.5YR1.7/1)　内面:にぶい黄橙色(10YR7/3)　外面:浅黄色(2.5Y7/3)　断面:黄灰色(2.5Y7/2)	40	
385	無	灯明皿		削り込み	(11.2)	(6.0)	2.4		外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	25	
386	錆	灯明皿		削り込み	10.4	5.2	2.7		内面釉:にぶい橙色(7.5YR6/4)　外面釉:にぶい橙色(5YR6/4)　底部:にぶい黄橙色(10YR7/4)	55	
387	無	灯明皿		糸切り未調整	(10.7)	4.6	2.4		内外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　内面底部:にぶい橙色(7.5YR6/4)	30	
388	灰	甕皿		削り込み	10.1	5.0	2.4		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面底部:にぶい橙色(7.5YR7/3)　外面体部:にぶい褐色(7.5YR6/3)	85	
389	灰	甕皿		削り込み	(9.5)	(4.7)	1.9		釉:オリーブ色(5Y5/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	15	
390	灰	甕皿		削り込み	10.7	4.6	4.5		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	90	
391上	灰	甕皿		削り込み	(11.6)	(5.4)	1.6		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　外面:浅黄色(2.5Y7/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	25	
391下	灰	丸皿	Ⅱ類	削り込み	(10.0)				釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　外面:浅黄色(2.5Y7/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	3	
392	灰	甕皿		削り込み	(10.7)	5.0	2.25		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)～にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰色(5Y6/1)	50	
393	灰	甕皿		削り込み	10.4	4.6	1.95		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい橙色(5YR6/4)　断面:灰白色(2.5Y8/2)	70	
394	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み		(5.4)			釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:灰白色(7.5Y8/1)	20	菊花文
395	錆・灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(11.8)	(6.2)	2.6		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:灰褐色(5YR4/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	25	菊花文　錆地灰釉掛け
396	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み		(5.0)			釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面体部:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面底部:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(2.5Y8/1)	20	菊花文
397	鉄	丸皿	Ⅱ類b	削り込み		5.7			釉:黒褐色(10YR3/2)　外面:灰褐色(7.5YR6/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	25	菊花文
398上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み					釉:にぶい橙色(7.5YR6/4)～オリーブ灰色(10Y4/2)　外面:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　断面:灰色(10Y6/1)	85	菊花文
398下	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	10.0	5.15	2.35		釉:にぶい橙色(7.5YR6/4)～オリーブ灰色(10Y4/2)　外面:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　断面:灰色(10Y6/1)	100	菊花文
399	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み	(10.2)	(4.0)	2.3		釉:灰白色(5Y8/1)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	45	菊花文
400上	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み					釉:灰オリーブ(7.5Y3/5)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:灰褐色(5YR2/5)	50	菊花文
400下	灰	丸皿	Ⅰ類a	貼り付け	10.4	5.2	1.9		釉:灰オリーブ(7.5Y3/5)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:灰褐色(5YR2/5)	75	菊花文
401	灰	丸皿	Ⅱ類b	削り込み					釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:褐色(7.5YR4/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	15	ソギ
402	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み		(5.6)			釉:にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	25	ソギ
403	灰	丸皿	Ⅰ類b	貼り付け	(8.1)	(4.7)	(2.3)		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)～灰白色(7.5Y7/2)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4)　断面:灰白色(10YR8/2)	50	
404	灰	丸皿	Ⅰ類a	貼り付け	(10.2)	(4.8)	2.75		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)～にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:褐灰色(10YR5/1)	50	
405	灰	丸皿	Ⅰ類b	貼り付け	(10.9)	6.6	2.7		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)～オリーブ黒色(5Y3/2)　外面:暗オリーブ色(5Y4/4)～にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰白色(2.5Y8/1)	40	
406	灰	丸皿	Ⅰ類a	貼り付け	10.5	5.6	2.1		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	80	菊花文
407	鉄	丸皿	Ⅰ類a	貼り付け	(10.0)	5.1	2.35		外面:暗赤褐色(5YR3/2)～にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:赤灰色(2.5YR5/1)	45	
408	鉄	丸皿	Ⅰ類b	貼り付け	10.2	4.6	2.9		釉:暗赤褐色(5YR3/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	40	
409	錆	稜皿?			(8.7)				釉:暗褐色(7.5YR3/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	10	
410	錆	稜皿		削り込み	(10.2)	(5.8)	2.7		釉:灰赤色(2.5YR5/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	20	

第6表　陶器一覧表(12)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
411	錆	稜皿		削り込み	(11.7)	(6.6)	2.4		内面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　外面:灰赤色(10R4/2)	20	
412	錆	稜皿		削り込み		(5.0)			釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	20	菊花文
413	錆	稜皿		削り込み	(11.6)	(5.5)	1.6		釉:灰褐色(7.5YR4/2)　断面:灰色(5Y5/1)	50	菊花文
414	錆	稜皿		削り込み		(6.0)			釉:褐灰色(7.5YR4/1)　断面:灰色(10Y5/1)	20	菊花文
415	灰	稜花皿		不明	(11.7)				釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR7/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	10	
416	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(12.6)	(6.4)	3.15		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:明褐色(5YR7/1)	15	
417	灰	中皿	Ⅰ類	不明	(12.0)				釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	15	
418	鉄	中皿	Ⅰ類	不明	(13.2)				外面:灰褐色(7.5YR5/2)	15	
419	錆・灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(13.4)	(5.8)	(3.7)		釉:灰褐色(5YR5/2)～浅黄色(2.5Y7/4)　内外面:にぶい橙色(5YR6/3)	30	錆地灰釉掛け
420	錆	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(13.6)	(7.6)	3.8		釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:橙色(2.5YR6/6)	25	
421	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(13.5)	(7.0)	3.2		釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内面:褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	20	
422	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(14.0)	(6.9)	3.4		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(5Y7/2)	20	
423	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(14.4)	(7.2)	2.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	30	
424	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(14.6)	(6.9)	3.55		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:暗赤褐色(5YR3/4) 外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(N7/0)	30	
425	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(14.6)	(7.2)	3.2		釉:オリーブ色(5Y5/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:灰白色(5Y7/1)	25	
426	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(16.0)	(7.8)	4.3		釉:灰オリーブ色(7.5Y6/2)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	口禿 442と同一個体か
427	灰	中皿		貼り付け		(7.8)			釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(2.5Y8/2)	15	
428	錆	中皿	Ⅱ類	貼り付け	(13.9)	7.0	(4.2)		外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	30	
429	灰	中皿	Ⅱ類	不明	(14.0)				釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　断面:灰白色(7.5Y8/1)	15	
430	錆	中皿	Ⅱ類	不明	14.7				釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	25	
431	錆?	中皿	Ⅱ類	不明	(20.8)				内面:淡黄色(2.5Y8/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	20	
432	錆	中皿	Ⅱ類	貼り付け	(21.4)	(10.4)	3.7		釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	25	
433	灰	中皿		貼り付け		(7.1)			釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	30	
434	錆	中皿		貼り付け		8.4			釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	40	
435	錆	中皿		貼り付け		8.8			釉:暗褐色(10YR3/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	30	
436	灰	中皿		貼り付け		(5.4)			釉:褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR5/3) 断面:灰色(5Y6/1)	15	菊花文　見込みに段
437	灰	中皿		貼り付け		(5.8)			釉:灰褐色(5YR4/2)　断面:灰白色(5Y7/1)	15	菊花文　見込みに段
438	灰	中皿?		削り出し		(4.1)			釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	10	菊花文
439	灰	中皿		貼り付け		(6.0)			釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:灰褐色(5YR5/2) 断面:褐灰色(7.5YR6/1)	20	菊花文
440	錆	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(12.8)	(5.8)	3.0		釉:暗褐色(7.5YR3/4)　外面:暗褐色(7.5YR3/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	25	菊花文
441	灰	中皿	Ⅰ類	貼り付け	(13.2)	6.5	3.8		釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:浅黄色(2.5Y7/3) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	菊花文
442	灰	中皿		不明					釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	5	口禿 426と同一個体か
443	灰	小杯	Ⅰ類	無	(5.3)	(4.0)	3.4		釉:灰オリーブ色(5Y6/2)　外面:灰褐色(7.5YR5/2) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	20	
444	灰	小杯	Ⅰ類	無	6.3	4.6	3.7		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:淡黄色(2.5Y8/3)	80	
445	灰	小杯	Ⅰ類	無	(6.4)	(4.0)	3.8		釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰色(5Y6/1)	10	
446上	灰	小杯	Ⅰ類	削り込み		4.4			釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(10YR7/1)	40	
446下	灰	丸皿	Ⅱ類	削り込み		4.6			釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(10YR7/1)	25	
447	灰	小杯	Ⅰ類	無	7.2	4.4	3.6		釉:灰白色(5Y7/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	60	
448	灰	小杯	Ⅰ類	無	(7.05)	(4.2)	3.75		釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:浅黄色(2.5Y7/3) 断面:灰白色(2.5Y8/2)	25	
449	灰	小杯	Ⅰ類	不明	(7.1)				釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	10	
450	灰	小杯	Ⅰ類	不明	(7.3)				釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:灰褐色(7.5YR4/2) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	
451	灰	小杯	Ⅰ類	不明	(7.4)				釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/4) 断面:灰白色(10YR8/2)	15	
452	灰	小杯	Ⅱ類	無	(7.4)	(3.8)	3.8		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい橙色(10YR6/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	25	
453	灰	小杯	Ⅰ類	不明	(9.2)				釉:オリーブ黄色(5Y6/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	20	
454	鉄	小杯	Ⅰ類	無	(6.5)				釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:明赤褐色(5YR5/6)	20	
455	鉄	小杯	Ⅰ類	不明	(6.7)				釉:黒褐色(10YR2/2)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:灰白色(10YR8/2)	20	

第6表　陶器一覧表(13)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
456	鉄	小杯	Ⅱ類	無	(8.0)	(3.6)	3.4		釉:黒褐色(7.5YR3/2)　外面:明黄褐色(10YR6/6)	20	
457	鉄	小杯	Ⅱ類	無		(4.6)			釉:暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	20	
458	鉄?	向付	Ⅰ類	貼り付け	(15.4)	(8.0)	2.4		釉:黒褐色(10YR3/1)～灰オリーブ色(5Y5/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:にぶい黄褐色(10YR5/3)	30	
459	錆	向付	Ⅰ類	不明	(16.0)				釉:褐色(7.5YR4/3)　断面:にぶい黄褐色(10YR6/3)	5	
460	錆	向付	Ⅰ類	不明	(16.6)				釉:灰褐色(5YR4/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	20	
461	錆	向付	Ⅰ類	削り込み	(18.4)	(11.8)	3.25		釉:にぶい黄色(2.5Y6/4)　内面:褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	40	口禿
462	錆	向付	Ⅰ類	無	(5.8)	(3.6)	2.4		釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	45	
463	錆	向付	Ⅰ類	削り込み	(9.2)	5.4	2.6		釉:灰黄色(2.5Y7/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	50	
464	錆	向付	Ⅰ類	削り込み	(10.3)	4.2	2.3		釉:灰白色(5Y7/2)～灰褐色(5YR4/2)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:明赤灰色(10YR7/1)	70	口禿
465	錆	向付	Ⅰ類	削り込み	(9.2)	(5.4)	3.1		釉:にぶい黄橙色(10YR6/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/4)　断面:にぶい赤褐色(5YR4/4)	30	口禿
466	錆	向付	Ⅰ類	不明	(9.3)				釉:にぶい黄色(2.5Y6/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	15	口禿
467	錆	向付	Ⅰ類	削り込み	(9.4)	(5.6)	2.4		釉:明黄褐色(10YR7/6)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	25	口禿
468	鉄	向付	Ⅰ類	削り込み	(9.4)	(5.6)	2.75		釉:にぶい黄色(2.5Y6/4)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/3)	45	口禿
469	錆	向付	Ⅰ類	削り込み	(9.7)	(5.7)	2.3		釉:にぶい黄色(2.5Y6/3)　外面:にぶい橙色(5YR6/4)	40	口禿
470	錆	向付	Ⅰ類	削り込み	(9.8)	5.1	2.3		釉:浅黄色(5Y7/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	50	口禿
471	灰	向付	Ⅰ類	削り込み	(10.0)	(6.2)	2.9		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	20	口禿
472上	灰?	向付	Ⅰ類	削り込み	(9.7)				釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)～暗赤褐色(2.5YR3/4)～にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　断面:2.5YR5/4にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	15	口禿
472下	灰?	向付	Ⅰ類	削り込み	(10.2)	(5.5)	2.7		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)～暗赤褐色(2.5YR3/4)～にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　断面:2.5YR5/4にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	55	口禿
473	鉄	向付	Ⅰ類	不明	(10.6)				釉:黒色(2.5Y2/1)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(10YR8/2)	15	
474	鉄	向付	Ⅱ類	貼り付け	(10.4)	(7.4)	4.3	(11.6)	釉:黒褐色(10YR2/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	20	
475	焼締	向付	Ⅱ類	不明	(9.8)				外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	25	
476	錆	向付	Ⅱ類	削り込み	(12.5)	(6.6)	3.3		釉:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	40	
477	灰	向付	Ⅱ類	貼り付け		(8.0)			釉:灰オリーブ色(7.5Y4/2)～にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:褐灰色(10YR6/1)	25	菊花文
478	錆	向付	Ⅰ類	削り込み		8.6			釉:褐色(7.5YR4/4)	30	
479	錆	鉢		不明	(20.8)				釉:灰褐色(7.5YR4/2)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	5	
480	焼締	大皿	Ⅰ類	無	(19.6)	(9.4)	4.3		外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	15	
481	錆	大皿		不明	(29.4)				釉:浅黄色(2.5Y7/4)～にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　断面:橙色(2.5YR7/6)	10	
482	錆	大皿		不明	(29.8)				外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:明褐色(7.5YR7/2)	10	
483	錆	大皿		不明	(30.6)				外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	15	
484	錆	大皿	Ⅰ類	無	(32.0)	(17.0)	6.2		釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	25	
485	錆	大皿		不明	(27.8)				内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	15	口禿
486	錆	大皿		不明	(32.3)				釉:褐色(7.5YR4/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	20	口禿
487	錆	大皿		不明	(32.4)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:橙色(5YR7/6)	10	口禿
488	錆	大皿		不明	(34.3)				釉:灰赤色(2.5YR5/2)～浅黄色(2.5Y7/3)　断面:淡赤橙色(2.5YR7/3)	15	口禿
489	錆?	大皿		不明	(35.0)				外面:淡黄色(2.5Y8/4)～褐色(7.5YR4/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	15	口禿
490	錆	大皿		不明	(31.0)				釉:褐色(7.5YR4/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	5	
491	錆	大皿		不明	(33.2)				釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	15	
492	錆?	大皿		不明	(28.2)				釉:浅黄色(2.5Y7/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR4/3)　断面:にぶい黄褐色(10YR4/3)	15	口禿
493	錆	大皿	Ⅰ類	無		12.6			釉:暗赤褐色(2.5YR3/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	30	
494	錆	大皿	Ⅰ類	無		11.8			釉:赤灰色(10YR5/1)　外面:橙色(2.5YR7/6)　断面:橙色(2.5YR7/6)	20	
495	錆	大皿	Ⅰ類	無		(13.0)			釉:淡黄色(5Y8/3)～にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　断面:灰褐色(5YR6/2)	10	
496	焼締	大皿	Ⅰ類	無		(12.6)			外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:橙色(5YR6/6)	15	
497	錆	大皿	Ⅰ類	無		(11.4)			内面釉:灰赤色(10R4/2)　外面釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/3)	10	
498	錆	大皿	Ⅱ類	貼り付け		(13.0)			外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	15	
499	灰	筒形香炉	Ⅰ類	三足		5.4			外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)	40	
500	鉄	筒形香炉	Ⅰ類	三足		5.6			釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰白色(N7/0)	20	
501	灰	筒形香炉		不明	(6.4)				外面釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　断面:灰白色(5Y7/2)	10	
502	灰	筒形香炉		不明	(8.1)				内面釉:にぶい褐色(7.5YR6/3)　外面:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/3)	10	
503	灰	筒形香炉	Ⅰ類	三足	(7.3)	(6.2)	4.0		釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰白色(N7/0)	20	

第6表　陶器一覧表(14)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
504	灰	筒形香炉		不明	(10.0)				釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面：にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(5Y7/1)	25	
505	鉄?	筒形香炉	Ⅰ類	三足	(10.0)	(8.4)	5.1		釉:浅黄色(5Y7/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(5Y7/1)	50	
506	灰	筒形香炉	Ⅰ類	三足	(10.2)	(9.0)	5.2		釉：暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面：にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい黄橙(10YR6/3)	30	
507	鉄?	筒形香炉	Ⅰ類	三足	(10.8)	(8.6)	4.7		内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　外面:浅黄色(5Y7/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	20	
508	灰	筒形香炉			(10.2)				釉:オリーブ色(5Y5/4)　内面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	10	
509	錆	筒形香炉	Ⅰ類	三足	(10.2)	(8.4)	4.7		内面釉：にぶい橙色(5YR6/4)　外面釉：にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	20	
510	鉄?	筒形香炉	Ⅰ類	三足	(12.2)	(10.5)			釉：オリーブ黄色(5Y6/4)　内外面：にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	10	
511	鉄	筒形香炉			(14.0)				釉:黒褐色(2.5Y3/2)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	10	口禿
512	鉄	筒形香炉			(13.9)				釉：黒褐色(5YR3/1)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3) 外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰色(5Y6/1)	15	口禿
513	鉄?	筒形香炉			(15.7)				釉:浅黄色(2.5Y7/4)～にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:灰白色(N7/0)	15	口禿
514	錆	筒形香炉	Ⅰ類	三足		7.6			釉:暗赤褐色(5YR3/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	40	
515	鉄	筒形香炉	Ⅰ類	三足		(9.6)			外面:黒色(10YR1.7/1)～にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(10YR8/2)～灰白色(10YR8/1)	25	
516	鉄	筒形香炉	Ⅱ類	貼り付け	(10.9)	(7.0)	5.9		釉：にぶい黄色(2.5Y6/4)　内外面：にぶい黄褐色(10YR4/3)	50	
517	鉄	蓋物		貼り付け		(7.0)			釉:黒褐色(10YR2/2)～明黄褐色(2.5YR7/6)　内外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	80	近世
518	灰	筒形香炉		削り出し		(6.4)			釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内外面:灰褐色(7.5YR4/2) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	40	
519	灰	小壺	Ⅰ類		(3.2)			(6.0)	釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面:灰白色(5Y7/1)	15	
520	鉄	小壺	Ⅰ類		(4.0)			(7.1)	釉:暗灰黄色(2.5Y4/2)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面:灰褐色(5YR6/2)	10	
521	鉄	小壺	Ⅰ類		(4.4)			(8.5)	釉:オリーブ黒色(5Y3/1)　外面:にぶい黄橙色(10YR7/3) 断面:灰白色(10YR8/2)	20	
522	鉄	小壺	Ⅰ類		(6.0)				釉:黒褐色(10YR3/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	15	
523	鉄	小壺	Ⅰ類		(7.0)				釉:黒褐色(2.5Y3/1)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	10	
524	灰	小壺	Ⅰ類		(4.2)			(8.1)	釉：暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面：にぶい黄橙色(10YR6/4)	15	
525	灰	小壺	Ⅰ類		(4.1)			(7.5)	釉：オリーブ灰色(10Y6/2)　外面：にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	10	
526	鉄	小壺	Ⅰ類	無	(4.8)	(5.0)	5.9	(8.6)	内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　外面釉:灰褐色(5YR4/2) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	40	
527	灰	小壺	Ⅰ類		(5.3)			(8.5)	釉：灰オリーブ色(7.5Y5/2)　内面：にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	10	
528	鉄	小壺	Ⅰ類		(4.3)			(7.3)	釉:黒褐色(7.5YR3/2)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3) 断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	15	
529	錆	小壺	Ⅱ類		(7.1)				釉:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:灰色(7.5Y6/1)	5	
530	鉄	小壺	Ⅰ類		(5.6)			(8.2)	釉:灰色(N6/0)　内面:灰白色(2.5Y7/1)	25	
531	灰	小壺	Ⅱ類	無	(7.1)	4.6	6.35	8.6	灰オリーブ色(5Y5/3)～橙色(7.5YR6/6)　断面:灰白色(10YR8/2)	40	
532	鉄	小壺		無		(5.0)		(8.8)	釉:黒色(10YR2/1)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	40	
533	鉄	小壺		無		(5.2)			釉:黒褐色(7.5YR3/2)～浅黄色(5Y7/4)　内外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	
534	灰	小壺		無		4.4			釉：灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面：にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面:灰白色(10YR7/1)	50	
535	鉄	小壺		無		(5.0)			釉:黒褐色(5YR3/1)　内外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:灰白色(10YR8/2)	20	
536	鉄	蓋			7.2		2.25	(11.3)	釉:淡黄色(5Y8/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:褐灰色(5YR6/1)	85	近世
537	灰	蓋			(8.4)			10.8	釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:灰黄色(2.5Y7/2) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	35	
538	灰	蓋			(8.9)			(11.2)	釉:オリーブ黒色(5Y3/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR4/3) 断面:にぶい黄褐色(10YR4/3)	20	近世
539	灰	蓋			9.0		3.7	12.3	釉:黒褐色(10YR3/2)　外面:明褐色(7.5YR5/6)	80	近世
540	灰	蓋			(9.4)			(12.0)	釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　内面:にぶい黄褐色(10YR4/3) 断面:灰黄色(2.5Y6/2)	20	
541	鉄	蓋			(9.6)		1.5	(12.6)	釉:黒褐色(7.5YR3/1)　内面:にぶい赤褐色(5YR4/3) 断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	25	近世
542	灰	短頸壺			(8.7)				釉:オリーブ色(5Y5/4)　内外面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:5Y7/1灰白色(5Y7/1)	5	
543	灰	短頸壺			(8.8)	(7.0)	8.6	(12.4)	釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)	30	
544	灰	短頸壺			(9.8)			(13.1)	釉:暗オリーブ色(5Y4/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	15	
545	灰	短頸壺			(9.6)	(9.0)	9.3	(14.0)	釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:明黄褐色(10YR6/6)	40	
546	灰	短頸壺			(9.8)			(13.0)	釉：暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面：にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	15	
547	灰	短頸壺						(13.6)	釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:灰褐色(7.5YR4/2) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	

第6表　陶器一覧表(15)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
548	灰	短頸壺			(10.2)			(13.8)	釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:灰黄褐色(10YR5/2) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	15	
549	灰	短頸壺			(10.6)	(6.8)	9.0	(13.6)	釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	20	耳付き
550	灰	短頸壺			(12.0)	(9.4)	9.1	(14.8)	釉:暗オリーブ色(7.5Y5/3)～にぶい褐色(7.5Y5/4) 断面:灰黄色(2.5YR7/2)	30	
551	灰	短頸壺				(10.0)		(15.0)	釉:灰オリーブ色(7.5Y4/2)　外面:にぶい橙色(5Y6/3) 断面:灰白色(5Y7/1)	20	
552	灰	短頸壺				8.0			釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	
553	灰	短頸壺				(8.0)			内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)	10	
554	灰	水滴	Ⅱ類		(2.0)				釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:灰白色(N7/0)	10	瓜形
555	灰	水滴	Ⅱ類		(2.0)	3.2	4.0		釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　内外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(10YR8/1)	45	瓜形
556	灰	水滴	Ⅰ類		(2.0)	3.3	3.0	5.7	外面:オリーブ黄色(7.5Y6/3)～にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:灰白色(5Y7/1)	80	
557	鉄	耳付水注			(4.0)				釉:黒色(10YR2/1)　断面:灰色(5Y5/1)	5	
558	鉄	耳付水注			(3.1)				釉:黒褐色(7.5YR2/2)　断面:褐灰色(7.5YR6/1)	25	
559	鉄	耳付水注			(4.4)			(8.0)	釉:暗褐色(7.5YR3/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	20	
560	鉄	耳付水注			(4.7)			(8.0)	釉:暗褐色(10YR3/3)　外面:明褐色(7.5YR5/6)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25	
561	鉄	耳付水注				(5.2)		(8.9)	釉:黒褐色(10YR3/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	35	
562	鉄	耳付水注			(4.7)			(9.45)	釉:黒色(7.5YR1.7/1)～暗褐色(7.5YR3/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	15	
563	鉄	耳付水注			(4.7)	(4.4)	5.9	8.0	釉:黒色(2.5Y2/1)　外面:黄褐色(2.5Y5/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	40	
564	鉄	耳付水注				(5.0)		(8.6)	釉:黒褐色(7.5YR3/1)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	
565	鉄	耳付水注				(5.0)		(8.8)	釉:黒褐色(7.5YR3/2)　外面:黄褐色(10YR5/6)	30	
566	灰	耳付水注							釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	5	
567	灰	徳利	Ⅱ類		3.7				釉:オリーブ色(5Y5/6)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	5	
568	灰	徳利	Ⅱ類		4.8				釉:オリーブ黄色(5Y6/4)　断面:灰白色(10YR8/1)	5	
569	灰	徳利	Ⅱ類		(4.2)				釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:褐色(7.5YR4/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	5	千段巻
570	灰	徳利	Ⅱ類						釉:オリーブ色(5Y5/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	5	千段巻
571	灰	徳利	Ⅱ類					(11.2)	釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:灰白色(10YR8/1)	15	千段巻
572	灰	徳利	Ⅱ類						釉:暗オリーブ色(5Y4/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:明褐灰色(7.5YR7/2)	10	千段巻
573	灰	徳利	Ⅱ類						釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:灰色(5Y6/1)	15	千段巻
574	灰	徳利	Ⅱ類						釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　内面:褐色(10YR4/4)　断面:灰白色(5Y7/1)	10	千段巻
575	灰	徳利	Ⅱ類					11.9	釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:灰白色(2.5Y8/2)	70	千段巻
576	灰	徳利	Ⅱ類			(7.2)			内面釉:暗褐色(10YR3/4)　外面釉:暗オリーブ色(5Y4/4) 外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰色(5Y6/1)	5	千段巻
577	灰	徳利	Ⅱ類			(6.8)			内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面釉:オリーブ色(5Y5/4) 断面:灰白色(5Y7/2)	5	千段巻
578	鉄	徳利	Ⅱ類			6.8			釉:オリーブ黒色(5Y2/2)　内面:にぶい黄色(2.5Y6/3) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	15	千段巻
579	灰	徳利	Ⅱ類			(7.6)			釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	10	千段巻
580	灰	徳利	Ⅱ類					(12.6)	内面釉:暗褐色(10YR3/4)　外面釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3) 体部:褐色(10YR4/6)	25	
581	灰	徳利	Ⅱ類					(11.5)	内面:明黄褐色(10YR6/6)　外面:灰オリーブ色(7.5Y5/3) 断面:灰白色(10YR8/2)	10	
582	灰	徳利	Ⅱ類						釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:灰白色(2.5Y7/1)	5	
583	灰	徳利	Ⅱ類						釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)～にぶい橙色(7.5Y7/4) 断面:灰白色(7.5Y8/2)	20	
584	鉄	徳利	Ⅱ類						釉:黒色(7.5YR1.7)～にぶい黄褐色(10YR4/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	10	
585	灰	徳利	Ⅱ類			(7.0)			釉:オリーブ黄色(7.5Y6/3)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	15	
586	灰	徳利	Ⅱ類			7.6			釉:オリーブ色(5Y5/4)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:淡黄色(2.5Y7/3)	25	
587	鉄	徳利	Ⅱ類			(7.0)			内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	15	
588	鉄	徳利	Ⅰ類		(6.4)				釉:黒褐色(10YR3/1)～黒褐色(10YR2/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	5	
589上	灰	徳利	Ⅰ類						釉:黄褐色(2.5Y5/4)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	5	
589下	降灰	匣鉢蓋							内面釉:にぶい黄褐色(10YR4/3)　外面:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	25	

第6表　陶器一覧表(16)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
590	鉄	徳利	Ⅰ類					(14.0)	内面釉:灰赤色(2.5YR4/1)　外面釉:灰赤色(10YR4/2) 断面:灰白色(N7/0)	80	
591	鉄	徳利	Ⅰ類						内面釉:褐色(7.5YR4/3)　外面釉:暗褐色(10YR3/3) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	5	
592	錆	徳利	Ⅰ類						内面釉:褐色(7.5YR4/3)　外面釉:オリーブ黒色(5Y3/1) 断面:灰色(5Y5/1)	5	錆抽灰釉掛けか
593	鉄	徳利	Ⅰ類			(11.6)		(15.0)	釉:黒色(7.5YR2/1)～黒褐色(7.5YR8/2)～暗褐色(10YR3/4)～明黄褐色(10YR7/6)　断面:灰白色(10YR8/1)	25	
594	錆	徳利	Ⅰ類					(16.5)	釉:灰オリーブ色(5Y5/3)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/4) 外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	10	
595	鉄	徳利	Ⅰ類					(14.0)	内面釉:にぶい黄褐色(10YR4/3)　外面釉:黒色(10YR2/1) 外面:灰黄色(2.5Y7/2)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	20	
596	鉄	徳利	Ⅲ類						釉:黒色(10YR2/1)　断面:灰白色(10YR8/2)	5	
597	錆	徳利						(18.4)	釉:暗赤褐色(5YR3/4)～極暗赤褐色(5YR2/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)～褐灰色(10YR5/1)～褐灰色(10YR6/1)	25	近世
598	錆	徳利				9.6			釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　内面:にぶい橙色(7.5YR7/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	5	近世
599	錆	徳利							内面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面:灰赤色(2.5YR4/2) 断面:灰黄色(10YR6/2)	20	近世
600	錆	徳利						(13.2)	内面:暗赤褐色(2.5Y3/2)　外面:暗赤褐色(5YR3/2) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	近世
601	錆	徳利						(13.2)	釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　内面:橙色(7.5YR6/6) 断面:橙色(7.5YR6/6)	20	近世
602	錆	徳利						(14.6)	釉:暗赤褐色(5YR3/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 断面:褐灰色(10YR6/1)	20	近世
603	鉄	小瓶			(2.6)				釉:暗赤灰色(10R4/1)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3) 断面:にぶい橙色(5YR6/3)	10	
604	鉄	小瓶			(2.6)				釉:暗褐色(10YR3/3)～にぶい黄褐色(10YR4/3)　断面: にぶい黄橙色(10YR7/3)	20	
605	鉄	小瓶			(3.0)				釉:赤黒色(2.5YR2/1)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/3) 断面:灰白色(10YR8/2)	15	
606	鉄	小瓶						(6.0)	釉:暗オリーブ　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	30	
607	鉄	小瓶				(5.4)			釉:黒褐色(5YR2/1)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	10	
608	灰	小瓶				5.4			釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　内面:灰オリーブ色(7.5Y5/3) 外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	15	
609	錆	片口			(11.7)				外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	15	
610	錆	片口			(10.6)				外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	5	
611	錆	片口			(13.9)				内面釉:暗赤褐色(2.5YR3/3)　外面釉:暗赤褐色(5YR3/4) 断面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)	5	
612	焼締	片口		貼り付け		(9.6)			外面:にぶい橙色(5YR7/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	20	
613	錆	鉢			(21.9)				内面:黒褐色(7.5YR3/2)　外面:暗赤褐色(2.5YR3/2) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	5	
614	錆	鉢		無		(7.1)			外面:暗赤褐色(5YR3/3)～極暗赤褐色(5YR2/3)　断面:灰白色(2.5Y8/2)～黄灰色(2.5Y6/1)	20	
615	焼締	鉢		無		(10.1)			内面:浅黄橙色(10YR8/4)　断面:浅黄橙色(10YR8/4) 外面:浅黄橙色(10YR8/4)～浅黄橙色(7.5YR8/6)	25	
616	錆	花瓶			7.3				内面:暗赤褐色(2.5YR3/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)～にぶい褐色(7.5YR5/4)	10	
617	錆	花瓶		貼り付け		(16.6)			釉:赤灰色(2.5YR6/1)～淡赤橙色(2.5YR7/4)	10	
618	錆	広口壺	Ⅰ類		(7.9)				内面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　外面釉:灰赤色(2.5YR4/2) 断面:褐灰色(7.5YR6/1)	5	
619	錆	広口壺	Ⅰ類		(9.8)				釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	
620	錆	広口壺	Ⅰ類		(10.0)				釉:橙色(7.5YR6/6)　断面:橙色(7.5YR7/6)	3	
621	焼締	広口壺	Ⅰ類		(9.8)				外面・断面:にぶい橙色(5YR6/4)	5	
622	錆	広口壺	Ⅰ類		(13.6)				釉:灰赤色(7.5YR5/2)　内面:灰褐色(5YR5/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	2	
623	錆	広口壺	Ⅰ類		(13.2)				内面釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面釉:灰赤色(7.5YR4/2) 断面:灰白色(10YR7/1)	3	
624	錆	広口壺	Ⅰ類		(14.5)			(18.6)	釉:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	5	
625	錆	広口壺	Ⅰ類		(10.8)			(15.7)	釉:暗赤褐色(2.5Y3/2)　断面:灰褐色(7.5Y5/2)	35	
626	錆	広口壺	Ⅰ類		(11.6)			(15.0)	釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	5	
627	錆	広口壺	Ⅰ類		(11.8)				内面:暗赤褐色(5YR3/3)　外面:暗赤褐色(2.5YR3/3) 断面:浅黄橙色(10YR8/3)	10	
628	錆	広口壺	Ⅰ類		(9.7)				釉:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	2	
629	錆	広口壺	Ⅱ類		(10.6)				釉:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	2	
630	錆	広口壺	Ⅱ類		(10.0)				釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	
631	錆	広口壺	Ⅱ類		(11.8)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	3	
632	錆	広口壺	Ⅱ類		(10.0)				釉:褐色(7.5YR4/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	
633	錆	広口壺	Ⅱ類		(11.8)				釉:暗褐色(7.5YR3/4)　断面:灰白色(5Y7/1)	5	
634	錆	広口壺	Ⅱ類		12.1			14.5	釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰色(N6/0)～橙色(5YR6/6)	30	
635	錆	広口壺	Ⅱ類		(12.0)				釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:橙色(2.5YR6/6)	5	
636	錆	広口壺	Ⅱ類		(16.0)				釉:暗赤褐色(2.5YR3/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	

第６表　陶器一覧表(17)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
637	鐵	広口壺	Ⅱ類		(17.8)				釉：灰赤色(2.5YR4/2)　断面:灰褐色(5YR5/2)	5	
638	鉄	広口壺			(11.7)			(14.2)	釉:オリーブ褐色(2.5Y4/4)～浅黄色(2.5Y7/3)　内外面:褐色(7.5YR4/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	20	近世
639	鐵	広口壺							釉：暗赤褐色(5YR3/4)～にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	5	近世
640	鐵	広口壺		無		(12.0)			釉：にぶい黄橙色(10YR5/3)～褐色(7.5YR4/3)　断面:褐灰色(7.5YR5/1)～褐色(7.5YR4/3)	10	
641	鉄	広口壺		無		(10.6)			釉:黒褐色(10YR2/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	20	
642	鐵	広口壺		無		(12.4)			釉:灰褐色(7.5YR4/2)　内面:黄灰色(2.5Y5/1)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	
643	鐵	広口壺		無		(8.6)			内面釉：灰赤色(2.5YR4/2)　外面釉：にぶい赤褐色(2.5YR4/4)　底部:にぶい褐色(7.5YR5/4)	10	
644	鐵	広口壺		無		(8.9)			暗赤褐色(5YR3/3)　内面:オリーブ黒色(7.5Y3/1)　断面:灰白色(10YR8/2)	10	
645	鐵	広口壺		無		(8.9)		(15.0)	釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	10	
646	鐵	広口壺		無		(8.2)			釉:灰赤色(10R4/2)　外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:明褐灰色(7.5YR7/2)	5	
647	鐵	広口壺		無		(9.0)			内面釉:灰赤色(7.5R4/2)　外面釉:暗赤褐色(5YR3/3) 外面:明褐色(7.5YR5/6)	10	
648	焼締	広口壺		無		(8.9)			外面:灰褐色(5YR5/2)	40	
649	鐵	広口壺		無		(10.6)		(17.6)	釉:暗赤褐色(2.5YR3/4)　底部:褐色(7.5YR4/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	15	
650	鐵	広口壺							釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　内面:灰褐色(5YR5/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	20	
651	鐵	広口壺						(15.5)	内面釉:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　外面釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	10	近世
652	鐵	広口壺		無		(12.4)			釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)　内面:明褐色(7.5YR5/6) 外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:青灰色(5B6/1)～明褐色(7.5YR5/6)	10	近世
653	鐵	広口壺							釉:灰赤色(2.5YR4/2)　内面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	5	近世
654	鉄	広口壺							釉:黒色(7.5YR2/1)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	20	近世
655	鐵	広口壺			(11.1)			(14.2)	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:灰赤色(7.5R4/2) 断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	15	近世
656	鐵	広口壺		無	10.9	(9.2)	19.4	(14.8)	釉:暗褐色(7.5YR3/3)　内面:にぶい橙色(5YR6/4)	50	近世
657	鉄	壺甕類		削り出し		(9.0)			釉:7.5YR4/2灰褐色(7.5YR4/2)　内面:灰黄褐色(10YR5/2) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	3	
658	鉄	風炉?			(8.8)				釉:黒褐色(10YR2/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	5	
659	鉄	建水			(10.0)				釉:暗赤灰色(2.5YR3/1)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	5	
660	灰	建水			(12.3)			(13.1)	釉:黒褐色(2.5Y3/1)　断面:灰白色(N7/0)	5	
661	鉄	建水			(12.6)				釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)～オリーブ灰色(10Y4/2)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	15	
662	焼締	建水			(12.0)				内外面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	
663	焼締	建水			(13.6)				内外面:灰黄色(2.5Y7/2)	5	
664	焼締	甕	Ⅱ類		(23.8)				内面:橙色(7.5YR7/6)　外面:橙色(2.5YR6/6)	10	
665	鐵	甕	Ⅲ類	無	16.0	13.8	25.8	26.1	内面:暗紫灰色(5RP4/1)　外面釉:極暗赤褐色(2.5YR2/2)	70	近世
666	鐵	甕	Ⅰ類		(32.0)				内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:暗灰黄色(2.5Y5/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	10	口禿
667	鐵	甕	Ⅰ類		(31.8)				釉:灰褐色(5YR4/2)　断面:灰白色(10YR7/1)	10	口禿
668	鐵	甕	Ⅰ類		(38.2)				釉:暗赤褐色(2.5YR3/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	5	口禿
669	焼締	甕	Ⅱ類		(33.0)				外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)～にぶい黄褐色(10YR5/3)	3	
670	鐵	甕							内面釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面釉:暗赤褐色(2.5YR3/3) 断面:黄灰色(2.5Y6/1)	5	
671	鐵	甕							釉:暗赤褐色(7.5R3/2)　断面:灰色(5Y6/1)	5	
672	鐵	甕							釉:暗赤褐色(2.5YR3/4)　断面:浅黄色(2.5Y7/3)	5	
673	鐵	甕							釉:暗赤褐色(7.5R3/2)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	5	
674	鐵	甕							釉:灰赤色(2.5YR5/2)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/3)	5	
675	鐵	甕							内面:灰赤色(10R4/2)　外面:灰褐色(5YR4/2)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	5	
676	鐵	甕							外面：にぶい赤褐色(5YR5/4)～橙色(5YR7/8)～灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	10	
677	鐵	甕							外面:暗赤褐色(5YR3/3)～灰褐色(5YR4/2)　断面:灰オリーブ色(5Y6/2)	5	
678	鐵	甕？		無		(12.8)			外面:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:浅黄橙色(10YR8/4)	20	茶壺か
679	鐵	甕		無		(14.0)			釉:灰赤色(2.5YR4/2)　底部:にぶい橙色(2.5YR6/4) 断面:にぶい橙色(2.5YR7/4)～灰白色(10YR7/1)	10	
680	鐵	甕		無		(14.8)			内面釉:暗赤褐色(10R3/3)　外面釉:暗赤褐色(5YR3/3) 断面:にぶい橙色(5YR7/4)	5	
681	鐵	甕		無		(15.4)			釉:灰赤色(10R4/2)　断面:橙色(5YR6/6)	5	
682	鐵	甕		無		(15.0)			内面:明褐色(7.5YR5/6)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/6)～にぶい橙色(5YR4/6)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	10	
683	鐵	甕		無		(14.8)			内面:灰赤色(7.5R4/2)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3) 外面底部:にぶい橙色(5YR6/4)	20	
684	鐵	桶			(26.2)				釉:褐色(10YR4/6)　内面:灰褐色(7.5YR4/2)　外面:灰褐色(7.5YR5/2)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	5	口禿
685	鐵	桶			(26.2)				釉:灰褐色(5YR4/2)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	15	口禿

第6表　陶器一覧表(18)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
686	錆	桶			(29.8)				釉:暗褐色(7.5YR3/3)	5	口禿
687	錆	桶			(32.4)				釉:灰褐色(7.5YR4/2)　口唇部:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:灰色(5Y6/1)	15	口禿
688	錆	桶			(36.2)				外面:暗赤褐色(5YR3/3)～灰褐色(5YR4/2)～にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	10	口禿
689	錆	桶		無		(20.0)			釉:灰赤色(.0R4/2)　底部:赤褐色(10R5/1)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)～灰オリーブ色(5Y6/2)	20	口禿
690	錆	桶		無		(16.6)			釉:暗赤褐色(2.5YR3/2)　断面:灰色(5Y6/1)	5	口禿
691	錆	甕	Ⅲ類		(16.4)				釉:暗褐色(7.5YR3/3)　断面:灰色(5Y6/1)	2	
692	錆	甕	Ⅲ類		(19.2)				外面釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	5	口禿
693	錆	茶壺			(12.0)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	5	
694	錆	茶壺			(10.6)				内面:橙色(5YR6/6)　外面釉:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	5	
695	錆	茶壺							釉:黒色(N1.5/0)～暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)　内面:黄褐色(2.5Y5/3)	5	
696	鉄	茶壺							内面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面釉:灰色(5Y4/1) 断面:灰黄色(2.5Y6/2)	5	
697	錆	茶壺							釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　内外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	10	
698	錆	茶壺	Ⅰ類					(30.9)	外面:暗褐色(7.5YR3/3)～にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)～灰色(5Y6/1)	15	
699	錆	茶壺	Ⅱ類						釉:5Y4/1灰色(5Y4/1)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4) 断面:灰色(5Y5/1)	5	
700	錆	茶壺						(28.8)	釉:極暗赤褐色(2.5YR2/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:橙色(5YR7/6)	15	
701	錆	茶壺							内面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	15	
702	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.4)	(10.0)	10.0		釉:極暗赤褐色(7.5R2/2)　内面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	20	
703	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.6)	(9.8)	11.8		内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　外面:褐灰色(5YR4/1) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/3)	45	
704	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.4)	(10.0)	11.1		釉:黄灰色(2.5Y4/1)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	50	
705	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	28.1	10.1	12.55		釉:灰赤色(2.5YR4/2)～淡赤橙色(2.5YR7/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	60	
706	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.0)	(10.2)	12.15		釉:灰赤色(2.5YR4/2)　内面:にぶい橙色(2.5YR6/3) 断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	35	
707	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.7)	(9.6)	10.7		釉:灰色(7.5Y5/1)　断面:灰黄褐色(10YR5/2)	15	
708	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.1)	(9.8)	12.65		内面:にぶい橙色(5YR6/4)　外面釉:褐灰色(7.5YR4/1) 断面:橙色(2.5YR6/6)	20	
709	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.2)	(9.8)	11.7		釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	50	
710	焼締	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.4)	10.4	13.3		外面:にぶい黄橙色(10YR7/3)　断面:浅黄橙色(7.5YR8/3)	50	
711	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.2)	(11.0)	12.7		釉:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/3)	30	
712	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	28.9	10.4	11.4		釉:暗赤色(10R3/4)　内面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4) 断面:灰色(5Y6/1)	80	
713	焼締	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.6)	9.8	12.0		外面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	55	
714	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.6)	(11.0)	11.2		釉:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	25	
715	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.0)	9.4	12.4		釉:浅黄色(2.5Y7/4)～暗灰黄色(2.5Y5/2)～褐灰色(10YR6/1)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	25	
716	焼締	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.1)	10.5	13.7		内外面:浅黄橙色(7.5YR8/3)　断面:浅黄橙色(7.5YR8/3)	50	
717	焼締	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.8)	(8.6)	12.05		外面:にぶい橙色(2.5Y6/4)	15	
718	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.6)	(9.2)	11.3		釉:灰黄褐色(10YR5/2)　断面:にぶい黄褐色(10YR5/3)	25	
719	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(28.4)	10.2	13.5		外面:浅黄橙色(7.5YR3/4)	30	
720	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.8)	8.8	13.0		釉:暗赤褐色(10R3/2)　外面:にぶい橙色(2.5YR6/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	35	
721	焼締	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.2)	10.3	14.0		外面:灰白色(2.5Y8/2)	80	
722	焼締	擂鉢	Ⅰ類	無	29.6	10.4	13.4		内面:浅黄橙色(10YR8/4)　断面:浅黄橙色(10YR8/4) 外面:赤褐色(5YR4/6)	70	
723	焼締	擂鉢	Ⅰ類	無	(28.0)	10.4	14.0		外面:淡黄色(2.5Y8/3)	70	
724	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(30.0)	(9.2)	10.4		内外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:灰黄褐色(10YR5/2)	40	
725	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.0)	(9.4)	11.1		釉:暗赤灰色(10R3/1)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	20	
726	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.6)	9.2	10.8		釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	40	

第6表　陶器一覧表(19)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
727	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.3)	(11.1)	12.9		外面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:灰黄色(2/5Y6/2)	25	
728	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(32.6)	(10.2)	10.75		内面釉:暗赤褐色(2.5YR2/3)　外面釉:黒褐色(5YR2/2)	25	
729	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(24.6)	(8.8)	12.45		釉:褐灰色(10YR4/1)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	30	
730	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.6)	(9.9)	11.0		内外面:暗赤褐色(2.5YR3/3)～にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 断面:灰白色(N7/0)	25	
731	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.6)	9.8	13.0		外面:暗赤褐色(2.5YR3/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)	35	
732	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(31.0)	(12.0)	11.4		釉:暗赤灰色(7.5R3/1)　内外面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	25	
733	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.0)	(10.6)	12.1		釉:暗赤褐色(5YR3/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3) 断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	30	
734	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	29.6	9.0	11.0		釉:灰褐色(5YR4/2)　外面:にぶい橙色(5YR6/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	40	
735	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(26.0)	(8.0)	12.0		釉:暗赤褐色(10R3/2)　断面:灰白色(N7/0)	45	
736	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	27.6	9.1	12.8		釉:暗赤色(10R3/4)　断面:灰色(5Y6/1)	100	
737	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.2)	(9.9)	11.4		外面:暗赤褐色(2.5YR3/3)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	50	
738	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.4)	(10.2)	10.3		釉:灰色(5Y5/1)　内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	20	
739	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(29.6)	8.8	11.35		釉:赤褐色(10R4/3)　内面:にぶい橙色(2.5YR6/4)　断面:淡赤橙色(2.5YR7/4)	40	
740	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(28.6)	9.4	10.7		内面:にぶい橙色(5YR6/4)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	50	
741	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	(27.2)	(9.4)	12.0		釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面:明褐灰色(5YR7/2)～黄灰色(2.5Y4/1)　断面:灰赤色(2.5YR6/2)	25	
742	錆	擂鉢	Ⅰ類	無	18.6	8.0	7.6		釉:暗赤褐色(5YR3/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3) 断面:灰褐色(5YR6/2)	70	
743	焼締	擂鉢	Ⅱ類		(29.4)				外面:にぶい橙色(5YR6/4)　断面:にぶい橙色(5YR7/3)	15	
744	焼締	擂鉢	Ⅱ類		(27.8)				外面:灰褐色(5YR6/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	10	
745	焼締	擂鉢	Ⅱ類		(30.0)				外面:にぶい橙色(5YR6/4)	5	
746	錆	擂鉢	Ⅱ類		(33.8)				釉:灰赤色(10R4/2)　外面:赤褐色(10R4/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/3)　暗赤褐色(2.5YR3/2)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	5	
747	錆	擂鉢	Ⅱ類		(31.3)				外面:暗赤褐色(2.5YR3/3)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	3	
748	錆	擂鉢	Ⅱ類		(27.6)				内外面:灰色(2.5YR5/2)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	3	
749	錆	擂鉢	Ⅱ類		(31.5)				釉:灰赤色(2.5YR5/2)～にぶい橙色(2.5YR6/3)～にぶい橙色(2.5YR6/4)　内面:灰褐色(7.5YR5/2)　断面:橙色(2.5YR7/6)	5	
750	錆	擂鉢	Ⅱ類		(27.8)				釉:灰褐色(5YR5/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:橙色(2.5YR6/6)	3	
751	錆	擂鉢	Ⅱ類		(28.0)				釉:灰褐色(5YR4/2)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3) 断面:明褐灰色(7.5YR7/2)	10	
752	錆	擂鉢	Ⅱ類		(34.0)				釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4) 断面:橙色(2.5YR7/6)	3	
753	錆	擂鉢	Ⅱ類		(28.0)				釉:灰赤色(2.5YR4/2)　内面:にぶい橙色(7.5YR5/4) 外面:暗赤灰色(10R4/1)　断面:浅黄橙色(7.5YR8/4)	5	
754	錆	擂鉢	Ⅱ類		(29.1)				外面:にぶい橙色(5YR7/4)	3	
755	焼締	擂鉢	Ⅱ類		(33.0)				内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　外面:灰褐色(7.5YR5/2) 断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	20	
756	錆	擂鉢	Ⅱ類		(29.0)				内外面:灰褐色(5YR4/2)～にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:橙色(5YR6/6)	3	
757	錆	擂鉢	Ⅱ類		(28.4)				外面:暗赤褐色(2.5YR3/2)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	5	
758	錆	擂鉢	Ⅱ類		(31.6)				内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:にぶい赤褐色(7.5R4/3) 断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	10	
759	錆	擂鉢	Ⅱ類		(29.4)				内面:灰赤色(2.5YR5/2)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	5	
760	錆	擂鉢	Ⅱ類		(32.0)				内面:にぶい黄褐色(10YR5/3)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい黄褐色(10YR5/3)	5	
761	錆	擂鉢	Ⅱ類	無	(30.0)	(9.9)	11.5		内面:灰黄褐色(10YR5/2)～暗灰黄色(2.5Y5/2)　外面:灰褐色(7.5YR4/2)～灰黄褐色(10YR5/2)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	15	
762	錆	擂鉢	Ⅱ類		(32.5)				内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:灰赤色(10R4/2)～にぶい橙色(5YR7/3)　断面:橙色(2.5YR6/6)	15	
763	錆	擂鉢	Ⅱ類		(30.4)				内面:暗赤褐色(2.5YR3/2)　外面:灰赤色(10R4/2)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	10	
764	錆	擂鉢	Ⅱ類		(29.4)				内外面:灰赤色(2.5YR5/2)～にぶい黄橙色(10YR2/3) 断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	10	
765	焼締	擂鉢	Ⅱ類		(32.8)				内外面:明赤褐色(2.5YR5/6)～橙色(2.5YR6/6)　断面:橙色(5YR7/6)	5	
766	錆	擂鉢	Ⅱ類		(28.4)				内面:灰黄色(2.5Y6/2)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	5	

第6表　陶器一覧表(20)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
767	錆	擂鉢	II類		(29.2)				釉:にぶい赤褐色(7.5R4/3)　外面:赤褐色(10R4/3) 断面:明褐灰色(7.5YR7/2)	15	
768	錆	擂鉢	II類		(29.0)				内面:灰赤色(2.5YR5/2)　外面:灰赤色(10R4/2)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	5	
769	錆	擂鉢	II類		(34.2)				内面:灰赤色(2.5YR5/2)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	5	
770	錆	擂鉢	II類		(27.0)				内面:灰赤色(2.5YR5/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	5	
771	錆	擂鉢	II類		(29.8)				内面:にぶい橙色(5YR6/4)　外面釉:灰赤色(2.5YR4/2) 断面:にぶい橙色(2.5YR6/3)	15	
772	錆	擂鉢	II類		(30.0)				内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3) 断面:浅黄橙色(7.5YR8/4)～にぶい橙色(2.5YR6/4)	10	
773	錆	擂鉢	I類		(31.0)				内面:暗赤灰色(10R4/1)　外面:赤褐色(10R4/4)　断面:明黄褐色(10YR7/6)	3	
774	錆	擂鉢	I類		27.2				外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　釉:暗赤褐色(7.5YR3/2)	75	
775	錆	擂鉢	I類		(27.2)				内外面:灰褐色(7.5YR4/2)～浅黄橙色(7.5YR8/4)　断面:明褐色(7.5YR5/6)	3	
776	錆	擂鉢	I類		(24.1)				内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面釉:灰赤色(2.5YR5/2) 断面:にぶい橙色(5YR6/3)	30	
777	錆	擂鉢	I類		(30.0)				釉:灰黄褐色(10YR4/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	10	
778	錆	擂鉢	I類		(25.6)				釉:にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面:赤褐色(10R4/3) 断面:灰褐色(5YR6/2)	15	
779	錆	擂鉢	I類		25.7				釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:灰赤色(2.5YR5/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	40	
780	錆	擂鉢	I類		(28.8)				釉:灰褐色(5YR4/2)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3) 断面:明褐色(2.5YR5/6)	25	
781	焼締	擂鉢	I類		(29.8)				断面:灰黄褐色(10YR6/2)	10	
782	錆	擂鉢	I類		(29.0)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)～黒褐色(7.5YR3/1)　内面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	10	
783	錆	擂鉢	I類		(28.8)				釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/3)	20	
784	焼締	擂鉢	I類		(27.6)				内外面・断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	10	
785	錆	擂鉢	I類		27.4				釉:黒色(2.5Y2/1)　断面:灰色(5Y6/1)	15	
786	錆	擂鉢	I類		(26.4)				内面:にぶい赤橙色(10R6/3)　外面釉:灰赤色(10R4/2) 断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	30	
787	錆	擂鉢	I類		(26.6)				外面釉:灰褐色(5YR5/2)　内面:にぶい橙色(5YR6/4) 断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	15	
788	錆	擂鉢	I類		(30.0)				暗赤灰色(7.5R3/1)　暗赤褐色(10R3/2)　断面:灰褐色(7.5YR4/2)	10	
789	錆	擂鉢	I類		(30.4)				釉:灰黄褐色(10YR4/2)　内面:にぶい黄褐色(10YR5/4) 断面:にぶい黄褐色(10YR5/4)	10	
790	錆	擂鉢	I類		(25.2)				釉:灰赤色(10R5/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3) 断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	15	
791	錆	擂鉢	I類		(25.6)				釉:褐灰色(5YR4/1)　断面:灰褐色(7.5YR5/2)	10	
792	錆	擂鉢	I類		(30.8)				釉:褐灰色(10YR5/1)　外面:褐灰色(7.5YR4/1)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	10	
793	錆	擂鉢	I類		(25.6)				内面:灰黄褐色(10YR6/2)　外面:暗灰黄色(2.5Y5/2)	10	
794	錆	擂鉢	I類		(25.6)				内面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　外面釉:灰赤色(2.5YR4/2) 断面:灰黄色(2.5Y7/2)	15	
795	錆	擂鉢	I類		(29.0)				外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	15	
796	錆	擂鉢	I類		(28.3)				内面釉:褐色(7.5YR4/3)　外面釉:黒褐色(10YR3/2) 断面:橙色(7.5YR6/6)	10	
797	錆	擂鉢	I類		(31.6)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	10	
798	錆	擂鉢	I類		(32.0)				外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	10	
799	錆	擂鉢	I類		(28.0)				外面釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/3)	15	
800	錆	擂鉢	I類		28.4				釉:灰赤色(10R4/2)　内面:にぶい橙色(5YR6/4)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	50	
801	錆	擂鉢	I類		(26.8)				釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	25	
802	錆	擂鉢	I類		(26.4)				釉:暗赤褐色(5YR3/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	10	
803	錆	擂鉢	I類		(26.0)				外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	50	
804	錆	擂鉢	I類		(27.0)				釉:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　内面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	25	
805	錆	擂鉢	I類		(26.4)				釉:暗赤灰色(7.5R4/1)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/4) 断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	30	
806	錆	擂鉢	I類		(28.7)				釉:暗褐色(7.5YR2/3)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	10	
807	錆	擂鉢	I類		(28.8)				釉:褐色(7.5YR4/4)　内面:明赤褐色(5YR5/6)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	10	

第6表　陶器一覧表(21)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
808	錆	擂鉢	Ⅰ類		(28.0)				内外面:灰赤色(2.5YR4/2)	20	
809	錆	擂鉢		無	(20.4)	(10.4)	10.7		内面:灰褐色(7.5YR4/2)　外面:褐色(7.5YR4/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	25	
810	錆	擂鉢		無		10.0			釉:暗灰黄色(2.5Y5/2)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	45	
811	焼締	擂鉢		無		10.0			内外面・断面:にぶい橙色(7.5YR7/4)	40	
812	錆	擂鉢		無		11.0			外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　釉:褐灰色(7.5YR5/1)	20	
813	錆	擂鉢		無		(10.0)			釉:黒色(10YR2/1)　外面:灰黄褐色(10YR5/2)～黒褐色(10YR3/1)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	10	
814	錆	擂鉢		無		(9.4)			外面:灰褐色(5YR4/2)～にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰色(5Y5/1)	20	
815	錆	擂鉢		無		(9.6)			釉:灰赤色(2.5YR4/2)　内面:にぶい橙色(5YR6/4)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	20	
816	錆	擂鉢		無		(10.0)			釉:灰赤色(2.5YR5/2)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)～にぶい橙色(2.5YR6/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	25	
817	錆	擂鉢		無		(9.0)			釉:灰黄褐色(10YR4/2)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	20	
818	錆	擂鉢		無		(11.2)			灰赤色(2.5YR4/2)～にぶい橙色(5YR6/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)～淡橙色(5YR8/4)	25	
819	焼締	擂鉢		無		(9.4)			内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面:褐灰色(5YR5/1)	10	
820	錆	擂鉢		無		(9.4)			内外面:灰赤色(2.5YR4/2)～にぶい橙色(5YR6/4)　断面:橙色(5YR6/6)	20	
821	錆	擂鉢		無		(9.2)			内面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面:灰赤色(7.5R6/2)	25	
822	錆	擂鉢		無		(11.8)			釉:灰赤色(10R4/2)　外面:暗赤褐色(7.5R2/3)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	25	
823	錆	擂鉢		無		9.1			釉:暗赤褐色(2.5YR3/3)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	40	
824	焼締	擂鉢		無		9.6			内外面・断面:にぶい橙色(5YR6/4)	30	
825	錆	擂鉢		無		(10.6)			釉:灰赤色(10R4/2)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　断面:橙色(2.5YR6/6)	30	
826	錆	擂鉢							内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	3	
827	錆	擂鉢							内面:灰褐色(7.5YR5/2)　外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい褐色(5YR7/3)	3	
828	錆	擂鉢		無		11.0			釉:灰赤色(10R4/2)　外面:にぶい赤褐色(7.5R4/3)～にぶい橙色(5YR6/3)　断面:にぶい赤橙色(10R6/3)	25	
394	灰	鉢?				鉢(19.0) 匣鉢(18.4)			鉢?　内面釉:灰黄色(2.5Y7/2)　外面釉:淡黄色(2.5Y8/3)～灰オリーブ色(5Y5/3)　断面:褐色(7.5YR4/3)　匣鉢　内面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　外面:にぶい褐色(5YR4/3)～にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	匣鉢25/鉢10	

第7表　匣鉢一覧表

挿図番号	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
829	匣鉢	DIV	糸切り未調整	(9.2)	(7.2)	5.45	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　釉:オリーブ色(5Y6/4)～オリーブ色(5Y3/2)　外面:褐色(7.5YR4/3)～にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	35	
830	匣鉢	DIV	糸切り未調整	(10.0)	(8.6)	5.45	内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい橙色(5YR6/4)～にぶい赤褐色(5YR4/4)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	40	
831	匣鉢	DIII	糸切り未調整	(10.6)	(7.4)	5.95	内面:褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/3)～褐色(7.5YR4/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	45	
832	匣鉢	DIII	糸切り未調整	(11.3)	(8.2)	6.25	内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	50	
833	匣鉢	DIII	糸切り未調整	(11.8)	(9.35)	6.9	内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:暗赤褐色(2.5YR3/3)～灰赤色(2.5YR4/2)　断面:灰赤色(2.5YR4/2)	30	
834	匣鉢	DIV	糸切り未調整	(10.0)	(11.0)	5.0	内面:明褐色(7.5YR5/6)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	30	
835	匣鉢	CIV	糸切り未調整	(12.7)	(10.2)	6.0	内外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面釉:にぶい褐色(7.5YR5/4)～灰白色(2.5Y7/1)	35	
836	匣鉢	CIII	糸切り未調整	(13.1)	(11.2)	6.55	内面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　外面:灰赤色(10R4/2)　断面:褐灰色(7.5YR4/1)	50	
837	匣鉢	DII	糸切り未調整	(12.4)	(10.2)	9.3	内面:褐色(7.5YR4/3)　外面釉:褐色(7.5YR4/4)～にぶい黄褐色(10YR5/3)　断面:にぶい黄褐色(10YR5/3)～褐灰色(10YR6/1)	25	
838	匣鉢	CIV	糸切り未調整	(15.0)	(12.0)	5.75	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/4)　断面:にぶい赤褐色(5YR4/4)	50	
839	匣鉢	CIV	糸切り未調整	(14.2)	(12.2)	5.85	内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　外面釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)～にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/3)～灰白色(2.5Y7/1)	40	
840	匣鉢	CIII	糸切り未調整	(14.0)	(12.4)	6.3	内面:褐色(7.5YR4/3)～にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:黒褐色(7.5YR3/1)～灰褐色(7.5YR4/2)～にぶい赤褐色(5YR4/3)　焼き台釉:黒褐色(5YR2/1)～暗赤褐色(5YR3/2)　にぶい黄橙色(10YR6/3)　断面:灰白色(2.5Y7/1)～淡黄色(2.5Y8/3)	45	
841	匣鉢	CIV	糸切り未調整	(15.8)	(13.0)	5.6	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)～にぶい黄褐色(10YR5/3)～灰オリーブ色(5Y5/3)～浅黄色(5Y7/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/4)～灰褐色(7.5YR5/2)	50	
842	匣鉢	CIII	糸切り未調整	(15.2)	(13.6)	6.9	内面:にぶい橙色(5YR5/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/4)～にぶい橙色(5YR6/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	45	
843	匣鉢	BII	糸切り未調整	(14.0)	(12.7)	9.6	内面:浅黄色(2.5Y7/4)～褐色(7.5YR4/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR5/4)～褐色(7.5YR4/4)～褐色(7.5YR4/6)～にぶい黄色(2.5Y6/4)　断面:淡黄色(2.5Y8/3)	40	
844	匣鉢	CII	糸切り未調整	(14.2)	(13.6)	9.7	内面釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)～にぶい黄橙色(10YR7/4)　外面釉:暗赤褐色(5YR3/3)～にぶい橙色(5YR6/4)　釉:オリーブ色(5Y5/6)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)～灰白色(2.5Y7/1)	50	
845	匣鉢	CII	糸切り未調整	(14.4)	(12.1)	9.55	内面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　外面釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	40	
846	匣鉢	CI	糸切り未調整	(13.8)	(13.4)	10.6	内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　外面:暗褐色(7.5YR3/4)～にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)～灰白色(2.5Y7/1)	35	
847	匣鉢	CIII	糸切り未調整	(14.9)	(14.0)	7.8	内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)～にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰白色(2.5Y8/2)　釉:にぶい赤褐色(5YR4/4)	40	
848	匣鉢	BII	糸切り未調整	(15.5)	(14.0)	8.85	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:褐色(7.5YR4/3)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	40	
849	匣鉢	BIV	糸切り未調整	(15.8)	(11.9)	5.8	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:灰褐色(7.5YR4/2)～灰褐色(7.5YR5/2)　断面:灰色(5Y4/1)	15	
850	匣鉢	CIII	糸切り未調整	(16.3)	(14.5)	6.45	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)～にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい褐色(7.5YR5/3)	50	
851	匣鉢	CII	糸切り未調整	(16.4)	(13.8)	9.5	内面釉:褐色(7.5YR4/4)～暗褐色(7.5YR3/3)～にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面釉:暗赤褐色(5YR3/2)～浅黄橙色(10YR8/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)～灰白色(2.5Y7/1)	40	
852	匣鉢	CI	糸切り未調整	(16.3)	(14.6)	10.65	内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　釉:褐色(7.5YR4/3)　外面釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)～にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(5GY8/1)	30	
853	匣鉢	BII	糸切り未調整	(14.1)	(14.3)	9.75	内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/3)　外面:明青灰色(5B7/1)～明青灰色(5PB7/1)	30	
854	匣鉢	BIII	糸切り未調整	16.8	14.8	7.5	内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)～にぶい褐色(7.5YR5/4)～暗オリーブ色(5Y4/3)　断面:灰白色(2.5Y8/1)	70	
855	匣鉢	BI	糸切り未調整	(14.9)	(16.0)	10.8	内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)～明黄褐色(10YR6/6)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰白色(5Y8/1)～灰白色(5Y8/2)	35	
856	匣鉢	CI	糸切り未調整	(17.8)	(15.1)	11.35	内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　釉:にぶい赤褐色(5YR5/4)～にぶい青橙色(10YR7/4)　外面釉:灰褐色(5YR4/2)～にぶい褐色(7.5YR5/3)～にぶい黄橙色(10YR7/3)　断面:灰白色(10YR8/2)	20	
857	匣鉢	BIII	糸切り未調整	(19.4)	(16.4)	6.15	内面:にぶいにぶい橙色(7.5YR6/4)　釉:暗赤褐色(5YR3/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:浅黄色(2.5YR7/3)	35	
858	匣鉢	BIII	糸切り未調整	(20.0)	(16.4)	7.2	内面:オリーブ黒(5Y3/1)～灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい橙色(2.5YR6/3)　外面:灰褐色(7.5YR4/2)～灰色(5Y4/1)～にぶい赤褐色(5YR4/2)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	30	
859	匣鉢	A	糸切り未調整	(19.3)	(14.5)	7.1	内面:にぶい褐色(7.5YR6/3)～にぶい赤褐色(5YR5/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)～にぶい赤褐色(5YR4/4)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	50	
860	匣鉢	A	糸切り未調整	(19.2)	(17.3)	9.2	内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)～にぶい赤褐色(5YR5/4)～にぶい橙色(7.5YR7/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/4)	40	
861	匣鉢	BIV	糸切り未調整	(18.5)	(17.8)	6.35	内面:灰褐色(7.5YR4/2)～褐色(7.5YR4/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　釉:灰褐色(5YR4/2)　断面:灰褐色(7.5YR5/2)	20	
862	匣鉢	A	糸切り未調整	(21.3)	(8.3)	7.8	内面:灰褐色(7.5YR6/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:浅黄橙色(7.5YR8/3)	45	

第8表　匣鉢蓋一覧表

挿図番号	遺物名	上面～下面径(cm)	厚さ(cm)	高さ(cm)	ゆがみ高(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
863	匣鉢蓋	11.4	5.7	2.6		灰褐色(7.5YR6/2)	70	
864	匣鉢蓋	13.6～13.4	1.35	2.1	3.25	上面：黒色(7.5YR1.7/1)～褐色(7.5YR4/6)　トチン：灰褐色(7.5YR4/2)　中心：にぶい黄橙色(10YR7/4)　断面：褐灰色(10YR6/1)～灰白色(10YR8/2)　下面：黒褐色(10YR2/2)～浅黄色(2.5Y8/4)	100	
865	匣鉢蓋	13.5～12.2	1.35　1.7	4.2	3.5	上面：黒色(2.5Y2/1)～にぶい褐色(7.5YR5/4)　下面：極暗褐色(5YR2/3)～～にぶい赤褐色(5YR5/4)	95	
866	匣鉢蓋	13.0～13.4	1.3	2.4	1.1	上面：黒色(5Y2/1)～オリーブ色(5Y6/3)　下面：赤褐色(10R4/3)～浅黄色(2.5YR7/3)	100	
867	匣鉢蓋	13.2～13.8	0.9　1.4	3.1	2.2	上面：黒色(10YR2/2)～灰黄色(2.5Y7/2)　断面：にぶい黄橙色(10YR7/3)　下面：オリーブ黒色(7.5Y3/2)～にぶい褐色(7.5YR5/3)	100	
868	匣鉢蓋	13.2～13.4	1.4　1.75	2.3	1.2	上面：にぶい赤褐色(5YR4/3)～にぶい黄橙色(10YR6/3)　下面：暗褐色(7.5YR3/4)～にぶい黄橙色(10YR6/3)	100	
869	匣鉢蓋	13.7～14.3	0.95　1.35	3.0	1.7	上面：暗赤灰色(2.5YR3/1)～にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面：にぶい褐色(7.5YR6/3)　下面：オリーブ黒色(7.5Y3/2)～灰白色(2.5Y7/1)	100	
870	匣鉢蓋	13.4～13.7	1.2　1.4	3.1	1.7	上面：灰褐色(5YR4/2)～にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面：灰黄色(2.5Y7/2)～灰白色(2.5Y7/1)　下面：にぶい赤褐色(5YR4/2)～灰白色(2.5Y7/1)	90	
871	匣鉢蓋	14.0～14.4	0.9　2.1	2.8	1.5	上面：にぶい橙色(7.5YR6/4)　下面：暗オリーブ色(7.5Y4/3)～にぶい褐色(10YR6/4)	100	
872	匣鉢蓋	12.6～13.4	1.15	2.35	1.3	上面：黒色(7.5YR2/1)～オリーブ色(10Y3/2)　下面：黒色(2.5Y2/1)～浅黄色(2.5Y7/4)	100	
873	匣鉢蓋		8.8			内面：にぶい黄橙色(10YR6/4)　外面釉：にぶい黄橙色(10YR4/3)　断面：黄灰色(2.5Y6/1)	70	
874	匣鉢蓋	(18.0)	(10.2)	3.8		内面：にぶい褐色(7.5YR5/4)　釉：褐色(7.5YR4/3)　外面釉：にぶい赤褐色(5YR4/4)	25	

第9表　輪ドチ一覧表

挿図番号	遺物名	外径(cm)	内径(cm)	縦径/横径(cm)	高さ(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
875	輪ドチ	3.7	1.7	1.35/1.1	1.35	表面：にぶい赤褐色(5YR5/3)	100	
876	輪ドチ	3.9	2.4	1.0/0.7	1.1	表面：にぶい赤褐色(5YR5/3)	100	
877	輪ドチ	4.5	2.95	1.15/0.7	1.15	表面：にぶい褐色(7.5YR5/3)	100	
878上	輪ドチ	3.9	2.1	0.55/0.8	0.65	表面：にぶい赤褐色(5YR5/4)	90	
878下	輪ドチ	4.5	2.8	1.05/0.95	1.2	表面：にぶい赤褐色(5YR5/4)	100	
879	輪ドチ	4.7	2.9	1.35/0.75	1.4	表面：にぶい赤褐色(5YR5/3)	100	
880	輪ドチ	4.8	3.35	1.15/0.6	1.2	表面：灰黄褐色(10YR6/2)	100	
881	輪ドチ	5.0	2.55	1.15/1.15	1.25	表面：にぶい赤褐色(5YR5/4)	100	
882上	輪ドチ	5.2	3.2	0.5/1.0	0.65	表面：にぶい赤褐色(5YR5/4)	70	
882下	輪ドチ	5.5	3.3	1.25/1.3	1.35	表面：にぶい赤褐色(5YR5/4)	100	
883	輪ドチ	3.1	1.3	0.35/1.0	0.45	表面：にぶい褐色(7.5YR6/3)	100	
884	輪ドチ	3.8～3.7	2.5～2.4	0.55/0.6	0.6	表面：にぶい褐色(7.5YR5/4)	100	
885上	輪ドチ	4.2	2.25	0.75/1.0	0.8	表面：にぶい橙色(7.5YR6/4)	100	
885下	輪ドチ	3.8	1.75	0.65/1.15	0.65	表面：にぶい橙色(7.5YR6/4)	100	
886	輪ドチ	4.05	1.95	0.95/1.0	1.0	表面：にぶい赤褐色(5YR5/4)	100	
887	輪ドチ	4.7	3.0	0.65/0.7	0.8	表面：にぶい赤褐色(5YR5/4)	100	
888	輪ドチ	4.3	2.6	0.8/0.85	1.0	表面：にぶい黄橙色(10YR6/3)	100	
889上	輪ドチ	4.6	2.2	0.55/1.05	0.65	表面：にぶい褐色(7.5YR6/3)	50	
889下	輪ドチ	4.55	2.75	0.95/0.9	1.05	表面：にぶい褐色(7.5YR6/3)	100	

第10表　粘土紐・焼台・支柱・分炎柱一覧表

挿図番号	遺物名	直径(cm)	長さ(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
890	粘土紐	—	9.65	3.8	0.3～1.9	表面：にぶい褐色(7.5YR5/3)	不明	
891	粘土紐	—	8.65	3.15	0.6～1.9	表面：にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	不明	
892	粘土紐	—	8.45	6.35	1.0～1.9	表面：にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面：灰白色(2.5Y7/1)	不明	
893	粘土紐	—	12.1	4.7	0.3～1.5	表面：にぶい橙色(5YR6/3)	不明	
895	焼台	9.55	—	2.5～4.7	—	表面：にぶい赤橙色(10R6/4)～淡赤橙色(2.5YR7/4)～橙色(2.5YR7/6)	不明	匣鉢付着 下面斜度24°
896	支柱	(15.0)	—	16.4～	—	表面：にぶい黄褐色(10YR5/3)～暗褐色(10YR3/3)　断面中心：褐灰色(10YR4/1)～にぶい褐色(7.5YR5/4)	不明	
897	小分焔柱	(9.0)	—	11.6～	—	内面：黒色(5Y2/2)～にぶい黄色(2.5Y6/4)　外面：黒色(N1.5/0)～灰白色(5Y7/1)　断面下部：にぶい黄橙色(10YR7/3)～にぶい黄褐色(10YR5/3)	不明	

第11表　その他の遺物一覧表

挿図番号	種別	器形	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	最大径等(cm)	色調	残存率(%)
898	須恵器	長頸瓶	不明				(13.5)	褐灰色(10YR6/1)	10
899	須恵器	長頸瓶	無		(8.4)			内面:灰白色(5Y7/1)～灰黄色(2.5Y7/2)　外面:灰色(5Y6/1)～灰オリーブ色(5Y6/2)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	15
900	灰釉陶器	椀	貼り付け		(8.8)			灰黄色(2.5Y7/2)　断面:浅黄橙色(7.5YR8/3)	10
901	灰釉系陶器	小椀	貼り付け		(4.0)			灰白色(2.5Y7/1)	15
902	灰釉系陶器	小皿	無	6.5	4.2	1.65		自然釉:灰黄色(2.5Y7/2)　内外面:黄灰色(2.5Y6/1)	50
903	灰釉系陶器	山茶椀	貼り付け		(6.8)			自然釉:灰黄色(2.5Y7/2)　内外面:灰色(5Y6/1)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)	25
904	灰釉系陶器	山茶椀		(15.6)				灰色(7.5Y5/1)	15
905	灰釉系陶器	山茶椀	無		(5.4)			橙色(5YR6/6)	20
906	灰釉系陶器	山茶椀	貼り付け		7.8			内面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	60
907	灰釉系陶器	山茶椀	貼り付け	14.9	5.9	4.5		内外面:灰黄色(2.5Y6/2)　断面:灰褐色(7.5YR6/2)	80
908		かわらけ	無	(7.9)	3.8	1.55		にぶい橙色(5YR6/4)　断面:橙色(5YR7/6)	25
909		かわらけ	無	(8.5)	4.4	1.8		橙色(7.5YR7/6)	40
910		かわらけ	無	(7.9)	3.1	1.85		にぶい黄橙色(10YR7/4)～橙色(5YR6/6)	30
911		かわらけ	無	(7.9)	4.5	1.9		橙色(7.5YR7/6)～橙色(7.5YR6/6)	55
912		かわらけ	無	(10.6)	5.2	3.4		にぶい橙色(5YR6/4)	60
913		かわらけ	無	(11.9)	5.4	3.4		明黄褐色(10YR7/6)	50

第４節　神座古窯の遺物

ここでは上志戸呂古窯に深い関わりが指摘される神座古窯の採集遺物(914～1000)をみながら、相互の差異を考えたい。

神座古窯は、大井川東岸にある小さな谷の奥側に存在する。戦国期～近世の窯がA地点で３基所在するとみられるが、みかん園の改植や地すべりによってほぼ消滅したとされる(澁谷1998)。現在、小さな谷の奥側の竹やぶとなっている南向き緩斜面の一部が谷側に崩落し、その周辺に陶片が散乱している。一部では歩くと破片のきしむ音がするほどの散布をみるが、その多くは匣鉢である。

一方で、平成11年、谷の入り口部分で急傾斜事業に伴って立会い調査が島田市教委により行われており、この際にも近世段階の志戸呂焼に混じって大窯期の遺物が出土している。

これまでに確認されている器種は、天目(天目茶碗、小天目)、碗類(筒形碗)、皿類(丸皿、襞皿)、盤類(向付、鉢、大皿)、神仏具(香炉)、壺甕類(小壺、壺類、甕、耳付水注、徳利)、擂鉢、その他(水滴)である。大窯期の遺物は、上志戸呂古窯と同様に右回りのロクロ上で整形されている。整形方法や釉の雰囲気は上志戸呂古窯の製品とほぼ同様なので、異例の場合以外の記述は省くこととする。胎土は緻密である。上志戸呂古窯の製品に比べると胎土中に黒色粒子を多く含み、黒色味がやや強くなる場合があるが、それ以外の破片では、相互の判別は困難である。

１　神座A古窯出土の遺物(914～956)

ここに掲載した遺物は、前述の立会い調査の際に採集された遺物であり、島田市博物館が保管している。神座古窯の製品と近世の志戸呂焼(914・926・935～939・941・948)があるが、使用痕の観察できる例(941・942)からも、近世志戸呂焼は近在する集落からの廃棄品が混入している可能性がある。

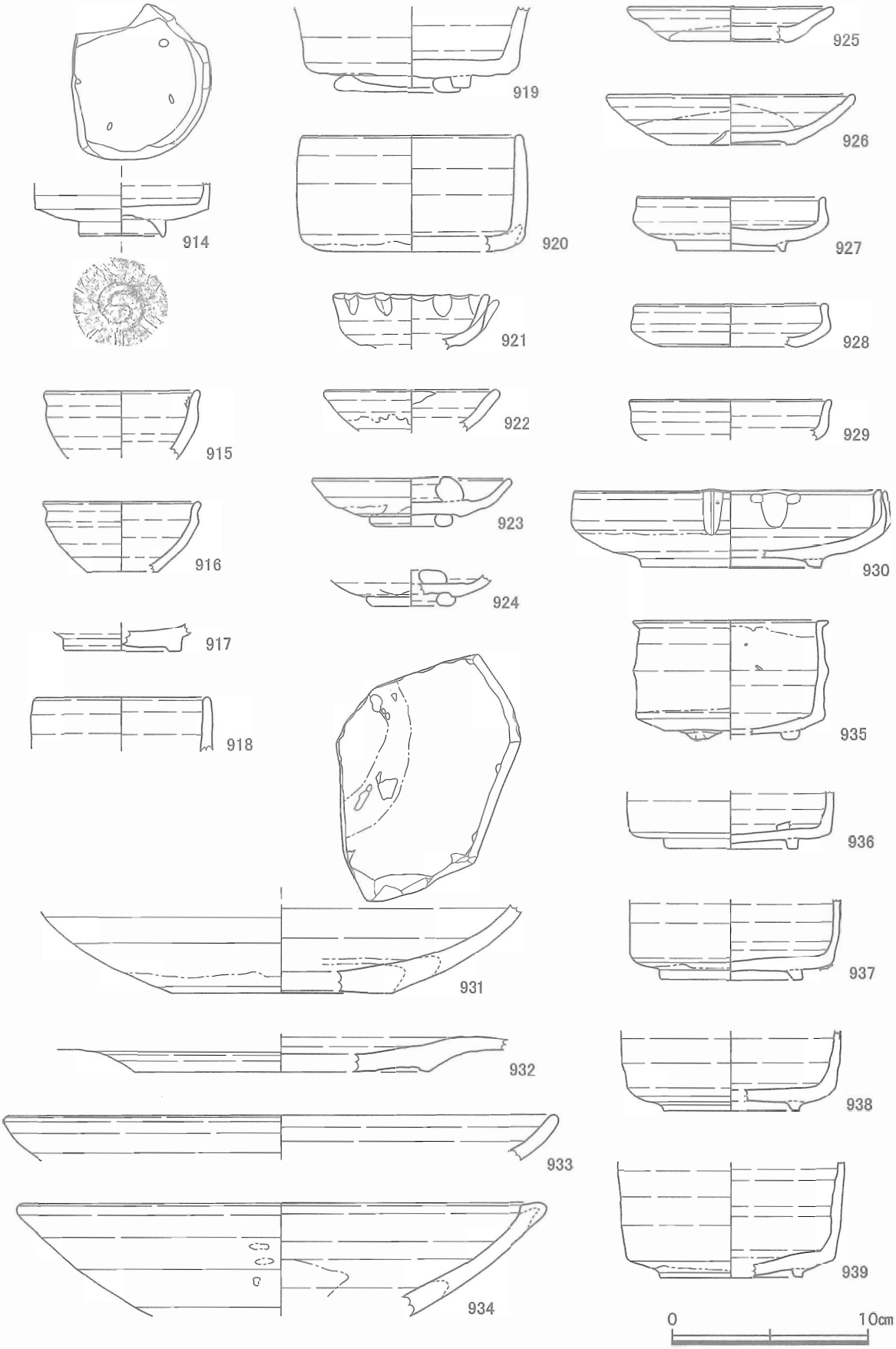
箱形茶碗(914)　平らな内面底部を広く取る筒形の碗である。腰部と体部の境は、ほぼ直角に調整されるので、恐らく回転ヘラケズリで整えているのだろう。高台は付け高台で、内面を高台端部から中心へロクロの回転を利用して絞り込むように強くナデるので、調整痕が巴状に残される。また、見込み部分には長さ４㎜、幅３㎜前後の目跡が、元来５箇所であったものの４箇所で残される。釉は高台を除く全面に鉄釉を掛けるが、体部はまばらな複数の筋状となる。19世紀代のものと思われる。

小天目(915・916)　915は鉄釉の小天目である。厚手であるが口縁部のくびれはなだらかで、一見天目茶碗のような印象を受ける。この厚みは、上志戸呂古窯出土の31(以下、「上志戸呂○」と表記する。)に類似する。口唇部内側には溶着痕があるが、何のものかは判然としない。916は薄い錆釉を掛けるもので、体部過半まで回転ヘラケズリを施して薄手に仕上げる。口縁部下端のくびれは鋭く稜をもつ。この雰囲気は上志戸呂35・36と類似する。

筒形碗(917～920)　いずれも鉄釉の筒形碗である。917・919は付け高台のⅠ類で、920についても高台際の位置にナデ痕があるので同様であろう。918は口縁部片なので判断できない。919・920の見込みは広く平坦に整えられる。このような雰囲気は、上志戸呂57・58に類似する。919の高台には粗雑な輪ドチが付着する。この輪ドチは高台径よりも大きく、相互は交差する。輪ドチの接地面はやや外側へ傾いており、丸皿の体部の角度を写していない。971のように単独で匣鉢詰されていたのだろう。

襞皿(921)　灰釉の丸皿Ⅱ類bの口縁を加工したものである。襞は、三本の指でつまんで付けられている。釉は鮮やかなオリーブ色に発色するが、見込みは無釉となる。

丸皿(922～926)　923～925はいずれもⅡ類aである。922は口縁部片なので判然としない。釉は922・923が鉄釉、924が灰釉を用いる。見込み部分の釉は拭き方１で処理されている。それぞれに輪ドチを置くが、923は断面形が長楕円、924では低く潰れている。926は大ぶりな丸皿であり、整形方法はⅡ類b



第69図　神座窯の遺物 1

と同様である。釉は鉄釉を用いる。釉の末端はきれいに処理され、上志戸呂・神座古窯焼成品のような垂れる部分は認められない。断面は灰色を帯び硬質に焼きあがることからも、連房式登窯で焼成された17世紀前半のものと考えられる。

向付(927～930)　927～929は小型の向付Ⅰ類である。腰部の屈曲がやわらかで稜をもたない。底部からの回転ヘラケズリも腰部末端まで及んでいないようである。高台は断面形状が矩形となる低い付け高台である。口縁部は内側にくびれる。釉は主に鉄釉を用い、黒色に発色する部分と褐色に発色する部分がまだらになる。927・929は釉の濃淡によるものだろうが、928は柿釉上に黒色の鉄釉を流していると思われる。927は内面の全面と腰部半ばまで施釉する。928・929は口縁を中心とした破片だが、釉は内面全体に掛かっているようである。930は大型の向付である。底部には腰部まで達する回転ヘラケズリ後に矩形の幅広な付け高台を備える。口縁部には指でつまみあげられることによる襞が付く。釉は灰釉で、内面全体と腰部上端まで施される。

筒形香炉(935)　筒形香炉には三足を付けるⅠ類がある。薄手に挽き出され、硬質に焼きあがる。口唇部は外側には丹精に挽き出され、内側は直角に仕上げられる。釉は体部下端から口唇部内側にかけて鉄釉を薄くかける。18世紀代のものだろうか。

蓋物(936～939)　蓋物は高台際までの外面に鉄釉を掛け、内面は露胎とする筒型の容器である。いずれも薄手に仕上げられる。腰部は936・937のように体部にかけて直角に折れるものと、回転ヘラケズリによる面取りを施して丸みを帯びさせるもの(938)、鈍角に立ち上がるもの(939)などがある。高台は底部を回転ヘラケズリした後に貼り付けられ、断面形状は矩形を呈する。936・938・939の３点は、見込み中央に3.5～４㎝程度の高台の痕跡が残される。小型品を入れ子にして焼成していたことを示す。また、937の見込み外縁には器と中心を同じにする直径８㎝、幅３～５㎜の粘土が接した痕跡がある。底部を回転ヘラケズリする際にあてがわれたシッタの痕と考えられる。

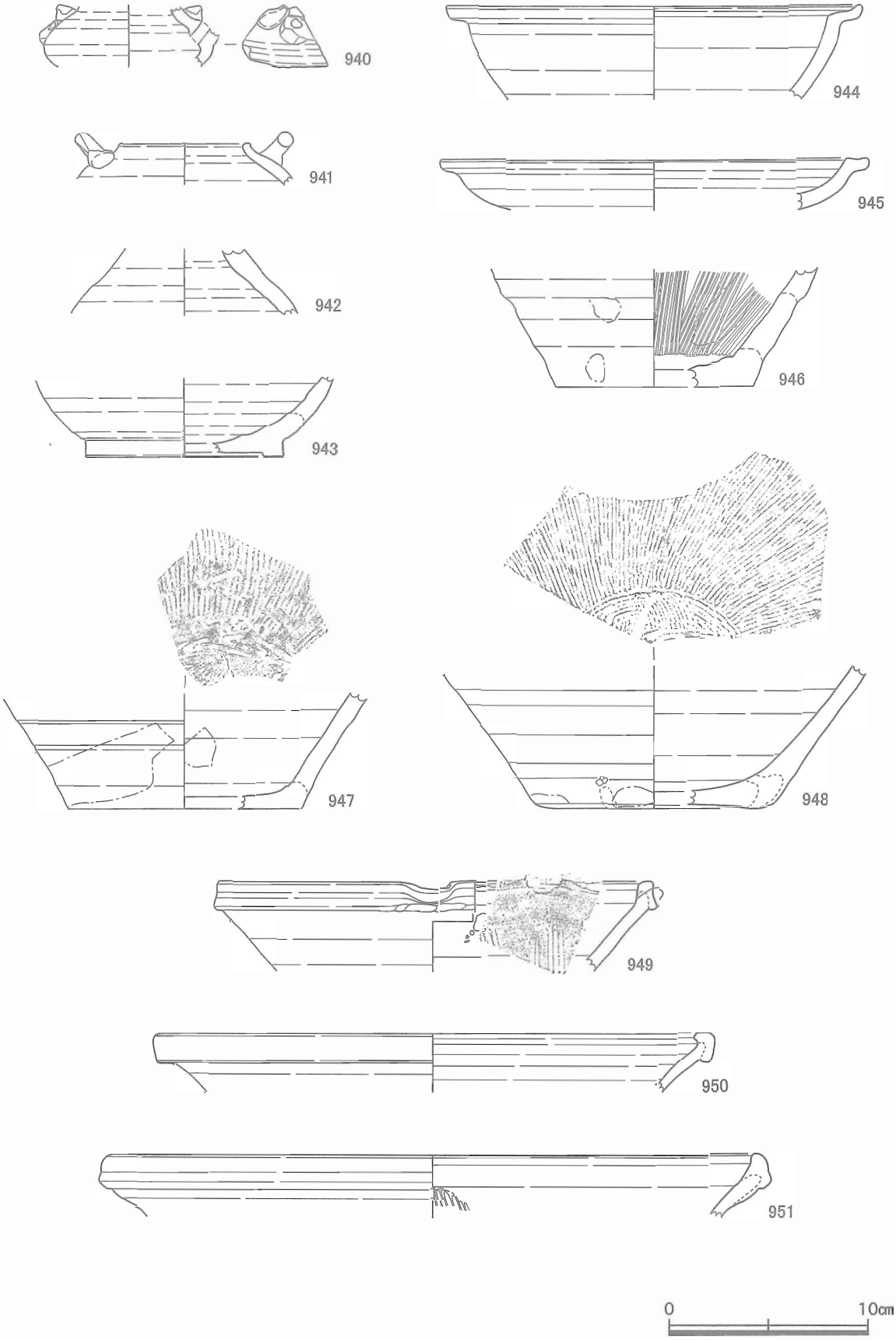
大皿(931～934・945)　大皿は、平底のⅠ類(931)と削り込み高台のⅢ類(932)がある。口縁部の造りは内湾する直縁のもの(933)と、折り返して肥厚させ口唇端部を平らにするもの(934)がある。釉は錆釉が主体となる。931は、外面では腰部以上に施釉し、内面は全面に施釉するものの見込み外縁を幅１～1.5㎝の環状に拭き取る輪禿となる。輪禿部分にはわずかながら溶着痕があるので、同規格のものを重ね焼きしていたものと思われる。932・934は錆釉を掛ける。932は釉が比較的厚く光沢をもつ部分があるので、錆地に鉄釉を流しているのかもしれない。933は無釉の焼締である。945は折縁となる口縁部をもつ。灰釉を用い、硬質に焼き上がるので連房式登窯で焼成された17世紀前半のものだろう。

耳付水注(940・941)　940は上志戸呂古窯製品に形態・釉調ともに近似する。941の口唇端部は擦れて滑らかになっているので、ある程度使用されていたものとみられる。釉は褐色に発色する鉄釉を用いる。外面のみ施され、口唇部から内面にかけては露胎となる。940や上志戸呂古窯の製品に比べ耳が著しく大きい。17～18世紀台の志戸呂焼きである。

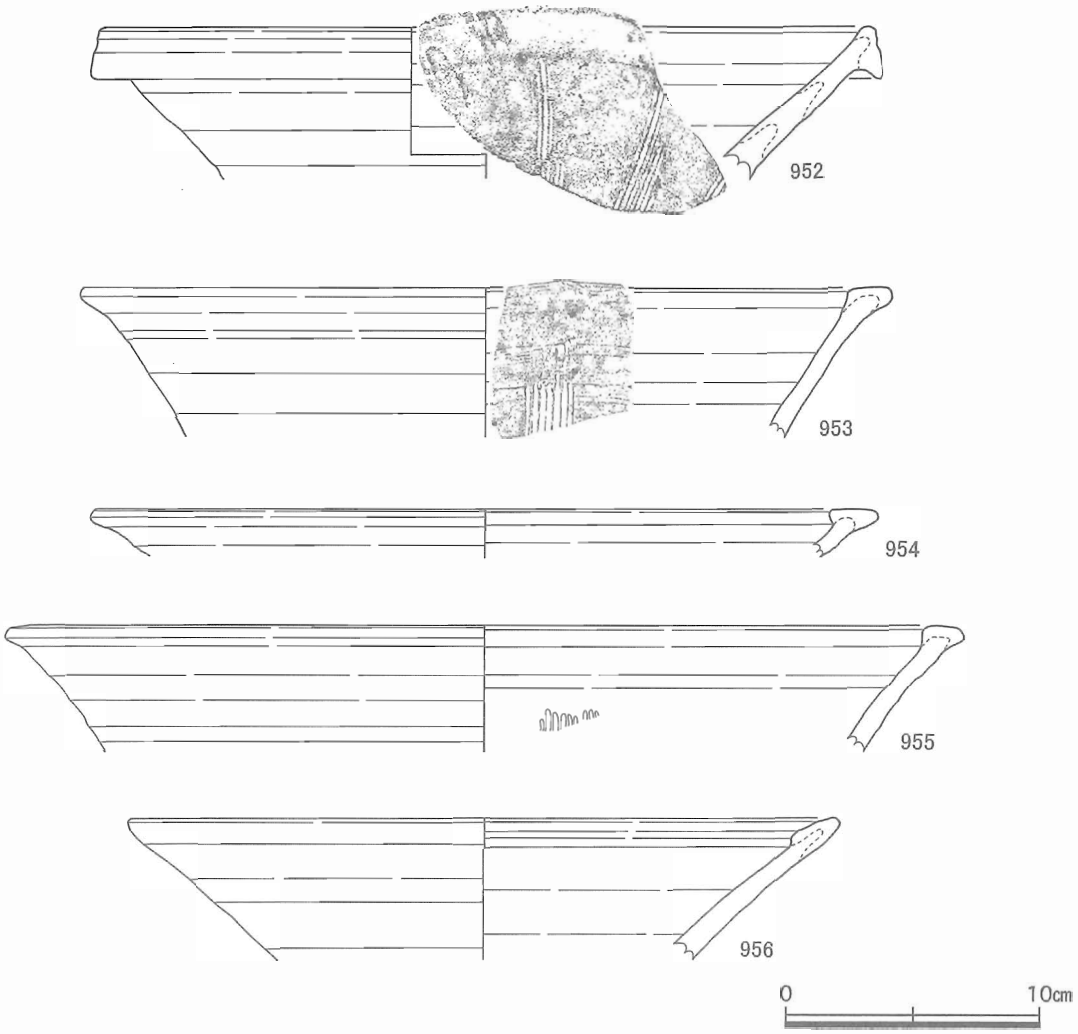
徳利(942)　Ⅰ類の徳利である。体部上端の破片で、内面にはコテをあてがいナデた痕跡が螺旋状に残る。鉄釉を用い、施釉は外面のみで内面は露胎となる。

壺甕類(943)　小型の壺あるいは甕の底部片である。低い矩形の高台は削り出しによるもので、底部から体部にいたる回転ヘラ削りの過程で整形されている。釉は錆釉を掛けた後に灰釉を流しているようである。施釉範囲は高台以上の外面であり、高台内と内面は露胎となる。高台端部には乾燥台の圧痕がわずかに残り、角の一部が使用によって滑らかに擦れている。18世紀代のものであろう。

鉢(944)　折縁となる口縁部をもつものである。口唇部外面に平らな面を持ち、口唇部端部は上方向に小さく引き出している。遺存する部分には全面に灰釉を掛けているが、温度不足か発色していない。



第70図　神座窯の遺物 2



第71図　神座窯の遺物 3

擂鉢(947～956)　擂鉢には、Ⅰ類(949～952)と、Ⅱ類(953～956)がある。

Ⅰ類には小型のもの(949)が含まれる。縁帯は、縁帯A(951)、端部に平坦面をもつ縁帯Bb(949・950)、上方の張り出しはなく下方に垂下する縁帯C(952)など、個体差がある。950・951は体部の多くが失われているので判然としないが、952はより後出する要素である体部上半までの回転ヘラケズリを施す。950は焼締、他は錆釉を掛ける。

Ⅱ類は、突起A(956)、突起C(953・954)、突起D(955)、がある。なお、956は小型で突起の水平面が著しく内傾しているようにみえるが、これは焼け歪みの影響であり、元来は953あたりと同等な口径であったと考える。954は口縁部片で判然としないが、他は体部上端まで回転ヘラケズリを施す。953が焼締、他は錆釉を用いる。

946～948は体部～底部片である。946は糸切り未調整で体部にもケズリを施さないので、Ⅰ類の破片と考えられる。947は底部から体部にかけての外面に回転ヘラケズリを施すので、Ⅱ類かⅠ類でも後出するものだろう。948は密な擂り目を付け、外面も全般的に回転ヘラケズリを施した上、底部と体部の境を面取りする。18世紀後半代のものである。948は底部の一部が煤け、体部過半から底部にかけては部分的に滑らかな上、体部外面に残された粘土トチン痕を砥石等で平滑に調整しているので、使用されていたものと理解される。いずれも薄く錆釉を掛けるが、945・946内面の粘土トチンを置く部分には施釉しない。

2　表面採集された遺物

表面採集された遺物はこれまでも紹介されているが、ここで掲載する遺物は新たに谷奥の崩壊した物原から採集したものである。遺物の中には明らかに連房期にあたるものは目立たない。また、大皿・甕・擂鉢など大型品の胎土には、小型品に比べて白色の砂粒を多く含むように見受けられる。

天目茶碗(957)　鉄釉と思われる天目茶碗である。温度不足で褐色味を帯び、釉が十分発色しない。高台は輪高台であり、体部にいたる一連の回転ヘラケズリの過程で削り出されている。上志戸呂古窯の製品より薄手である。

筒形碗(970・971)　鉄釉の筒形碗である。いずれも付け高台で、底面から体部にいたる回転ヘラケズリの後に貼り付けられる。970の場合は、高台内面の端部を幅3㎜程度のヘラ状工具でナデて、接合痕を平滑に調整している。971は、匣鉢内に単独で込められて焼成されている。輪ドチは扁平に潰れており、高台と交差するように挟みこまれる。970・971ともに輪ドチの底面が匣鉢の中心方向に傾いており、元々底部が凹んでいた匣鉢に入れられていたことがわかる。

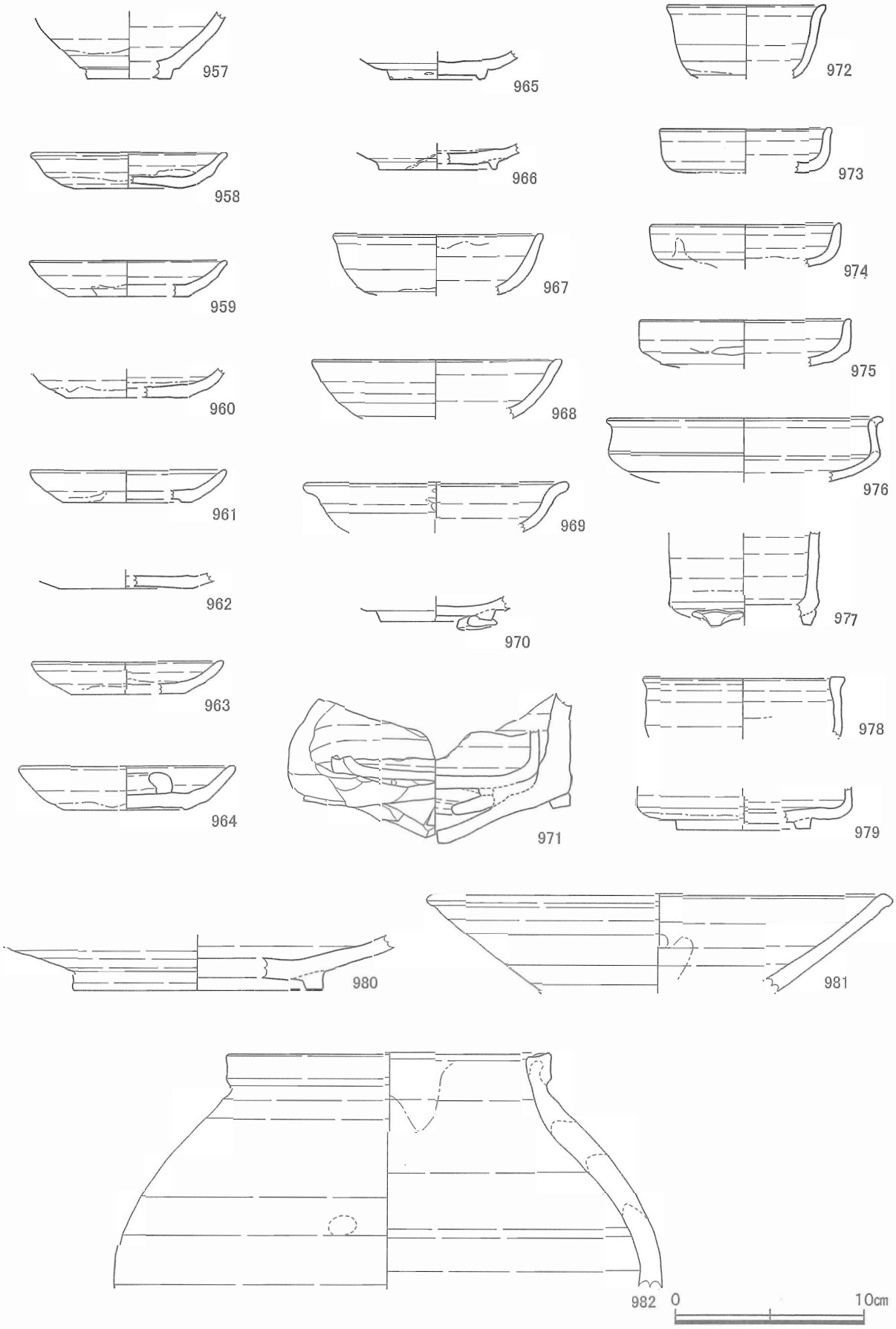
丸皿(958～966)　丸皿には高台のⅠ類、削り込み高台のⅡ類、平底のⅢ類がある。Ⅰ類(965・966)は、付け高台による966と削り出し高台による965がある。966は見込みに段をもつaで、上志戸呂古窯の製品と近似する。966は鉄釉、965は灰釉を用い、いずれの見込みの釉を拭っている。965は見込み中心が直径2㎝程度の円形に凹んでおり、この内部には釉が残される。966の見込みには同種による重ね焼き痕が残る。Ⅱ類(961・964)は見込みの段をもつaで、雰囲気は上志戸呂古窯の製品と同様である。964は灰釉を用い、拭き方1で見込みの釉を拭っている。961は鉄釉である。Ⅲ類は発色が悪い962以外には灰釉が用いられ、958・960・963などは上志戸呂古窯にみられるようなオリーブ色に発色する。底部は回転ヘラケズリによる平底で、高台の意識が全くないので、外形は近似するもののⅠ類・Ⅱ類とは別の概念で作られていると思われる。いずれも見込みに段をもっており、段のないものの存在は把握していない。焼成は、958の内外面に輪ドチの痕跡があるので、輪ドチを挟みこんで複数枚を重ね焼きしているとみられるが、最下位の底面には輪ドチを挟まない場合も観察される。

中皿(967～969)　967・968は口縁を丸く挽き上げるⅠ類、969は端反とするⅡ類である。967は鉄釉を掛けるが、口縁部を拭って口禿とする。968は錆釉を、969は光沢のある錆釉を用いる。969の口縁部内側には口縁部と平行する溶着痕がある。重ね焼きした同規格の中皿がずれて付いたものと考えられる。

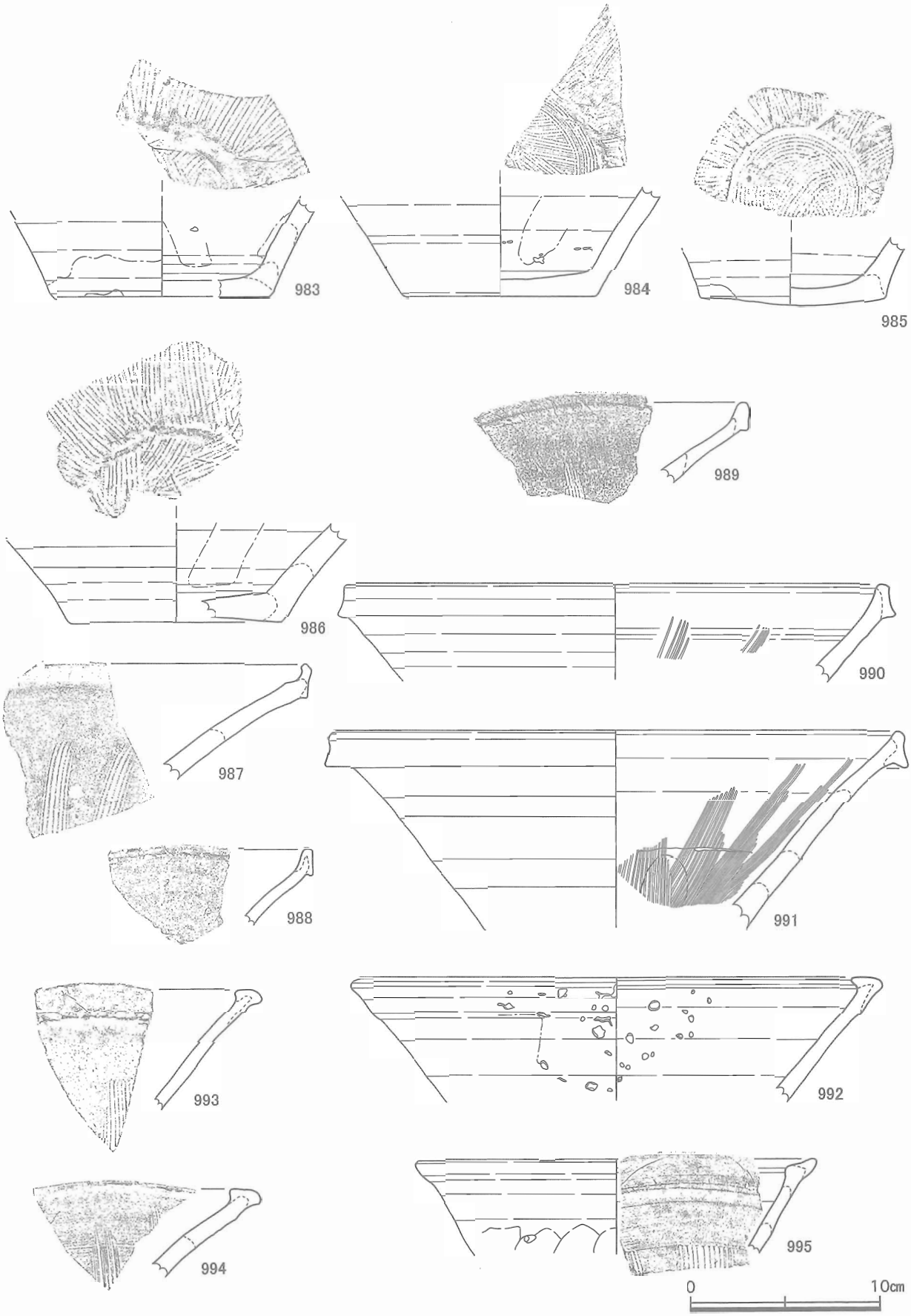
向付(972～976)　口縁部を直立させる皿状のⅠ類(973～976)と碗状のⅡ類(972)がある。Ⅰ類は上志戸呂473と同様のつくりである。973・975は鉄釉、974は灰釉、976は錆釉を掛けるが、口禿にするものは見当たらない。974は底部に無釉の部分があるので、釉を拭った内禿になろう。外面の回転ヘラケズリは腰部まで施されるが、体部との境の稜はなく丸く仕上げられる。976は口唇部を急激に外側へ挽き出している。Ⅱ類となる972は薄い錆釉を掛けているようであるが、発色しない。上志戸呂475と雰囲気は似るが、こちらのほうが小ぶりである。

筒形香炉(977～979)　977は三足の付く筒形香炉で、腰部以上に光沢のある錆釉を掛ける。内面は露胎である。978は口縁部片で、鉄釉を掛けるが平らに造られた口唇部は釉が拭われて口禿となる。口唇部の中央付近には、外縁に平行する細い溶着痕が認められる。979は筒形碗の底部に作りがよく似ている。体部は薄くやや内傾するように見受けられるので、向付のひとつなのかもしれない。外面は腰部以上に鉄釉を、内面には錆釉を掛ける。

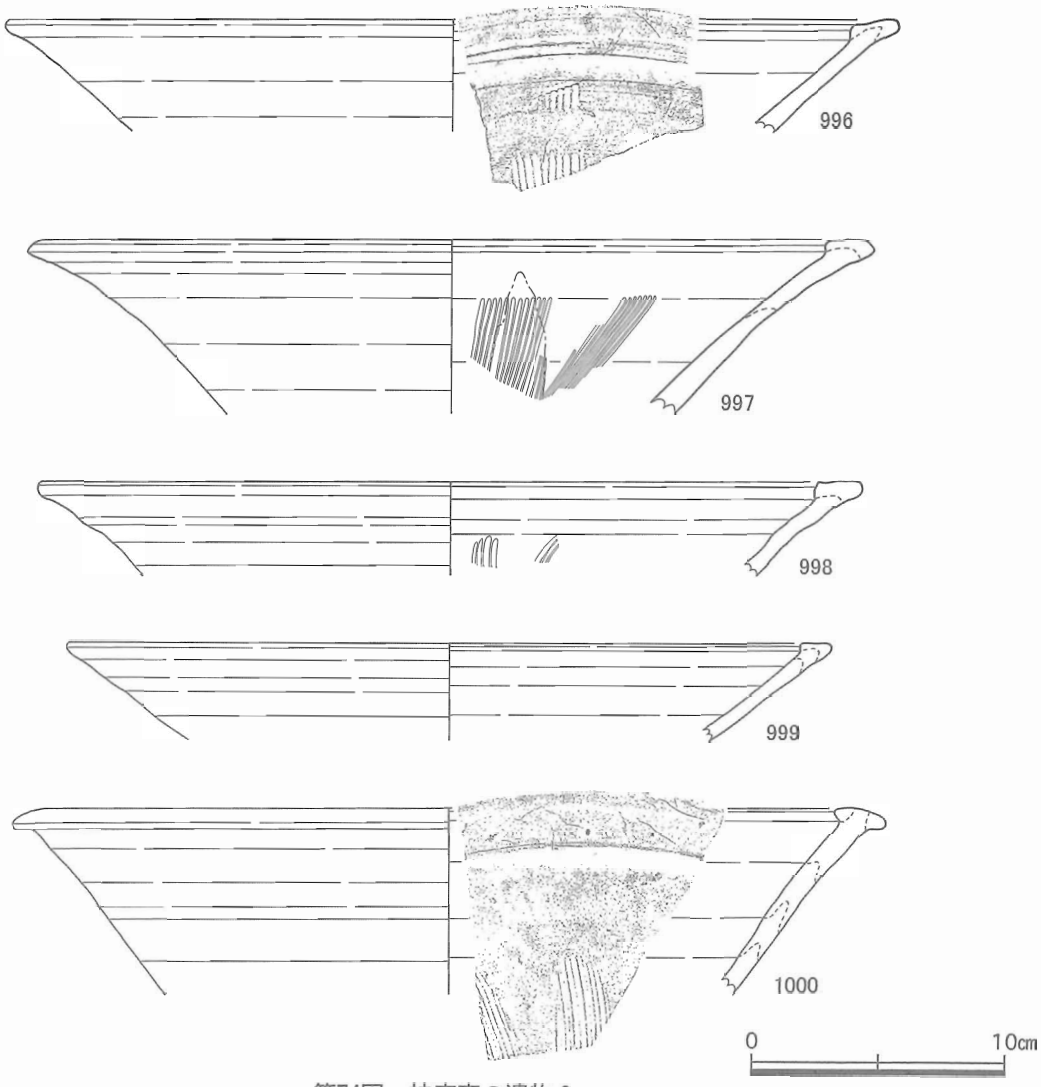
大皿(980・981)　980は付け高台を伴うⅡ類である。底部から体部にかけて回転ヘラケズリで調整した後、断面形状が四角形となる高台を貼り付ける。高台の端部は幅4㎜程度のコテをあてがって整えられる。981は直線状に立ち上がる体部～口縁部片である。体部上半まで回転ヘラケズリで整えられる。いずれも錆釉が掛けられ、980は総がけされる。



第72図　神座窯の遺物４



第73図　神座窯の遺物 5



第74図　神座窯の遺物６

鉢(992)　折り返して内面に突起を作る大型の鉢である。内外面に厚く鉄釉を掛けるが、空気が入ったのだろうか、小豆大の釉の乗らない部分が内外面に20箇所程度ある。口唇部はやや丸みを持ち、釉が拭われた口禿となる。このような鉢は神座古窯でもこの１点であるので、特注品であった可能性が高い。

甕(982)　982はやや口のすぼまる甕で、輪積みの後回転ヘラケズリで整形される。体部上位は正位のまま口縁部直下まで削られている。口縁部は外側へ張り出す矩形の縁帯を伴い、上志戸呂692に似る。釉は錆釉が用いられ、内外面ともに薄く掛けられる。

擂鉢(983～991・993～1000)　擂鉢は口縁外面に縁帯をもつⅠ類(987～991)と、折り返して内面に突起を作るⅡ類(993～1000)がある。Ⅰ類は、縁帯A(987)、縁帯B(988～990)、縁帯C(991)がある。987・991については、体部に回転ヘラケズリを加える。Ⅱ類は突起A(995・996)、突起C(994・997～999)、突起D(993)、内側の突起が大きく、体部とは鈍角に外側へ挽き出された断面形状が「T」字状を呈するもの(突起E：1000)がある。997以外は、体部に回転ヘラケズリを施す。

983～986は体部～底部片である。983・986は擂り目A、984・985は擂り目Bであるが、いずれも外面を回転ヘラケズリで整えている。

註　今回紹介した遺物の実見に際しては、島田市博物館のご厚意を得た。また、現地の確認・表面採集は篠ヶ谷路人（島田市博物館）のご案内による。

第12表　神座窯の遺物一覧表(1)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	体部径(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
914	鉄	箱形茶碗		貼り付け		(4.2)			釉:暗褐色(7.5YR3/3)～黒褐色(7.5YR2/2)～褐色(7.5YR4/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)　高台:にぶい黄橙色(10YR7/4)	40	
915	鉄	小天目			(7.8)				表面:灰オリーブ色(7.5Y4/2)　口縁:灰赤色(2.5YR4/2)	10	
916	錆	小天目		削り出し	(7.9)				外面:灰赤色(2.5YR6/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	20	
917	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		(6.0)			内面釉:黒色(5Y2/1)　外面:褐色(7.5YR4/3)　断面:灰白色(5Y7/1)	10	
918	鉄	筒形碗	I類		(8.8)				外面:黒色(7.5YR1.7/1)～にぶい赤褐色(5YR4/4)	5	
919	鉄	筒形碗	I類	貼り付け		(6.0)			釉:黒色(N2/0)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	40	
920	鉄	筒形碗	I類	貼り付け	(11.2)			(11.9)	釉:黒褐色(10YR3/2)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	20	
921	灰	皿			(8.1)				釉:灰オリーブ色(5Y5/2)～灰オリーブ色(5Y4/2)～にぶい黄橙色(10YR6/4)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	15	
922	鉄	丸皿			(8.6)				釉:灰褐色(7.5YR4/2)　外面:にぶい橙色(5YR6/3)　断面:にぶい黄橙色(10YR7/2)	15	
923	鉄	丸皿	II類a	削り込み	(10.1)	(5.0)	2.45		内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　釉:暗褐色(7.5YR3/4)～黒色(7.5YR2/1)　外面:にぶい橙色(7.5YR6/4)　釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)～黒色(10YR1.7/1)　断面:灰白色(10YR7/1)～にぶい黄橙色(10YR7/2)	50	
924	灰	丸皿	II類a	削り込み		(5.0)			内面釉:にぶい褐色(7.5YR5/4)～黄褐色(2.5Y5/4)　外面釉:にぶい黄橙色(10YR6/4)～灰オリーブ色(7.5Y5/3)　断面:灰色(7.5Y5/1)	10	
925	鉄?	丸皿	II類a	削り込み	(10.3)	(6.2)			釉:灰白色(5Y8/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:灰赤色(2.5YR4/2)	15	
926	鉄	丸皿		削り込み	(12.6)	(6.7)	2.5		釉:灰オリーブ色(5Y6/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	30	近世
927	鉄	向付	I類	貼り付け	(9.4)	5.6	2.75		釉:黒色(7.5YR2/1)　外面底部:にぶい黄橙色(10YR6/4)	60	
928	鉄	向付	I類		(9.6)				外面:にぶい赤褐色(2.5YR4/4)～黒色(7.5Y2/1)	10	
929	鉄	向付	I類		(10.25)				内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)～黒色(10YR1.7/1)　外面:暗赤褐色(5YR3/3)～黒色(10YR1.7/1)　断面:灰色(N6/0)	5	
930	灰	向付	I類	貼り付け	(15.9)	(9.3)			釉:浅黄色(2.5YR7/4)　外面:にぶい橙色(5YR6/3)		
931	錆	大皿	I類	無		(11.2)			釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰白色(N7/0)～にぶい橙色(5YR6/3)	10	
932	錆	大皿	III類	削り込み		(15.2)			内面:暗赤灰色(7.5R3/1)～灰赤色(2.5YR4/2)　外面:褐色(7.5YR4/3)　釉:暗赤灰色(2.5YR3/1)～灰褐色(5YR4/2)　断面:灰色(10Y5/1)	5	
933	錆	大皿			(28.0)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)～にぶい橙色(5YR7/4)	3	
934	鐵	大皿			(26.6)				外面:灰赤色(2.5YR5/2)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	10	
935	鉄	筒形香炉	I類	三足	(9.9)	(6.8)			内面:灰褐色(5YR5/2)　断面:灰褐色(5YR5/2)　釉:暗赤褐色(5YR3/2)	25	
936	鉄	蓋物		貼り付け		(6.7)			内面:灰黄褐色(10YR5/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　釉:黒褐色(10YR2/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	10	近世
937	鉄	蓋物		貼り付け		7.2			釉:黒色(10YR2/1)　内面:灰黄褐色(10YR6/2)　断面:灰黄褐色(10YR6/2)	60	近世
938	鉄	蓋物		貼り付け		(7.0)			釉:暗赤褐色(2.5YR3/2)　内面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面底部:浅黄色(2.5Y7/3)	30	近世
939	鉄	蓋物		貼り付け		(7.3)			釉:黒褐色(5YR2/2)　内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)～暗灰黄色(2.5Y5/2)　断面:黄灰色(2.5Y5/1)	30	近世
940	鉄	耳付水注						(8.6)	釉:オリーブ色(5Y2/2)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	15	
941	鉄	耳付水注			(6.3)				釉:黒色(7.5YR1.7/1)～黒褐色(7.5YR3/2)～暗褐色(7.5YR3/4)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:灰色(5Y6/1)	15	近世
942	鉄	徳利	I類					(9.6)	釉:黒色(7.5YR2/1)　内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	5	
943	錆・灰	甕		削り出し		(9.9)			内面:にぶい褐色(7.5YR5/4)　外面:にぶい黄褐色(10YR4/3)～灰黄褐色(10YR4/2)～黒褐色(10YR3/2)　断面:にぶい黄橙色(10YR6/3)	10	
944	灰	鉢		不明	(20.9)				内外面:にぶい黄色(2.5Y6/4)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	10	

第12表　神座窯の遺物一覧表（2）

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	体部径(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
945	灰	大皿			(19.4)				釉:オリーブ黄色(5Y6/3)　外面:暗灰黄色(2.5Y5/2)～暗灰黄色(2.5Y4/2)　断面:灰色(7.5Y5/1)	5	近世
946	錆	擂鉢		無		(10.0)			釉:灰褐色(7.5YR4/2)　内面:灰黄褐色(10YR5/2)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:褐灰色(5YR4/1)	10	
947	錆	擂鉢		無		(11.9)			内外面釉:赤灰色(2.5YR4/1)　内面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	10	
948	錆	擂鉢		無		(10.6)			内面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	20	
949	錆	擂鉢	Ⅰ類		(21.9)				内外面:暗赤灰色(10R4/1)～にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	5	
950	錆	擂鉢	Ⅰ類		(27.8)				外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	5	
951	錆	擂鉢	Ⅰ類		(32.5)				釉:灰赤色(2.5YR4/2)～赤灰色(2.5YR4/1)　内面:橙色(2.5YR6/6)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　断面:橙色(2.5YR6/6)～にぶい赤褐色(5YR5/4)	5	
952	錆	擂鉢	Ⅰ類		(30.2)				内外面:灰赤色(7.5YR4/2)　断面:にぶい褐色(7.5YR6/3)	10	
953	焼締	擂鉢	Ⅱ類		(31.6)				外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)～にぶい黄橙色(10YR7/3)　断面:橙色(2.5YR6/6)	5	
954	錆	擂鉢	Ⅱ類		(29.2)				内面:暗赤褐色(10R3/2)　外面:暗赤褐色(2.5YR3/2)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	2	
955	錆	擂鉢	Ⅱ類		(35.7)				内面:灰赤色(2.5YR4/2)～にぶい黄橙色(10YR6/3)～赤褐色(10R4/3)　外面:暗赤褐色(10R3/3)～にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/3)	5	
956	錆	擂鉢	Ⅱ類		(27.7)				内面:にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:青灰色(5B6/1)～にぶい赤褐色(5YR5/3)	5	
957	鉄?	天目茶碗		削り出し		(4.4)			釉:にぶい黄色(2.5Y6/3)　断面:にぶい赤褐色(5Y5/4)	15	
958	灰	丸皿	Ⅲ類	無	(10.0)	(5.6)	1.9		外面釉:灰オリーブ色(7.5Y5/3)　内面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:褐灰色(10YR6/1)	25	
959	灰?	丸皿	Ⅲ類	無	(10.2)	(6.4)	1.9		釉:浅黄色(5Y7/3)　断面:(2.5YR5/2)　底部:灰赤色(2.5YR5/2)	10	
960	灰	丸皿	Ⅲ類	無		(6.4)			釉:オリーブ色(5Y5/4)　断面:褐灰色(10YR6/1)　内外面底部:にぶい褐色(7.5YR6/3)	25	
961	鉄	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(10.2)	(6.8)	1.7		釉:浅黄色(2.5Y7/4)　断面:灰黄色(2.5Y7/2)　外面底部:灰黄色(2.5Y7/2)　内面底部:暗褐色(7.5YR3/3)	10	
962	灰?	丸皿	Ⅲ類	無		(7.0)			内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)～灰白色(5Y8/2)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:褐灰色(7.5YR6/1)～灰褐色(7.5YR6/2)	15	
963	灰	丸皿	Ⅲ類	無	(10.0)	(6.0)	1.7		釉:オリーブ色(5Y5/4)　底部:にぶい褐色(7.5YR5/4)　断面:灰色(5Y6/1)	15	
964	灰	丸皿	Ⅱ類a	削り込み	(11.0)	(6.6)	2.3		釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰色(5Y6/1)	30	
965	灰	丸皿	Ⅰ類	削り出し		5.0			釉:灰白色(5Y7/2)　内外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:褐灰色(7.5YR6/1)	30	
966	鉄	丸皿	Ⅰ類a	貼り付け		(6.0)			釉:褐色(7.5YR4/3)　内面底部:赤褐色(10R4/3)　外面底部:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:灰褐色(5YR5/2)	25	
967	鉄	中皿	Ⅰ類		(10.9)				釉:黒褐色(7.5YR3/2)　外面:灰褐色(5YR5/2)　断面:褐灰色(10YR6/1)	10	口禿
968	錆	中皿	Ⅰ類		(13.1)				釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	10	
969	錆	中皿	Ⅱ類		(13.6)				内面:灰赤色(7.5R4/2)　外面:灰赤色(10R4/2)　断面:灰色(N6/0)	10	
970	鉄	筒形碗	Ⅰ類	貼り付け		5.8			釉:黒色(7.5YR1.7/1)　外面底部:にぶい黄褐色(10YR5/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	15	
971	鉄	筒形碗	Ⅰ類	貼り付け					内面:黒色(10YR1.7/1)～黒色(10YR2/1)～淡黄色(2.5Y8/4)　底部;浅黄橙色(10YR8/4)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	50	
972	錆	向付	Ⅱ類		(8.4)				釉:浅黄色(2.5Y7/4)　外面:にぶい褐色(7.5YR6/3)　断面:にぶい橙色(7.5YR6/4)	20	
973	鉄	向付	Ⅰ類		(9.0)				釉:黒褐色(7.5YR3/1)　外面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	10	

第12表　神座窯の遺物一覧表(3)

挿図番号	釉	遺物名	形態	高台	口径(cm)	底径・高台径(cm)	器高(cm)	体部径(cm)	色調	残存率(%)	特記事項
974	灰	向付	I類		(9.9)				釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3)　外面体部:にぶい赤褐色(5YR4/3)～内面底部:にぶい赤褐色(5YR4/3)　断面:10YR6/1褐灰色(10YR6/1)	10	
975	鉄	向付	I類		(11.0)				釉:黒色(5Y2/1)　外面:灰黄色(2.5Y7/2)　断面:灰白色(2.5Y7/1)	10	
976	錆	向付	I類		(14.2)				内面:暗赤褐色(10R3/2)　外面:暗赤褐色(7.5R3/2)　断面:暗赤褐色(5YR3/3)	20	
977	錆	筒形香炉	I類	三足		(7.6)			釉:黒褐色(10YR2/3)　外面:にぶい黄橙色(10YR6/3)　内面:灰黄色(2.5Y6/2)　断面:灰黄色(2.5Y6/2)	10	
978	鉄	筒形香炉			(10.6)				釉:黒褐色(10YR2/2)　内面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:黄灰色(2.5Y6/1)	10	口禿
979	鉄・錆	筒形香炉?		貼り付け		(7.0)			釉:暗赤褐色(5YR3/3)　内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面底部:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:灰白色(10YR7/1)	15	
980	錆	大皿	II類	貼り付け		(13.1)			釉:灰褐色(5YR4/2)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	10	
981	錆	大皿			(23.8)				釉:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	5	
982	錆	壺	II類		(16.7)				内面:灰赤色(10R4/2)　外面:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	10	
983	錆	擂鉢		無		(11.6)			釉:灰赤色(7.5R5/2)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/3)	10	
984	錆	擂鉢		無		(10.0)			釉:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　断面:橙色(2.5YR6/6)	10	
985	錆	擂鉢		無		(9.95)			内面釉:にぶい黄橙色(10YR6/3)　外面釉:灰褐色(5YR5/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	10	
986	錆	擂鉢		無		(11.2)			内面:にぶい赤褐色(5YR5/4)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	15	
987	錆	擂鉢	I類						釉:にぶい赤褐色(5YR4/3)～灰褐色(5YR4/2)　内面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　外面:灰赤色(10R4/2)　断面:橙色(2.5YR6/6)	10	
988	錆	擂鉢	I類						内面:灰赤色(2.5YR4/2)　外面:灰赤色(10R4/2)　断面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	5	
989	錆	擂鉢	I類						内面:にぶい赤褐色(5YR4/3)　外面:にぶい赤褐色(2.5YR5/4)　断面:にぶい赤褐色(5YR5/4)	5	
990	錆	擂鉢	I類		(28.0)				内面:にぶい褐色(7.5YR5/3)　外面:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	10	
991	錆	擂鉢	I類		(30.0)				釉:灰褐色(5YR5/2)　断面:にぶい橙色(2.5YR6/4)	25	
992	鉄	鉢	II類		(26.9)				釉:黒色(2/5Y2/1)　外面:黒褐色(2.5Y3/2)　口縁部:にぶい褐色(7.5YR5/3)　断面:褐灰色(7.5YR6/1)	10	口禿
993	錆	擂鉢	II類		(30.0)				釉:灰赤色(2.5YR4/2)　断面:褐灰色(7.5YR5/1)	5	
994	錆	擂鉢	II類						内面:赤褐色(10R4/3)　外面:灰褐色(5YR4/2)　断面:橙色(5YR7/6)	5	
995	錆	擂鉢	II類		(21.0)				釉:灰褐色(5YR4/2)　断面:灰黄褐色(10YR5/2)	10	
996	錆	擂鉢	II類		(35.0)				釉:にぶい赤褐色(5YR5/3)　断面:にぶい橙色(5YR6/4)	10	
997	錆	擂鉢	II類		(31.2)				釉:灰褐色(5YR4/2)　内面:にぶい橙色(5YR6/4)　外面:灰赤色(2.5YR4/2)　にぶい赤褐色(2.5YR4/3)　断面:灰赤色(2.5YR4/2)～褐灰色(5YR5/1)	15	
998	錆	擂鉢	II類		(32.2)				外面:にぶい赤褐色(5YR4/3)～灰褐色(7.5YR4/2)　断面:橙色(5YR6/6)	10	
999	錆	擂鉢	II類		(30.0)				釉:灰褐色(5YR5/2)　断面:にぶい橙色(5YR6/3)	10	
1000	錆	擂鉢	II類		(30.7)				釉:灰赤色(10R4/2)　断面:灰赤色(10R5/2)	10	

第４章　まとめ

１　大窯期志戸呂焼焼成陶器の特徴と変化

これまで述べてきたように、上志戸呂古窯・神座古窯では日常雑器を中心に生産する中で、複数器種の茶陶を少量ずつ焼成していたことが明らかとなった。ここでは変遷を追える代表的な器種について、その特徴と神座古窯に至る変化について主に触れる。また、必要な部分は金谷町の資料から補遺する(金谷町町史編さん室1991に記載される遺物は　金谷町+遺物番号で表記する。)。

天目茶碗・小天目　高台の形態で削り出しの輪高台(Ⅰ類)と内反り高台(Ⅱ類)の２種があるが、Ⅱ類は少量にとどまる。釉は鉄釉が普遍的であるが、灰釉や灰釉・鉄釉の掛け分けが少量ある。

Ⅰ類は口縁部の造りに応じて、外側へなだらかに挽き出す、断面形状でいえば伸びた「S」字状を呈するもの(a)と、屈曲を持たずにまっすぐ上方に挽き出すもの(b)がある。出土量が安定しているのはⅠ類aであり、口径12.5cm前後～10cm、器高6.6cm～5.8cm程度までの法量差が含まれる。大ぶりで口唇部から口縁部直下のくびれまでの間隔が短いもの(19・20、金谷町12)は、より古い様相に位置づけられる。口径11～10cmのものに現われる直線状の体部の立ち上がりや口縁部直下の強い稜、内面底部と体部の境に付く明瞭な角、あるいは肥厚した体部は、中でもより新しい形質と捉えられる。従って法量を減退させながら、丸味を帯びるものから角の付くものへ変化したと考えらえる。上志戸呂古窯では口径11cm台・器高６cm程度のものが最も出土例が多いため、窯の最盛期に生産されたものと察せられる。Ⅰ類bは口径12cm以下となる。例が少ないがⅠ類aと同様な変遷をたどるものと推測される。

Ⅱ類の出土例は少ないが、Ⅰ類と同様にa・b双方の口縁を備えている(金谷町13・14)。Ⅱ類aは口径こそ12cm台前半であるが器高が６cm程度とやや低い。体部が比較的丸くやや古手の様相を示すⅡ類bは、口径は11cm台であるが、器高が７cmを越える例が把握されている。一見異形であるため、他の要素を取り入れて生産されたものとも考えられる。いずれも窯の盛期に伴って導入されたのだろう。

小天目も、高台が輪高台のもの(Ⅰ類)が多く、内反り高台のもの(Ⅱ類)は少ない。総点数が少なく定かでないが、神座古窯の資料には直線状に立ち上がるものが報告されているので(藤澤1993)、天目茶碗と同様に丸味を帯びるものから角の付くものへ器形の変遷をたどるものと考えられる。

筒形碗　筒形碗はいずれも見込みに茶溜りを持たないものである。釉は鉄釉と灰釉が用いられるが、鉄釉が普遍的であり、灰釉・鉄釉の掛け分けが少量ある。高台は付け高台(Ⅰ類)と、削り出し(Ⅱ類)がある。上志戸呂古窯では口径10cm台のⅠ類が大多数でⅡ類はごく少量である。神座古窯では上志戸呂古窯に近似したⅠ類のものもあるが、破片資料も含めるとⅡ類もⅠ類の半分程度の頻度で焼かれている。

Ⅰ類は口径12cm・器高７cm程の大ぶりなもの(75)が初期段階にあるものと思われる。普遍的にみられるのは口径10cm・器高６cm台のもので、手の収まりが程よい。前者よりも口径が減少し高台径は増して据わりもよくなる。これらは腰部に緩やかな張りを持ち、口縁部に掛けて直線状ではあるがやや開き気味に立ち上るものであり、神座古窯では確認できない。見込みがほぼ平らで口径11cm程度の、体部がほぼ鉛直状に立ち上がるものが後出するとみられる。この形態は神座古窯で一般的である。

Ⅱ類は腰部の折れが急になり、体部もほぼ鉛直上に立ち上るものである。その影響で口径はやや小さくなり口径10cm前後となる。高台も丈が低く直径のより大きなものが取りつくようになる。

丸碗　丸碗の釉は灰釉と鉄釉が用いられるが、灰釉が普遍的であり、灰釉・鉄釉の掛け分けも少量ある。高台は付け高台(Ⅰ類)で丈の高いものが主体であるが、削り出し高台(Ⅱ類)のものが少量みられる。腰部が張って高台径がやや小さくなるのが特徴で、初山宝林寺窯跡(浜松市天竜区細江)には類似した形態が報告されていることからも、この形態が持ち込まれている可能性がある。出土量が少ないので、筒形

碗に比べれば限定的な生産であったと考えられる。

小型の皿類　小型の皿類は輪ドチを挟む重ね焼きによって大量生産される。丸皿・稜皿・折縁皿が主要な製品であるが、丸皿が多量の出土をみる。一方、これに比べれば稜皿・折縁皿・稜花皿は格段に少ない。釉は稜皿以外にオリーブ色に発色する灰釉が普遍的に用いられるが、丸皿の一部と稜皿のすべては鉄釉系の釉が用いられる。また、丸皿の口縁部の一部を幅5㎜程度の工具を挟んで複数個所折り曲げる襞皿や口唇部内面に波状の文様をつける稜花皿が微量作られる。

丸皿は付け高台をもつⅠ類と、削り込み高台のⅡ類があるが、Ⅱ類が圧倒的に多い。いずれにも見込みに高さ1㎜程度の段をもつもの(a)と、平坦なもの(b)がある。法量はいずれのかたちでも直径10㎝前後であるが、器高は3～2㎝と差があるので、次第に扁平化するものと考えられる。このような法量差はa・bともに認められるので並行関係にあり、似て異なるものとしてここでも明らかに区別されていたとみられる。

神座古窯ではⅡ類aが多いが、導入の際のモデル選択によるものだろうか。回転ヘラ削りの底部をもつⅢ類は神座古窯のみで確認される、もっとも新しい形質のものである。

向付　向付は少量生産された内でもⅠ類が普遍的にみられる。上志戸呂古窯では削り込み高台で腰部に明瞭な稜をもつ形態が主体である。施釉も体部主体で口禿とし、重ね焼きの便を図っている。神座古窯では外見上似通っているが付け高台となり、上志戸呂古窯で通例だった錆釉で口禿から、鉄釉へ転換して口唇部にも釉を残すものとなる。

大皿　釉は錆釉を用いるものが多いが、焼締の場合もある。口縁部が内湾するものと直線状に開くもの、口縁部が端反のものがあり、内湾するものの割合がやや多い。内湾する深めの形態(475)などは、初山窯の形態に類似するので、後2者が新しい形質となろう。底部外面をヘラ削りによって平滑に整える平底が普遍的であるが、付け高台のものも若干量含まれる。ただし、口縁部のつくりと底部のつくりは相関しないようである。平底のものは、最下位に底径程度の輪ドチを、内側には三点に粘土トチンを挟んで重ね焼きする。付け高台では、端部のとがる断面三角形状のものが上志戸呂古窯にある。これは見込みにも高台痕が残されるため、直に重ね焼きされたとみられる。断面矩形のものは神座古窯にあるが、重ね焼痕がなく、焼成方法を転換し焼き上がりの質を向上しているとみえる。

内湾するものの一部と端反のものは口禿となる。端反の大皿の生産は、同じ内禿技法をもつ上志戸呂古窯の向付とともに開始されたものと考えられる。その上で従来の形態の大皿にも応用されたのだろう。

擂鉢　擂鉢は大小2種の法量が作られているが、小は極めて少ない。口唇部外面に縁帯をもつⅠ類と、口唇内部に突起をつくるⅡ類の2種がある。量的には、上志戸呂古窯ではⅠ類が圧倒的であるが、神座古窯ではⅡ類が多く採集されるので、生産の重点を転換したものとみられる。

上志戸呂古窯のⅠ類には大きく分けて2種の縁帯(縁帯A・B)がある。特に縁帯Bは擂り目との関連から、体部に直交気味に取り付くBaから鉛直方向に面をもつBbに推移すると考えられる。内面底部の擂り目は3パターンがあり、擂り目AからCの順に新しい様相となる。釉は擂り目Aでは黒褐色～赤褐色のつや消しの錆釉を、擂り目BやCでは光沢を帯びた、赤褐色のものが多い。一方、神座古窯ではつや消しの錆釉が用いられる例が多く、上志戸呂古窯ではみられない体部への回転ヘラケズリが恒常化する中で縁帯Cがあらわれる。

Ⅱ類の口縁は、大きく分けて4種ある(突起A～D)。上志戸呂古窯よりも古く位置付けられる瀬戸・美濃大窯の月山窯跡・尼ヶ根2号窯跡、初山宝林寺窯跡の口縁はいずれも突起Aなので、およそA～Dに移行するものと考えられる。神座古窯では突起Aが極めて少なく突起C・Dが主体となって、上志戸呂古窯になかった突起Eが現われる。この突起Eが神座古窯の最終形態となる。Ⅱ類では、上志戸呂段階から一貫して体部にヘラケズリが施される。

2　上志戸呂古窯焼成陶器の整形方法と釉薬

(1)成形方法と原料

成形はいずれの場合も右回りのロクロ上で行われる。壺甕類、擂鉢、匣鉢など大型器種は、輪積み後にロクロに回転を加えてナデを施している。小型品では粘土塊からの挽き出される場合と、円柱上に体部を継ぐ場合があろうが、丸皿や耳付水注などの破片に継いだ痕跡を認めることがあるのみで判別は難しい。また、ある程度の口径のものを絞り込みながら細く・長く挽き出す手法が徳利で確認された。

切り離しは回転糸切りが一般的である。小型品は比較的目が細かく大型品は荒い場合があるので、複数の太さの工具を対象に応じて使い分けていたのであろう。

切り離し後にロクロ上に逆転させて底部～体部に回転ヘラケズリを加えることも盛んに行われる。しかしながら、天目茶碗と筒形碗のごく一部以外では削り出し高台をもつものがほとんどない。また、擂鉢Ⅰ類の体部に回転ヘラケズリは最後まで行われない。形態的・型式的にはあってよいと考えられる技法の出現が見られないことは、新器種は器形のみの導入で留まり、技術・技法の革新を伴うものではなかったと考える。その結果、瀬戸・美濃大窯製品とよく似ているが細部に差異のある製品を造り続けることになったのだろう。

調整過程には、いくつかの工具を用いている。細首を挽き出す徳利や短頸壺では、内面にコテをあてがっており、その痕跡が螺旋状に強く残される。高台の接合点などでも、ナデによるやわらかなラインにヘラをあてがって面取りする場合が多い。

乾燥は、スノコ状の台や粗朶を敷いた板状の台に乗せられて行われたとみられる。高台端部の圧痕は丸皿に現れることが多い。量産によって盲点となった品質低下の一端とも捉えられる。

利用される粘土は、当地域の表土～黒ボク下に堆積する更新世の粘土を用いたと考えられる。化学組成が近似することから、ごく狭い範囲で採取されたものであったろう。胎土の粗密は、肉眼観察の段階で、大型品によりきめの粗い胎土が用いられている傾向を察していたが、プレパラートの観察でも擂鉢や大型品の甕、窯道具の匣鉢により多くの砕屑物が含まれていることが明確となった(附載「砕屑物・基質・孔隙の割合」)。このことは、利用する粘土を選別していたことを窺わせる。胎土中には著しい礫を含まないので、原料の粘土は小割りした上、水簸されていたと考えられる。水簸された粘土は上方にきめの細かなもの、下方により荒いものが沈殿するので、この時点で適材を抽出し取り分けて、より下位の粘土を擂鉢・甕・匣鉢などの原料に用いていたことは充分に考えうる。

(2)釉薬

釉薬は、第13表左欄に整理したとおりである。灰釉と鉄釉、錆釉の三種を基本とし、小型品と中型品の一部に灰釉と鉄釉が、大型品に錆釉が多用される。小型・中型製品の多くは灰釉を主に用いる器種でも少量の鉄釉を、鉄釉を主とする場合も同様に、量の多少はあるもののいずれの釉をも用いる。

灰釉が多用されることは先学ですでに指摘されているとおりであるが、小型品では小杯、丸皿、中型品では短頸壺、千段巻きの徳利Ⅱ類などの一部の器種に顕著であることが興味深い。灰釉は透明感のある鮮やかなオリーブ色に発色し、たっぷりと掛かることが特徴である。発色する色調は、酸化第二鉄(Fe_2O_3)の含有量に影響されるようで、蛍光X線分析資料6・7・10・13・15・16の対比でも分かるように、2％台のより低いものは鮮やかに(資料6)、4％台のより高いものは褐色味を帯び、ややくすむ(同7)。

鉄釉は、小型品では主に天目茶碗、筒形碗、筒形香炉、耳付水注に、中・大型品では徳利、建水、茶壺などに用いられる。鉄釉も灰釉と同様にたっぷりと掛けられる例が多く、黒味が深く漆黒となるものや、やや透明感のある褐色味を帯びるものなど複数種が併用されているようである。鉄釉は灰釉を基本

第13表　釉薬と窯詰め位置

		釉薬						口禿	窯詰位置		
		灰	鉄	錆	掛け分け	流し掛け	焼締		匣鉢内	匣鉢外	詳細
天目	天目茶碗	△	◎	△	△				○		丸皿上で重ね焼き。
	小天目	△	○	△					○		丸皿上で重ね焼き。
碗類	小碗	○	○						○		丸皿上で重ね焼き。
	平碗	○	△						○?		丸皿上で重ね焼き。
	丸碗	◎	△		△				○		丸皿上で重ね焼きか1個焼き。
	筒形碗	△	◎	△	△				○	○?	丸皿上で重ね焼きか1個焼き。
	小杯	◎	△	△	△				○		丸皿上で重ね焼き。
皿類	丸皿Ⅰ類a	◎	○			△			○		Ⅰ類同士か、Ⅱ類を重ねる。
	丸皿Ⅱ類a	◎	○		△				○		Ⅱ類aあるいはb同士を重ね焼き。
	襞皿	○							○		丸皿Ⅱ類上で重ね焼き。
	稜皿		○						○		同器種を重ね焼き。
	折縁皿	○									
	稜花皿	○							○		
	中皿	○	△			△	△	○	○	○	同器種を重ね焼き。口禿は匣鉢外で単独に伏せ焼き。
盤類	向付	△	△	◎			△	○	○?	○	同器種を重ね焼き。
	鉢	△		△			○			○	皿状は中皿と重ね焼き。
	大皿			◎			○	○		○	同器種を重ね焼きか口禿は単独で伏せ焼き。最上には小型品を置く。
神仏具	筒形香炉	◎	○	△					○	○?	
	花瓶			○						○	
壺瓶類	小壺	○	○	△			△			○	正位で匣鉢蓋上に置かれる。
	短頸壺蓋	○								○	短頸壺に被せられる。
	短頸壺	◎		△						○	小型品を入れて蓋を被せる。
	耳付水注	△	◎	△					○	○	匣鉢外では正位で匣鉢蓋上に置かれる。
	徳利Ⅰ類	△	◎	△		△				○	正位で匣鉢蓋上に置かれる。
	徳利Ⅱ類	◎	△							○	正位で匣鉢蓋上に置かれる。
	徳利Ⅱ類(千段巻き)	◎	△							○	正位で匣鉢蓋上に置かれる。
	小瓶	△	◎							○	正位で匣鉢蓋上に置かれる。
	広口壺			○			△			○	正位で置かれる。
	建水	○	○				△			○	正位か逆位で置かれる。
	甕			○			△	○		○	伏せ焼きされる。
	桶			○			△	○		○	伏せ焼きされる。
	茶壺		△	○						○	正位で焼かれる。
擂鉢	擂鉢			◎			△			○	同器種を重ね焼き。匣鉢上か床面に置かれる。
その他	水滴	○							○	○	
	片口			○			△			○	
	風炉？		○							○?	
	瓦						○			○	

釉として、添加された酸化鉄を発色剤とするので、灰釉より酸化鉄(酸化第二鉄)が多く含まれることとなる。実際、含有量は7～9％と灰釉よりも高いものとなっている(蛍光X線資料1・4・11・21)。白色系に発泡する釉は肉眼観察では灰釉と判断したが、蛍光X線分析では酸化第二鉄の含有量が灰釉の場合よりもはるかに高い場合があるので、鉄釉とみるべきものも含まれる(同2・3)。今回の報告内では、観察表中に「灰？」などと記載してある。

鉄釉と灰釉の掛け分けは、天目茶碗、丸碗、筒形碗に施される。また、徳利でも内外面で異なる釉を掛ける場合がある。この場合は単に漏れの防止だけでなく、口縁部の内外というわずかな部分で色合いの違いを使用者に認めさせることを狙っているのだろう。

錆釉は、艶のないものが主体となり、艶のあるもの(「銹釉」というべきか)の2種がある。前者は、小型製品では稜皿、向付、中～大型製品では大皿、広口壺、甕、桶、茶壺、擂鉢などに多く用いられる。

一方後者は、天目茶碗や大皿・擂鉢の一部にみられる。分析資料が少なく明確ではないが、酸化第二鉄の含有量は、艶のないもの(蛍光X線資料18)が艶のあるもの(同12)を大きく上回っている。

口禿は器種によって生産性の向上、あるいは品質の維持という複数の目的で採られた技法と理解される。恒常的に口禿となる向付は、重ね焼きによる量産を指向したものだろうし、中皿、鉢、大皿、甕、桶などは伏せ焼きによって内面への降灰防止を主目的としているのだろう。

施釉方法は、中～大型品では下方に垂れる例が頻繁にあるので、多くの場合は流し掛けで行われたのであろう。体部下端の釉が水平となり下へ垂れない天目、碗類、小杯などは内面に流し掛けした上、体部のみ漬け掛けしている可能性がある。刷毛塗りはあまり目立たないが、桶や茶壺など大型品の、釉がまだらになったりかすれたりするものに該当するのであろう。

3　陶器の匣鉢詰め・窯詰め方法

出土した溶着遺物や、破片に残された痕跡から読み取れる窯詰めの様子は、第13表右欄に整理したとおりである。総じて、小型品は匣鉢に込められ、大型品は裸焼きされる。

使用される匣鉢は、いずれも平底のもので複数の法量を備えている。溶着防止のために挟み込まれるのは輪ドチが圧倒的に多く、大小の粘土トチンが器種に応じて使い分けられる。円錐ピンや長脚ピン、横ピンなどは使用されない。

匣鉢の積み重ねは通常同じ口径のもので行われるが、より小型のものに大型を重ねる場合、逆に大型に小型を重ねる場合(写真17)がまれにある。最上に置かれる匣鉢蓋は、円板状のⅠ類が多用される(1)。多くの場合は裏表両面をひっくり返しながら複数回にわたって使用される。匣鉢同士や匣鉢蓋間の隙間には目地となる撚土を詰めており、変形具合によってはこれを複数段重ねる場合もある。

天目茶碗は、匣鉢Cの中で焼成される。穴開き底匣鉢や丸底匣鉢は用いられない。底部に輪ドチを挟んだ丸皿1枚を敷いた上に、輪ドチか小さな粘土トチンを挟んで1個が置かれる。丸皿と天目茶碗の間に挟まれる輪ドチは、天目茶碗の高台径に合致したものが用いられるので、事前に高台へ輪ドチを圧着させて重ねた可能性を感じさせる。この皿と天目茶碗との組み合わせは、瀬戸・美濃大窯では大窯2段階から行われる方法であるが、大窯3段階後半にあたる初山窯でもほぼ同様な方法が採られている(栗原2005)。小天目や小碗、丸碗、筒形碗、小杯なども同様な方法で匣鉢詰めされている。丸碗や筒形碗に挟まれる輪ドチは天目茶碗の場合に比べ粗雑で、高台と交差する例もある。このような場合は、皿の見込みに適宜置かれた輪ドチ上に碗を置いているように見える。

初山宝林寺窯跡では天目茶碗単品の焼成が報告されている。上志戸呂古窯では筒形碗を一個焼きした可能性を明確な溶着資料が得られていないものの匣鉢846から知ることができ、神座古窯では溶着資料が得られている。天目・碗類の一個焼きはこれらの窯に共通した流儀として認められる。

小型の皿類は、匣鉢Cに2～3枚を重ねて匣鉢詰めする。挟み皿を長脚ピン・横ピンで留めて匣鉢内を2段に仕切って行う焼成法は行われない。同じ釉薬を使用したもの同士が詰められるが、まれに下に鉄釉、上に灰釉の場合がある。最下位の皿の底には潰れた輪ドチを2枚重ねるが、皿の間には口縁部同士の溶着を防止するための、丈の高く断面が楕円形となる輪ドチ1個を通常用いる。最上位には内面すべてに施釉されるものが置かれる。まれに襞皿が置かれることもある。1枚焼きされる例も微量あるが、

写真17　入れ子にされる小型の匣鉢

いずれも内面すべてに施釉される個体である。このような匣鉢詰め法は、初山窯でもほぼ同様なものとして把握されている(栗原前出)。

水滴なども、匣鉢Cに入れられる場合がある。今回の資料では確認されないが、金谷町の調査資料中(金谷町143)に瓜形の水滴を3個程度入れている例がある。

このように、天目茶碗や小型の皿類の匣鉢詰め法は初山窯と類似点が多い。天目茶碗用の穴開き底匣鉢や丸底匣鉢が導入されないことからも、上志戸呂古窯の匣鉢詰め法は瀬戸・美濃大窯から最先端の方法を導入したのではなく、初山窯で行われていた当時としてはやや古い方法であった可能性が高い。

窯詰は、壺甕類や擂鉢に軟質なものが含まれることや小分炎柱に溶着する匣鉢の例からも、小分炎柱上から火力のより弱い焼成室末端にかけて、製品を詰めることができる場所全体を有効に使っていたとみられる。小分炎柱上から焼成室前半にかけて匣鉢に込められた小型品が、焼成室の後半に裸焼きされる大型品が、焼成室の末端に擂鉢の一部が詰められていたと考えられる。重ね焼きされる向付・大皿・擂鉢などの一部や徳利、耳付水注などは、積まれた匣鉢と天井との空間を埋めていた可能性がある。

大量生産される丸皿は、前述のように通常灰釉のものと鉄釉のものを分けて匣鉢詰めしている。灰釉の発色する温度が1200度、鉄釉が1250度程度といわれているので、混在させた場合はいずれかがうまく発色しない可能性がある。それぞれの釉が頃合に発色する適当な温度の位置に匣鉢を積むため、別々に匣鉢詰めされたのだろう。小分炎柱に溶着する匣鉢内には鉄釉の丸皿が入れられているので、鉄釉製品が焼成室の前側に置かれていたと考えられる。

4　神座古窯焼成器種の特徴と上志戸呂古窯製品との比較

神座古窯は、上志戸呂古窯と一部並行しながらやや新しい時期まで操業されていたと捉えられている(藤沢1993)。今回掲載した遺物のいずれが新しい様相なのか、明らかな部分を器種ごとに整理する。

神座古窯の天目・碗類では鉄釉の筒形碗が頻繁にみられるが、丸碗は今のところ把握できない。天目茶碗についてもごく少量で、より薄手の華奢なものとなるが、小天目は比較的多い。これらからみても、天目・碗類の生産は鉄釉の筒形碗と小天目に集約される現象が起きているように見える。その要因は旧来的な唐物写しの茶道具である天目茶碗から純正な和物である筒形碗へ、嗜好が急激に移行したことをここでも示すのだろう(藤沢1993)。小天目についても何らかの需要の変化を示すものなのかもしれない。筒形碗の形態については、見込みが平坦で広く口径も大きい、腰部の折れが急なものとなる。上志戸呂55・72のような、小ぶりで腰部に丸みをもつものがより古い様相であると考えるが、これは神座古窯では見当たらない。

向付は、口縁部を直立させる皿状のⅠ類が主体であるが、その作りは上志戸呂古窯とは異なる。まず、神座古窯では口唇部を口禿にする個体がなく、腰部下位までに施釉する。このことは、同規格の同器種を直接重ね焼きしなくなったことを示している。また、高台は付け高台であり、丸皿Ⅱ類に同様な削り込み高台は伴わなくなる。量産性を放棄し、全体的に手間を掛けて高品質化しているようにみえる。

丸皿は、上志戸呂古窯の製品に極めて類似したⅠ類a、Ⅱ類aを作る。一方で、削り出し高台のⅠ類や、ヘラケズリで平底に作るⅢ類は、上志戸呂古窯にほぼみられない新しい様相である。Ⅱ類・Ⅲ類の中に見込みに段を持たないbが全くみられないことは、段をもつaのみが生産器種として移入されたためであろうか。また、削り出し高台をもつ丸皿はごく少ないが、製作技法の面からも大きな転換と捉えられる。瀬戸・美濃大窯では、削り出し高台をもつ志野丸皿や鉄絵皿が大窯4段階後半に量産されるようになるので、この影響を受けているものと推測できる。

擂鉢は、上志戸呂古窯ではⅠ類主体でⅡ類は少ないが、神座古窯ではⅡ類の頻度が各段に増えている。また、Ⅰ類についても縁帯を下方へ垂下させるものを中心に、体部へヘラケズリを加えるものが現れる。

また、上志戸呂古窯では擂り目Aの出現はB・Cに先行するものと考えるが、神座古窯の場合はA・Bいずれにおいても体部にヘラケズリを加えるものがあるので、むしろヘラケズリが常態化した中に古い流儀である擂り目A、より新しい流儀である擂り目Bが同時に持ちこまれて混在しているように見える。

Ⅱ類の口唇部の形態では、上志戸呂古窯には見当たらない突起Eが特徴的である。この形態は、丸く膨らめる突起Dから変化したものとみられ、神座古窯の製品の中でもっとも新しく位置付けられるものである。類似した口縁をもつ鉢(992)も、同時期と考えられる。

大皿は、柔らかく内湾するものが依然作られる一方で、口唇部を内側へ折り返すものがある。上志戸呂古窯では端反のものが一定量確認されているが、神座古窯では今のところ判然としない。高台をもつ個体はいずれも少数であるが、上志戸呂古窯では重ね焼きを前提とした端部の幅の狭いものであるのに対し、神座古窯では四角形となるので、重ね焼きによる量産をしない形態に変化しているとみえる。

このように、上志戸呂古窯製品に比べ神座古窯の製品には旧状を踏襲する部分がある一方で、いくつかの新しい器種や技法が存在することが把握できる。前者には、上志戸呂古窯製品に同一な丸皿Ⅰ類a、Ⅱ類aの生産がある。後者には、擂鉢の擂り目と体部のケズリの関係、向付や大皿の高台形態など、在来器種に対して新たな技法を適用するといった変革があり、そのいくつかには向付や大皿の1個焼きなど焼成方法の変化をも伴っている。また、削り出し高台をもつ皿類の生産など、技法を伴う新たな器種の導入や、最も新しく位置付けられる擂鉢の口縁形態など最先端の器形を機敏に受け入れる姿勢も垣間見られる。このような新旧が融合する状態は、上志戸呂系工人の技術が既存のものとして神座になければ起こり得ないので、開窯は上志戸呂系工人の手によるものと想定できる。さらに融合の発生は旧来の技法を踏襲する上志戸呂古窯からの技術移入・工人の移動によってのみ生み出されるものではなく、新技術をもった工人を招聘し在来工人と協働させることで生じたものとも考えられる。

5　窯構造の特徴と変遷

上志戸呂古窯で検出された窯の床面角度は、1号窯が当初面36°最終面24°と、操業期間内の改修によって12°緩くなっている。一方で2号窯では当初面25°最終面15°と10°緩くなっている。1号窯の床面はおよそ11回、2号窯ではおよそ10回の改修が加えられているので、傾斜の緩くなる割合としてはほぼ同一といえる。また、1号窯の最終床面と2号窯の当初床面の角度は、極めて近似している。窯を新築する工人は、すでに改修されて嵩上げされ切った床面からは当初の角度を明確にし得ないので、操業を中止する窯の床面角度を忠実に新しい窯に応用しているのだろう。また、角度の著しい変更は燃焼効率に変化をもたらし、従来の角度での焼成になれた工人は窯の炊き加減を変更せざるを得なくなるので望ましいことではないだろう。このような観点から、窯は1号窯から1号窯の床面角度を生かした2号窯へ連続して造り替えられたと考える。

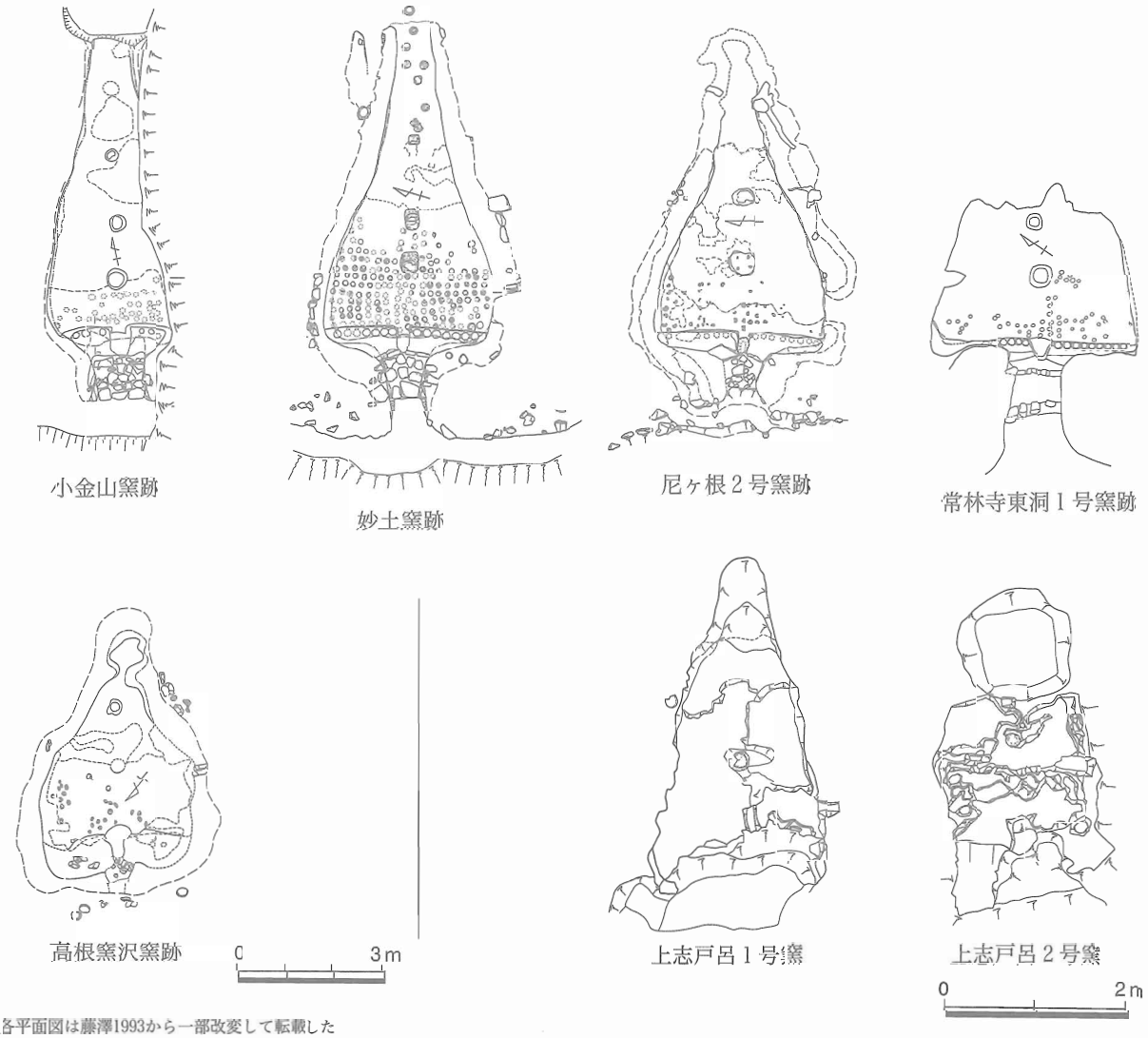
窯の平面形態は、その窯が構築された時点から操業が終了するまで変更がきかないので、その形態は構築時の認識に基づいて決められているといえる。1号窯の平面形状は二等辺三角形状、2号窯は矩形状と著しく異なるが、1号窯はその操業期間以前に認識されていた流儀の窯であり、2号窯は1号窯の操業期間内に生じた変化を採り入れた新たな認識に基づく窯であるので、形態差を以って一概に相互が異質であるとはいえない。それでは、窯を構築した工人はそれぞれ何を新たに認識したのだろうか。

瀬戸・美濃大窯の第1段階では、燃焼室と焼成室の接点は連続する屈曲に収められており、焼成室手前側に最大幅があって焼成室の壁面は煙道へ向かって直線状に狭まるが、焼成室半ば以降にゆるいくびれがみられる(小金山窯跡)。第2～3段階では、燃焼室と焼成室の境付近が最大幅となり、焼成室半ばからくびれて煙道部に向かって急激に細くなる(妙土窯跡・尼ヶ根2号窯跡)。大窯4段階前半では小分煙柱に向かい合う燃焼室の壁面と焼成室の壁面がほぼ直角に接し、この付近が最大幅となる。焼成室の

壁面はくびれず煙道へ直線状に至るようである(常林寺東洞1号窯跡)。第4段階後半から末にかけては、焼成室の壁はほぼ平行する矩形状の平面形態となり、焼成室半ば過ぎから煙道へ向かって急激に絞られるやや小型のものとなる(高根窯沢窯跡)(2)。この現象から、平面形態上は、壁面の築かれる位置と形状によって最大幅の位置、燃焼室の壁面と焼成室の壁面の取り付き具合、焼成室壁面のくびれの有無が決定されており、特に第3段階から第4段階の間で、焼成室の壁面は緩やかな屈曲をもっていたものが直線状となって焼成室後半のくびれを失う傾向が把握できる。

上志戸呂1号窯では、燃焼室から焼成室に取り付く部分の壁面はある程度の屈曲を保っているが、焼成室の壁面は直線状に煙道に至る。瀬戸・美濃大窯と比較すると、前者は大窯第3段階まで、後者は第4段階前半の特徴に類似する。これまで指摘してきたように、上志戸呂古窯は初山窯の技術導入によって開窯されたと考えられることからも、匣鉢や匣鉢詰め法と同様により古い流儀が持ちこまれていると理解される。その古い流儀に築造当時の新たな流儀を付加して1号窯が築かれたのだろう。この窯の構築時期は、恐らく大窯期志戸呂焼第2段階(後述)であろう。工人が認識したのは瀬戸・美濃大窯から波及した新たな流行の到来であり、生産器種の変更とともに新たな窯体構造の一部を取り入れて、より適した生産環境の成立を目指したものと考える。

同様な観点からすれば、2号窯は焼成室の両壁面が平行する第4段階後半の流儀で構築されていると



各平面図は藤澤1993から一部改変して転載した

第75図　瀬戸・美濃大窯と上志戸呂窯の比較

考えられる。しかし、上志戸呂古窯では1号窯の段階から窯体自体が小型であるので、2号窯での著しい床面積の減少は認められない。また、生産の中心が茶陶に移行したような傾向もはっきり掴めない。したがって、2号窯での窯体構造の変更は焼成器種の変更をさほど伴わないものであった可能性が高い。何らかの要因で使用できなくなった1号窯の代替として導入されたものと考える。

さて、1号窯の西側壁の外側に匣鉢の底部が混入することは、1号窯が築かれた時点ですでに地表面上に遺物が散布する環境が存在したことを示している。したがって、今回検出されたものに先行して開窯当時から操業していた窯があったと考える(3)。この位置は、窯が東から西へ造り替えられていることからも、1号窯の東側と考えられ、恐らく小笠用水建設で大きく削り取られた部分にあたるのだろう。

以上のように、上志戸呂古窯の窯はいずれも瀬戸・美濃大窯、初山窯の影響を採り入れて構築されたものと考えたが、その規模は著しく小さく、瀬戸・美濃大窯を三分の一程度にスケールダウンしたように見受けられる。このような小型の窯を造らせた要因のひとつには地理的な環境があると考える。窯の築かれた斜面は破砕礫を多く含む脆弱な地盤からなる。窯より一回り大きな範囲を一旦掘りぬいて安定する土に入れ替えていることは、工人がこの地盤に直接窯を築くことはできないと判断したものと理解できる。掘削と、代替の土壌の確保に多大な労力を要するこの作業を、何らかの要件で瀬戸・美濃大窯相応の規模で行うことができず回避したために小型の窯に留まったと考えたい(4)。

6　大窯期志戸呂焼の編年

(1)大窯期志戸呂焼の段階

これまでみてきたように、上志戸呂古窯と神座古窯で焼成された製品は、上志戸呂古窯の製品に古手の様相を、神座古窯によりやや新しい様相を示すものがあることを把握でき、次の4段階に変遷するものと考える(第76図)。

第1段階　上志戸呂古窯が操業を開始する。天目茶碗は比較的大ぶりなⅠ類a・bがある。Ⅰ類aの口縁部は、端部からくびれまでの間隔が狭いものとなる。小天目Ⅰ類もこの影響を受けた大ぶりなものが併行すると思われる。丸碗は付け高台のⅠ類で、体部下端の張りが比較的強く口縁部までがなだらかに立ち上るものがこの時期にあたる。筒形碗は付け高台のⅠ類で、口径が大きく、高台径の小さな全体的に大ぶりな印象を与えるものである。削り込み高台の丸皿Ⅱ類は器高が高く、口唇部をやや外反させる。見込みの段の有無でa・bの2種があるが、この分化は3段階まで継続する。擂鉢Ⅰ類は縁帯AあるいはBaを備え、見込みに擂り目Aを付ける。擂鉢Ⅱ類は突起Aとなる。生産量は擂鉢Ⅰ類が圧倒的に多い。

この時期とした天目茶碗、碗類の出土量は少ないので、比較的短い期間で2段階に移行したものと考えられる。また、この段階の丸皿Ⅱ類aには、初山宝林寺窯跡の製品に酷似したものがある。

第2段階　上志戸呂古窯の操業が最盛期を迎え、1段階での器種に加えて向付、端反の大皿などを新たに生産開始する。

天目茶碗では、内反り高台のⅡ類が出現する。Ⅰ類はやや小型化し、体部が厚く重量感に富むものがあらわれる。小天目Ⅰ類は器高が低くなる。丸碗Ⅰ類は体部下端にやや張りをもつ丸いもので、高台径もやや広くなる。筒形碗は次第に体部の直立傾向が強くなり、高台径の広がる据わりのよいものがあらわれる。丸皿Ⅱ類は口唇部を丸く立ち上げるものに変化し、扁平化が進む。擂鉢Ⅰ類は、縁帯Bbが主体となり、見込みの擂り目はBあるいはCとなる。擂鉢Ⅱ類は、口縁のへこみが弱くなり突起B・Cとなって、擂鉢Ⅰ類に先行して体部にケズリが施される。向付は削り込み高台のⅠ類で、腰部と体部の境に稜をもち、外面の施釉は体部のみで口禿となる。大皿も向付で普遍的となる口禿の技法を、主に端反のものへ取り入れるものと思われる。

神座古窯から採集された器種には第１段階に相当する遺物はなく、２段階の上志戸呂古窯製品に近似したものが含まれるが、筒形碗・向付・擂鉢の形態からこの段階の後半から生産を開始するものと考えられる。

第３段階　神座古窯の生産が軌道に乗り、上志戸呂古窯での生産は次第に収束を迎えたものと考えられる。碗類の高台と擂鉢Ⅰ類の体部に削りがあらわれることが特徴である。

天目茶碗はⅠ類aが主体となるが小型化が進み、体部をより直線状に立ち上げるものがあらわれる。小天目はⅡ類が確認され、Ⅰ類の中にも天目茶碗と同様に体部を直線状に立ち上げるものが把握される。丸碗は削り出し高台のⅡ類があらわれる。筒形碗は腰部の屈曲が鋭く、高台径・底径ともに広い筒形碗Ⅰb類が主体となる。また、削り出し高台のⅡ類もこの段階であろう。丸皿Ⅱ類は扁平となる。向付は、腰部を丸くし、付け高台で重ね焼きしないものとなり、鉄釉を掛けるようになる。擂鉢Ⅰ類は縁帯を上方に挽き出さずに下方へ強く垂下させる縁帯Cで、体部に削りを施すようになる。擂鉢Ⅱ類の口唇部は上面の平坦面が弱くなり、突起Dがあらわれる。また、削り出し高台をもつ小型の皿類が出現するのもこの時期であろう。

第４段階　神座古窯の製品のみとなるが、採集品が少なく器種構成は明らかでない。擂鉢はⅡ類が主体でⅠ類は少なくなる。Ⅱ類では口唇部の端部は比較的平らとなるが内側の突起が大きくなり、断面形状が「T」字状の突起Eとなる。これは、前段階の突起Dが変化したものと位置付けられる。Ⅰ類は小さな角張る縁帯Bを備えるものが該当しよう。碗類は把握できていないので、筒形碗は生産されなくなった可能性がある。皿類では、底部をヘラ削りで平らにする無高台の丸皿Ⅲ類が少量生産される。向付は、付け高台で口縁部を内側にくびれさせるものとなり、柿釉を用いるものもあらわれる。

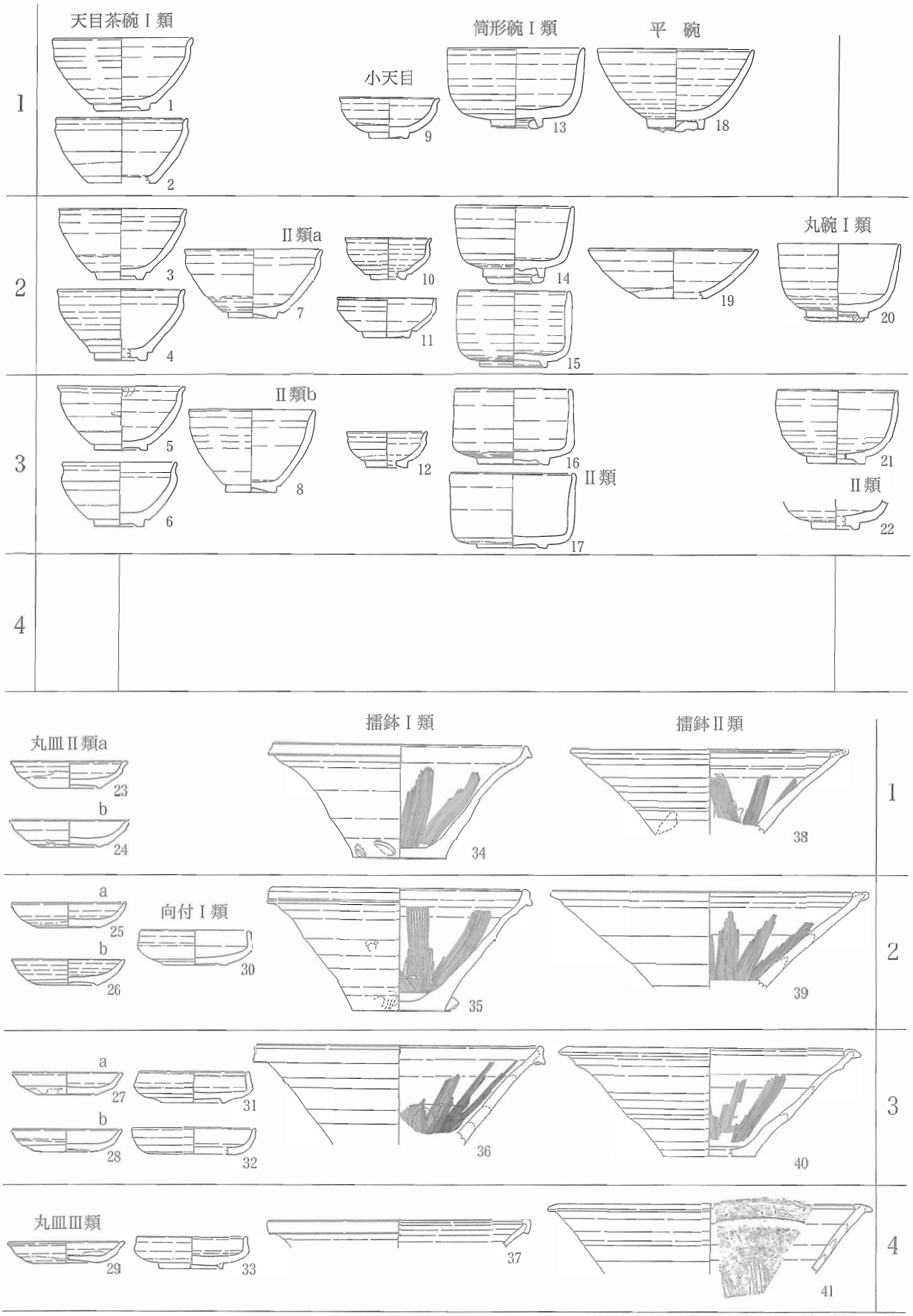
(２)大窯期志戸呂焼の年代

現段階では明確な記年銘資料が得られていないため、年代を直接的に知ることはできない。

型式的には瀬戸・美濃大窯編年の大窯３段階後半以降のもので、現在の年代観からすると1570年代後半以降に上志戸呂古窯の開窯を求めることができる。永禄11年(1568)、武田信玄による駿河侵略以来、大井川西岸から東遠江地域は武田氏と徳川氏の紛争地域となるので、確実な保証のない状態で技術を導入し安定的な窯業生産を開始するのは困難であったといわざるを得ない。当地域の紛争状態が解消するのは遠江国が徳川家康の分国になる天正10年(1582)以降となる。天正16年(1588)に志戸呂に在留する「瀬戸者等」に分国内の焼物商売役免除の朱印状が家康により発給されていることから、第１段階の始まりはこの間にあたり、分国内がより安定し出した1580年代半ばと考える(5)。年号「天正」の一部であろう桶底のヘラ書き(689)も、この時期に窯が稼動していたことを示す傍証となろうか。

第２段階の始まりは、向付、端反の大皿などの新器種の導入、筒形碗の定型化を指標にしている。瀬戸・美濃大窯編年では、これらの変化は大窯４段階への転換に位置付けられる。これらはこの時期に茶席や宴会に盛んに用いられる器種であり、上志戸呂古窯も消費動向に応じた生産器種の転換を行ったものと捉えられる。したがって、大窯４段階への移行に連動しているものと理解し、現状での年代観を援用して1590年代初頭と考える。

慶長４年(1599)に、中村一氏の家老であった横田村詮による手形が「やき物師中」に発給されている(6)。当時の中村一氏は駿河国を領国としているので、この文書は駿河国内にある窯の工人、すなわち神座古窯の工人に宛てられたものと理解される。これは、神座古窯の開窯がこの時以前であったことを示している。先述のように神座古窯が上志戸呂系工人によって開窯したと理解するならば、駿河国内にその導入を促すことによる最大の受益者は中村一氏らであったことは明白で、彼らが庇護者であることも当然のことといえる。遠江国から工人を招聘する必要はあるが、当時の掛川城主は豊臣系大名の山



1，7，8，15，20，21　金谷町町史編さん室1991．11．16　藤澤1993より転載　　(S=1/5：1～33，1/6：34～41)

第76図　大窯期志戸呂焼変遷図

内勝豊であり、中村一氏と協働してきた経緯からも要請は可能であったろう。したがって、神座古窯の開窯は中村一氏が駿河に入った天正18年(1590)以降となるが、主要器種である筒形碗や向付の変質をみると慶長4年により近い1590年代後半であったと考える。また、神座古窯の製品の主体が第3段階以降であることを考えると、第2段階の終末は神座古窯の開窯間もない1600年代初頭頃であったろう。

第3段階は擂鉢Ⅰ類の体部へ回転ヘラケズリが加えられるという技法の変化を捉えている。瀬戸・美濃大窯編年では、この変化は第4段階への転換に位置付けられるが、上志戸呂古窯では旧来の技法を踏襲しているので、連動しない。この技法は神座古窯に導入されることとなる。

第4段階は、これまで主要な生産器種であった碗類が減少し、小型の皿も丸皿Ⅱ類からⅢ類へ転換するという器種組成の大きな変化を想定している。この時期では、元和元年(1615)に徳川頼宣に仕えていた彦坂九兵衛から「志とろせと物やき七右衛門」宛て文書1通が伝わっている。確実にこの時期とする遺物が上志戸呂古窯にはないので、この文書は上志戸呂古窯の工人以外に与えられたものと理解される。このような新たな窯の出現が神座古窯に刺激をもたらした可能性がある(7)。現在のところ、4段階の開始は1610年代中ごろとしておきたい。

寛永12年(1635)に焼失して廃絶した駿府城二ノ丸台所跡から出土した志戸呂焼擂鉢の主体はⅡ類であるが、いずれも硬質に焼きあがる連房式登窯の製品であり大窯製品は見当たらないので、この時期までには生産の転換が行われていた可能性がある。これに先立つ寛永10年(1633)には駿府城主である徳川忠長が改易となり、これ以降神座は寛永12年から田中藩領、同19年から天領と領主が転換するので、神座古窯は領主から直接的かつ安定的な庇護を受けられない状態に陥ったであろうことも、生産を中止する一要因になったと考えられる。したがって、大窯期志戸呂焼の終焉(第4期の終末)を現状では1630年代半ばと考えたい。

7　おわりに

大窯期志戸呂焼の製品が受け入れられた要因の一つには、独特の釉調があると思われる。当時は瀬戸・美濃大窯に志野釉の導入などの独自性が萌芽する時期である。志野釉を導入しなかった上志戸呂古窯にとっては、鮮やかな発色を伴う灰釉製品は他にない独自性の強調であったと認識できる。瀬戸・美濃大窯製品や初山窯製品が流通する遠江～駿河地域における商圏を確立するには、他と明らかに差別化した製品を生産することが必要不可欠であったと考える(8)。初山窯が大窯第4段階前半で生産を終了していることは(9)、あるいは上志戸呂製品の販路が確立し初山窯のそれを凌駕した現われなのかもしれない。

もとより上志戸呂古窯の生産器種の大半は雑器で占められているので、工人の生計(10)を安定させる手立ては民衆を主な購買層とした商圏の確立と売れ行きの伸びにあったと言える。これには、分国内での商売を保証するいわばお墨付きともいえる徳川家康の朱印状が多分に効果を発揮したと考えられる。

しかし、消費者に許容される商品の生産や急速な商圏の拡大は、工人の努力のみでかなうものではない。大窯期志戸呂焼の製品は遠江国から関東に至る広域に及んでいるので、集荷から流通を支える商人が媒介していることは疑いない。製品の改善は、さまざまな地域・階層の需要を把握しているこれら商人からの要望が工人に伝えられ、行われていたのだろう。つまり大窯期志戸呂焼の独自性は、流通圏における消費者の要求を何らかのかたちで反映させたものであると理解できよう。

このように大窯期志戸呂焼は、上志戸呂古窯から始まる独自性を発揮しながら窯業生産を実施し、成功させていったのである。このことが後の近世志戸呂焼の礎となっていることは言うまでもない。

本報告をまとめるにあたり、多くの方からご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

（敬称略、順不同）
荒川正明　足立順司　池田　純　岡本直久　小野正敏　川上　努　加藤理文　金子健一　栗原雅也
齋藤慎一　篠ヶ谷路人　柴田　稔　澁谷昌彦　白澤　崇　菅原雄一　鈴木裕子　塚本和弘　戸塚和美
中川佳三　成瀬晃司　萩原佳保里　羽仁生　保　堀内秀樹　松井一明　溝口彰啓　山本宏司

註

（1）初山窯の円板状焼き台（栗原2005）と類似するが、両面を使用する例が多く目地の撚土が付着すること、粘土製の焼き台に溶着する例を認めないことから、本窯ではすべて匣鉢蓋と考えた。

（2）藤澤は窯が小型化する要因を、小皿類や擂鉢などの雑器類の生産を縮小し、茶陶に生産の中心を移行したことによるとする（藤澤1993）。

（3）窯の基数にはいくつかの解釈がある。浜田は「上志戸呂飯森山南麓志戸呂神社西側の小窯2基（現在は小笠用水の導水管敷設のため煙滅）」とする（浜田1971）。澁谷は「1基は用水の隧道のため破壊されていると思われる。もう1基は断面が露出。」と指摘している（静岡県教委1989b）。羽仁生は、灰原の広がりから「もう1基窯が存在した可能性は捨てきれないが」と述べている（羽仁生1991）。

（4）初山窯の窯構造が問題となるが、現状では把握されていない。今後の展開を期待したい。また、小型の窯で大量生産をかなえるには、窯の稼動はかなり高かったであろうことも想定しなければならないだろう。

（5）すでに足立順司（足立1990）、柴垣　勇夫（柴垣1991）、藤澤良祐（藤澤1993）、松井一明（松井1993）らが上志戸呂古窯の開始時期について論考している。

（6）藤澤は、文書の発給を受けた者が異なることに着目し「これら文書は、複数の竈屋に対して発給されていることから、志戸呂窯でも竈屋は集団で生産を行っており、実際に文書を受けた者の名前は記されていないが、やはり竈大将クラスとみるべきであろう。」と指摘している（藤澤1993）。したがって、上志戸呂古窯と神座古窯は別個の生産集団で営まれたと解釈できる。

（7）横岡地区の南古窯・内藤古窯付近では大窯期の遺物が採集されている（柴垣2004）。現在、志戸呂地内にはこの時期の窯は確認されていない。この文書は横岡地区に生産地を移した上志戸呂工人に宛てられたものではなかろうか。

（8）大窯期志戸呂焼の製品が遠江国から伊豆国西部にかけてかなりの販路を築いていたことも指摘される（藤澤2005）。

（9）栗原2007による。

（10）神座古窯に発給された横田村詮による手形では工人が畑地を有していたことが知られるが、これは「堪忍分」として与えられているものなので、中村一氏らによる工人の定着を促す優遇措置であったと考えられる。これを以って、上志戸呂古窯の工人も同等であったとは言えない。

引用・参考文献

蜷川式胤　1877『観古図説』
黒川真頼　1878『工芸志料』東洋文庫本　平凡社
高橋義雄　1923『大正名器鑑』アテネ書房版
金谷町町史編さん室　1991『上志戸呂古窯跡発掘調査報告』
金谷町教委　2002『川根沢古窯跡発掘調査報告』
金谷町　2005『金谷町史』資料編4　考古・窯業史
菊川シンポジウム実行委員会　2005『静岡県の中世社会－東でもない西でもない－』資料編
岐阜県・多治見市教委　1987『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991『原川遺跡Ⅳ』本文編
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006『上ノ山遺跡』
財団法人瀬戸市文化財センター　2001『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』資料集
財団法人瀬戸市文化財センター　2001『瀬戸大窯とその時代』
静岡県　1996『静岡県史』資料編8中世4
静岡県　1992『静岡県史』資料編9近世1
静岡県教育委員会　1989a『静岡県の窯業遺跡』
静岡県教育委員会　1989b『静岡県の窯業遺跡』地名表・分布地図編
島田市教育委員会ほか　1976　『旗指古窯址群』
島田市教育委員会　1983『旗指古窯跡』
矢部良明ほか　2002『日本陶磁大辞典』角川書店
足立鍬太郎　1930　「経塚と供養塔と塔の心礎」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第6集

足立順司　1982「志戸呂とその周辺」『日本やきもの集成』2東海甲信越　平凡社
足立順司　1990「静岡県下の施釉陶磁器」『江戸の陶磁器』資料編　江戸遺跡研究会
足立順司　1994「消費地出土の初山・志戸呂焼」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
栗原雅也　2005「初山焼」『静岡県の中世社会－東でもない西でもない－』発表要旨・論考編
栗原雅也　2007「初山窯の様相」『中世窯業の諸相』補遺編　「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
小山冨士夫　1957「志戸呂」『世界陶磁全集』2　河出書房
小山冨士夫　1967「志戸呂焼」『日本の陶磁』中央公論美術出版
柴垣勇夫　1991「出土遺物の概要」『上志戸呂古窯跡発掘調査報告』金谷町町史編さん室
柴垣勇夫　1991「志戸呂窯にみる天目茶碗の変遷について」『研究紀要』10　愛知県陶磁資料館
柴垣勇夫　1992「志戸呂窯にみる天目茶碗の変遷について（Ⅱ）」『研究紀要』11　愛知県陶磁資料館
柴垣勇夫　2001「静岡県の大窯生産について」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』瀬戸市埋蔵文化財センター
柴垣勇夫　2003a「小瀬戸系施釉陶器窯の系譜」『金谷町史』資料編4　金谷町役場
柴垣勇夫　2003b「近世志戸呂窯業の変遷と製品」『金谷町史』資料編4　金谷町役場
柴垣勇夫　2004「釜谷地区への陶工の移動と生産の拡大」『金谷町史』通史編別冊　志戸呂窯業史　金谷町役場
澁谷昌彦　1983「第Ⅵ章　旗指古窯跡焼成陶器の編年と様式について」『旗指古窯跡』島田市教育委員会
澁谷昌彦　1989a「第3節　駿河地域の窯業遺跡」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
澁谷昌彦　1989b「神座古窯跡群」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教委
菅原雄一　2005「助宗古窯跡群における灰釉陶器・山茶碗生産の様相」『藤枝市文化財年報』
鈴木幸朗　1983「志戸呂焼」『世界陶磁全集』9　小学館
鈴木良孝　1989「金谷町三ツ沢窯跡・釜谷西古窯跡」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教委
浜田　斉　1971「志戸呂焼」『陶説』第215号　日本陶磁協会
細木松之助　1887　「東海道地方ニテ人類学ニ関スル略報」東京人類學會報告第6号
堀田美櫻男　1928　「榛原郡五和村釜谷の齋瓷窯址に就て」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第4集
松井一明　1993「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25　静岡県考古学会
松井一明　1993「初山窯・志戸呂窯産陶器について」『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会
羽仁生　保　1991「発掘調査の概要」『上志戸呂古窯跡発掘調査報告』金谷町町史編さん室
羽仁生　保　2003「主要山茶椀窯の解説」『金谷町史』資料編4　金谷町役場
藤澤良祐　1993『瀬戸市史』陶磁史扁四　瀬戸市
藤澤良祐　2001「生産技術の変遷」『瀬戸大窯とその時代』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
藤澤良祐　2005「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『静岡県の中世社会－東でもない西でもない－』発表要旨・論考編　菊川シンポジウム実行委員会
堀内秀樹　1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1　東京大学埋蔵文化財調査室
堀内秀樹ほか　1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学埋蔵文化財調査室
松澤　修　1976「（4）小結」『旗指古窯址群』島田市教育委員会ほか
松下善和　2005「遺跡の概要」『相良城址』相良町教育委員会
溝口彰啓　2003『すやん沢古窯跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
山本宏司　2000「駿府城二ノ丸御殿・台所出土の陶磁器」『織豊城郭』第7号
鷲山恭平　1930　「窯址」『静岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第6集
河合　修　2001「青灰色のうつわ」『研究紀要』第8号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
河合　修　2007「志戸呂窯」『中世窯業の諸相』補遺編　全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

附載　上志戸呂古窯等出土陶器の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

島田市(旧金谷町)に所在する上志戸呂古窯は、大井川中流域右岸に分布する丘陵の南端部斜面上に位置する。発掘調査資料によれば、この付近の大井川沖積低地に面する丘陵斜面上には、10世紀頃から現代に至るまで連綿と窯が営まれているとされている。上志戸呂古窯は、その中でも16世紀後半に築かれたとされ、それ以前の中世における古志戸呂窯とそれ以後の近世志戸呂窯との間の時期に相当し、志戸呂窯の変遷を考える上でも重要な古窯とされている。

本報告では、上志戸呂古窯出土品の材質(すなわち胎土)の特性を、岩石学的手法(薄片作製鑑定)および化学的手法(蛍光X線分析)を用いることにより明らかにし、上志戸呂古窯の性格に関わる基礎資料を作成する。また、同時に釉薬の材質についても蛍光X線分析による化学組成を求め、上志戸呂古窯の資料とする。

1. 試料

上志戸呂古窯より出土した遺物については、陶器片21点と窯道具2点の合計23点(試料番号1～23)、対照試料として、神座、三ツ沢、旗指(伊太口)、すやん沢、ほろん沢Bの各古窯から出土した陶器片および窯道具合計14点(試料番号24～37)が対象とされた。対照試料とされた各古窯出土試料の点数は、神座古窯は陶器片6点と窯道具1点、三ツ沢古窯は陶器片4点、旗指古窯、すやん沢、ほろん沢Bの各古窯は陶器片各1点ずつである。

上志戸呂古窯出土試料には、天目茶碗、筒形碗、丸皿、壺、徳利、擂鉢、甕などが含まれ、神座古窯出土試料には同様に、筒形碗、丸皿、徳利、擂鉢、甕など、三ツ沢古窯出土試料は、天目茶碗、縁釉小皿、擂鉢であり、旗指古窯出土試料は無釉の小碗、すやん沢およびほろん沢Bの各古窯出土試料は、無釉のいわゆる山茶碗である。なお、対照試料の出土した古窯のうち、神座古窯は、上志戸呂古窯とほぼ同時期の窯とされているが、上志戸呂古窯とは大井川を挟んで対岸の左岸側に広がる丘陵上に位置している。一方、三ツ沢古窯は、上志戸呂古窯と同じ大井川右岸の丘陵上に位置しているが、その時期は、上志戸呂古窯より100年ほど古い西暦1400年代の末頃とされている。旗指古窯は大井川の左岸側の丘陵上に位置し、その年代は11～12世紀までとされている(島田市教育委員会編, 1976)。また、すやん沢およびほろん沢Bの各古窯は、上志戸呂古窯と同じ大井川右岸の丘陵上に位置しているが、その年代は、上志戸呂古窯より古い13世紀とされている。

今回の分析試料の一覧を表1に示す。今回の分析では、発掘調査所見により、薄片作製鑑定に31点、蛍光X線分析に16点の試料が選択され、釉薬の分析には22点の試料が選択された。なお、釉薬の分析では、そのうちの7点の試料について、灰釉と錆地または灰釉と錆釉または鉄釉と錆釉の2部分を測定することから、測定点数としては29点となる。各分析に選択した試料も表1に示す。

2. 分析方法

(1)薄片作製鑑定

ここでは、松田ほか(1999)の方法を用いる。この方法は、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べるものである。

表1　試料一覧および胎土分類結果

試料番号	遺跡名	注記	器種名	釉薬		胎土薄片作製鑑定	胎土蛍光X線分析	釉薬分析	胎土分類													
									岩石片					粗←粒径組成→細						化学組成	総合
				外面	内面				A	B	C	D	E	1	2'	2	3'	3	4		
1	上志戸呂	TKS	天目茶碗	鉄釉	鉄釉	1		1		■							■			上志戸呂	B3'
2	上志戸呂	TKS	天目茶碗	錆地灰釉かけ	錆地灰釉かけ			1(灰釉)・1(錆地)													—
3	上志戸呂	TKS	天目茶碗	灰釉	灰釉			1													—
4	上志戸呂	TKS	筒形碗	鉄釉	鉄釉	1	1	1		■							■				B3'
5	上志戸呂	TKS	筒形碗	灰釉	灰釉	1													■		C4
6	上志戸呂	TKS	丸皿	灰釉		1	1	1										■			C3
7	上志戸呂	TKS	丸皿	錆地灰釉かけ	錆地灰釉かけ			1(灰釉)・1(錆地)													—
8	上志戸呂	TKS	丸皿	鉄釉		1				■				■							B1
9	上志戸呂	TKS	丸皿	灰釉？		1				■									■		B4
10	上志戸呂	TKS	中皿	錆地灰釉かけ	錆地灰釉かけ	1		1(灰釉)・1(錆地)		■						■					B2
11	上志戸呂	TKS	向付	鉄釉		1		1		■								■			B3
12	上志戸呂	TKS	大皿	錆釉		1		1	■								■				A3'
13	上志戸呂	TKS	小壺	灰釉		1		1	■									■			A3
14	上志戸呂	TKS	小壺	鉄釉		1			■									■			A3
15	上志戸呂	TKS	短頸壺	錆地灰釉かけ		1		1(灰釉)・1(錆地)	■							■					A2
16	上志戸呂	TKS	徳利(千段巻)	灰釉	錆釉	1		1(灰釉)・1(錆釉)	■										■		A4
17	上志戸呂	TKS	徳利	鉄釉	錆釉	1						■						■			D3
18	上志戸呂	TKS	擂鉢Ⅰ類	錆釉	錆釉	1	1	1			■					■					C2
19	上志戸呂	TKS	桶	錆釉		1						■						■			D3
20	上志戸呂	TKS	甕	錆釉		1	1				■			■							C1
21	上志戸呂	TKS	茶壺	鉄釉		1		1		■						■					B2
22	上志戸呂	TKS	窯道具(匣鉢)	—	—	1	1		■								■				A3'
23	上志戸呂	TKS	窯道具(輪ドチ)	—	—	1			■									■			A3
24	神座		筒形碗	鉄釉		1	1	1	■							■				神座	A2
25	神座		丸皿	錆地灰釉かけ		1	1	1(灰釉)・1(錆地)				■					■				D3'
26	神座		徳利(千段巻)	灰釉		1		1				■			■						D2'
27	神座		徳利	鉄釉	錆釉　切断可	1		1(鉄釉)・1(錆釉)	■							■					A2
28	神座		擂鉢Ⅰ類	錆釉	錆釉	1	1	1		■					■						B2'
29	神座		甕	錆釉		1	1			■								■			B3
30	神座		窯道具(匣鉢)	—	—	1	1					■			■						D2'
31	三ツ沢	三ツ沢	天目茶碗	鉄釉		1	1	1				■				■				三ツ沢	D2
32	三ツ沢	三ツ沢	緑釉小皿	鉄釉→切断		1	1	1				■					■				D3'
33	三ツ沢	三ツ沢	緑釉小皿		灰釉	1		1	■									■			A3
34	三ツ沢	三ツ沢	擂鉢	—	—	1	1						■	■							E1
35	旗指(伊太口)		小碗	—	—		1													中世	—
36	すやん沢		山茶碗	—	—		1														—
37	ほろん沢B		山茶碗	—	—		1														—
					合計	31	16	29													

<胎土分類>

岩石片　A：チャートを多く含み、少量の多結晶石英を伴う。
B：チャートを多く含み、少量の多結晶石英を伴い、砂岩および流紋岩・デイサイトまたはいずれか一方を微量含む。
C：チャートを多く含み、少量の多結晶石英を伴い、凝灰岩を少量または微量含む。試料によっては少量または微量の砂岩および流紋岩・デイサイトを含む。
D：チャートを多く含み、少量の多結晶石英を伴い、花崗岩類を微量含む。試料によっては少量または微量の砂岩および流紋岩・デイサイトを含む。
E：チャートを多く含み、少量の多結晶石英と砂岩を伴い、微量の凝灰岩、花崗岩類を含む。

粒径組成　1：中粒砂をモードとする
2'：細粒砂をモードとし、その割合が30%を超える。
2：細粒砂をモードとする。
3'：極細粒砂をモードとし、その割合が30%を超える。
3：極細粒砂をモードとする。
4：粗粒シルトをモードとする。

化学組成　上志戸呂：今回の基準
神　座：SiO_2・Al_2O_3・Fe_2O_3は高く、CaO・Na_2O・Rb・Sr・Zr・Baは低い。
三ツ沢：SiO_2・Al_2O_3は上志戸呂と神座の中間、CaOは低く、TiO_2・Fe_2O_3・MgOはほぼ同様、Rb・Sr・Zr・Baは上志戸呂と神座の中間。
中　世：SiO_2・Al_2O_3・K_2O・Fe_2O_3は高く、CaO・Na_2O・Sr・Zr・Baは低い。

この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

（２）胎土の蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析を行う。

a)測定元素

測定元素はSiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の10元素およびLOIとRb、Sr、Zr、Baの微量４元素である。

b)装置

理学電機工業社製RIX1000(FP法のグループ定量プログラム)

c)試料調製

試料を振動ミル(平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイト容器)で微粉砕し、105℃で４時間乾燥する。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成する。なお、胎土表面に塗彩または釉薬が確認される試料については、これらを除去し、試料として供する。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率；融剤(ホウ酸リチウム)5.000ｇ:試料0.500ｇ

剥離剤；LiI(溶融中１回投入)

溶融温度；1200℃　約７分

d)測定条件

X線管；Cr(50Kv－50mA)

スペクトル；全元素Kα

分光結晶；LiF, PET, TAP, Ge

検出器；F-PC, SC

計数時間；PeaK40sec, Back20sec

（３）釉薬の蛍光X線分析

釉薬の分析に用いた装置はセイコーインスツルメンツ株式会社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置(SEA2120L)である。なお、測定は釉薬部分のほかに、比較として胎土部分についても行う。

得られた特性X線スペクトルは元素定性を実施した後、ノンスタンダードによるFP法(ファンダメンタルパラメーター法)により、定量演算を行い、相対含有率(質量％)を算出する。なお、本装置による定量可能元素は$_{11}$Naから$_{92}$Uの範囲にある元素であり、これら範囲外の元素についてはFP法による定量演算に利用することが出来ないこと、また半定量的に相対含有率を算出しているが、実際にはどの程度の深さまでX線が進入しているのか不確実な部分もあり(例えば表面の釉薬のみから発生した特性X線を検出しているのか、あるいは釉薬より下の胎土の材質も含めた特性X線を検出しているのか)、結果の評価には注意する必要がある。本分析における測定条件の詳細については、表２に示す。

表２　エネルギー分散型蛍光X線分析測定条件

測定装置	SEA2120L	
管球ターゲット元素	Rh	
コリメータ	φ10.0㎜	
フィルター	なし	
マイラー	OFF	
雰囲気	真空	
励起電圧(kV)	15	50
管電流(μA)	自動設定	自動設定
測定時間(秒)	300	300
定性元素	Na～Ca	Sc～U

３．結果

（１）薄片作製鑑定

結果を表３、図１～３に示す。上志戸呂、神座、

三ツ沢の各古窯出土の試料は、いずれも砂粒の種類構成が互いに類似し、大きく異なるものは認められない。鉱物片の主体は石英であり、これに微量のジルコンや不透明鉱物が認められる。また、試料によっては微量のカリ長石、斜長石、黒雲母なども認められる。一方、岩石片は、いずれの試料もチャートを比較的多く含み、少量の多結晶石英を伴うことが特徴と言える。ただし、試料によっては、少量または微量の砂岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類を含み、それらの岩石片の産状から、以下に示すA～E類までの5種類に分類することができる。

A類:チャートと多結晶石英以外の岩片は含まれない。

B類:微量の砂岩および流紋岩・デイサイトまたはいずれか一方を含む。

C類:凝灰岩を少量または微量含み、試料によっては少量または微量の砂岩および流紋岩・デイサイトを含む。

D類:微量の花崗岩類を含み、試料によっては少量または微量の砂岩および流紋岩・デイサイトを含む。

E類:少量の砂岩を含み、微量の凝灰岩と花崗岩類を含む。

各試料の分類結果は、試料表の表Ⅰに併記する。今回の試料だけを見れば、上志戸呂古窯出土試料は、A類とB類が多い傾向にあり、神座古窯はB類とD類、三ツ沢古窯はD類がそれぞれ多い傾向にある。

なお、いずれの試料にも、長石類の溶融と石英の高温クラックおよび素地のガラス化とムライト化が認められることから、1200℃以上の高温焼成であったことが推定される。

砂粒の量比は、20%前後の値を示す試料がほとんどであるが、それよりも砂粒の若干多い30%前後の値を示す試料が、試料番号11、22、28、31、34の5点あり、さらに多い40%前後の値を示す試料も試料番号18、20、30の3点ある。一方、逆に砂粒の量比が10%前後の試料も、試料番号13、25、33の3点認められる。

砂粒全体の粒径組成では、試料によってモードとなる粒径が、粗粒シルトから中粒砂までの間で異なっている。ここでは、中粒砂をモードとする組成を1類とし、順次細粒側に向かってモードとする粒径により、2～4類とする。なお、細粒砂をモードとする試料と極細粒砂をモードとする試料には、モードの割合が30%を超える(すなわち、モードとなる粒径への集中度が比較的高い組成と言える)組成が認められたことから、これらをそれぞれ2'類、3'類とした。各試料の分類結果は、試料表の表Ⅰに併記する。今回の試料だけを見れば、上志戸呂古窯出土試料は、3'類と3類が多い傾向にあり、神座古窯は2'類と2類、三ツ沢古窯は1類から3類までばらつく傾向にある。

以上述べた、薄片観察による総合的な胎土分類名としては、例えばA1のように表記することができる。各試料の胎土分類名を表1に示す。

(2)胎土の蛍光X線分析

結果を表4に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した(図4～8)。

a)化学組成中で最も主要な元素(SiO_2, Al_2O_3)

b)粘土の母材を考える上で長石類(主にカリ長石、斜長石)の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素であるCaO、Na_2O、K_2Oの3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合$(Na_2O+K_2O)/(CaO+Na_2O+K_2O)$を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合$K_2O/(Na_2O+K_2O)$を縦軸とする。

c)輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO_2、Fe_2O_3、MgOを選択し、Fe_2O_3を分母としたTiO_2、MgOの割合を見る。

表3　薄片観察結果(その1)

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成 鉱物片 石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	不透明鉱物	岩石片 チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	合計
1	砂 細礫								1					1
	極粗粒砂								1					1
	粗粒砂								1					1
	中粒砂	6					3				1	1		11
	細粒砂	12					3				1	7		23
	極細粒砂	29					12					3		44
	粗粒シルト	23				2	5							30
	中粒シルト	11												11
	基質													363
	孔隙													37
4	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	1												1
	中粒砂	3					1					1		5
	細粒砂	12		1			2					2		17
	極細粒砂	25									1	2		28
	粗粒シルト	18				1	1							20
	中粒シルト	8												8
	基質													214
	孔隙													36
5	砂 細礫													0
	極粗粒砂						1		1					2
	粗粒砂	2					1			1		1		5
	中粒砂	9					6					1		16
	細粒砂	21					6					4		31
	極細粒砂	27					7					2		36
	粗粒シルト	34					2					2		38
	中粒シルト	15												15
	基質													411
	孔隙													37
6	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	1							1			3		5
	中粒砂	3					3			1		1		8
	細粒砂	12					3					1		16
	極細粒砂	15					1					1		17
	粗粒シルト	12												12
	中粒シルト	5												5
	基質													212
	孔隙													72
8	砂 細礫													0
	極粗粒砂												1	1
	粗粒砂						1					1		2
	中粒砂	11					6		2			5		24
	細粒砂	10					3					3		16
	極細粒砂	19					3					1		23
	粗粒シルト	20					2							22
	中粒シルト	9												9
	基質													370
	孔隙													60
9	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	1					3		2					6
	中粒砂	4										4		8
	細粒砂	10					4					5		19
	極細粒砂	15					5					2		22
	粗粒シルト	18				1	4					1		24
	中粒シルト	11												11
	基質													272
	孔隙													24
10	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	1					2		1			2		6
	中粒砂	12					7					6		25
	細粒砂	32					13					11		56
	極細粒砂	33					14					1		48
	粗粒シルト	38				1	4							43
	中粒シルト	22												22
	基質													560
	孔隙													35
11	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	1					2							3
	中粒砂	10					6		1		1	4		22
	細粒砂	16					12					3		31
	極細粒砂	28					8					2		38
	粗粒シルト	30					2							32
	中粒シルト	16												16
	基質													332
	孔隙													28

試料	砂粒区分	砂粒の種類構成 鉱物片 石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	不透明鉱物	岩石片 チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	合計
12	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	2										1		3
	中粒砂	11					7					6		24
	細粒砂	22					22					2		46
	極細粒砂	46					13							59
	粗粒シルト	31					2							33
	中粒シルト	22												22
	基質													611
	孔隙													24
13	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	1					5					1		7
	中粒砂	6										2		8
	細粒砂	10					1					1		12
	極細粒砂	12					1							13
	粗粒シルト	12												12
	中粒シルト	3												3
	基質													284
	孔隙													86
14	砂 細礫													0
	極粗粒砂						1							1
	粗粒砂	1					2							3
	中粒砂	3					4					6		13
	細粒砂	10					7					5		22
	極細粒砂	21					3					1		25
	粗粒シルト	23					1							24
	中粒シルト	13												13
	基質													371
	孔隙													21
15	砂 細礫						1							1
	極粗粒砂													0
	粗粒砂											2		2
	中粒砂	8					5					1		14
	細粒砂	12					6					1		19
	極細粒砂	14					1					2		17
	粗粒シルト	16												16
	中粒シルト	9												9
	基質													282
	孔隙													22
16	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂											4		4
	中粒砂	4										1		5
	細粒砂	6					6					2		14
	極細粒砂	11			1		7							19
	粗粒シルト	22					1							23
	中粒シルト	15				1								16
	基質													284
	孔隙													91
17	砂 細礫													0
	極粗粒砂									1				1
	粗粒砂	2					1					1		4
	中粒砂	7					3						1	11
	細粒砂	12					4			1			2	19
	極細粒砂	18					2							20
	粗粒シルト	15					2							17
	中粒シルト	6				1								7
	基質									1				198
	孔隙													38
18	砂 細礫								1					1
	極粗粒砂								1					1
	粗粒砂	5					2		2	1		1		11
	中粒砂	10					3		1	2		4		20
	細粒砂	19					3			11	1	5		39
	極細粒砂	24					5			5		3		37
	粗粒シルト	21					1					1		23
	中粒シルト	15												15
	基質													160
	孔隙													16
19	砂 細礫													0
	極粗粒砂													0
	粗粒砂	6					4					2	1	13
	中粒砂	7					3					2		12
	細粒砂	19					7					5	1	32
	極細粒砂	41			1	1	3					3		49
	粗粒シルト	35				2	4					2		43
	中粒シルト	23				1								24
	基質													538
	孔隙													31

表3　薄片観察結果(その2)

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成 鉱物片 石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	不透明鉱物	岩石片 チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	合計
20	砂	細礫											1		1
		極粗粒砂								1					1
		粗粒砂	2					1					2		5
		中粒砂	18		1			10		1	7	1	10		48
		細粒砂	20	1	1	1		11			7		10		45
		極細粒砂	30					6			1		4		41
		粗粒シルト	36					1					1		38
		中粒シルト	21												21
	基質														309
	孔隙														15
21	砂	細礫													0
		極粗粒砂								1					1
		粗粒砂	1					1				2			4
		中粒砂	10					6					3		19
		細粒砂	18					8					6		32
		極細粒砂	15					6					1		22
		粗粒シルト	19				1	1							21
		中粒シルト	17				1								18
	基質														367
	孔隙														17
22	砂	細礫													0
		極粗粒砂													0
		粗粒砂	1										1		2
		中粒砂	19					5					7		31
		細粒砂	28					12					11		51
		極細粒砂	46					11					2		59
		粗粒シルト	38					2							40
		中粒シルト	17												17
	基質														370
	孔隙														41
23	砂	細礫													0
		極粗粒砂						1					1		2
		粗粒砂	3					4					4		11
		中粒砂	17					6					11		34
		細粒砂	30					3					5		38
		極細粒砂	42										1		43
		粗粒シルト	21				2								23
		中粒シルト	10												10
	基質														429
	孔隙														131
24	砂	細礫													0
		極粗粒砂						1							1
		粗粒砂	5					1					3		9
		中粒砂	13										7		20
		細粒砂	22					2					3		27
		極細粒砂	24					1					1		26
		粗粒シルト	20												20
		中粒シルト	4												4
	基質														399
	孔隙														94
25	砂	細礫													0
		極粗粒砂													0
		粗粒砂											1	1	2
		中粒砂	6										2		8
		細粒砂	10					4							14
		極細粒砂	12					4					2		18
		粗粒シルト	4												4
		中粒シルト	2												2
	基質														185
	孔隙														107
26	砂	細礫													0
		極粗粒砂						1	1					1	3
		粗粒砂	3					2					2		7
		中粒砂	11					3					6		20
		細粒砂	31					6					5		42
		極細粒砂	23					4					1		28
		粗粒シルト	13												13
		中粒シルト	10												10
	基質														353
	孔隙														60
27	砂	細礫													0
		極粗粒砂													0
		粗粒砂	5										3		8
		中粒砂	14					4					5		23
		細粒砂	19					4					4		27
		極細粒砂	21					2					3		26
		粗粒シルト	15				1								16
		中粒シルト	7												7
	基質														452
	孔隙														51

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成 鉱物片 石英	カリ長石	斜長石	黒雲母	不透明鉱物	岩石片 チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	合計
28	砂	細礫													0
		極粗粒砂								1			1		2
		粗粒砂	7					3					4		14
		中粒砂	13	1	2			11					11		38
		細粒砂	40		4			7					10		61
		極細粒砂	34		2	1		12					2		51
		粗粒シルト	21				1	3							25
		中粒シルト	9												9
	基質														435
	孔隙														27
29	砂	細礫						1							1
		極粗粒砂											1		1
		粗粒砂	2							1			1		4
		中粒砂	9					7		1			10		27
		細粒砂	25					9					8		42
		極細粒砂	28			1	1	13					8		51
		粗粒シルト	36				1	4							41
		中粒シルト	32				1								33
	基質														535
	孔隙														61
30	砂	細礫						1							1
		極粗粒砂	1					1							2
		粗粒砂	13					4					7	1	25
		中粒砂	21					7					4	1	33
		細粒砂	45					15					5		65
		極細粒砂	25					7					1		33
		粗粒シルト	20												20
		中粒シルト	8												8
	基質														536
	孔隙														74
31	砂	細礫													0
		極粗粒砂						1							1
		粗粒砂						3					1	1	5
		中粒砂	6					9					8		23
		細粒砂	28					13					6		47
		極細粒砂	33					5					1		39
		粗粒シルト	27					2							29
		中粒シルト	17				2								19
	基質														358
	孔隙														44
32	砂	細礫													0
		極粗粒砂													0
		粗粒砂	1					1							2
		中粒砂	4					3					7	1	15
		細粒砂	13					6					6		25
		極細粒砂	29		1			3					1		34
		粗粒シルト	20					1							21
		中粒シルト	12												12
	基質														326
	孔隙														27
33	砂	細礫													0
		極粗粒砂						1							1
		粗粒砂						1							1
		中粒砂						3					1		4
		細粒砂	3					2					2		7
		極細粒砂	9					3							12
		粗粒シルト	11					1							12
		中粒シルト	7												7
	基質														314
	孔隙														123
34	砂	細礫								1					1
		極粗粒砂								1					1
		粗粒砂						4		1			5	1	11
		中粒砂	15	2	1			13		2	1		16		50
		細粒砂	25	2				11		1			10	1	50
		極細粒砂	39		1			6					3		49
		粗粒シルト	22				1	2							25
		中粒シルト	13												13
	基質														499
	孔隙														53

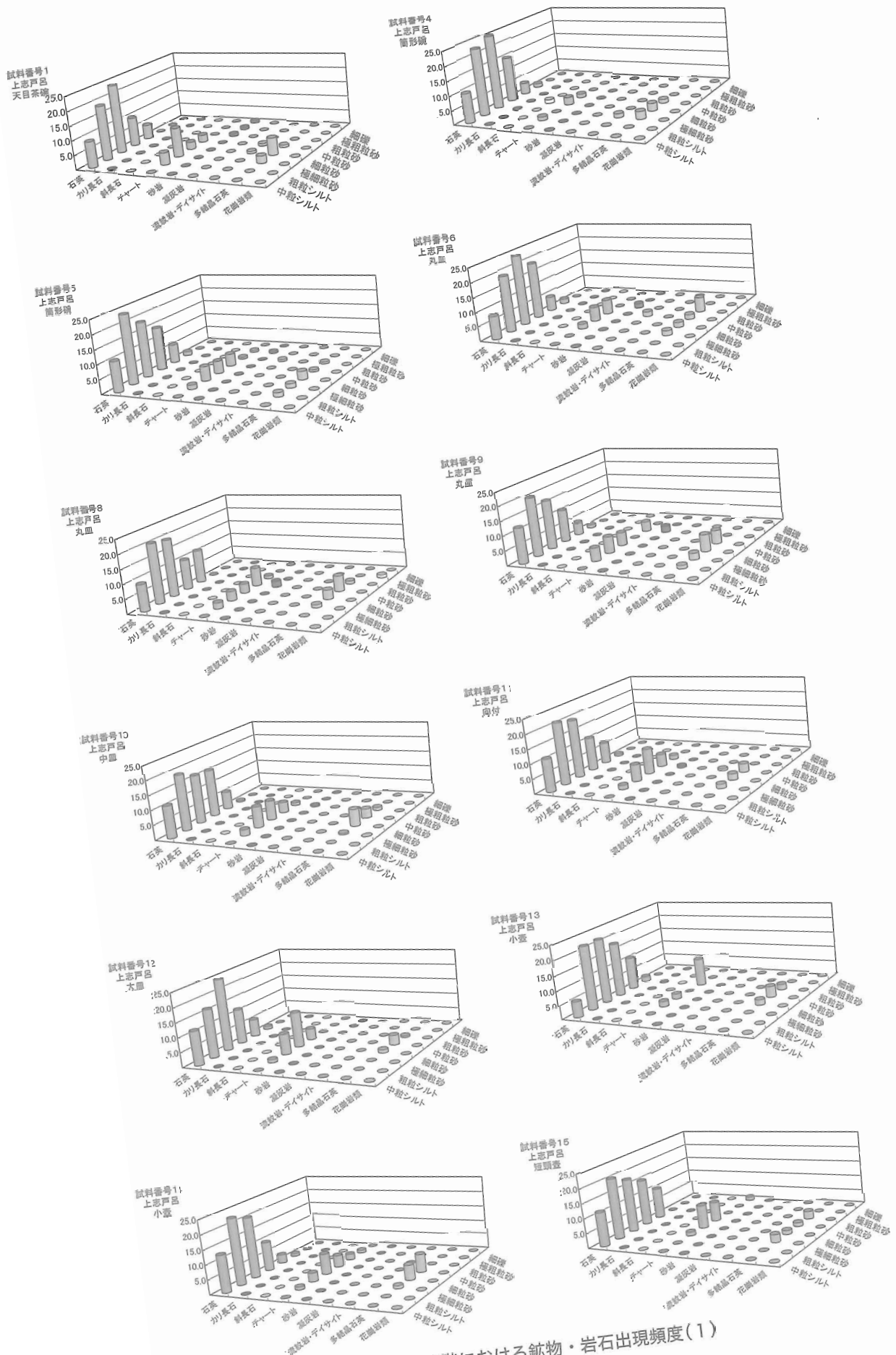


図1　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

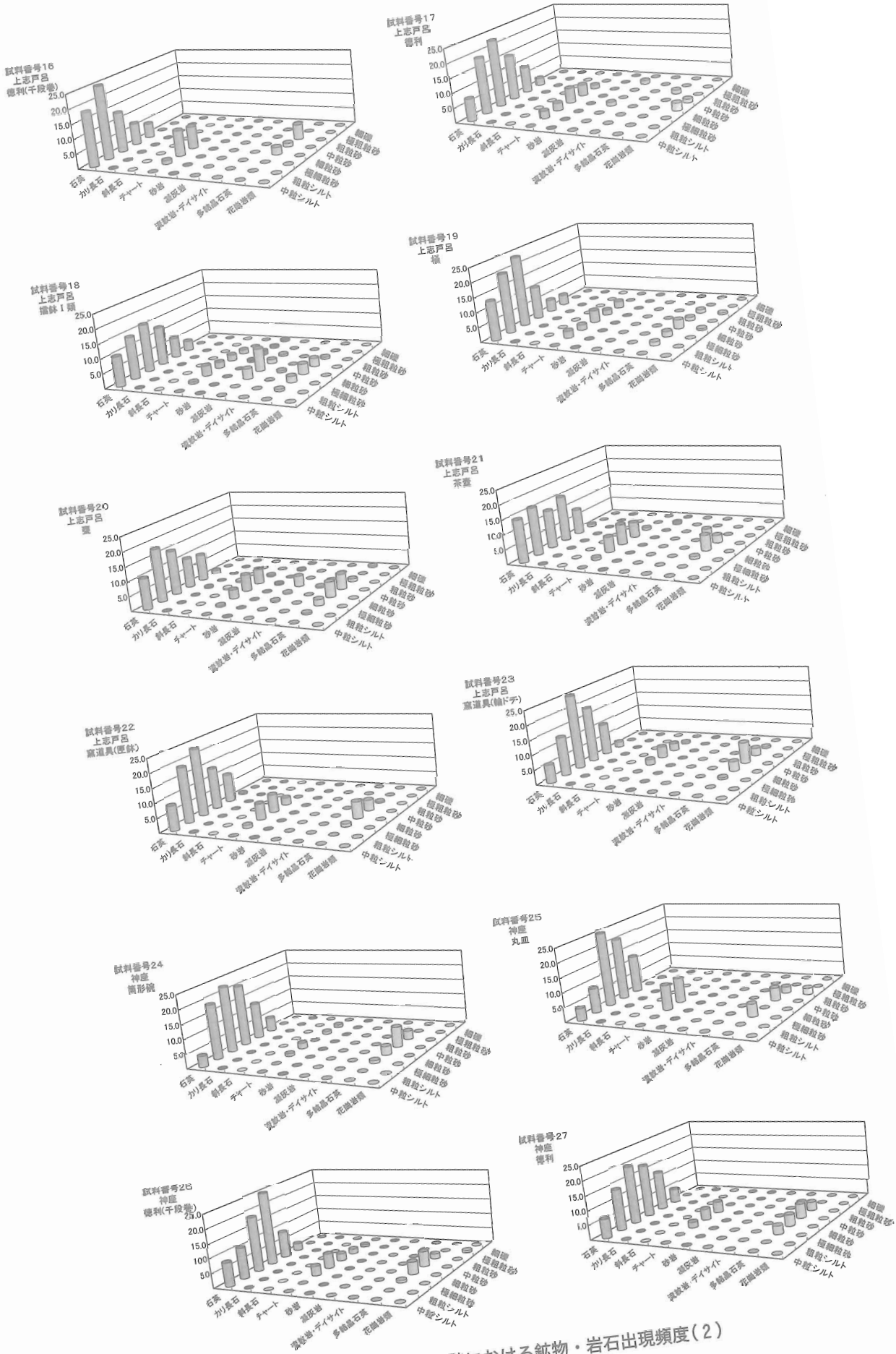


図1　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

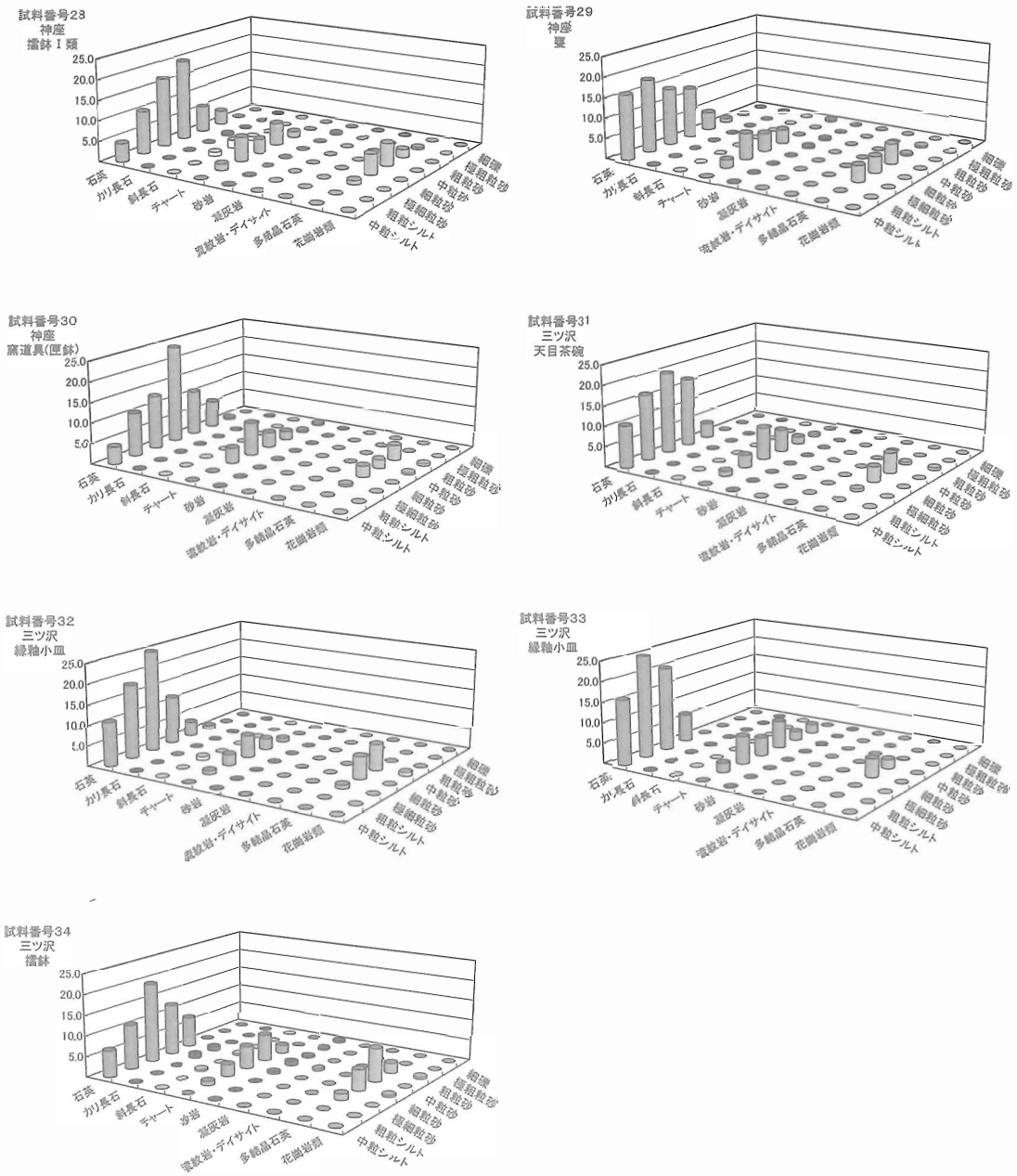


図１　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(３)

d)各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-SrとZr-Baとする。

また、これらの散布図では、窯跡ごとにそれぞれ異なる記号で示した。

作成した５つの散布図を概観すると、上志戸呂、神座、三ツ沢の各古窯出土試料の分布範囲は、部分的に重複するものの、その領域の位置は、各古窯によって有意に異なっていると見ることができる。また、旗指、すやん沢、ほろん沢B各古窯出土の３点は互いに近い組成を示し、かつ、上記３古窯出土試料の分布域とは比較的明瞭に区別される。

(３)釉薬の蛍光X線分析

分析結果を表５に示す。以下に釉ごとに述べる。

・鉄釉、錆釉、錆地(錆地灰釉かけ)

釉薬部分について元素分析を行った結果、胎土部分と比較して釉薬部分では酸化鉄(Fe_2O_3)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カルシウム(CaO)が多い傾向にあるほか、酸化マンガン(MnO)、リン酸

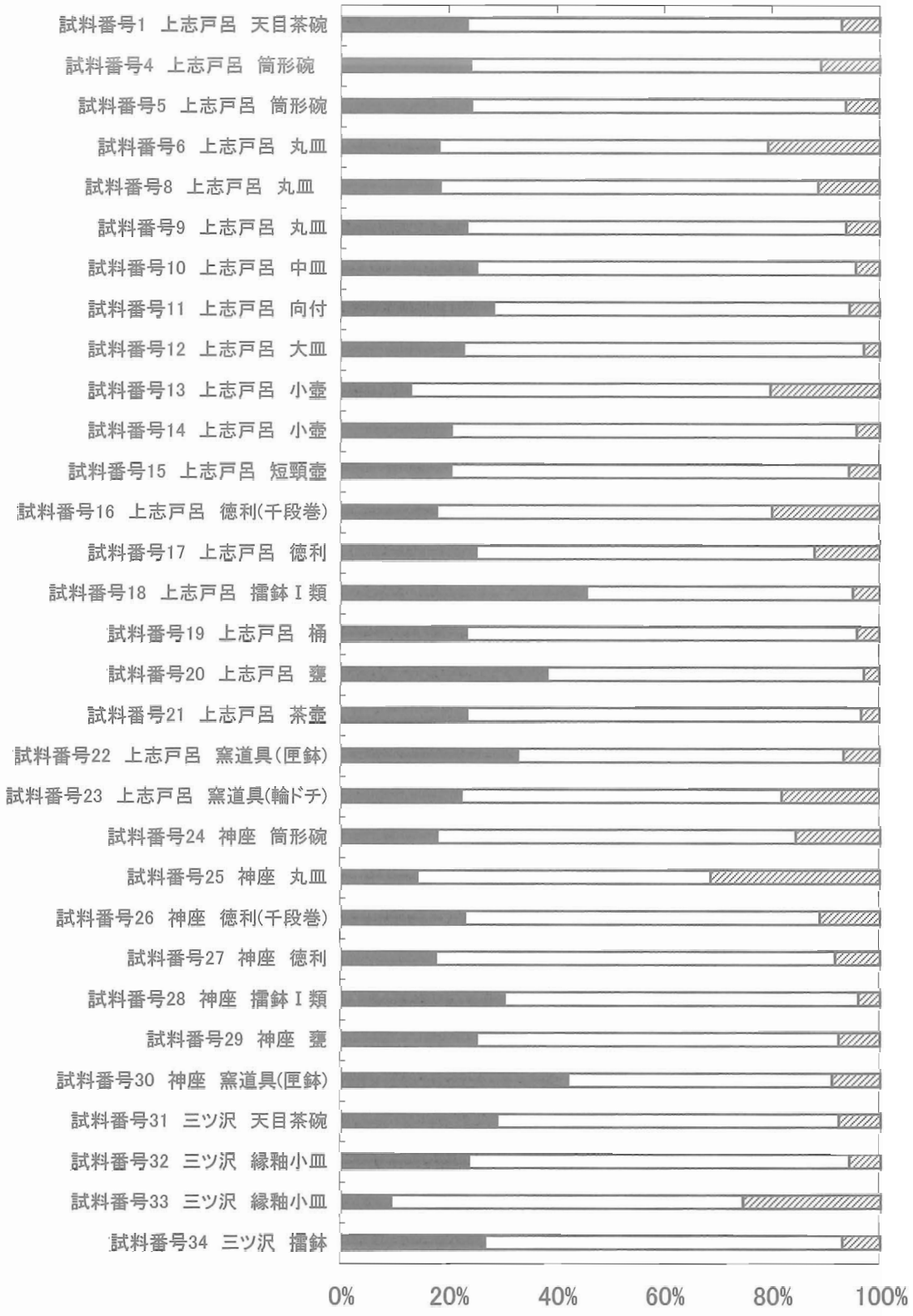


図2　砕屑物・基質・孔隙の割合

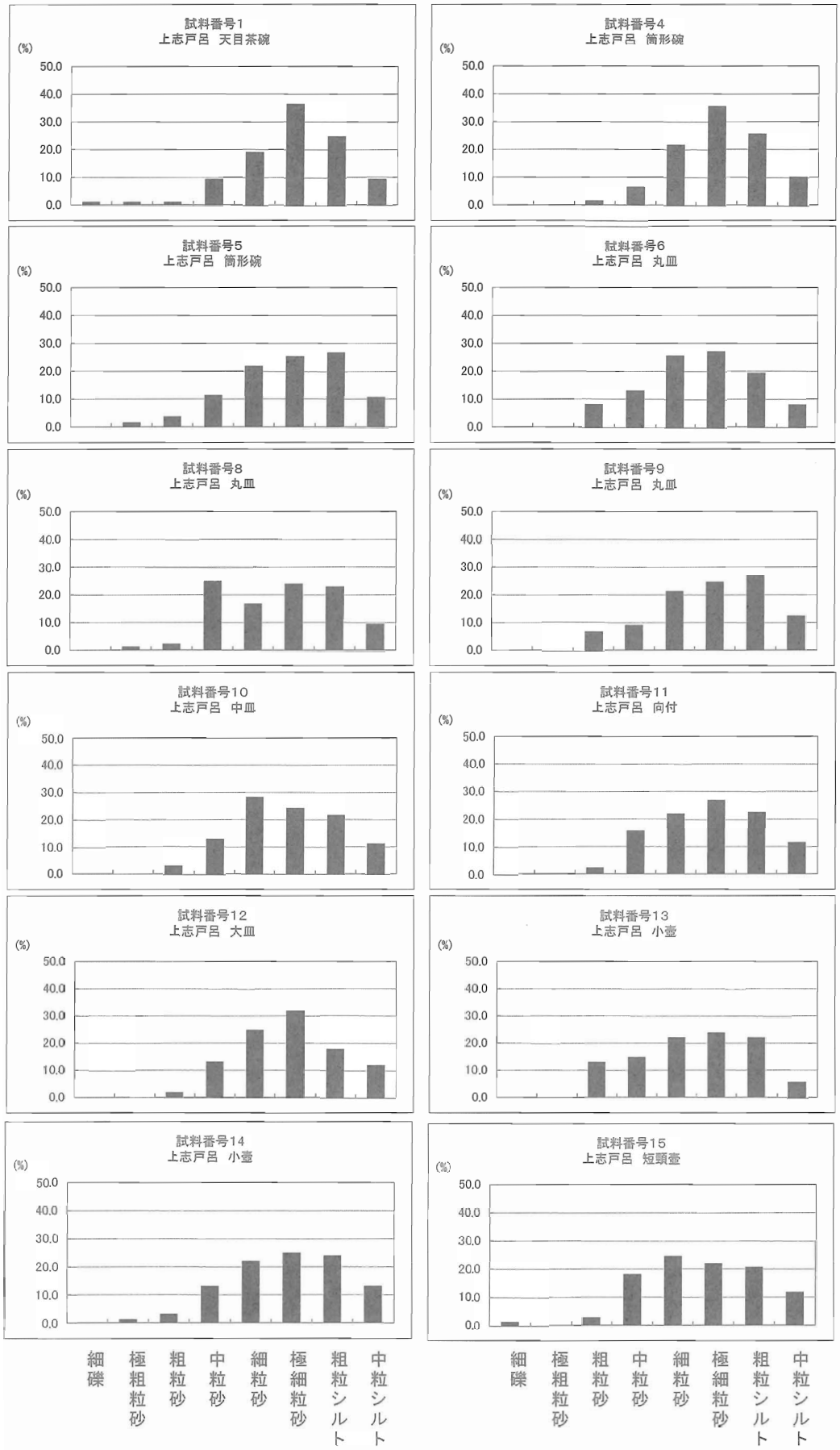


図３　胎土中の砂の粒径組織（１）

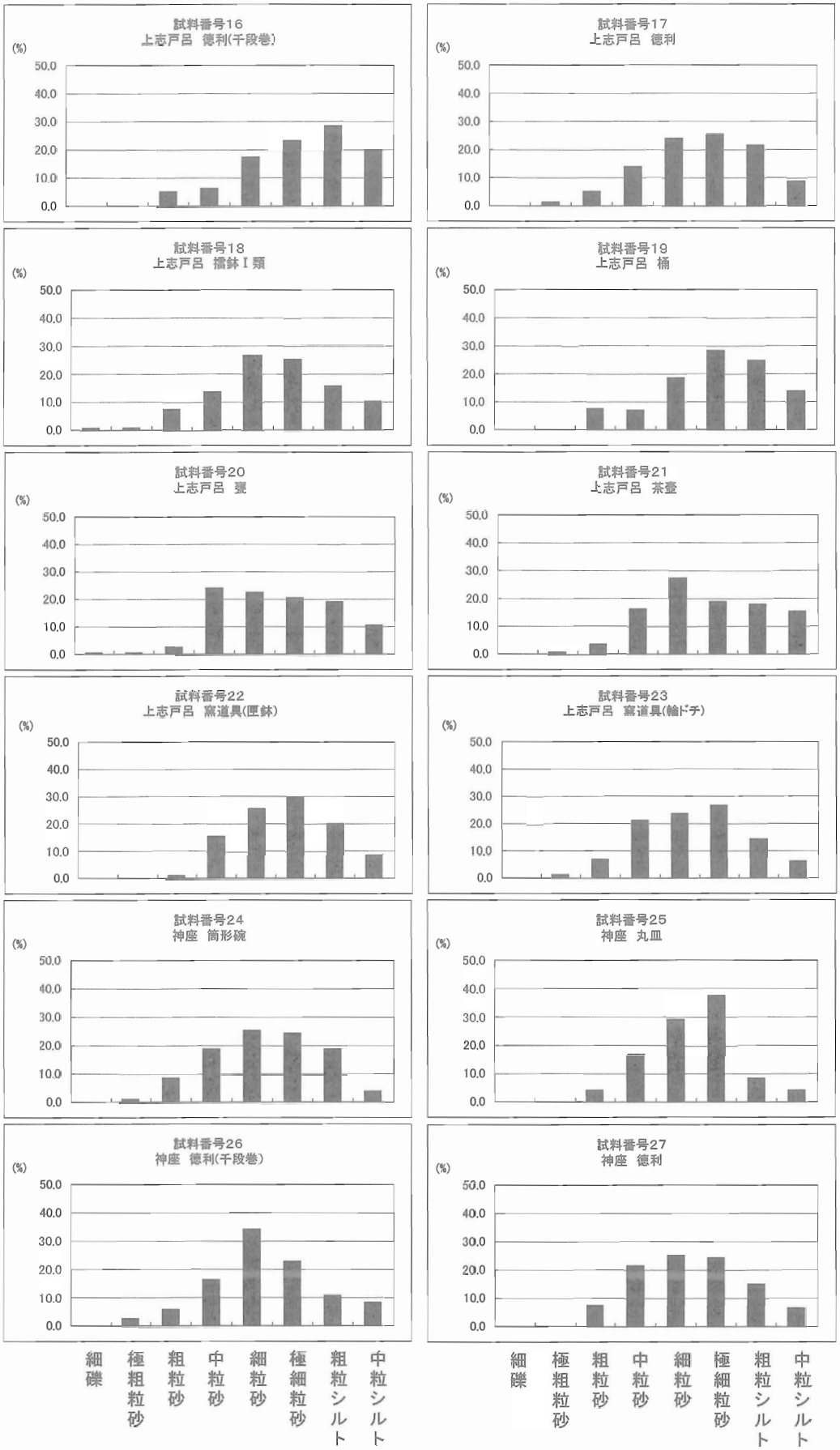


図3　胎土中の砂の粒径組織(2)

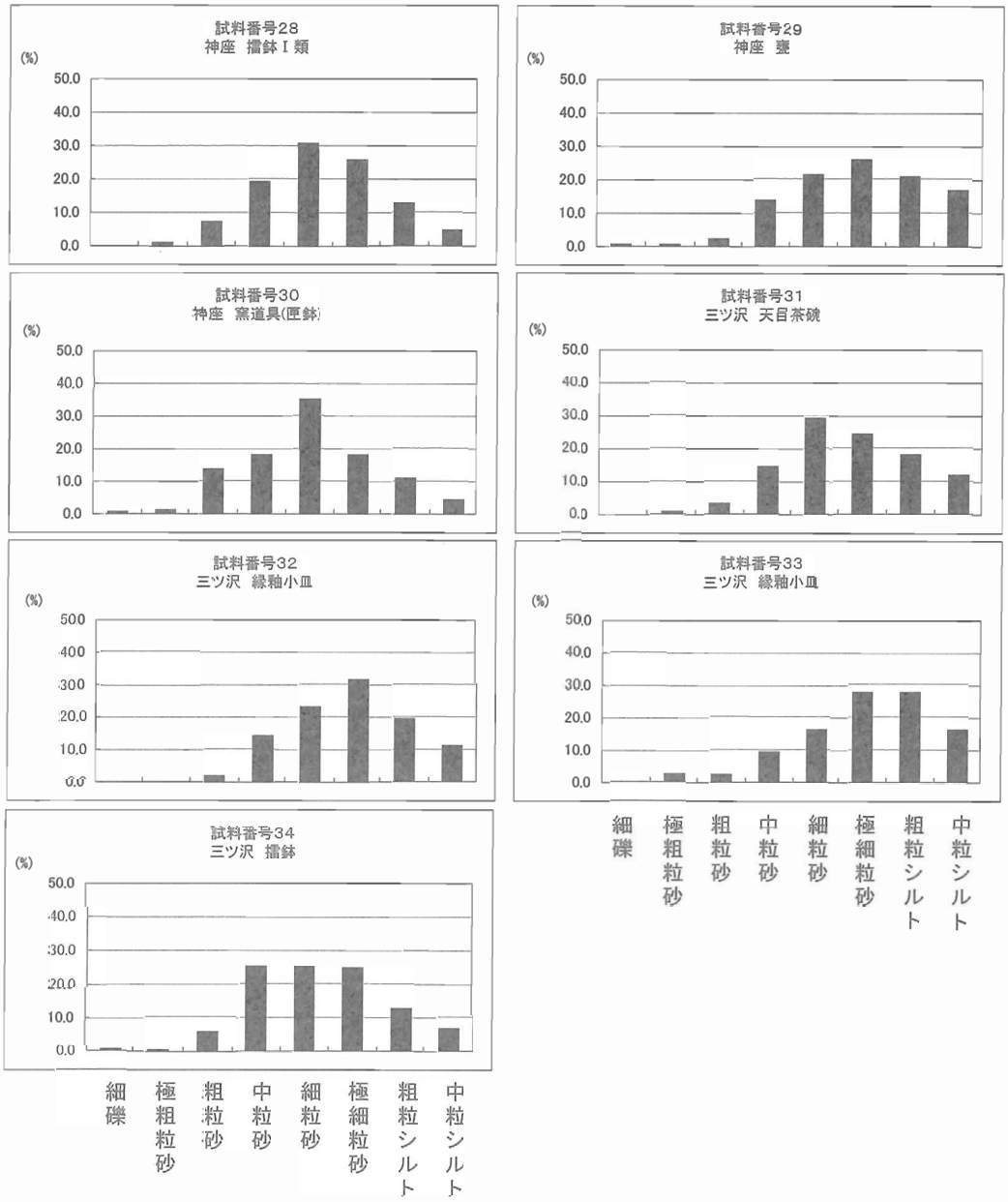


図３　胎土中の砂の粒径組織(３)

(P_2O_5)も僅かに多い。なお、鉄釉や錆釉(試料番号16を除く)とされる試料では鉄の含量が比較的多い特徴が認められているものの、錆地とされる試料では試料番号２を除き、鉄の含量はそれほど多い傾向にはない。

・灰釉

胎土部分と比較して釉薬部分では、酸化カルシウム(CaO)が多い傾向にあるほか、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、リン酸(P_2O_5)も僅かに多い。なお、試料番号２、３の灰釉では酸化鉄(Fe_2O_3)も多く含まれる特徴が認められる。

４．考察

(１)胎土について

薄片作製鑑定により胎土中に認められた鉱物片および岩石片の種類構成は、陶器原料となった粘土(ここでは地質学上の粒径区分による粘土ではなく、シルトや砂も含む「土」としての意味で用いる)の採

表4　胎土蛍光X線分析結果(化学組成)

遺跡名	試料番号	主要元素												微量元素			
		SiO_2 (%)	TiO_2 (%)	Al_2O_3 (%)	Fe_2O_3 (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na_2O (%)	K_2O (%)	P_2O_5 (%)	Ig.loss (%)	合計 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)
上志戸呂	4	73.63	0.71	14.69	2.68	0.02	0.92	0.34	1.85	2.45	0.03	2.69	100.00	111	104	264	549
	6	71.86	0.69	16.33	2.29	0.02	1.08	0.28	1.55	2.97	0.02	2.91	100.00	132	93	251	599
	18	70.97	0.72	16.59	2.39	0.01	0.94	0.18	1.19	2.88	0.02	4.11	100.00	135	66	238	516
	20	71.46	0.70	16.49	2.19	0.01	0.98	0.20	1.50	2.96	0.02	3.49	100.00	138	75	240	569
	22	73.35	0.62	15.30	2.47	0.01	0.87	0.18	1.26	2.77	0.02	3.15	100.00	126	67	262	502
神座	24	75.27	0.65	15.95	2.82	0.02	0.83	0.25	1.00	2.46	0.02	0.73	100.00	109	60	223	389
	25	73.67	0.68	16.15	2.78	0.02	0.97	0.28	1.09	3.13	0.02	1.21	100.00	122	67	225	449
	28	75.88	0.61	14.98	2.32	0.01	0.75	0.23	1.23	2.69	0.02	1.28	100.00	114	64	211	467
	29	73.13	0.77	17.26	3.04	0.01	1.04	0.26	1.15	3.04	0.02	0.28	100.00	136	70	230	476
	30	75.73	0.61	15.66	3.49	0.01	0.82	0.12	0.67	2.76	0.03	0.10	100.00	115	40	212	339
三ツ沢	31	75.94	0.60	15.42	1.88	0.01	0.98	0.18	1.69	2.96	0.02	0.32	100.00	125	79	227	541
	32	72.74	0.69	16.84	2.69	0.01	1.00	0.15	1.27	2.94	0.01	1.66	100.00	129	61	235	500
	33	74.27	0.60	15.03	2.41	0.01	0.97	0.14	1.54	2.94	0.02	2.07	100.00	127	66	208	464
旗指(伊太口)	35	70.82	0.79	18.38	2.96	0.01	1.04	0.12	0.87	3.04	0.04	1.94	100.00	141	61	207	388
すやん沢	36	68.70	0.79	18.86	3.92	0.02	1.19	0.10	0.52	2.80	0.03	3.07	100.00	132	42	222	320
ほろん沢B	37	69.99	0.74	17.37	3.38	0.01	1.06	0.11	1.19	3.24	0.02	2.89	100.00	140	55	216	368

取地の地質学的背景を示唆している。今回の薄片作製鑑定を行った試料については、いずれもほぼ同様の鉱物片・岩石片種類構成を示すことから、その原料採取地は、同一の地質学的背景を有する地域内にあると考えて良い。認められた鉱物片・岩石片のうち、特に地質を示す砕屑物は、チャートの岩石片である。また、砂岩や頁岩を伴う試料も散見されることから、粘土採取地は、チャートや砂岩、頁岩などの堆積岩類からなる地質の分布域内または近接地にあると推定される。

ここで、上志戸呂古窯の位置する大井川中流域両岸の地質を土(1986)などにより概観すると、両岸の山地および丘陵は、古第三紀の堆積岩類からなる瀬戸川層群という地質により構成されている。瀬戸川層群を構成する岩石については、杉山・下川(1981)によれば、砂岩・頁岩・チャートなどの堆積岩類を主体とし、石灰岩や凝灰岩も分布するとされている。このような上志戸呂古窯の位置する地域の地質学的背景は、今回の薄片鑑定結果とほぼ整合するとみることができる。なお、今回の分析で鑑定した流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類については、上述した杉山・下川(1981)や杉山ほか(1982)などの瀬戸川層群の記載には認められない。しかし、微量であることと、それらを含む試料の化学組成が、他の試料に比べて特に大きく異なるということは認められないことから、おそらく、異なる地質に由来するものではなく、瀬戸川層群中の砂岩を構成する砕屑物に含まれていたと考えられる。以上のことから、上志戸呂、神座、三ツ沢の各古窯出土試料の原料となった粘土の採取地は、古窯周辺の丘陵あるいは沖積低地にある可能性が高い。

薄片観察により、上志戸呂古窯出土試料の中には、岩石片の産状が異なる4種類の胎土が認められ、神座、三ツ沢の各古窯では、3種類の胎土を認めることができた。これは、古窯周辺の丘陵あるいは沖積低地内における粘土の採取地あるいは層位の違いが反映されていると考えられる。今後、古窯周辺の丘陵あるいは沖積低地の各所において、粘土や砂に含まれる岩石片の組成を調べることができれば、今回分類したA～Eの各類が示す、より局地的な地域性の推定が可能になることも考えられる。ただし、後述するように、窯ごとに胎土の違いがあると考えられることから、同じ岩石片組成でも、窯ごとにその採取地は異なることが推定される。

一方、胎土の蛍光X線分析では、各古窯ごとに組成の傾向が異なることが読み取れた。ここで、「組成」ではなく「組成の傾向」としたのは、結果で述べたように、散布図における各古窯出土試料の分布す

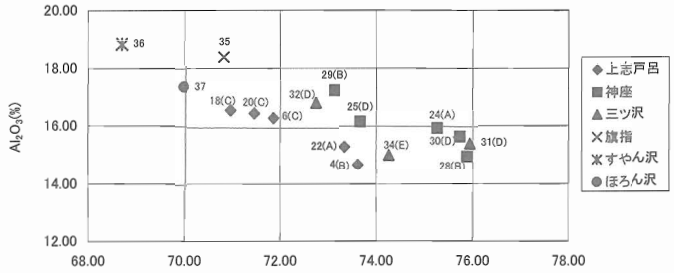


図4. SiO2-Al2O3散布図

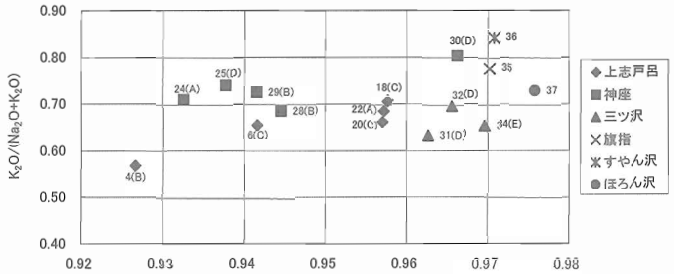


図5. 長石類主要元素の散布図　$(Na_2O+K_2O)/(CaO+Na_2O+K_2O)$

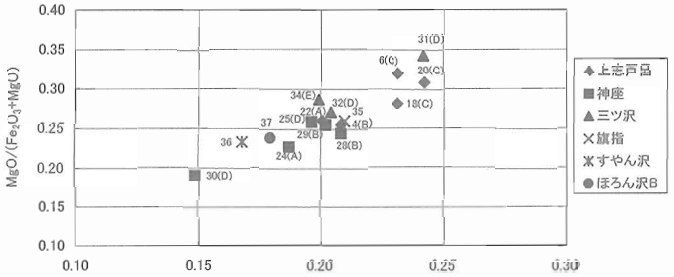


図6. 有色鉱物主要元素の散布図　$TiO_2/(Fe_2O_3+TiO_2)$

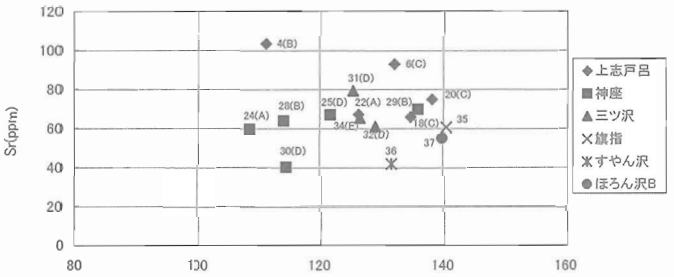


図7. Rb-Sr散布図　Rb(ppm)

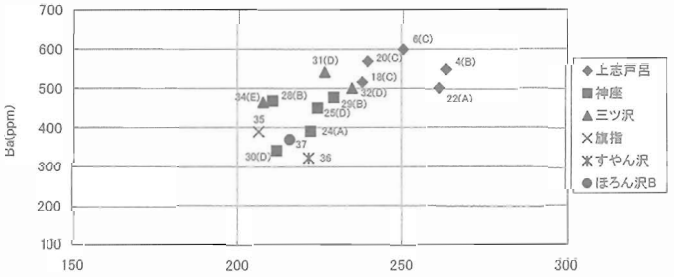


図8. Zr-Ba散布図　Zr(ppm)

表5　釉薬の蛍光X線分析結果

試料番号	測定部位	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	SO_3	CuO	ZnO	Rb_2O	SrO	Y_2O_3	ZrO_2	BaO
1	鉄釉	60.60	0.64	17.02	7.79	0.25	3.02	4.75	1.73	3.15	0.76	0.12	0.02	0.01	0.01	0.05	-	0.04	0.04
	胎土	67.86	0.74	19.78	3.41	0.03	2.20	0.62	1.37	2.86	0.51	0.46	0.01	0.02	0.02	0.02	-	0.04	0.06
2	灰釉	63.64	1.01	12.59	8.07	0.26	2.45	6.66	0.10	2.79	1.85	0.32	0.02	0.02	0.02	0.05	-	0.06	0.08
	錆地	59.51	1.02	14.37	8.58	0.32	4.36	5.35	1.72	3.08	1.17	0.26	0.02	0.02	0.03	0.05	0.01	0.06	0.08
	胎土	64.73	0.77	22.22	3.40	0.06	2.39	0.52	1.70	2.91	0.63	0.53	0.01	0.01	0.02	0.02	-	0.04	0.06
3	灰釉	55.84	0.74	14.94	8.19	0.36	3.80	9.94	1.39	2.73	1.32	0.46	0.02	0.01	0.01	0.09	-	0.05	0.09
	胎土	65.56	0.76	21.15	3.31	0.06	2.40	0.76	1.58	2.81	0.71	0.65	0.01	0.01	0.02	0.03	-	0.05	0.10
4	鉄釉	59.90	0.52	15.31	7.72	0.31	3.20	8.39	1.79	1.67	0.88	0.05	0.02	-	0.01	0.08	-	0.04	0.09
	胎土	69.85	0.70	18.17	3.13	0.04	2.08	0.54	2.02	2.48	0.49	0.34	0.01	0.01	0.01	0.02	-	0.04	0.05
6	灰釉	62.80	0.59	16.98	2.42	0.28	3.54	8.63	1.66	2.13	0.74	-	0.01	-	0.01	0.08	-	0.03	0.09
	胎土	68.92	0.77	19.50	2.81	0.05	2.23	0.51	1.72	2.99	0.18	0.12	0.01	0.01	0.02	0.02	-	0.05	0.08
7	灰釉	60.82	0.66	18.10	4.21	0.33	3.95	6.98	1.62	2.37	0.78	-	0.01	0.01	0.01	0.06	-	0.03	0.04
	錆地	62.49	0.75	20.92	4.45	0.15	3.41	2.38	1.67	2.96	0.60	0.11	0.01	0.01	0.02	0.02	-	0.04	0.02
	胎土	65.99	0.72	22.70	3.27	0.03	2.24	0.14	1.00	2.81	0.50	0.47	0.01	0.01	0.01	0.01	-	0.04	0.04
10	灰釉	58.91	0.70	16.78	3.90	0.31	3.57	10.56	1.34	2.59	0.96	0.15	0.02	-	0.01	0.09	-	0.03	0.06
	錆地	59.80	0.99	21.51	5.38	0.15	2.98	3.32	1.15	3.12	0.75	0.68	0.01	0.02	0.02	0.02	-	0.05	0.05
	胎土	68.15	0.74	19.77	3.69	0.04	1.99	0.70	1.03	2.84	0.49	0.41	-	-	0.02	0.02	-	0.04	0.07
11	鉄釉	58.17	0.69	18.10	9.12	0.25	3.38	5.02	1.66	2.73	0.50	0.20	0.02	0.01	0.02	0.05	0.01	0.05	0.03
	胎土	62.38	0.95	24.34	4.65	0.03	2.36	0.24	0.87	2.80	0.65	0.52	-	0.01	0.03	0.01	0.01	0.06	0.09
12	錆釉	61.39	0.75	19.83	6.42	0.13	3.06	2.05	1.79	3.60	0.65	0.16	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.05	0.05
	胎土	69.53	0.75	20.61	2.87	0.01	1.99	0.14	0.95	2.97	0.06	-	0.01	0.01	0.02	0.01	-	0.04	0.02
13	灰釉	62.86	0.57	17.29	3.35	0.34	3.71	7.54	1.36	2.15	0.61	0.02	0.01	-	0.01	0.07	-	0.03	0.07
	胎土	68.66	0.78	19.35	3.30	0.04	2.12	0.56	1.50	2.72	0.47	0.31	0.01	0.01	0.02	0.03	0.01	0.05	0.07
15	灰釉	58.06	0.64	18.16	3.35	0.41	4.15	10.33	1.75	2.08	0.85	-	0.01	-	0.01	0.09	-	0.03	0.09
	錆地	61.53	0.92	25.04	3.69	0.02	2.49	0.27	1.29	3.52	0.58	0.47	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.05	0.06
	胎土	67.11	0.87	21.76	2.75	0.02	2.26	0.11	1.50	3.01	0.27	0.21	0.01	0.01	0.02	0.01	0.01	0.04	0.03
16	灰釉	57.82	0.62	17.32	3.93	0.45	4.10	10.77	1.85	2.14	0.72	-	0.02	-	0.01	0.12	-	0.03	0.09
	錆釉	62.24	0.70	20.09	4.14	0.20	3.75	3.79	1.87	2.32	0.65	0.12	0.02	0.01	0.01	0.03	-	0.04	0.05
	胎土	68.47	0.71	19.18	3.31	0.05	2.16	0.63	1.67	2.83	0.47	0.35	0.01	0.01	0.02	0.03	-	0.04	0.07
18	錆釉	54.84	1.06	19.72	11.64	0.27	4.53	1.96	0.91	3.69	0.61	0.50	0.02	0.02	0.03	0.03	0.01	0.07	0.10
	胎土	68.41	0.79	21.04	3.17	0.03	1.98	0.14	0.98	3.00	0.14	0.14	0.01	0.01	0.02	0.01	-	0.04	0.07
21	鉄釉	62.13	0.71	18.30	7.87	0.13	2.99	1.75	2.12	2.81	0.57	0.38	0.02	0.05	0.02	0.03	0.01	0.04	0.07
	胎土	60.17	1.98	25.83	2.88	0.05	3.37	0.20	1.37	3.07	0.49	0.45	0.01	0.01	0.02	0.02	0.01	0.04	0.03
24	鉄釉	65.16	0.49	15.28	5.70	0.30	2.63	5.79	1.14	2.58	0.53	0.23	0.02	-	0.01	0.06	-	0.03	0.05
	胎土	70.10	0.69	18.47	3.41	0.10	1.82	0.43	0.80	2.61	0.68	0.77	0.01	0.01	0.02	0.01	-	0.05	0.04
25	灰釉	61.33	0.65	16.50	3.53	0.25	3.64	9.58	1.04	2.08	1.05	0.15	0.02	0.01	0.02	0.06	-	0.03	0.05
	錆地	64.90	0.70	18.97	3.58	0.12	3.24	3.07	1.15	2.87	0.98	0.30	0.02	0.01	0.01	0.02	-	0.03	0.03
	胎土	63.42	0.86	22.27	3.82	0.08	2.58	1.07	1.00	3.22	0.97	0.61	0.01	0.01	0.02	0.02	-	0.05	-
26	灰釉	60.18	0.47	15.23	2.98	0.30	3.32	11.96	1.38	2.88	0.96	0.08	0.01	-	0.01	0.12	-	0.03	0.08
	胎土	68.41	0.70	19.73	2.98	0.09	1.95	0.69	0.93	2.94	0.75	0.70	0.01	0.01	0.02	0.02	-	0.04	0.06
27	鉄釉	64.69	0.44	14.84	5.27	0.31	2.67	6.35	1.67	2.94	0.48	0.10	0.02	-	0.01	0.08	-	0.03	0.08
	錆釉	62.82	0.79	20.13	5.82	0.15	2.41	2.29	1.02	3.09	0.86	0.45	0.02	0.01	0.02	0.02	0.01	0.04	0.06
	胎土	67.05	0.80	19.97	3.79	0.11	2.13	0.71	0.90	2.87	0.75	0.76	0.01	0.01	0.02	0.02	-	0.04	0.07
28	錆釉	61.97	0.90	17.66	6.66	0.24	2.85	2.88	0.79	3.59	1.23	1.06	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.05	0.03
	胎土	67.70	0.75	19.62	3.67	0.17	1.91	0.50	0.62	2.94	0.82	1.07	0.02	0.01	0.02	0.02	0.01	0.05	0.09
31	鉄釉	62.56	0.69	20.00	4.92	0.34	2.75	2.79	1.98	3.05	0.61	0.19	0.01	0.01	0.01	0.03	-	0.03	0.05
	胎土	65.95	0.69	20.35	2.70	0.10	2.62	0.66	2.37	3.41	0.58	0.45	0.01	-	0.02	0.01	0.01	0.04	0.03
32	鉄釉	58.70	0.71	19.34	6.03	0.43	3.77	5.40	1.32	2.79	1.12	0.19	0.02	0.01	0.02	0.04	-	0.04	0.06
	胎土	62.78	0.79	25.39	3.21	0.02	2.41	0.11	0.92	3.21	0.54	0.50	0.01	-	0.02	0.01	-	0.04	0.05
33	灰釉	59.50	0.62	16.61	4.01	0.55	4.45	8.43	1.34	2.53	1.60	0.11	0.02	0.01	0.02	0.09	-	0.03	0.07
	胎土	63.18	0.88	23.94	4.14	0.04	2.49	0.18	1.07	2.75	0.51	0.66	0.01	0.02	0.03	0.01	-	0.05	0.05

る領域に有意な違いが認められるという意味である。この場合、領域の一部は他の古窯の領域と重なっており、したがって、個々の試料で比べれば、異なる古窯でも近似した組成を示す場合もある。また、「傾向」としてとらえるならば、岩石片組成においても、上志戸呂古窯はA類とB類が多く、かつ3'類と3類が多い傾向にあり、これに対して神座古窯は、B類とD類が多く、かつ2'類と2類が多いという傾向があり、窯による違いを認めることができる。

岩石片による分類と化学組成との関係では、図4～8に示されるように、同じ古窯の試料間では、同じ岩石片分類の試料は近似した化学組成を示すが、異なる古窯間では、同じ岩石分類でも化学組成は離れている。逆に異なる岩石分類でも、同じ古窯の試料間では化学組成が近似している。

前述したように、岩石片の組成は、粘土の採取地あるいは層位の違いを反映していると考えられるから、各古窯では、複数の採取地あるいは層位から採取された粘土が使用されていた可能性がある。おそらく、複数の粘土を使い分けたり、混合したりという状況が想定され、その結果、1つの窯においても、その胎土には化学組成のばらつきが生じたと考えることができる。ただし、ばらつきがありながらも、

窯間で比較すれば、窯ごとの傾向が読み取れるということは、使用されていたであろう複数の粘土の採取地や層位は、非常に限定的(局所的：窯の周囲程度の範囲か)であった可能性が高い。

島田市教育委員会編(1976)では、上志戸呂古窯からみて大井川対岸の丘陵上に位置する旗指古窯群においては、その立地の地形的な条件から、窯址近在で粘土が得られたことが、築窯の条件であったと考えている。さらに、調査区内の丘陵上に堆積する粘土について、化学組成や焼成実験などから、陶器原料になり得る可能性のあることを述べている。今回の分析により、上志戸呂、神座、三ツ沢の各古窯ごとに粘土の組成の傾向が異なることが示された。このことは、上志戸呂、神座、三ツ沢の各古窯の築窯条件も、上述の旗指古窯群と同様に、近在で粘土が得られたことであったことを示唆している。

(2)胎土と器種との関係について

今回の分析結果の範囲内では、器種と胎土との対応関係は、それほど厳密ではない。例えば、上志戸呂古窯における筒形碗はB3'類とC4類とに分かれ、丸皿はC3、B1、B4の各類に分かれており、岩石片の種類も粒径も一様ではない。また、異なる古窯間では、その違いはさらに明確であり、例えば神座古窯の筒形碗はA2類、丸皿はD3'類であり、上志戸呂古窯の天目茶碗はB3'類、三ツ沢古窯の天目茶碗はD2類である。これらのことから、器種による素地土の調整が、各窯において、さらには窯を超えて共通していた可能性は低い。ここで、各古窯内での各胎土の分類について、それを構成する器種をみると以下の通りである(表1)。

<上志戸呂古窯>

岩石片

A類:大皿、小壺、短頸壺、徳利(千段巻)、窯道具(匣)、窯道具(輪ドチ)

B類:天目茶碗、筒形碗の一部、丸皿の一部、中皿、向付、茶壺

C類:筒形碗の一部、丸皿の一部、擂鉢Ⅰ類、甕

D類:徳利、桶

粒径

1類:丸皿の一部、甕

2類:中皿、短頸壺、擂鉢Ⅰ類、茶壺

3'類:天目茶碗、筒形碗の一部、大皿、窯道具(匣鉢)

3類:丸皿の一部、向付、小壺、徳利、桶、窯道具(輪ドチ)

4類:筒形碗の一部、丸皿の一部、徳利(千段巻)

砂粒の量

30%以上:向付、擂鉢Ⅰ類、甕、窯道具(匣鉢)

10%前後:小壺の一部

<神座古窯>

岩石片

A類:筒形碗、徳利

B類:擂鉢Ⅰ類、甕

D類:丸皿、徳利(千段巻)、窯道具(匣鉢)

粒径

2'類:徳利(千段巻)、擂鉢Ⅰ類、窯道具(匣鉢)

2類:筒形碗、徳利

3'類:丸皿

3類:甕

砂粒の量
30%以上:擂鉢Ⅰ類、甕、窯道具(匣鉢)
10%前後:丸皿
<三ツ沢古窯>
岩石片
A類:緑釉小皿の一部
D類:天目茶碗、緑釉小皿の一部
E類:擂鉢
粒径
1類:擂鉢
2類:天目茶碗
3'類:緑釉小皿の一部
3類:緑釉小皿の一部
砂粒の量
30%前後:天目茶碗、擂鉢
10%前後:緑釉小皿の一部

現時点では、各古窯において各器種の試料点数は、ほとんどが1点ずつのため、上記の各器種における胎土分類が、その古窯におけるその器種を特徴付ける胎土であるかどうかは確定できない。同様に、ある器種について窯間で同様の胎土分類を示すという傾向も認められない。ただしその中で、擂鉢については、上記の3古窯のいずれにおいても砂粒の量30%以上を示し、甕および窯道具(匣鉢)については、上志戸呂および神座の両古窯において砂粒の量30%以上を示している。これらは、いずれも大型の器種であることが共通している。一般に、焼物に使用される粘土について、砂の含有量が多ければ、成形後の乾燥および焼成の際の収縮率が小さくなると言われていることから、上述の大型の器種における砂粒の量の共通性は、大型であるという器種の特性に由来する可能性がある。今後、さらに分析例を得ることができれば、砂粒の量だけではなく、岩石片組成や粒径組成においても、器種と胎土との、より詳細な関係が見出せることが期待される。

(3)釉薬について

鉄釉および錆釉については、鉄の含量が多いことが確認されたことに加えて、マグネシウムやカルシウム、マンガン、リン酸も多い傾向にあることから、木灰や土灰などの灰ぐすり、あるいはこれらに鉄原料を添加し、釉薬を調合していた可能性があると考えられる。

一方、灰釉では、カルシウムが多い傾向は認められたが、鉄釉・錆釉と同様にマグネシウムやマンガン、リン酸も多い傾向が認められた。このことから、灰釉についても、木灰や土灰などの灰ぐすり、あるいはこれらに石灰質原料を添加し、釉薬を調合していた可能性があると考えられる。

引用文献

島田市教育委員会編, 1976, 旗指古窯址群-一般国道1号島田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-. 静岡県教育委員会・島田市教育委員会・建設省中部地方建設局, 326p.

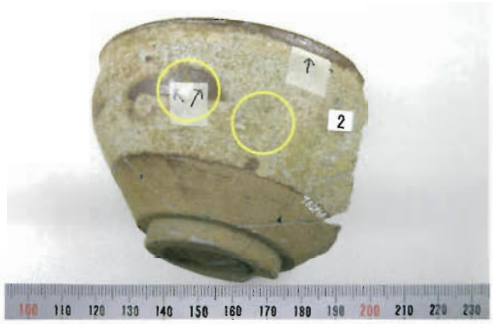
杉山雄一・下川浩一, 1981, 静岡県中部に分布する古第三系瀬戸川層群の古地理学的研究. 地質学雑誌, 87, 439-456.

杉山雄一・下川浩一・坂本　亨・秦　光男, 1982, 静岡地域の地質. 地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 82p.

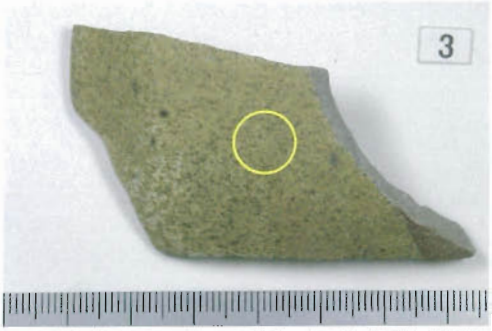
土　隆一, 1986, 静岡県地質図（20万分の1）改訂版. 静岡県.

図版１　試料（１）

1. 試料番号１　上志戸呂　天目茶碗（鉄釉）



2. 試料番号２　上志戸呂　天目茶碗（錆地灰釉かけ）

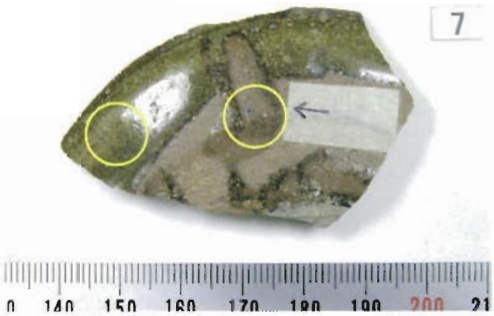


3. 試料番号３　上志戸呂　天目茶碗（灰釉）

4. 試料番号４　上志戸呂　筒形碗（鉄釉）

5. 試料番号５　上志戸呂　筒形碗（灰釉）

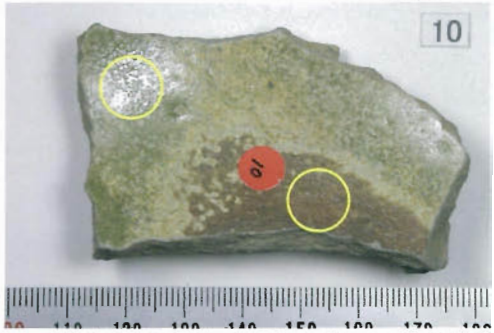
6. 試料番号６　上志戸呂　丸皿（灰釉）



7. 試料番号７　上志戸呂　丸皿（錆地灰釉かけ）

8. 試料番号８　上志戸呂　丸皿（鉄釉）

9. 試料番号９　上志戸呂　丸皿（灰釉？）



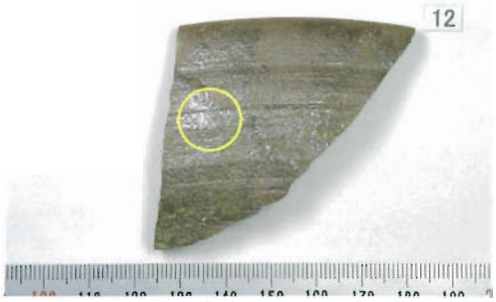
10. 試料番号10　上志戸呂　中皿（錆地灰釉かけ）

：釉薬分析部位

図版２　試料（２）

11. 試料番号11（薄片）　上志戸呂　向付（鉄釉）

12. 試料番号11（釉薬）　上志戸呂　向付（鉄釉）

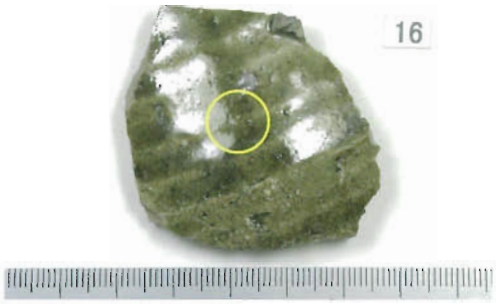


13. 試料番号12　上志戸呂　大皿（錆釉）

14. 試料番号13　上志戸呂　小壺（灰釉）

15. 試料番号14　上志戸呂　小壺（鉄釉）

16. 試料番号15　上志戸呂　短頸壺（錆地灰釉かけ）



17. 試料番号16　上志戸呂　徳利（灰釉）外面

18. 試料番号16　上志戸呂　徳利（錆釉）内面

19. 試料番号17　上志戸呂　徳利（鉄釉）

20. 試料番号18　上志戸呂　擂鉢I類（錆釉）

：釉薬分析部位

図版３　試料（３）

21. 試料番号19　上志戸呂　桶（錆釉）

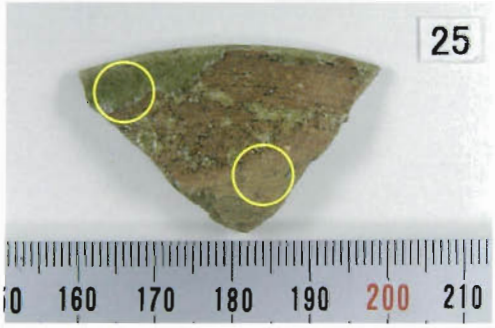
22. 試料番号20　上志戸呂　甕（錆釉）

23. 試料番号21　上志戸呂　茶壺（鉄釉）

24. 試料番号22　上志戸呂　窯道具（匣鉢）

25. 試料番号24　神座　筒形碗（鉄釉）

26. 試料番号25（薄片）　神座　丸皿（錆地灰釉かけ）



27. 試料番号25（釉薬）　神座　丸皿（錆地灰釉かけ）

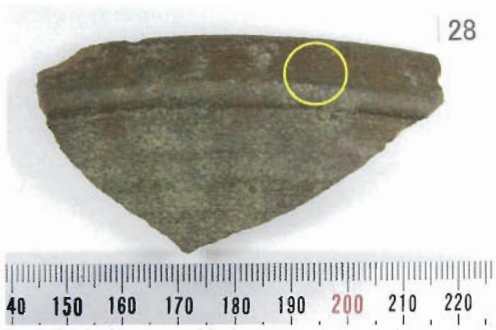
28. 試料番号26　神座　徳利（千段巻）（灰釉）

29. 試料番号27　神座　徳利（鉄釉）外面

30. 試料番号27　神座　徳利（錆釉）内面

：釉薬分析部位

図版４　試料（４）

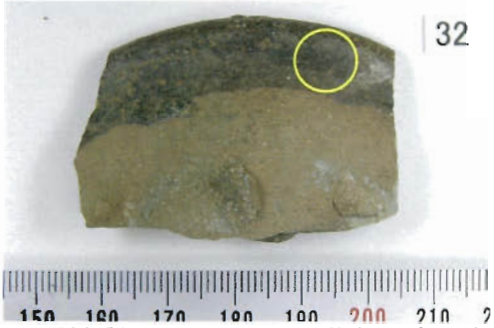


31. 試料番号28　神座　擂鉢Ⅰ類（錆釉）

32. 試料番号29　神座　甕（錆釉）

33. 試料番号30　神座　窯道具（匣鉢）

34. 試料番号31　三ツ沢　天目茶碗（鉄釉）



35. 試料番号32　三ツ沢　緑釉小皿（鉄釉）

36. 試料番号33　三ツ沢　緑釉小皿（灰釉）

37. 試料番号34　三ツ沢　擂鉢

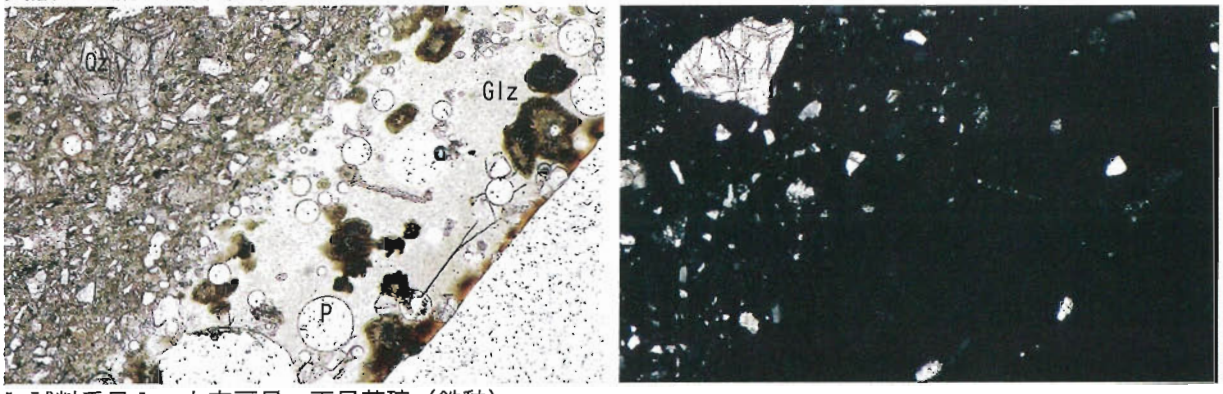
38. 試料番号35　旗指（伊太口）　小碗

39. 試料番号36　すやん沢　山茶碗

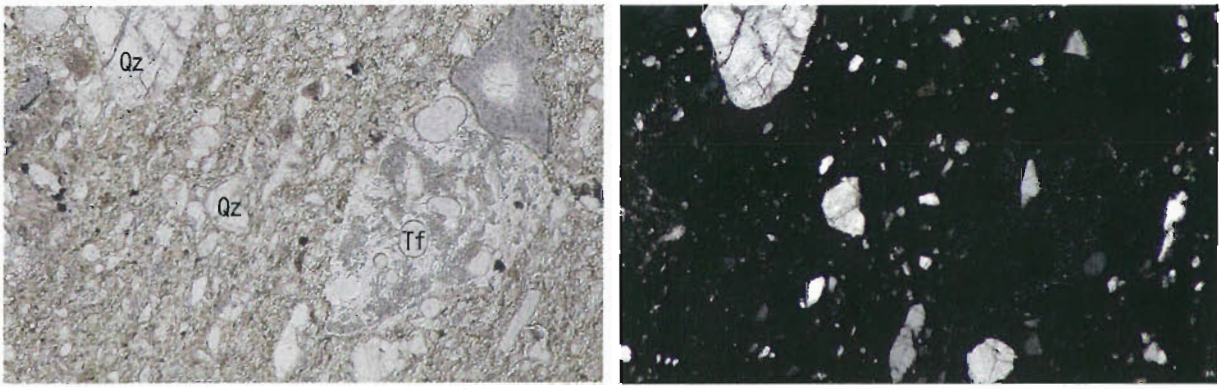
40. 試料番号37　ほろん沢B　山茶碗

：釉薬分析部位

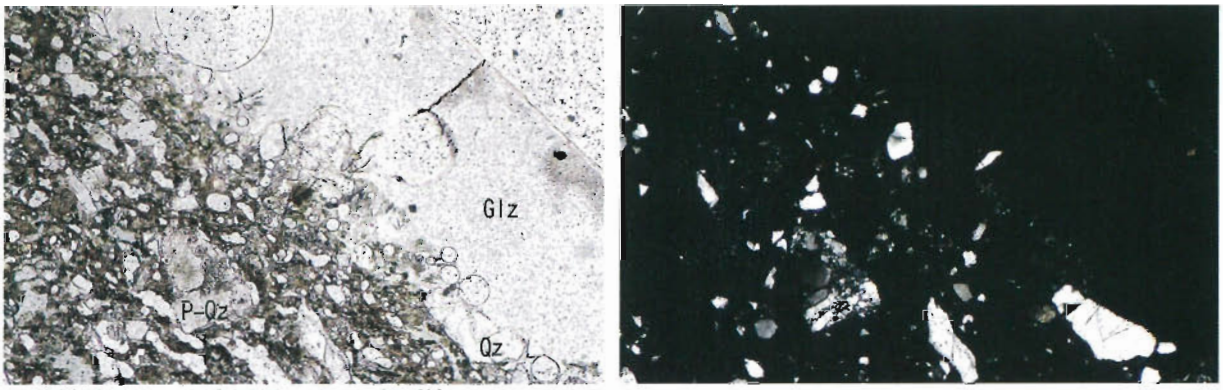
図版５　胎土薄片（１）



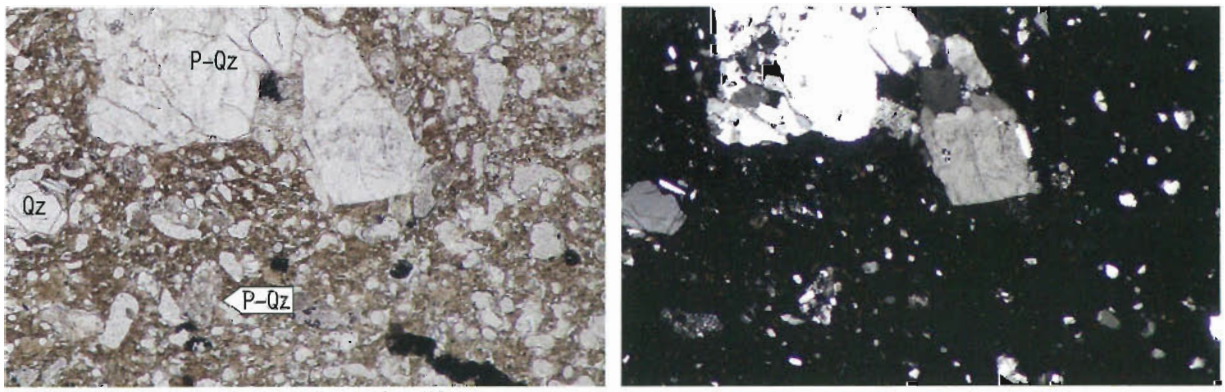
1. 試料番号１　上志戸呂　天目茶碗（鉄釉）



2. 試料番号５　上志戸呂　筒形碗（灰釉）



3. 試料番号６　上志戸呂　丸皿（灰釉）



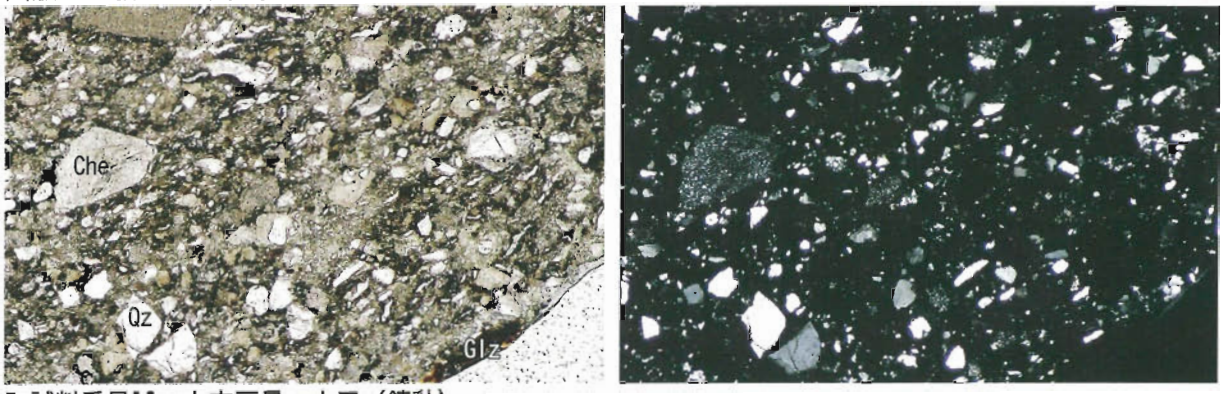
4. 試料番号８　上志戸呂　丸皿（鉄釉）

Qz:石英．Tf:凝灰岩．P-Qz:多結晶石英．P:孔隙．Glz:釉薬

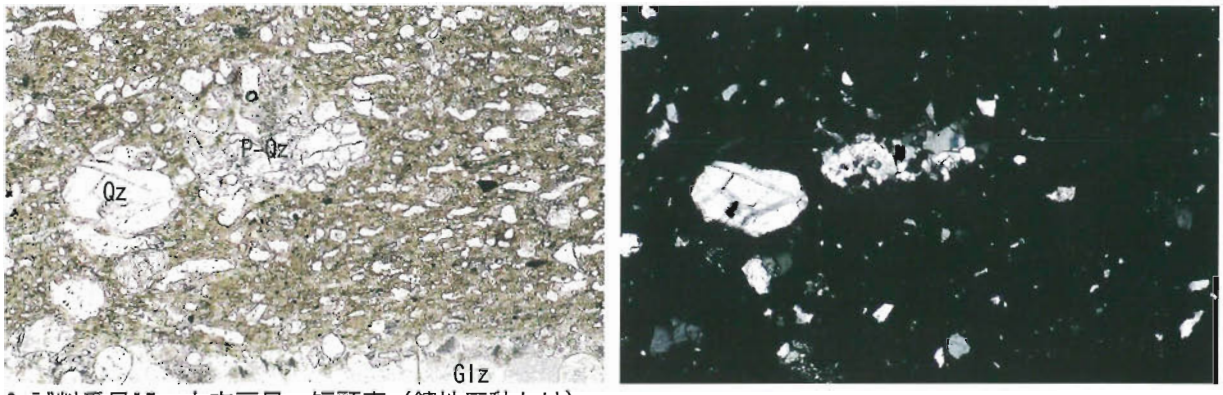
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

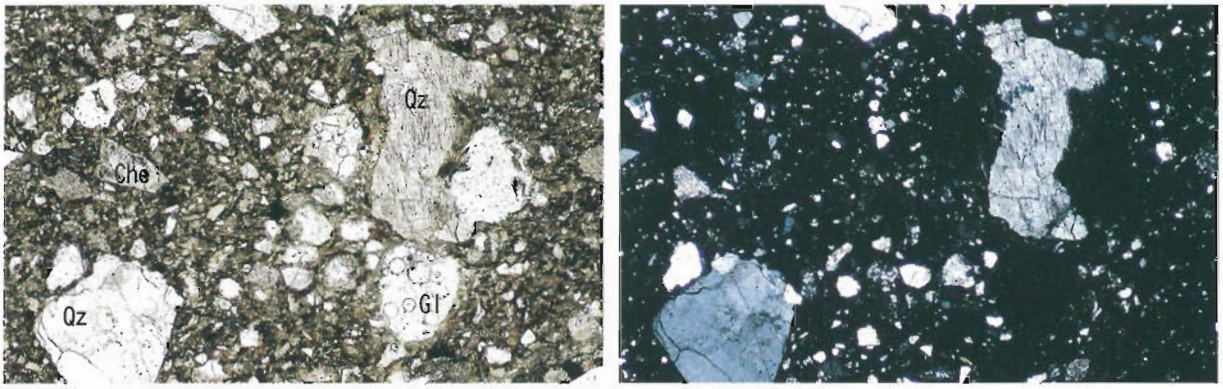
図版6　胎土薄片(2)



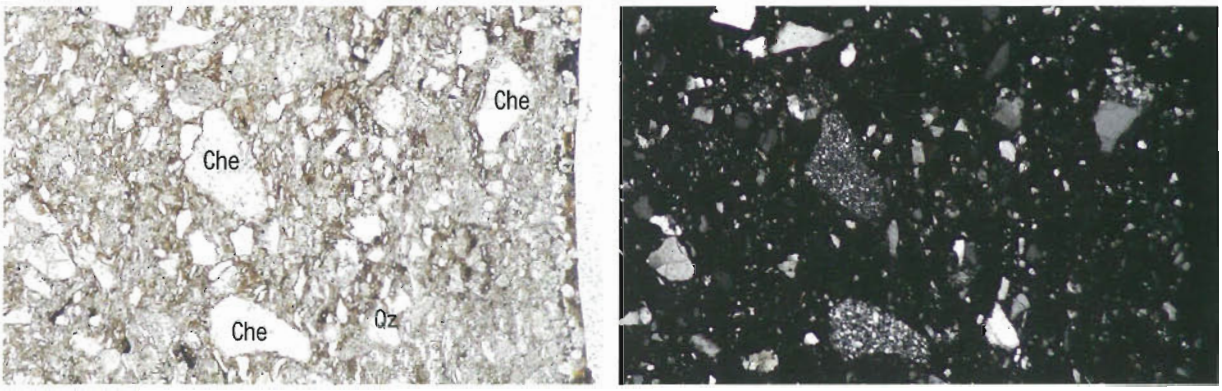
5. 試料番号12　上志戸呂　大皿（錆釉）



6. 試料番号15　上志戸呂　短頸壺（錆地灰釉かけ）



7. 試料番号18　上志戸呂　擂鉢I類（錆釉）



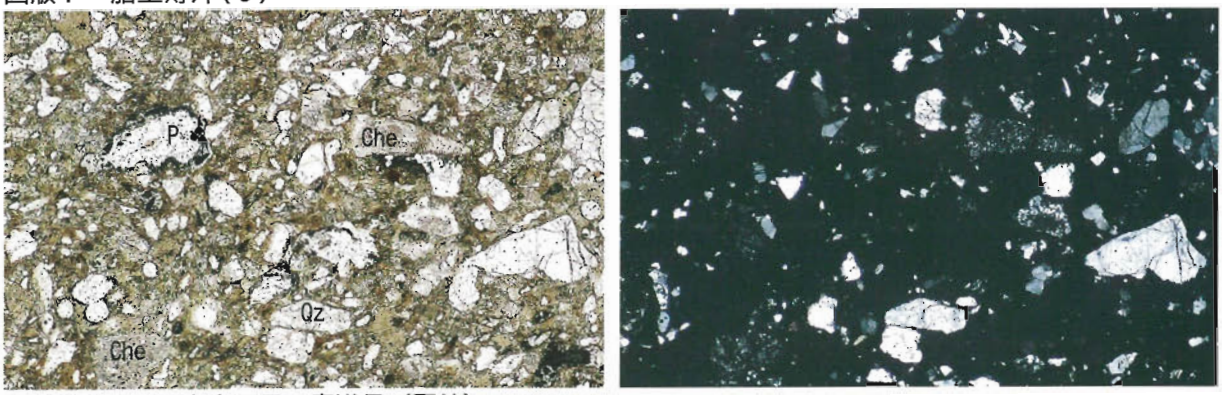
8. 試料番号19　上志戸呂　桶（錆釉）

Qz:石英. Che：チャート. P-Qz:多結晶石英. Gl:ガラス. Glz:釉薬

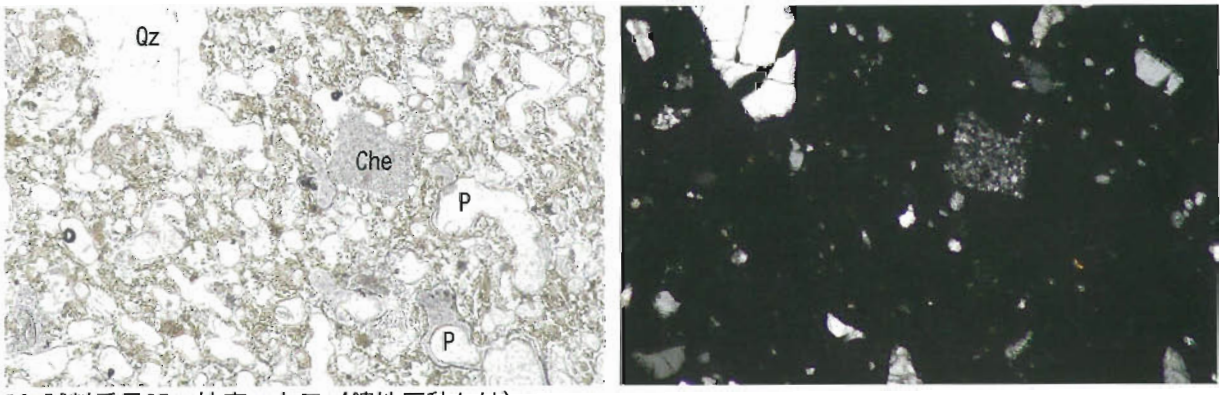
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

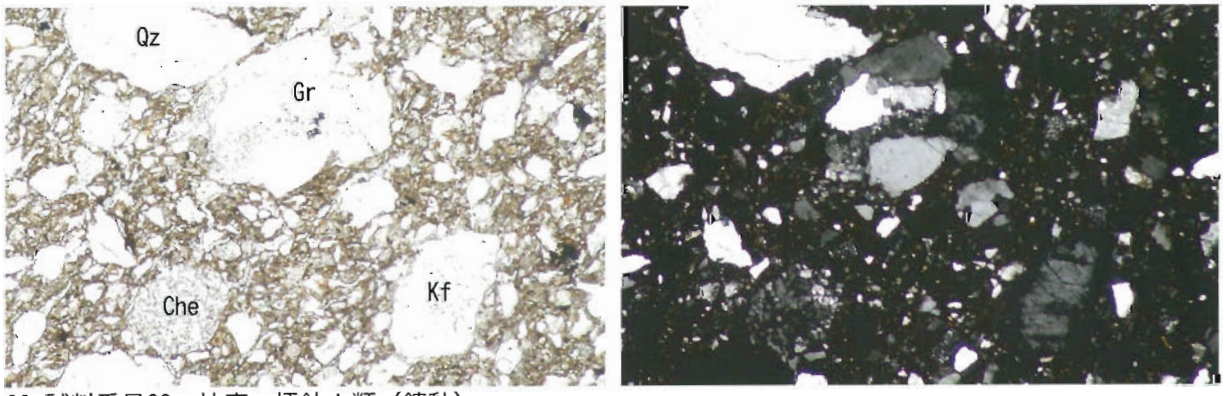
図版７　胎土薄片（３）



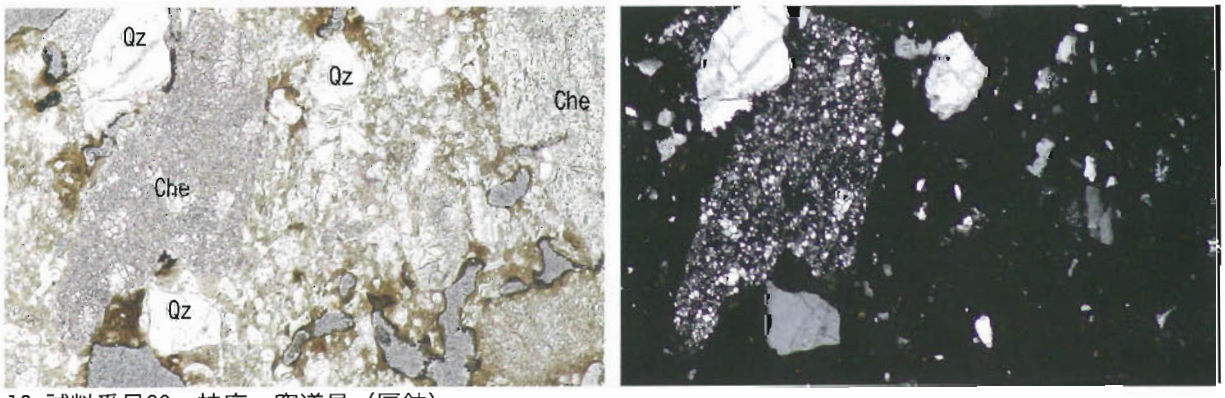
9. 試料番号22　上志戸呂　窯道具（匣鉢）



10. 試料番号25　神座　丸皿（錆地灰釉かけ）



11. 試料番号28　神座　擂鉢Ⅰ類（錆釉）

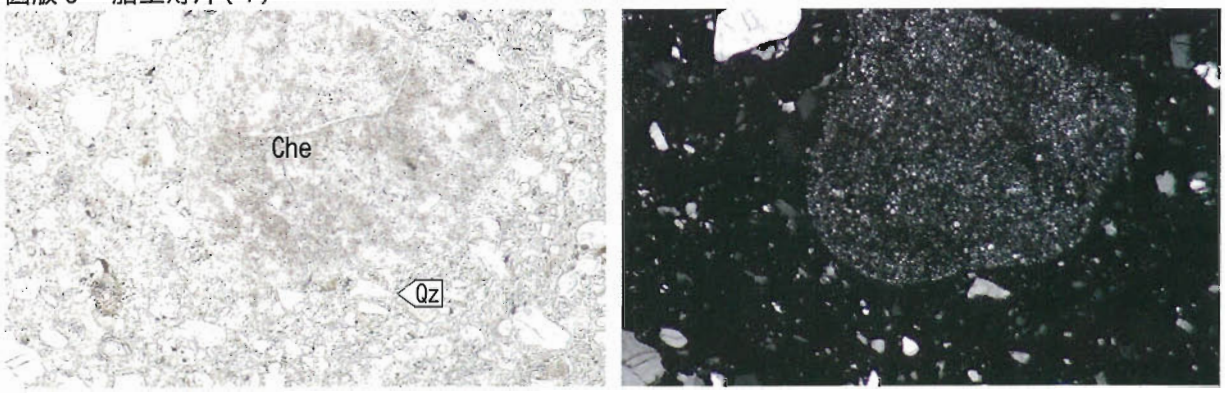


12. 試料番号30　神座　窯道具（匣鉢）

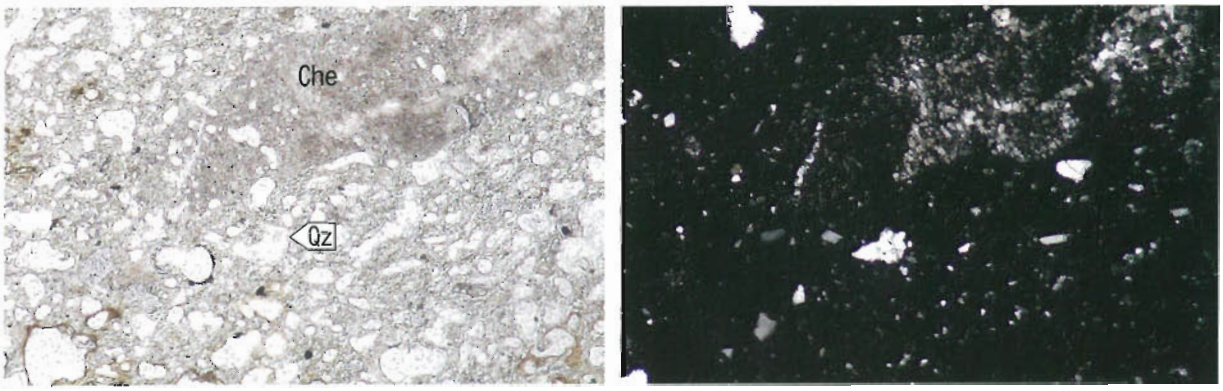
Qz:石英．Kf：カリ長石．Che：チャート．Gr:花崗岩類．P:孔隙．
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

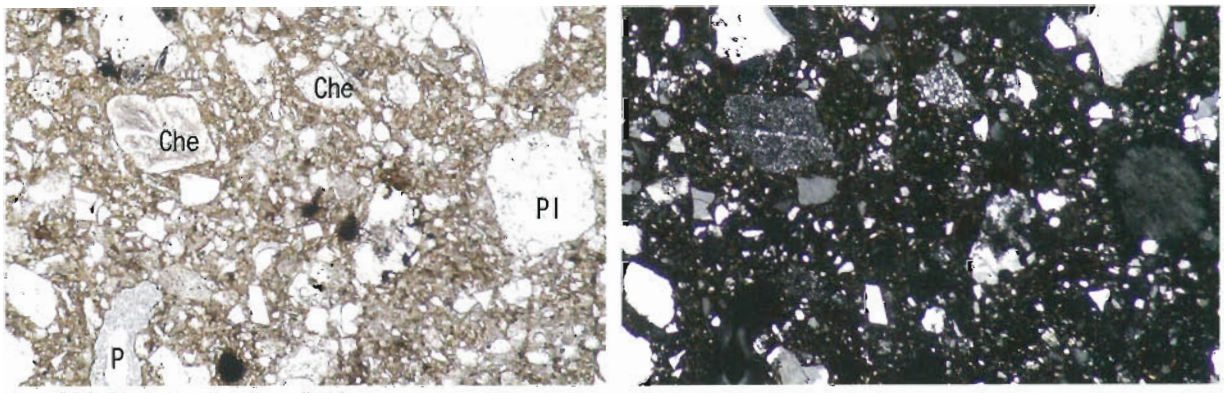
図版８　胎土薄片（４）



13. 試料番号31　三ツ沢　天目茶碗（鉄釉）



14. 試料番号33　三ツ沢　縁釉小皿（灰釉）



15. 試料番号34　三ツ沢　擂鉢

Qz:石英．Pl：斜長石．Che：チャート．P:孔隙．

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

図　　版

口絵

1　上志戸呂古窯　遠景（南から）

2　上志戸呂古窯　全景（南東から）

１　１号窯　窯体半裁状況（南から）

２　１号窯　西側窯壁　前面壁部（南から）

図版 2

1　1号窯　床面の重なり状況　断面（東から）

2　1号窯　西壁面外　匣鉢出土状況（南から）

1　2号窯　床面の状況（南から）

2　2号窯　床面の状況（東北東から）

図版 4

1　2号窯　床面の重なり状況（北東から）

2　2号窯　床面の重なり状況　断面（西から）

上志戸呂古窯出土遺物（製品）

図版 6

1　上志戸呂古窯出土遺物（窯道具１）

2　上志戸呂古窯出土遺物（窯道具２）

1

2

2

4

4

4

6

7

14

11

11

15

12

12

17

天目茶碗

図版 8

21

25

26

33

33

34

31

42

44

45

45

45

50

53

55

天目茶碗・小天目・丸碗・筒形碗

48

75

48

75

72

72

72

73

444

446

447

452

452

丸碗・筒形碗・小杯

図版10

448

461

461

462

472

472

470

476

474

小杯・向付

388

388

390

393 392

393 392

84

85

87

94

96

318

図版12

107

110

111

113

114

125

115

115

127

132

134

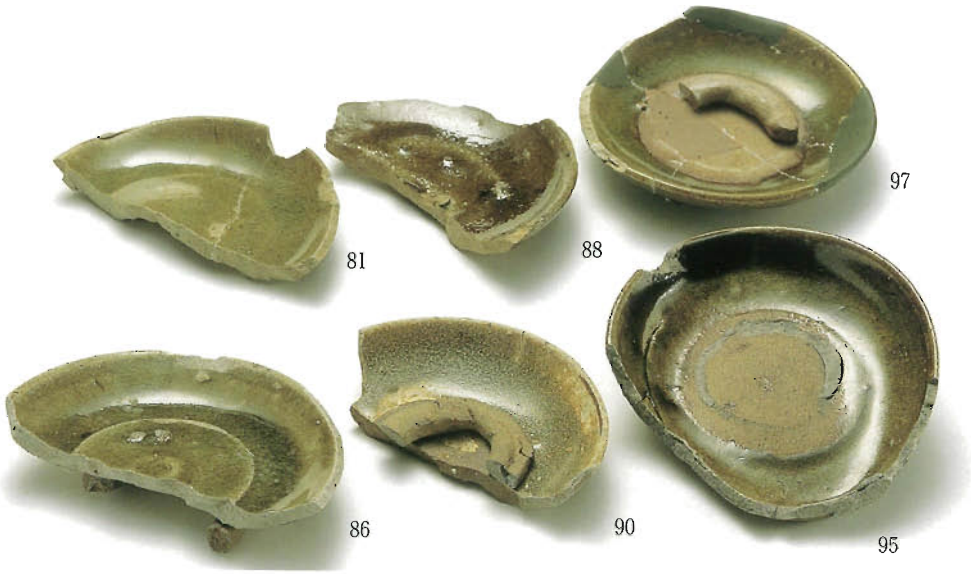
139

142

145

146

丸皿 2



1　丸皿 3

2　丸皿 4

3　丸皿 5

図版14

1　丸皿 6

2　丸皿 7

3　丸皿 8

1　丸皿 9

2　丸皿10

3　丸皿11

図版16

1　丸皿12

2　丸皿13

3　丸皿14

1　丸皿15

2　丸皿16

3　丸皿17

図版18

1　丸皿18

2　丸皿19

3　丸皿20

1　丸皿21

2　丸皿22

3　丸皿23

図版20

1　丸皿24

2　丸皿25

3　丸皿26

1　丸皿27

2　丸皿28

3　丸皿29

図版22

1　丸皿30

2　丸皿31

3　丸皿32　鉄釉丸皿と灰釉製品の重ね焼き

131

386

395

399

398

398

400

403

406

402

411

413

430

441

419

丸皿33・稜皿

図版24

423

426

428

478

420

425

440

424

420

425

440

424

中皿・向付

480

484

488

492

499

505

514

506

506

515

516

517

518

大皿・香炉・蓋物

図版26

536

537

539

541

543

550

552

545

545

短頸壺蓋・短頸壺

526

531

532

533

534

535

561

558

563

563

562

564

565

555

556

556

小壺・耳付水注・水滴

図版28

567

568

576

585

571

586

578

578

575

580

徳利

583

582

603

604

605

606

607

607

577

591

598

595

601

徳利

図版30

593

593

590

597

612

616

616

615

617

694

徳利・鉢・花瓶・茶壺

656

625

648

634

678

683

665

689

広口壺・甕・桶

図版32

736

736

703

704

705

706

707

708

擂鉢Ⅰ類

709

710

711

713

714

715

712

擂鉢Ⅰ類

図版34

716

718

719

719

720

720

721

擂鉢Ⅰ類

722

723

724

725

726

727

728

擂鉢Ⅰ類

図版36

729

730

731

732

733

734

735

擂鉢Ⅰ類

737

738

740

739

739

741

742

擂鉢Ⅰ類

図版38

774

755

776

779

780

783

785

擂鉢Ⅰ類・擂鉢Ⅱ類

786

787

799

800

801

802

803

擂鉢Ⅰ類

図版40

804

805

808

809

810

811

812

813

擂鉢Ⅰ類・擂鉢底部～体部

814

815

816

817

818

819

820

821

擂鉢底部～体部

図版42

822

825

823

823

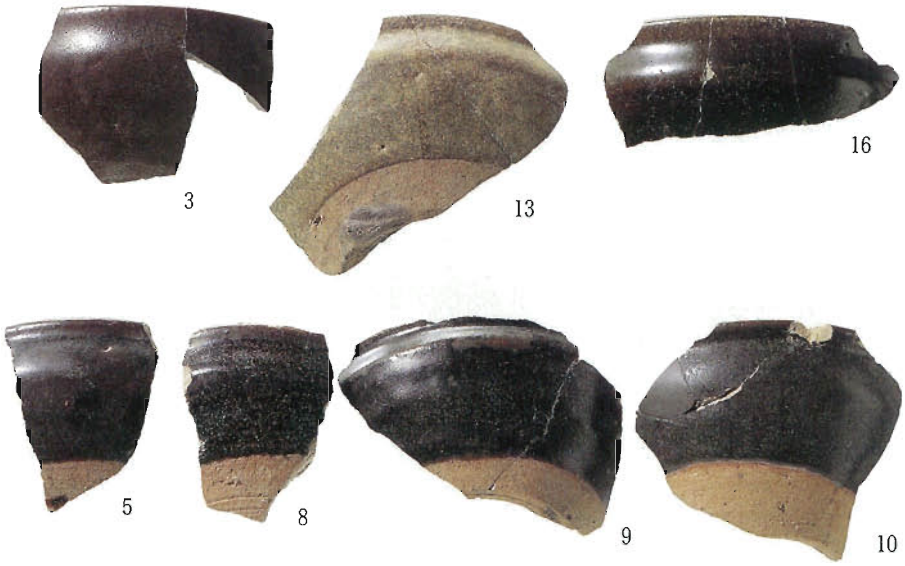
824

824

828

828

擂鉢底部～体部



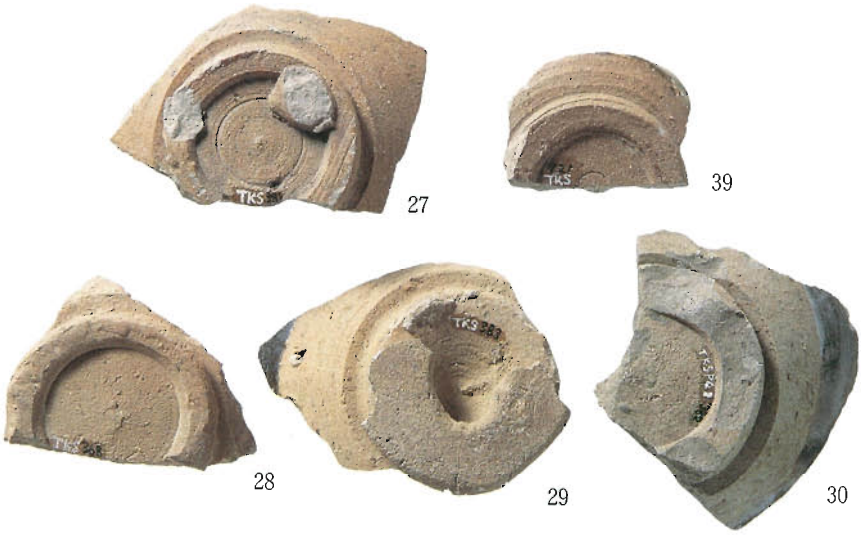
1　天目茶碗１（外面）

2　天目茶碗１（内面）

3　天目茶碗２（外面）

図版44

1　天目茶碗２（内面）



2　天目茶碗３（外面）

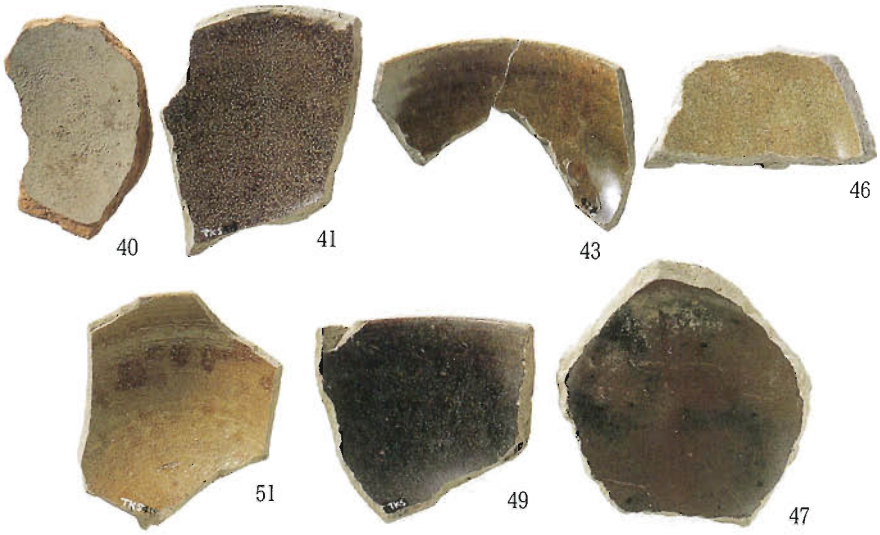
3　天目茶碗３（内面）

1　小天目（外面）

2　小天目（内面）

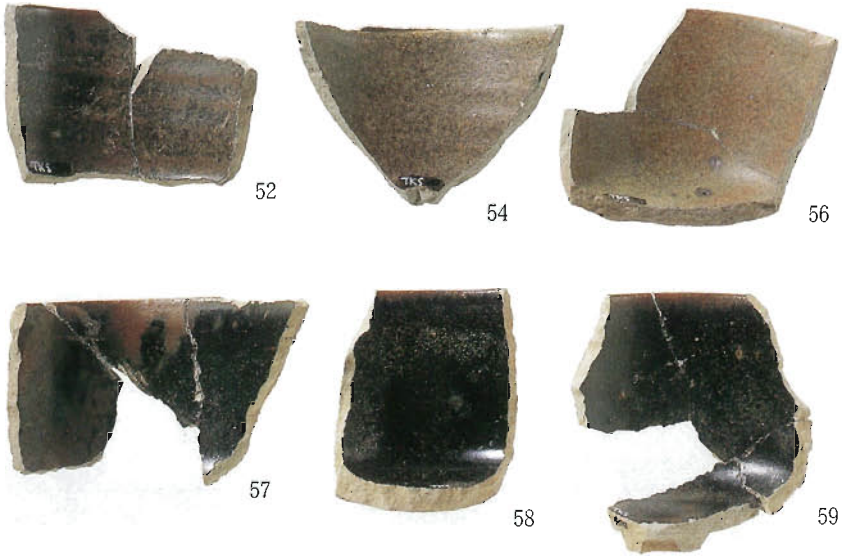
3　丸碗・平碗（外面）

図版46

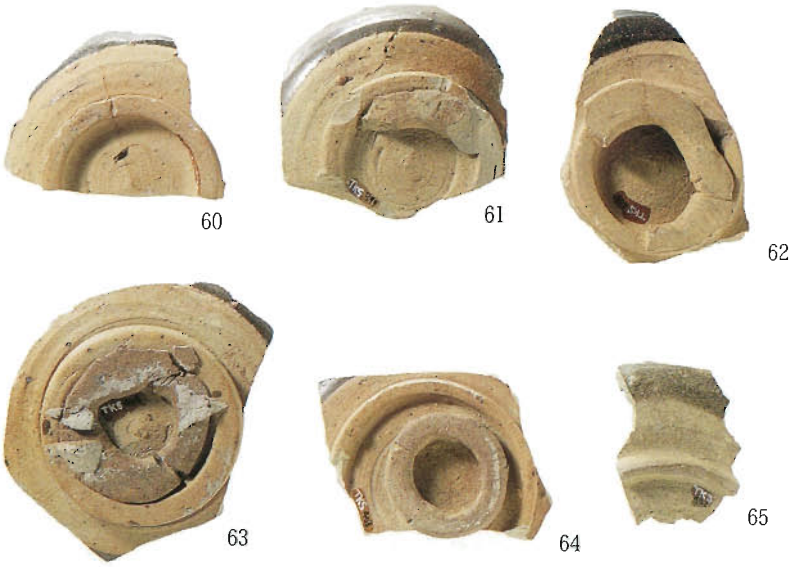


1　丸碗・平碗（内面）

2　筒形碗１（外面）

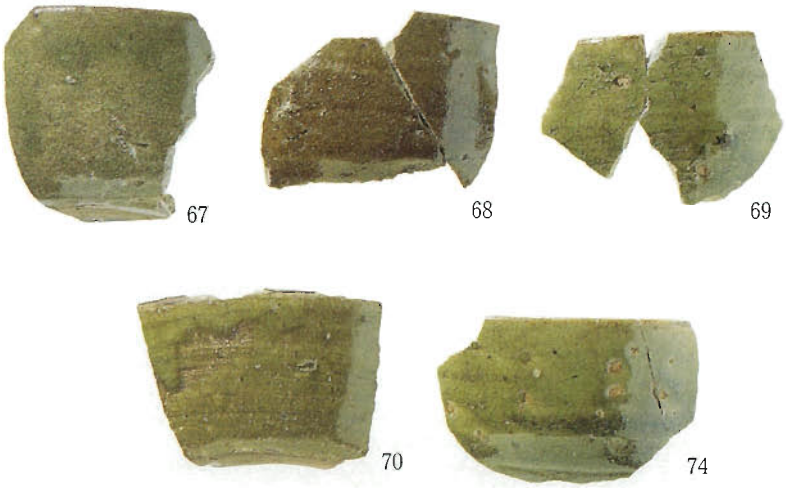


3　筒形碗１（内面）



1　筒形碗２（外面）

2　筒形碗２（内面）



3　筒形碗３（外面）

図版48

67

68

69

70

74

1　筒形碗３（内面）

77

76

2　筒形碗４（外面）

77

76

3　筒形碗４（内面）

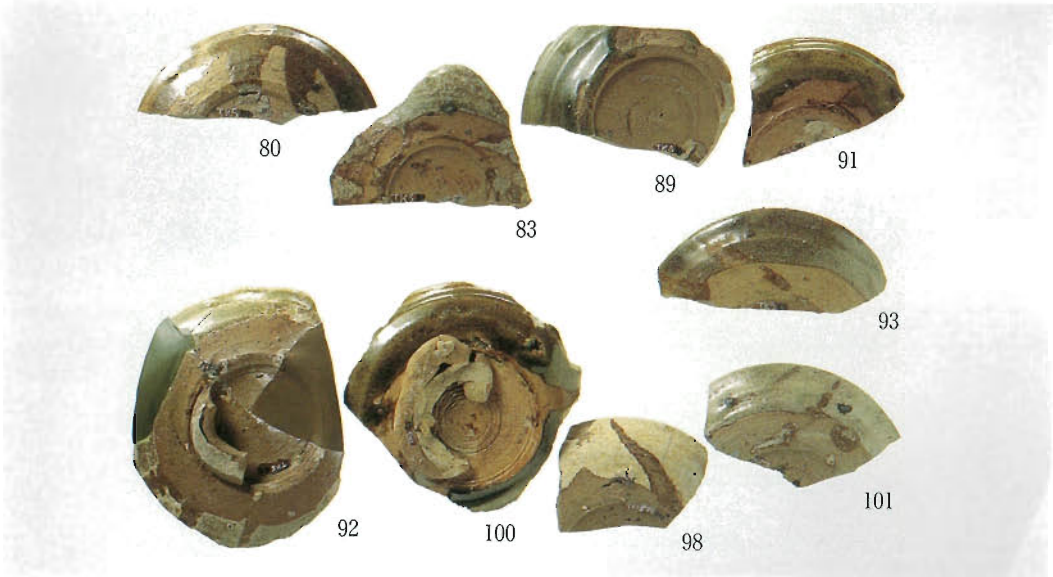
1　筒形碗５（外面）

2　筒形碗５（内面）

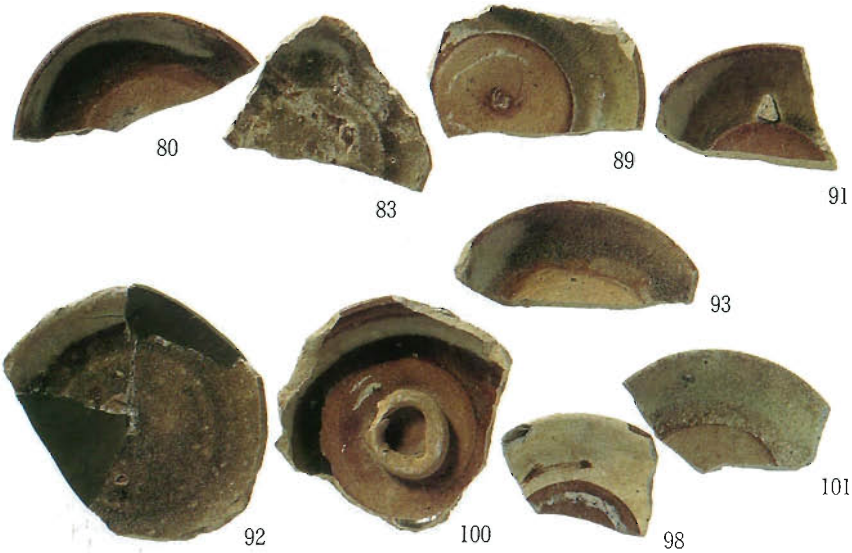
3　小杯（外面）

図版50

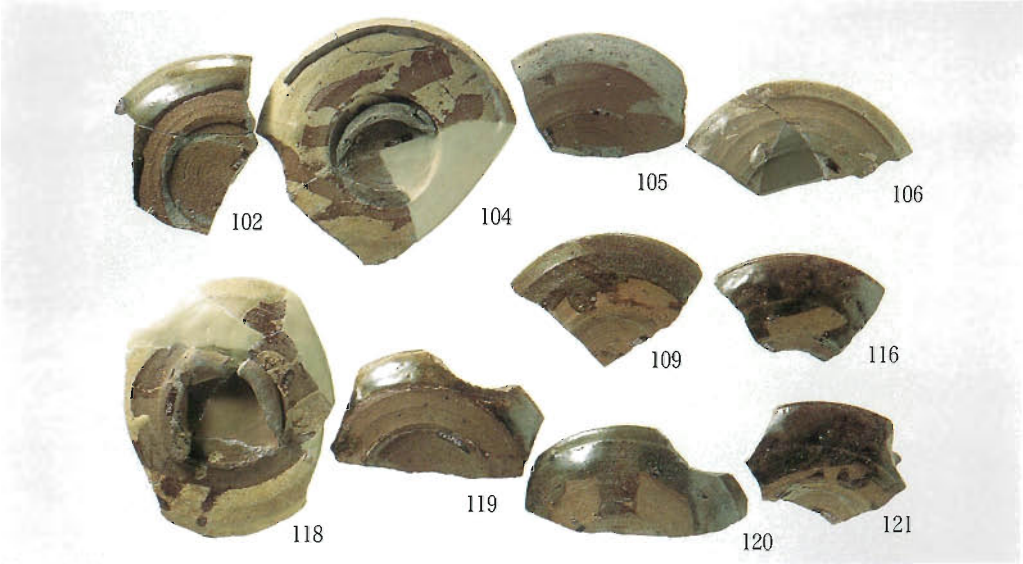
1　向付（外面）



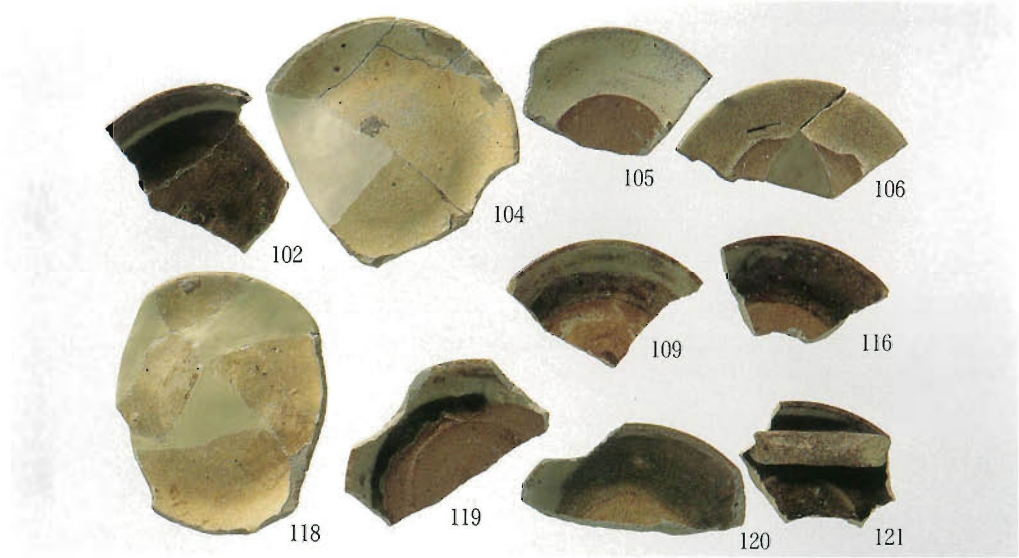
2　丸皿33（外面）



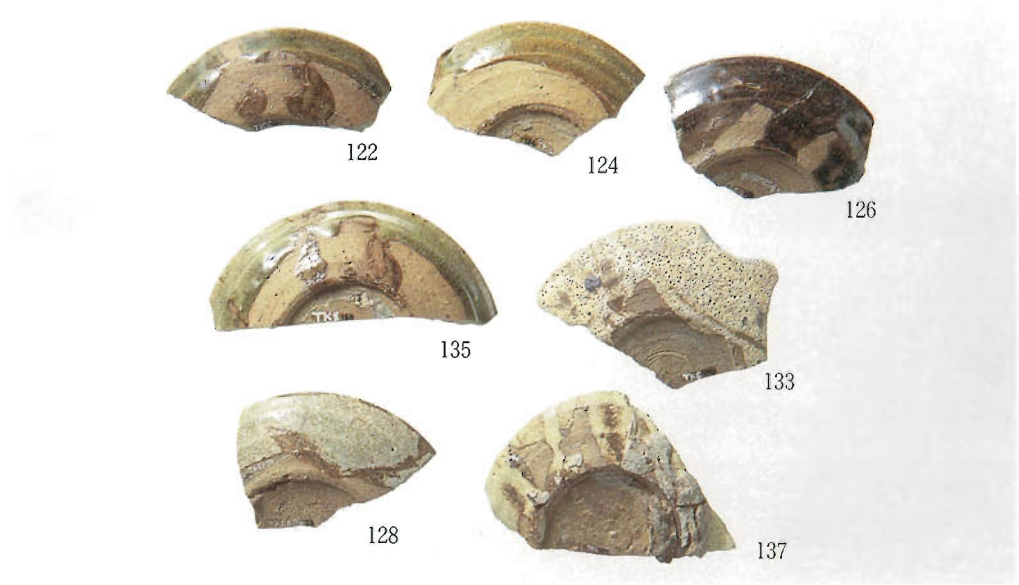
3　丸皿33（内面）



1　丸皿34（外面）

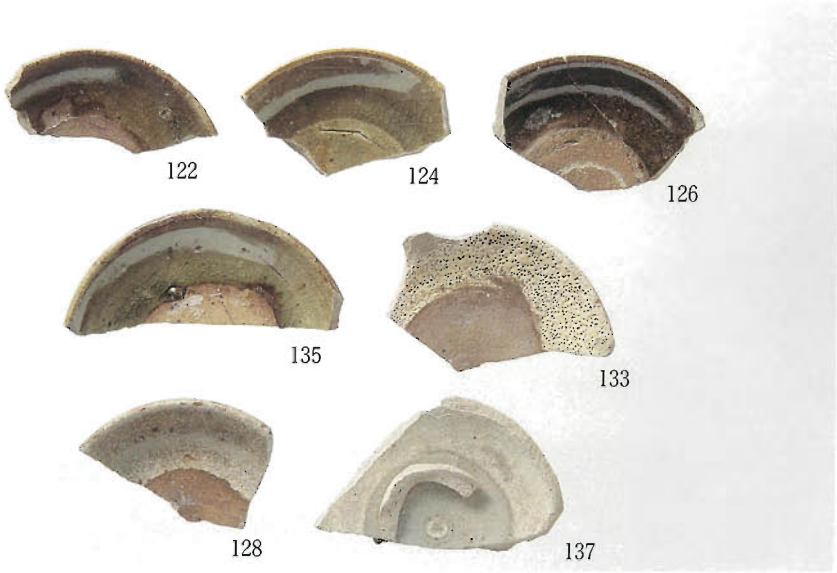


2　丸皿34（内面）

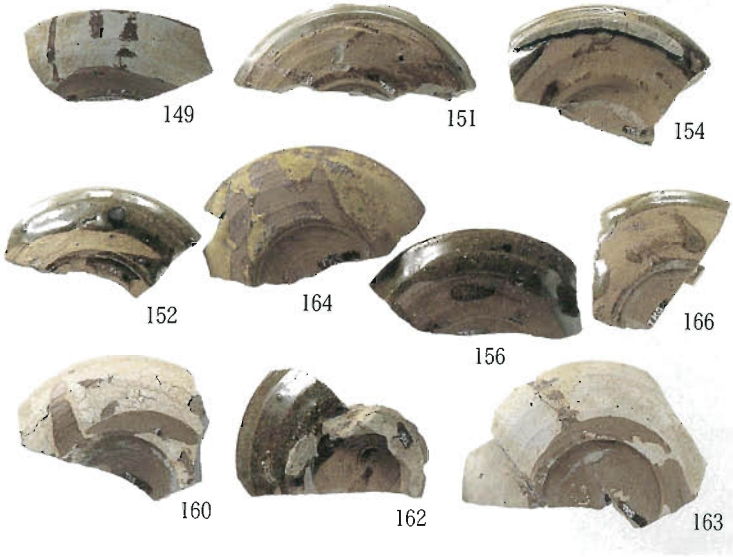


3　丸皿35（外面）

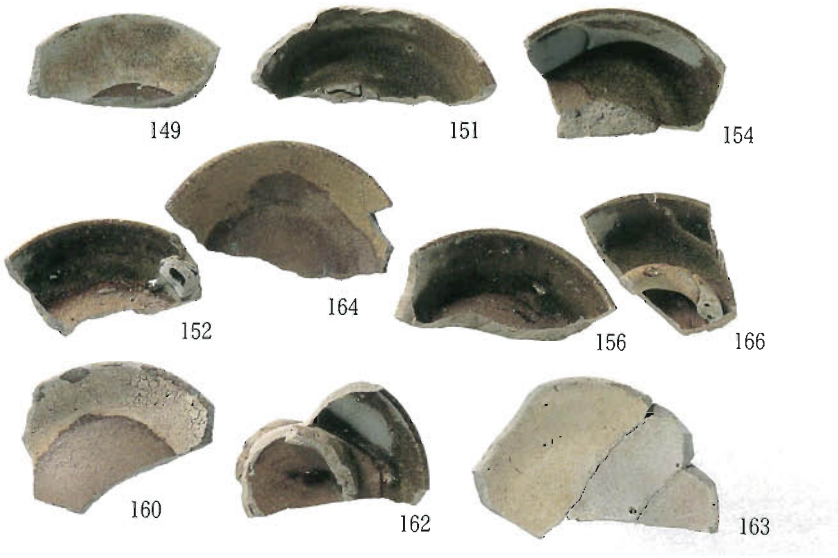
図版52



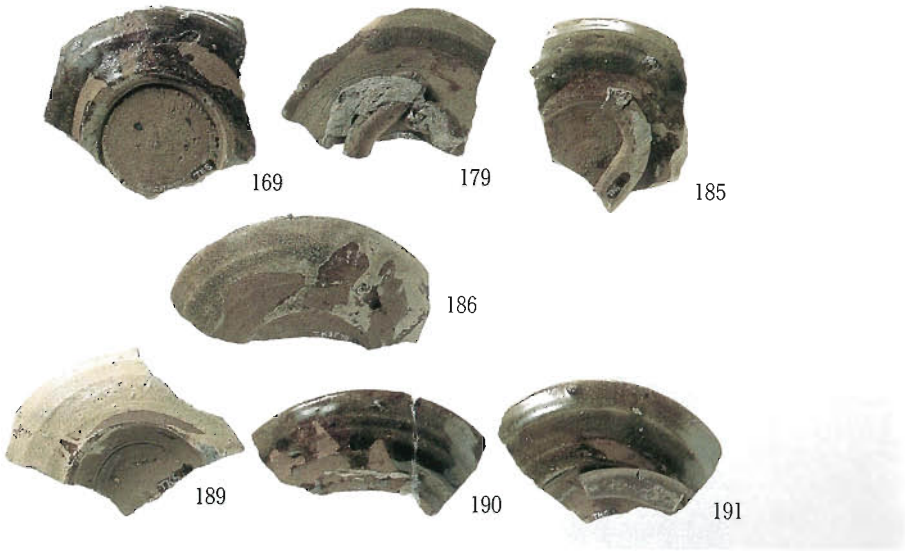
1　丸皿35（内面）



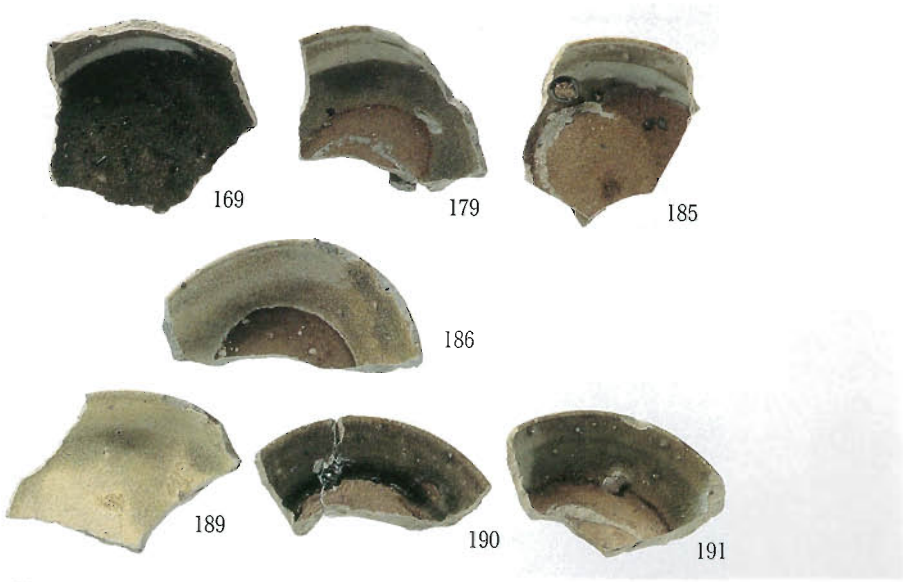
2　丸皿36（外面）



3　丸皿36（内面）



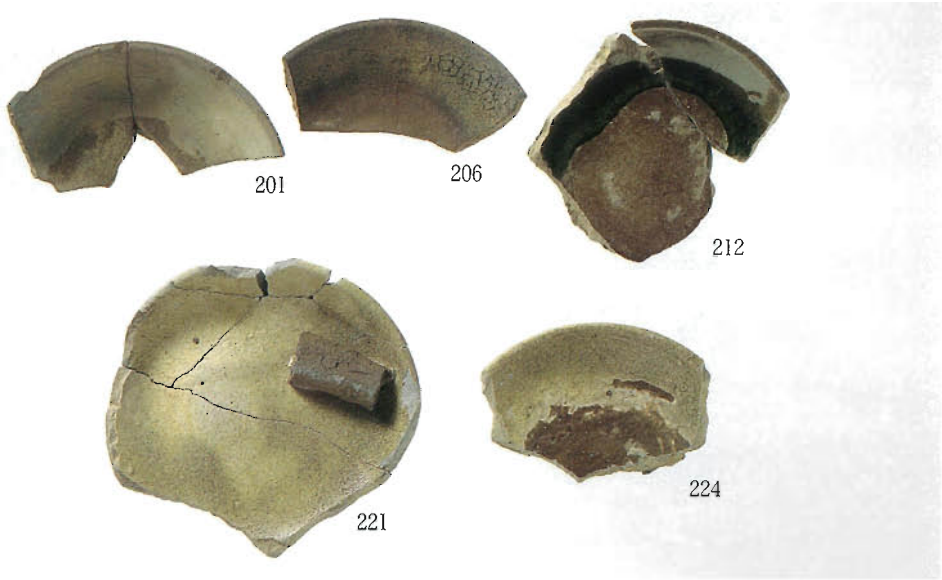
1　丸皿37（外面）



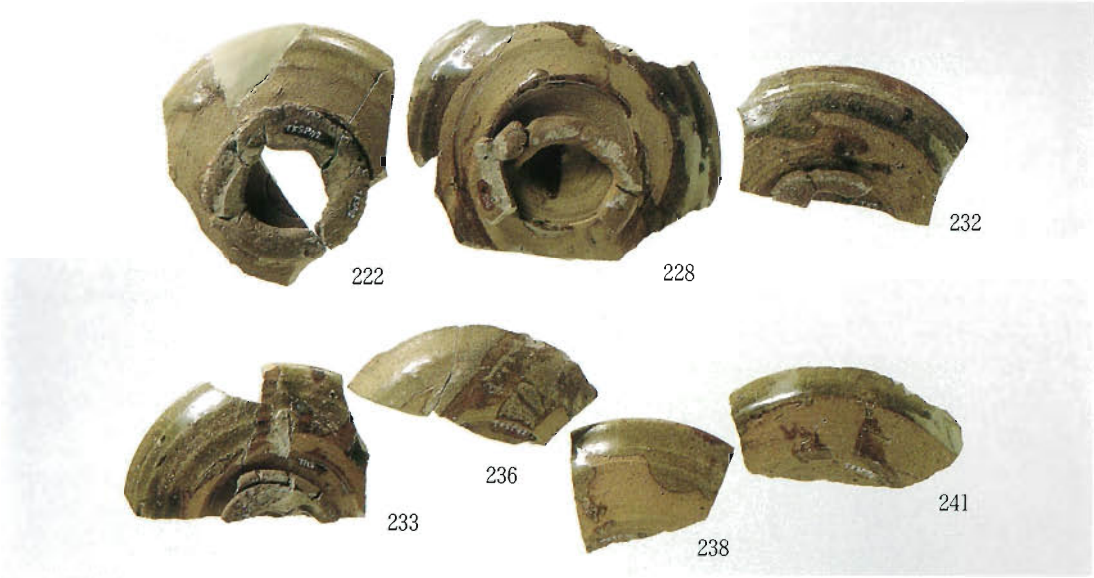
2　丸皿37（内面）

3　丸皿38（外面）

図版54

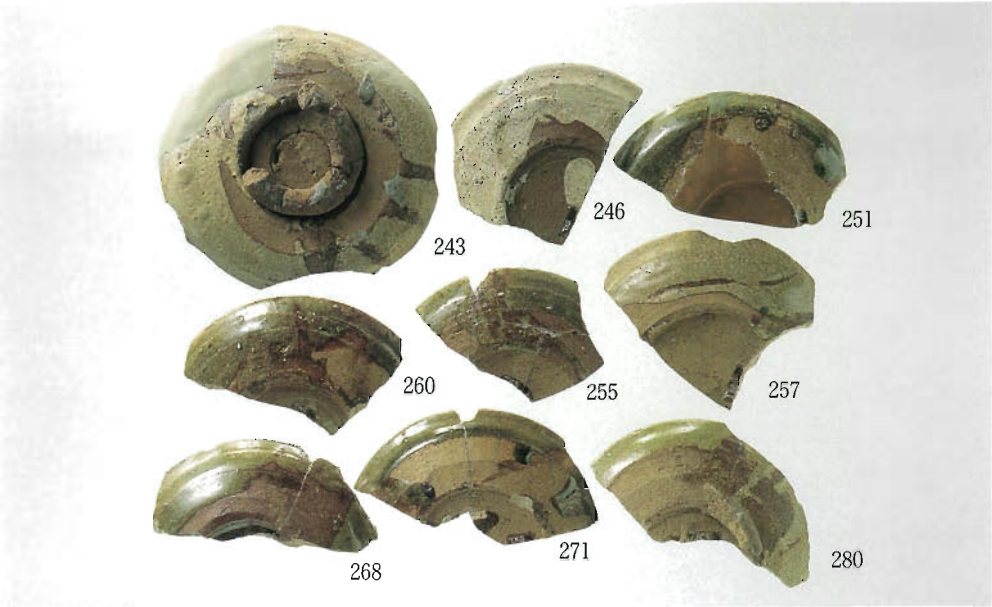


1　丸皿38（内面）



2　丸皿39（外面）

3　丸皿39（内面）



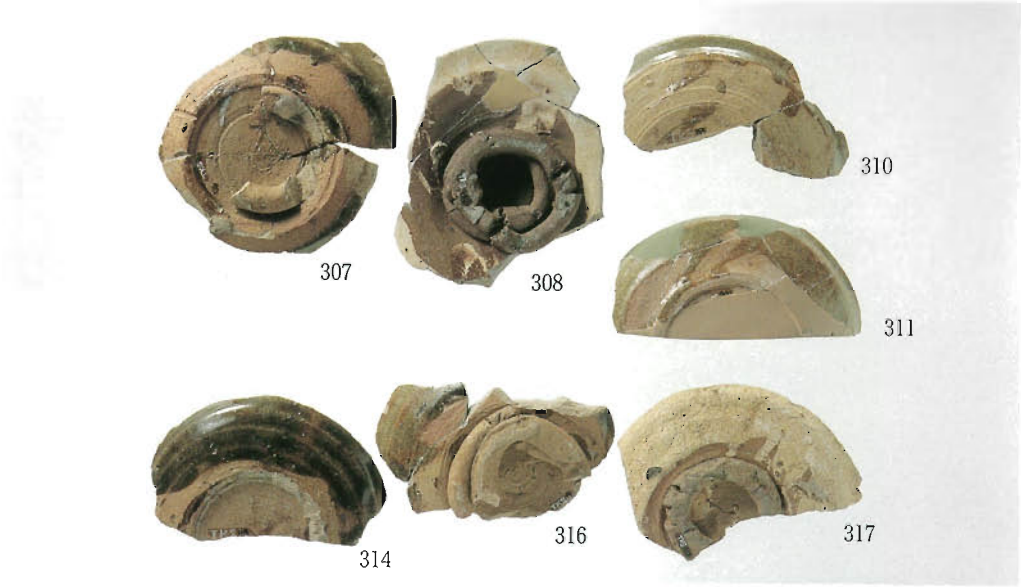
1　丸皿40（外面）

2　丸皿40（内面）

3　丸皿41（外面）

図版56

1　丸皿41（内面）



2　丸皿42（外面）

3　丸皿42（内面）

1　丸皿43（外面）

2　丸皿43（内面）

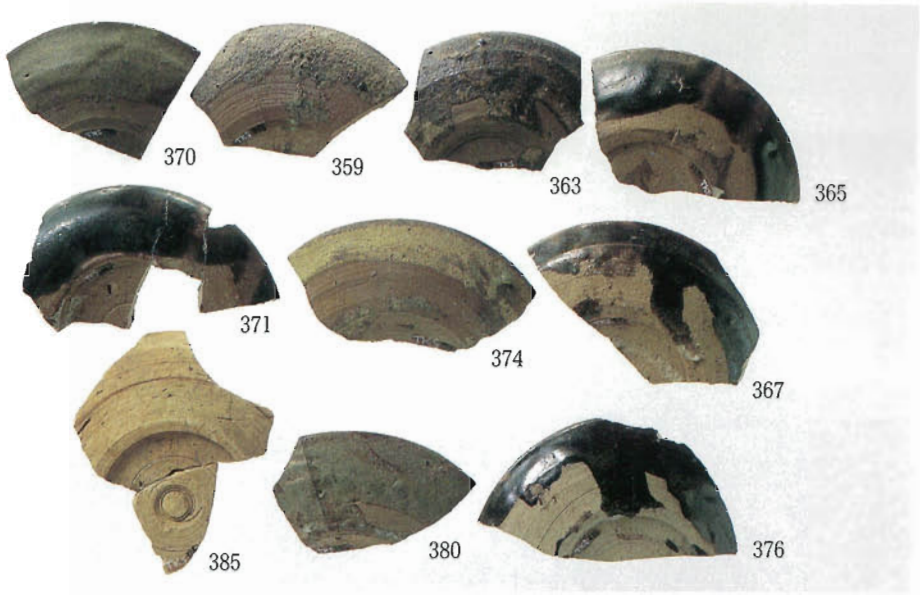
3　丸皿44（外面）

図版58

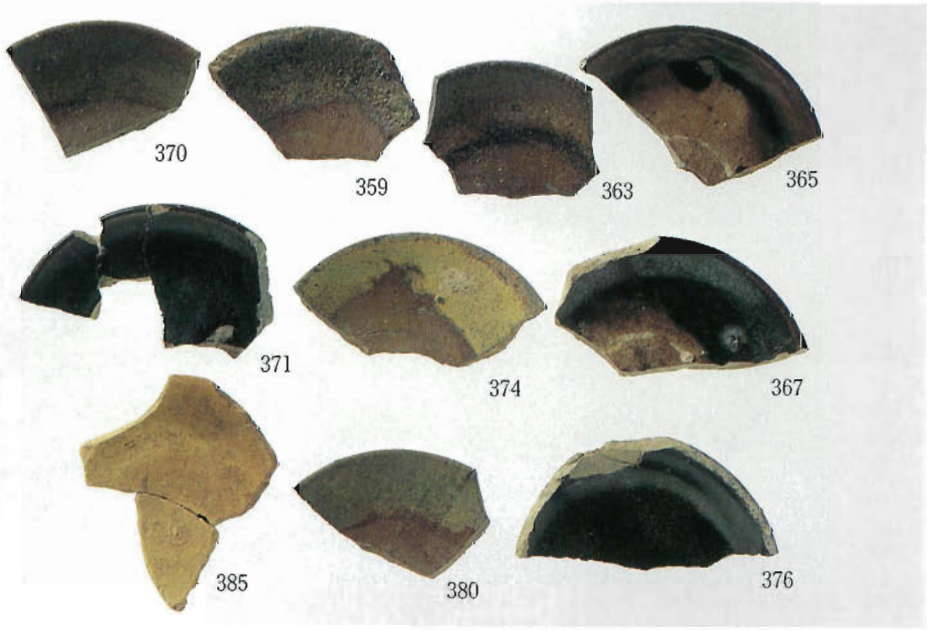
1　丸皿44（内面）

2　丸皿45（外面）

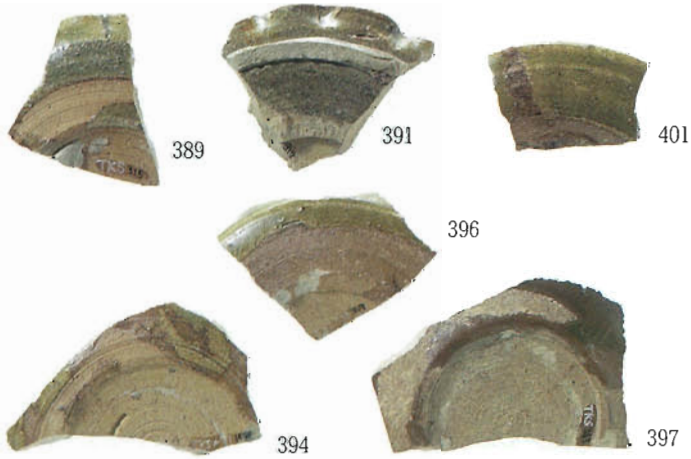
3　丸皿45（内面）



1　丸皿46（外面）



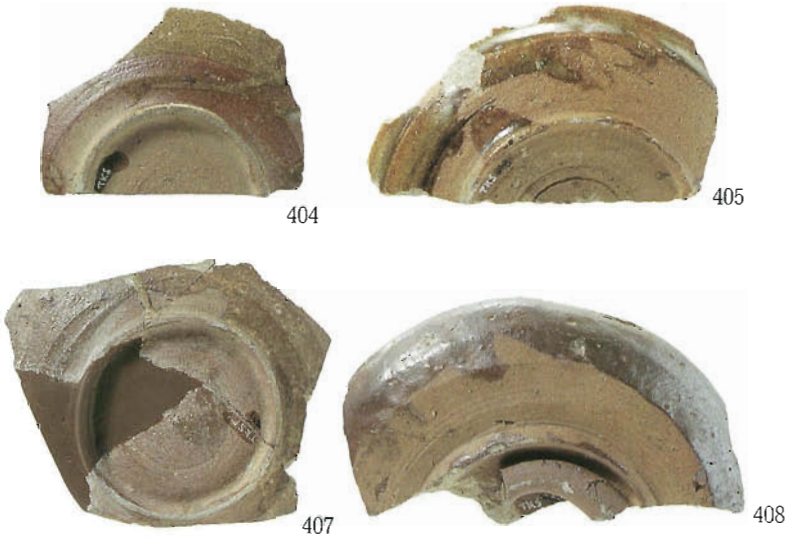
2　丸皿46（内面）



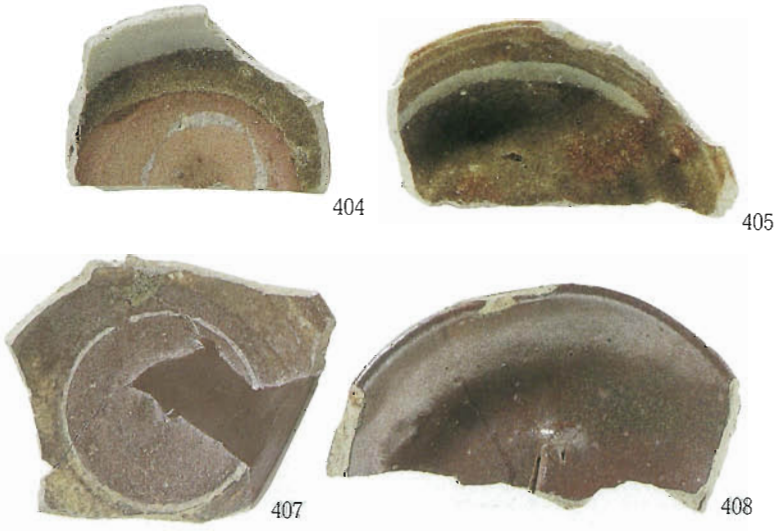
3　丸皿47　襞皿・ソギ皿・菊花文（外面）

図版60

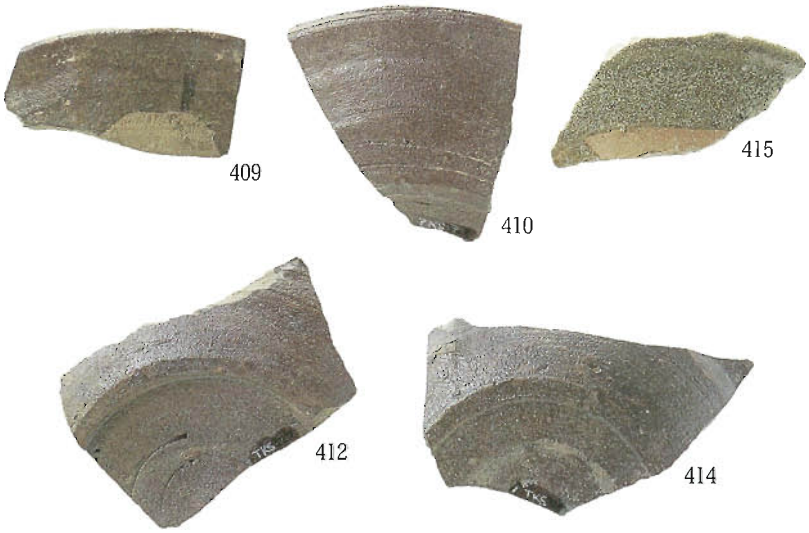
1　丸皿47　襞皿・ソギ皿・菊花文（内面）



2　丸皿48（外面）

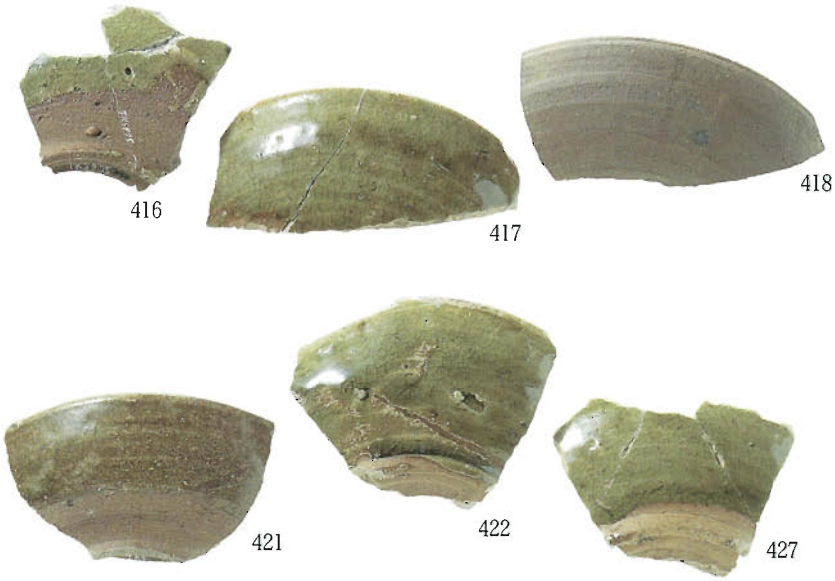


3　丸皿48（内面）



1　稜皿・稜花皿（外面）

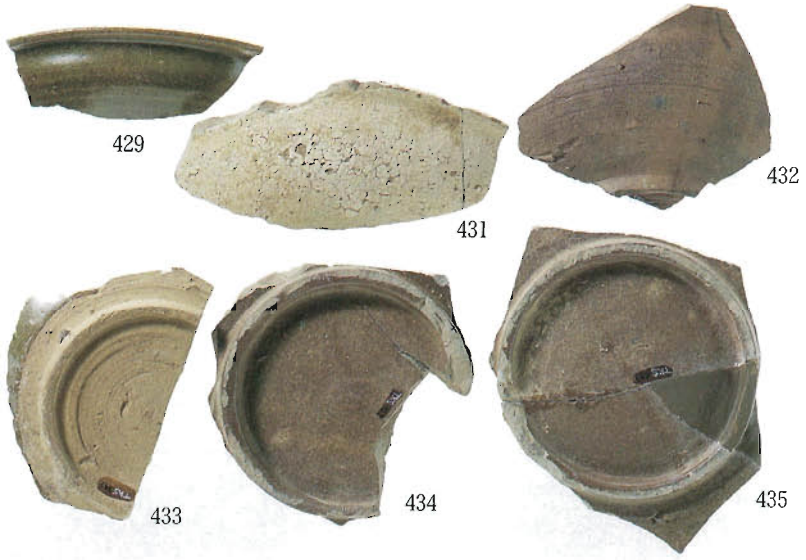
2　稜皿・稜花皿（内面）



3　中皿１（外面）

図版62

1　中皿１（内面）



2　中皿２（外面）

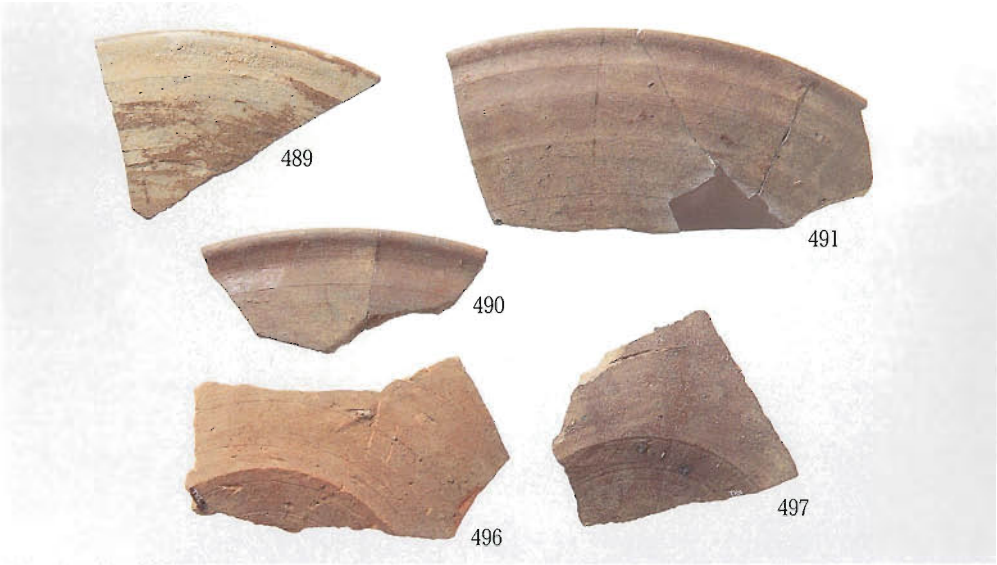
3　中皿２（内面）

1　中皿３　菊花紋（外面）

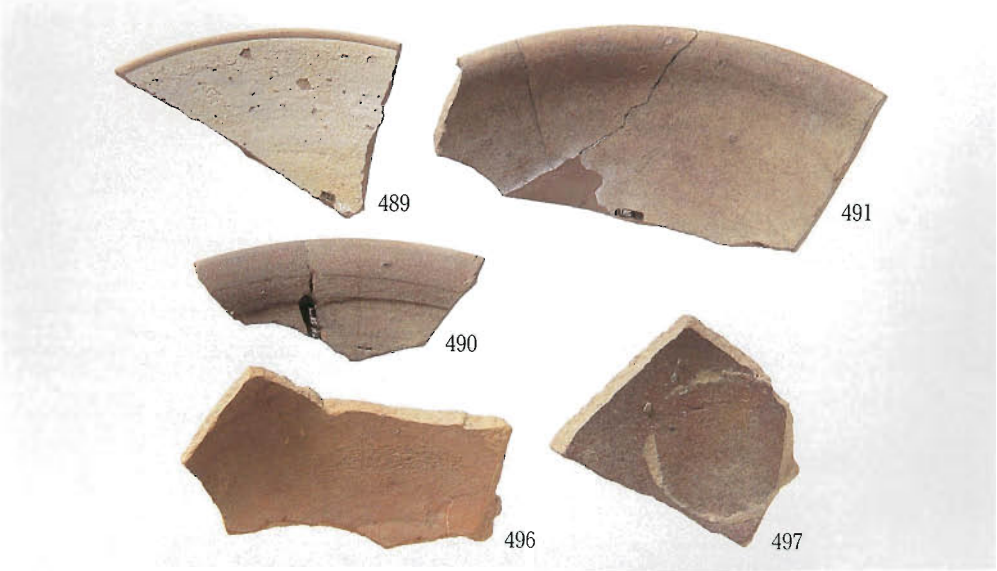
2　中皿３　菊花紋（内面）

3　大皿１（外面）

図版64

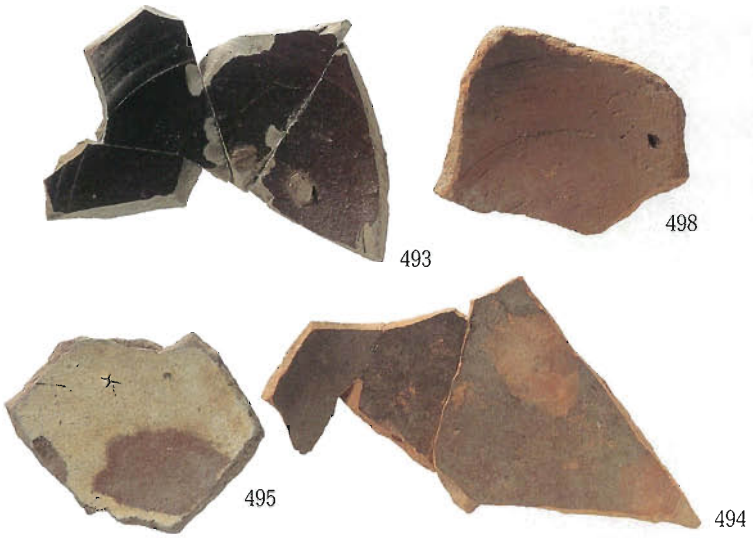


1　大皿２（外面）



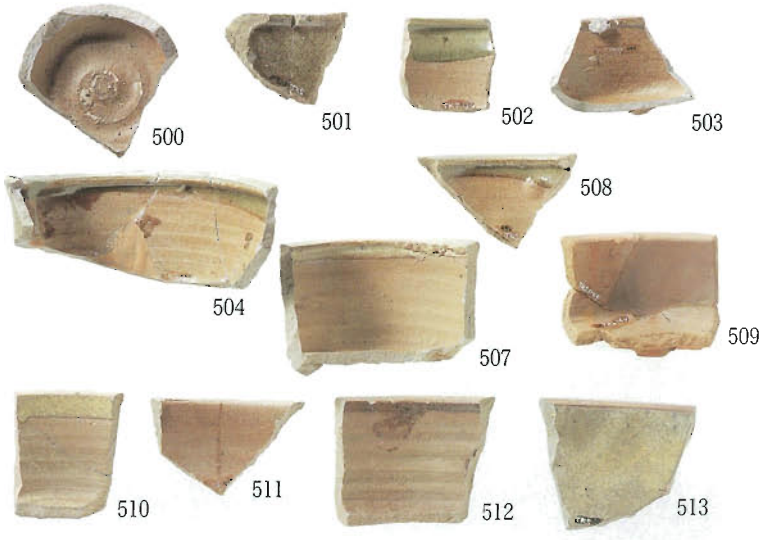
2　大皿２（内面）

3　大皿３（外面）



1　大皿３（内面）

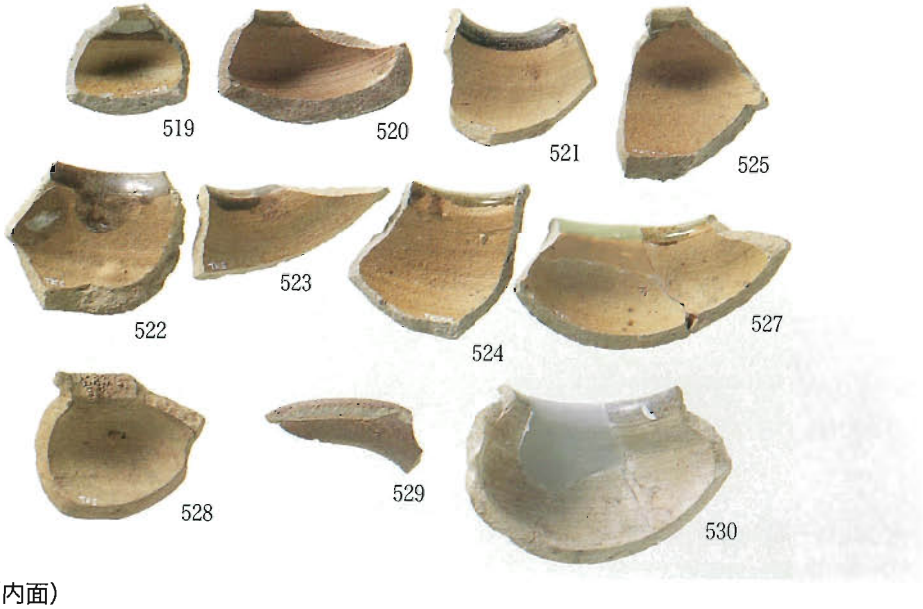
2　香炉（外面）



3　香炉（内面）

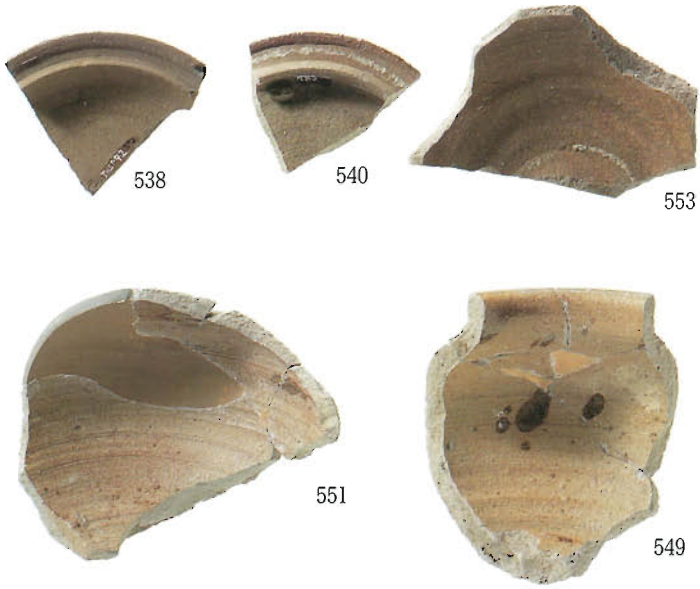
図版66

1　小壺（外面）



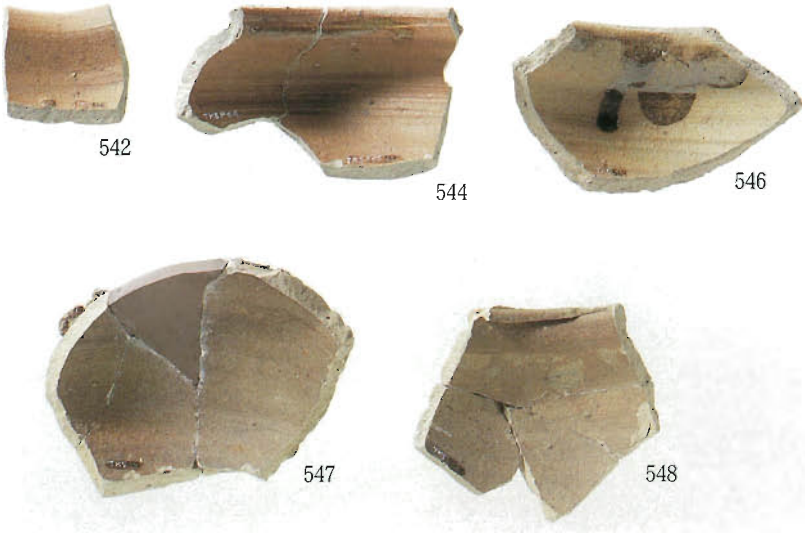
2　小壺（内面）

3　蓋・短頸壺１（外面）



1　蓋・短頸壺１（内面）

2　短頸壺２（外面）



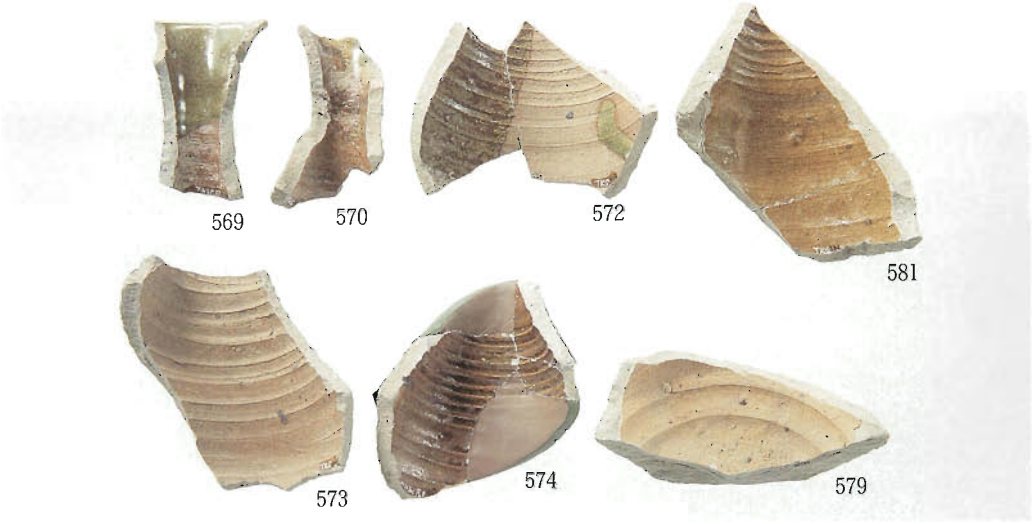
3　短頸壺２（内面）

図版68

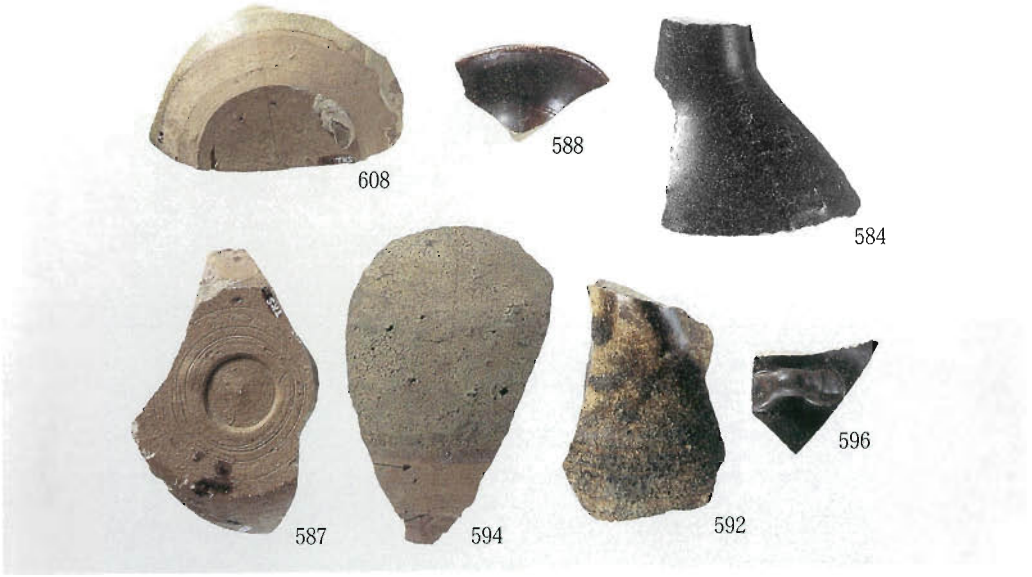
1　水滴・耳付水注（外面）

2　水滴・耳付水注（内面）

3　徳利１（外面）



1　徳利１（内面）

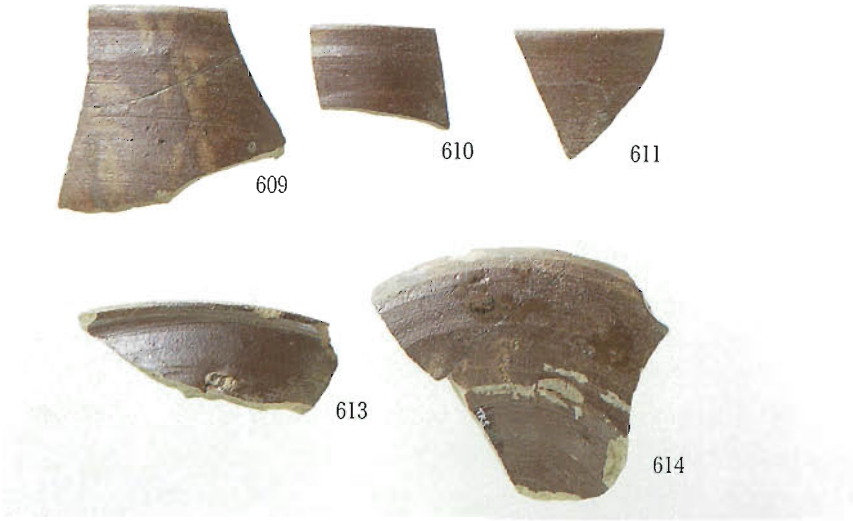


2　徳利２（外面）

3　徳利２（内面）

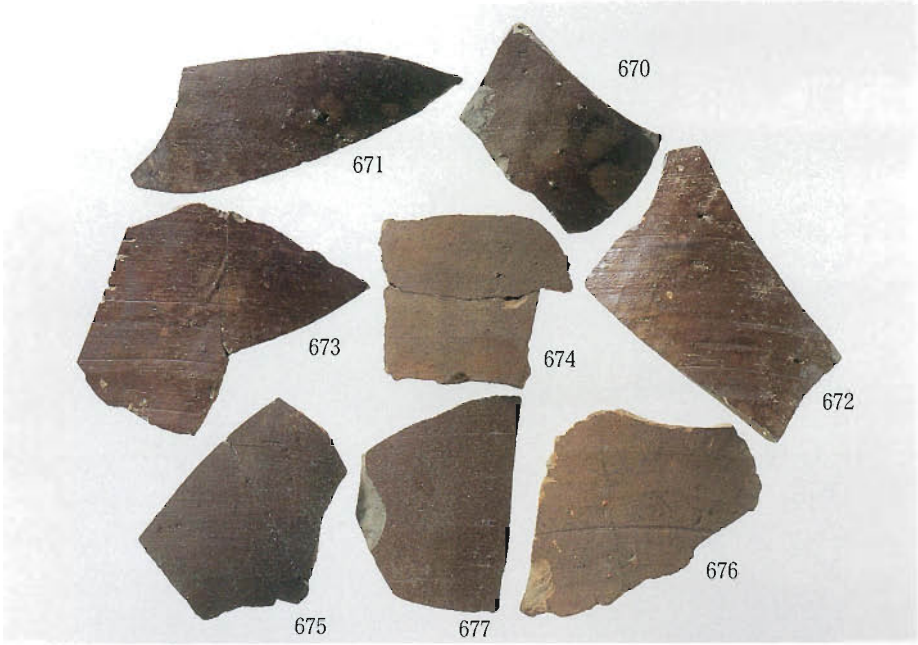
図版70

1　徳利３（外面）

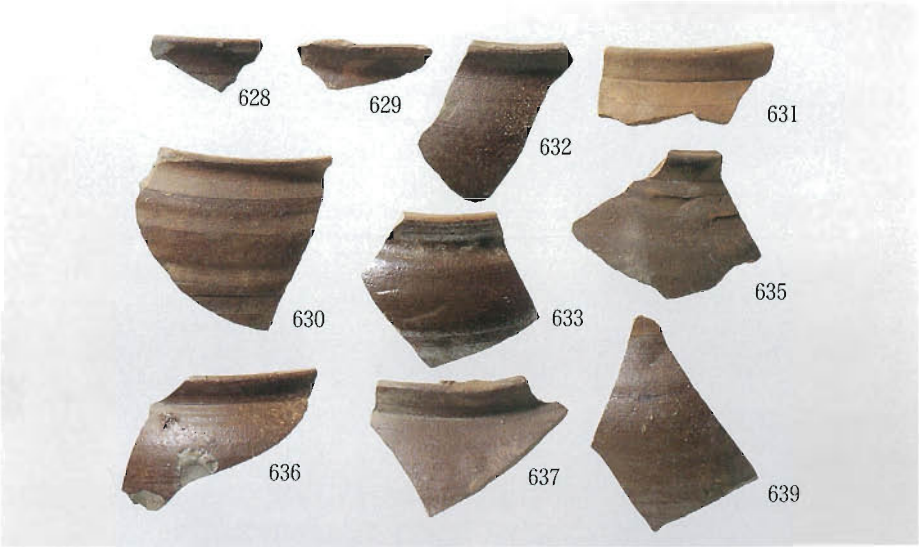


2　片口・鉢（外面）

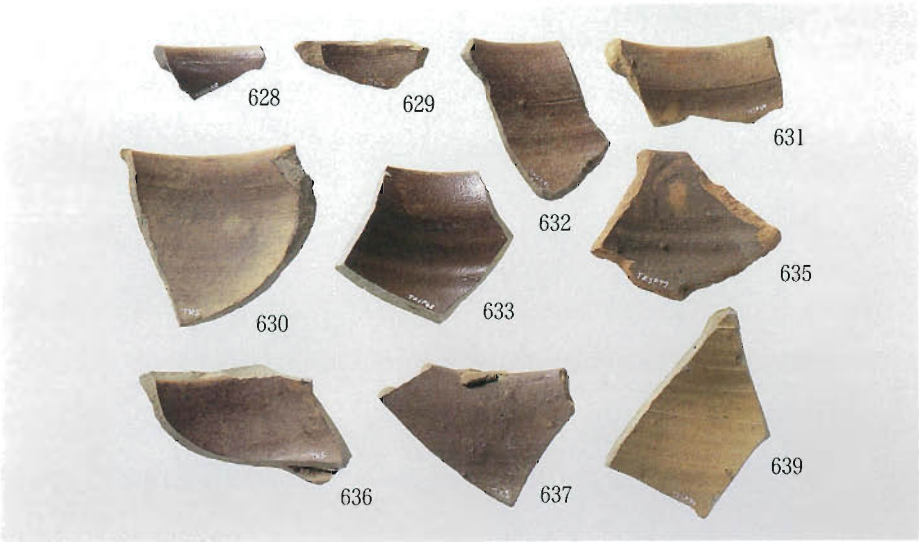
3　広口壺１（内面）



1　甕１（外面）



2　広口壺２（外面）



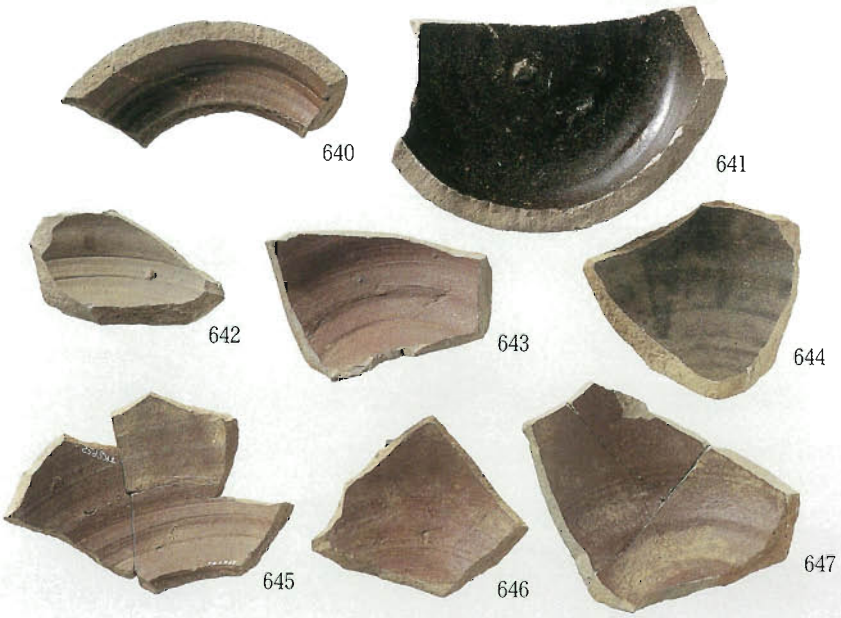
3　広口壺２（内面）

図版72

638

1　広口壺３（外面）

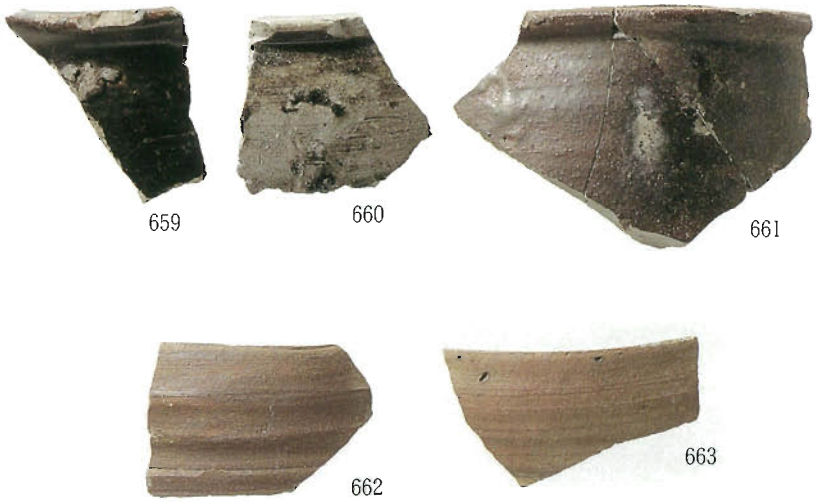
2　広口壺４（外面）



3　広口壺４（内面）

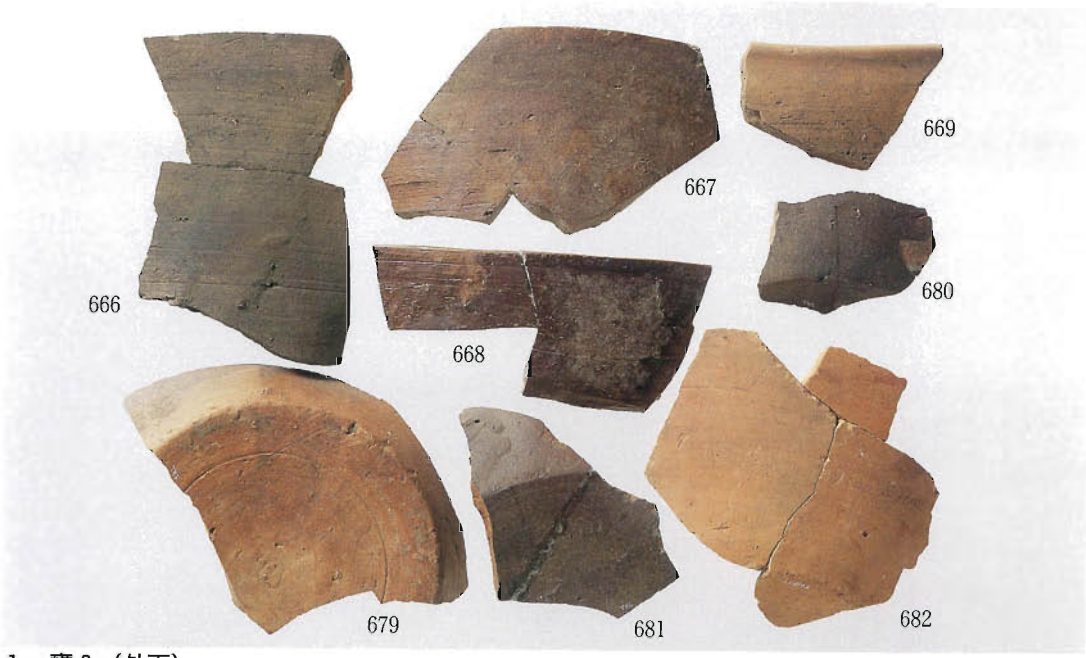
1　広口壺５（外面）

2　広口壺６・風炉（外面）



3　建水・水指（外面）

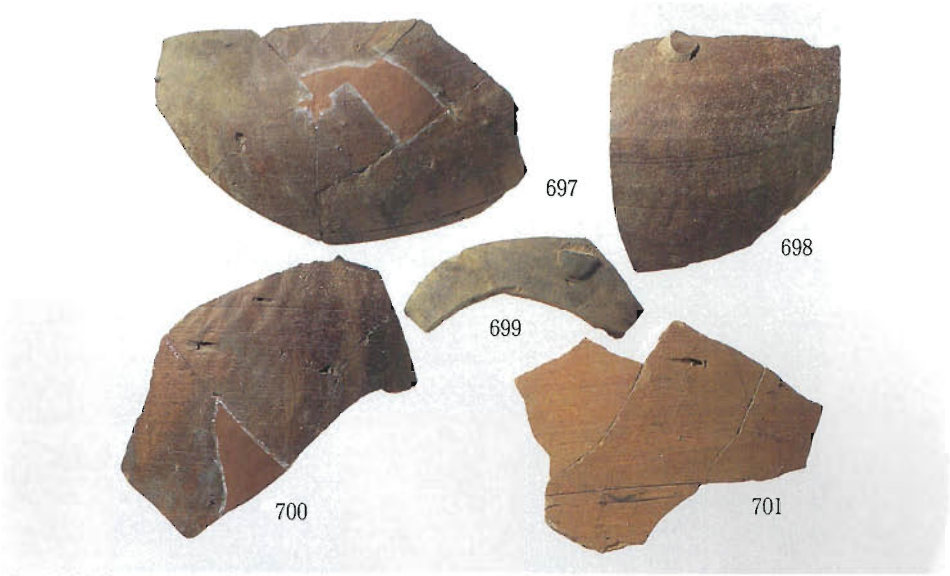
図版74



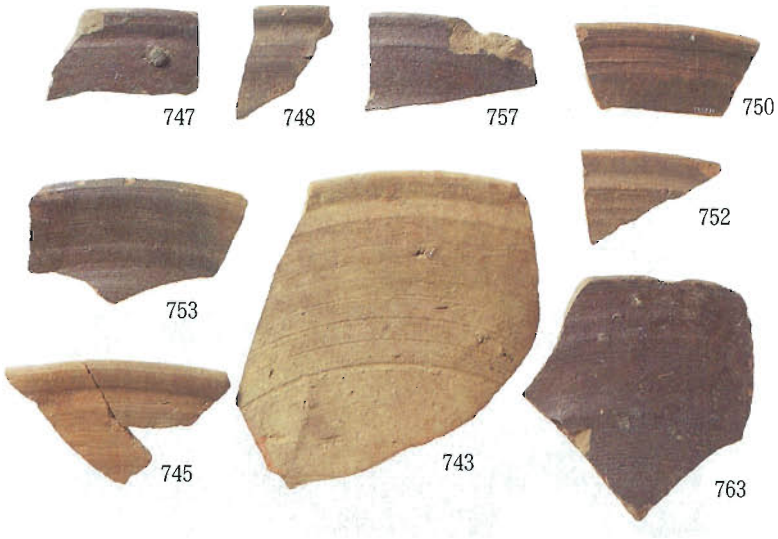
1　甕２（外面）

2　桶（外面）

3　甕３・茶壺１（外面）



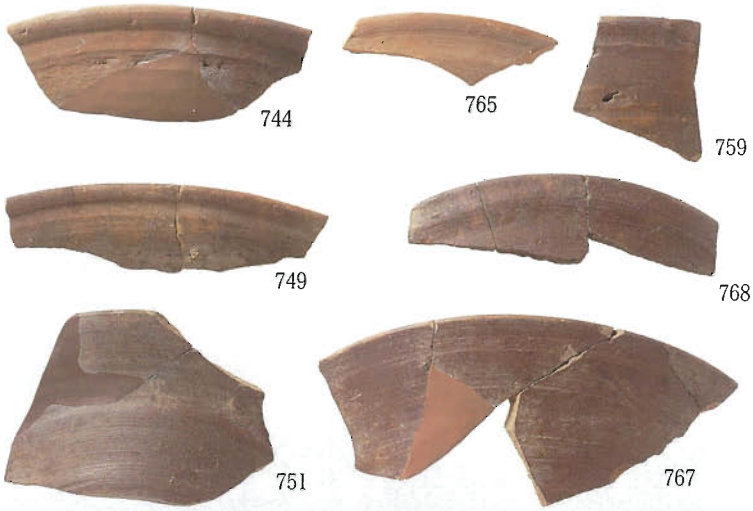
1　茶壺２（外面）



2　擂鉢Ⅱ類１（外面）

3　擂鉢Ⅱ類１（内面）

図版76



1　擂鉢Ⅱ類２（外面）

2　擂鉢Ⅱ類２（内面）

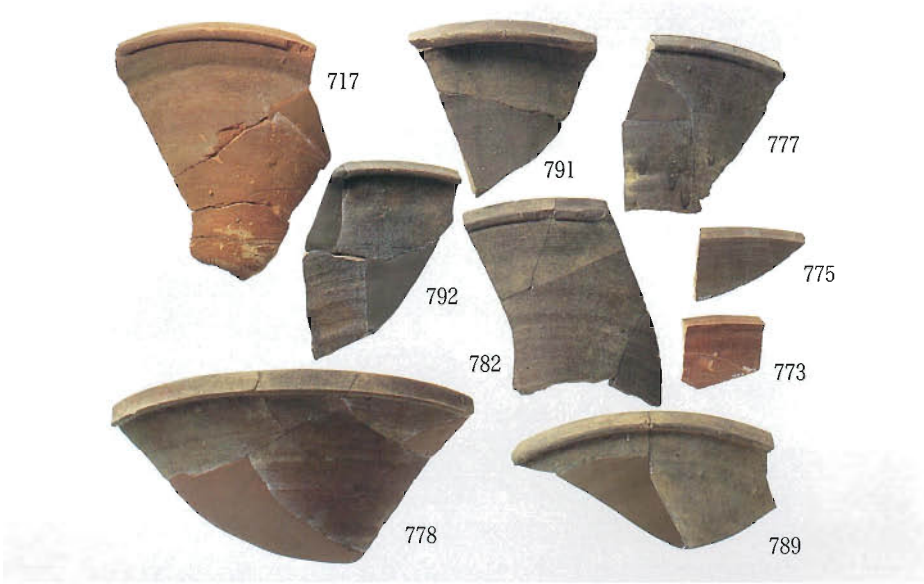
3　擂鉢Ⅱ類３（外面）

1　擂鉢Ⅱ類３（内面）

2　擂鉢Ⅱ類４（外面）

3　擂鉢Ⅱ類４（内面）

図版78

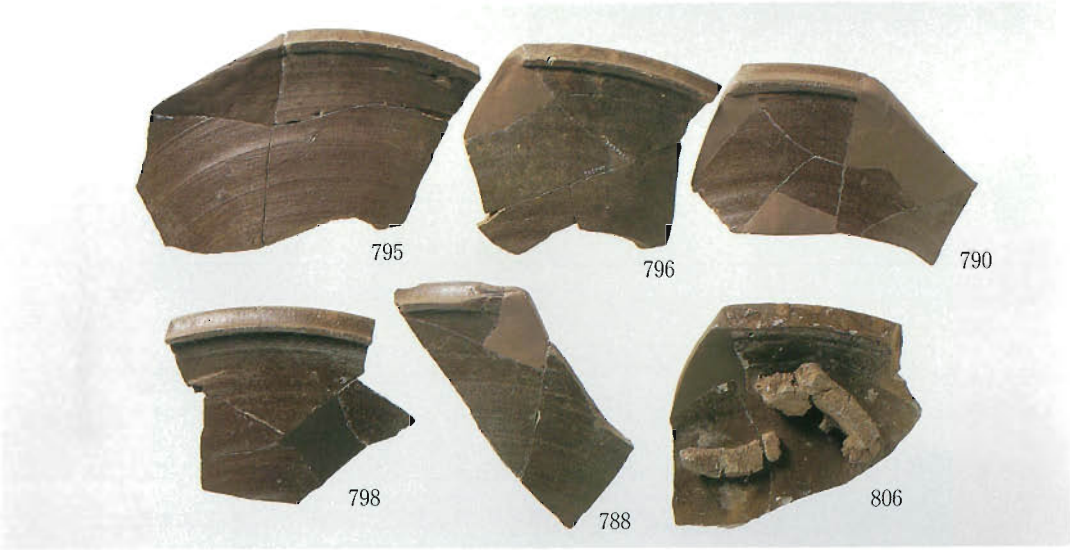


1　擂鉢Ⅰ類1（外面）

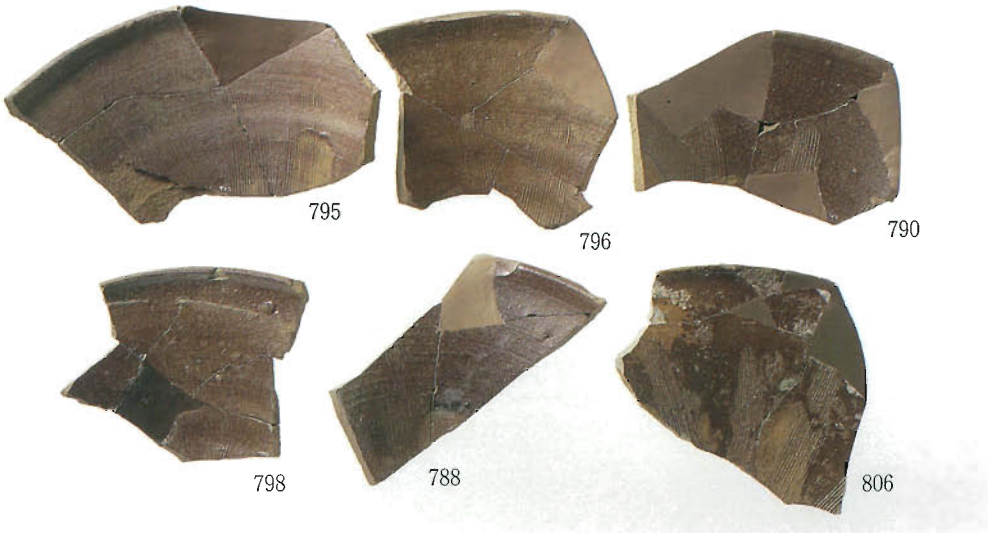
2　擂鉢Ⅰ類1（内面）

3　擂鉢Ⅰ類2（外面）

1　擂鉢Ⅰ類２（内面）



2　擂鉢Ⅰ類３（外面）



3　擂鉢Ⅰ類３（内面）

図版80

匣鉢（BⅡ、CⅡ～Ⅳ、DⅡ～Ⅳ）

845
846
855
848
850
854
861
851
847
849
852
862
860
856
853
858
857
859

匣鉢（A、B Ⅰ～Ⅳ、C Ⅰ～Ⅲ）

図版82

866

866

870

870

871

871

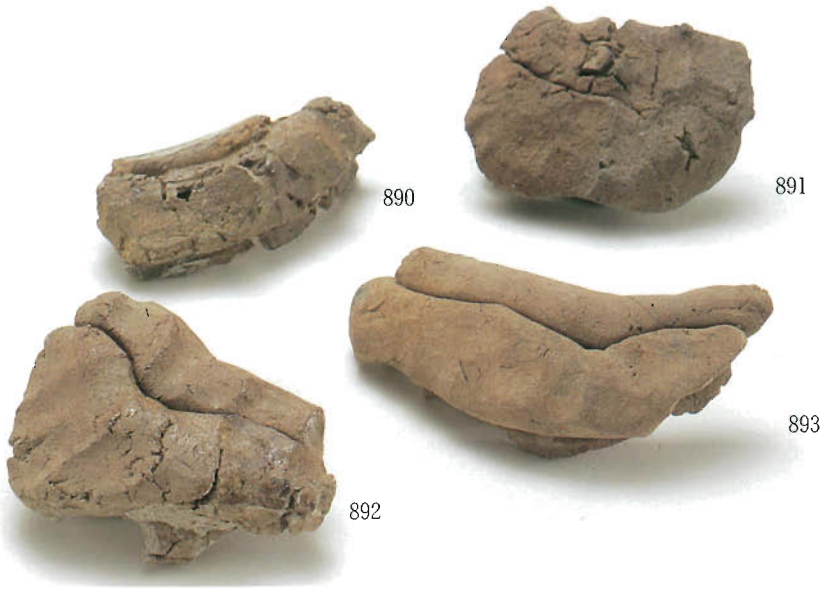
872

872

匣鉢蓋

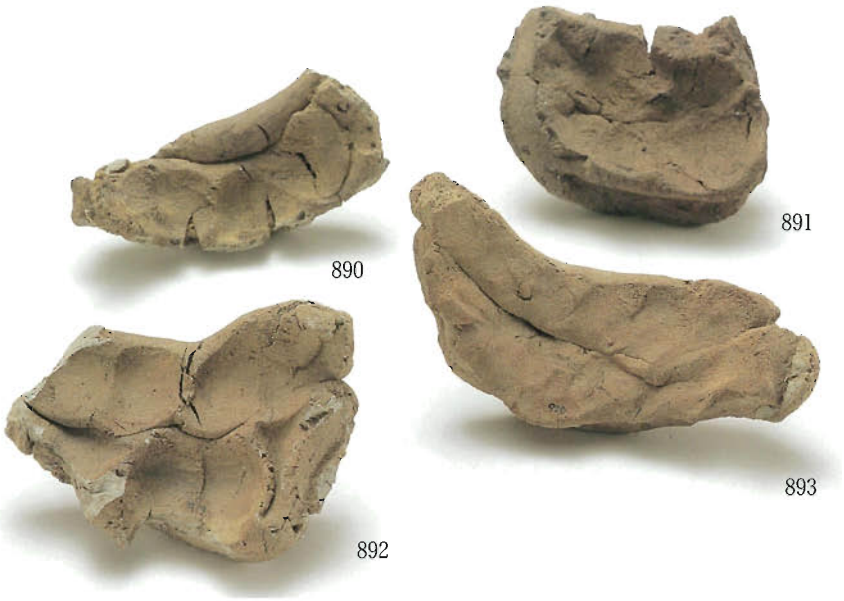
匣鉢蓋（表）

匣鉢蓋（裏）



粘土紐（表）

図版84



粘土紐（裏）

支柱・粘土詰め匣鉢

輪ドチ・転用匣鉢蓋

863

873

874

863

873

874

895

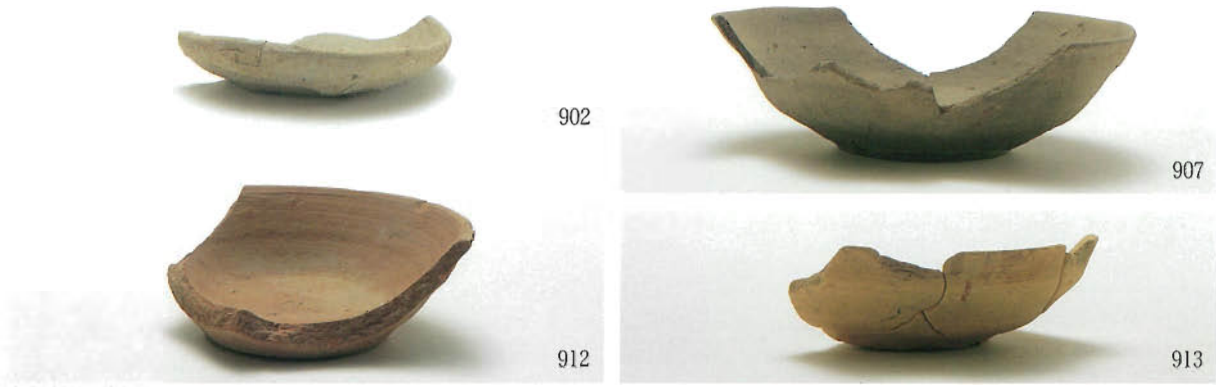
895

897

897

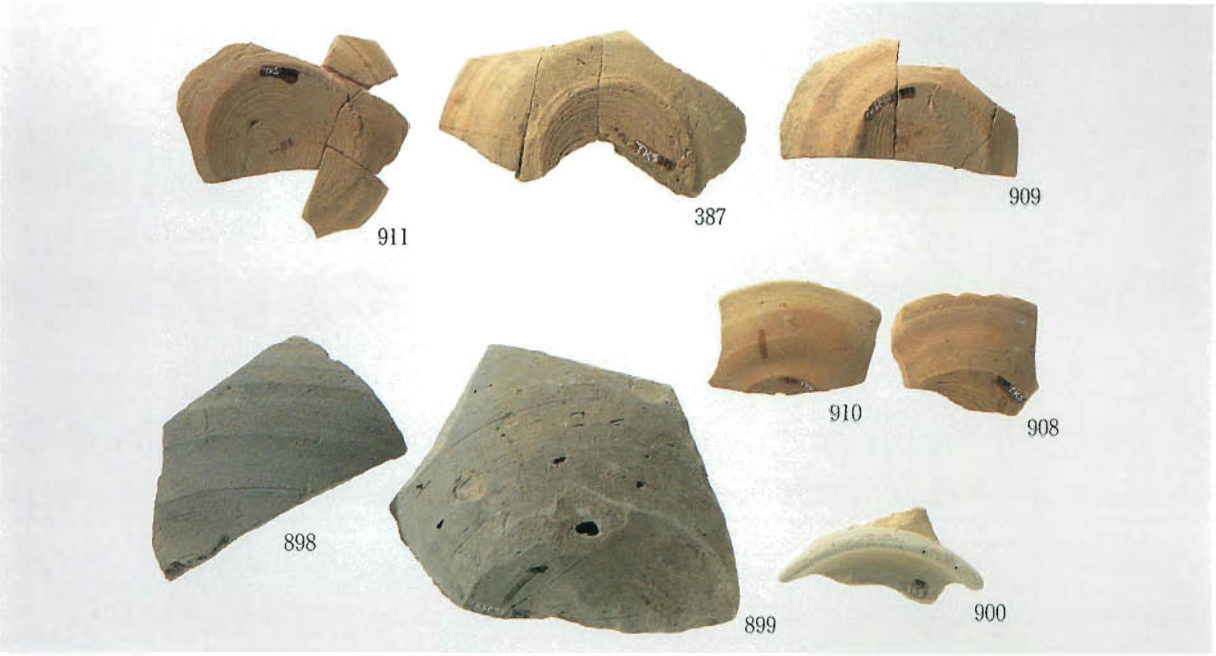
匣鉢蓋・焼台・小分炎柱

図版86



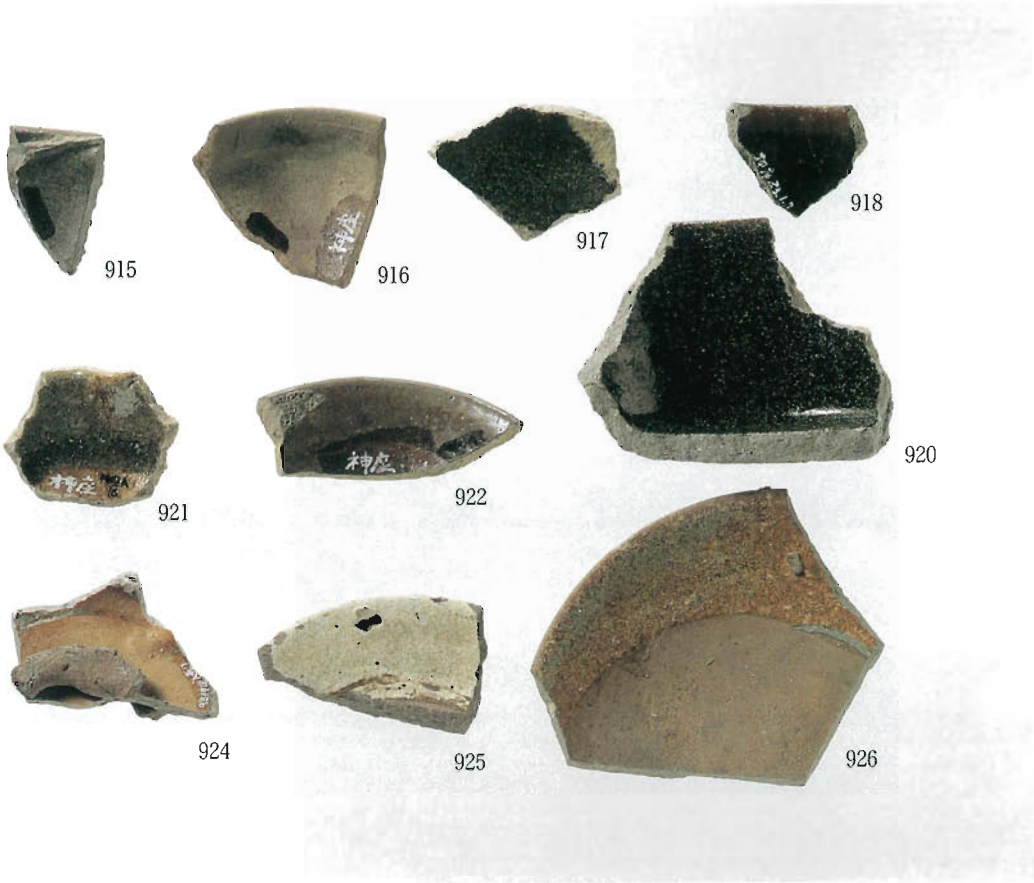
山茶椀・小皿・かわらけ

小椀・山茶椀（外面）



灯明皿・かわらけ・須恵器・灰釉陶器（外面）

1　神座A古窯出土遺物１（外面）



2　神座A古窯出土遺物１（内面）

図版88

1　神座A古窯出土遺物２（外面）

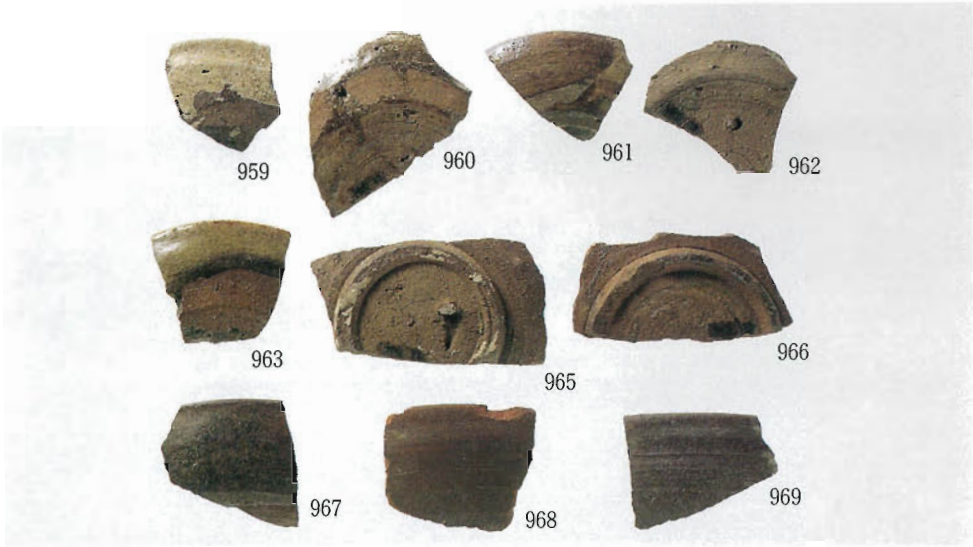
2　神座A古窯出土遺物２（内面）

1　神座A古窯出土遺物３

2　神座A古窯出土遺物４　擂鉢（外面）

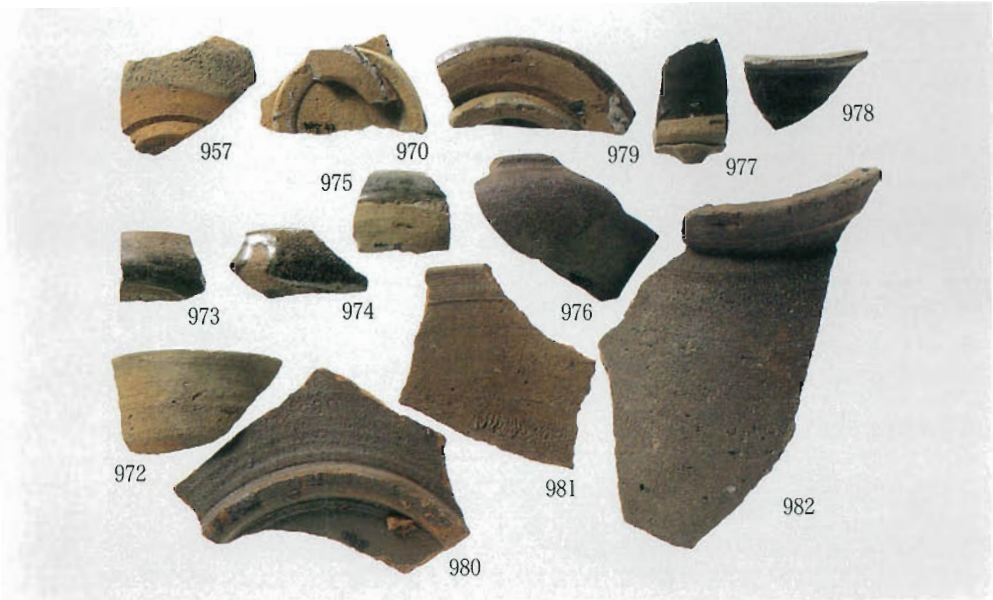
3　神座A古窯出土遺物４　擂鉢（内面）

図版90



1　神座古窯表採遺物１（外面）

2　神座古窯表採遺物１（内面）



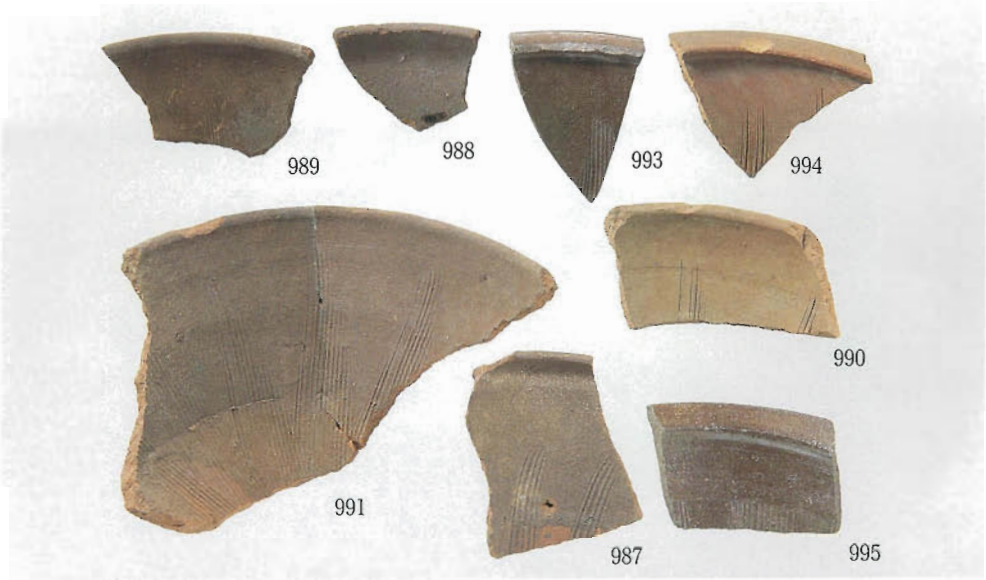
3　神座古窯表採遺物２（外面）

1　神座古窯表採遺物 2（内面）

2　神座古窯表採遺物 3

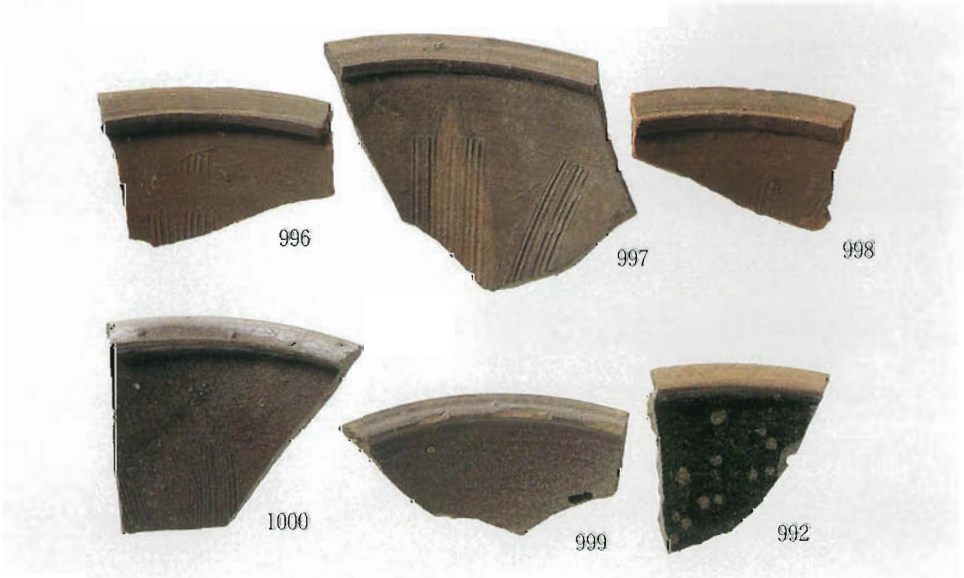
3　神座古窯表採遺物 4　擂鉢（外面）

図版92



1　神座古窯表採遺物４　擂鉢（内面）

2　神座古窯表採遺物５　擂鉢・鉢（外面）



3　神座古窯表採遺物５　擂鉢・鉢（内面）

報告書抄録

ふ り が な	かみしとろこよう
書　　名	上志戸呂古窯（第二東名№92地点）
副 書 名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	島田市－３
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第197集
編 著 者 名	河合修/松川淑子
編 集 機 関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　在　地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20 ＴＥＬ054-262-4261(代表)　ＦＡＸ054-262-4266
発行年月日	2009年３月27日

ふりがな 所収遺跡名		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみしとろこよう 上志戸呂古窯	静岡県 島田市 志戸呂	22209	24	世界測地系 34° 50′ 43″ 日本測地系 34° 50′ 31″	世界測地系 138° 6′ 40″ 日本測地系 138° 6′ 51″	20000111 ～ 20000325 20000724 ～ 20000825	206	開発等の事業に伴うもの (道路)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上志戸呂古窯	窯跡	安土桃山時代	大窯２基	陶器・窯道具	平成18年に静岡県指定史跡となり、現地に保存

要　　約	上志戸呂古窯は安土桃山時代の大窯であり、２基が検出された。生産された陶器は瀬戸・美濃大窯第４段階に並行するものが主体で、丸皿・擂鉢などの生活雑器を中心に、天目茶碗・筒形碗・向付などの茶陶を焼成する。この窯は近世志戸呂焼につながる草創期の窯に位置付けられ、天正16年に徳川家康が朱印状を発給していることも注目される。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第197集

上 志 戸 呂 古 窯

第二東名№92地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
島田市－３

平成21年３月27日発行

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL　054-262-4261(代)
FAX　054-262-4266

印　刷　所　松本印刷株式会社
〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
TEL　0548-32-0851(代)